

福島県の中世城館跡

1988年3月

福島県教育委員会

福島県の中世城館跡

1988年3月

福島県教育委員会

はじめに

近年における国土開発のめざましい進展によって、わが国の地理的景観や歴史的風土は急激にかつ大きく変貌しつつあり、その保全策が強く要請されております。開発の波は平野部から丘陵地・山地へと押しよせ、その主たる立地を丘陵地においている中世の城館跡にまで及びはじめております。

幸い本県下の中世城館跡はまだ保存されてはおりますが、今後の開発によっては破壊されることも懸念され、そのうえ、原始・古代の遺跡と異なり、中世遺跡の研究はまだあまり進んでいないのが実状であります。

このような状況下にあって、これら城館跡の保存対策をはかり、またその研究を推進するためにも、県下に存在する城館跡の実態を把握し、さらに基本資料の作成を図ることを急務と考え、本県では、昭和60年度から3カ年をかけ、国の補助事業として中世城館等総合調査を実施いたしました。

その結果、從来文献上ではこれまでに知ることのできなかった城館跡を新たに発見するなど約2000カ所という多くの城館跡を確認することができ、このたび、調査結果をまとめ、その一部を報告書として刊行することにいたしました。

調査に際しましては、小林清治・安田初雄・大石直正・馬目順一の各専門調査委員及び調査員、編集委員の方々、並びに地元各市町村教育委員会の方々から多大の御指導と御協力を賜わりましたことに対し、ここに厚くお礼を申し上げます。

本報告書が、新しい県民文化を創造するうえで一つの拠りどころとなるとともに、文化財保護のためにも広く県民の方々に御活用いただければ幸いと存じます。

昭和63年3月

福島県教育委員会

教育長 佐藤昌志

凡　　例

1. 本調査報告書は福島県教育委員会が、昭和60年度から昭和62年度にかけて3か年間に実施した県内の中世城館跡等総合調査の結果をまとめたものである。
2. 当調査事業は福島県教育委員会が国庫補助を受けて実施したものである。
3. 調査は福島県教育委員会が主体となり委嘱した専門調査委員・調査員等のほか、各市町村教育委員会の協力を得て実施したものである。

専門調査委員

福島大学教授 小林清治 東北学院大学教授 大石直正
福島大学名誉教授 安田初雄 (財)いわき市教育文化事業団理事 馬目順一

4. 調査に際しては、文化庁文化財保護部記念物課服部英雄文化財調査官の指導をいただいた。
5. 調査対象の時代は中世、いわゆる鎌倉時代から安土・桃山時代を中心としたが、関連するものについては、古代末期や近世初期をも含めた。
6. 各城館等の名称は原則として文献などで多用されているものとしたが、地元一般呼称をも重視した。また新たに、その所在地が確認されたものについては、大字名、小字名等を用いた。なお、異称のある場合は、別に記した。
7. 各主要城館の解説文等は各地域担当の各調査員、編集委員及び協力員の執筆によるが、若干の補足等を編集委員及び事務局で行い、専門調査委員が校閲したものである。
8. 各城館等の略測図は調査員及び協力員の作成した原図を使用しているが、他に、県内市町村史あるいは調査報告書掲載図等も活用させていただいた。これについては図中及び巻末の参考文献の中に明記した。
9. 各城館跡分布図に使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図を7.5万分の1に縮小して使用した。なお、分布図内に城館のない地図は載せないこととした。
10. 城館跡分布図と一覧表の番号は対応している。
11. 分布図及び一覧表において、各市町村城館順序は、その位置が北から南へ、西から東の方向に順次連続して配列したが、追加分については一覧表においては各市町村城館の末尾に配したが、分布図においては先の配列通りにはなっていない。
12. 分布図に記入した城館等の位置は、その中に当該城館の一部が含まれているといった程度のもので、必ずしもその城館等の範囲をすべて示すものではない。
13. 中通り、会津、浜通り地区の地区割は編集側が任意に割り振ったものであって、特にその地区割りに根拠があるわけではない。また各市町村の順序についても同様である。
14. 本調査報告書の編集は専門調査委員の指導のもとに編集委員会及び福島県教育庁文化課で実施した。

例　　言

1. 県内の主要中世城館跡の解説は、各調査員・編集委員・協力者等が執筆し、その氏名を文末に記したが、担当調査員以外が執筆した文章は、その調査カード・原図等を参考とし、あるいは協力者の援助を受けており、各市町村担当調査員及び協力者等の共同作業の成果である。その具体的城館名については巻末の調査員及び協力者等の名簿に記載してある。

2. 城館跡の解説文中等の築城者(城主)、時期、城館の歴史等については、伝承による部分も多いことをあらかじめお断りしておく。

(1) 所在地については、その中心なる部分をとったために、必ずしも城館全域をカバーするものではない。

(2) 時期については、平安期(794～1185)、鎌倉期(1185～1333)、南北朝期(1333～1392)、室町期(1392～1467)、戦国期(1467～1590)、文禄・慶長期(1590～1603)、江戸期(1603～1867)、と大別し、暦年については、和年号を記しその後に()付で西暦を記した。

南北朝期にあっては、原則として北朝年号<南朝年号>(西暦)の順で記した。

(3) 用語の統一は可能な範囲で行ったが、強いて統一しない部分もある。

(4) 城館位置図は2.5万分の1地形図を使用したが、一部それを5万分の1に縮小し使用したものもある。

これについてはその旨を明示した。

(5) 写真は各専門委員及び調査員、協力員が作成したものを使用したが、一部には事務局で撮影したものもある。

(6) 発掘調査による発見遺構・出土遺物の実測図は、事務局で選択、掲載した。

(7) 城館略測図(実測図)のトレース・割付は、玉川一郎を中心として、臨時事務補助員が実施したが、高橋信一(財福島県文化センター遺跡調査課)の協力も得た。

(8) 略測図中の記号は以下の内容を示す。

 斜面(主に切落しによる)

 空堀、堀切、豊堀等

 土塁

● 水ノ手

 水堀

3. 付章の城館地名表は、市町村毎(コード番号順)に作成した。

(1) 城館地名表は、各地区担当調査員作成のものを掲載したが、一部字句の統一等を行った部分もある。

(2) 番号の末尾が000のものは、文献等には記されているが、所在地不明の城館である。よって分布図にも表記していない。

(3) 城館の末尾に*印が付いているものは、城館解説文が収録されているものである。

(4) ()を付した城館は、調査員が便宜上命名したものである。

4. 城館分布図の城館番号は地名表と同様に、市町村番号一城館番号の順で記してある。

5. 本冊子の編集に当たっては、日下部善己調査員の協力を得た。

目 次

はじめに

凡例

例言

第1章 福島県中世城館跡調査の経過.....	1				
第1節 調査に至る経緯.....	1				
第2節 調査の経緯.....	2				
第3節 調査の方法.....	3				
1. 調査の目的及び対象.....	3				
2. 調査の内容.....	6				
3. 調査員の構成.....	12				
第2章 福島県の中世城館概観.....	13				
はじめに.....	13				
第1節 城館の築営と変遷.....	13				
1. 平安期(9~12世紀).....	13				
2. 鎌倉期(12末~14世紀初).....	13				
3. 南北朝期(14世紀).....	14				
4. 室町期(15~16世紀).....	14				
5. 戦国期(16世紀).....	15				
第2節 城館とその環境.....	15				
1. 平城の諸相.....	15				
2. 山城のすがた一居館と詰城.....	16				
3. 城館と村落および宿町.....	16				
おわりに.....	17				
第3章 福島県の主要中世城館跡.....	19				
第1節 中通り地区の中世城館跡.....	19				
1. 八日木城(19)	2.	杉目城(21)	3. 大森城(22)	4. 大鳥城(23)	5. 岡本館(24)
6. 本内館(25)	7.	土合館(26)	8. 棚館(27)	9. 朝日館(28)	10. 鷺田館(29)
11. 愛宕館(30)	12.	河松田城(31)	13. 川俣城(32)	14. 城ノ倉城(33)	15. 桑折西山城(34)
16. 伊達崎城(37)	17.	権磨館(38)	18. 長倉館(39)	19. 石母田城(40)	20. 藤田城(42)
21. 阿津賀志山防壘(43)	22.	梁川城(46)	23. 大枝城(50)	24. 根子屋館(51)	25. 霊山城(52)
26. 懸田城(54)	27.	大館(56)	28. 小国城(57)	29. 月見館(58)	30. 二本松城(59)
31. 田地ヶ両館(61)	32.	高田館(62)	33. 田子屋館(63)	34. 三鳥館(64)	35. 玉井城(65)
36. 本宮城(66)	37.	小屋館(67)	38. 滑津館・高野館(68)	39. 若角城(69)	40. 小浜城(70)
41. 百目木城(72)	42.	四本松城(73)	43. 小手森城(75)	44. 住吉山城(76)	45. 篠川城(77)
46. 守山城(78)	47.	高倉城(80)	48. 高玉城(81)	49. 成山城(82)	50. 片平城(83)
51. 黒鹿毛城(84)	52.	穴沢館(85)	53. 横村城(86)	54. 横村御所(88)	55. 宇津峰城(90)
56. 岩瀬山城(92)	57.	八幡崎城(93)	58. 御所宮館(94)	59. 要塞館(95)	60. 和田城(96)
61. 長沼城(97)	62.	松山城(98)	63. 江泉館(99)	64. 松木館(100)	65. 津室館(101)
66. 三蘆城(102)	67.	藤田城(104)	68. 大寺城(105)	69. 霧露城(106)	70. 蓮田館(107)
71. 小平館(108)	72.	浅川城(109)	73. 竹貫城(110)	74. 三春城(111)	75. 熊耳館(113)
76. 沼沢館(114)	77.	七草木館(115)	78. 小野城(116)	79. 大越城(117)	80. 常磐城(118)
81. 船引城(119)	82.	猪目城(120)	83. 小峰城(122)	84. 新地山館(124)	85. 小屋山館(125)

86. 小館山館(126)	87. 滋津館(127)	88. 袖ヶ城(128)	89. 龍音山館(129)	90. タカナシ館(130)
91. 天王館(131)	92. 高野館(132)	93. 東堂山館(133)	94. 新城館(134)	95. 伊賀館(135)
96. 赤館(136)	97. 中丸館(138)	98. 寺山館(139)	99. 羽黒館(140)	100. 狐屋館(142)
101. 東館(143)	102. 赤坂館(144)			

第2節 会津地区の中世城館跡

1. 小高木館(145)	2. 小田山城(147)	3. 神指城(149)	4. ①御山館②三峯城(150)	5. ①祇寺館②幕ノ内館(151)
6. ①光嚴館②対馬館(152)	7. 莺浦館(153)	8. 下荒居城(154)	9. 藤倉館(155)	10. 島村館(156)
11. 猪苗代城(157)	12. 八手山城(158)	13. 町堤崎館(159)	14. 新宮城(160)	15. 康徳城(163)
16. 青山城(165)	17. 高館城(167)	18. 駿河館(168)	19. 岩尾館(169)	20. 柏木城(170)
21. 榆原城(171)	22. 網取城(172)	23. 戸山城(173)	24. 小布施城(174)	25. 常世館(176)
26. 下連田館(177)	27. 鹿ヶ城(178)	28. 新井田館(179)	29. 丸山館(高郷村)(180)	30. 宇多川館(181)
31. 反田山館(182)	32. 陣ヶ峰城(183)	33. 雪雀城(184)	34. 金上館(185)	35. 笠川館(186)
36. 浜崎城(187)	37. 北田城(188)	38. 吉館(189)	39. 船岡館(190)	40. 向羽黒山城(191)
41. 岩谷城(193)	42. 丸山城(三島町)(195)	43. 鳥海館(196)	44. 中丸城(197)	45. 玉籠城(198)
46. 中山城(199)	47. 丸山城(金山町)(200)	48. 宮崎館(201)	49. 鳴山城(202)	50. 田部原館(205)
51. 中妻館(206)	52. 九ヶ布城(207)	53. 塙生館(208)	54. 久川城(209)	55. 駒寄城(211)
56. 西館(212)	57. 河原崎城(213)	58. 梁取城(214)	59. 布沢城(215)	60. 永久保城(216)

第3節 浜通り地区の中世城館跡

1. 黒木城(217)	2. 熊野守城(219)	3. 鬼越館(220)	4. 王館(221)	5. 中村城(222)
6. 鰐脛館(223)	7. 駒ヶ嶺城(224)	8. 裏城(225)	9. 谷地小屋城(226)	10. 中館(227)
11. 田中城(228)	12. 新城館(229)	13. 牛越城(230)	14. 明神館(231)	15. 小高城(232)
16. 畠田館(234)	17. 草野館(235)	18. 樹現堂城(236)	19. 大平山城(237)	20. 泉田古館(238)
21. 新山城(239)	22. 滝草館(240)	23. 佐山館(241)	24. 日向館(242)	25. 高津戸館(243)
26. 真壁城(244)	27. 椿葉城(247)	28. 天神山館(248)	29. 井出城(249)	30. 三倉城(250)
31. 中柴外城(251)	32. 神明館(252)	33. 比丘尼館(253)	34. 良友館(254)	35. 大森館(255)
36. 愛谷館(256)	37. 神谷館(257)	38. 鶴野平城(258)	39. 白土城(261)	40. 久世原館(263)
41. 砂屋戸荒川館(265)	42. 高久の古館(267)	43. 小泉館(268)	44. 上遠野城(269)	45. 沢之内館(271)
46. 水野谷館(272)	47. 三沢館(273)	48. 上船尾館(275)	49. 下船尾館(276)	50. 住吉館(277)
51. 島倉館(278)	52. 遠尻城(279)	53. 八幡台遺跡(280)	54. 鮫跡遺跡(281)	55. 西小川館(282)

参考文献	283
付 章 福島県中世城館跡分布図及び地名表	287
福島県中世城館跡総合調査専門調査員・地区調査員一覧	450
福島県中世城館跡総合調査報告書編集委員一覧	452
福島県中世城館跡総合調査・協力者一覧	452

挿図・写真目次

[挿 図]	
第1図 八丁目城位置図	20
第2図 八丁目城略測図	20
第3図 杉目城位置図	21
第4図 杉目城略測図(安田初雄作成図)	21
第5図 大森城位置図	22
第6図 大森城略測図	22
第7図 大鳥城位置図	23
第8図 大鳥城略測図	23
第9図 岡本館位置図	24
第10図 岡本館略測図	24
第11図 本内館位置図	25
第12図 本内館略測図	25
第13図 土合館位置図	26
第14図 土合館略測図	26
第15図 椿館位置図	27
第16図 椿館略測図	27
第17図 朝日館位置図	28
第18図 朝日館略測図	28
第19図 錬田館位置図	29
第20図 錬田館略測図	29
第21図 愛宕館位置図	30
第22図 愛宕館略測図	30
第23図 芦松田城位置図	31
第24図 芦松田城略測図	31
第25図 川俣城位置図	32
第26図 川俣城略測図	32
第27図 城ノ倉城主郭略測図	33
第28図 城ノ倉城略測図	33
第29図 桑折西山城位置図	35
第30図 桑折西山城略測図	35
第31図 桑折西山城西館・中館実測図	35
第32図 桑折西山城全体図	36
第33図 伊達崎城位置図	37
第34図 伊達崎城略測図	37
第35図 播磨館位置図	38
第36図 播磨館略測図	38
第37図 長倉館位置図	39
第38図 長倉館略測図	39
第39図 石母田城位置図	41
第40図 石母田城略測図	41
第41図 石母田城周辺(字切図より)	41
第42図 石母田城略測図	41
第43図 藤田城位置図	42
第44図 藤田城略測図	42
第45図 阿津賀志橋周辺	44
第46図 阿津賀志山防壁要圖	44
第47図 阿津賀志山館位置図及び関連道路分布図	45
第48図 梁川城位置図	47
第49図 梁川城略測図	47
第50図 梁川城周辺(字切図より)	48
第51図 梁川城本丸出土遺物	49
第52図 梁川城二ノ丸土塁出土遺物	49
第53図 大枝城位置図	50
第54図 大枝城略測図	50
第55図 根子屋館位置図	51
第56図 根子屋館略測図	51
第57図 雲山城位置図	52
第58図 雲山城略測図	53
第59図 懸田城位置図	54
第60図 懸田城略測図	55
第61図 大館位置図	56
第62図 大館略測図	56
第63図 小国城位置図	57
第64図 小国城略測図	57
第65図 月見館位置図	58
第66図 月見館略測図	58
第67図 二本松城位置図	59
第68図 二本松城略測図	60
第69図 田地ヶ岡館位置図	61
第70図 田地ヶ岡館略測図	61
第71図 高田館位置図	62
第72図 高田館略測図	62
第73図 田小屋館位置図	63
第74図 田小屋館略測図	63
第75図 三島館位置図	64
第76図 三島館略測図	64
第77図 玉井城位置図	65
第78図 玉井城周辺(字切図より)	65
第79図 本宮城位置図	66
第80図 本宮城略測図	66
第81図 小屋館位置図	67
第82図 小屋館略測図	67
第83図 滑津館・高野館位置図	68
第84図 滑津館・高野館略測図	68
第85図 岩角城位置図	69
第86図 岩角城略測図	69
第87図 小浜城位置図	71
第88図 小浜城一ノ郭建物配置図	71
第89図 小浜城略測図	71
第90図 百目城位置図	72
第91図 百目城略測図	72
第92図 四本松城位置図	73
第93図 四本松城略測図	73
第94図 四本松城出土遺物	74
第95図 小手森城位置図	75

第96図	小手森城略測図	75	第146図	大寺城位置図	105
第97図	住吉山城位置図	76	第147図	大寺城実測図	105
第98図	住吉山城略測図	76	第148図	實霧城位置図	106
第99図	龍川城位置図	77	第149図	雲霧城略測図	106
第100図	篠川城略測図	77	第150図	蓬田館位置図	107
第101図	守山城位置図	78	第151図	蓬田館略測図	107
第102図	守山城略測図	79	第152図	小平館位置図	108
第103図	高倉城位置図	80	第153図	小平館略測図	108
第104図	高倉城略測図	80	第154図	浅川城位置図	109
第105図	高玉城位置図	81	第155図	浅川城略測図	109
第106図	高玉城略測図	81	第156図	竹貢城位置図	110
第107図	成山館位置図	82	第157図	竹貢城略測図	110
第108図	成山館略測図	82	第158図	三春城位置図	111
第109図	片平城位置図	83	第159図	三春城略測図	112
第110図	片平城略測図	83	第160図	熊耳館位置図	113
第111図	黒鹿毛城位置図	84	第161図	熊耳館実測図	113
第112図	黒鹿毛城略測図	84	第162図	沼沢館位置図	114
第113図	穴沢館位置図	85	第163図	沼沢館略測図	114
第114図	穴沢館実測図	85	第164図	七草木館位置図	115
第115図	福村城位置図	86	第165図	七草木館略測図	115
第116図	福村城略測図	87	第166図	小野城位置図	116
第117図	福村御所位置図	88	第167図	小野城略測図	116
第118図	福村御所略測図	89	第168図	大越城位置図	117
第119図	宇津峰城位置図	90	第169図	大越城略測図	117
第120図	宇津峰城略測図	91	第170図	常盤城位置図	118
第121図	宇津峰城付近の城館	91	第171図	常盤城略測図	118
第122図	岩瀬山城位置図	92	第172図	船引城位置図	119
第123図	岩瀬山城略測図	92	第173図	船引城略測図	119
第124図	八幡崎城位置図	93	第174図	網目城位置図	120
第125図	八幡崎城略測図	93	第175図	網目城略測図	121
第126図	御所宮館位置図	94	第176図	小峰城位置図	122
第127図	御所宮館略測図	94	第177図	小峰城地形復元図	122
第128図	要害館位置図	95	第178図	小峰城出土遺物	123
第129図	要害館略測図	95	第179図	新地山館位置図	124
第130図	和田城位置図	96	第180図	新地山館略測図	124
第131図	和田城略測図	96	第181図	小屋山館位置図	125
第132図	長沼城位置図	97	第182図	小屋山館略測図	125
第133図	長沼城略測図	97	第183図	小館山館位置図	126
第134図	松山城位置図	98	第184図	小館山館略測図	126
第135図	松山城略測図	98	第185図	滑津館位置図	127
第136図	江泉館位置図	99	第186図	滑津館略測図	127
第137図	江泉館実測図	99	第187図	袖ヶ城位置図	128
第138図	松本館位置図	100	第188図	袖ヶ城略測図	128
第139図	松本館略測図	100	第189図	観音山館位置図	129
第140図	津室館位置図	101	第190図	観音山館略測図	129
第141図	津室館略測図	101	第191図	タカナシ館位置図	130
第142図	三重城位置図	103	第192図	タカナシ館略測図	130
第143図	三重城略測図	103	第193図	天王館位置図	131
第144図	藤田城位置図	104	第194図	天王館略測図	131
第145図	藤田城略測図	104	第195図	高野館位置図	132

第196図	高野館略測図	132
第197図	東堂山館位置図	133
第198図	東堂山館略測図	133
第199図	新城館位置図	134
第200図	新城館略測図	134
第201図	伊賀館位置図	135
第202図	伊賀館略測図	135
第203図	赤館位置図	136
第204図	赤館略測図	137
第205図	中丸館位置図	138
第206図	中丸館略測図	138
第207図	寺山館位置図	139
第208図	寺山館略測図	139
第209図	羽黒館位置図	140
第210図	羽黒館略測図	141
第211図	狐屋館位置図	142
第212図	狐屋館略測図	142
第213図	東館位置図	143
第214図	東館略測図	143
第215図	赤坂館位置図	144
第216図	赤坂館略測図	144
第217図	小高木館位置図	146
第218図	小高木館伝説名時代の絵図	146
第219図	小田山城位置図	147
第220図	小田山城略測図	148
第221図	神指城位置図	149
第222図	神指城実測図(ほ場整備前)	149
第223図	神指城実測図(ほ場整備後)	149
第224図	御山館・三峯城位置図	150
第225図	御山館・三峯城略測図	150
第226図	坂寺館位置図	151
第227図	坂寺館復元図	151
第228図	丸殿館・対馬館位置図	152
第229図	丸殿館・対馬館周辺(字切図より)	152
第230図	鶴浦館位置図	153
第231図	鶴浦館略測図	153
第232図	下荒居城位置図	154
第233図	下荒居城周辺(字切図より)	154
第234図	藤倉館位置図	155
第235図	藤倉館略測図	155
第236図	島村館位置図	156
第237図	島村館略測図	156
第238図	猪苗代城位置図	157
第239図	猪苗代城略測図	157
第240図	八手山城位置図	158
第241図	八手山城略測図	158
第242図	町堤崎館位置図	159
第243図	町堤崎館略測図	159
第244図	新宮城位置図	161
第245図	新宮城絵図	161
第246図	新宮城実測図	161
第247図	新宮城出土遺物	162
第248図	慶徳城位置図	163
第249図	慶徳城絵図	164
第250図	慶徳城略測図	164
第251図	青山城位置図	166
第252図	青山城絵図	166
第253図	青山城略測図	166
第254図	高龍城位置図	167
第255図	高龍城略測図	167
第256図	駿河館位置図	168
第257図	駿河館略測図	168
第258図	岩尾館位置図	169
第259図	岩尾館略測図	169
第260図	柏木城位置図	170
第261図	柏木城略測図	170
第262図	檜原城位置図	171
第263図	檜原城略測図	171
第264図	綱取城位置図	172
第265図	綱取城略測図	172
第266図	戸山城位置図	173
第267図	戸山城略測図	173
第268図	小布施城位置図	174
第269図	小布施城略測図	175
第270図	常世館位置図	176
第271図	常世館略測図	176
第272図	下達田館位置図	177
第273図	下達田館復元図	177
第274図	藍ヶ城位置図	178
第275図	藍ヶ城絵図	178
第276図	藍ヶ城略測図	178
第277図	新井田館位置図	179
第278図	新井田館略測図	179
第279図	丸山館位置図	180
第280図	丸山館略測図	180
第281図	宇多川館位置図	181
第282図	宇多川館略測図	181
第283図	反田山館位置図	182
第284図	反田山館略測図	182
第285図	陣ヶ峰城位置図	183
第286図	陣ヶ峰城略測図	183
第287図	雲雀城位置図	184
第288図	雲雀城略測図	184
第289図	金上館位置図	185
第290図	金上館略測図	185
第291図	笈川館位置図	186
第292図	笈川館略測図	186
第293図	浜崎城位置図	187
第294図	浜崎城略測図	187
第295図	北田城位置図	188

第296図	北田城略測図	188	第346図	黒木城周辺(字切図による)…	218
第297図	赤館位置図	189	第347図	黒木城略測図	218
第298図	赤館略測図	189	第348図	熊野堂城位置図	219
第299図	船岡館位置図	190	第349図	熊野堂城略測図	219
第300図	船岡館略測図	190	第350図	鬼越館位置図	220
第301図	向羽黒山城位置図	191	第351図	鬼越館略測図	220
第302図	向羽黒山城実測図	192	第352図	王館位置図	221
第303図	岩谷城位置図	193	第353図	王館略測図	221
第304図	岩谷城略測図	194	第354図	中村城位置図	222
第305図	丸山城位置図	195	第355図	中村城略測図	222
第306図	丸山城略測図	195	第356図	館腰館位置図	223
第307図	鳥海館位置図	196	第357図	館腰館周辺(字切図より)…	223
第308図	鳥海館略測図	196	第358図	館腰館略測図	223
第309図	中丸城位置図	197	第359図	駒ヶ嶺城位置図	224
第310図	中丸城略測図	197	第360図	駒ヶ嶺城略測図	224
第311図	玉繩城位置図	198	第361図	蓑原城位置図	225
第312図	玉繩城略測図	198	第362図	蓑原城略測図	225
第313図	中山城位置図	199	第363図	谷地小屋城位置図	226
第314図	中山城略測図	199	第364図	谷地小屋城略測図	226
第315図	丸山城位置図	200	第365図	中館位置図	227
第316図	丸山城略測図	200	第366図	中館略測図	227
第317図	宮崎館位置図	201	第367図	田中城位置図	228
第318図	宮崎館略測図	201	第368図	田中城略測図	228
第319図	鳴山城位置図	202	第369図	新城館位置図	229
第320図	鳴山城実測図	203	第370図	新城館略測図	229
第321図	鳴山城出土遺物	204	第371図	牛越城位置図	230
第322図	田部原館位置図	205	第372図	牛越城略測図	230
第323図	田部原館実測図	205	第373図	明神館位置図	231
第324図	中妻館位置図	206	第374図	明神館略測図	231
第325図	中妻館実測図	206	第375図	小高城位置図	232
第326図	九々布城位置図	207	第376図	小高城周辺(字切図より)…	233
第327図	九々布城実測図	207	第377図	小高城略測図	233
第328図	塩生館位置図	208	第378図	岡田館位置図	234
第329図	塩生越実測図	208	第379図	岡田館略測図	234
第330図	久川城位置図	209	第380図	草野館位置図	235
第331図	久川城平地区発掘調査平面図	210	第381図	草野館略測図	235
第332図	久川城実測図	210	第382図	権現堂城位置図	236
第333図	駒寄城位置図	211	第383図	権現堂城略測図	236
第334図	駒寄城略測図	211	第384図	大平山館位置図	237
第335図	西館位置図	212	第385図	大平山館略測図	237
第336図	西館実測図	212	第386図	泉田古館位置図	238
第337図	河原崎城位置図	213	第387図	泉田古館略測図	238
第338図	河原崎城略測図	213	第388図	新山城位置図	239
第339図	梁取城位置図	214	第389図	新山城略測図	239
第340図	梁取城略測図	214	第390図	鴻草館位置図	240
第341図	布沢城位置図	215	第391図	鴻草館略測図	240
第342図	布沢城略測図	215	第392図	佐山館位置図	241
第343図	水久保城位置図	216	第393図	佐山館略測図	241
第344図	水久保城略測図	216	第394図	日向館位置図	242
第345図	黒木城位置図	217	第395図	日向館略測図	242

第396図	高津戸館位置図	243
第397図	高津戸館略測図	243
第398図	真壁城位置図	244
第399図	真壁城実測図	244
第400図	真壁城B地区構図図	245
第401図	真壁城出土遺物	246
第402図	植葉城位置図	247
第403図	植葉城実測図	247
第404図	天神山館位置図	248
第405図	天神山館実測図	248
第406図	井出城位置図	249
第407図	井出城実測図	249
第408図	三倉城位置図	250
第409図	三倉城略測図	250
第410図	中柴外城位置図	251
第411図	中柴外城略測図	251
第412図	神明館位置図	252
第413図	神明館略測図	252
第414図	比丘尼館位置図	253
第415図	比丘尼館略測図	253
第416図	長友館位置図	254
第417図	長友館略測図	254
第418図	大森館位置図	255
第419図	大森館略測図	255
第420図	愛谷館位置図	256
第421図	愛谷館略測図	256
第422図	神谷館位置図	257
第423図	神谷館略測図	257
第424図	飯野平城位置図	258
第425図	飯野平城略測図……(折り込み)	259・260
第426図	白土城位置図	261
第427図	白土城略測図	262
第428図	久世原館位置図	263
第429図	久世原館略測図	263
第430図	久世原館・番匠地跡出土遺物	264
第431図	砂屋戸荒川館位置図	265
第432図	砂屋戸荒川館断面図	265
第433図	砂屋戸荒川館略測図	265
第434図	砂屋戸荒川館出土遺物	266
第435図	高久の古館位置図	267
第436図	高久の古館略測図	267
第437図	小泉館位置図	268
第438図	小泉館略測図	268
第439図	上遠野城位置図	269
第440図	上遠野城略測図	270
第441図	沼之内館位置図	271
第442図	沼之内館略測図	271
第443図	水野谷館位置図	272
第444図	水野谷館略測図	272
第445図	三沢館位置図	273
第446図	三沢館略測図	273
第447図	三沢館(日吉下遺跡)縄張図	273
第448図	三沢館出土遺物	274
第449図	上船尾館位置図	275
第450図	上船尾館略測図	275
第451図	下船尾館位置図	276
第452図	下船尾館略測図	276
第453図	住吉館位置図	277
第454図	住吉館略測図	277
第455図	島倉館位置図	278
第456図	島倉館略測図	278
第457図	浪尻城位置図	279
第458図	浪尻城略測図	279
第459図	八幡台遺跡位置図	280
第460図	八幡台遺跡略測図	280
第461図	館跡遺跡位置図	281
第462図	館跡遺跡略測図	281
第463図	西小川館位置図	282
第464図	西小川館(北反地区)全体図	282
第465図	西小川館全体図	282
〔写 真〕		
写真1	八丁目城遠景	20
写真2	杉目城遠景	21
写真3	莉松田城近景 主郭部	31
写真4	城ノ倉城遠景	33
写真5	伊達崎城遠景	37
写真6	石母田城近景	41
写真7	阿津賀志山防壁	44
写真8	阿津賀志山	44
写真9	梁川城本郭調查風景	47
写真10	大枝城遠景	50
写真11	靈山城遠景	52
写真12	懸田城遠景	54
写真13	小国城遠景	57
写真14	小国城近景	57
写真15	月見館遠景	58
写真16	二本松城西郭	60
写真17	二本松城遠景	60
写真18	三島館遠景	64
写真19	本宮城遠景	66
写真20	小浜城一ノ郭(本丸)	70
写真21	百目木城一ノ郭遠景	72
写真22	四本松城遠景	73
写真23	小手森城遠景	75
写真24	守山城遠景	78
写真25	守山城内堀の現況	79
写真26	高倉城遠景	80
写真27	高玉城遠景	81
写真28	成山館遠景	82
写真29	穴沢館航空写真	85

写真30	稻村御所土塁	89	写真80	岩尾館東側の段丘	169
写真31	稻村御所遠景	89	写真81	戸山城遠景	173
写真32	宇津峰城遠景	90	写真82	小布瀬城西側空堀(腰巻)	175
写真33	八幡崎城遠景	93	写真83	小布瀬城主郭南側の空堀	175
写真34	御所宮館遠景	94	写真84	常世竹花古墳内の五輪塔	176
写真35	御所宮館遠景	94	写真85	常世館の土塁・堀	176
写真36	和田城遠景	96	写真86	新井田館虎口(南側)	179
写真37	長沼城南蒂部	97	写真87	陣ヶ峰城虎口付近土塁・土橋	183
写真38	長沼城城東の外堀	97	写真88	雲雀城全景(西側より)	184
写真39	松本館遠景	100	写真89	金上館土塁・堀(北より)	185
写真40	三蘆城遠景	103	写真90	笈川館木丸付近全景	186
写真41	三蘆城近景	103	写真91	浜崎城本丸と土塁の一部を望む	187
写真42	藤田城遠景	104	写真92	北田城近景	188
写真43	大寺城遠景	105	写真93	赤館全景(東側より)	189
写真44	雲霧城 三ノ丸から本丸を望む	106	写真94	船岡館全景	190
写真45	熊耳館遠景(東南より)	113	写真95	上 と下 城下町滝谷を望む	194
写真46	熊耳館遠景(南より)	113	写真96	岩谷城二ノ丸の木戸場付近の土塁	194
写真47	沼沢館遠景(東より)	114	写真97	岩谷城近景	194
写真48	沼沢館遠景(南より)	114	写真98	鳥海館遠景 本丸・堀切(西側より)	196
写真49	七草木館遠景(東より)	115	写真99	玉講城遠景	198
写真50	七草木館遠景(北西より)	115	写真100	中山城遠景	199
写真51	常盤城遠景	118	写真101	丸山城全景	200
写真52	小峰城遠景	122	写真102	宮崎館全景	201
写真53	新地山館遠景	124	写真103	経塚山(狼火台)	202
写真54	小屋山館遠景(南東より)	125	写真104	中妻館 I の曲輪と空堀	206
写真55	小館山館遠景(西方より)	126	写真105	駒寄城遠景	211
写真56	滑津館遠景(南方より)	127	写真106	西館土塁	212
写真57	袖ヶ城遠景(西南より)	128	写真107	河原崎城遠景	213
写真58	観音山館遠景	129	写真108	柴取城古絵図	214
写真59	タカナシ館遠景	130	写真109	永久保城遠景	216
写真60	天王館航空写真	131	写真110	黒木城航空写真	218
写真61	伊賀館航空写真	135	写真111	黒木城遠景	218
写真62	寺山館遠景(南北より)	139	写真112	鬼越館遠景(西から)	220
写真63	羽黒館遠景(東より)	141	写真113	鬼越館遠景(北から)	220
写真64	本城地区南西側の小郭	141	写真114	糞断城航空写真	225
写真65	小郭の平場	141	写真115	谷地小屋城航空写真	226
写真66	羽黒神社の鳥居が建つ櫻郭	141	写真116	新城館遠景(本丸)	229
写真67	孤屋館遠景	142	写真117	牛越城遠景	230
写真68	赤坂館遠景	144	写真118	神明館遠景	252
写真69	鶴浦館遠景	153	写真119	愛谷館航空写真	256
写真70	下荒居城古絵図	154	写真120	上速野城遠景	270
写真71	藤倉館堀・土塁	155	写真121	下船尾館近景	276
写真72	島村館虎口付近 堀・土塁	156	写真122	下船尾館遠景	276
写真73	町堤崎館土塁・堀(南西側より)	159			
写真74	慶徳城より慶徳寺を望む	164			
写真75	慶徳城本丸北側の土塁の堀	164			
写真76	慶徳城外郭北側の空堀	164			
写真77	慶徳城外郭北側の空堀	164			
写真78	青山城遠景	165			
写真79	駿河館土塁・堀(南東より)	168			

第1章 福島県中世城館跡調査の経過

第1節 調査に至る経緯

いわゆる中世城館跡の大部分は、基本的には元和の一国一城令の結果、破却または見捨てられた。

しかしながら、江戸時代を通じて、それらの城館跡は村落に生きる人々のなかに、動乱の時代のさまざまな伝承とともに、確かな歴史的遺跡として存在し続けていたのである。

県内の有力諸藩によって編纂された地誌には、城館にまつわる伝承や現況の類いが収載されることとなつた。江戸時代の居住空間は概ね中世村落の延長線上にあったのであり、かつての中世城館のなかには、軍事的機能は否定されながらも、代官所・庄屋屋敷として行政的機能を保持し続けるものもあった。山城のなかには、入会地として採草・牧野に活用されるものもあった。

既に実施された「歴史の道」調査報告書によれば、近世の街道に点在する宿の多くは、中世における交通の要衝に成立した集落に起因しており、かつ山城の山下に発達していたことが推測できる。

近世村落の生活にとって、かつての城館跡は経済的には重要な命脈を保っていたといえよう。また、中世城館の中心部に、権現信仰の祠をはじめ、薬師堂、不動堂や石造供養塔などの仏教信仰の姿がとどめられているのを見ることができる。

しおり及びやかたは、一種の宗教的境域、換言すれば、聖なる空間としての意味を具有していたと考えられる。当初よりそうであったかどうかは問題であるが、たとえば落城と殺戮の記憶を払拭しえなかつた後世代の住民にしてみれば、そこに神仏をまつることによって、俗界とは異種の情念をこらしたとは言えよう。つまり、経済的関連のみならず、文化的(民間信仰的)対象として、それらの城館は近世を通じて変改の手を加えられることが少なかつたのである。

近代になってからも、中世城館跡をとりまく地域の経済的、文化的状況に大きな変動がない限り、中世的

風景は近世のそれと重なりあいながら、なお存続しえたのであった。

したがって、明治期より昭和初期にかけて相次いで編纂された郷土史誌・村誌等には、近世の史誌類を敷衍したとしても、甚だしいいちがいを生じることはなかったのである。

しかし、県内に養蚕業が盛んとなり、鉄道・炭鉱などが発達してくるに従って、集落に近い山城は桑畠と化し、あるいは城郭の曲輪が分断され、削平されるという変改を余儀なくされたのである。全く近代的な経済要求や神仏分離・神社整理等による城館跡内の信仰施設の滅失等に伴つて、中世的文化遺産は失われていった。

そして第二次大戦後、造林事業、工業誘致、都市開発、農業構造改善事業(圃場整備)、農・工業用水確保のためのダム建設、自動車道路の敷設等々、急激な変動の過程で、前近代的な風景は変貌を遂げてきたのである。

文化財保護法による記録保存の目的で、遺跡の発掘調査が急増してきたのも上の理由による。原始・古代関連遺跡の分布調査のみならず、中世および近世関連遺跡の分布状況をも早急に把握しなければならなくなつた。

本県においては、昭和46年3月に『福島県の寺院跡・城館跡』(福島県文化財調査報告書第25集)を発行した。このときには古代・中世(一部近世を含む)の寺院跡と城館跡を悉皆調査し、1042箇所の城館跡の存在が確認された。第一次分布調査の内容は、「名称、所在地、事項、備考」とし、事項では、たとえば五十目館(福島市五十辻字館内)「伊賀良目七郎高重、土塁、空堀」とある程度だった。ただし、備考欄に第二次調査と保存の必要度を注記している。重要とされたものは142箇所ある。このうち、二次調査の対象となったものを列挙すれば、以下の通りである。

西山城跡(伊達郡桑折町)・霞ヶ城跡(二本松市)・篠川館跡(郡山市)・御所館跡(須賀川市)・三春城跡(田村郡三春町)・小峰城跡(白河市)・神指城跡(会津若松市)・棚倉城(東白川郡棚倉町)・亀ヶ城跡(耶麻郡猪苗代町)・向羽黒山城跡(大沼郡本郷町)・鳴山城跡(南会津郡田島町)・真野古城跡(相馬郡鹿島町)・延館(いわき市)。

その後、昭和56年に発刊された『日本城郭大系』(人物往来社)では、本県内の城郭1145箇所が報告された。分布一覧表の記載内容は、先述の県発行報告書を基礎としている。しかし、同書の性格上、県内主要城館跡150箇所については、略図・写真・文献等を掲げた詳しい解説を載せており、先の報告書より進展していることは言うまでもない。さらに、同書の冒頭、概説において、調査担当者は、「福島県内の城館の調査は非常に立ち遅れおり、総合的な悉皆調査は未だ行われていない」と述べ、総合的な調査の必要性と、調査を基礎とした史跡指定等の保護対策の重要性について強調している。

この頃、福島県考古学会及び史学会では中世城館跡の発掘調査数の増加とともに、調査方法をはじめとして中世社会史に対する関心が広まりつつあった。鈴木啓(現・県立博物館学芸課長)は「福島県における中世城館研究の動向」(『福島史学研究』復刊第29・30号昭和55年11月)を発表し、ついで、発掘担当者の指導講座において、「城館跡の見方と調査法」について講義している。市町村史の編纂に際し、部分的な学術調査が実施され、航空測量の成果が収載されはじめたのも、この時期からであった。それらの調査結果によって、新たに県指

定史跡となったものに、梁川城跡(伊達郡梁川町、史跡及び名勝)・鳴山城跡(南会津郡田島町)・久川城跡(南会津郡伊南村)・桑折西山城跡(伊達郡桑折町)がある。阿津賀志山防星二重堀(伊達郡国見町)や慧日寺跡(耶麻郡磐梯町)の国史跡指定は、県内の中世遺跡調査と保存策について大きなインパクトを与えたことも特筆されよう。

いっぽう、昭和50年代に隆盛となった日本中世社会史の研究・著作は、地域史の再発見への動きを助長した。さらに、戦国時代に関する一般的の関心の拡大もあって、県内各地における中世城館跡の見直しがようやくさかんになってきたのである。しかし、それらの関心の度合とアプローチの方法や調査成果に基づく遺跡保存策については、実に、まちまちなものがあつたことは問題であった。考古学は、個別に対象となる城館の発掘に没入し、郷土史家は、依然として戦前の史誌類の記載を踏襲していた。城館関連地名を研究対象としていくことも民俗学の範疇に属しているとしても、民俗学からの城館研究は大きな成果を挙げていなかった。それは、人文地理学の分野についても大同小異であった。

この現実に反省を迫ったのは、「歴史の道」調査であったと言えよう。地域に即して言えば、この調査によって調査員は視野を一新し、歴史・地理・考古・民俗の総体として存在する道及び文化財を見つめなおすこととなった。文化遺産を総合的視点でとらえることの重要性に思い至ったのである。

中世城館跡を総合的に調査する必要性が叫ばれたゆえんである。

第2節 調査の経緯

文化庁の事業として「中世城館跡調査」の一項があることを知ったのは、昭和59年のことであった。すでに、昭和50年度から、三重・熊本両県がこの事業を開始しており、ついで、秋田・福井・静岡・栃木・長野・兵庫・青森・鹿児島・岩手・千葉・埼玉・新潟・山梨・滋賀・高知・愛媛の各県が着手していたのである。事業の概要を把握した本県では、歴史の道調査に引き続き、本事業に取組むことになった。

60年7月末に開催の県文化財保護指導者講習会において、小和田哲男静岡大助教授を招請し、「中世城館の調査法」の講義を受けた。受講者は市町村の文化財保護審議会の委員が大多数を占めていた。

さて、60年度から本事業に着手するに際し、まず、調査員の構成を行なった。本県では58・59両年度に埋蔵文化財分布図と一覧表の作成を実施しており、その結果、1042箇所の中世城館遺跡が確認されていたが、

本事業の目的とするところは、総合調査であり、そのために、埋蔵文化財分布調査よりも広い視点を要求される。各地の調査員について、歴史・考古・地理の各分野から計42名を選任することとした。

調査員の選任については、総括的指導に当る専門の調査委員と相談した。この委員として、歴史学の小林清治福島大教授と大石直正東北学院大教授、地理学の安田初雄福島大名誉教授、考古学の馬目順一県考古学会副会長の4氏に依頼した。

第1回の調査員会議は60年6月15日に郡山市で開催した。当日、文化庁より、服部英雄文化財調査官にも出席していただき、詳細な資料によって、中世城館の総合調査のねらいや調査方法等について指導を受けることができた。かくて、本事業はスタートした。調査期間は60・61両年度とし、62年度は補足調査と報告書の編集に充てることとした。

しかし、県域の広さと、踏査期間の限定(降雪地帯では秋の3ヶ月と春の1ヶ月になる)によって、予定の成果はむずかしくなってきたのである。例えば、1つの山城を踏査するについては、4～5ヶ月を要し、山城の全容は思うようにはとらえられないであつた。調査票の全項目について精査するとなれば、関係市町村職員の援助や地域住民の協力を受けなければならぬ。調査員の辛苦は並大抵ではなかった。そこで、事務局では、「城館跡調査情報」の発行を試み、調査方法についての参考資料や、実地の苦心談などを紹介したが、2号を発行しただけに終ってしまった。

61年度に入り、調査員の補充に迫られて、15名を増員せざるを得なくなった。ついで、県内7地区ごとに調査員会議を開催し、情報交換と調査法の習熟研修を図ることにした。いわき、相双、県中・県南、会津、県北の順に、専門委員を交え、踏査と協議の機会をつくったのである。これと併行して、同年度内に、文化庁において、国の文化財保護審議会第三専門調査委

員会(青木和夫、石井進、佐々木潤之介、笹山晴生、永原慶二、尾藤正英の各氏)で、本県の重要な中世城館跡の報告をする機会が与えられた。その中から、指定して保存すべき遺跡をリストアップするための報告である。この選択は、市町村教育委員会と、本事業調査員双方からの報告によった。文化庁での報告は二回に分け、計110箇所の城館跡について行った。国の専門委員による検討会議で、Aランクとされた重要城館跡については、本報告書においても、詳しく解説されており、他の城館についても、概ね、本書にBランクとして収載されている。それらは県または市町村においても、指定して保存を図るべき遺跡とみてよいであろう。

文化庁の検討会議資料作成を通じて、本事業の報告書の骨子は自ずから整えられたのであった。しかしながら、調査の過程で、それだけの調査成果を挙げるに偏したため、他の城館跡の調査はやや遅滞した点も否めない。

調査の促進と報告書の編集を企図して、各地区において中心的役割を果たしてきた調査員の中から、報告書編集委員を委嘱したのは62年度に入ってからであった。

第1回の編集委員会議(6月25日)では、本報告書の体裁・内容等に関し、細部に亘る協議を行った。そして、各編集委員を通じて各地区内の調査の促進と調整を図ることになったのである。報告書原稿の見通しを立てたうえで、12月に第2回の会議を開催した。そこでは、各地区的調査を通じて把握できた要点を発表し合ったのである。

編集で、最も問題となったのは、略測図の表記とトレースの件であった。トレースについては事務局で一括して行うこととした。しかし、縮小コピーをくり返したために、略測図には詳細なデータを盛り込めなかつたうらみはあると言わざるをえない。

第3節 調査の方法

1. 調査の目的及び対象

文化庁の記念物課では、「中世城館遺跡総合調査につ

いて」という要綱を示している。それによれば、目的として、「この事業は、全国に数多く存在する城館遺跡のうち、近年特に諸種の開発行為による影響が懸念され

福島県中世城館遺跡総合調査票

阅读理解

10

整理番号	地名及番地番号 交付済付番号	のりし台、通路(大字、からみ手、ヨリ番道)、古木他
開通する城郭番号		
地名	(他の名前)	
所在 地	市 町 村 町大字	町 村 町大字
現 状	a. 古地名況 山頂、山麓、丘陵、平地、その他() b. 現 地況 山林、水田、島、寺社境内、宅地、その他の() c. 所有 地況 国有地、公有地、地区有地、寺社有地、民有地、その他の()	
構 成 要 素 度	d. 稲存状況 良、やや良、不 良、不滅 e. 史跡地指定 国・県・市・町・村 : 史跡、旧跡、重要遺跡 f. 他の公有・基 因との関係 環境保全条例()、森林法() g. 当面予定で いる開発計画 有()、無() h. 管理状況	
主 な 特 徴 (2)	i. 延繩のある場所 全棟、部分棟(時期)()、原因() j. 道標の特徴(若向軸)、壁面(看板)、大走り、ほり(引き)、ほり(出)、土 壁(削りだし)、土手、石垣、虎口、水の手(井戸)、堀廻、池、礎石、土塊、椎石	

福島県教育委員会

	d. 遺物（陶磁器、武器、工具、毛布、布洋、古鏡、すずり、茶碗、木製品など）	
	e. その他	f. 集落との関係
b	a. 交通路（陸路、水路、わきし道、軍事道路、その他）	
		g. 開拓する被説
c	b. 商業関係（市場、〈河口市〉、古跡、その他）	
d	c. 手工業関係（織洋、鐵冶、陶器、漆器（大工）、その他）	
e	d. 農業関係（灌水、排水、その他の）	h. 古跡場（古墳・五輪塔など）
f	e. 宗教・信仰関係（寺社、城郭（五輪塔）、神碑、埋葬遺跡、塚原、その他）	i. その他

考 察 記 入 欄	1.最初の形態（最初者と最初時間、または利用者と利用形態）	恒久的城館；臨時城館 密接な関係をもつ城館（）
	2.存続期間（最初から現状まで）とその間の利用形態（主要着城者・城主の変遷）	軍事的にみて
	3.最初から現状まで城館に加えられた変化（新規開拓地）	記入自由欄
		日常的領主支配の視点からみて
	4.主な事件	

る中世城館(平安時代中頃から戦国時代に築かれたが、もしくは、主として当該時期に使用された城館)について、その保存に資するため、総合的な調査を行うものである。」と述べている。ここで、総合的と言っているのは同要綱の「調査対象及び調査事項」に明らかである。

まず、対象としては、中世の城・館に限定せず、チャシ(アイヌ地域)グスク(琉球地域)をはじめ、在地武士の屋敷・砦・要害・柵・陣・烽火台・物見台等に至るまで、広範囲なものとなっている。

次に調査事項については、

(1)城館の位置・規模・遺構の残存状況等の調査及び
遺跡範囲内の地形測量(略測図も可)・写真撮影

(2)城館に関する文献・記録・絵図・伝承等の調査

(3)城館の立地状況(古道・地字等)に関する調査
としており、特に(2)及び(3)に於いて、総合的というこの中のみが強調されている。

また、「注意」点として

ア、文献等により所在が知られるのみで、遺構が不明、または全く滅失したもの。

イ、時期的には古代(平安時代中頃以降)、又は近世(江戸時代)に造営された城館であっても、中世城館との関連をうかがわせるもの。

以上二点をあげて、調査対象の幅をより広げている。

上の調査結果は、1箇所ごとに調査票に記入(略測図は別に添付)することになるのであり、本県は、前ページにあげたような調査票を準備した。これを、査定版(国土地理院地形図と同版)4ツ折として使用する。一見して解るように、全項目は、「総合的調査」を達成するうえで不可欠のものばかりである。

2. 調査の内容

調査票の全項目について文化庁記念物課の服部英雄文化財調査官から調査員に対し、詳細な解説がなされた。今後の参考となると思われる所以、その時のテキストを次に紹介しておきたい。

なお、このテキストはB4版横1段組のものであったが、紙数の関係で横2段組に組み替えて掲載するものである。

「中世城館の調査法について」

服部 英雄(文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官)

① 城館のみつけ方

従来の研究によって知られている城館を調査するのみではなく、知られていない城館も調査すること。

1)既往の研究の調査

近世の地誌、近代の地方史など。

2)地名による調査

城………城 古城、城山、城の下、城の越、城の腰、要害(方言ではゆうげ、りゅうげ、りゅうがい、ゆうがい)、要害台(ゆげんでい)

館的なもの………掘の内、竹の内、竹の下、館(たて、たち、やかた)、御館(おたて、みたち)、星形、御所、土居、土居の内殿、殿庭内、殿屋敷、

古屋敷、城屋敷、岡前(御構)、かこい、構城、館の周辺………前田、御前、門田、佃、用作、造雀、御正作、味噌作、御双作、庶子、馬場、市場、鍛冶、鍛冶屋敷、閑、閑所、根小屋、殿町、的場、鉄砲場

のろし山………火とぼし山、鐘突山、鐘突堂山、御前山

*地名については、市役所、町村役場税務課あるいは産業課にある小字集成図(または土地宝典)をもとに聞き込み調査を行う。

*地名のみで頗著な遺構がない場合でも別に報告する。

3)古文献の調査

近世の古城図、中世の古文書などの調査。

旧藩時代の藩政資料は旧藩主の家蔵文書、あるいは県

立・市立図書館の蔵庫となっている場合が多い。活字になっていないものも多いが調査すること。文書には登場するが現在その所在地が確認できないものは別に報告すること。

*古文献について別途専門の調査員を委嘱してもよい。

4)空中写真・地籍図(不動産登記簿付属地図)による調査

特に平地にある城館跡の場合。空中写真によれば現在は埋立てられた堀跡や、削平された曲輪跡、旧河跡がわかる場合がある。地籍図によても埋立てられた濠跡や削平された土塁の輪郭がわかることがある。

例)茨城県行方郡長者曲輪の場合、空中写真によって現在地表には全く観察されない二重の濠が検出された。

●富山県婦負郡安田城の場合、現在は削平されて不明瞭となっている曲輪の部分と濠の部分が空中写真によるとはっきり判別できた。

●群馬県高崎市寺の内館の場合、地籍図上に、一町四方を方形にとり囲む細い耕地片があった。発掘した結果、それが濠であり、一町四方の城館であったことが確認されている。

5)実地調査

a 遺構の検出

●土塁・濠・削平された平場・段等、城館の遺構と思われるものは記録他がなくとも報告すること。

●但し耕作・造林のための造成地の跡、近世以降の馬追いの土塁(馬柵)等と混同しないこと。

(調査の経緯については別に報告すること)

b 伝承の調査

城館跡であるという伝承があれば、現在遺構が残って

いなくとも報告すること。伝承者の氏名も報告すること。

(ア) 調査の方法

1. 準備(市・区役所、町・村役場及び図書館において作業する)

1. 用意するもの

- ア) 地図 a 市町村作成の大縮尺の地図

1) 1,000~2,500分の1図。

2) 1)がない場合、10,000分の1地図でもよい。

- 都市計画図がない場合でも空中写真がある場合はそれを引伸しトレースする等、基本となる地図は厳密で正確なものを使用する。

b 小縮尺の地図

- 5万~20万分の1、城館相互の関連をつかむ上で必要。

イ) 小字集成図

市区役所・町村役場作成の小字一覧表、税務課なし産業課などが作成しているのが普通。作成されていない場合は、土地台帳などを利用する。なお、この集成図は調査カードとは別に市区町毎に一部を貼付して報告すること(大きすぎる場合は縮尺コピーにかける)。

- ウ) 不動産登記簿付属地図(地籍図、公園、字限図、切絵図、更生図ともいう)なるべく古いものがよい。小字每のものを集成する。

耕地整理・区画整理等、近・現代に地形の変改が加えられた地域は、それ以前の公園によって、濠・土塁跡等が検出されることがある。

古い公園は、市区役所・町村役場の他、法務局・旧家(区長の家)・図書館等に保存されている場合もある。

公園のうち必要な箇所はコピートして調査カード(捕獲)に貼付すること。(大きすぎる場合は縮尺コピーにかける)。

エ) 空中写真

なるべく古いものがよい。一番古いものは敗戦直後の米軍撮影のものであるが、不鮮明なものもある。

昭和30年代、いわゆる高度成長以前のものが鮮明で使いやすい。

空中写真は県で揃えておくことが望ましい。

○ 作業

- 地図・小字集成図の入手(または作成)、公園のコピー。

● 道構の所在関係・都市計画の区域わけ他、法的規制の有無の調査。

● 県市町村図書館にある関係図書の閲覧。

近世古文書も閲覧しておくことが望ましい。特に検地帳が残っている場合、地名・屋号をリスト・アップすること。

c 地名(ふりがなをつける)

例1) 江馬館の場合

大字	小字	漢字	屋号・道路
馬場西	馬場西		
	水口	大や七郎右衛門	
中通(なかどおり)	土居	御前・家のまへ	
	土居の内		
	土居のかみ		
	家のまへ		

山の越	山のこし	戸井ばた愛敬院、あぜち孫院、ほりばた徳 院、みばたの介、ほら口應院、太ら左平、 みばたの香次郎、清水
	寺の下	はやし、東龍院、開慶院五
ヲカモ		いせ吉八郎、なおや兵衛、あらや作蔵、 みなみの部舟蔵、みやのまへ少右衛門、上 がいと仁兵衛、御船

例2) 檜山城の場合

大字	小字	通称(街名)	屋号・道路
桧山	桧山町(ひやまち)	大町、馬場町(馬若町)、櫛町、電気町(電井町)	彦右衛門、五郎右衛門、茶右衛門、長住町、又四郎、長右衛門、かくべ、奥左衛門、源太右衛門
	赤館(あかだて)	背中あたり、赤坂場(てっぽううば)	
	茶園(ちゃえん)	木宮堂	
	森山下(きりやまし た)	下町(したまち)	六右衛門、茶右衛門
	古城(ふるしろ)	前神(たてがみ)、御判場(ごりょうば)、古寺(ふるてら)	
	母体	平崎台(ひらさだい)	田町(たまち)
		水口(みのぐち)	
		小沢口(こざわぐち)	

例3) 茶臼館の場合

大字	小字	通称(街名)	屋号・道路
株山	茶臼館	中町・大館	(人なし)

例4) 安田城(富山県)の場合

大字	小字	通称(街名)	屋号・道路
安田	周町前	大城(おおしろ)、小城(こしろ)、高木屋敷(たかぎやしき)、まご(鳴子)とも、まごゆきともといいう、鐵突窓(かねつきどう)	大門(だいもん、現在の家は 移動している)大門通
		中町敷削	
		外河原	

II 現地調査

1. 道構の確認

平場や段によって構成される郭(曲輪)、腰郭(帯郭、帯曲輪)及び犬走り、(帯郭よりはさらに細く、通路に近い形状のもの)؛郭周囲の土塁、石塁、濠を調査する。

塁については、折れひずみ(屈折を設けた土塁)、ます形(虎口に設けられた方形の土塁)

濠については、空濠、水濠、豊濠(たてぼり)、等高線とは垂直に、即ち最大傾斜線にそって掘り、谷を登りにくくするため、また帯郭に入った敵の動きを制覇するため加工されたもの)等の存在・区別について留意すること。

その他、水の手(井戸)、建物礎石、橹台、人呼びの丘、のろし台、土構、庭園、池などの遺構。大手、からめ手。濠底道(空濠の底を進んでゆくと曲輪の中に入ることができる道)。

その他、登り道のような通路、古木の存在などを調べて、用意した地図に正確に記入してゆく。距離については簡単な実測をする。

測量が無理な場合はコンパスと歩測による測定でもよい。

2. 聞きとり調査

a 地名：小字は、市役所、町村役場で調べておく。現地では小字以外の地名、即ち小字よりも細かい通称、俗称(小名、さげ名、しこ名、孫字、中字、ほのぎ)屋

号、道路の名前、用水路の名前を調査する。

古者がたくさん集まる地区的集会の時に聞きこみを行うと正確で調査も速く行うことができる。そういう機会がない場合は公図を示して古老にたずねる。公称地名(小字)ではないことを十分理解してもらった上でたずねることが必要。

b 伝承：城館にまつわる伝承や小祠の存在とその由来、地名の由来などを古老人にたずねること。

聞きとり調査は緊急性という点で重要であり、遺構の調査と同等の比重をおくこと。

© 調査カードへの記入の仕方

1. 名称(例)本佐倉城(他の名称 将門山城、大佐倉城、根古谷城)

江馬館(他の名称 下館)

茶白館(他の名称 茶倉館とも記される)

2. 所在地(例)江馬館の場合

現在 吉城郡神岡町殿

旧 (明治20以前) 吉城郡殿村

(明治20年裏)

*明治20年前というのは、市町村制(明治21年)施行、それに伴う町村合併以前の状態をいう。

3. 遺構の状況

a～e：該当するものを○で囲む。a～cについては重複するものは2つ○をつける。

e、f：eについて文化財保護法、保護条例による指定を記入するが、fについては“例えば都市計画法における市街化区域か、市街化調整区域(開発規制地区)か、風致地区か(開発規制地区)の別を記入する。(この法が適用されていないところは記入不要)。その他どのような規制がかかっているのか、自然環境保全法であれば自然環境保全地域に指定されているのか、また、環境保全条例で歴史的環境保全地域等に指定されているかどうか。公園法における自然公園(国立公園、国定公園、都道府県立自然公園)に指定され開発規制をうけているか、古都保存法による規制をうけているか、森林法における保安林に指定されているか等、法的開発規制の有無を記入する。

g：(記入例) 本佐倉城

現在は自然化調整区域であるから開発計画はない。但し過去しばしば宅造計画があった。

h：地元住民の城館に対する認識度、保存への配慮について述べる。例えば、住民の大半がそこが城館跡であることを知っているのかどうか。石碑等によって顕彰しているのかどうか。保存会は作られているのかどうか等についてふれる。

例) 本佐倉城の場合：一部にゴミの不法投棄等があるが、全体に住民の保存への意識は高い。石碑等は建てられていないが、最近保存会が結成された。

i：破壊されている場合は、部分壙も含め、時期と原因を述べる。

例) 忍台(おうじんだい)唇の場合：

全壙、部分壙 [時期(昭和49年)・理由(区画整理)]

*時期については不詳の場合何年頃でも差し支えないと。

*部分壙の場合、次の構造の特色の項に詳述すること。

j：遺構の特色……各項目のうち残るものに○をつけ説明を加える。立地条件(自然地形)を含め詳細に記すこと。

例1) 本佐倉城跡の場合

郭(呼称)、腰郭(帯郭)、犬走り、堀(空濠、水濠、たて濠)、土壘(折れひづみ、ます形)、石壘、虎口、水の手(井戸)、庭園、池、礎石、土橋、橋台、人呼びの丘、のろし台、通路(大手、からめ手、堀底道、登り道)古木

現在は干拓された印旛沼の南方の丘陵を利用して築かれている。自然地形がくびれたネック部分に南北の空濠(約150m)を入れ、それをはさんで先端(東方)を主郭、丘陵に接続する部分(西方)を外郭としている。主郭は南北の空濠(約100m)によって大きく二つに分かれる。西方に接待山(④)があり、東方に奥の山(⑩)、倉址(⑫)がある。⑪、⑫は土壘(約100m)によって区分されている。⑭、⑮の東方先は丘陵は二つに分かれるが、そのいずれにも空濠(20m、20m)があり、郭をなす。北のそれは物見台の郭を構成(⑪)、南の丘陵は城山(⑬)と呼ばれている。⑪は極めて狭隘な稜線(1～2 m×20m)と一段下がった帯郭(10 m×20m)に加工されており、稜線上に一本の松の古木(一本松)がある。⑫は20m×20mの区画をなすが、その先端には犬走りがありここを本丸と考える人もいる。

しかし、一般に本丸と考えられているのは⑪奥の山でここには樹齢400年位の古木(からかき松)があったが大正12年に枯れた。その北方即ち⑪、⑫間の谷は城の内⑬と呼ばれているが、外方とは人工的にカットされた障壁によって区分されている。⑪⑫間の空濠には屈曲が、⑪⑫間の空濠には屈曲、犬走りがある。いずれも堀底道、虎口に相当しよう。⑪⑫間の虎口は北方印旛沼方面水路に利用されたのである。

接待山は、東で南北約100m、西で南北約150m、東西約100mの広さをもち、物見跡と呼ばれる高みを最高に段郭となっている。

外郭は荒上(⑧)と呼ばれ、600～700mの長さをもつ空濠及び400mの土壘が残る。出耕形、隅耕形に近いものを備えている。水田のある南東の谷の対岸側にも遺構の残る跡跡がある。

例2) 相良頼景館の場合

南方を球磨川に臨み、東、北、西を土壘によって区画されている。土壘内側で計測して東西約54m、南北約60m、長方形を呈する館跡である。土壘は北側がもっとよく保存されており、東、西は削平が著しい。土壘は高さ2 m、幅9 m程。西側土壘は道路によって切削されているが、切断面を観察すると、土壘内部は川原石と粘質土が無規則に乱積みされており、外側には川原石が野面積みされている。

館の南半分は球磨川河川改修工事によって消滅したが、緊急調査によって次のことが明らかになっている。先ず土壘の外側には外濠があつたこと。(北側未調査部分にも想定されるから、北、東、西の三方に濠があつた)

第三期は球磨川洪水によって切落し南面に黄灰色砂層が堆積し、その上に館が構築された時期である。広場、堤防が加えられ、東外濠が補強されている。

4. 研究史

①地方史については明治以降のものを記入する。それ以前近世に叙述されたものは5、史料に含める。備考には刊行年等がわかれば記す。

例1)本佐倉城の場合

執筆者	題名	発行所・開設日	備考
①地方史 千葉県印旛郡誌	千葉県印旛郡役所	大正2	
徳丸頼彦 佐倉市史(上)	佐倉市	昭和46 下記徳丸	論文にはば同じ
新撰佐倉土記			
②著書 徳丸頼彦 佐倉城史			
③論文 小笠原長和 戦後末期における下総千葉氏	軍事史学5-4		
徳丸頼彦 二つの佐倉城一本佐倉城と佐倉城	日本城郭史論叢		
④報告書			

備考 発掘測量 1000分の1地図作成: 発掘調査報告書(千葉県教育委員会 本佐倉城跡発掘調査概報 1984)

例2)江馬館の場合

①地方史 神岡町史 史料編 岐阜県史・通史(中世)編 史料編	神岡町 岐阜県		
②著書 喜多谷忠彦 中世江馬氏の研究	神岡町		
③論文 波多野寿郎 江馬氏の範囲	日本歴史・347		
④報告書	送付予定		

備考 発掘、測量 51~53

5. 史料

A 文 献

例1)本佐倉城の場合

*備考には所蔵者他を記す

史料名	刊本	備考
①古文書 (千葉氏発給文書)	千葉県史料中世編、通史	
②古記録 千葉氏大系図	周辺史料叢書	
③地図		
④金石文 南勝寺石碑群	千葉県史料金石文庫	南勝寺
⑤古絵図 本佐倉千葉家故城址之圖	印旛郡誌	

例2)江馬館の場合

史料名	刊本	備考
①古文書 山科家文書	岐阜県歴史資料編 神岡町	
山科家礼記所収文書	同上	
江馬氏発給文書	同上	上杉家歴代古集、 御殿寺文書集
②古記録 山科家礼記	史料叢書	
毎花無盡藏	続群書類從	
石山本願寺日記	同左	
山科首領自記	同左	
③地図 飛州誌		
④金石文		
⑤古絵図 高源院跡城圖	飛州誌所収	

⑥ 伝 承

例1)伝馬館の場合

殿中通の土居の内にあった庭園の石は「御花石(伍ヶ石)」と呼ばれていた。この石にふれると大雨が降るとか。たたりがあるといわれている。

◎ 地 名(なりがな)のつける)

例1)江馬館の場合

大字	小字	羅字	羅号・道路
馬場西	馬場西		
	水口	水口	大や七郎右衛門
中透(なかどおり)	土居	土居	御前・家のまへ

		土居の内
		土居のかみ
		家のまへ
山の麓	山のこし	井戸ばた愛敷牧、あぜり孫六、ほりばた櫛庭、みぞばた番次郎、ほら口惣兵、太左左平、みぞばた番次郎、清水
	守の下	はやし、鹿鳴館、開運源五
ヲカモ		いせや八郎、なかひ宿兵衛、あらや作蔵、みなみ部屋兵衛、みやのまへ伊右衛門、上がいと仁兵衛、御館

例2)檜山城の場合

大字	小字	羅号・道路
檜山	檜山町(ひやまち) 大町、高崎町(高崎野町)、 横町、籠置町(籠井野町)	鹿右衛門、五郎右衛門、茶 右衛門、長左衛門、又四郎、 長右衛門、かんべ

d 遺 物

()内を〇で囲む。表面採集、伝世品、発掘を含む、保管者を明記すること。

例) 檜山城の場合

表面採集によって青磁片、黄瀬戸、唐津焼片、志野焼墨書き器片(大の字か)が検出されている。

館神にあった井戸の井戸枠とともに河田駒雄氏宅に保管されている。

6. 歴史的状況

a 交通路

陸路: 主要街道、脇街道、関所等流通路との関係。また山道、間道、のろし道のような軍事道路との関係。

水路: 付近における河川での舟運の有無、舟着場の位置、津出しなど。

陸路: 水路に即した他の城館との関係にも留意する。

例1)安田城の場合

鐘突堂より大門道と呼ばれる道を辿るに飛騨街道に出る。ここに明門と呼ばれる屋号の家があった(現在は近くに移転)。安田城の立地を考える上では現在は旧道となっている飛騨街道の流通との関係が第一に考えられる。この飛騨街道に沿って長沢城、富崎城などが築かれている。

第二に安田城の防禦条件もなしている井田川の舟運がある。近年も富山に出る時には筏舟を使って井田川を下ったという。安田城北方面には舟着場風の連携もある。安田城と極めて緊密な関係にあった呉服大山谷城までは舟を使用すれば至近であった。

例2)檜山城の場合

陸路(流通路) 旧羽州街道は大森・赤坂(古戦場)より北上して現在の昭和初期に建設された道路(新坂)ではなく、西にはざれた茶臼館南方に至り、そこから現在は鹿道となっている通称旧国道の坂を下り再び現国道に出る。それより東行して檜山城下に入り、北行、西行して再び北上する。最短距離をとることなく檜山城下にわざわざ屈曲して導き入れられたことがわかるが、当主の流通政策を示すものであろう。

(のろし道) 羽州街道は北方、田庄内方面(大館)を迂回し、末代川を東上するがより最短路ののろし道があったと思われる。檜山城北方、櫛山(のぼ

りやま)には八重堀館(やえんぼりだて)があるが、そこを中継点として芹川館(のりしは伝達され、さらに末代川、羽州街道沿いの館に伝えられたのであろう。

水路 檜山川には近年まで舟運があり、檜山城下にも舟が着いたという。このような水路は、中世にはさらに盛んであっただろう。

例3)江馬 下館の場合

高原郷から鎌倉街道(唐尾峠を通過し、信州と越中を結ぶ道)が下館馬場の直下を通っている。近くにある閑星という星号は関所との関連を示すものではないか。山科家礼記には江馬氏の閑銭のことがみえている(文明4年5月8日条)。

b 商業関係

市場地名(古市場、一日町、五日町等)があるかどうか。中世に付近に市場があったかどうか。市場がある場合、市神(市姫、えびすなど)を祭っているかどうかを調べる。

c 手工業関係

手工業関係の遺跡、遺物、地名(金掘、金くそ谷、鍛冶屋敷、紺屋町、大工町、細工町、番匠町等)があるか。出土地等も含め地図にも記入すること。

例1)勝沼館(山梨県)の場合

内堀外側から小殿治遺構が検出されている。

例2)大館(秋田県)の場合

鶴の羽口が検出されている。

例3)牛島館(佐賀県)の場合

「刀殿治」「殿治屋の前」という地名が東方にある。

例4)木舟城(富山県)の場合

紺屋町、中紺屋町、鍛冶町、諸方町という地名がある。

d 農業関係

湧水、用水との関係を調べる。

例1)於曾屋敷(山梨県)の場合

全村を灌漑する用水は、この館の東方・西方の堀によって一旦堰き止められたのち、用水として利用される。

この堀の堰の管理は代々於曾屋敷の当主が行っていた。

例2)鼠台館(佐賀県)の場合

潮見川左岸を灌漑する用水は館のわきより出る湧水を利用している。この水はいまだ枯れたことがない。

例3)本佐倉城(千葉県)の場合

千葉様茶井戸他多くの湧水があり、根古谷前、中池の水田の水がかりはこれによっていた。千葉様茶井戸が涸れたことによって耕作されなくなった水田が一枚ある。なお、現在は印旛沼より揚水しているので水系は一変している。

e 宗教、信仰関係他 (社寺、墳墓〈五輪塔〉、板碑、経塚、埋鉄遺構等)

●北東: 鬼門、南西: 裏鬼門、北西: 祈願寺、守護神等の関係(領主の性格が推定できる)。

●館内の祭祀: 駕敷神等との関係。

●墳墓: 特に城主や家臣の墓と考えられるものがあれば伝承等を記すこと。

●その他: 板碑、経塚等の他、埋鉄遺構のような中世

遺跡についてもふれること。

f 集落との関係

例1)竹迫城の場合

城山を中心と上町、原口、上庄等の集落があった。その集落を囲む形で外堀がめぐらされていたと推定される。大門口と呼ばれる地がその外濠推定地に接する。陣ノ内、備前小路という地名が残っている。

g 関連する城館

○相互に関連する城館をあげる。

a のろしのような音による連絡関係。

b 鐘、太鼓のような音による連絡関係。

○里の城、詰の城のように、離れていても一体となつた城館をあげる。

○交通路との関係も考慮する。

例1)高原源訪城(岐阜県)の場合

城山より北方にせりあがる尾根をあがると太鼓平と呼ばれる高みに出る。ここからは数河峠とその直下に至る越中東街道、その道に沿って元城城、寺林城が臨まれる。元城は神原峠に至る越中東街道と、数河峠に至る脇街道の分岐にあつたが、この元城への第一報は猿橋によって太鼓平に伝えられたのではないかろうか。

太鼓平の直下には高原源訪城の里城である下館や東町城があるが、この第一報は、太鼓によって城山(源訪城本丸)や下館に伝えられたと考えられる。

他に北方に関連する城に土城があり、越中東街道と大多和越への分岐に築かれている。大多和より鎌倉街道に出て北上すると、北端の属城、越中中地山城に出て、

南方には下館より鎌倉街道に出る道沿いに洞城・石神城があった。桃原で鎌倉街道に出る。桃原より、鎌倉街道を2キロ北上したところに尻高城、逆に2キロ南下したところに岩井戸城、さらに2キロ南西に学生茂城がある。

また、南北、国府町・八日町に属城・梨打城がある。梨打城へは桃原より西に大坂峠を越えるのが現在の道であるが、前記元城より石仮舟を越えて大坂峠に至るのが最短路であるから、中世にはこの道が使われたのであろう。

h 古戦場

例1)櫛山城の場合

羽州街道を南下した茶臼館南方1.5kmの大森・赤坂において天正17(1589)年、榎山安東実季と渋安東道季は戦っている。

7. 考 察 a 歴 史

1 最初の形態(築城者と築城時期、または利用者と利用形態)

例1)千頭峯城の場合(静岡県三ヶ日町)

三河への古道をはじめ、三街道の交差点をみおろす位置にあり、軍事的要衝としての本格的築城以前にもしばしば要塞として利用されていたものであろう。文献上では肥應2(1339)年井伊方として高師泰の攻撃をうけたことが知られるので、その頃には井伊氏の与同者によって築城されていた。

2 存続期間(築城から廃城まで)とその間の利用形態(主要居城者・城主の変遷)

例1) 榆山城の場合

○榆山安東政季によって長享元(1487)年以前、築城に着手され、明応4(1495)年に完成した。以後、安東忠季・尊季・輝季・愛季と城主が変遷し、慶長3(1598)年廃城となった。

3 築城から廃城までに城館に加えられた変化**例1) 勝沼館の場合**

内郭の建物は3期にわたって変遷していることが発掘の結果層序、溝の重複、建物の重複によって明らかになっている。また、内郭拡張に際し、土塁内側を削っているが、そのことによる防禦上の弱体化を防ぐため、新たに外側に土塁を設けたことも土塁下の生活構造によつて確認された。

例2) 武田氏館(櫛岡・崎館)の場合

東林寺藏の「古府中館跡図」には現在の遺構のうち天守台と梅翁曲輪が見えない。武田氏在城期以後、徳川氏の入城によって追加・増築されたのであろう。

4 主な事件**例1) 榆山城の場合**

天正17年2月9日、渋安東(豊鶴・安倍)道季叛し、のち都内諸城主、戸次盛安等の援を得て榆山城の安東(秋田)実季を攻撃した。実季は龜城150余日の後、これを退けた(『秋田県史資料』)。

b 機能

〈性格〉 ○恒久的城館……特殊な戦闘とは関係なく恒常に使用されたもの。

○臨時城番……特殊な戦闘に間に合して臨時に使用されたもの、暫的なものが多い。

(例) 千葉県臼井城を攻める際に作られた謹信一夜城、逆にその備えとして作られた忍台(おうじんじだい)眷など。機能(軍事的みて)〈領主支配の視点からみて〉については以上の調査に基づいて考察を行う。

なぜ城主はその地を城館として選んだのか、という立地条件。つまりどのような攻撃(敵)や防禦を考えその地を占地したのか、どのような城館を構築することによってどのような軍事支配上のメリットを得たのか、及びどのような領主支配上のメリット、即ち、非軍事的なもの、産業交通等に対する支配の上でどのように有効な効果を得ることができたのか、という点について報告者の考え方を述べる。ある程度仮説的な見解となつても差し支えない。(但し、ここは記入自由欄とする。)

〈軍事的みて〉**例1) 政元城(岐阜県)の場合**

政元城は、江馬氏城館のうちの一つとして高原源訪城・下館の支城の役割を果した。西方三木氏への備えが主眼である。この政元城の下を通ずる越中東街道はここで神原峠への本道と数河峠への脇往還に分岐する。政元城はこの交通の要衝にあって、このいのいの道に対しても防禦施設があったとは考えられない。この城はやはり、連絡に主要な機能があつたのであろう。

例2) 大野城(千葉県)の場合

戦国時代の大野城の城主は不明であるが、西方の大多喜城、東方の万木城の城主の変遷から推測してみた。第一次国府台合戦(天文7:1538)以降の房總は後北条氏と里見氏の抗争の中で理解される。大野城は、夷隅川とその旧河道を前面にのむ半島状の丘陵に立地している。北東万木

城までは4km、西方大多喜城までは4kmである。第一次国府台合戦以前、万木城には土岐氏、大多喜城には武田氏があつたが、両者はともに里見氏に属していたし、特に武田氏は国府台合戦以前は衰退の道をたどっていたから、大野城一带に軍事的緊張があつたとは考えられない。

国府台合戦以後、土岐氏、武田氏いずれも北条方に与した。ところが天文13年武田朝信が大多喜城より追放され、里見氏の重臣正木時茂が代わって入城した段階で、大野城一帯には軍事的緊張がもつとも高まつた。即ち、北条方土岐氏と里見方正木氏とが対する最前線となつたからである。

大野城は北に夷隅川(当時は現在程蛇行はしていないかっただと考えられる)、東に大野川、南及び西は谷となっており、南西のみ尾根続きに山稜が延びている。この北と東に川という立地を考えると、当初の大野城は北及び東、特に大野川を前面にしての北方に対する備えとしてあつたのではないだろうか。この時期を大野城の第一期と考えたい。報告書が古い館の構造を示す直線的濠などは、この段階に対応する可能性がある。さて、緊急調査の結果明らかになつたように、最終段階の大野城は特に西面に対する防禦が厳重である。これは大野城の地形の弱点をカバーするためのものといふはあまりに厳しいもので、調査報告書のいうように西面の防禦を第一に考えていたと考えたい。これを、大野城主の変遷、万木城、大多喜城との対抗同盟関係の変遷と関連して考えてみよう。最終段階は万木城(北条方)に対大多喜城(里見方)の対抗があつた時期にあたり、万木城土岐氏の最前線の城として第一期の古城跡を改築したものであろう。この城跡を放置しておけば、里見方によつて使用される危険があつた。その場合、大多喜を攻撃しようとする土岐氏は常に背後に里見方の脅威をうけることになり、軍事上のデメリットが大きくなってしまう。土岐氏はこのデメリットを克服し、大多喜攻撃の基地として大野城を再生したのであろう。それでは第一期の大野城はどのような状況の中に築かれたのだろうか。大野城が北方の攻撃を意識していた時期として考えられるのは、武田氏が真理谷を中心に勢力を拡張し、大多喜を掌中にした時期、あるいはそれ以前のこの地を支配したといわれる狩野氏がこの城を築いた時期のいずれかを考えたい。

〈領主支配の視点からみて〉**例1) 相良頼景館(熊本県)の場合**

球磨川に直面した館の立地は水運との関係で考えられる。特に舟着場風の遺構がそれを語る。球磨川水運は郡内の交通の大動脈であつたし、人吉方面から日向に出る場合は、この館のあたりで陸路(猪鹿倉越)に中継されたと推定され、極めて頼景館の立地は領主支配上有効であった。

次に農業関係をみると、館の堀への導水路(鉢の瀬井手)が一帯の農業用水でもあることも注目される。農耕に不可欠の用水が領主の用水であったことは農民支配の上で重要である。球磨川に面した鉢の瀬井手取水口には「永仁三年五月鉢之瀬井手碑 領主相良頼宗建」という碑が建てられている。碑は後世のものと思われるが、このような形でもこの用水が相良氏の用水、館の用水であるという意識の浸透があつた。

次に工業関係をみると上に注目されるのは、館の東及び西外濠で出土した轆羽口、鉄滓、隣接する蓮花寺跡から出土した轆羽口等の遺物及び蓮花寺跡の強く焼けた遺構とその

周辺の鉄といった製鉄関係の遺物である。このことは館内で鍛冶生産が行われていたことを示す。相良氏の鍛冶の自給的生産は農民の交易売買による鍛冶鉄の入手にくらべ優位を誇っているし、あるいは領主による統制もあり得たのではないか。

8. 地図

- a 城館周辺図(1万ないし2.5万分の1図)
- b 城館実測図(1,000ないし2,000万分の1図)

なお、調査票について、以下の補足をしておきたい。

- (1) 本調査においては、「城館跡」を用い、館・蹟・址は用いない。
- (2) 「堀」の字を用い、濠・壕は用いない。
- (3) 名称については、古文献に記載されている例に従うが、便宜上、調査員が命名するときは〔城〕・〔館〕とカッコ内に入れる。
- (4) 古文献(近世以前の地誌・古絵図)等において多く用いられている名称以外に、異称、通称がある場合は()内に書く。④
- (5) 古文献に記載のない場合は通称(俗称)か大字名、小字名を用いる。⑤
- (6) 遺構としても、文献の上でも確認できないが、地名によって推察できる場合も裏付ける。⑥
- (7) 古文献には見えているが、現在ではその所在地が不明な場合、名称のみ記入する。⑦
- (8) 遺構の残存状況のなかに「規模」を記入する。規模とは、その城館の本来の規模であり、およそ東西方向と南北方向の距離であらわす。(東西×南北 m)
- (9) 保存度のなかで、「消滅」とは、全く地形が改変されてしまっていて、地上から消された場合の意味。「全壊」とは遺構が全く地上に認められなくても、なお現在の地割・地形等により推定可能な場合の意味である。
- (10) 遺構の特色を示すために、できるだけ略測図を作成する。その際、縮尺とスケールを明記し、磁北による方位を入れる。
- 部分壊・半壊については、推定部分を点線で表わす。全壊していても、地籍図による復原が可能な場合も同様とする。
- (11) 略測図は原則として新たに作製することとする

等高線、地名(通称、屋号)遺構、復原可能な遺構、遺物出土地点等全て正確に記す。

9. 写真

写真全点を調査票に貼付する必要はない。2、3枚を貼付すること。

が、既刊の史誌・論文等に収載されたものを利用する際は、出典・年次を明記する。

(12) 歴史的状況(i その他)の項で、城館主が城館跡の範囲外に居住していたことが、歴史的状況として解る場合は、〔居住地区〕として記す。

3. 調査員の構成

この調査がねに「総合的」なるものとして位置づけられていることは、以上(1)で明らかである。

では、調査員の構成はどうあるべきか。文化財基礎調査の慣例にならえば、構成は容易であろうが、同時に幾らかの弱点が予想される。それは、机上の文献に頼っていたのでは、目的が達せられないという点である。踏査による景観の把握・地域研究の視点・遺構・遺物の通鑑・略測図作製の経験等々、単なる分布調査には見られない多様な要求が満たされなければならない。かかるプロバーが県内にどれほど存在するのか。中世城館の「総合調査」という点で、この調査は県として未経験の事業であったといえよう。

そこで、從来とは手法を変えて、歴史、地理、考古の各分野の新進また気鋭の研究者による構成を試みたのである。「歴史の道」調査員として尽力された方が多い。

しかし、結果としては、一方で発掘に携わる調査員の実地調査の期間は繁忙を極め、多くの負担をかけざるをえなかった。

調査員名簿は別表のとおりである。各地域の多くの調査協力者もあった。

本報告書の刊行によって、各地域の中世城館跡のより精細な調査の深化とともに、個々の城館跡とそれをとりまく歴史的環境をも含めて、文化財としてながく保護されるよう切望してやまない。

(山名隆弘)

第2章 福島県の中世城館概観

はじめに

今回の調査により確認された福島県内の中世城館跡は1997年のもの（付章参照）。明治15年現在の町村数1630に対比すれば、1村当り1.2城館となる。明治前期の町村数は江戸時代のそれとほとんど同じであり、さらに中世末戦国期の村数もこれと決定的な差はないといわれる。

城館が最も多く築かれたのは戦国期である。一国一城令に基づいて武士が大名城下に集住した江戸時代と違って、中世は在地領主制の時代であるが、とりわけ

戦国期は在地領制の最後の段階であると共に、それが最も発展をとげた時期であった。現存する中世城館跡の大部分は、この戦国期の状態を遺すものといってよい。ほとんどの村落に在地領主があり、その城館に居住したのである。

ただし、広く中世城館の成立は在地領主制と共に古く、鎌倉期もしくは平安後期にさかのぼり、その後政治・経済の展開に伴って南北朝、室町、戦国という変遷をたどっている。

第1節 城館の築営と変遷

1) 平安期(9~12世紀)

この時期の城館またそれに準ずるものに、白河関跡（白河市）、阿津賀志山防壁（国見町）、大鳥城、五十辻館（以上福島市）などがある。国史跡白河関跡は承和2年（835）の太政官符によれば5世紀の設置となるが、事実は6~7世紀に下るとすべきであろう。1959年以降5年間の調査によって9世紀の遺物と遺構および中世城館跡が確認された。土塁と空堀をめぐらす方形城館である。南北朝、結城白川頼朝が陸奥国府から白河の満朝あてに、落人に備えて関所を警固するよう命じているのによれば、中世におけるその軍事機能を認めることができよう。

阿津賀志山防壁（国史跡）は、東南の阿武隈川旧河道までの二重堀と、北西の山館と陣場、さらに東の東越山などによる防衛施設である。文治5年（1189）奥州合戦隨一の激戦が行われたこの防壁は、数少ない当時の遺構として貴重である。大鳥城は信夫庄司佐藤氏の居城と伝えるが確証ではなく、また南北朝以後の修築が加わっているとみられる。

五十辻館は、「吾妻鏡」にその名がみえる佐藤一族伊賀良目高重の居館とみられる。相馬への道が東山道（奥大道）から分岐する要地である五十辻に築かれた平館

であり、明瞭な平安期の遺跡として注目される。

2) 鎌倉期(12世紀末~14世紀初)

平泉藤原氏滅亡後、関東武士団の進駐によって奥羽の中世体制が整えられる。浜通りの行方郡（相馬郡）は相馬氏、中通りの伊達郡は伊達氏、信夫郡の一部は二階堂氏、安積郡は伊東氏、岩瀬郡は二階堂氏、白河郡は結城氏、会津四郡（大会津・耶麻・河沼・大沼）は三浦氏（のちに北条・芦名に代わる）、南山（田島・下郷町など）は長沼氏が、それぞれ地頭として支配することになる。いわき地方の岩城氏、石川郡の石川氏のみが、平安期以来の在地支配を認められた例外である。

伊達氏の鎌倉初期入部の頃の居城が保原高子岡また桑折西山であるとの説は確証がない。が、梁川町の栗野大館は一時的ながら伊達氏の居城と伝えるにふさわしいとみられる。80~100mの方形の平館であり、かりに濠などにのちの改修が加えられているとしても、基本的に鎌倉期の遺構を示すものと考えられる。

壮大な複郭平城である新宮城（喜多方市）は、本来は内郭部分によって鎌倉期に新宮氏の本拠として築営されたと想定される。建武3年（1336）の軍忠状（石川文書）に石川義光の若党的屋敷頼道がみえる。おそらく矢吹を本拠とした頼道の居城は、袖ヶ城（矢吹町）と推定

できよう。

鎌倉期と断定できる城館は僅少であるが、それらは平地あるいは微高地に占地する平城とみてよいであろう。

3) 南北朝期(14世紀)

南北朝期の動乱に作成された軍忠状には、数かずの城館が記されている。伊達郡の靈山(靈山町、国史跡)、藤田(国見町)、川俣(川俣町)、岩瀬郡の宇津峯(須賀川市、国史跡)、鉢衡(長沼町)、安達郡の岩色(本宮町)、岩城郡の滝尻(いわき市)、標葉郡の権現堂(浪江町)、行方郡の小高(小高町、県史跡)、宇多郡の熊野堂(相馬市)の諸城がそれである。

これらの城館は、鉢衡城と滝尻城を除き、いずれも丘陵上や山上に築かれている。山城の規定が比高約150m以上のものとする(日本城郭大系別巻2)のに従う限り、これらは山城と一括できず、ほとんどが平山城と呼ばれることとなるが、いずれにせよ、居住性あるいは村落との関連を優先する平城に代わって、何よりも戦闘を第一に考慮する城館が營まれたのである。

上記の城館は、いずれも北朝方の軍忠状(相馬文書・飯野文書他)に現れており、したがって南朝方の城館である。とくに靈山・宇津峯は伊達・田村庄司の両氏に支持されて、本県南党の中核となった天歟である。両城は南北朝の合戦で落城した後は廃城となっており、当時の遺構を確かめることができる。

靈山城は平安期以来の名刹靈山寺の境域に設営されたが、権現堂城や熊野堂城もその名が示す旧来の堂地に築かれた城である。隱津島社のある木幡山(東和町)にも、中先代の亂に伴う一味が立籠っている(飯野文書)。山上の社寺地が城郭にあてられるのは、南北朝期の特徴といえる。

平山城の小高城は建武年間に相馬氏の居城となり戰国末に及ぶが、山城とよぶべき二本松城・白川(搦目)城(県史跡)も南北朝の築営とみられる。二本松城には南北朝半ばころに旧奥州管領畠山氏が入る。結城白川氏は鎌倉期に白川に入部しているが、白川城(搦目城)の築営はおくれて南北朝期とみるのが妥当であろう。小峯城(白河市)もまた、親朝による小峯氏創立に伴って南北朝期に築営されたものと推測される。なお、白

川城が廃城の天正期の姿を遺すのに対し、江戸期の大改修をへた小峯城は近世城郭に変貌している。

4) 室町期(15~16世紀初)

篠川(郡山市)、稲村御所(須賀川市)、梁川(梁川町、県史跡)、大仏(福島市)、黒川(会津若松市)、岩城大館(いわき市)の諸城がこの時期築営の代表的城館である。篠川城と稲村御所は、応永6年(1399)に鎌倉から下向した足利満直と同満貞の居城である。篠川・稲村とともに南北朝に北党的戦略拠点となつており、南北朝期に成立していた城館とみてよいが、両御所の入部によって改修の手が加えられたであろう。15世紀の遺構を示すものと想定される。

梁川城は近世初期蒲生・上杉の支城としての改修の後に、松平・松前兩氏の居城ともなつており、室町期伊達居城の原型を示すものではないが、しかしその占地や繩張の大概は応永末年伊達持宗以来のものと考えられる。復原された本丸庭園跡、また14~15世紀の出土陶器が、その年代を実証した。

応永20年に伊達松大丸(のち持宗)が挙兵した大仏城は、のち杉妻城、さらに文禄には福島城と改称される。江戸期には三角状となつてゐるが、阿武隈川の侵食によるもので、本来は方形館であったとみられる。後述のように、大仏城は鎌倉期にさかのぼるかと考えられる。

南北朝期以来会津守護を称する蘆名氏は、15世紀初までに黒川城に居城を確定していたであろう。小田山城ともよぶこの城は、のちの若松城(国史跡)の東辺に位置し、山城と根小屋を構えたと想定されるが、今後の検討が必要である。

岩城一郡の支配を確立した岩城隆忠は文明15年(1483)に大館に移ったという(磐城系図)。平山城とよぶべき大規模な大館の完成は戦国期であろうが、好島荘の中枢近くに立地して、岩城領国交通の要衝を扼するこの城の成立は、岩城氏発展の基礎となつた。

なお、懸田城(靈山町)は応永7年に菊田莊(いわき市)の藤井孫四郎と一揆契約を結んだ懸田宗顯(上速野文書)の居城と推定される。天文22年(1553)伊達晴宗のために懸田氏は滅亡、同城も廃城となる。現存の遺構は戦国期の完成形態を示すものといえる。

5) 戦国期(16世紀)

伊達氏天文の乱を契機に奥羽の地は戦国期に突入し、天正18年(1590)の奥羽仕置に至り終幕する。桑折西山(桑折町。県史跡)、向羽黒(岩崎城。本郷町)、久川(伊南村。県史跡)、蓑首(新地町)の諸城が、この時期に築営された代表的存在である。

桑折西山城(高館)は天文元年陸奥守護伊達種宗が梁川城からここに移った本格的戦国期城館である。応永9年(1402)伊達大膳大夫政宗が関東管領の大軍を迎撃した「赤館」はこの城とされており(宿連二郡村誌)、あるいは南北朝期に東部の本丸・二の丸の部分が成立し、種宗によってその改修と中館・西館部分の増設が行われたものかと考える。天文の乱終結の天文17年に廃城となったこの城は、戦国前期の大名居城の典型を示す。

向羽黒城は戦国当時岩崎城と称した。芦名盛氏が永禄4年(1561)に起工し同11年に完成、天正2年の嗣子盛興の死去に伴って黒川城に復帰するまでの間の居城と伝える。その後廃城となるこの城は、大川に臨み屹立する天嶮に拠り大小100を越える曲輪を擁し、芦名家の最盛期を現出した盛氏の居城たるにふさわしい戦国期固有の城館である。

蓑首城は永禄末年の築営で(奥相茶話記)天正末年以後は廃城となっているから、戦国後期相馬氏の築城技術のモデルを示すといえよう。久川城は天正17年河原

田盛次が伊達政宗の侵攻に備えて築いたと伝える。その後、蒲生・上杉時代の改修で石垣普請などが加えられたが、綱張の大概は天正期のもとみられる。

永正子年(永正元年か)に田村氏が守山城(郡山市)から移ったという三春城も、戦国期築営の大名城郭に加えてよいであろうが、近世三春城としての改修によって変容をとげている。なお、神指城(会津若松市)は慶長4年(1599)の頃に上杉景勝が起工して未完成に終った城。破壊が著しいが、近世初頭の年代の確かな城郭である。中村城(相馬市。県史跡)は慶長16年に完成して相馬氏が小高城から移った近世相馬氏の本城である。その以前のこの城の遺構は明らかでない。

中世城館は室町期以前に築かれたものも多くは戦国期まで機能し、それぞれにより高度の修築を加えられ、天正末~慶長期には限られた城郭を除き、一齊に廃城となつた。したがって、多くの中世城館は、雲山・宇津峯・懸田、桑折西山など戦国初期以前に廃城となつたものを除いて、遺構としては戦国期城館の形を探る。

ただし、これらのうち天正末~慶長期に蒲生・上杉の支城となつた久川、鳴山(田島町。県史跡)守山、小浜(岩代町)、大森(福島市)、梁川の諸城には石垣普請などの手が加えられている例が多い。それぞれの城館の本来の遺構と改修の形を見分けることは、困難であるが重要な課題である。

第2節 城館とその環境

1) 平城の諸相

中村

相馬市成田の「相馬六郎館」について「奥相志」は結城宗広の家人中村六郎左衛門広重の居館であるとし、広重は建武3年(1336)相馬光胤以下に熊野堂城を攻められて討死したと記している。相馬文書の相馬松鶴丸軍忠状には、同年3月の熊野堂の合戦に「白川上野入道家人六郎左衛門入道」が捕虜となったことが見える。現在この館跡(館腰館)は方110mの方形館で周囲に墨濠をめぐらした遺構が推定できる。軍忠状と「奥相志」を総合すれば、鎌倉期にこの館に住した六郎左衛門は、南北朝争乱に際して北約300mの熊野堂山に築いた城館に拠って、北党的相馬軍を迎撃したことが知られる。

鎌倉期の平城から南北朝期以降の山城あるいは平山城への移行変化の事実をこの二つの城館は証明している。

中村六郎館は元来、宇多川の自然堤防であった微高地に立地しているが、福島市松川町の中館もまた境川の自然堤防上に築かれた平館であり、方100m程度の方形館であった(松川のあゆみ)。これに対する西館と東館は八丁目城・土合館とも呼ばれる平山館であり、八丁目城は天文~天正期に伊達領国南境の要城として機能したことが文書記録に明らかである。おそらく中館は鎌倉期の地区的領主の居館であり、八丁目城と土合館は南北朝以降に築かれ戦国期にさらに改修されたものであろう。

自然堤防上に占地し、河流を利用して引水して水

堀をめぐらす平館は、鎌倉期に広く築営されたものと想定される。保原町から梁川町にわたる阿武隈東岸旧河道の自然堤防上にみられる数々の館跡も同様であり、しかも戦国期にまで続いたものであろう。

長沼町の江花川の自然堤防上に位置する南古館と北古館は15世紀の中世陶器を出土し、室町期を最盛期とするが、あるいは鎌倉期に築営されてその後改修を加えられたものであろうか。戦国期には山城の長沼城に主位を譲る。

信夫(福島市)・伊達両郡の50km余にわたる阿武隈西岸の段丘上には、鳥谷野・大仏・五十辻・本内・鎌田・瀬上(以上福島市)、桑折播磨・陣十郎・伊達崎(以上桑折町)、徳江(国見町)、大枝・五十沢(以上梁川町)などの諸城館が連なる。五十辻館は前述のように平安期に遡るが、瀬上・桑折・伊達崎・大栄・待江の諸氏が伊達一族として鎌倉期に分立しているのによれば(伊達世臣家譜他)、瀬上以下の諸城館は鎌倉期に築営されていたとみてよい。鳥谷野その他の城館も同じころに築営されたものであろう。これらを結ぶ一つの交通路が予想される。そのうち、大仏城から桑折播磨館までを結ぶ部分は、奥大道の一部であったとみられる(歴史の道奥州道中)。

なお須賀川市小作田の蛭館、郡山市田村町の唐松館などの平館は共に不整形をなすが、出土遺物から鎌倉期の構築とみられる(蛭館跡報告書)。天正初年の田村清顕書状(伊達家文書)に「小作田外曲輪打散」とあって、蛭館は戦国期まで機能しているが、唐松館も同様であろう。

2) 山城のすがた——居館と詰城——

鳴山城は馬蹄形状の縄張りの頂点部の比高188mの愛宕山の頂を詰の城とし、居館は比高40mの山腹部分に上千疊・下千疊が設営されている。馬蹄形の末端部分の山麓は字根小屋で、これと外部を区画する施設が想定されるが、それは大門の石垣と共に蒲生・上杉時代のものであろう。梁川城は東南300mの茶臼館を詰城としたと伝える。二本松城も比高140mの山頂を詰城とし、中腹部を居館としたとみられる。比高150m程度をこえる山城を居館とすることは、南北朝期は別として、戦国期にはまず考え難いであろう。

戦国期に一般的であったのは、平山城である。例えば、百目木城(岩代町)は比高70mの館山に本丸から三の丸までの郭を築き、大手に下る低地に家中屋敷等を置いたものであろう。石田城(靈山町)の麓の字根古屋も家中屋敷と町を含むものかとみられる。

3) 城館と村落および宿町

伊達郡の森山館(国見町)は戦国期伊達家の重臣富塚氏の居館であるが、森山郷の北部台地に占地し、その水濠は南方の田地(森山郷の大部分、富塚所領)を灌漑した。前述の中村六郎館・中館・南古館その他でも同様のことが考えられる。鎌倉期以来、城館の水濠の多くはその溜水で下手の田地を灌漑したとみてよい。在地領主は、水を抑えることによって村落と農民を掌握したのである。

前述の中館の西に接する字宿地は、鎌倉期の宿であり奥大道がこのあたりを通ったと推測される。中館は奥大道と宿を抑え、かつ下手の田地と村落を支配する在地領主の居館であった。南北朝以降戦国期までにこの地区の要城として八丁目城が築かれ、その東南麓に宿町が取立てられ、従来の宿地の家々や社祠(天神社など)が八丁目宿に移された。八丁目城は東の土合館と補完しあいながら八丁目宿を取り込み、総体として防衛施設を構成したとみられる。

中村六郎館の西隣に字瓦宿がある。いうまでもなく川原宿であり、東海道(海道)がこのあたりを通った(奥相志)。中村六郎館もまた宿と街道と水田を抑えたのである。

鳥谷野館は川俣から杉目(福島)方面に通じる街道が阿武隈川を西に渡る渡河点と、阿武隈西岸の通路とが交わる要地を占める。この館の北1.5kmに字下宿があるので、この館のめぐりの字仲之内もやはり宿であったに違いない。結城白川一族の中畠氏の居館とみられる觀音山館(矢吹町)の麓には字根宿がある。根小屋の宿の意味であろう。館と宿がセットをなす好例である。この根宿は奥大道の宿とみてよい。

天正17年5月の阿子島城・高玉城(共に郡山市)攻撃を記した伊達政宗書状・「治家記録」などを総合すると、町は「町構」ともよばれ、「三ノ曲輪」とあわせて城の「外構」を構成し、これに対し「本曲輪・二ノ曲輪」が内郭と

して「実城」とよばれている。一般に、内郭を構成する「実城」に対して外郭は「外曲輪」また「外構」とよばれ、

宿町は外郭の内に取込まれて、広義の城郭の一部を構成したのである(宮城県本屋敷遺跡報告書を参照)。

おりに

中世城館は相互に有機的関係をもつ。とくに戦国期の大名領国の成立に伴い、本城と支城の関係が確立する。天文期の伊達領国では桑折西山城を本城とし、北は白石・四保(宮城県柴田町)・岩沼・角田、南に杉目・八丁目、川俣、東に梁川・懸田、西に米沢・小松・高畠などを重要な支城とした。各支城を中心にさらに第2次的な本城支城関係が成立した。

桑折西山城は伊達郡の西偏であるが、当時の伊達領国にとっては必ずしも偏った位置ではなかった。伊達氏の置賜進出は小坂峠・七ヶ宿街道(二井宿通)を媒介に行われ、この街道と高畠城は重要であった。天文の乱後西山城が廃城とされ米沢に本城が移るに伴い、坂谷越えの道(坂屋通)が重要となり大森城が脚光を浴びた。交通と経済政治軍事上の要衝に主要城郭が設置されたのである。政宗が蘆名領侵攻の突破口として天正

13年に確保した桧原城砦は、これらと異なって全くの軍事的意味から設営された番城であり、後藤信康らが長期の城番を勤めた。

岩城領国においてもまた、領国を構成する磐城四郡を縦貫する東海道(海道)を幹線として、これといくつかの東西線が交わる要衝、あるいは各東西線の要所所に宿町と城館がおかれ、飯野平城(大館)を中心とする領国を外から守り、また領国内各郡ごとの支配の要めとなつた。猪田・上遠野・船尾・上好島・白土・神谷・玉山・四倉の諸城がそれである。

各領国における城館の連絡は、狼煙・鐘あるいは早馬で行われた。伊南谷(伊南村・南郷村。河原田領)、長江庄(南山。田島・下郷町。長沼領)、久慈川谷(東白川郡。白川領のち佐竹領)の諸城館相互を結ぶ狼煙制が確認されている。

(小林清治)

福島県中世城館跡市町村別城館数一覧表

昭和63年3月31日現在

No	市町村	城館数	指定史跡数		備考
			国	県	
1	福島市	64			
2	飯野町	25			
3	川俣町	56			
4	桑折町	47		1	
5	伊達町	6			
6	国見町	41	1		
7	梁川町	35		1	
8	保原町	27			
9	磐山町	23	1		
10	二本松市	21			
11	安達町	26			
12	大玉村	17			2
13	本宮町	16			
14	白沢村	49			
15	岩代町	44		3	
16	東和町	23			
県北地区計		575		5	
18	郡山市	151	1		7
19	須賀川市	90	1		
20	長沼町	10			
21	鏡石町	12			
22	岩瀬村	7			
23	天栄村	20			
24	石川町	29			
25	玉川村	18			
26	平田村	21			
27	浅川町	8			
28	古殿町	8			
29	三春町	17			
30	小野町	22			9
31	滝根町	9			
32	大越町	21			
33	常葉町	11			
34	船引町	13			
35	都路村	3			
県中地区計		470		16	
36	白河市	21		1	
37	西郷村	8			2
38	中島村	2			
39	矢吹町	18			
40	表郷村	9			
41	東村	10			
42	大信村	6			
43	泉崎村	9			
44	棚倉町	13			3
45	猪町	7			
46	矢祭町	8			
47	飯川村	11			2
県南地区計		122		7	

No	市町村	城館数	指定史跡数		備考
			国	県	
48	会津若松市	48	1		4
49	北会津村	27			9
50	河東町	15			
51	磐梯町	7			2
52	猪苗代町	33			12
53	喜多方市	57			8
54	熱塩加納村	15			1
55	北塙原村	16			2
56	塙川町	29			7
57	山都町	9			2
58	高鄉村	8			4
59	西会津町	28			8
60	会津坂下町	24			
61	湯川村	10			
62	柳津町	15			
63	会津高田町	26			
64	本郷町	6			
65	新鶴村	7			
66	三島町	14			
67	金山町	15			
68	昭和村	12			
会津地区計		421			59
69	田島町	10		1	
70	下郷町	14			
71	館岩村	1			
72	伊南村	16		1	
73	椚岐村	1			
74	南郷村	6			
75	只見町	22			
南会津地区計		70			
76	相馬市	30	1	1	8
77	新地町	11			3
78	鹿島町	14			
79	原町市	34			4
80	小高町	20		1	1
81	飯館村	7			
82	浪江町	18			3
83	葛尾村	1			
84	双葉町	10			2
85	大熊町	5			1
86	富岡町	7			
87	川内村	6			
88	植葉町	9			
89	広野町	4			
相双地区計		176			23
90	いわき市	163		1	1
いわき地区計		163			1
総計		1,997	4	8	111

(注) 1. 市町村No(コード番号)は、城館分布図及び地名表と対応する。

2. 指定史跡は複数市町村にまたがる場合があるので総数は実数を記し、地区別計は記入していない。なお、史跡の時期も必ずしも中世に限られるわけではない。

3. 備考欄の数字は位置の確定できない城館数である。

第3章 福島県の主要中世城館跡

第1節 中通り地区の中世城館跡

はつちようのめじょう

1. 八丁目城

所在地 福島市松川町字愛宕山

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、空堀、土塁

概要 福島盆地の南に松川丘陵地が位置する。松川丘陵地にあっては、北側に金沢丘陵その南に水原川低地が東西に延びているが、八丁目城は金沢丘陵地帯の水原川低地に南へ張り出した、丘陵地先端地域に位置する。

八丁目城は標高251mの最高地点の平場を中心に、そこから南・東南・東方向へ延びた尾根に多くの平場を構築し、部分的に空堀が見られる。土塁は一部を除き観察できない。本丸跡と伝えられる標高251mの頂上平場の、下段には幅15~20mの帯郭がまわり、ここに愛宕神社が祭られている。

本丸跡の規模について『信達一統志』では、竪30間(約55m)、横20間(約36.3m)との記載があるが、現状では東西約40m、南北約50mの規模である。八丁目城はこの本丸跡と伝えられる平場を中心に、南及び南東、東へ延び尾根上に平場や要所に空堀を配置しており、西側は急峻な斜面に若干の段築が見られる。北側は金沢丘陵地帯へ連続しており、斜面に數ヵ所段築が見られるのみである。また平場の北端外側に空堀が観察でき、その先が自然の斜面である。

本丸跡から南へ延びた尾根上は平場が構築され、標高243.2mの東西35m、南北40mの平場とそれをとりまく数段の帯状の平場で構成されている。標高243.2mの平場の、下段平場から水原川低地を望む南先端には忠魂碑が見られる。また、2段下の平場南端は部分的に張り出しが見られ、何らかの施設の存在が想定できる。その下の斜面には段築が見られる。

本丸跡から南東に延びた尾根は、空堀と段状の平場により構成されている。その先には盛林寺が見られる。

本丸跡の下段平場をとりまく平場は、すでに述べた南へ延びた尾根先端部と、北側先端及び東側に張り出した平場を有し、特に東に延びた尾根に規模の大きい平場が張り出している。この先に空堀が見られその東側には、標高236.2mの平場が見られる。南側斜面には段築、北側には空堀が部分的に観察できる。

八丁目城のすぐ南側の水原川低地には旧米沢街道が存在している。米沢街道は、伊達氏が米沢城に本拠をかまえた天文年間以降に開かれたといわれる。米沢街道は大森城と米沢を結ぶ幹線として整備されたが、八丁目を起点としたのは天正2年(1574)に大森城主伊達実元が、二本松畠山氏の支城であった八丁目城を奪回した頃とも考えられている(『米沢街道』)。

城館の歴史 築城者を示す資料はない。八丁目城が歴史上重要な役割を果たしたのは、天文の乱においてである。天文11年(1542)にはじまった伊達稙宗、晴宗父子間の戦いが天文の乱であり、八丁目城主堀越能登守(稙宗方)は、晴宗方の畠山氏を攻撃して二本松家中を稙宗方とした。翌12年に稙宗は八丁目城に移っている。そして13年晴宗が八丁目城を攻撃している。14年3月稙宗は八丁目城を去り、晴宗方に落ちた大森城を攻撃している。和睦後、乱の原因となった伊達実元は、晴宗の息女をめとり、八丁目城を居城とした。

晴宗の子輝宗の時、八丁目城には輝宗の家臣清野備前守の子遠江守が居住し西館と称し、土合館は東館と呼ばれ備前守が隠居したといわれる(『信達一統志』『信達二郡村誌』)。

元龜年間(1570~72)に八丁目城主堀越家範の内通により八丁目城が畠山義國の手に落ちたため、実元が天正2年にこれを奪回した。

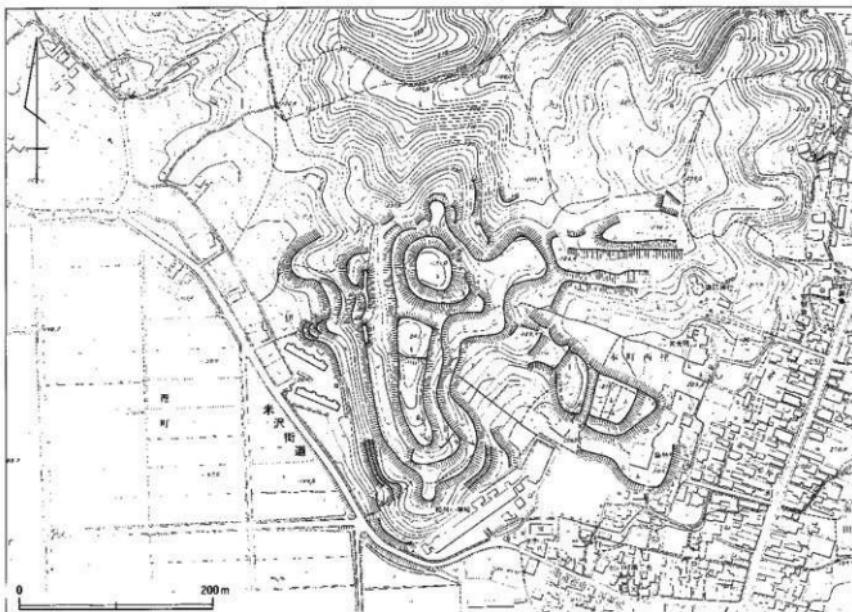
天正18年(1590)8月豊臣秀吉は黒川城に到着し、奥羽仕置を開始した。八丁目城に滞在中の浅野長政に対し、きびしい検地令を発したことは有名である。(柴田俊彰)



第1図 八丁目城位置図



写真1 八丁目城遠景



第2図 八丁目城略測図

すがのめじょう だいばつじょう よくしまじょう
2. 杉目城 (大仏城、福島城)

所在地 福島市杉妻町

築城者 伊達持宗？

時期 室町期～江戸期

遺構 水堀、土塁

概要 杉目城は、阿武隈川によって形成された河岸段丘(標高84m)上にあって、南側は阿武隈川と急峻な段丘崖をもって自然の要害とし、北から西側にかけての平坦な台地面とは、水堀と土塁を築いて絶ち切り、独立丘としての城郭を形成していた。城は明治以降福島県庁や県立医科大学等の敷地となって、大部分の遺構が失われて、その範域は明確でない。明治8年の『福島旧城之図』(福島県立図書館蔵)と、現地形との比較によってみれば、福島の旧市街本町、中町、新町、上町、北町、南町の街路と平行に走る、城の西から北側にかけての東西、南北方向に築かれた水堀、土塁は、近世になってこの城に入部した木村、本庄、本多、板倉氏などによって拡張整備をみた郭であり、もとの杉目城は北東から北西、北西から南西方向に走る水堀や土塁によって囲まれた東西約260m、南北約200mの台城であったが、対角線に沿っての南半分は阿武隈川によって、浸食され欠損してしまった。

城館の歴史 伊達松丸(持宗)は応永20年(1413)懸田定勝と相はかり、5～600騎の軍兵をもって、大仏城にたてこもり関東公方足利持氏に背いた。持氏は畠山国姓を遣わしてこれを撃たしめたが容易に落とすことができなかつたが、失火のために兵糧を失って12月落城した。天文22年(1553)伊達氏の内訌天文の乱後、伊達晴宗は牧野相模に「杉目の館めぐり」を加恩地として与えており、この頃大仏城は杉目城と改称している。晴宗は永禄7～8年(1564～65)頃家督を伊達輝宗に譲り、米沢城から杉目城に隠居し没後は近くの宝積寺に葬られた。天正19年(1591)豊臣秀吉の奥羽仕置により蒲生氏領に変わり、

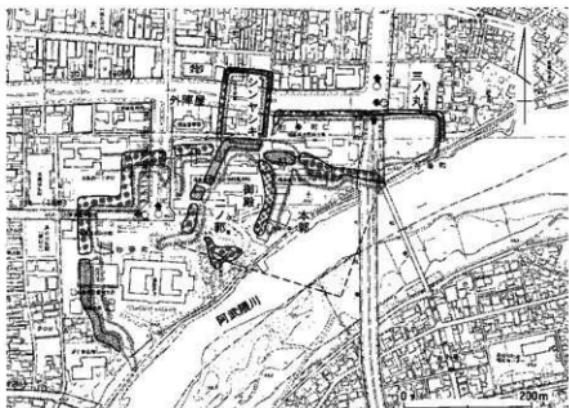
文禄元年家臣の木村吉清が城主となり、福島城と改称した。ついで上杉時代は本庄氏が、延宝7年(1679)に本多氏、貞享3年(1686)には堀田氏、元禄15年(1702)から幕末までは板倉氏の居城となった。(菊池利雄)



写真2 杉目城遠景



第3図 杉目城位置図



第4図 杉目城略測図 (安田初雄作成図)

3. 大森城

所在地 福島市大森字城山

築城者 伊達晴宗

時期 戦国期

遺構 郭、土塁、空堀

概要 大森城は福島盆地南西丘陵地帯の先端、城山(標高147m)に築かれた平山城である。

南北に延びる丘陵で、大森城の規模は東西300m南北950mである。八丁目を起点とした中世の軍事的にも政治的にも経済的にも主要街道である米沢街道が大森城の近くを通る。

『信達二郡村誌』によれば、本郭は山頂で東西40間(72m)、南北48間(86m)とされている。現在かなり削土されているが、「大森城跡」の碑が建立されている城山公園の最も高い平坦地である。その東から南、そして西へかけて空堀跡が見られる。

本郭跡北側のやや低い地域が「北館」、本郭の南方丘陵は「南館」あるいは「姫御殿」と呼ばれている。「椿館」は本郭がある丘陵の東側緩斜面にあたっている。北追手(正大門)は、信夫中学校の西から椿館、城山観音堂、北館を経て本郭へ登る道であり、揚手は滝ノ前から登るものと竹ノ内前から登るものと二つあったようである。

円通寺付近一帯を「一の構」、城山の下畠一帯を「二の構」と称し、「一の構」と「二の構」の間に武家屋敷があつて「馬場」「道場前」の地名が残っている。

城館の歴史 天文11~17年(1542~48)の天文の乱後、伊達実元、成実の父子2代が城主となり、天正14年(1586)片倉小十郎景綱が城主となった。

天正19年(1591)以降の蒲生領時代一時廃城となつたが、慶長3年(1598)上杉氏の支城となり芋川氏が城主となつた。寛文4年(1664)信達両郡が幕府領となるにおよんで、大森城は廃城となつた。

『小手澁觸記』によれば佐藤氏の末裔信夫十郎盛衡が居住したといわれるが確証はない。(柴田俊彰)



第5図 大森城位置図



第6図 大森城略測図

4. 大鳥城

所在地 福島市飯坂町字館ノ山・館

築城者 佐藤基治？

時期 平安期末？～戦国期

遺構 郭、土塁、空堀

概要 大鳥城は飯坂の市街地西部にあって、摺上川の支流赤川と小川にはさまれた、奥羽山脈から東に延びる尾根突端部の館ノ山（標高230m）と、その東麓部の舌状台地上に築かれた、東西1.5km、南北最大幅600mの略台形状をなす複郭式の山城である。館の山は南と北東部平地との比高は、それぞれ100mをこす、急峻な要害地形をなしている。

頂上部には主郭である一ノ平（100m×100m）、その西側に二ノ平（27m×21m）、東側に三ノ平（100m×80m）を配した詰の城とみられる（『信達二郡村誌』）、土塁・空堀遺構の一部が残されている。東麓の台地上には、館、赤館、中赤館、北赤館の地名が残されており、この城の根子屋郭である。東端の大門は大手口、鬼越にある縱堀状の谷地は、南側の中野村にも御荷起なる地名があり、城地への補給路であろう。

この台地は、赤川と小川によって開析された高位段丘面で、中位段丘面との比高は北側で17m、南側で34m

mの段丘崖、根子屋はこの急崖地形を要害として、構築をみたものである。

城館の歴史 大鳥城の築かれた年代や築城者等は明らかでないが、伝えによれば古代末期の保元2年（1157）に、藤原秀衡の同族である信夫庄司佐藤基治によって築かれたとされ、「生鶴一羽城」の中央に埋め本城の守護神と成す、故に大鳥城と名を負せり」とあるが、もとより伝説の域をでない（『信達二郡村誌』『信達一統誌』）。文治5年（1189）基治は奥州軍の先鋒として一族を率い、信夫郡石那坂に源頼朝軍を迎撃ったが敗れて捕らえられるが、後許されて本所に帰されたとある（『吾妻鏡』）。南北朝期においては基治の後裔、佐藤清親は後に伊勢国に移住するまで信夫北郷を本拠として活躍していることが知られており、根子屋を伴った山城といふ南北朝の様式をもつ大鳥城は、佐藤氏によって鎌倉末期から南北朝期にかけて築かれたものであろう。根子屋に残る赤館なる地名は応永年間に伊達大膳大夫政宗が、関東公方足利満兼の大軍と戦った館とも考えられる。（菊池利雄）



第7図 大鳥城位置図



第8図 大鳥城略測図

おかもとだて
5. 岡本館

所在地 福島市岡島字館

築城者 不詳

時期 不明

遺構 土塁、空堀、郭

概要 岡本館は、福島盆地東側丘陵地帯の盆地床へ張り出した丘陵先端部に位置している。この館の規模については、「信達二郡村誌」によれば東西53間(約96.3m)南北88間(160m)の山城であったとされる。

館は盆地床へ張り出した東西方向の丘陵先端部を中心構築されている。先端頂上部(標高92.7m)に東西50m×南北60mの規模を有する平場があり主郭と言える。この主郭を中心に、数段の平場がとりまいている。主郭をとりまく平場はかなり大きな規模を有している。さらにその下段に数段の小規模な帯郭が、南、西、北にめぐらされている。部分的に西側で空堀につながり、その外側に土塁が見られる。

主郭の東方に小規模な平場と思われる地点があるが、その北・南側の下段平場の状況から、本来南北方向の土塁とその外側に丘陵を分断する形の空堀が存在したと考えられる。しかしその後開墾のため土塁が破壊さ

れ、空堀が埋められ現状に至ったと思われる。

城館の歴史 「懸田史」によれば、高松近江守源定隆が正中2年(1325)4月にこの館に居住することになり、高松を名乗ったと伝えている。高松氏は、建武2年(1335)4月懸田茶臼山城に移り懸田氏と称した。

『信達一統誌』『信達二郡村誌』によれば、その後天正年間(1573~91)伊達家臣の岡本吉太夫が居住し、岡本城とも称したと伝えている。しかし、その後の館の歴史の記録はない。この岡本館の南方に近接する文知摺城には、信夫伊賀守照成が居住したと伝える。(柴田俊彰)



第9図 岡本館位置図



第10図 岡本館略測図

6. もとうちたて 本内館

所在地 福島市本内字館

築城者 不詳

時 期 鎌倉期

遺 構 郭、土塁、空堀、水堀

概 要 本内館は、鎌田館の南方約400mに位置し、古代・中世の東山道沿いに本内館、鎌田館、宮代館が見られる。

『信達二郡村誌』によれば、本内館の規模は東西二町余(220m)、南北八町余(880m)と記されている。

現在確認される遺構は、字館地内の正福寺北西端に東西・南北方向の土塁を残し、また南端にも土塁、堀跡が残存している。また字南古館の小幡八幡神社境内に東西約110mの堀と南北約40mの土塁を残す。

宝永3年(1706)の本内村絵図によれば南北五郭が確認できる。これらの点から大別すれば、字館(本内館)は南北約250m、東西約120~130mの規模で、北・西・南の三方は堀と土塁を回し、館内は土塁により三つの郭に区画されている。八幡神社を含む南古館は南北170m、東西120mで堀、土塁を回した館であったと推察され、これらの館は、同じ時期に築城されたとは考えられない(『福島の町と村Ⅰ』)。北側の南古館は堀幅、土塁の規模からみて、鎌倉時代の構築と考え、戦国期鉄砲の普及に伴い堀の拡幅と土塁の強化を図る必要から南古館を放棄し本内館を構築されたと思われる(『歴史の道』奥州道中)。

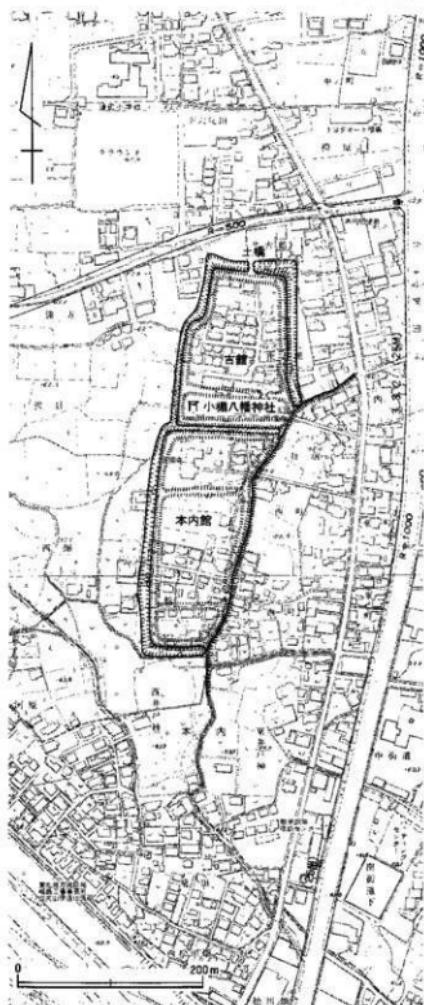
城館の歴史 『信達二郡村誌』によれば、源頼義が



第11図 本内館位置図

安倍頼時を伐った時の築城と伝えられるが証明はない。

本内館の城主、本内氏については、『伊達正統世次考』に初見、『伊達文書』からは本内相模守が天文の乱に伊達稙宗に属していたのが見える。なお、その後の本内氏については、慶長5年(1600)伊達政宗の福島攻撃に敗れ、仙台に移ったという民間伝承がある。(菊池利雄)



第12図 本内館略測図

7. 土合館

所在地 福島市松川町土合館

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、空堀、土塁

概要 土合館は、八丁目城の南東1.4km水原川北岸の氾濫原にのぞむ丘陵上に位置する。丘陵南には水原川が東流している。

南北方向の独立丘陵で館の規模は、東西130m×南北約330m程と推定される。「信達二郡村誌」の八丁目城の項には、土合館の規模について東西20間、南北30間という記述がある。

館跡は丘陵尾根上にあり、南は急峻な斜面で直下に水原川が流れる標高225.2mの最高点である。駒場稻荷神社が位置する平場を中心に、南北に平場が延びており、特に北方向に二又に平場が延びている。

標高225.2mの平場は東西50m×南北80mで、南側には空堀が見られその南に平場が見られる。北へは2つの丘陵尾根上に遺構が残るが、北西へ延びる尾根先端には腰郭を有する平場が見られる。この尾根の最高地点標高210mの平場は小規模であり、その下位にはやや広い平場が見られる。

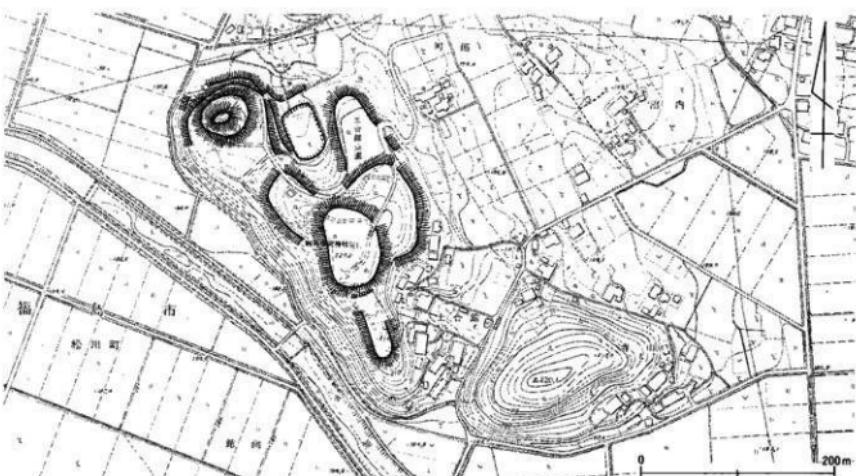
土合館全体は土合館公園としてかなり整備されているが、遺構の保存状況は良好と推定される。

北西と北方向の丘陵尾根の平坦地には、両尾根の東斜面、西斜面に接続する形で東西方向の土塁が見られ、虎口と考えられる。

城館の歴史 「信達一統志」には、「東館旧跡」として「海道より東にあり、故に東館と言へり、信達古語に清野備前守隠居す云へり」とある。「信達二郡村誌」においては、八丁目城を西館とし、これに対して土合館を東館と称したとしている。また清野備前守が隠居して土合館に居住したため、土合館を俗に隠居館と称していたとしている。(柴田俊彰)



第13図 土合館位置図



第14図 土合館略測図

8. 椿館

所在地 福島市渡利字椿館

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、腰郭

概要 椿山は福島盆地南東丘陵地の先端部に位置し、前面には阿武隈川と阿武隈川より形成された下位砂礫段丘面が広がる。

『信達二郡村誌』によれば、椿館は東西4町20間(約476m)、南北1町(110m)の規模とされた。

椿館は東西方向の丘陵(俗称弁天山、この丘陵の西端が弁天山、中東部を椿館と呼ぶ)に立地し、三つの主要な郭から構成され、規模は東西約500m、南北120mである。

『北畠頼国卿遺碑』がある椿館頂上は標高142.9mで東西50m、南北20mの平場である。

椿館の150m東に蚕祖神社が位置するが、標高145.2mの頂部に2段の平場が見られる。椿館とこの平場にはそれぞれ約10mの腰郭的な平場が数段続いている。

椿館の西300mにあたる弁天山(標高135.5m)には現在展望台があり若干形状が変更されているが、20m ×

30m程度の小規模な平場が観察できる。東側は貯水池のため原形を留めていないが、南斜面に数段の平場が築かれている。その先の斜面には「西物見」の地名があるが遺構は確認できない。

椿館の西、北は急斜面の自然の地形である。

城館の歴史 椿館については、『信達一統志』によれば岩城判官政氏が居住し、さらに「信達絵図」には持地位江守の居城とされている。

また、南朝方の北畠頼国別の別将春日侍従頼国が居城し、関城陥落に奮戦したとされ(『関城縛史』)、頼国卿の六百年祭に当たる昭和13年「頼国卿遺跡」の碑が建立された。(柴田俊彰)



第15図 椿館位置図



第16図 椿館略測図

9. 朝日館

所在地 福島市平石字朝日館

築城者 不詳

時期 不明

遺構 本郭、空堀

概要 『信達二郡村誌』によれば、本郭は南北約137m、東西約87mで空堀で囲らし、外郭は林中にあって空堀を囲らしているとされる。

朝日館は、大森城の東南約2.6kmの福島盆地南西部の丘陵地帯に位置する山城である。

現地踏査では、丘陵頂部(標高175.5m)に本郭跡と伝えられる南北110m、東西130mの平場があり、周囲には空堀が見られる。また、本郭跡の東側尾根に外郭と伝える平場が2段存在する。平場東端に空堀があり、その先は自然の地形の急斜面である。さらに、本郭跡の北側尾根にも小規模な平場が見られる。

本郭の西方200mに南北30m、東西20mの平場が見られる。北、西、南は自然の地形の急斜面であり、東は空堀で囲まれている。

城館の歴史 朝日館の築城者は明らかでないが、『信

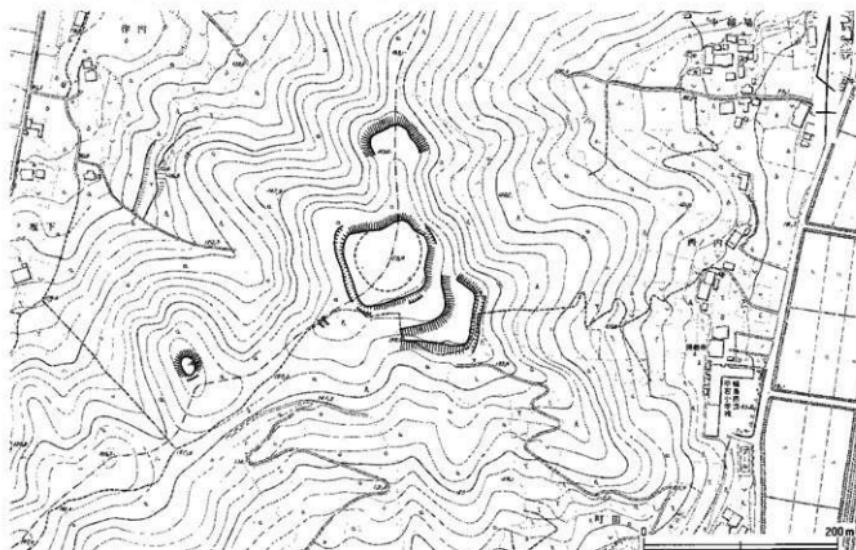
達一統志』によれば天正年間(1573~1591)に伊達輝宗の家臣遠藤駿河守の居城であったと伝えている。また、『信達二郡村誌』によれば、永禄~天正年間には遠藤駿河守が居城し、伊達政宗により攻められその後伊達家家臣となったと記している。

その後の朝日館の歴史を示す記録はない。

また、朝日館の位置する丘陵の北西約800mに所在する小倉館(鹿島館)は、大永2年(1522)頃伊達臣牧野紀伊守が居城したと『信達一統志』は記している。(柴田俊彰)



第17図 朝日館位置図



第18図 朝日館略測図

10. 鎌田館

所在地 福島市鎌田字古館

築城者 鎌田信治

時期 鎌倉期～戦国期

遺構 郭、土壘

概要 鎌田館は、近世における奥州道中の西側に平行して並ぶ、洪積台地の東端に築かれた平城である。

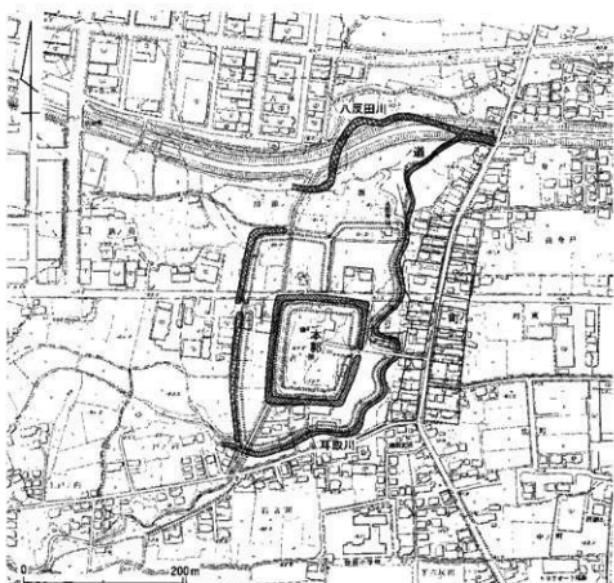
阿武隈川の支流である八反田川と耳取川の合流点の近くに位置しており、明治12年(1179)に書かれた『信達二郡村誌』によれば、「東一面ハ濠堀共ニ鋤除シテ平土ト為ス、西南北三面ハ敗墨溝猶在ス、大抵東西六十三間(113m)、南北七十七間(138.6m)」とあるが、現況は館を南から東側を取りまくように流れていた耳取川が、西の土壘外側を流れるよう付け替えられ、北側土壘の外側には農免道路が東西方向に走るなどして、水堀は現存しない。本郭跡の平場は周辺地との比高が約3mをはかり、西から南側にかけて現存する高さ3mの土壘がめぐらされていたとみられ、虎口は東側に開かれていた。明治の地籍図によれば、本郭の西側にも土壘状の地割があり、本郭をとり巻くように外郭の存在が考えられ、館は東西210m、南北180mの規模をもつ、複郭式の平地館である。館の東側は耳取川を隔てて、奥州道中沿いに並ぶ街村集落は、かつての鎌田館の小城下町に起源を持つものであろう。

城館の歴史 鎌田館は伝えによれば、弘長3年(1263)大和国の人宇野信治がこの地に移り築いたといわれ、信治は在郷の地名をとて宇野を改め鎌田と称し、建治元年(1275)没して法名を鎌秀院殿源性信大居士という(『信達二郡村誌』)。天文年間伊達稙宗と子息晴宗とが争った天文の

乱においては、嫡流と思われる鎌田四郎兵衛と、長井に本拠を移していた庶流の鎌田与総衛門は、伊達晴宗に味方して加恩に預かり、名取郡に所領をもった鎌田助六は植宗方にについて失脚した。(『伊達晴宗采地下賜録』)またこの頃四郎兵衛は杉目城の城代を兼ねたとの伝えもある。四郎兵衛の息鎌田備前某のとき伊達政宗の大崎移住に従い、鎌田郷を去り館は廃され、館跡は鎌秀院の敷地となった(『伊達世臣家譜』『信達二郡村誌』)。(菊池利雄)



第19図 鎌田館位置図



第20図 鎌田館略測図

あなたごとて
11. 愛宕館

所在地 福島市松川町水原字愛宕原

築城者 不詳

時期 不明

遺構 土塁、空堀、郭、土橋

概要 愛宕館は、水原川低地の西側に広がる山地帯の先端に位置し、館の東端部は水原川により開析された東西方向の丘陵地に位置する。

館は丘陵先端の頂上に郭部が見られ、郭を囲むように空堀がまわる。この東側は荒れ地のため遺構の概要是観察できないが、郭への虎口である土橋は見られる。土橋の西端の両側には土盛りがある。さらにその西に主郭があり、同様に土橋によって結ばれている。これらの郭を囲む空堀の規模は大きく、南斜面の空堀のみが、さらに東へ延びている。

これら郭部をとりまく空堀のさらに南側斜面には、横堀が走る。この空堀の南端には犬走りが観察できる。北側斜面には空堀は見られない。主郭をとりまく空堀の西には土塁が見られ、その西には東西方向の尾根を切断する堀切がある。この堀切の西側にも土塁が堀に沿って見られ、さらに若干の平場を形成している。その西にも堀が若干見られる。さらに西には丘陵頂上の

平坦地があり、遺構は確認できないが、何らかの施設があった可能性がある。

城館の歴史 『信夫郡村誌』によれば、愛宕館には永正年間(1504~21)加藤金兵衛が居住していたと言う。この加藤金兵衛については、水原神社由緒書、『信夫郡村誌』水原村の寺の項でも触れられ伊達家の家臣であると伝えられており。愛宕館は近接する極楽寺と共に天文の乱に機能し、加藤金兵衛もこの乱に関係した武士と推定されている。(『福島の町と村 I』)近接する極楽寺館は、天正年間伊達家臣加藤民部が居住していたとされている(『信達一統誌』)。(柴田俊彰)



第21図 愛宕館位置図



第22図 愛宕館略測図

12. 荏松田城

所在地 伊達郡飯野町大字飯野字館

築城者 伝青木修理

時期 戦国期

遺構 本郭、二ノ郭、三ノ郭、堅堀

概要 荏松田城は、飯野町の南端の安達郡東和町との町境の丘陵上に所在する。城東下の針道街道は、東安達の塩松城、小手森城に通ずる要衝の地である。

北流する不動川に沿った南高北低の自然地形を利用した山城で、東・西・北の三方面が急崖状をなす防御正面をなし、南に続く尾根が退路にあたる。上部の平坦な地形は城内で兵馬の移動も容易である。不動川は小河川のため防御性は希薄だが周囲の湿田は有力な障害となる。面積約77,000m²、本郭と現水田面との比高差は約58mである。

南端の主郭と東郭および北端の北郭とその間の半内田・館地内に侍屋敷を配する構えである。主郭は標高251.2m地点の本郭を中心に二ノ郭、三ノ郭などの曲輪を環郭式に配置し、三ノ郭東方に馬場跡といわれる東郭の段築がある。この主郭と東郭の形状が「かりまた鐵」に似ていることから城名が生じたと伝える。北端の北郭は飯野の町場や針道街道を眺望できる格好の物見台である。

北郭と主郭との間は開発が進み明確な遺構は少ないが、慶長5年(1600)編成の小手六十三騎の関金五郎の居住地があったように侍屋敷の置かれた区域であろう。同じ六十三騎の関帯刀家は城西の上荏松田地内にあり、本城周辺にも侍屋敷や有力な家が点在していた。

主郭部は、出角の構造を持つ曲輪が多く、曲輪配置とともに戦国末期の特徴が見られる。

城館の歴史 青木氏はかつて懸田氏の郎従だったが、懸田氏滅亡後、伊達実元に属したことがあり、熊野館(飯野町青木)を本拠としたという。天正年間、東安達塩松城主大内定綱の家中となった青木修理は本城を築いて居住した。

天正13年(1585)8月、修理は伊達政宗に内応して兵を挙げ、政宗の大内定綱攻撃の発端となつた。大内氏の伊達氏に対する備えとして築造されたが、その逆に伊達氏が利用した城である。(高橋圭次)



第23図 莛松田城位置図



第24図 莛松田城略測図



写真3 莛松田城近景 主郭部

13. 川俣城(御影館、臥牛城、旭館)

所在地 伊達郡川俣町大字東福沢字館山

築城者 伝桜田右兵衛尉資親

時期 戦国期

遺構 本郭、二ノ郭、三ノ郭、庭園、空堀

概要 川俣城跡は、川俣町役場の南方1.0kmに位置する館山一帯で、東西1.3km、南北1.2km、面積約90万m²と広大な城域をもつ複郭式の山城である。

標高332.7mの三角点のある本郭から眼下に川俣の市街と梁川・三春・中村街道を眺望できる。その本郭を中心に二ノ郭、三ノ郭、水の手曲輪、お庭などで構成される主郭と、空堀で区画された田村殿、北郭、南郭、西郭が外縁部を防備する構えである。

館の腰地内の通称「パンパン」は勘左堀の取水口にあたり、勘左堀は内堀と内堀的な池へ用水し防御線を形成するとともに八反田、五百田、日和田などの水田の灌漑水路を兼ねている。

本城の東面は急傾斜面の自然の地形を利用した防御正面で、湿田と丘陵の連続する西面は、館屋敷、小林殿、万所内など家臣屋敷の置かれた据手にあたる。尾根上の南端は三重の空堀を設けて城域を区画し、北流する広瀬川と田代川は

天然の堀の役目を果している。

付帶神社は、主郭に古東円寺、館稻荷宮、北郭に八坂神社などがある。

城館の歴史 戦国末期の川俣地方(小手郷)は、伊達氏領南端にあたり、東は相馬氏領、南は東安達大内氏領に接していた。川俣城は、伊達政宗の仙道制覇の重要な拠点として天正12年(1584)頃に政宗の武将桜田資親が築城したと伝える。天正13年8

月政宗の大内定綱攻めの川俣本陣であり、城中の「田村殿」は田村清顕の使者をもてなした施設跡であろう。その後、相馬氏に対する国境警備の要衝として桜田資親が在城していた。

天正19年伊達郡も蒲生領となるに及んで桜田資親も宮城県吉岡へ移る。慶長5年(1600)7月伊達政宗の白石城攻めと同時に桜田基親(資親の子、駒峯城主)は上杉景勝の守将安田某の守備する川俣城を攻略し、小手郷を蹂躪して撤退する。白石城攻めを有利に導いた陽動作戦であった。(高橋圭次)



第25図 川俣城位置図



第26図 川俣城略測図

14. 城ノ倉城(河俣城)

所在地 伊達郡川俣町飯坂字城ノ倉

築城者 不詳

時期 鎌倉期末～戦国期

遺構 主郭、出館、土塁、空堀

概要 県立川俣高等学校の所在する台地とその北方の山塊一帯が城ノ倉城跡で、三百川(壁沢川)・広瀬川と切通し(現町道頭陀寺線)で区画された区域が城域をなす。城下の梁川・相馬街道は、伊達・相馬・田村氏の本拠地に通ずる要路で極めて要衝の地に位置している。

明確な遺構は、山頂部の主郭と諏訪神社周辺及び関場地内の切通しの段築があげられる。主郭は、折重を加えた空堀と通路に囲まれた、標高290mから山頂の314m地点にかけて自然の地形を利用して、東西に梯形状の曲輪を配置する。頂上平場と西曲輪は江戸時代の軍学者のいう、『呂』の字形式である。

城西の五安館は、往時本城と地続きであったが、寛永年中(1624～1643)の洪水で河道が変わったと伝え(『小手風土記』)、本城の根子屋的な出館といえよう。城東の頭陀寺は敵を挾撃する外郭的役割をなし、計画的に配置されたことが、『桜田家系・合戦記』から窺える。

城館の歴史 南北朝抗争期の延元元年(1337)北党勢の拠る河俣城を相馬胤平が攻落し南党の拠点となっていたが、貞和3年(1346)北党的畠山国氏勢に攻略された。当時の城主については明らかでない。

室町幕府と鎌倉府の対立時には、幕府方の陸奥国諸将に河俣氏(正長元年:1428)川俣守驥入道(永亨10年:1438)の名がみえ、川俣を領し本城に居した武将であろう。

時は下り岩瀬二階堂氏が川俣を領し、草野氏が在城していた応仁2年(1468)、桜田宗綱は伊達成宗に命ぜられ本城を攻取る。以来桜田氏は伊達家宿老に列せられ本城に居す。

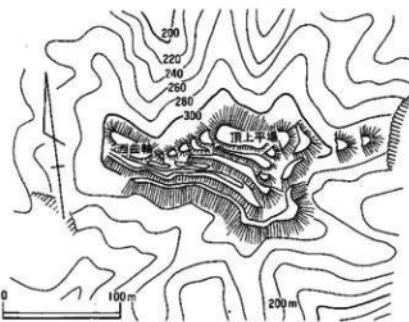
天文乱中の天文16年(1547)に桜田

親茂が戦死し、桜田氏は本城を離れるが、永禄11年(1568)桜田資親が旧領の川俣に復し、天正12年(1584)頃、資親は川俣城を構築し本拠を移す。

その後、上杉景勝方の小手六十三騎が本城で戦功をあげている。おそらく慶長5年(1600)の桜田基親の川俣侵攻時の合戦と推定される。(高橋圭次)



写真4 城ノ倉城遠景



第27図 城ノ倉城主郭略測図



第28図 城ノ倉城略測図

こおりにしやまじよう
15. 桑折西山城（県史跡）

所在地 伊達郡桑折町万正寺字本丸・中館・西館

築城者 不詳

時期 室町期

遺構 郭、土塁、石塁、空堀、井戸

概要 桑折市街地の北西約1km、奥羽山脈から東に延びた支脈突端の高館山塊と、その南東山麓部を範域とした東西約1km、南北約1.8kmの、複郭式の平山城である。この山塊を北側から東側にかけての山麓を深く浸食した産ヶ沢川が、城地を大きくとり囲む形で天然の外堀となり、稜線上には東から高館（標高193m）、中館、西館、そして南に折れ常陸、常陸館と続く郭を築きこれを巨大な城壁に見立てている。

東部外郭線は、産ヶ沢川西岸の段丘崖で比高は場所によって異なるが、大椎（県天然記念物）附近の的場では約10mをはかり、糺迦堂など南にいく程減していく。これらの山々と段丘崖に囲まれた内懐の地が根子屋で、化粧道、坂町などの地名がある、伊達氏の屋形や家臣の小城下町の形成がみられ、伊達五山の一つである觀音寺が残されている。

大手口は明星板を降り産ヶ沢川にかかる大橋を渡った所に、搦手口は西館と常陸との間の平沢への越口（現常称寺前）北側の内馬場への川端郭口（城門の石垣跡が残されている）などである。水ノ手は中腹部の湧水や現存する石組枠をもつ井戸群が考えられる。本郭とみられる高館は東西330m、南北200m、北側高所の平場を中郭とし、その両袖に東郭（砲台場）と西郭が張り出し、その間に大手門を構えた馬蹄形状の館造構で、土塁や空堀は堅固に築かれ北側から東側南側にかけての三方は自然の急崖をなす要害地形で、西側は唐沢を隔てて中館と対応している。中館と西館とは空堀で断ち切られ、互いに独立した郭を形造っており、平場の整備情況は中館が優れ北西の角は土壇状で一段と高い。西館の南側には小規模な舟形を張り出して虎口が構えられ、外堀の外堤や土塁上には石塁が築かれるなど、この地方の中世城郭としては、あまり類例をみない。城の搦手に通じる团子沢、鹿野沢、糸沢川や産ヶ沢川の谷口部、城の裏手には成田西館、成田古館、元屋敷、仲城、上城、駿河館、川端館や輪王寺館等が築かれて、

敵の侵攻にそなえていた。

城館の歴史 桑折西山城の起源は明らかでないが、『万正寺村誌』（『信達二郡村誌』明治14年刊）によれば、伊達常陸入道念西が文治5年（1189）奥州合戦の戦功として、源頼朝より伊達郡を賜わり関東より下向、居城としたのが始まりと伝えられるが、山城が一般化し普及をみると南北朝期頃からといわれ、疑問がもたれる。応永7年（1400）伊達大膳大夫政宗は、関東公方足利満兼に背いて赤館にたてこもり、関東管令上杉氏憲等の大軍を迎撃、いったんはこれを追い返して大敗させるが、同9年にいたって政宗は降伏した。この赤館は西山城と伝えられる（『余目氏旧記』、『鎌倉大草紙』）。天文11年（1532）伊達稙宗は梁川城から西山城に移り、陸奥国守護の府城となり、同5年には伊達氏の分国法『塵芥集』の制定をみている。天文11年（1542）6月、伊達稙宗は突如嫡子の伊達晴宗に捕えられて、この城に幽閉されこれを契機として、伊達氏の内紛「天文の乱」が起り、南奥羽の諸大名と家臣を二分する大乱へと発展する。稙宗には娘姫である相馬頤胤、蘆名盛氏など、大名や国人衆の多くが味方したのに反し、伊達家中は晴宗方が優勢であった。12年8月稙宗方は晴宗の護る西山城に攻撃をかけたが、成功しなかった。15年頃になると信達両郡においては稙宗方は優位に立ち、晴宗は西山城を支えることができず、脱出して白石城に逃れ稙宗は西山城を回復した。翌16年になると蘆名氏が晴宗方に転じたのを機とし、乱の末期においては晴宗は優位を取りもどし、親戚諸大名の仲介と將軍足利義輝の命令で和睦した。17年稙宗は伊具郡丸森城に隠居し晴宗は家督を相続し米沢城に移り、講和の条件として、西山城は破却された（『伊達正統世次考』）。延宝7年（1679）本多忠国が福島十五萬石に封じられ、西山城跡の西館に築城を計画したが、姫路城へ移封となり実現をみなかつた。（菊池利雄）



第29図 桑折西山城位置図



第30図 桑折西山城略測図



第31図 桑折西山城西館・中館実測図

西山城跡詳細分布調査報告書（桑折町教育委員会）より転載



第32図 桑折西山城全体図

*西山城跡詳細分布調査報告書（桑折町史書委員会）より転載

16. 伊達崎城

所在地 伊達郡桑折町伊達崎字東館、西館

築城者 伊達(伊達崎)実綱

時期 鎌倉期～室町期

遺構 郭、土塁、水堀

概要 伊達崎城は、阿武隈川の氾濫原をみおろす河岸段丘上にあって、南側は氾濫原との比高が12mある急崖地であり、城は東館と西館との二館に分かれ、規模は西館が東西約100m、南北約120m、東館は東西約170m、南北190mほどである。西館は方形状に水堀と土塁がめぐらされており、土橋によって水面が保たれている。水堀の幅は約10m深さは不明、土塁は幅約10m高さは約6m程度で、西側から北側にかけての保存状況は良好である。東館は東と南側が急崖地、北側は式部坂と呼ばれる切通し状の浸食谷で、その内側には土塁が築かれていたとの伝えがあるが、現存しない。式部坂をはさんでの、対岸地も郭状をなした砦であろう。大手の虎口は東館の南側切崖面を斜めに上がる古い坂道があり、切通し状に郭内に通じる所であろう。搦手口は北側や西側に構えられていた。伊達崎城を東端とし、桑折氏の居館播磨館を西端とする、一直線に延びる川岸段丘崖は幾筋かの浸食谷によつて分断され、小館、古館、下郡山館、文吾館、左衛門館、神十郎館など、地元では七沢八館と呼ばれる館が立ち並んでおり、伊達氏の本城桑折西山城前衛の拠点として、支城群を構成していた。

城館の歴史 文治5年(1189)の奥州合戦に参陣した伊達朝宗は、戦功により源頼朝より伊達郡を賜わり、本拠地を開東の地よりこの郡に移した。六男の実綱は伊達崎氏を称して、その居館として築かれたのが伊達崎城であろう。創設時の城は、西館の部分と考えられ一辺が100mの方形平地館であったが、勢力の拡大に

ともない、東館を築き城地を拡張した。

伊達崎氏はのちに本家の伊達氏と姓が混同されるとして田手氏に改めている。伊達氏の内乱天文の乱では、田手実烈は伊達晴宗について戦い、実烈の子田手宗光は相馬氏に対する備えとして、伊具郡角田城に移され天正の末年におよび、伊達崎城は本實地の城として保持していたと思われる。(菊池利雄)



写真5 伊達崎城遠景



第33図 伊達崎城位置図



第34図 伊達崎城略測図

17. 播磨館

所在地 伊達郡桑折町字庫場

築城者 桑折親長

時期 鎌倉期～戦国期

遺構 土塁、空堀

概要 播磨館は桑折の市街地の南、阿武隈川氾濫原に臨む川岸段丘上に位置し、南側の眼下には国道4号線が通っている。東西の両側は深い浸食谷、南は氾濫原との比高が24mに達する段丘崖であり、館はこれらの急崖地に囲まれた舌状台地上にあって、北側の台地とは土塁と空堀によって断ち切られ、独立丘としての城郭を形成している。明治の地図から読み取れる館の規模は、東西120m、南北210mで、中程に掘られた東西方向の空堀によって、南側の本郭と北側の二ノ郭に区画されており、両郭は土橋によって繋がっていた。現存する館の遺構としては、空堀と本郭北西角の土塁が残されているのみで、蔵場団地など住宅地となって館跡景観は失われつつある。本郭の北側約200mにある伝来寺の地は、一辺が100mの単濠単郭式方形平地館で、本来は桑折氏の居館であったとみられ、播磨館は南北朝の動乱期をむかえて、詰の城として築かれたものであろう。

城館の歴史 桑折氏は伊達義広の庶長子親長を祖とし、桑折郷に住して在郷の地名を姓とした。南北朝期における桑折政長ははじめ南朝方であったが、のち統領家の伊達行朝に背いて足利尊氏に属し、文和元年(1352)佐々川で戦死をとげている。降って伊達稙宗、晴宗父子が争った天文の乱(1542～1548)においては、桑折景長は中野宗時と晴宗を助けて勝利にみちびいた。永禄2年(1559)伊達晴宗は奥州探題、景長の長子桑折貞長は守護代に捕任されており、播磨館の館名は宗秀・景長・貞長等の官名、播磨守によって呼ばれたものであろう。貞長の子桑折宗長は伊達

輝宗、政宗父子に仕え、相馬の役などに戦功を挙げ晩年は点了齋と号した。天正19年(1591)伊達政宗の国替に従い播磨館を去って江刺郡岩谷堂要害(現岩手県江刺市)に移った。近世の幕領支配下における桑折近村の年貢米は、館跡に建てられた留藏に集められ、南の桑折川岸から積み出しきれ阿武隈川によって江戸へと廻米された。(菊池利雄)



第35図 播磨館位置図



第36図 播磨館略測図

18. 長倉館

所在地 伊達郡伊達町字館ノ内(旧長倉村)

築城者 不詳

時 期 室町期～戦国期

遺 構 土塁、水堀

概 要 長倉館(標高60m)付近の西根台地は、摺上川の開析をうけて志和田の集落が載る低位段丘面と、館の立地する高位段丘面とに区別され、両面の比高差は約3mをかる。段丘崖の下に鍛治谷川が東流しており、館はこの段丘崖と鍛治谷川沿いの湿地帯を要害として、構築をみたものである。

明治の地籍図による長倉館は東西140m、南北130mの規模をもつ、単濠単郭式の方形平地館である。

幅5～20mの環濠をめぐらし、その内側には幅10～20mの土塁が築かれ、北西の残堀から想定される高さは、約3mほどである。館の東側中央部には土塁が喰違い状に交差する虎口が構えられ、土橋によって館外へと通じていた。西側の堀を隔てた対岸(現伊達小学校敷地)にも土塁状のものが描かれ、郭の存在も考えられるが、北と南側の地割が明確でなく後考に待ちたい。

館の遺構は、明治期における東北線の鉄道敷設に土塁の土が運ばれ、最近は住宅地に開発されるなどして、残堀などにわずかな痕跡をとどめているに過ぎず、長倉館の遺構は失われてしまった。

城館の歴史 長倉館は源頼義が阿部貞任を征する時

宮代城(福島市宮代)を築き、貞任はこの館を築いて戦いし所とされるが、もとより伝説の城をでない(信達二郡村誌)。

『余目氏旧記』によれば、応永7年(1400)伊達大膳大夫政宗は一族の長倉入道と謀って関東管領足利満兼に背き、桑折西山の赤館と長倉館に撲った。満兼は新田の岩松氏に大軍を授けて攻めさせたが大敗した。同年9月使河原兼貞を大将とする大軍が再び、赤館、長倉館に攻め寄せたが、一騎も残らず討ち取られ兼貞は捕らえられた。その後満兼は上杉氏憲に命じて、大軍で討伐に向わしめ政宗等は降伏したとある。戦国期においては在郷の地名を姓とした、伊達家臣長倉氏の居館として推移したと考えられ、天正19年伊達氏の大崎移封にともない廃城となった。(菊池利雄)



第37図 長倉館位置図



第38図 長倉館略測図

いしもだじょう 19. 石母田城

所在地 伊達郡国見町石母田字館ノ内

築城者 不詳

時 期 鎌倉期～戦国期

遺 構 郭、土塁、水堀、

概 要 石母田城は、宮城県との境界をなす長嶺の南麓が、平野部に移行する標高77～85mの、緩傾斜地上に立地する複郭式の平城である。本郭は東西100m、南北120mの略四辻形状をなし、周囲には堅固な土塁（幅約20m、高さ4～6m）と内堀（幅8～12m、深さ2.7m）、丸堀、外堀がめぐらされ、西から北側にかけての台地面とは、深い堀切によって断ち切られて独立した城郭を形成しており、南西の隅は櫓場跡との伝えがある。外郭である二ノ郭は本郭の南側に、三ノ郭は二ノ郭の南から本郭東部にかけての地域で、土塁と外堀がめぐらされており、館前、横町、町端の旧地名の存在からみて、家臣團を郭内の町屋敷に集中さすなど、「総構」とも称すべき繩張りである。

外郭から本郭へ通じる二ヶ所の虎口は、内堀の中に小規模な馬出し郭を構え、土橋、掛橋によって結ばれていた。外郭から城外に通じる的場、出溜、荒町、西の虎口は、通路となる土橋を挟んで外堀は、堀一本の幅で喰違い状に交差し、枠形を構えた堅固なものであり、本郭を含めた城全城の規模は東西210m、南北250m、総面積620aと広大なものであった。城地は地形的にみて南側が低い関係上、水堀の高低差を調節するため、虎口部の土橋を含め8ヶ所に設置されていた。石母田城の築城者、築城の時期等は明らかでないが、最初の形態は現在館ノ内と呼ばれる部分と考えられ、鎌倉時代に築かれた単濠単郭式の平地館で、戦国期にいたって伊達家中における、石母田氏の勢力増大にともない、二ノ郭、三ノ郭をもつ、複郭式の城郭へと発達を遂げている。城の繩張りについてみれば、大和繩の手法がとりいれられ、横矢懸けの施設である屏風、出角、入角、枠形、歪等が各所にみられ、総構えなど戦国期の改修の跡がいちじるしい。堀水は200mほど西を流れる西沢川より取水されており、堀は城の防御力を強化するという本来の目的ほかに、下流地に広がる領主自身の手作地や、在家農民の耕作する水田の灌漑

用に充てられており、最近まで内堀は溜井として、下流の出溜、姫作などに灌漑される、水利慣行が残されていた。また城地には石母田石と呼ばれる石があつて、天正19年石母田景頼が国替の際に、代石を残して持ち去ったといわれ、「此石転倒ノ時ハ村中変事ノアリトテ崇敬恐怖ノ由申伝ト云フ。」（『石母田正統家譜考証類聚』）とある。

城館の歴史 城主の石母田氏は、家譜によれば甲斐源氏の出自、伊達氏譜代の家臣で石母田光頼以前は不詳とされる。天文11年（1542）伊達晴宗は、桑折西山城に父伊達稙宗を幽閉したことから、伊達氏の内紛天文の乱がおこった。稙宗はまもなく救出されて石母田城に移り稙宗党の拠点となった。翌12年5月稙宗は娘婿懸田後宗の懸田城に移ったが、翌13年8月後宗の一部家臣は晴宗に通じて反乱が起り、稙宗は再び石母田城に移った。10月再び稙宗方の本拠となった石母田城は、晴宗方の総攻撃を受け、20日には攻込まれて外郭が焼きはらわれた。稙宗は遁れて堀越氏による信夫八丁目城に入り、石母田城は落城したが、この時の城主名は明らかでない。

この時期における、石母田氏の所領分布情況を石母田郷についてみれば、石母田城のすぐ西の樋口在家は中津川大善領であることから、石母田氏の一円知行ではなく、この郷の中央を南流する西沢川からの東側が支配地で、城はその中央部の高所にあって、灌漑水の配分等水利権の掌握しやすい地点に立地し、所領支配と開発の拠点としていた。永禄7年（1564）6月田手（伊達崎）宗光と晴宗の息子伊達輝宗との対立を調停するため、米沢城から石母田城に出向いた晴宗は、輝宗の攻撃を受ける事件が起こっている（『伊達正統世次考』、『伊達晴宗采地下賜録』）。

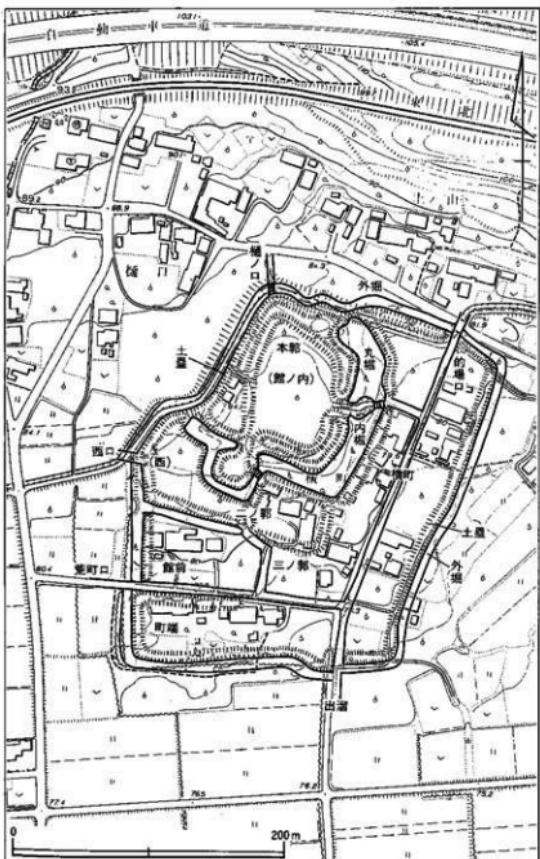
天正18年（1590）10月、伊達政宗が石母田景頼に宛てた書状の中に、「城の儀は定めて破却となすべき候条……」とあり、石母田城は廃され、翌19年景頼は伊具郡高倉の荒山城に移った（『桑折文書』）。（菊池利雄）



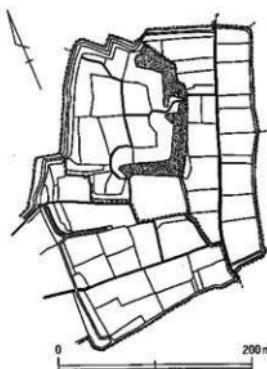
第39図 石母田城位置図



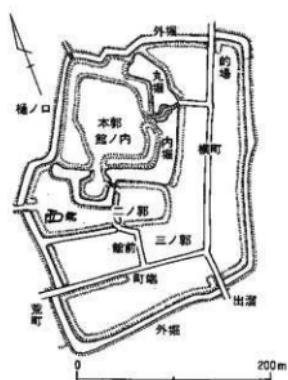
写真6 石母田城近景



第40図 石母田城略測図



第41図 石母田城周辺（字切図より）



第42図 石母田城略測図

20. 藤田城

所在地 伊達郡国見町山崎字北・南古館

築城者 不詳

時 期 南北朝期～戦国期

遺 構 本郭、虎口、樹形、土塁、空堀

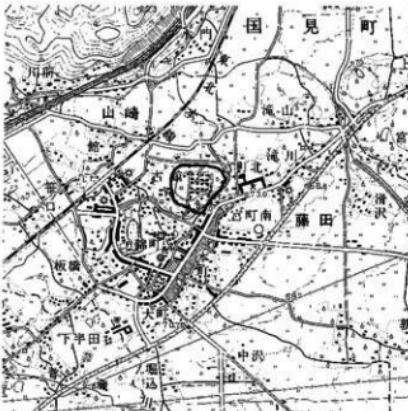
概 要 藤田城は、藤田市街地の北西源宗山（標高99m）と呼ばれる独立丘陵上にあって、周辺部平地との比高は北側で12m、東南部の市街地とは26mをはかる。山頂の平場が本郭で一辺が約180mの変則な方形状を呈し、その中央部に60m四方の内郭が構えられていた。本郭の周囲には土塁と空堀がめぐらされており、明治の地籍図による土塁幅（切崖面を含む）の読みでは、1間～4間（1.8～7.2m）と規模は大きい。空堀については昭和61年に国見町教育委員会で行った発掘調査によれば幅約8m、深さは不明、北西と南東（水道貯水槽所在地）の角には、樹形が構えられていた。本郭の東と南・西に広がる平場には郭が置かれたと考えられ、水霊神社の裏手からは、建物の柱穴群が検知されている。虎口についてみれば、本郭の南・北古館の境界の両端にあるのは切通状で南北朝頃の古い形式のもの、北から西側にかけての空堀外堤が北西部樹形付近で、噴違い状に交差し、搦手口の虎口となり堅堀を伝わり城外に通じていた。城は本郭の虎口の形式から南北朝以前の築城とみられる一方、樹形・噴違い虎口など横矢懸けの繩張りは、戦国期における大規模な改修の跡とみられる。

城館の歴史 藤田城は源宗山とも呼ばれ、文治5年（1189）8月阿津賀志山の戦いに、源頼朝が藤原国衡軍を攻撃する鎌倉軍の指揮にあたつた所との伝えがある。

南北朝期における藤田城は、奥州南朝軍の本拠地豊山城の有力な支城であったため、貞和3年（1346）8月、奥州北朝軍を総動員した吉良貞家の軍

勢に攻められて落城した。

この戦いには、伊賀盛光、国魂行泰、真壁政幹、石川親光や、遠く和賀郡の鬼柳氏なども参陣し、奮戦したことが知られるが、藤田城主については明らかでない。南北朝期以降における藤田城は、中断の時期はあっても伊達氏の一家、藤田氏が城主であったとみられる。なお、藤田古館、山崎小館は藤田城の根子屋とも考えられる。（菊池利雄）



第43図 藤田城位置図



第44図 藤田城略測図

21. 阿津賀志山防壘(国史跡)

(阿津賀志館〔橋〕)

所在地 伊達郡国見町石母田、大木戸、森山、西大枝、内谷

築城者 藤原泰衡

時期 平安期末 文治5年

遺構 土塁、空堀、郭

概要 阿津賀志橋は、藤原泰衡が奥州に攻めくだる源頼朝軍の進攻を阻止し、迎撃するために古代の官道である東山道が伊達駅(現桑折町)から北に延び、篤信駅(現白石市)に通じる駅路沿いに、伊達郡と刈田郡の境界をなす阿津賀志山一帯の地に築かれた要害で、橋名のおこりは「延喜式」や「倭名抄」にみられる刈田郡の篤信郷、駅に由来したものであろう。

『吾妻鏡』の文治5年(1189)8月7日の条にみられる、「阿津賀志山に於て、城壁を築き要害を固む、国見の宿と彼山との中に、俄かに口五丈の堀を構へ、逢隈河の流れを堰入れて柵とし、異母兄西木戸太郎国衡を以て大将軍となし、金剛別当秀綱、その子下須房太郎秀方己下二萬騎の軍兵を差し副ふ。凡そ山内三十里の間健兒充满す。」とあり、口五丈の堀とは地元では「二重堀」と呼ばれる、国史跡の「阿津賀志山防壘」。橋最前列の防禦線で、厚摩山中腹(標高170m)を始点とし、山麓部を一直線状に平地に下り、さらに滑川右岸の川岸段丘上に沿って、阿武隈川の旧河道が段丘崖に接岸する石田に至る、約3.2kmにわたって帶状に連続する遺構である。従来は全長にわたって二重の空堀と三重の土塁からなっていると考えられてきたが、昭和46年と54年に福島県教育委員会が実施した発掘調査から、大木戸の段ノ越や、出郭である森山の中島では一重部分の堀も検出され、幅も『吾妻鏡』にいう口五丈(15m)とほぼ一致している。堀の深さは1.5m~2.8mの薬研堀であり、阿武隈川の流れを堰きいたるとあるが、台地上にある防壘と氾濫原上を流れる川との段差からみて、不可能であろう。国衡の本營が置かれた大木戸の位置は明らかでないが、堅固な柵をもって橋の中を通過している東山道を遮った木戸をさすものと思われ、さらにこれら施設の東西と後方の山地には、光明寺の東越館、刈田郡越河(現宮城県白石市)の虚空蔵館・深山館・

湯ノ倉館・石母田の山館・陣場館・内谷の花館・大子平砦や石母田の辨形・守ノ山・東大枝の物見山などの砦や物見台群が配されており、この橋の搦手や間道を山越えに、東山道を迂回して北に進出する鎌倉軍に備えた。

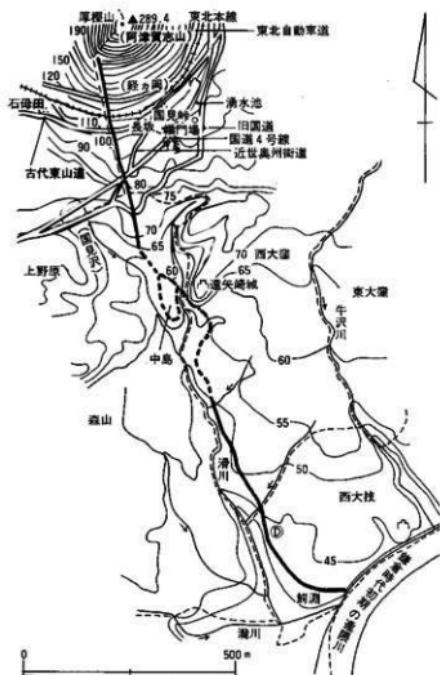
一部未完成の部分もみうけられるが、山内三十里(現20km)という奥州藤原氏の存亡を賭けた遠大な構想に基づいて構築をみた橋遺構である。

城館の歴史 文治5年(1189)源頼朝は、奥州平泉の藤原泰衡を討伐するため、全国から動員した御家人28萬4千騎を、仙道・北陸・東海の三方面軍に分け、畠山重忠を先陣とした仙道軍は頼朝が自らこれを率いて7月17日鎌倉を出発し、29日には白河の関を越え、8月7日伊達郡の藤田(国見)宿に着陣した。一方この事あるを察知していた泰衡は、阿津賀志山に堅固な城塞(橋)を築き、庶兄藤原国衡を総大將に奥羽の精兵2萬騎を配して迎撃の態勢をとった。7日夜頼朝は明暎を期して敵方の攻撃を指令し、畠山重忠はこれに備えて從軍させてきた鎌鉄を持った人夫80人に命じて、土石を運び、敵陣前の大堀を埋めさせて突破口をつくり明日の戦いに備えた。翌8日の早朝、藤原軍は金剛別当秀綱の率いる数千騎は、阿津賀志山の前に陣した。頼朝は畠山重忠、小山朝光など大軍を遣わして戦いを開始させて猛攻を加えた。秀綱らは防ぎかねて己の刻におよび退却し、敗北の旨を大木戸の国衡に報告した。一方信夫庄司佐藤基治も一族を率いて石那坂に出陣し、鎌倉軍と戦ったが、常陸入道念西の子息為重・資綱らの奮闘により、基治以下の將18人は打ち取られ、阿津賀志山の経ヶ岡に梶首された。9日両軍の戦線は膠着したが、夜に入って明朝阿津賀志山を越えて合戦する命が下されてそれぞの部署についたが、三浦義村らの数騎は抜け駆けして木戸口に近づき、敵数人を打ち取った。10日早朝頼朝は大軍を率いて木戸口に迫ったが、藤原軍の護りは固く容易に抜くことができなかつた。この時昨夜來藤田宿より安藤次を道案内とし、鳥取越から迂回して、国衡が後陣の山に達した小山朝光ら7騎が、ときの声を発し矢を飛ばした。城中は搦手より敵襲と称し大騒動となり、国衡以下は戦意を失って敗走し、秀綱と子息の下須房秀方は討ちとられて、鎌倉軍の勝利に歸した。この戦い以降泰衡は組織的な

反撃を試みることなく、平泉は陥落し9月3日には家臣の河田二郎に殺されて藤原氏は滅びた。源頼朝は鎌倉幕府の支配のおよばない、奥羽の地を掌握して奥州合戦の目的をはたした〔吾妻鏡〕。(菊池利雄)



第45図 阿津賀志橋周辺図 (1/50,000)



第46図 阿津賀志山防墾要図

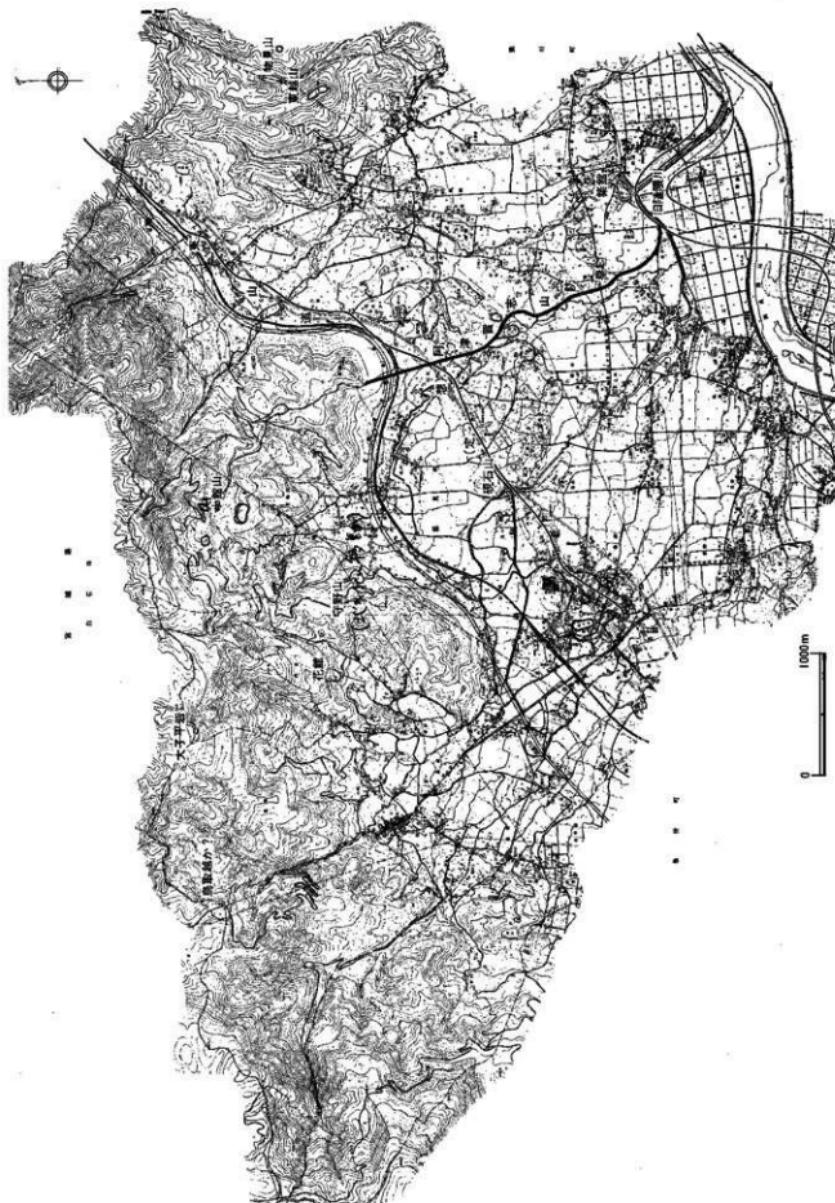
倉幕府の支配のおよばない、奥羽の地を掌握して奥州合戦の目的をはたした〔吾妻鏡〕。(菊池利雄)



写真7 阿津賀志山防墾 (昭和30年頃)



写真8 阿津賀志山 (山腰に防墾が見える。昭和17年)



第47図 阿津賀志山館位置図及び関連遺跡分布図

かながわじよう

22. 梁川城（県史跡及び名勝）

所在地 伊達郡梁川町字鶴ヶ岡、桜岳

築城者 不詳

時期 鎌倉期～江戸期

遺構 郭、土塁、空堀、水堀、庭園

概要 梁川城跡は広瀬川が福島盆地に流れだす谷口部、阿武隈山地から西に延びた支丘の突端部（標高57m）にあって、氾濫原との比高は約12mほどである。現存する近世の梁川城絵図や地籍図から想定される城の範域は台地上ばかりではなく、氾濫原上の梁川市街地にも拡がる、南北約650m、東西約400m、本郭を中心多くのが連なる梯郭式の台城であるが、近世のはじめ蒲生氏や上杉氏が関ヶ原の合戦を前にして、大改修を行っており、中世伊達氏時代における梁川城の規模は明確ではないが、台地上の部分がその範域であったとみられる。現在心字の池に巨石を配した庭園遺構が復元された、梁川小学校の敷地が本郭で、その南と北の地続きに二ノ郭、三ノ郭が構えられ、それぞれの郭に水堀と土塁がめぐらされていた。城の南側を流れる広瀬川の約15mの断崖と、西側の氾濫原との比高が12mほどの切崖は、強力な防御線であるが、北側と東側は平坦な台地面で防備上の弱点となっており、このため北三ノ郭の外側には幅18m深さ5.4mの七ヶ井戸（外堀）と幅20～28m、高さ約6mの土塁、南二ノ郭の東部には幅27m、深さ4mの金沢堀と幅27m高さ5.5mの土塁を築いて断ち切り、独立丘としての城地を形造っており、西側の切崖下にも水堀が堀られていた。

傾斜地に堀られた水堀は水位を一定に保つために、土橋が掘り残され郭内へと通じる虎口の一部をなしていた。大手の虎口は古い城下の地名町頭が残る、北東部の馬出し郭に構えられ、七ヶ井戸を掛け橋によって北三ノ郭に通じており、現在の市街地には右城（後）町地名のあることから、西側から南側の虎口が掲手口であろう。本郭や南二ノ郭の虎口は土塁を切通した古い形式を残しているのに対し、北三ノ郭虎口部の大規模な樹形など、横矢懸りの施設は近世初頭における改修の跡とみることができよう。

本郭や北三ノ郭跡については、発掘調査が行われて、

中世における堀立柱と礎石をもつ建物群や、多数の古銭・青磁・古瀬戸・茶臼などが出土している。南東方向700mの山地（標高90m）には梁川城に面してのみ、土塁のみられる茶臼山館があり、梁川城の詰の城として築かれたと考えられる。

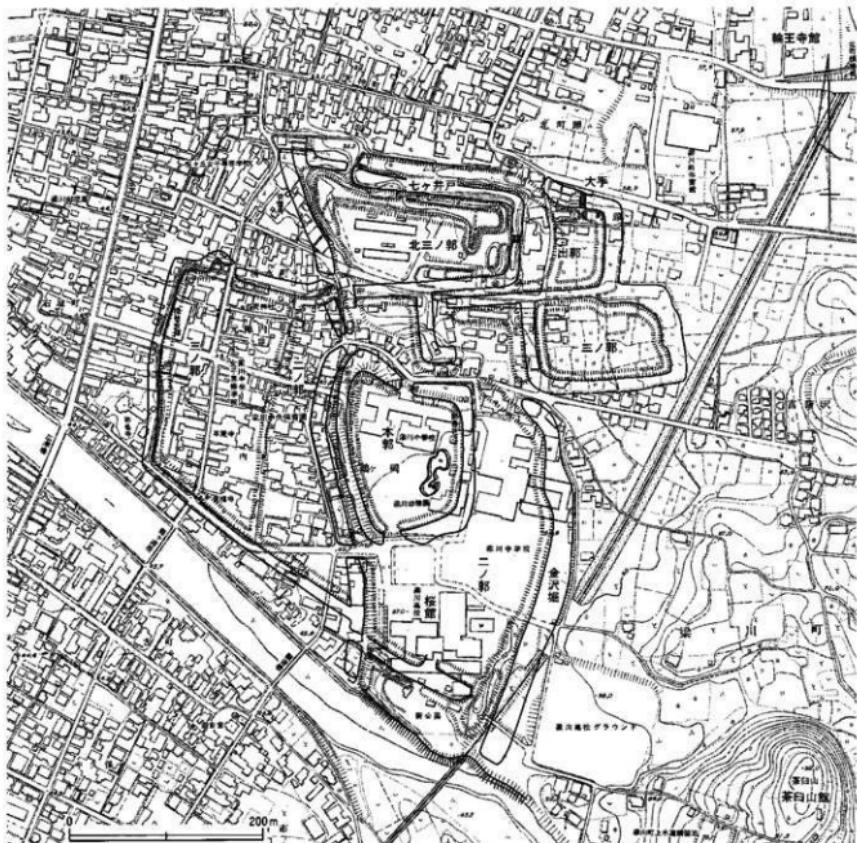
城館の歴史 梁川城は伊達氏の始祖常陸介念西朝宗によって築かれたとか（『信達二郡村誌』）、三代義広が築いた栗野大館（『伊達正統世次考』）を、梁川城とする説もあるが、平山城的な形態をもつ梁川城の本郭は、鎌倉末期から南北朝期にかけての平地館から山城へと移行する中期の台城とみることができる。応永20年（1413）信夫大佛城で、関東公方足利持氏の軍と戦い、敗れた伊達持宗は梁川城に移り、応永33年には梁川八幡宮を造営し、嘉吉元年（1441）上町に祖母蘭庭禅尼の菩提寺として輪王寺を建立しており、伊達氏の居城として梁川城は整備されていったとみられる。文明15年（1483）伊達成宗は梁川城より上洛し、將軍家足利義政、義尚父子をはじめ幕府の要人等に対する、膨大な進物に都の人々を驚かしたといわれ、長享2年（1488）には奥州探題大崎義兼は家中の内訌のため、成宗をたより梁川の地に逃れきている。大永2年（1522）伊達稙宗は陸奥国守護職に補任されて、梁川城はその府城となり奥羽の中心地として重要な位置を占めるにいたったが、天文元年（1532）稙宗は本拠を桑折西山城に移した。天文22年梁川城は伊達晴宗の弟宗清に与えられ、梁川氏を称したが、天正19年（1591）豊臣秀吉の奥羽仕置により、伊達政宗は大崎岩手山城に移り宗清は梁川城を去った。ついで梁川城は蒲生氏郷の家臣蒲生喜内に与えられるが、慶長3年（1598）この地域が上杉景勝領になると、梁川城は須田長義が城代となつたが、寛文4年（1664）上杉氏の削封によって廢城となつた。天和3年（1683）尾張の松平義昌が梁川城主に封じられて城跡に陣屋を設置した。文化4年（1807）には松前章広が梁川藩主に封じられ、明治維新におよんで陣屋は廃された。（菊池利雄）



第48図 梁川城位置図



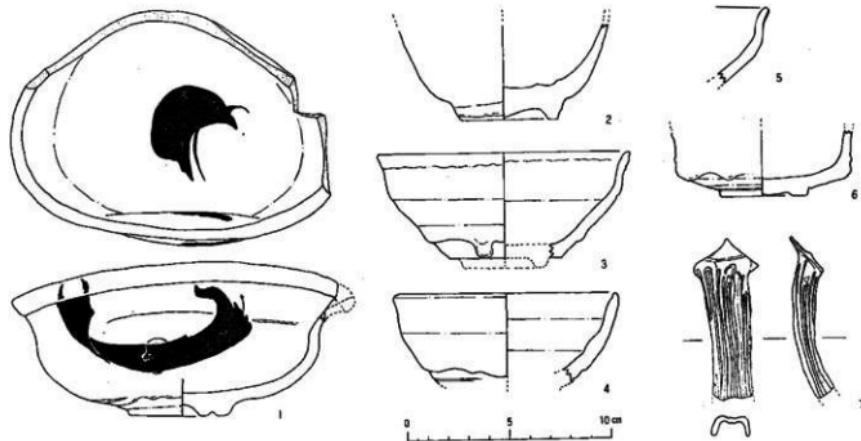
写真9 梁川城本郭調査風景



第49図 梁川城略測図



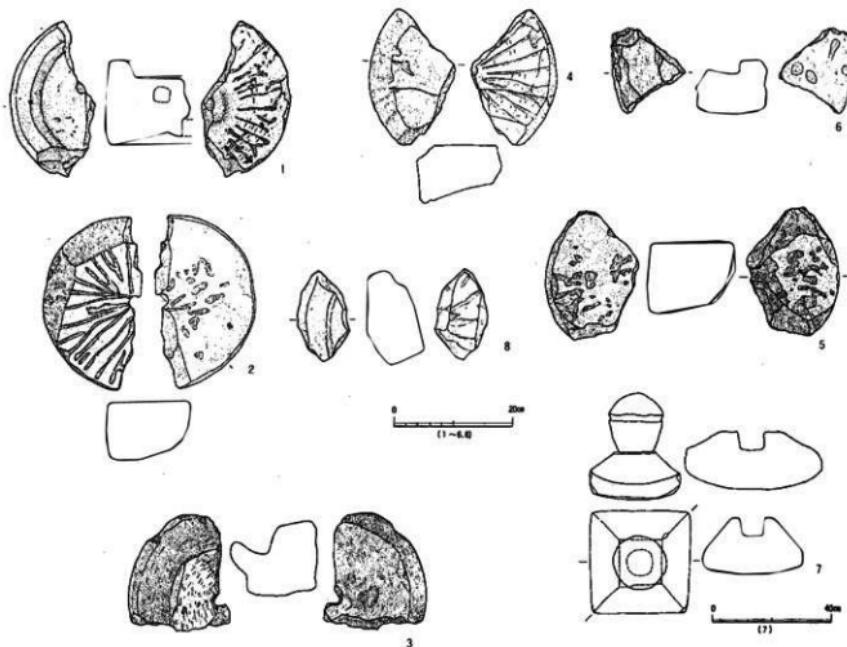
第50図 梁川城周辺（字切図より）



第51図 梁川城本丸出土遺物

1・2 唐津流(茶碗) 3~5 瀬戸天目(茶碗) 6 志野流(茶碗) 7 手鉢の取手

『遺跡梁川城本丸・庭園』(梁川町教育委員会)による



第52図 梁川城二ノ丸土塁出土遺物

1・2・4・5・8 石臼 3・6 蒸白 7 五輪塔

『梁川城跡一二ノ丸土塁発掘調査報告書』(佐野市教育委員会)による

23. 大枝城

所在地 伊達郡梁川町東大枝字館

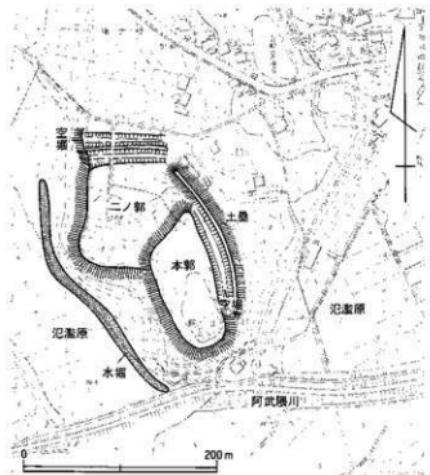
築城者 不詳

時期 室町期～戦国期

遺構 土壘、空堀、水堀

概要 県境山嶺から東大枝と五十沢との旧村境に沿って南に延びる尾根筋の突端、阿武隈川に臨む館ノ山（標高74m）の小丘上にあって、南と西側は急崖地形、東から北側にかけては緩い傾斜をなした山容を呈しており、氾濫原との比高は約34mをはかる。城は山頂の本郭と北麓部の二ノ郭からなり、東から北側にかけては土壘と空堀を設置して、周囲地と断ち切り、独立丘としての城郭を形成し、城の西から南側にかけての山裾には水堀がめぐらされていた。明治の地籍図から読みとれる城の規模は、東西約160m、南北約270mの複郭式の山城で、城の西側には奥の大道と梁川城を結ぶ道路が走り、西側の館ノ腰と西下町の地には町割がなされて、城下町を兼ねた約40戸程の街村集落が存在した。城は伊達氏が本拠地とした阿武隈川によって、隔てられた伊達郡の西根と東根を結ぶ交通上の要衝を軍事的に押さええる地に立地していた。

城館の歴史 大枝城の築かれた時期は明らかでない



第54図 大枝城略測図

が、伊達宗達の三男孫三郎宗行は応永元年（1394）頃、伊達郡の大枝村に住し、大枝（後に大条に改む）氏を称したといわれ、大枝城はその居城であるとの伝えがある。しかし平時における住まいとしたのは、この城の北西1.5kmに位置する、単濠単郭式方形平地館で現在徳本寺のある住吉館が想定され土壘、水濠跡など遺構が良く残されており、大枝城は戦時における軍事交通上の拠点を押さええると言う皆的な色彩が強い。大枝城は伊達氏天文の乱においては、伊達晴宗に従い大枝郷の徳本寺分など多く所領が加恩されている。天正18年（1590）豊臣秀吉の奥州仕置によって、大枝城は廃城となり翌19年伊達政宗の大崎移住に従い、大枝宗直は志田郡大蔵村に移り大枝城は廃城となった。慶長5年（1600）10月関ヶ原合戦の際、福島城に出撃した伊達政宗の率いる本隊は、梁川城の上杉軍の攻撃に備え、片倉景綱の軍を大枝城のあたりに配した。（菊池利雄）



第53図 大枝城位置図



写真10 大枝城遠景

24. 根子屋館(瓢箪城)

所在地 伊達郡保原町所沢字根子屋

築城者 不詳

時期 室町期～戦国期

遺構 山館、根子屋、土塁、空堀、

概要 根子屋館は保原町所沢と富沢との境界に沿って北に延びる、尾根突端部(標高148m)の急峻な地形を利用した山館と、その山麓に築かれた、館下集落根子屋からなる典型的な中世の城郭遺構である。

根子屋郭は長径200m、短径80m、山頂の山館との比高は約60m、距離は300mほどある。山頂の山館は長径約150m、短径80m、防備上の弱点となる南東に延びる尾根上には三重の堀切が構築されている。

鞍部(標高140m)の堀切は、長さ40m、幅7m、深さ2.5m、その北50mの尾根上には長さ70mの二重の堀切(幅は各7m、深さは北側が2.5m、南側が1.5m)がある。

この二重の堀切と連続するように山館東側には、幅8mの帯郭が西側には幅4mの空堀が設けられ、山館の北側で両者は合体する。

山館平場の削平状況はあまり良好ではなく、南西の隅には稻荷神社がまつられており、往時は老杉と老樺の大木が生い茂っていたといわれる。

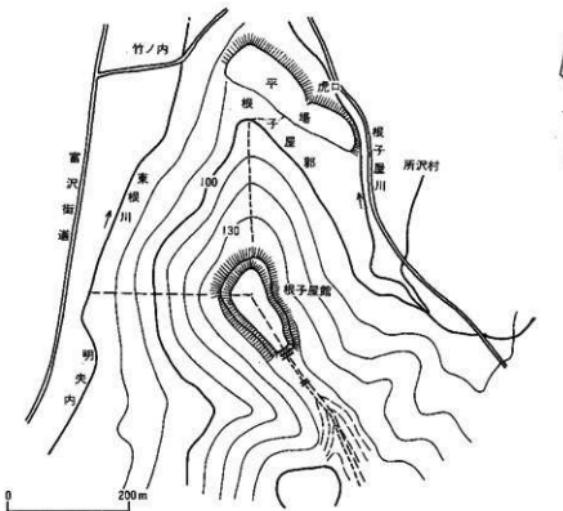
根子屋郭は宅地化が進み一部地割の変更がみられるが、かつての大手の虎口とみられる木戸なる地方が残されており、付近の根子屋集落には木戸姓を称する家々が数軒ある。伝えによれば、木戸口に住んでいたため館主から授けられた姓といわれている。

城館の歴史 根子屋館は誰によって、いつの時期に築かれたのかは明らかではないが、根子屋をともなった山館という様式からみて、南北朝期頃とみられ

る。『信達二郡村誌』によれば「昔者天正ノ末、伊達政宗ノ臣野田大学居る所ナリ。政宗ノ仙台ニ移ルヤ大学從フ、今猶オ其ノ子孫有リト云。本村ニ野田氏ヲ称スル者多キハ、皆大学ノ一族支庶ノ遺裔ナリ。」とあるが、野田氏は伊達稙宗と晴宗の父子間で争われた天文の乱(1542～8)では、野田六郎等一族は稙宗党であったため、乱後伊達晴宗によって所領は没収されて失脚、帰農して館は廃城となったと考えられる。(菊池利雄・吉田作



第55図 根子屋館位置図



第56図 根子屋館略測図

りようぜんじょう こくし
25. 霊山城(国司館)(国史跡及び名勝)

所在地 伊達郡靈山町石田字靈山

築城者 北畠顯家

時 期 南北朝期 ~~延元2年(1337)・建武2年(1335)~~
~~延元2年(1337)・建武2年(1335)~~
~~延元2年(1337)・建武2年(1335)~~

遺 構 主郭、腰郭、土塁、礎石、池、物見岩、豎堀、庭園

概 要 灵山町の中心地より東へ約6km、阿武隈山系の最北端に位置する独立山塊の山頂(標高823m)、登り口からの比高400m)に築かれている。火山角礫岩の急斜面にかこまれ、眼下になだらかな阿武隈山地を大観する。一帯は国の史跡名勝の指定をうけ、福島県立自然公園にもなっている。

靈山には平安時代開創された山岳寺院靈山寺があり、靈山城はそれを利用した寺院城郭である。

靈山城碑などがある標高800mの山上平場が本城とみられる。高さ1.5mの土塁が南北32m、東西50mの長方形に作られ、西側には礎石もみられる。東側の岩石と土砂による土盛りは庭園の石組みとの説もある。

本城の北、6m高い平坦地は詰の城とみられる。更に北は急斜面になっている。

本城の南下には松賀池を中心に削平地・院坊跡がつづく。本城直下は「国司館」とよばれ礎石をもつ遺構敷地は30m×35mの広さである。その西にのびる削平地は二ノ曲輪とみられる。10m下に礎石のある建物群の削平地(62m×20m)がある。更に5m下は三方に土塁をめぐらした水の手、松賀池で清水がわきでている。松賀池をはさんで三、四段の削平地があり、特に西方の10数箇所の遺構は大手口の防備施設としての三ノ曲輪とみられる。

本城の東、東物見岩への平坦地に東虎口、「詰の城」の北東下に北虎口の存在が推定される。北虎口から二つ岩への北下の谷はたて堀状になっている。

本城西の巨岩は西物見岩、東300mの標高最高点岩塔を東物見岩とよんでいる。ともに眺望がよい。又東物見岩の西、南は広い丘状の平坦地になっていて南300mには「仙人水」とよぶ湧水地があり、その東には数段の削平地がみられる。

「詰の城」の北方、二つの小丘を越した広い平坦地「山

王平」は、伊達郡側と玉野側からの登山路の合流点である。そこに山王社がまつてあり、高さ2mをこす土塁が北・東・南を囲んでいる。神社境内にふさわしくない堅固な保塁で、「武者隠し」とみられている。

城館の歴史 建武4年・延元2年(1337)1月、陸奥大介鎮守府大將軍北畠顯家は義良親王を奉じて靈山城にたてこもった。当時西方は伊達氏、東方(宇多庄)は結城氏の支配下にあり靈山城は南党勢の中心に位置していたのである。このようにして自然の岩山という条件下での寺院城郭靈山城は、南党方の陸奥国府として軍事、行政府の役割も果した。同年8月、北畠顯家は伊達・信夫・結城らの兵をつれて北党から京都を奪回するため上洛したが、翌年和泉国に戦死した。顯家上洛の後は広橋經泰が一時留守を守った。伊達氏の活躍もあり靈山城は南党的本拠となって動乱は続く。貞和3年(正平2年)(1347)、北党軍総攻撃の中に炎上、落城した。なお山上の遺跡からは石硯、黒色古瀬戸、刀、槍など発見されている(梅宮茂『靈山城跡、靈山寺跡』『史跡及び名勝靈山保存管理計画書』中の西ヶ谷恭弘報告及び図面による)。(菅野家弘)



写真11 灵山城遠景

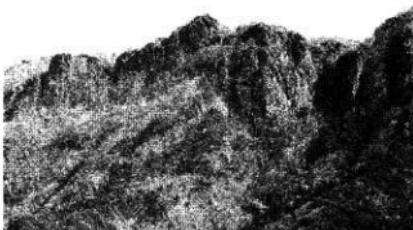
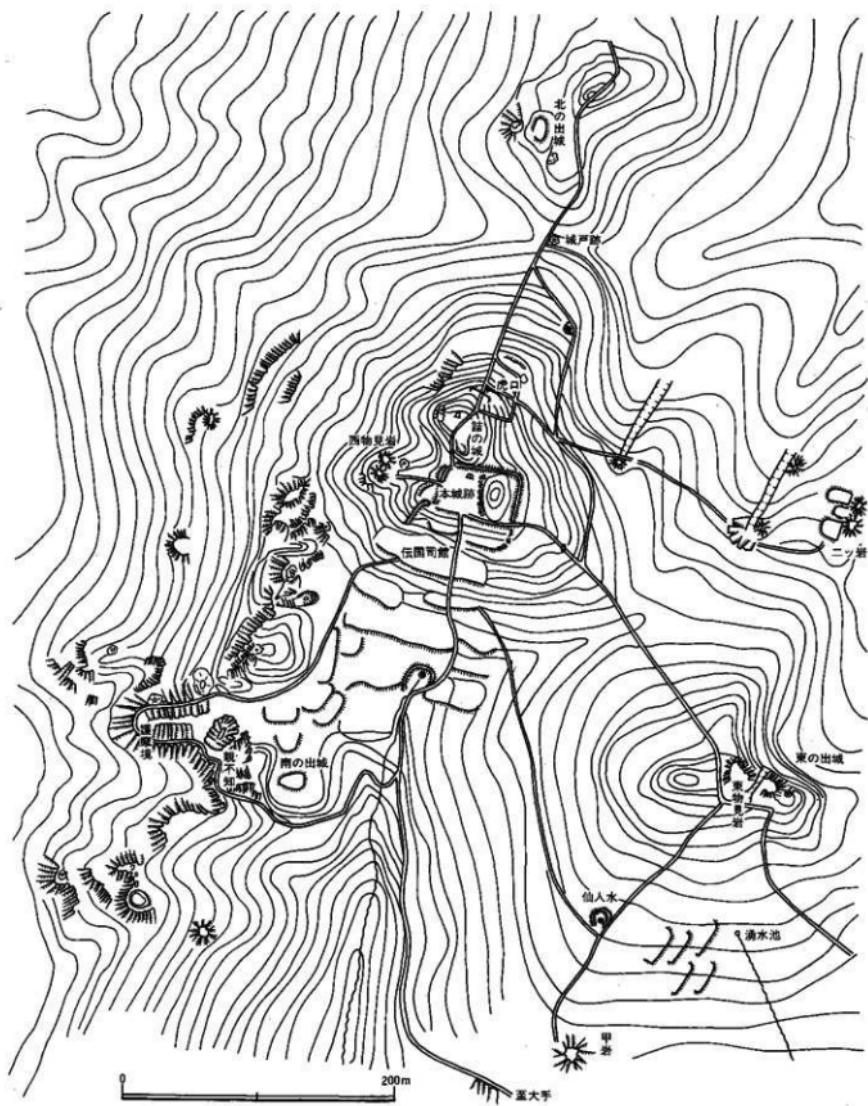


写真11 灵山城遠景



第58回 靈山城略測

「光跡及び名勝一富山城跡保存管理計画名一(富山市歴史委員会)による

かけ だじょう ちやうだて さくらだて
26. 懸田城 (茶臼館、桜館)

所在地 伊達郡靈山町字古城山

築城者 不詳

時期 鎌倉期

遺構 主郭、帯郭、空堀、土塁、井戸、大手、搦手

概要 掛田町の市街地の東、小国川の東岸の古城山にある（標高225m、ふもとからの比高125m）。

山頂の本丸（40m×90m）はほぼ五角形をしており、その5~10m下を、馬場と呼んでいる帯郭が巡っている。本丸の西下二ノ丸の先端は、1~2mの高さで小郭が階段状につづき、それらを囲んで帯郭がある。本丸、二ノ丸の帯郭から北、西、南に急斜面をおりた平坦地、あるいは舌状にのびる尾根の先端部には出丸が作られている。北東部の出丸は幅3m、深さ4~7mの堀切でくぐられ独立然としている。北部は水場を守るためにあって郭が集中している。南下の谷には平時の居館があったと思われる（現在は畠）が、すぐ西の尾根は湧水もあり、帯郭を何本も設置して大手口となっている。更に標高が低い四方の舌状の先端部（畠地になっている）にも第一線の出丸があったと思われる。

なお中町からの道を搦手口とし、字陣場を古戦場（相馬頼胤・伊達晴宗・岩城重隆の陣営の地）と伝えている。

城館の歴史 掛田村誌に寛治5年（1091）「安倍次任懸田城に在て出羽国金沢の戦に赴き……」とあるが確証はない。懸田史によれば、正中2年（1325）から杉野目郷高松城に止住していた高松定隆が、建武2年（1335）陸奥守北畠頼家の命により懸田城に移って懸田氏を称したという。定隆は二子と共に頼家に従って足利氏と利根川に戦い（1335年）、定兼は懸田城を保持したがその子定勝は1399年福島にのがれ、落城したとする（掛田村誌）。

伊達氏などの動静からみても、懸田城は貞和3年（1346）の藤田城、靈山城落城まで、南党方の拠点として存在したことがうかがえる。

なお懸田定勝は応永20年（1413）の争乱にもその名がみえる。伊達持宗とともに信夫郡大仏城に拠って関東管領にそむいたのである。幕府は畠山氏を討伐軍とし

て派遣、大仏城は8ヶ月で兵糧がつき落城した。

その後正長1年（1428）、寛正元年（1460）に將軍義教、義政から関東管領に対しての將軍方への協力を要請した御内書が懸田氏に届けられている。

天文11年（1542）伊達稙宗、晴宗父子間の内紛天文の乱では、懸田俊宗は岳父稙宗方で参戦した。翌年、稙宗も懸田城に在って懸田俊宗、相馬頼胤が守り、3~5月ごろ攻めよせる晴宗党と激しい戦闘をくり返した。8月稙宗は石母田城に移る。1544年、懸田氏臣の叛乱が4月、9月と続いたが懸田城はもちこたえた。一進一退はありながら將軍義輝の停戦和解命令もだされ、天文17年（1548）南奥羽一円に広がった乱は終結し、稙宗党の有力な拠点だった懸田城は破却された。懸田城は破却と所領削減に不満の俊宗は天文21年（1552）叛乱をおこすが、翌年晴宗に斬られ懸田氏は滅亡した。（菅野家弘）



第59図 懸田城位置図

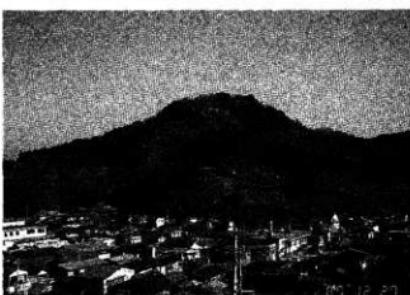
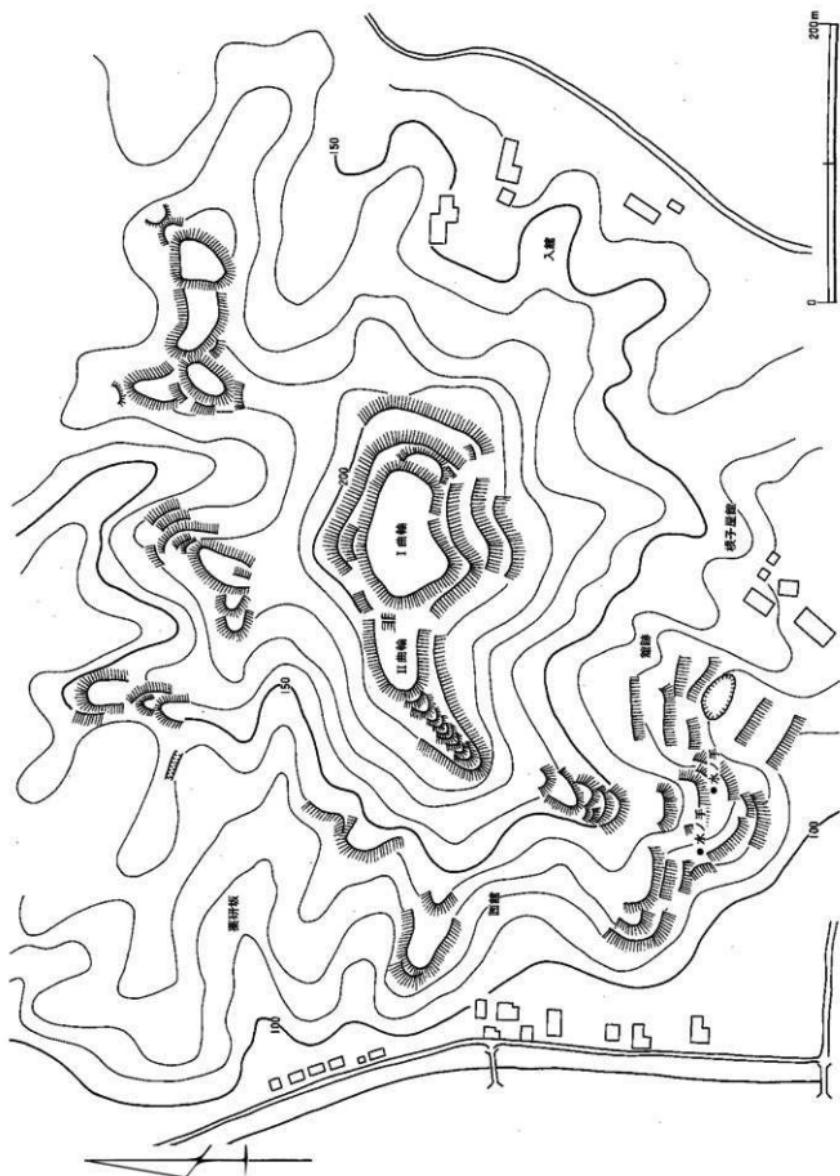


写真12 懸田城遠景



第60図 懸田城略測図

27. 大館

所在地 伊達郡塙山町石田字館

築城者 不詳

時期 鎌倉期

遺構 主郭、帯郭、空堀、堅堀、土塁、井戸

概要 相馬街道(国道115号線)に北東からつき出た山稜の先端にある(国道から比高65m)。石田川が東から南下を西流している。

2つの平坦地(東、主郭80×40m、西、二ノ丸50×40m、ともに畠)の下5mに帯郭がめぐっている。西と東の端にはそれぞれ深さ3m、6mの堀切が作られている。なお、平坦地のつなぎの部分にも大きな堀切があったと思われる。又、その堀切の延長としての南北の谷は自然の地形を利用した堅堀であった。水場はその谷の中にある。南西麓に根子屋の地名が残されている。

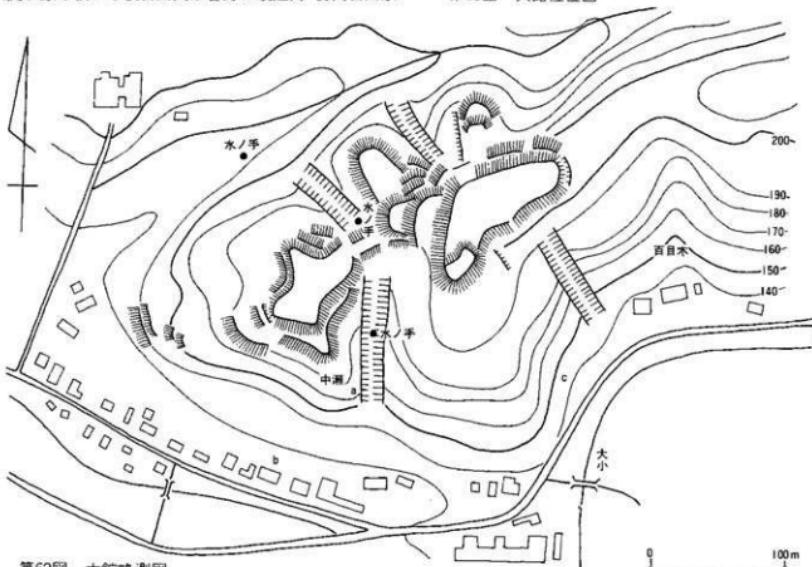
城館の歴史 石戸村郷土史に「元弘年間ニアリテ石田豊前宗年ノ居城タリ」と口碑を伝えている。伊達氏の庶流である石田氏は鎌倉時代から石田に住んだ(伊達文書)。嘉永5年(1852)の『菅野家由緒書』によれば(関ヶ原の戦いの後石田氏は菅野に改姓)、初代石田宗

和、二代石田宗利(室町から安土桃山時代)が「石田大館居住」とある。その後代々菅野藤兵衛を名のり相馬境奥山守をつとめ持高30石で諸役御免、苗字帶刀を許された。地図にみるaは墓所、bはケンゲ(検断)とよばれる居宅跡、cは江戸時代の処刑場である。

玉野開拓、入会山野の管理、相馬境紛争などの拠点として重要な位置を占めていたと思われる。(菅野家弘)



第61図 大館位置図



第62図 大館略測図

28. 小国城

所在地 伊達郡竜山町下小国字館

築城者 不詳

時期 鎌倉期

遺構 郭、腰郭、堀切、井戸、のろし台

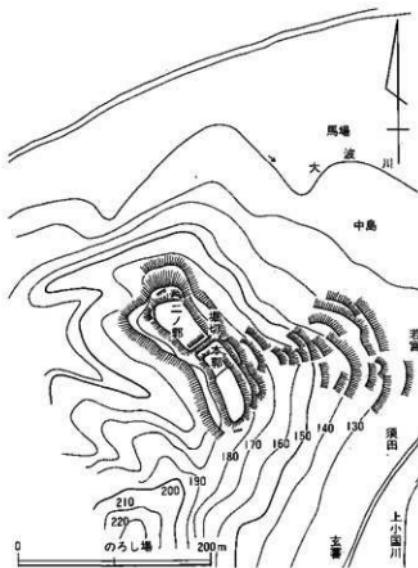
概要 国道115号線に沿ってつき出た小高い山稜の北東端、(標高192mふもとからの比高70m)に位置する。西から流れる小国川(大波川)と南から流れる上小国川に挟まれている。山上の平坦地は幅7.5m、深さ3mの堀切によって南の本郭(70×40m)北の二ノ郭(50×35m)に区切られ、二ノ郭側には幅2~3m、高さ1mの土塁がある。本郭は2段になっている。2つの曲輪をかこんで帶曲輪がめぐらしている。本郭と南の山地は幅7m、深さ4mの堀切で区切られているが、更に南のピーク(標高227m)にはのろし台が設置されていた。北・西・南は急斜面で、緩斜面の東下に館跡がある。(現在畠になっている)。なお山上の山林も明治中期以降開墾されたこともあった。毘沙門天銅像や瓦、色つきの陶器片が出土している。

城館の歴史 「往昔、大波藏人と云し人居城なり。其子孫伊達政宗に属して今に大波氏あり」と小手風土記に記す。築城年は明らかでない。

正平7年(1352)、多賀城を追われた北畠顕信が宇津峰城への途中立ち寄った小手保大波城(『相馬文書』)は、この小国城であったと思われる。(菅野家弘)



第63図 小国城位置図



第64図 小国城略測図



写真13 小国城遠景



写真14 小国城近景

29. 月見館

所在地 伊達郡月館町月館字月見館山

築城者 不詳

時期 戦国期～文祿慶長期

遺構 郭、土塁、空堀

概要 阿武隈山地より西に延びる尾根突端上の高所(標高238m)にあって、西側平地との比高は98mをはかる。西には広瀬川、北側は布川、南側は小布川が開析し、三方は自然の急崖をなす要害の地で、東の尾根には堀切を設けて、城郭が画されている。

山頂部の平場が本郭で、これより北方、南方および東に延びる尾根上には小郭や帯郭が連郭式に連なり、とくに防備上の弱点となる東の尾根は、三重の堀切によって仕切られていた。

根子屋郭は未調査であるが、この山館南麓の真徳寺周辺と考えられ、伝えによれば寺の門口へと続く松・杉並木のあたりは、館門前または大手先と呼ばれていたという。

館の範域は、山頂の山館と南麓の根子屋郭を含めた、500×500mが城域とみられる。水の手は根子屋郭の真徳寺など山麓郭の谷間からの湧水によったと考えられる。

山館部分の土塁、空堀遺構は、良好な状態で保存されており、昭和61年月館町では既存の山道を遊歩道として整備し月見館を森林公園として活用している。

城館の歴史 築城の時期築城者は明らかでないが、「信達二郡村誌」に「天正ノ頃須田伯耆守親重居ル、伊達政宗ニ亡ボサルト云フ。」とある。しかし「伊達世臣家譜」には、須田氏は本姓源氏、須田伯耆某を先祖とした伊達氏譜代の臣で、伊達郡築館に居城した。伯耆は天正12年(1584)10月伊達輝宗に殉死した。天正18年蒲生氏郷が伊達政宗とともに大崎、葛西の一揆討伐に出陣中の須田伯耆は、父伯耆が殉死したにもかかわらず、重く用いられないで政宗を恨み、「政宗は一揆を挑発し、氏郷の暗殺を図っている。」と氏郷に訴え会津へ去った。翌19年伊達郡は蒲生氏郷領となるおよんで、須田伯耆は旧領を安堵されて月見館に復帰したとみられるが、慶長3年(1598)蒲生秀行の宇都宮移封とともに、月見館は廃城となつたと推定される。

(菊池利雄)



第65図 月見館位置図



写真15 月見館遠景



第66図 月見館略測図

30. 二本松城(霧ヶ城、近世は霞ヶ城)

所在地 二本松市郭内

築城者 畠山満泰

時期 室町期～江戸期

遺構 郭、腰郭、土塁、堀切、井戸

概要 二本松城は、室町中期から戦国時代の終りまで170年の長期にわたり、安達郡西部を領有した奥州探題畠山氏の本城である。

畠山氏滅亡後、伊達政宗、蒲生氏郷、上杉景勝、蒲生秀行、加藤嘉明、明成の支城として、一族や有力家臣が配置され、1～5万石を領した。寛永20年(1643)丹羽光重が白河より10万石で入部し、二本松藩として明治初年まで11代225年間存続する。したがって現存する城郭としての遺構が、どの時期のものであるか判然としない。ここでは正保絵図(1646～47)と現地踏査を手がかりに、畠山時代を中心見てみたい。

本城の置かれた白旗ヶ峰は、標高345mの孤立峰である。現存する石垣は加藤時代築造と推定され、畠山時代は無かったか、あっても小規模な野面積みのものだったと思われる(『二本松市史』)。

この本城を中心に一族、重臣の館を周囲に配置し、非常時には家臣を招集して兵力を集中し、本城の守りとしたのである。東方直下の松森館と南側の新城館には一族新城氏を、松森館下手の鹿子田館(後の猪子館)には鹿子田氏を、本宮館には氏家氏を、新城館から南、そして東へ延びる観音丘陵には箕輪玄蕃の箕輪館、遊佐内蔵介の栗ヶ檜館を配置した。本城の白旗ヶ峰を中心に東方へ延びる尾根と南そして東へ延びる尾根線を城郭とし、東方に開いた狭い谷間に囲繞した、このような形は「馬蹄形城郭」といわれる。侍屋敷は、本城の南側山腹や谷間に階段上に、配置されていたものと思われる。なお、観音丘陵は愛宕神社、根崎文珠堂から天皇館城を越え、阿武隈河岸近くまで、城郭的地形改変の跡が各所に認められ、外郭防衛線をなしていたことが推定される。北側は龍泉寺山に物見跡、郭跡状の地形があり、その東方の心安館と共に、北側の防衛線を形成していたものと思われる。

二本松城は、外郭防衛線まで含めると東西2km、南北1.5km以上の規模をもち、要害堅固で複雑な地形は、

攻めるに難く守るに易い山城として、県内最大級の中世城郭であったと考えられる。

城館の歴史 応永21年(1414)畠山満泰は、北方1.5kmの田地ヶ岡館より白旗ヶ峰に城を移し、以後9代170余年間畠山氏の本城となる。天正年間、畠山義継の代には家臣の城下集中をはかり、統制強化と城郭の規模拡大、根小屋集落の整備が進んだと思われる。

天正13年(1585)10月15日から、伊達政宗は父輝宗が畠山義継に殺害されたのを怒り、義継の遺子国王丸が拋る二本松城を包囲攻撃したが、雪のため小浜城に引き上げた。しかし、二本松救援のため北上した佐竹、蘆名、岩城ら連合軍も11月17日の本宮人取橋の合戦で政宗に撃退され、翌年7月、二本松城は開城した。以後伊達氏の支城として伊達成実が4年間住城した。天正19年(1591)、蒲生領となるや、町野左近助が8年間住城し、さらに慶長3年(1598)、上杉景勝が会津に入ると家臣、下条忠親、秋山定綱が3年間住城した。関ヶ原後の慶長6年、再び蒲生が会津に復帰すると東城(旧松森館)は梅原弥左衛門、西城(旧新城館)は門屋助右衛門と城は東西に分けられ2名の城代が入り、再蒲生時代は26年間続いた。寛永4年(1627)、松下重綱が5万石入り、翌年加藤明利が3万石で替るが、加藤時代は16年である。

寛永20年(1643)丹羽光重が10万石で、白河より移り、以後二本松藩として明治初年まで11代220余年間存続する。なお、中世の名城も戊辰戦争では、たった一日で落城した。(阿部正行)



第67図 二本松城位置図



写真16 二本松城西郭

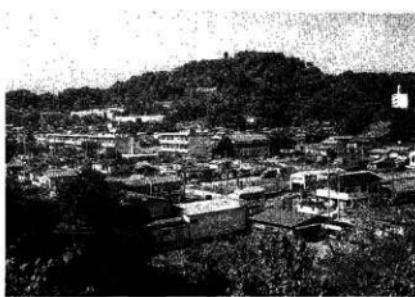
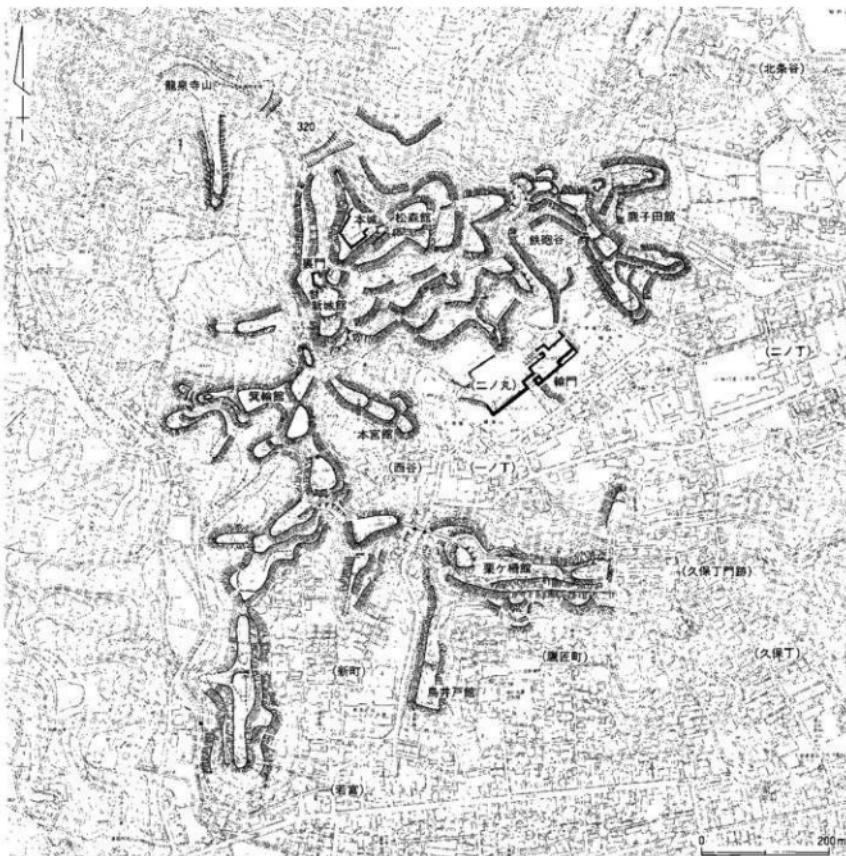


写真17 二本松城遠景（南東より）



第68図 二本松城略測図

31. 田地ヶ岡館(國司館)

所在地 二本松市塙沢一丁目

築城者 不詳

時 期 南北朝期～戦国期

遺構 帶郭、空堦、土塁、虎口、

概要 二本松から塩沢温泉への途中、左手の独立丘陵(標高280m、ふもとからの比高20m)に作られた館である。現在、学校、住宅、畑、墓地になつている平坦地(200m×900m)の北下には2~4mの高さで帶郭があり、南部には高さ1~2mの土塁が残っている。又、小学校と畑の間の堀切は深さ2~5mで約100m残っている。西端部は東北自動車道に切断されてしまったが、ここにも深い堀切を残している。井戸はない。館の北下を湯川が東に流れている。

城館の歴史 島山高国・国氏父子が奥州管領として貞和2年(正平1年)下向した。島山氏の居住地について「福島県史1」では、「下向当初から二本松に一応の根拠を置いたかともみられるが定着するに至った

のはおそらく文和3年(1354)のことであろう」とし、「金花鈔」をひき畠山氏の居城を「国詮の代は田地が丘」とする。

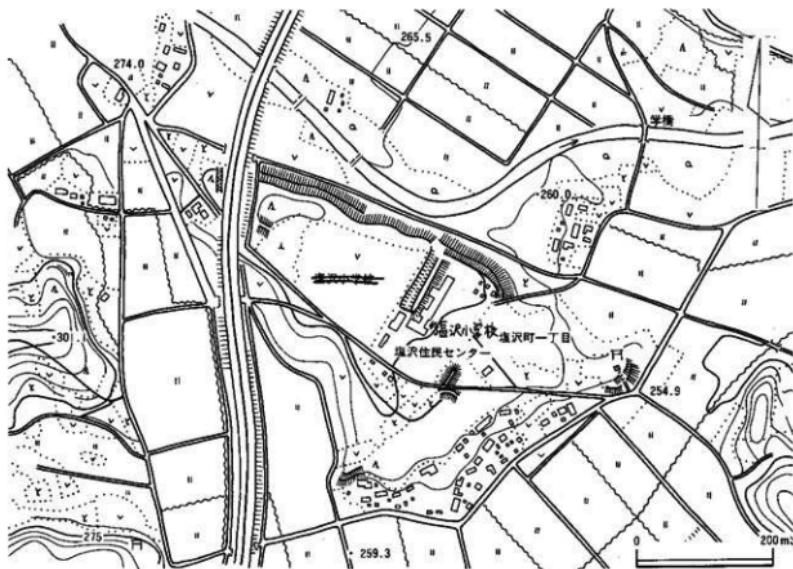
四代満泰の時、南1800mの白旗城に移る(『積達館基者』の島山氏系図)。

なお、鎌倉時代、安達藤九郎盛長が西安達を支配した時の居城が、田地が岡であったという説がある。

(菅野家弘)



第69図 田地ヶ岡館位置図



第70図 田地ヶ岡館略測図

たかだなでひらいしじょう
32. 高田館(平石城)

所在地 二本松市平石高田三丁目

築城者 不詳

時 期 室町期～戦国期

遺 構 主郭、帯郭、犬走、空堀、堅堀、虎口、井戸

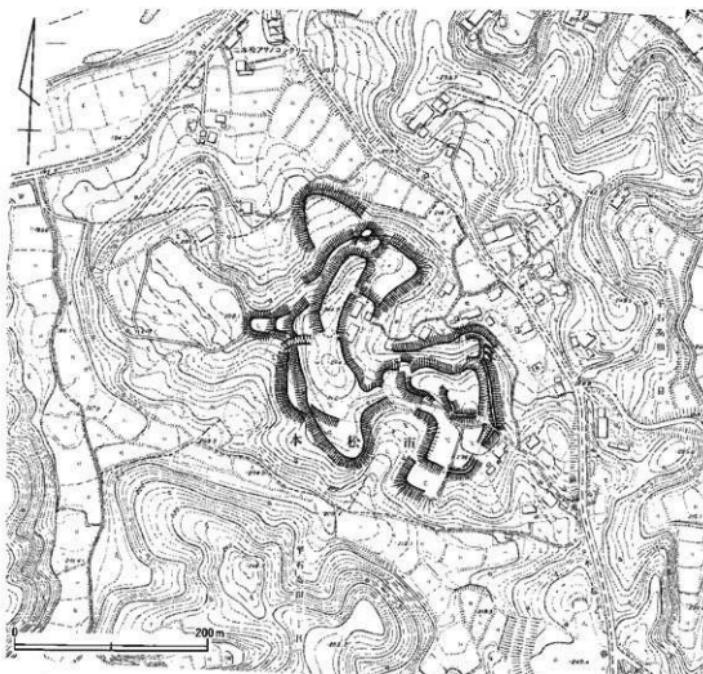
概 要 北流する阿武隈川の南東300mの丘陵(標高244m)にある。主郭(東の丘陵)は山林で、その北・東には深さ2～3mの空堀100mが残っている。主郭の南半はブルを入れて桑畑に開墾されてしまったが、空堀はつづいていたという。西の丘陵は「馬ならし場」[的(まと)ぶち]とよばれ、現在は畑になっている。「馬ならし場」の北下に江戸時代の名主の居宅跡があり、井戸がある。なお東の丘陵の方を大手、西の丘陵の南をからめてとよんでいる。

城館の歴史 石橋義久の臣平石甲斐守武頼の居城であった。大内備前、石川弾正らの義久排斥に加わった。

天正13年(1585)、伊達、田村によって小手森城が落城した後、伊達の武将によって高田城も落城した。安達郡誌は、同年10月の田村勢と会津勢の本宮での戦闘の時、伊達政宗は高田城にあって畠山氏をけん制し、天正14年(1586)の二本松城攻撃の時の本營を高田城におき諸将と謀議した、としている。(菅野家弘)



第71図 高田館位置図

第72図
高田館略測図

33. 田小屋館(渋川館)

所在地 安達郡安達町渋川字館山

築城者 不詳

時期 戦国期～文祿慶長期

遺構 主郭、帯郭、空堀、土塁、井戸、

概要 安達町の北部、県道渋川・霊山線と東北本線に囲まれた丘陵に田小屋館(標高234m)、桑原館(標高217m)がある。田小屋館は北東は急斜面(山林)で緩斜面の南は段々畠、西(山林)は中腹に高さ5～7m、幅2mの土塁を築き、山すそには深さ2～4mの空掘が200m余残っている。

規模は小さいが南の桑原館も、東(山林)に高さ1～2mの土塁が100m余つづいている。頂上部分は江戸時代に石材掘りで破壊された。

防備の都合から、この2つの館は一体の城館として利用されたと思われる。

なお、田小屋館の北150mを弘川が東に流れている。

城館の歴史 畠山義継の臣佐丹羽守、下総守の居城だったが、天正13年(1585)伊達政宗の攻撃に備えて

本宮、渋川、玉井の兵を二本松に集中、空になった渋川館は伊達成実の手に落ちた。

同年12月、家臣が鉄砲の火薬箱に火をおとして城中全焼、成実も火傷した(『政宗記』)。翌年1月、畠山の臣鹿子田左衛門匠繼胤が田小屋館の成実を攻めたが追い返されている(『伊達日記』)。

成実の後はその家臣遊左藤右衛門の子新右衛門が居住したと思われる。又、蒲生支配の時は野田正勝がこの館に住み千石を領したともいう(『積達館基者』)。



第73図 田小屋館位置図



第74図 田小屋館略測図

みしまだいわくらだて
34. 三島館(岩倉館)

所在地 安達郡安達町下川崎字三島館山

築城者 畠山満国

時期 室町期～戦国期

遺構 主郭、帯郭、空堀、土塁、井戸

概要 駒寄川の南岸に位置し、北面が急斜面の山林が三島館と岩倉館である。川の北は福島市になる。

三島館は、南北に長い丘陵上にある。北、東、西は急斜面で、南が大手となっている。北部をとりまく下段の帯郭は3～4m幅で長さが100m余ある。南端には深さ2mの空堀が50m余りある。

深い谷を挟んで西側の最初のピークは中館である。2～5段の帯郭を備えている。

深さ2～3mの堀切をこえて更に西のピークは岩倉館である。西側については2～4段の幅広い帯郭を配している。北、東面は急斜面である。

三島館を本丸、岩倉館を二の丸、中館を三の丸として一体の館として機能したといわれている。

城館の歴史 「金花鈔」によれば畠山国詮の長子満国が川崎村大将内の館主となった。(『安達町史』では、記録にみえる大将内館を三島館に比定している)その

五代宗頼は畠山義国を攻め滅ぼそうとしたが敗れて斬られた。『伊達正統世次考』では天文の乱に関連した畠山家中の動きとして、天文15年義氏が本宮宗頼を攻め宗頼はいわきに走ったとしている。この宗頼は同一人物か。又、岩倉館は畠山高国の臣遊佐内蔵頭の居城と伝える。天正13年(1585)伊達氏により落城した。




第75図 三島館位置図



写真18 三島館遠景

第76図 三島館略測図



たまのいじょう
35. 玉井城

所在地 安達郡大玉村玉井字館

築城者 大河内日向守?

時期 南北朝期? ~ 戦国期

遺構 現存するものはほとんどない。土塁?

概要 玉井城は水田中にある複郭の平地館で、園場整備事業が完了した現在、往時の姿はないが地籍図と航空写真によって復元(一部推定)可能である。

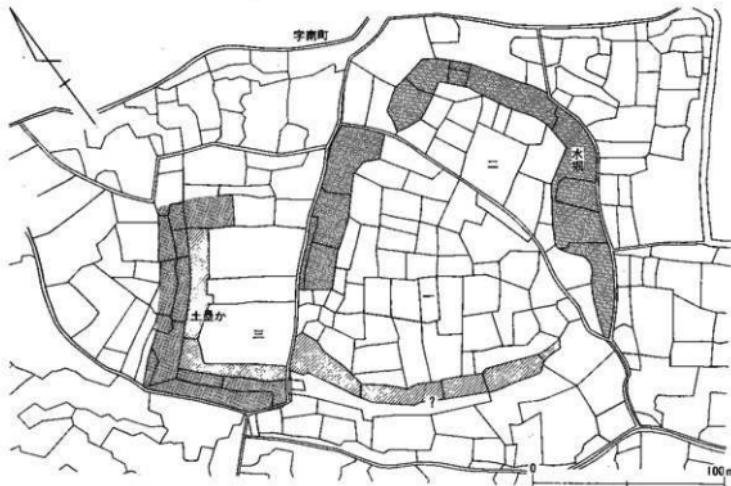
城は旧奥州・会津両街道に近く、安達太良川岸の第2段丘上に構築され、2つの郭が堀と土塁によって区画されている。南面は谷のため良好な防禦線になるが、北は連続する段丘と切り放す必要があり二つの堀が構築されたものであろう。主郭と見られる南の1ノ郭は幅18mほどの堀と土塁によって仕切られ、北の2ノ郭はコ字状の堀が巡りその西端は三角形に終息し1ノ郭の堀とは喰い違いに連なっている。ここに土橋様の施設が読み取れる。2ノ郭の規模は70m×40m程であり、規模と位置から馬出しのようにも見える。1ノ郭の西にも鍵の手状に堀が観察され3ノ郭と呼べる可能性もあるが詳細は不明である。付近には馬城谷地そして南町などの町名がある。また、字館内には現在民家がある。

城館の歴史 玉井城には至徳年間、大河内日向守と

いう人物がいたというが確証はない。天文17年(1548)3月4日の本宮宗頼宛伊達晴宗書状に玉井領主玉井紀伊守の本領が奪われたことが記されてある。天正10年(1582)、田村清頭が高倉城に攻撃を仕掛けたとき、二本松より太田主膳・采女という武士が高倉城加勢のため玉井城に入っていた。同13年11月、常陸佐竹勢他が須賀川に入り安積中村城を攻略したため、伊達政宗は小浜城から岩角城に出張し、玉井城には白石若狭が入った。やがて人取り橋の合戦が展開する。同16年(1588)3月、蘆名方高玉太郎左衛門、太田主膳・采女らが玉井城攻略を目指して侵入し、伊達方と激戦となつた。畠山旧臣で元玉井の住人玉井日向守ら300人が打ち取られ、伊達方の勝利に終わったことが伊具金山城の中島宗求宛の政宗書状に記されている(『大玉村史』)。(日下部善己)



第77図 玉井城位置図



第78図 玉井城周辺(宇切図より)

もとみやじよう

36. 本宮城(本宮館)

所在地 安達郡本宮町字館ノ越

築城者 畠山満詮

時期 室町期～戦国期

遺構 主郭、腰郭、土塁、堀切

概要 本宮町の市街地北西部に式内社・安達太良神社の所在する比高30mほどの菅森山があり、ここが菅森館跡である。この山の北東部を別に、大黒山と言い、鹿子田館跡といわれる。さらに本宮小学校南側の愛宕神社境域が愛宕館跡である。本宮城、本宮館とは、これら三つの館の総称である。

菅森館の主郭は、現在の花山公園付近とみられ、北西側には数段の腰郭状の地形が認められる。北東部の鹿子田館跡は郭・低土塁・堀切りなどが確認でき、これを数段の帯郭が取り巻いている。南方の愛宕館跡は、周囲の破壊が進行しているが、北東部に帯郭状の地形が認められる。

なお、菅森山と愛宕館の間の本宮小学校敷地部分も、居館跡などの関連遺構があった可能性は十分考えられるが、現在では消滅している。

城館の歴史 応永・永享年間(1394～1440)より二本松畠山氏の一族満詮が入り、後に鹿子田氏を称した(『金華鉄』)。天文年間、菅森館は畠山一族川崎宗頼の



第79図 本宮城位置図

配下に入り、川崎氏は本宮氏も称したが畠山本家との相続争いに敗れ、岩城へ走った(『伊達正統世次考』)。

天正年間、畠山氏は菅森館には氏家新兵衛と佐藤丹波を配し、鹿子田館の鹿子田氏と共に領内南方を固める拠点とした。

天正13年(1585)11月、伊達政宗は小浜を発し岩角を経て阿武隈川を渡り、本宮で二本松救援に北上する佐竹・蘆名連合軍を迎撃する。本宮城の南方2kmの観音堂山、人取橋一帯で激戦が展開された。天正17年(1589)政宗による蘆名討伐後、廃城となる。(菅野家伝)
安部正行



写真19 本宮城遠景



第80図 本宮城略測図

37. 小屋館(岩色城、苗代田館)

所在地 安達郡本宮町岩根字小屋館山

築城者 不詳

時期 南北朝期、戦国期

遺構 郭、腰郭、土塁、空堀

概要 本宮の南西 6 km の会津街道に沿い、岩根の集落がある。この西側の比高 100m ほどの独立峰が小屋館であり、南側を五百川、西側を矢沢川が巡る要害の、典型的な山城である。348.6m 三角点の山頂を中心に、数段の腰郭が認められる。北方に延びる陵線上には小規模な土塁もみられ、防備が最も固く、大手と思われる。なお 325m から 321m の標高点に至る尾根上はかなり平坦で、関連遺構は確認できない。

中世から近世初頭の会津街道は小屋館山の北側を東西に通過していたと思われる。また南、西からの攻撃が、前記の地形のため困難であり、逆に北からの尾根伝いの攻撃に弱点をもつことに備え、大手の方向が決められたとみられる。

なお、北東 500m には比高 3 m ほどの舌状台地東端に、居館型の鶴根館が位置しており、あるいは居館と詰城という補完関係にあった可能性も考えられる。

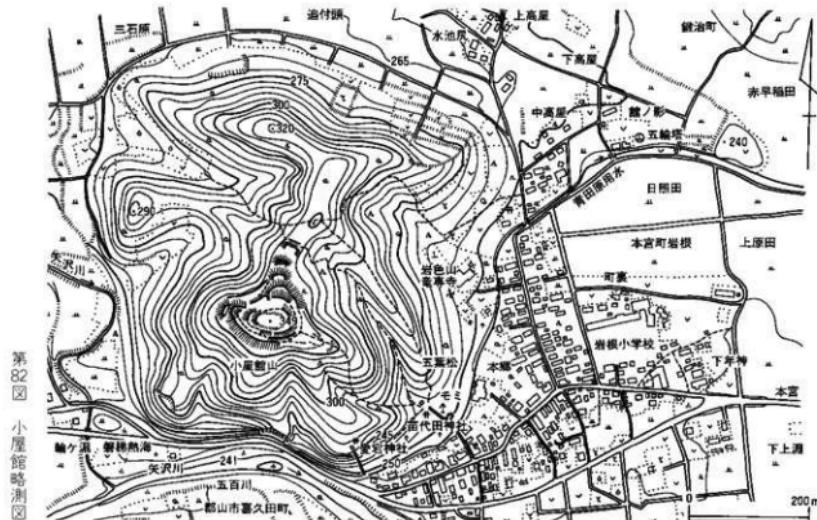
城館の歴史 貞和 3 年(1347)『白川文書石川氏軍忠

状』にみえる岩色城が初見で、南朝方のこの城を北朝方が攻略している。

天正年間は安積伊東氏の一族、伊藤弥平左衛門父子が蘆名家臣として居館していた。天正 14 年(1586)以後岩根村は伊達領となつた。伊達一門で、二本松城主の成実の蘆名領境の最前線である小屋館に、家臣本内主水及び地元の農兵を配置し、警戒に当させていた。天正 16 年 2 月 22 日、蘆名方の大内定綱はこの館に奇襲攻撃をかけ、100 人ほど討取ったが成実らに撃退されている。翌年の伊達政宗の蘆名討伐後、存在価値を失い廃城となった。(阿部正行)



第81図 小屋館位置図



なめつだて いなざか館 こうやだて
38. 滑津館(稻沢館)・高野館

所在地 安達郡白沢村稻沢字滑津・鹿島・別当内・館北・館東・赤坂・浜井場・高野・上喜多

築城者 不詳

時期 戦国期

遺構 主郭、腰郭、土塁、空堀、

概要 滑津館は白沢村東部の稻沢地区における中心的城館である。東西方向に延びる丘陵尾根上にあり、東西二つの郭を中心と腰郭が数段取り巻いている。土塁、空堀跡などは確認できない。開析谷底から尾根上までの比高は50mほどあり、急峻な地形を利用した実戦的な城館といえる。

高野館は、滑津館の東方200mに位置する。規模の大きな土塁、空堀を巡らす松沢郭を中心に、東と南の尾根、及び西側背後の尾根上に堀切で画される連続した郭を配している。全体的に見て、この城館は東又は南東が防衛正面と思われ、西側は尾根続きで弱点となるしかし西方200mに位置する滑津館と一体化し、補完的に機能した可能性は十分考えられ。

城館の歴史 滑津館は、渡辺氏の居館といわれるが、天正年間は小浜大内氏の属城であり、三春田村氏に対抗する重要拠点として整備拡充したものと思われる。

天正12年(1585年)大内定綱は、田村清顕の攻撃を撃退している。(滑津館合戦)『奥州仙道一覧記』。翌13年、伊達政宗が大内定綱を降した後伊達領となり、以後庵城となつた。

高野館は、天文から永禄元年までは田村家臣菊地氏の、天正年中は大内家臣、蓬田宅岐の居館といわれる。滑津館合戦にはこの城館も戦場となつたと思われる。

(阿部正行)



第83図 滑津館・高野館位置図



第84図 滑津館・高野館略測図

39. 岩角城 (岩角館) いわづのじょう いわづのだて

所在地 安達郡白沢村和田字東屋口、上明石内、西明石内、岩角、小館

築城者 国分玄蕃

時 期 戰國期

遺構 郭、腰郭、土墻、空堦

概要 白沢村北部の二本松市境に位置する。

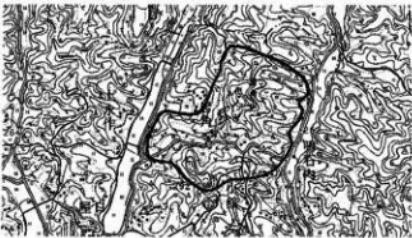
天台宗岩角山寺の境内及び奥の院を中心に、四方に延びる丘陵尾根上が岩角城であったと考えられる。北限は315m標高点の位置する郭で、すぐ北側に堀切がある。岩角寺本堂の西側から西へ延びる尾根筋も、平場と切落し状の急崖が連続的に認められる。この尾根の先端部は岩塊が露出した小脊状の地形を呈しており、同様の箇所は南側尾根の先端部や他にも確認できる。この南北両側の尾根に囲まれて東屋口の谷間があり、馬蹄形城郭の構造であったことも考えられる。このように見ると、岩角城は東西800m、南北700mほどの村内最大級の城館ということになる。しかし桑田など耕地化が進んでおり、遺構の残りが少なく、全体構造は明らかにできない。

城館の歴史 岩角山岩角寺は仁寿元年(851)年開山

といわれ、城館としての利用は、戦国の一期期のみと考えられる。天正年中は塩松領主石橋義久の一族、石橋玄蕃(古館弁)、国分玄蕃(「相生集」)の居城といわれ、石橋氏滅亡後、大内定綱の属城となった。

天正13年9月25日、伊達政宗は小浜城包囲網の一環として岩角城を攻め落としたが、この時岩角寺の伽藍も、ほとんど焼亡した。同年11月17日、政宗は本宮城の南、観音堂山、人取橋、高倉城の合戦で、佐竹、蘆名、岩城、白川、石川、二階堂、相馬連合軍と激戦を展開した。この前後、政宗は岩角城を小浜、本宮両城の兵站基地として利用している。その後庵城となり、岩角山岩角寺の本格的復興は丹羽氏の二本松入部後である。

(阿部正行)



第85図 岩角城位置図



第86回 岩角城略測図

おばまじょう しもだて
40. 小浜城(下館)

所在地 安達郡岩代町小浜字東下館

築城者 大内内膳宗政

時期 室町期～江戸期

遺構 郭、石垣、帯郭、堀切、井戸、土橋

概要 小浜城は、東西1000m、南北1200m（中心部は600m）で、標高300mの山頂及び尾根を削平して郭等を構築している。東は小浜川、北と西は移川、南は谷（字藤町）と堀切（堀切坂）によって区画された比高70mの天然の要害で、現在は公園・桑園・畑・山林・駐車場等に利用されている。

山頂には三角形状の一ノ郭があり本丸と目され、西側がやや低い2段の郭で北東には帯郭が観察される。南の虎口の東側一部に石垣（打込みハギ・蒲生時代という）があるが、かつては西側にもあったという。この西には空堀を挟んで通称軍艦山と呼ばれる二ノ郭がある。東には西京館という2段に構築された三ノ郭があり北側の斜面には粘土を貼付けた部分も見られる。本丸の北には四ノ郭があり、周りには帯郭も存在したが一部を除いて壊滅した。この他二ノ郭の南に六ノ郭、三ノ郭の北に堀切を挟んで七ノ郭、その東や南に八～十三ノ郭が、本丸と谷を挟んだ南に十四～十七ノ郭がある。十ノ郭は片倉小十郎屋敷跡といわれ、大きくは2つの郭が土橋によって連結されている。水ノ手は大手口と本丸の中間地点の湧水である。

五ノ郭の北には当城を他と区画する大きな谷（北谷）があり、その入口部付近は「あかずの門」（字赤鼠）と呼ばれていたらしく、ここまでを城域とするのが一般的だが防衛上からはその北の移川沿い（字下館）まで含めるべきで、不明な点もあるがこれを十八ノ郭とする。地名から大手口は西の岩代町役場側（字追手坂・字下追手坂）、搦手口は東の片倉屋敷側（字館搦手）である。

当城は岩代町教育委員会によって発掘調査が行われている。昭和56年3月の本丸調査（鈴木啓担当）では建物跡8棟、柵列跡3条、土坑数基と土師質土器（かわらけ）、染付、石臼、砥石、鉄製品等が発見されたが、特にI期の建物群の中には戦国時代の山城を代表する破格の大建築がある。昭和62年8月の西京館調査（日下部善己担当）では物見と思われる建物跡等が発見されて

いる。

城館の歴史 小浜は田村、二本松、本宮、相馬への交通の要所で、中世には多くの山城が築かれ近世以降は「小浜の町に帶買いに……」と歌に歌われる商業の町として栄えた。

文明年間、当城を築いた大内氏は石橋氏の家臣で、この地が旧地の若狭国小浜に似ていたのでその名をとって小浜城としたといわれている。

永禄11年（1568）、城主大内備前義綱は百目木城主石川弾正と主家石橋氏を滅ぼし、石川分を除く塙松領（東安達）を手中に収めた。天正11年（1583）、その子定綱は会津蘆名氏と結び二本松城主畠山義綱の援助を得て田村に属す石川弾正の百目木城を攻めたが敗退した。しかし、来襲する田村清顕の軍勢に対しては常に優位に立ちその力を内外に示した。

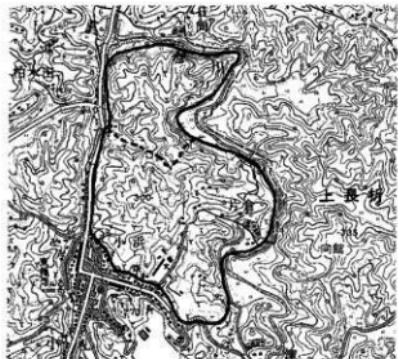
同13年、伊達政宗は帰属の一定しない定綱を討つため塙松に侵攻し、小手森城を皆殺しによって攻略したため定綱は小浜城を捨てて会津に走った。9月政宗は小浜城に入り下館といい、父輝宗は宮森城に入り上館と呼んだ。塙松は白石若狭に与えられた。10月畠山義綱による輝宗拉致・死亡事件が発生し、政宗の二本松攻撃が開始される。翌14年（1586）7月畠山氏は会津に走り、8月政宗は約1年間の小浜城滞在を終え米沢に帰還する。

豊臣秀吉の奥羽仕置の後当地は蒲生氏郷等の領地となり、これ以降江戸初期まで城代がおかれたが以後廃城となった（『小浜郷土読本』）。

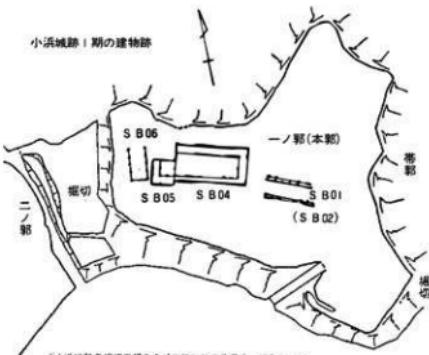
なお、宮森城の南に五連壇と呼ばれる塚群と五輪塔があり大内氏の墓所と伝えられ、また会津若松市の造酒屋宮森家は大内氏の子孫である。（日下部善己）



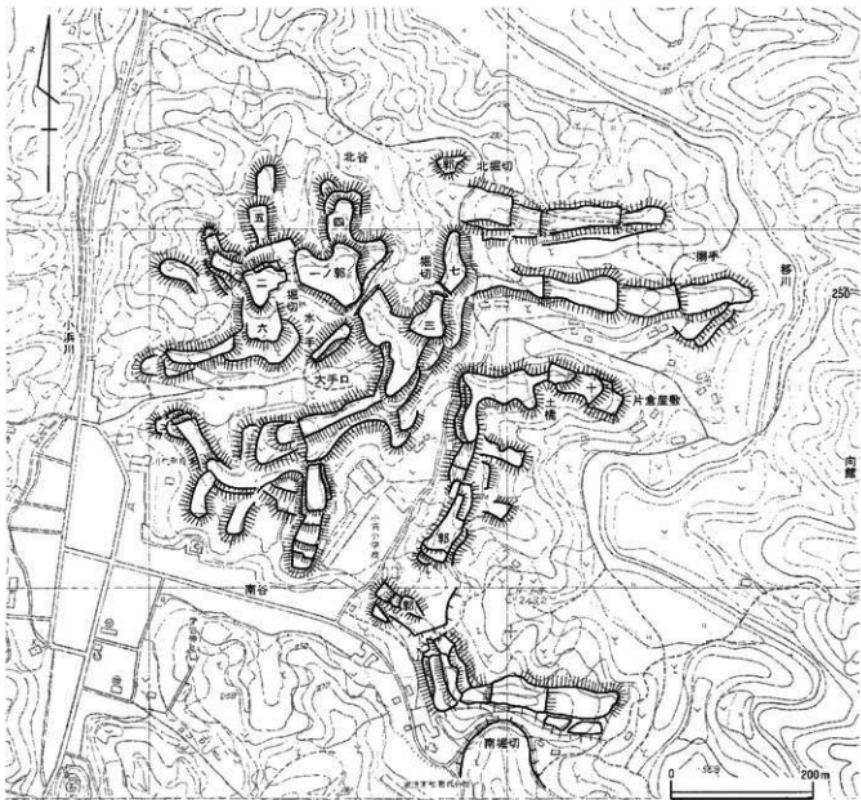
写真20 小浜城一ノ郭（本丸）



第87図 小浜城位置図



第88図 小浜城一ノ郭建物配置図（鈴木啓原図）



第89図 小浜城略測図

41. どうめきじょうほんがた

所在地 安達郡岩代町百目木字本館・館山

築城者 石川氏

時期 室町期～戦国期

遺構 郭、帯郭、土塁、堀切、土橋、井戸、(木堀)

概要 百目木城は田村、相馬、二本松への街道を押さええる位置にある。南西に突きでた比高70mの山稜を利用して繩張りがなされ、西と南は各々山辺沢、口太川の谷に向かう急崖で、北と南西方向は掘切によって区画されて独立丘陵化が計られている。城内は4つの堀切を挟んで大きさは5つの郭で構成されている。一ノ郭は本丸と目され中央には巨石を積んだ庭園様施設があり、「石川様のつばの石」と俗称される。この下段には帯郭が認められ、特に南東方向には広い二ノ郭がある。この北方の三ノ郭にも帯郭が発達しその一角が南方に突き出し(四ノ郭)、堀切を挟んで相馬方面を望む出郭的な五ノ郭に続く。一ノ郭と土橋で接続する



第91図 百日木城略測図

六ノ郭は田村や小浜方面への物見で、一部に土塁状の高まりもある。七ノ郭は現存しない。町裏には一段高い侍町と思われる畠地が、城の北と東には水の手がある。また、西の山辺沢をせき止めて水堀にしたという。

搦手・的場と言ふ地名が東側にあり、大手は南側と思われる。他に、町・向町・見附などの地名や百目木城主石川弾正ゆかりの八幡神社・虚空蔵尊等があり、長泉寺には弾正とその父摂津守の位牌が安置されている。

城館の歴史 南北朝期、石川郡三芦城主石川満朝三男泉十三郎盛光は、百目木(旧館か)を分与され石川治部大輔と称した。永禄11年、石川氏は小浜城主大内氏とともに主家石橋氏を滅ぼし田村に属し、その後、二本松嵐山義繼と連合して来襲した大内定綱を撃退した。同13年(1585)石川弾正は政宗の定綱攻略に加担し東和町小手森城等を加増されたが、塙松33郷は白石若狭に与えられたため、相馬義胤を後だてとし同16年(1588)小手森城で政宗勢と戦闘に及んだが敗れて相馬に逃れた(打ち死に説もある)。尚、後の四本松東城は当城とされている意見もある(越後守史)。(日下部善己)



第90図 百目木城位置図



写真21　百日本城／郭遠景

し ほんまつじょう ゆるだて
42. 四本松城(古館)

所在地 安達郡岩代町上長折字古館・館山

築城者 田原秀友?

時 期 南北朝期～戦国期

遺 構 郭、帯郭、礎石、堀切、湧水、土塁

概 要 四本松城は、海拔316.2m、比高100m、規模400×600mで桑園・山林・宅地・草地などに利用されている。東と北は口太川に面した急崖、西は谷、東は谷と堀切によって区画された山城で、付近にも支城が幾つか見られる。

山頂の一ノ郭が主郭(本丸)で、平場が三段に造られ、一部に礎石も見られる。一ノ郭から尾根が3方向に延びており、東は帯郭に続いて四ノ郭があり、先端には東壇堀切を挟んで物見と目される五の郭がある。西南の尾根上には二、三ノ郭があり、北と同様尾根を切断するために、大規模な堀切が構築されている。城の南に湧水、五輪塔や土塁があるといい、付近には寺屋敷・縫坊・読坊・鍛冶屋敷・御池・殿 煙 という俗称が残っている。

城館の歴史 後三年の役の功で伴助兼が四本松を領し住吉城を築き、文治5年(1189)奥州合戦後田原秀行が治め、その子秀友次いで石塔義房・頼房父子が四本松城に入ったという。さらに吉良貞家・溝家が在城した後、応永7年宇都宮氏広にかわって石橋棟義が四本松を領した。5代義衡は住吉城に移ったが8代義久が再度四本松城に戻った。義久は天文の乱では伊達稙宗方にいたが、終盤では晴宗方に転じ畠山義氏に攻撃されている。天文22年(1553)晴宗から伊達郡川俣の五十沢を与えられている。しかし、永禄11年、家臣の小浜城主大内備前や百目木城主石川弾正らによって滅ぼされ、義久の子は相馬に逃れた(『小浜郷土誌』)。

昭和46年岩代町教育委員会の本丸発掘調査(鈴木啓担当)によって、火災に遭った南面する礎石建物跡や簾状の編物、多数の杯、灯明皿、壺鉢などが発見され15世紀に比定されている。その後、茶臼、石鉢、石塔なども表面採取され(日下部善己報告)、居住した奥州管領など格式の高い武士の生活を偲ばせる。なお、鈴木啓『四本松城』等を参考とした。(日下部善己)



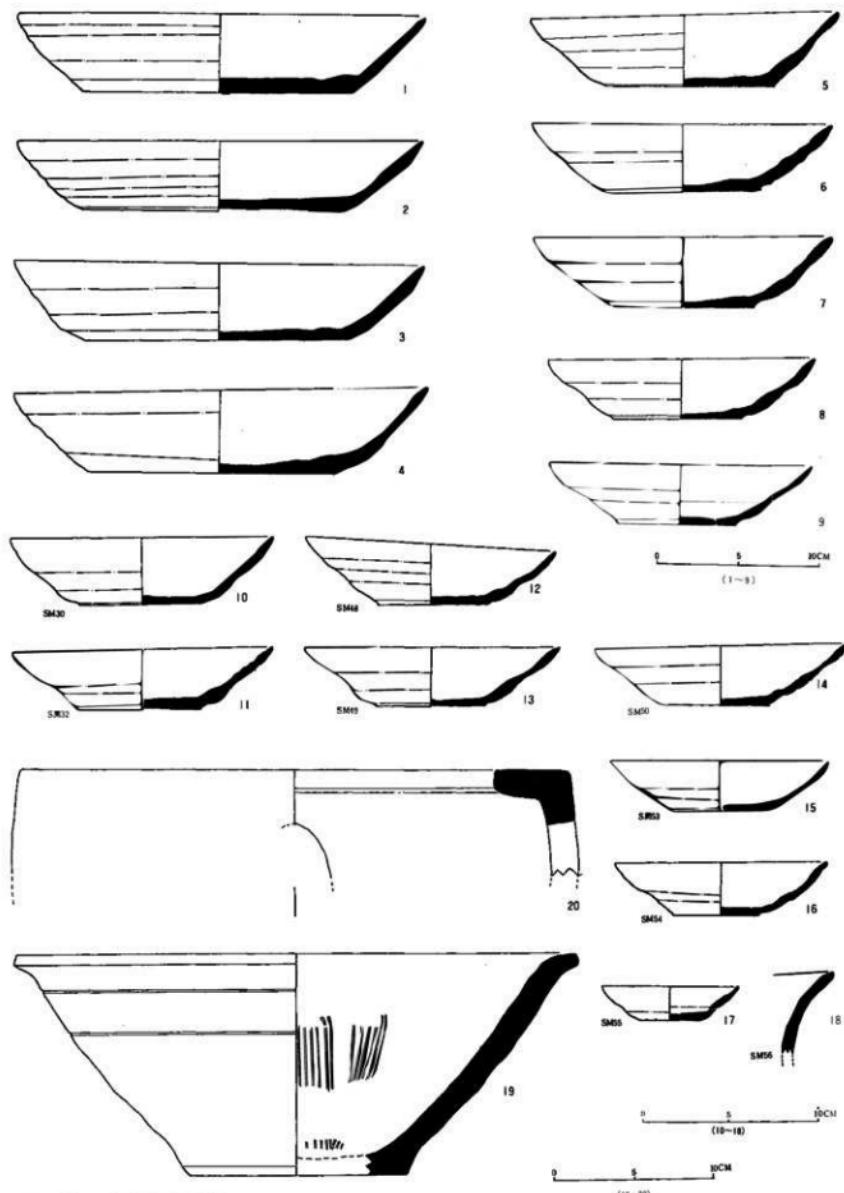
第92図 四本松城位置図



第93図 四本松城略測図



写真22 四本松城遠景



第94図 四本松城出土遺物

1~16 かわらけ(杯) 17 同 (灯明皿) 18 土師質土器(麥あるいは土釜) 19 須恵質土器(錫鉢)
20 瓦器質土器(火鉢)

[†]古木松城跡(老代町教育委員会)に2, 6

43. 小手森城

所在地 安達郡東和町針道字愛宕森

築城者 石橋家盛

時期 室町期～戦国期

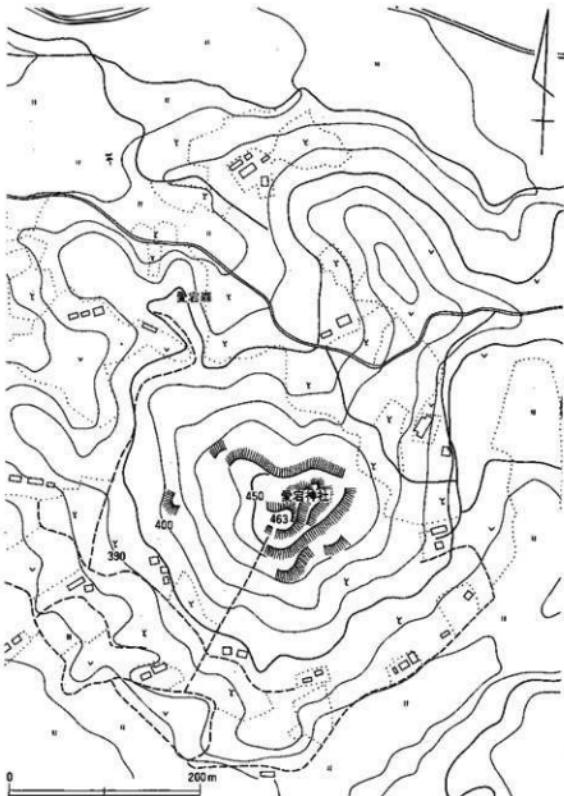
遺構 主郭、帯郭、井戸、堅堀

概要 針道の街の南、国道349号線の東側にあるコニード状の山林(標高463m、ふもとからの比高110m)が館跡である。愛宕神社のある山頂は詰ノ城で、北東下3mに平坦地(30×10m)がある。又その東下に平坦地(40×10m)がある。帯郭は北(幅6m、長さ100m)と南(道あるいは道形)に残っている。南に下る参道はたて堀と思われる。四方にのびる山麓の小丘もそれぞれ

が城の構えをもっていたのであろう。ふもとの集落や水田地帯には「大町」「福町」など地名が残っている。

城館の歴史 石橋家盛が伊達警固のため菊地氏に命じて築かせた〔「相生集〕」。

永録・天正のころ石橋氏を滅ぼした大内氏の抱城となる。小形源五兵衛、石橋勘解由後に小野主水、荒井半内をおく。天正13年(1586)伊達・田村の軍にせめられ落城。この時城内の老若男女800人、牛馬にいたるまで殺されたという。伊達政宗は小手森城を石川弾正に与える。石川弾正是相馬方と内通し伊達・田村方の城を攻めた。天正16年(1589)、伊達・田村軍は城下の麦畑を刈りとる。総攻撃で500余人を討ちとり、小手森城は再び落城した。(菅野家弘)



第96図 小手森城略測図



第95図 小手森城位置図



写真23 小手森城遠景

すみよしやまじょう し ほんまつじょう ほんじょう
44. 住吉山城 (四本松城、本城)

所在地 安達郡東和町太田字本城山

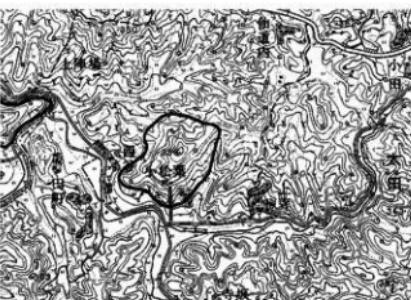
築城者 伴助兼

時期 平安期(治暦元年)~

遺構 主郭、腰郭、堅堀、井戸

概要 東和町の南西端、広瀬川をはさんで四本松城(岩代町)とむかいあう急峻な山城(標高356m、ふもとの比高120m)である。山頂の南、三段の帶郭の下に館跡(40m×40m)があり、その北隅には井戸がある。南につきだした腰郭には数ヶ所石づみがみられる。中腹に住吉神社があり、南につづく参道及び参道跡(深さ2m、幅8m、長さ100m)はたて堀のあとと思われる。北西山麓の舌状台地(標高260~280m)に西谷館がある。L字状の郭群が堀切で区画されている。住吉山城防備の第一線であった。又岩代町の四本松城との中间地点に中町館(標高272m、比高30m)がある。三方を川で囲まれた丘陵で、二つの四本松城の連絡あるいは前衛地点として重要な位置だったと思われる。なお、中町、田町、本町、仁井町などの町名が残っている。

城館の歴史 住吉山城は岩代町の四本松城築城以前の旧四本松城と言われる。源義家の臣伴助兼が築城(1065年)その後田原秀行が在城という伝承がある。文明3年(1471)石橋氏の5代義衡が岩代町、四本松城より移る。8代義久(尚義)の死後、家臣の大内備前守、石川弾正らによって石橋氏滅亡(義久の代で義久自殺とか、義久の時四本松に戻っているとか、各説あり)。石川弾正の居城となるが、伊達氏にせめられた石川氏が百目木城に戻って庵城となる。(菅野家弘)



第97図 住吉山城位置図



第98図 住吉山城略測図

45. 篠川城

所在地 郡山市安積町笹川

築城者 足利満直(他)

時 期 室町期(応永6年)

遺 構 東館に土塁、その周囲に空堀が残る

概 要 郡山市の南端、阿武隈川中流の左岸の平地にあり、北方は笹原川が東流し阿武隈川に合流している。

篠川御所と呼ばれる場所は、東館といわれる所を中心で、ほぼ方形の郭で周囲は空堀が廻り、土塁を積み上げている。南西隅に一段高い場所があり、稻荷神社が祀られている。東館(本丸跡か)の南側堀を挟んで本丸よりやや広い方形の郭があり、北・西・南の三方は空堀を廻らし、東は阿武隈川へ続き、南はさらに低く小さな谷となっている。

城館の歴史 笹川天性寺文書に東の丸は天文20年(1551)須賀川城主二階堂行が臣須田佐渡守頼隆、住居の郭にして本丸に稻荷の祠あり(「奥州篠川御所」とあり、後に須田氏の居城となり天正17年(1589)伊達政宗に攻められ落城し、後慶長8年(1603)江戸幕府は、城郭を廃し奥州街道を貫通させ、城の北方にあった篠川集落をここに移したといわれている。篠川城の名は、元弘3年(1333)の文書『石河光隆着到状』に「於奥州安積郡佐々河城」とある。また観応3年(1352)には南朝の拠点となった宇津峯城攻撃の折に佐々河合戦が行なわれた。文和2年(1353)『石河兼光軍忠狀』に「同(観応3年)四月、佐々河合戦致忠、其後大将安積部屋田城御座之間、一族相共令宿直警固畢」(『遠藤白川文書』県史7)、また観応3年10月17日の足利尊氏感状には「奥州佐々河合戦之時、父討死云々」(『伊達文書』県史7)とあり、伊達・石川・相馬など各氏が南朝の宇津峯城を攻撃戦ったものである。宇津峯城は文和2年に陥落した。

応永6年(1399)足利満直と満貞が篠川と稻川に下向し奥州のかためとしたと『鎌倉大草紙』にある。

応永11年(1404)7月には、小峯満政等20人の仙道の諸氏が一揆契状に連署し佐々河殿へ奉った(『松藩摺古』『白河古事考』『奥州篠川御所』)。

この一揆契状に篠川藤原満祐とある。このころ鎌倉公方の足利持氏と幕府足利義持の対立があり、持氏は

白河、長沼各氏へ伊達氏と懸田氏の反抗に軍勢の要請を行っている(「足利持氏軍勢催促状」伊勢結城文書、県史7他)。

篠川公方が足利持氏の軍と対立した以後、仙道諸氏は持氏と幕府方との争いの中にあって戦いをくりかえした。永享11年(1439)足利持氏は敗れ自害、満貞も自害をし、翌12年に佐々河殿(満直)は殺されたという(『沙弥禪元書状』県史7)。

以後篠川城は長沼盛秀書状に「佐々川へ仕陣」その他文書に笹川之地などしばしば見える。(村川友彦)



第99図 篠川城位置図



第100図 篠川城略測図

46. 守山城

所在地 郡山市田村町守山字三の丸

築城者 田村庄司

時 期 鎌倉期～室町期、戦国期～江戸期初期

遺 構 本郭、二ノ郭、三ノ郭、空堀

概 要 河岸段丘上に立地し、現況は畠、宅地、守山小学校敷地、城山八幡宮境内地となっている。

本郭は現在八幡宮境内となり、約50m四方ほどの平坦地となっている。その周囲に幅2m、高さ50～80cm程度の小土塁が残っている。守山小学校敷地は「三の丸」と呼ばれ、本郭より5mほど低くなり、一つの郭を形成している。本郭と三の郭の間に細長い平坦地があり、そこが二ノ郭とみられる。

二ノ郭と三ノ郭の間には、幅25m、深さ5mほど畠地になっているところがあり、内堀とみられる。三ノ郭の南西部には幅15mほどの低くなっているところがあり、そこが外堀と思われる。本郭とこの郭の間には区画するものは現存しない。

本郭の北・東・南は、比高10～12mほどの崖となっており、その東を流れる谷田川の支流黒石川を外堀に利用した天然の要害となっている。

三ノ郭の西側は、以前は、三ノ郭より2～3mほど低くなった畠地となっていたが、現在国道49号線が通り、以前の景観は失われている。東側が自然の地形を利用して堅固になっているので、東の方に対する防御を重要視したものであろう。

西側に、殿町、小姓町などの字名がのこっているが、江戸時代の守山藩に由来するものである。

城館の歴史 築城者及び築城時期は明らかではない。

『鎌倉大草紙』『鎌倉大日記』などによると、関東公方足利氏満の小山氏追討があり、小山義政の子若

犬丸が田村庄までのがれてきた。田村庄司は南党方の最後の拠点であり、氏満は田村庄司を討つことによって関東公方の奥州支配をゆるぎないものとしたいと考えていた。応永3年に守山城を中心とした合戦により、田村庄司は関東公方の軍勢に敗退した。

その後しばらく記録には登場しないが、『奥陽仙道表鑑』によると、天正10年7月、岩瀬の臣、

浜尾兄弟・遠藤・矢部・朝日の者が守山城へ向かって攻め寄せたが、田村勢は宿尻でもちこたえ、守山城から常葉讚岐守・橋本刑部少輔・浅川右馬介などが駆せつけて、二階堂軍勢を撃退するという事件が起きている。このように、守山城は田村庄司と三春田村氏と双方に関係している。

当初は田村庄司の居城として築城されたものであろう。関東公方に敗退したところから田村庄司は没落しあじめ、この頃から平姓田村氏の力が大きくなりつつあった。平姓田村氏は永正年間に三春に居城を移したといわれるが、それ以前の居城は明らかではない。

また、『田村系譜』『田母神氏日記』には守山の領主の名は出てこない。おそらく、田村庄司一族が没落したのち、しばらく誰も住まわず、戦国時代になり、三春田村氏が再興したものではないかと思われる。

その後、慶長3年上杉氏会津入部のとき本庄越前守に城を預け、蒲生氏再入部の折田丸中務を城代として置く。元和の一国一城令により廃城となったものと思われる。(高松俊雄)



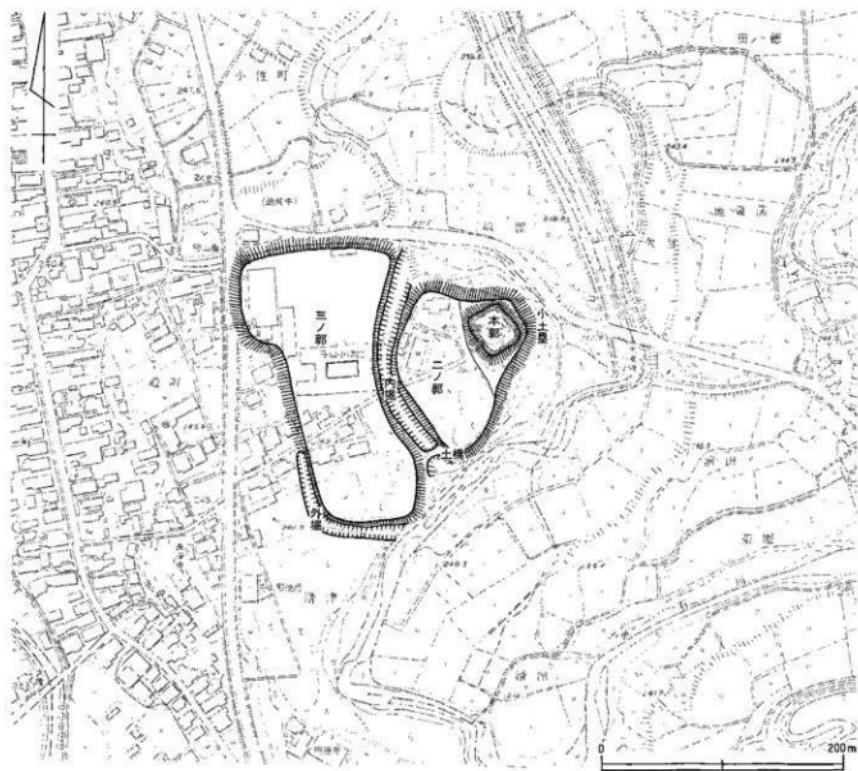
第101図 守山城位置図



写真24 守山城遠景（本郭）



写真25 守山城内堀の現況



第102図 守山城略測図

47. 高倉城 (まつみねじょう) (松峯城)

所在地 郡山市日和田町大字高倉

築城者　畠山政泰(高倉姓)

時 期 戰國期

遺構 本郭、土塁、帶郭

概要 高倉城は、国道4号線五百川橋より東方約1.3km余の独立丘陵上に位置する。丘陵の北麓を五百川が東流し、東麓を北流する阿武隈川と丘陵の北東端で合流する。城はこの両河川に挟まれた丘陵北端近くの最高所(標高320m)にある。平地との比高差約100mを測り、要害の地で、戦国期の典型的な山城の形態をなす。本郭は東西38m、南北42m余りの変則な四辺形で、周囲は高さ約2m余りの土塁が回る。さらに、その外側は幅5m余の帯郭が囲むようある。城は、南側を除き急な崖状を呈し、特に東から北側斜面には階段状に張り出した腰郭が幾重にも取りつけられ、防御を固めている。南へは丘陵が続くが、幅10m、深さ3m余りの空堀で区画されている。



第104図 高倉城略測図

高倉城は、畠山氏の北丘陵南安達における拠点で、城からは五百川流域を中心とした南安達・北安積一円を眼下に望み、東は阿武隈川を挟んで田村領へ続く。中世の古道(東山道)は、阿武隈川沿いに城の東麓を通り、北端を西に迂曲して本宮へ通じていた。阿武隈川を渡河すると田村領で、交通上の重要な地でもあった。

城館の歴史 高倉城主畠山政泰は、二本松畠山満泰の嫡孫であったが、父が早世し伯父持泰が家督を継いだため高倉城主となる。この後政泰一満国一実證一晴賢一氏詮と続く。天正4年頃田村方に組みましたが、その後離反。天正10年3月田村清顯は高倉城を攻撃。城主高倉近江(氏詮)等、二本松勢これを撃退している。後に伊達政宗に服し天正13年11月本宮合戦では、高倉城に伊達方の将伊東肥前・富塚近江・桑折津連等が派遣されている。高倉氏は天正18年蒲生氏入封により移封。城は元和年間に廢城となる。(大河峯夫)



第103図 高倉城位置図



写真26 高倉城遠景（北方より）

48. 高玉城

所在地 郡山市熱海町高玉字北梨子平

築城者 高玉太郎左衛門常頼

時期 戦国期

遺構 本郭、帯郭、空堀、土塁等

概要 高玉城は郡山市熱海町高玉地内の石筵川沿岸の埋積谷床西側の開析された段丘上にある小丘を利用し、築城している。城の西側は丘陵に続くが、他は急な斜面となっている。特に、東から北側斜面は三段の土壇によって切られ、急な崖面を呈している。また、西方の丘陵に連なる部分は空堀によって切られている。頂部の本郭跡には、高さ1m余の土塁も確認できる。これより東側の一段低い平地には、愛宕神社が祀られている。また、かつて城の守護神として建てられた高司神社が城の北東に鎮座する。

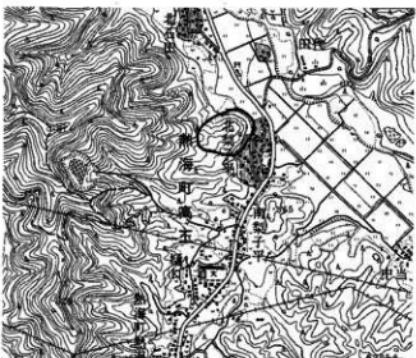
なお、城の東麓にある字館地内は、城主も含む家中の者の屋敷跡地であったといわれる。高玉城は石筵・高玉・横川の三ヶ所、知行千百石余を領する、この地域の中心であった。東は横川・安子ヶ島を経て本宮又は郡山に至り、西は石筵を経て峠道となり会津に至る交通の要衝でもある。畠山(二本松)時代には会津への出口として、蘆名氏旗下となつては蘆名氏の安達・安積進出の東進前線基点としての役割を持った。

城館の歴史 高玉氏は、二本松畠山氏の一族である。畠山持泰の弟・家重より分系し、家重一政実一政直一村継一家継一常頼と続く。高玉城は常頼代の天文年間に、芦名氏旗下になつた頃築城されたといわれるが、不詳である。天正17年5月伊達政宗は、会津攻略の途次に



写真27 高玉城遠景（北より）

芦名旗下の安子ヶ島城に続き、高玉城を攻撃。同年5月5日城主高玉太郎左衛門夫妻・娘婿荒井新兵衛夫妻をはじめ、城中男女六十余名が壮烈な討死を遂げ落城した。政宗は、高玉城の守備堅固であった様子を報じている(天正17年5月6日付『登米伊達文書』)。(大河峯夫)



第105図 高玉城位置図



第106図 高玉城略測図

なりやまで
49. 成山館

所在地 郡山市安積町成山町

築城者 伊東満祐

時期 不明

遺構 帯郭、土塁

概要 郡山市安積町成山町地内にあり、篠川御所の北西約2kmのところにあり、丘陵上を利用した山城で、本丸・二ノ丸と推定される場所や帶郭が顯著に残っている。現在は成山公園として整備されている。本丸と推定される中心の最も高い部分は方形に土塁があったと思われるが、運動場となっている。

館跡からの眺望は、安積一円を見渡すことができる。北側館の下には笠原川が館を囲むように流れている。

城館の歴史 成山館の居城者は、篠川御所の時代に成山判官と呼ばれる者が居館したと伝えられている。藤原満祐という名が応永11年(1404)の一揆契状にみえ篠川とあることから、伊東氏の一族伊東満祐がこの成山館に居館したとも考えられるが確かでない。(村川友彦)



第107図 成山館位置図

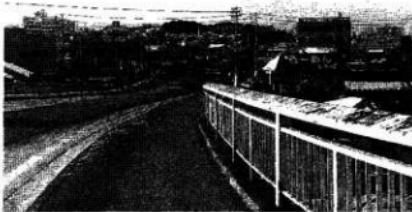
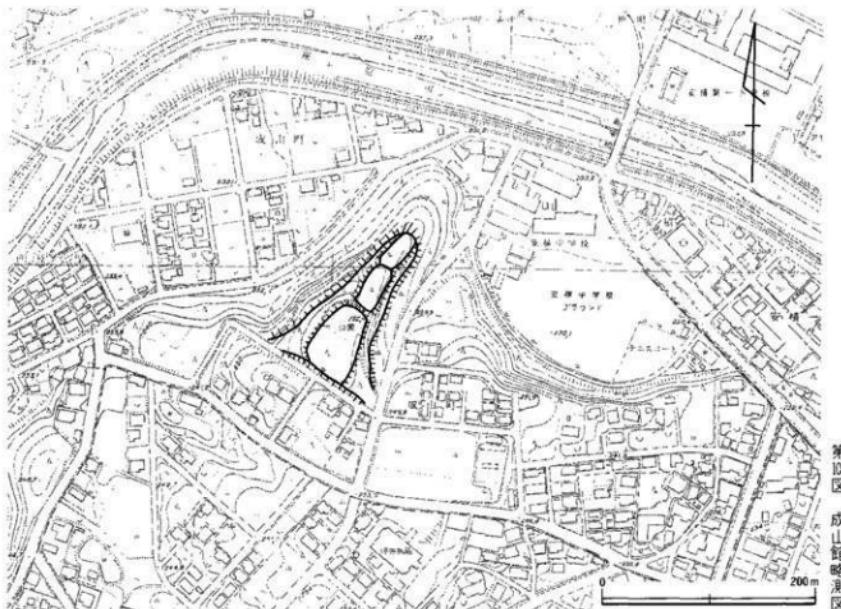


写真28 成山館遠景



第108図 成山館略測図

かたひらじょう かみだて
50. 片平城(上館)

所在地 郡山市片平町片平上館

築城者 伊東六郎左衛門祐長、後に大内助右衛門

時期 不明

遺構 土塁

概要 安積盆地の西端丘陵上を利用した山城で、片平下館といわれる平地館跡が城下にある。

付近の字名に中館・南上館・外堀・下館などの地名がある。城跡の本丸跡と推定される頂上に愛宕神社が祀られているが、周囲に土塁が方形に残っている。

城館の歴史 文治5年(1189)

の頼朝奥州征伐で功績があつた工藤祐経に安積郡一円を与えられ、祐経の弟伊東六郎左衛門祐長が安積に入部し、片平城に入った。祐長の孫伊東下野次郎祐持に続き、さらにその嫡流の伊東大和が城主となつた〔『仙道記』『仙道田村莊史』〕。

永禄2年(1559)蘆名氏が仙道を攻め、安積郡を掌握し片平も会津蘆名の配下となつた〔『異本塔寺長帳』〕。

天正初年に田村清顯は安積へ進攻し、片平城も田村へ明け渡しとなり、天正4年(1576)に大内備前の息子大内助右衛門が片平城主となって片平親綱と称した。(川村友彦)



第109図 片平城位置図



第110図 片平城略測図

くろかげじょう
51. 黒鹿毛城

所在地 郡山市西田町丹伊田字館

築城者 新田土佐守頼成

時期 室町期

遺構 郭、空堀、土塁、的場

概要 丘陵上に立地し、現在は山林と宅地になっている。その丘陵頂上の平坦面が本郭と思われ、現在民家が建てられている。その北東側には、基底部幅約5m、高さ1~3mの土塁が300mほどつづいている。その土塁の北側は、幅5m、長さ50mほどの的場と呼ばれる平場が残っている。的場の北縁に小土塁が残り、その北側は約5mほど低くなる。

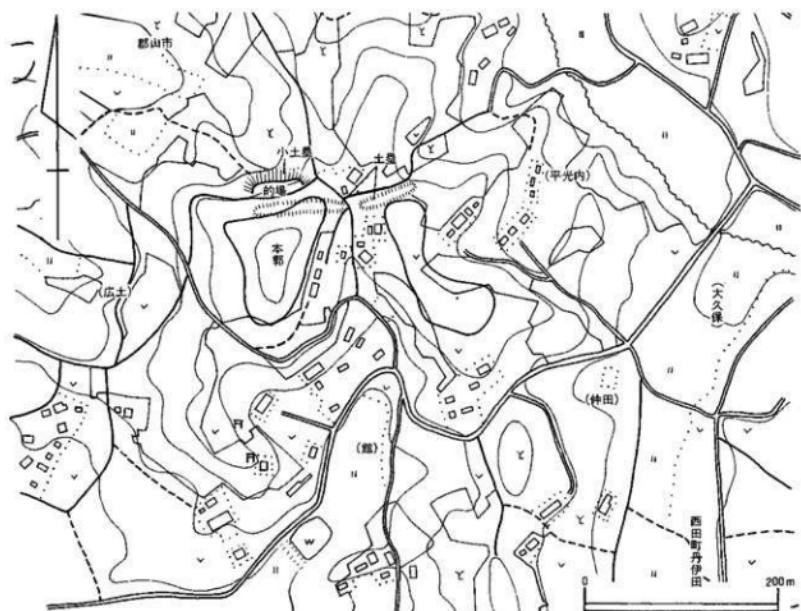
城館の歴史 築城の時期や築城者は明らかではないが「田村郡郷土史」や「高野村郷土史」によると田村月齋の二男新田土佐守頼成以来代々居住していたといわれ、天正18年の奥羽仕置の後、田村氏の改易とともに廃城になったと伝えられる。

本郭は高所にあり、その周囲は大きな土塁で囲まれており、堅固な守りの城となっていたものであろう。根木屋は明らかではないが、城の周囲の平坦地であつたとみられ、その周囲に集落が展開していたものと考えられる。

灌漑用水源は明らかではないが、主に天水を利用した農業経営が行われていたものであろう。(高松俊雄)



第111図 黒鹿毛城位置図



第112図 黒鹿毛城略測図

あなざわたて
52. 穴沢館

所在地 郡山市西田町三町目字穴沢・馬場小路

築城者 穴沢左衛門五郎季成

時期 南北朝期～室町期

遺構 本郭、北郭、南郭、空堀、井戸、掘立柱建物、土橋、礫石経塙

概要 阿武隈川の右岸の氾濫原上の中丘に本郭がある。現在は農地開発事業のため本郭のみ畠として遺存し、周囲は水田となっている。

東西50m、南北70m、周囲からの比高が3～5mほどの本郭があり、土塁は耕作でくずされているものとみられ、遺存していない。本郭の周囲には幅10～15m

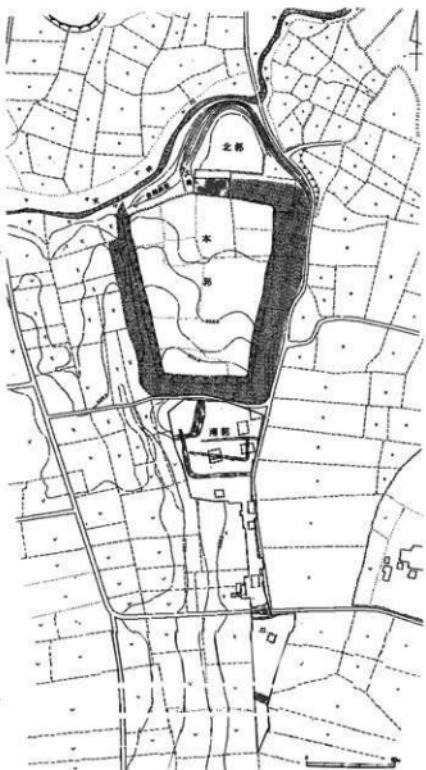
の堀がめぐっている。東側が水田となっており、南側は多少埋っているものの深さ2mほどである。

単郭と思われていたが、本郭の北側に郭が一つあり、本郭とは土橋で結ばれている。また、南側は馬場小路遺跡と呼ばれていたが、昭和57年の発掘調査で掘立柱建物群、一字一石経を埋納した礫石経塙、幅3～4m、深さ1mほどの大溝などが検出され、瀬戸産灰釉陶器や中国産陶磁器が出土している。本郭の南側も一郭を構成していたものと思われる。

城館の歴史 小字名穴沢の西側が小字馬場中路、南側が小字馬場小路と呼ばれ、「馬場」があったという伝承がある。

穴沢氏は田庄村司の一族で、相楽文書の北畠親房袖判沙弥宗心書状に穴沢左衛門五郎季成の名がみえる。南北朝時代は田村宗季とともに南朝方に属した。

築城及び廃絶時期は明らかではない。(高松俊雄)



第114図 穴沢館実測図 「郡山市誌」(郡市教育委員会)による



第113図 穴沢館位置図



写真29 穴沢館航空写真

いなむらじょう

53. 稲村城

所在地 須賀川市大字稻字新城館、字岩下、字門の内、字中館

築城者 二階堂氏、吉良貞家

時期 南北朝期

遺構 郭、空堀、土塁、虎口、鐘撞堂

概要 稲村城は、駿遊堂川西岸の平坦地をはさんだ丘陵にあり、南には稻村公方足利満貞が居住した稻村御所がある。

現在、「門の内」という小字の場所に、居館跡があり、ここには、永和2年や康永3年などの板碑がある。

居館跡より北々西へ沢に沿って登っていくと、南北に60m、東西に30m程の土壇がある。ここからは、北畠頼家等がたて籠った宇津峰城が一望でき、南朝方の動向を探る物見台の役割を果たしたものであったと考えられる。

この郭の南北には、それぞれ幅3m程の空堀がある。

これより西、及び、沢をはさんだ南にも土塁をめぐらせた郭が2つある。ここには虎口や馬道なども、その姿をとどめており2つの郭の間には、切落しも見られる。

なお、南側の郭には、小さな石の祠が祀られている。

この南の郭の東面は、急な断崖となっており、眼下を通る街道には脱みをきかせたものと思われる。

そして、南側斜面下には、もう一段の郭があり、家臣団の根小屋があったと考えられる。

この他、北東に約300m離れた場所に鐘撞堂の跡があり、その北東には八幡神社が祀られ、西側には臨宗普応寺の旧跡がある。

地元の古文書によれば、この八幡神社は元来、隣接する旧大桑原村(現在須賀川市大字大桑原)鎮座の神社であったものを「稻村殿」(足利満貞)が稻村御所の鬼門にあたるこの地へ遷座し、鶴ヶ岡八幡宮の分神を勧請したものだという。

また、現在須賀川市諏訪町にある普応寺の寺伝によれば、当時ここにあった寺は、結城親朝が正平5年に中興開基したもので稻村殿が深く帰依したといふ。

城館の歴史 最初の築城は鎌倉時代まで遡るものと

考えられるが、明確ではない。

ちなみに、稻村城の東方に、平太仏とよばれる板碑があり、建保元年(1213)に刑死した和田平太胤長の墓と伝えられている。これは当時須賀川地方を領有した二階堂行村が幕府の命により、乱をおこした胤長を領地内に配流の上、誅殺したものである。

現在の稻村城は、南北朝時代、北朝方の拠点として、吉良貞家らによって整備されたものと考えられる。

南北朝の動乱の中、北朝方の奥州探題吉良貞家は多賀城を占拠して、宇津峰城に陣した南朝方と対抗していたが、正平6年に敗れ、浜通りの中村城に逃れて、更に南下し小高館に入り、飯野八幡宮を参拜、戦勝を祈願し、菊多庄淹尻宿を経て稻村城へ入った。

翌正平7年、南朝方の勢力が強まる中、稻村城にあった貞家のものとに、続々と北朝方の兵力が集結し、これをもって、多賀城の奪回に成功、南朝方は、宇津峰城に立て籠って抵抗した。

勢いの増す貞家以下北朝方は、大軍をもって宇津峰城を包囲し、必死の抵抗を試みる南朝方と、1年以上に亘る数々の激戦の末、遂に落城せしめ、これにより、南奥における南北朝の動乱は、事実上幕を閉じたのである。(菅原英明)



第115図 稲村城位置図



第116図 稲村城略測図

いなむら ご しよ

54. 稲村御所

所在地 須賀川市大字稻字御所館1番地

築城者 足利満貞

時期 室町期初期

遺構 郭、堀底道、土橋、土塁、堀

概要 標高260m・比高10m独立丘陵で、南北500m、東西300mの台地を3区画に造成した小高い平城である。中央部の御所館は比高15mで本丸に当たる内郭をなし、1.5町四方の広さを持ち、南西部に30m四方に張り出した郭がある。御所館への通路は、東北部から掘り割れた幅5mの堀底道が通じ、御所館から北部の郭にある赤城神社へ連絡する土橋へ取付いている。

御所館の主要遺構と考えられる公方館は北部土塁に添った南面する一部で40m×50mの広さの地域で灰釉・青磁等の破片が表探されている。またこれに対して西部の厨遺構と考えられる北域からは「かわらけ」の破片の多く採集されている。南部の土塁付近からは轔の火口が発見されているところから鍛冶遺構があったと考えられる。

また、南西部に30m四方張り出した郭がある。南部には二段の帯郭が認められその長さは南北150m、幅30mの広さを持っている。東部に張り出した腰郭は、南北100m・東西30mの平場となり、この城に付属する真言宗の赤城寺がある。

北部地区は土橋をもって赤城神社に通じており、神社及び明徳3年(1392)の板碑がある。城の南部には「徳玄」と呼ばれる郭がある。これは御所館から見下ろす平地にある80m×100mの広さを持つ平館である。御所とは堀によって仕切られ、四方は堀によって囲まれている。

御所館の交通上の立地から考えると、鎌倉街道と会津街道の交叉点に当たり、稻村二階堂家(行村系)の稻村城を擁して、これをバックとして持っていた。

城館の歴史 明徳3年(1392)南北朝が合体し、將軍足利義満は関東公方満兼に由出羽・陸奥両国の支配を命じた。満兼は応永6年(1399)弟満貞を稻村公方として下向させた。次いで鎌倉公方足利満兼は、応永6年7月奥羽巡視の際、稻村御所に逗留している。

この稻村御所の位置は篠川御所とともに田村郡、伊



第117図 稲村御所位置図

達郡に近接しており、奥州における反関東豪族をおさえる根拠地として重要な要衝の地を選んだものである。これを補佐する須賀川二階堂氏・稻村二階堂氏・安積伊東氏の領地内にある。

この両御所の開府は今まで鎌倉という割と遠方にあった支配者が、身近に来たことで、近辺豪族の反発が強まり、反乱が起こった。応永6年伊達円季・蘆名満盛の乱などがあった。稻村、篠川公方の支配下にあった南奥の二階堂、伊東等20名の傘形連判状、田村、石川一族連判状などがある。時代が移るにつれて、奥州の状勢も変化をはじめ、応永20年の伊達宗宗の乱には、鎌倉から出兵し戦うが、公方は必ずしも利有らず引き揚げている。そのうち幕府内でも將軍兄弟の争いが起こり、この渦中で篠川公方満直は幕府方へ、稻村公方満貞は鎌倉府方へと分裂していった。この対立は永享10年(1438)10月、武藏国府中分倍河原の合戦となり対決した。関東武士の中には鎌倉公方に叛する者が多く鎌倉方は敗れた。

鎌倉方の武将は鎌倉永安寺に入り、持氏以下剃髪し、上杉憲実を通じて將軍に助命を願ったが許されず、鎌倉公方とともに稻村公方満貞、稻村城主二階堂伊勢入道、二階堂民部少輔らも自害した。

以来岩瀬西部の稻村二階堂氏の勢力は衰えたが、長禄年間戦国大名となった須賀川二階堂盛重(為氏)は保土原氏・浜尾氏など稻村二階堂家の有力武将を御一門に列した。(永山倉造)



写真30 稲村御所土塁



写真31 稲村御所遠景



第118図 稲村御所略測図

宇津峰城

55. 宇津峰城（国史跡宇津峰）

所在地 須賀川市大字塙田字雲水峯1番地・2番地

築城者 塙田隆奥入道国時

時期 南北朝期

造構 構形(千人溜り)、土壘

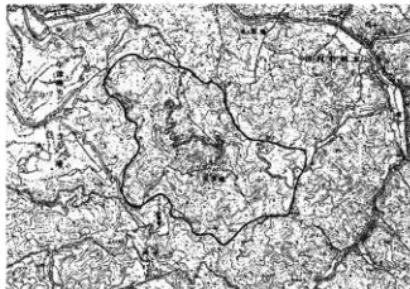
概要 備高676m・比高426mの独立峰にあり、三角錐状の要害の地である。山頂からは田村・安積・岩瀬・白河の県南地方が一望できる。南北朝の動乱期に、ここに南朝方の本拠が置かれた。それにふさわしい地形である。

城の縄張りは構形・長平城(根小屋)・星ヶ城・鐘撞堂で、それに御江戸戸・うがい場清水が付属し、東乙森・弓射峠・西乙森の出郭があり、城の要所に弓張り石と呼ばれる。自然石2個を組合せた置石がある。出城群は山城を取り囲むように配置され、北に柴塚城、北西に御代田城・守山城・谷田川城・宮田陣場、西に西山城・提鐘撞堂・細久保館、南に六日市城・市ノ関館・日照田館・蛇頭館・滑津館・刑部内館、木曾には宇津峯の居館である矢柄城があり、観応3年(1352)7月9日真っ先に攻められている。

城館の歴史 南北朝動乱期に南朝方が仮の都を置いた吉野は山伏の大本山があり、各地方に先達がおり、全国の南朝方と連絡がとられたと考えられるが、その戦乱が全国に拡大するようになり、吉野山への入峯が困難になると地方先達が、配下の山伏、隣下の信者を集め修行する「田舎峯入」をするため、宇津峯を回峯として、田村泰平寺を中心とする衆徒が入山するようになったとみられる。寺は初め須賀川市塙田字大草に

あり、宇津峯が南朝方の拠点として重要な役割を果たした時期に活動したと思われる。

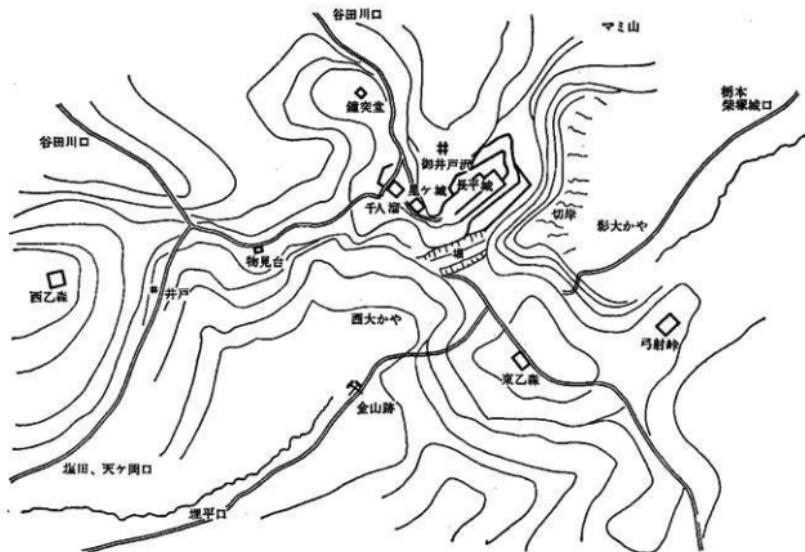
宇津峰城は貞和2年<正平元(1346)>と文和元<正平2(1352)>のころの2度、陥落の憂目にあっている。まず、貞和2年奥州管領吉良貞家以下の北党の軍勢は、伊達郡の藤田城、靈山城などとあわせてこの宇津峰城に総攻撃をかけ、その結果これらの諸城はあいついで陥落し、宇津峰城によっていた北畠顕信は守永親王と共に出羽に走った。その後、観応の擾乱に乘じて顕信らの南党勢力は、いったんは多賀国府を奪回したが、翌文和元年3月のころ、おわれて再び宇津峰城にたて籠り1年余にわたる攻防戦が始まった。吉良貞家は初め篠川(郡山市)に拠点を移し守山(郡山市)方面から谷田川に進み、7月3日柄久野原にて合戦し六日市城を攻める。7月9日反転して矢柄城西手にて戦を行い北朝方戦功を立てる。この年は矢柄城攻の以後はこれといった戦は無く、北朝方は籠に駐屯して宇津峯を包囲した。文和2年2月北朝方は河曲口で合戦する。4月に入ると北朝方は総攻撃をかけた。4月5日柴塚城を攻め、その勢いで弓射峠から東乙森を落し、4月15日、長平城の切岸において激しい攻防戦が行われるが、次第に本城へと攻め込まれ遂に5月4日宇津峰城は落城した。この両度の宇津峰城攻撃は奥羽北党の総力を傾けて強行された。本県の武士たちも、石川・伊賀・国魂・岩城・岡本などが参加していることが、その軍忠状によってうかがうことができる(『石川文書』『飯野文書』『国魂文書』『白川文書』)。宇津峰落城を最期として、南奥羽における南北朝動乱は、北朝の勝利のもとに事実上終息した。(永山倉造)



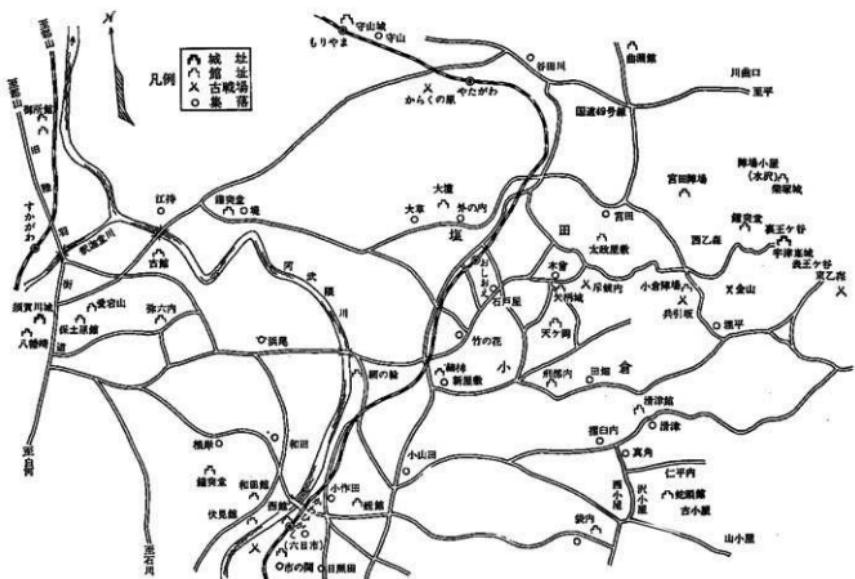
第119図 宇津峰城位置図



写真32 宇津峰城遠景



第120図 宇津峰城略測図



第121図 宇津峰城付近の城館

「猪俣川面史」第二卷(猪俣川市物販委員会)より転載。

56. 岩瀬山城(愛宕山)

所在地 須賀川市愛宕山

築城者 二階堂行朝(信濃入道行珍)

時期 鎌倉期後期

遺構 土塁、堀

概要 標高278.4m、比高40m、戦国時代の須賀川城の東部に位置する独立丘陵である。二階堂行朝によって築城された第1次の須賀川城と考えられよう。戦国時代に入ってからは須賀川城の詰の城の役割を持っていったと考えられる。

城は約30万m²の広さを持ち、本丸、北の丸、南館、五老山、妙見山、守谷館からなる平山城である。北方に鎌倉時代の集落である古屋敷、中ノ内、要害、中宿等があり、その中央部は駒込川(岩瀬川)が流れおり、古くから岩瀬渡しがあった。

古代から中世にかけての鎌倉街道はこの城の東部を通じていたと考えられ上宿(芦田塚遺跡)、中宿、下宿があり、この城の大手は上宿の芦田塚を向いている。

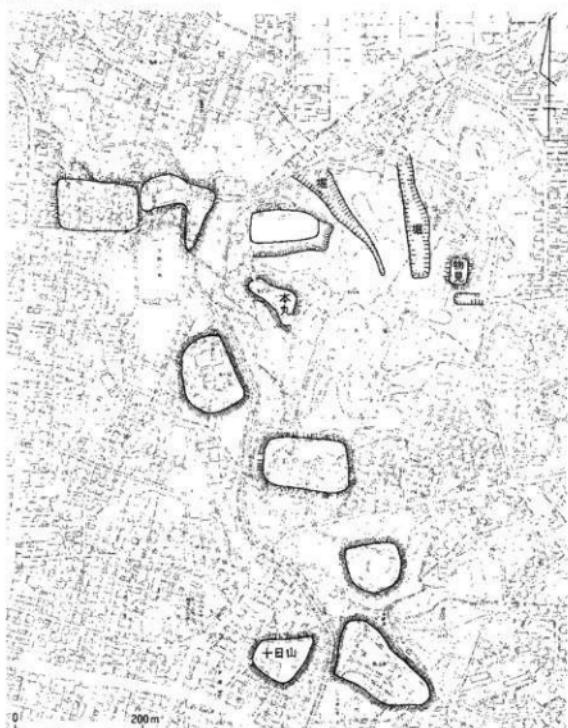
城館の歴史 二階堂家の岩瀬入部は、主家の北条得宗家の一族である、塙田陸奥入道の塙田郷を中心とする奥州所領により、その家人として岩瀬郡川中郷を所領としてその中心を中宿に置き、岩瀬山に城を築いたものと考えられる。

元弘3年11月30日の岩城郡の地頭岡本隆弘が須賀川城(岩瀬山城)を出発し、おそらく多賀城に着いたと考えられる着到状がある(『秋田藩家蔵文書』秋田県立図書館蔵)。

この城跡は須賀川市都市公園になっており、五老山で毎年初冬に「たい松あかし」を行い、30本の大たいまつ、1,000本の小たいまつと一緒に焚いて落城の煙を弔っている。(永山倉造)



第122図 岩瀬山城位置図



第123図 岩瀬山城略測図

57. 八幡崎城

はちまんざきじょう

所在地 須賀川市八幡山

築城者 不詳

時期 不明

遺構 土塁、八幡祠

概要 この八幡崎城は中世における須賀川城の裏鬼門にあたり、会津街道から須賀川城への通路口である大黒石口の守りのため築かれたものである。南北30m、東西50m程の土塁があり、標高274.7mの丘陵上にあって、西から北の据部を駿河堂川が蛇行(現況は河川改修)して流域は240mの低地で30mの比高がある天恵の要害である(現況は区画整理で市街化されている。)。

北麓と南麓には堀をめぐらした屋敷跡があるが館主は不明である。

城館の歴史 天正17年10月26日、伊達政宗の須賀川城攻めには、「奥陽仙道表鑑」によると大黒石口が決戦場となり、須賀川勢は大将須田美濃守盛秀の手勢200騎をはじめ、塙田右近大夫の手勢、鉄砲組鈴木六郎左衛門尉、泉田将監、須田源藏らによる鉄砲300挺、これに、援軍の佐竹勢200騎が河合甲斐守、武茂左馬介、月居日向守、茅根土佐守等600騎と足軽2,000人で守将は達藤雅楽頭であった。

伊達勢は長沼新国上総介が先陣、二陣が白石若狭守、後陣四保但馬守等で須賀川城攻防の最激戦地となり、本城が炎上しても八幡崎城の守兵は勇戦し、最後の一兵までの玉碎戦で、「伊達治家記録」によると、「本城落居シテ後マデ其役所ヲ守リ戦死スルコト実ニ希代ノ事ナリト人皆嘆美ス」とある。

なおこの激戦で両軍ともに多数の戦死者を出したが、

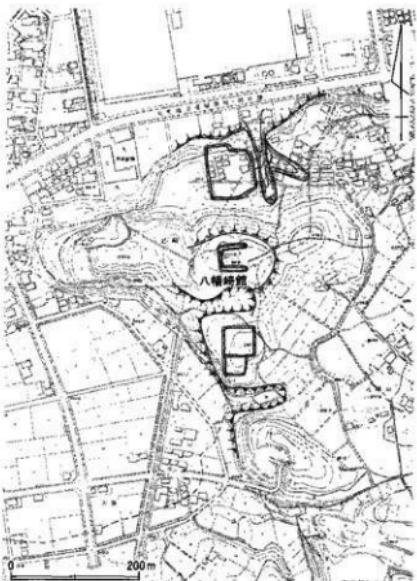


写真33 八幡崎城遠景

援軍佐竹勢の河井甲斐守や茅根土佐守なども戦死し、本市長禄寺に墓がある。(村越幸司)



第124図 八幡崎城位置図



第125図 八幡崎城略測図

ごしよのみやだて

58. 御所宮館

所在地 須賀川市大字森宿字坪の内

築城者 不詳(岩瀬氏か)

時期 鎌倉期

遺構 郭、腰郭、空堀、土塁(ます形)、虎口、水ノ手、大手、搦手、ホリ底道

概要 この館跡は、上人塙遺跡の北々東約700mの阿武隈川西岸の断崖絶壁にのぞむ丘陵にあり、西には東山道を望む交通の要衝に存在する。

中心となる一ノ郭には、100m四方の土塁がめぐらされ、その外側を幅10mの空堀が囲んでおり、南部には腰郭が二段に築かれている。

西には、東山道より大手門を通り、二ノ郭に至る通路があったと考えられる。大手門跡の南北には土塁が築かれ、西には切落としがあり、また、東には二ノ郭の門跡もある。

山館の西に居館跡がある。南斜面を三段に整地し土塁をめぐらせており、一段目の西の部分には鎌倉期の浮彫三尊仏が祀られている。二段目は屋敷があったと考えられる所で、湧水がある。そして、三段目の中央

部には、通用門があり、山館へつながっている。

山館と居館の間には物見台、若しくは鐘撞堂と思われる場所があり、土塁の痕跡が認められる。なお、現在ここには愛宕神社が祀られている。

城館の歴史 不明な点が多い館跡だが、遺構内に多数存在する磨崖板碑群をみると、須賀川地方でも古い時代に属するものである。

なお、一ノ郭には顯國魂神社が祀られており、また、かつて岩瀬国造社が合祀されたことを示す江戸時代の御札も発見されている。(菅原英明)



第126図 御所宮館位置図



第127図 御所宮館略測図



写真34 御所宮館遠景



写真35 御所宮館遠景

59. 要害館

所在地 須賀川市古屋敷

築城者 不詳

時期 不明

造構 水堀

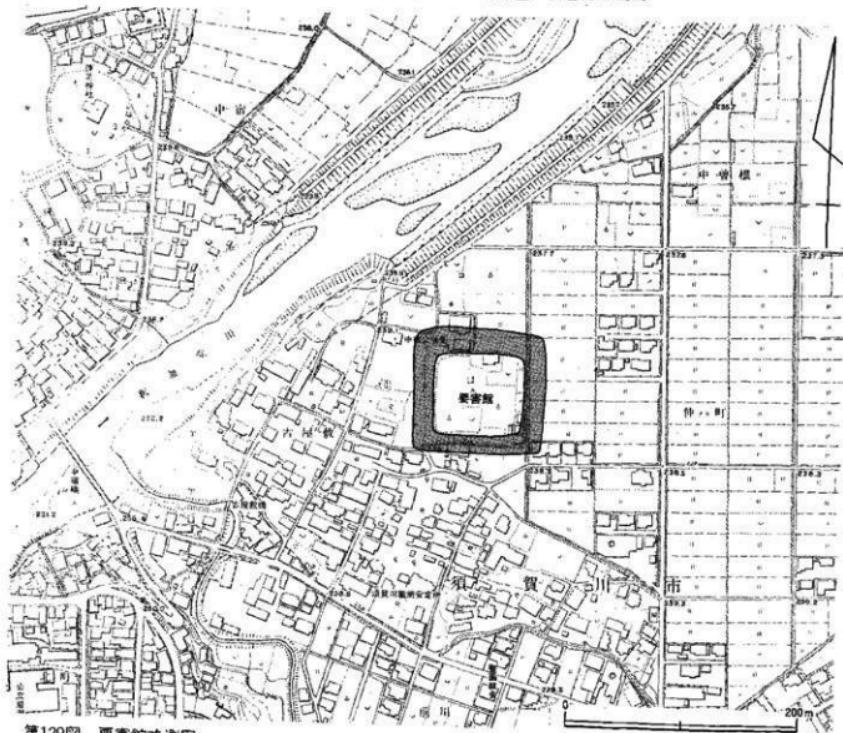
概要 この館は积水堂川の右岸の氾濫原にあり、東山道の岩瀬の渡しに接続している。「岩瀬郡誌」には長さ30間の堀により囲まれた一画と記録されている。また岩城街道にも連なる要害の地であるが、現状は農地と住宅地になっている。なお、昭和62年この接続の駅家遺跡からは和同開珎などが出土している。

城館の歴史 この地区は古代より岩瀬郡の中心部で、養老2年の石背国(の)國府、岩瀬郡の郡衙、駅家などが置かれたと想定された地域である。この館は岩瀬の渡

しを扼した中世街道(鎌倉街道)の要衝としての役割りをなしたところである。また、积水堂川も比較的浅瀬の所で川を越えて中宿に渡ったと推定される要地である。(村越幸司)



第128図 要害館位置図



第129図 要害館略測図

60. 和田城（古城は峰が城）

所在地 須賀川市和田字大仏

築城者 須田美濃守秀範

時期 鎌倉期 建久元年

遺構 土塁、郭

概要 この古城蜂が城は阿武隈川の湾曲する丘陵突端の60mの比高の絶壁上にあり、源頼朝の奥州平定に従った須田美濃守秀範が築城したと伝えられ（『浜田古事考』）、土塁、郭跡を存しており、北側の一郭は文安年間二階堂氏の為に築いたと伝えられており、伏見岩の絶頂にあった羽黒権現は二階堂為氏が須賀川城に入城後、妙林寺とともに移したという。その後の和田城は大仏古墳群（須賀川市指定）の丘陵上を本拠とし岩瀬東部を支配した。山館本丸は南北100m、東西40mの土塁があり、大手は北口にあり、東は阿武隈川東岸の市野開館等に対峙する物見台があった。

城館の歴史 この和田館主の須田氏は岩瀬郡の3分の1を所領し、須賀川二階堂の筆頭家老で伊達政宗の須賀川攻めには須田美濃守秀盛は須賀川方の総大将として、岩城勢800騎、佐竹勢200騎の援軍を受け勇戦したが、二階堂の御一家保土原江南斎の内応や四天王守屋筑後守の謀叛などにより落城した。

秀範は住居館が炎上して、常陸佐竹氏を頼り、茂木城1万石の城代となる。佐竹氏の秋田移封に随伴し、佐竹公より特別の知遇を受け御一門格として角館や横手城代となり横手川を改修するなど善政をしき、また二階堂遺子の岩瀬御台や須賀川衆を導いた。兵学にも勝れ日本三美濃と称せられた。和田の堀をめぐらした居館跡の中心には茶樹を植え保存されたが焼米が度々出土した（『浜田古事考』、『岩瀬郡誌』、『須賀川市史』）。農地の基盤整備により消滅した。（村越幸司）



第130図 和田城位置図



写真36 和田城遠景



第131図 和田城略測図

61. 長沼城(千代城、牛が城)

所在地 岩瀬郡長沼町大字長沼字日高見山

築城者 伝長沼氏

時期 伝南北朝期

遺構 本丸、二ノ丸、東・西三ノ丸、土壘、空堀、水堀、櫓形、石垣

概要 当城は、町の北部に西から東へのびる丘陵の先端に主郭を置き、尾根続きの山陵を大堀切(空堀)で分断している。したがって、この城は、城郭の中核を山頂と中腹に構築しながら、山麓の平地をも総合的に組合せた平山城である。

まず、当城を包囲した攻撃軍が外郭を突破し、大手口に侵入すれば半坂門より道は急に狭くなり、左手の北帶郭上よりの射程距離に入る。上半坂まで突入すると前面に西三ノ丸が横たわる、二ノ丸および三ノ丸土壘よりの攻撃にさらされる。西三の丸に突入すれば、前面に西櫓、左手に二ノ丸があり、前面と側面からの射撃をうけることになる。

西櫓突入に成功した攻撃軍が、さらに本丸突入を企図すれば、西櫓と南帶郭を分断した廊下橋を通らねばならない。橋を撤去すれば、攻撃軍は一時進入路を失うと同時に、二ノ丸土壘上と南帶郭よりの射撃に遭遇することになる。

城館の歴史 当城をめぐる攻防は、永禄年間激烈をきわめたが、永禄9年(1569)蘆名盛氏が手中に收め、新国貞通が城主となつた。その後、天正18年(1590)蒲生領、慶長3年(1598)上杉領、慶長6年(1601)再蒲生領の支城として存続し、元和元年



写真37 長沼城南帶郭(左手上部は本丸)

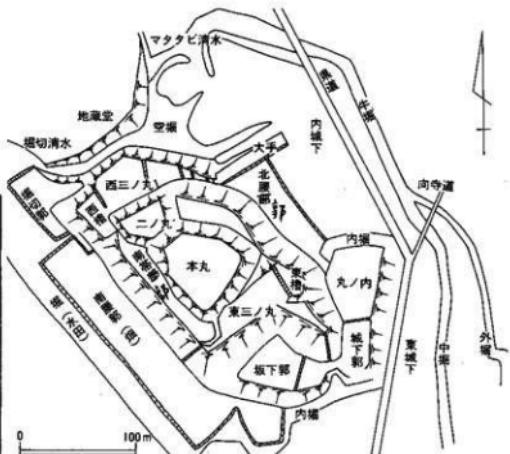
(1615)の一国一城令により廃城となった。したがって、現遺構の城郭規模は、文禄・慶長期に最終的な完成をみたものと考えられる。(武田奥一)



第132図 長沼城位置図



写真38 長沼城城東の外堀



第133図 長沼城略測図

まつやまじょう

62. 松山城

所在地 岩瀬郡長沼町大字横田字松山

築城者 不詳

時期 戦国期

遺構 土塁、空堀

概要 当城は、横田館跡の北東約300mの丘陵上にある。343mの山頂に主郭を置き、西と東に延びる尾根上に郭を配置した点からみれば連郭式のようにもみられるが、城の北側斜面には、山頂を中心として段階的な郭が作成されており、その規模および構造は複雑である。

主郭のある尾根上の東端は、幅12mの空堀で尾根を南北に切断している。この空堀西の郭には幅5mの土塁をめぐらしているが、空堀東の郭には土塁の痕跡はみとめられない。

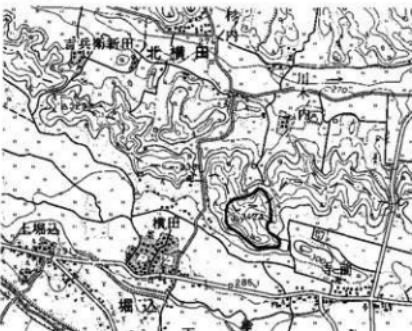
また、各郭群のうち、土塁をもつものが少なく、単なる平坦部のみのものが多いのは、尾根上の傾斜面を利用しているため、自然に各郭に段差が生じ、土塁の必要性がなかったためであろうか。

南・北・西の三面が急崖をなし、長沼、木之崎、矢田野方面の展望が良好である。当城の北方は今泉より安積へ、西方は長沼へ、東方は須賀川へ、南方は白河

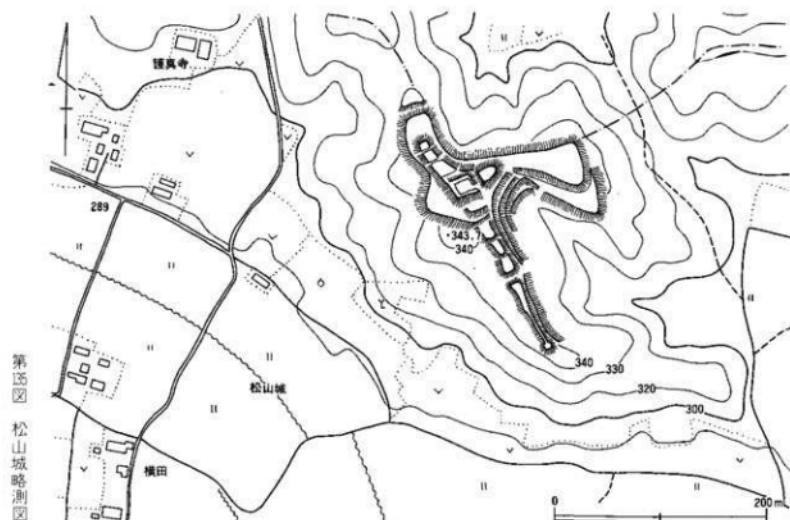
へ通する要衝である。

城館の歴史 当城の沿革は明らかではないが、古文書によると恒久的な城郭ではなく、臨時の城砦の性格が強い。しかし、その結構は大きい。

天文6年(1537)蘆名盛氏が二階堂行長領であった当城を攻撃(『塔寺八幡長帳』)。また、『仙道記』によると永禄5年(1562)8月、田村氏が入城したが敗退したという。同9年(1566)2月、蘆名盛氏・盛興父子が当城より、横田を攻め横田氏を捕えている(『塔寺八幡長帳』)。(武田奥一)



第134図 松山城位置図



63. 江泉館

所在地 岩瀬郡鏡石町鏡田字深内町81

築城者 深内藤内?

時期 不明

遺構 腰郭、空堀、土塁、虎口

概要 白河風土記に「江泉館、村ノ北裏ニアリ高サ十間館主深内藤内ノ遺跡ト云ヒ伝フ」とある。この江泉館は駿迦堂川の東岸標高279.9mの丘陵を利用したもので、北側背部は35°の急崖の背戸池、西側は金山館との中間に谷間があり、東部からの丘陵は切通しを設けて遮断した要塞である。

館の上部は南北40m、東西100mの本丸をなし、周囲に土塁(高さ80cm、巾2m)をめぐらし、堀部まで数段の帶郭(帯状曲輪)を構築している。また、本丸東寄りから大手口へはジグザクの通路となっている。

また、館の南斜面の三・四・五の帯状曲輪には集中的に45基の板碑群がある。

城館の歴史 須賀川市史によれば、鎌倉時代の初期二階堂行村が岩瀬西部21郷を所領したときの拠点となつた稻村館の東南の守りとしての一族の館と考えられる。建保元年(1212)和田義盛の乱で、和田平胤長

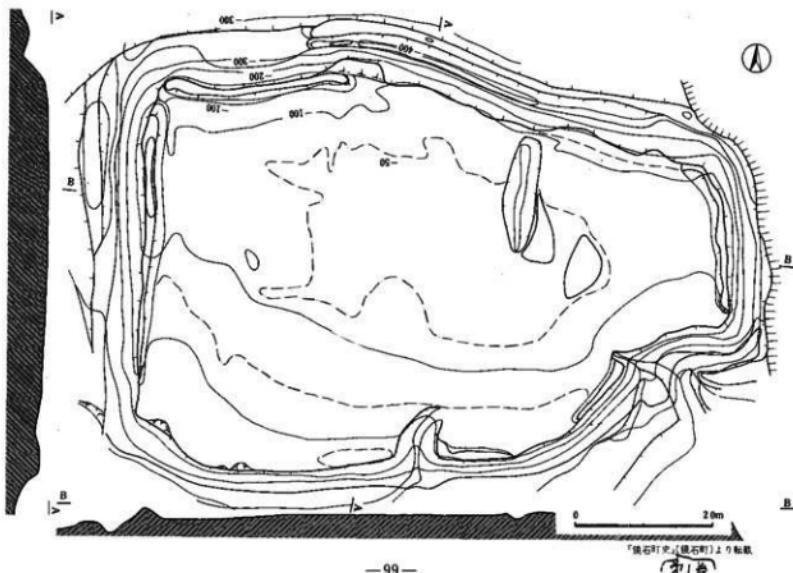
が岩瀬に流罪となり、鏡沼近くで処刑された。これを知らない妻の照子は鎌倉より夫を尋ね来て、死を聞き身を投じたという鏡沼は深内集落の南方1kmのところにある。

応永6年(1399)鎌倉公方足利氏満は子の満貞を稻村御所に、満直を篠川御所に派遣して、奥羽二国を支配したが、江泉館は、この稻村御所館とは駿迦堂川を挟んだ東岸にあり、二階堂氏とともにその隸下にあったと思われる。この稻村御所の支配は、永享11年(1439)の永享の乱で持氏側に属し、武藏府中の戦いで將軍側に破れ部下とともに鎌倉永安寺で自害し滅亡した。

(村越幸司)



第136図 江泉館位置図



第137図 江泉館実測図

まつもとだて
64. 松本館

所在地 岩瀬郡天栄村下松本

築城者 二階堂氏

時期 戦国期

遺構 本丸、二ノ丸、堀底道、物見

概要 松本館は矢田野氏の支城として会津街道と須賀川街道が交叉する要衝の地にあり、戦国時代の後期に矢田野氏の本拠が置かれた大里城の北の鎮りとして築城されたものと考えられ、標高380m比高50mの小高い山頂にある。城に登る山麓は館の口山と呼ばれ、北部は広戸川によって守られている。

城館の歴史 現在の天栄村は二階堂氏の外、白河結城氏、長沼氏、蘆名氏など戦国時代は目まぐるしく支配者勢力の交替があったことが考えられる。須賀川落城後伊達家の臣家になった矢田野伊豆守は、天正18年6月伊達政宗に叛旗を翻し、大里、下松本両城に籠城した。『仙道軍記』に「正宗は石川昭光、片倉小十郎兩人に命じ大里城を二重、三重に取巻き攻めけれ共、名城なければ落ちず」とあり城中から鉄砲のほか石や木を投げて反撃したため、伊達軍は一歩も城中に侵入できなかった。水の手を落せばと作戦を変えたがそれでも城は落ちず、8月2日に至って、見分役の浅野長政の意見に従い、城の包囲を解いたという。(永山倉造)



第138図 松本館位置図



写真39 松本館遠景



第140図 松本館略測図

65. 津室館

所在地 岩瀬郡天栄村飯豊字春日山

築城者 飯豊氏(安積氏)

時期 戦国期

遺構 飯豊の北部山地から東南に延びる舌状丘陵に築かれ、南麓に根小屋集落の名残りが現在の飯豊集落である。

館跡は北小屋と呼ばれ、本丸は標高290m(比高25m)の山頂部である。支谷発達による独立丘をなす地の利を得ている。本丸跡は43m×31mのほぼ長方形状で、西が高く、東側が一段低い。本丸の北に接して25m×9mの腰郭があり、空堀によって区画されている。南面する本丸の下段間に村社豊香島神社がある。

概要 津室館は中世岩瀬郡を支配した二階堂氏の家臣とされる浅賀氏の居城である。

城館の歴史 館主浅賀氏は、古代から広門地方を支配した豪族で、安積丈部と同族で、福島県の中通り地方に勢力を張っていた。延暦10年に丈部守が從五位下に進んでいる。また、嘉祥元年(848)權大領、丈部宗

成は阿倍陸奥臣の姓を賜わり、広戸郷を支配したことを考えられる。

水戸市水府明徳会影考館の水府系纂『安積覺兵衛正信』によるとその先祖は、奥州須賀川城に住し、飯土用城を領したとされており、天正17年須賀川落城とともに、飯土用城も失い、浪人となり、後に小笠原氏、蒲生氏、のち水戸家に仕え、4代覚兵衛が『大日本史』編纂を行っている。水戸黄門の「覚さん」に比定されている人物である。(永山倉造)



第140図 津室館位置図



第141図 津室館略測図

66. 三蘆城(石川館)

所在地 石川郡石川町字下泉・当町・矢の目田・鹿ノ坂

築城者 石川有光(伝承)

時期 平安期中期(伝承)～戦国期

遺構 郭、帯郭、土塁、堀切、空堀

概要 阿武隈川の支流北須川の狭い谷底平野にある石川市街地を見おろす丘陵にあり、東から南は北須川が堀の役割を果たしている。この丘陵は花崗岩からなる独立丘陵であり、4つの峰が東西に連なっていて、最高所は343mである。ほとんどが山林だが、社寺境内地と宅地があり混り、林道が東西に走っている。

中心部である本城には石都々古和氣神社がまつられている。本殿の背後に巨岩があり、その下は急崖で花崗岩の巨岩が沢山露出している。この神社は築城以前からまつられていたらしく、その後石川有光により八幡神が合祀されたと考えられる。神社のある部分を八幡台という(『石川風土記』)。現在、本城のある丘陵は八幡山とよばれている。八幡台の北側平場が主郭で東西80m、南北50mあり、西側は神社の背後まで土塁が南北に走っている。土塁の北端は幅広く、物見台的な施設があったのだろう。その付近からかつて大量の木炭が出土したので、のろし場だったと考えられる。また町の広報無線塔付近からは柱穴群が発見されたが、建造物の性格は明らかでない。主郭の東下の郭が金内郭で熊野神社がまつられていた(『石川風土記』)。八幡台の南下の郭が溝井郭で、千貫石とよぶ巨岩のうえに楼があったという(『石川風土記』)。林道から主郭への登り口となっているあたりが二ノ郭と考えられ、その西に幅19m、長さ40mの堀切がある。

西館は城主の隠居所と伝えられている。小規模な郭と土塁・空堀がみられる。南麓に真言宗の乗蓮寺がある。この付近に湧水があり、堀内とよばれる所があるので、平時の居館がおかれていた場所と考えられるが明瞭でない。西館の南西の峰は愛宕山で神社がある。その西の丘陵の南麓には石川有光が勧請したという塩釜神社があり、付近を宮城とい。西館から西の丘陵は北側の一部に郭がみられるだけである。

城館の歴史 前九年の役の後、源頼義の一族源有光

が藤田城を築いてから、さらに水利のよい地を求めて築城したのが三蘆城であると伝えられる(『石川氏一千年史』)が、もとより確証はない。その後有光の子孫は石川荘の各村を開拓し、鎌倉時代には石川郡一円と西白河郡・東白河郡の一部に一族が蔓延した。北条氏の御内人となった一族は分立が激しく、三蘆城主は惣領とはいっても弱体だった。

南北朝時代ははじめ北朝方として各地を転戦し、一時南朝となってから再び北朝に転じた。また、一族が両朝に分かれて争うなど、混乱が続いた。この間、有光以来の城郭は整備されてきたと思われる。

この動乱のなかで結城白川氏の勢力が石川荘内に浸透してきた。正長元年(1428)、17代義光は白川氏によつて攻め殺された。戦闘が三蘆城で行われた可能性がつよい。このころ石川氏は室町幕府と対立する鎌倉公方持氏との関係が深く、以後も古河公方とのつながりが続くことになる(『角田石川文書』)。義光の子持光は、城北に長泉寺を建立し、これまでの巖峰寺(玉川村)から牌所を移した。

戦国時代に入ると四隣の戦国大名の攻撃をうけた。石川領を攻めた蘆名正々斎(盛氏)は、「石川之儀者、在城一ヶ所迄候」と越後の武将に書き送っている(『会津若松市史』所収浜崎文書)。この「一ヶ所」は三蘆城のことだろう。この後、23代晴光は佐竹氏に属し、一方で伊達晴宗の子を継嗣とした。24代昭光がそれで、昭光は伊達政宗の麾下となって勢力を拡大したが、天正18年(1590)、豊臣秀吉によって領地を没収され、石川を退去して三蘆城は廃された。(小豆畑穀)



第142図 三蘆城位置図

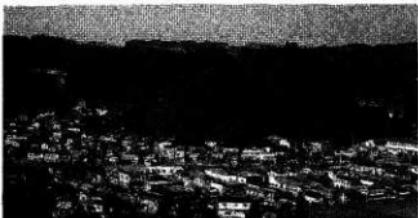
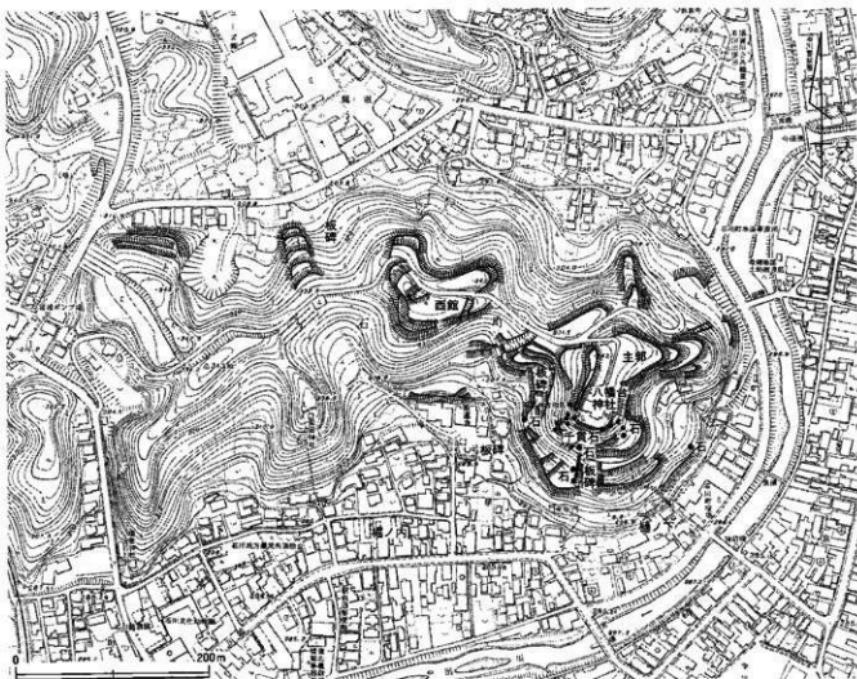


写真40 三蘆城遠景



写真41 三蘆城近景



第143図 三蘆城略測図

67. 藤田城

所在地 石川郡石川町大字中野字堀ノ内

築城者 石川有光(伝承)

時期 平安期中期(伝承)～戦国期

遺構 郭、土塁、空堀、堀切

概要 阿武隈川の氾濫原が、玉川村大字川辺南方で狭くなり、国道118号線と水郡線が共に阿武隈山地の石川町方面に分け入る地点の丘陵に位置する。北麓を藤田川が西流し、東と西は水田で、海拔324m、比高30mである。城の北1,750mに雲霧城、2,900mに川辺八幡神社がある。城の北麓は藤田川が西流し、東と西は低地で水田があり、南の丘陵とは鞍部に堀切があって切断されている。

主郭は南北80m、東西30mで、南端に櫓跡とみられる高台がある。東から北にかけては急崖で帯郭状の郭がまわっている。北端には小規模な土塁をもつ小郭が付属し、虎口となっている。主郭の西下には二ノ郭が張りだし、その南は屋敷跡らしい平場があって内黒の土師器が出土した。二ノ郭の北には主郭と向きあう形の平場があり、東側は湧水のある谷になっている。

城館の歴史 前九年の役後この地に土着した源(のち石川)有光が、康平年中(1058～1064)に築いたとも、その庶長子藤田太郎光祐が築いたとも伝えられている(『石川氏一千年史』『石川郡誌』他)。のち光祐は須釜の鳴山に築城して移り、子孫は大寺氏を称したが、藤田城は大寺領として存続した。ところが、戦国時代に入って天正10年(1582)に、大寺清光は本宗石川昭光と戦って敗れ、中野・塩沢・山小屋の三ヵ村を没収された(『須釜村史』)。これを天正16年とする説もある(『石川郡誌』他)。藤田城は、大寺氏の没落によって廃城

となった。(小豆畠毅)



第144図 藤田城位置図



写真42 藤田城遠景



第145図 藤田城略測図

おおてらじょう 68. 大寺城

所在地 石川郡玉川村大字南須釜字坂

築城者 石川有光

時期 平安期 承保元年

遺構 郭、土塁、水ノ手

概要 阿武隈山中の小丘陵に立地した山城で、本丸付近は、山麓の都々古別神社の社有地になっているため比較的遺構を残しているが、北方の尾根の部分は畠地化されて旧状は破壊されている。本丸は東から南にかけて7~8m下方に腰部を巡らし、西縁は切り落とされている。本丸の西下を通る県道須賀川、母畑線の路線は近世以降のもので、中世は北の都々古別神社前から南下して本丸の東手にある「富士ノ丸」の東を抜けていたので、大寺城は重要な交通路を扼する要衝を占めていたといえる。本丸から東南に下った低地は居住区域になっていて古宿、南宿などの古名を残し旧状を今も残している。

城館の歴史 平安末期の築城で、戦国時代終期まで使用され、石川郡一帯を所領した石川氏の北方の拠点としての性格を持っていた。築城と一緒に東南の低地や北方の都々古別神社周辺に町が作られたが、東南部分を除いて他は古町名を残すだけである。

大寺城が、本丸、二ノ丸、三ノ丸、富士ノ丸などを整えたのは、二代光祐と次の光家に至る50年間といわれる。城は石川有光が築城したころは、土地の名と有光の前居城名をとって藤田鶴城と呼ばれていたが、文安3年(1446)光義のとき、石川郡中野から東福寺を移したのにちなんで大寺城と改められ、大寺氏を名乗るようになった(『玉川村史』)。

大寺氏は最初石川主家に忠節を勧んでいたが、漸次

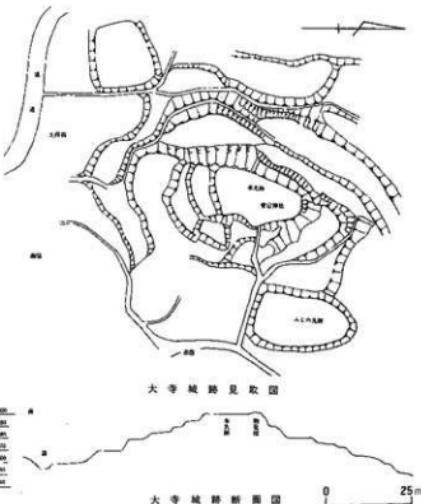


写真43 大寺城遠景（都々古別神社付近より）

疎遠となり、ついに天正10年(1582)大寺清光のとき、主家石川昭光との間の所領争いの確執が発展して「油殻の戦」になった。清光はこの戦いに敗れて降伏し、中野、塙沢、山小屋の所領を失ったが、天正17年(1589)伊達氏来攻の際は、須賀川の二階堂氏と組んで、伊達氏と組んだ石川氏に対抗しようとしたが、二階堂氏が敗れたため結局石川昭光の軍門に降った。同18年、大寺城は昭光に没収された、同年雪霧城とともに破壊された。(戸石清一)



第146図 大寺城位置図



第147図 大寺城実測図

「玉川村史」(玉川村)より転載

うん くじょう 69. 雲霧城

所在地 石川郡玉川村大字川辺字館及び金波かんなみ

築城者 石川有光

時 期 平安期 康平5年

遺 構 空堀、石壁、水ノ手

概 要 阿武隈川の右岸に近く、阿武隈高地の西縁の小丘上の輪郭式山城。近世末期の仮称『雲霧城古地図』(玉川村田子国夫蔵)によると、古城として丘の最高部に杉木立に囲まれた本丸があり、その下方に二層に帯郭状の平場があるのは二ノ丸、三ノ丸と思われる。北と西に空堀が描かれ、丘の西端にある安養寺との間に深い溝渠を作っているが、この部分は、戦後、川辺小学校建設のとき崩されて校地になってしまった。近世の『川中郷中諸事名目記』に、「家臣ノ面々二十七人之内屋敷アリ、本丸、内堀、安養寺上ニハ山堀、北裏ニ百六十間、同奥堀、内堀、三ノ丸下ヨリ安養上迄二



第148図 雲霧城位置図



写真44 雲霧城 三ノ丸から本丸を望む

ノ丸堀、今円通寺中迄西ヨリ南西十二町堀也」とあり、城から南に大手口を下ると家老屋敷跡、郷倉屋敷跡、井戸などが残る住居地域になる。社地となっている本丸跡以外は、旧二ノ丸、三ノ丸を含めて畠地化されている。

城館の歴史 諸説があるが、石川有光が「康平五年(1062)、石川郡小高村、内川辺莊雲霧山ニ一城ヲ築キ保源城トシテ住ム」(『大寺川尻字々譜』)に拵るのが妥当と思われる。以来石川氏の本拠三芦城の北の前進基地として、石川氏の一族川尻家が居城したが、応永14年(1407)現石川郡平田村の小平城に所替えとなり、やはり、一族の板橋満好が山橋の三沢城から移った。永正5年(1508)、一時板橋氏が三沢城に戻ったので城代須藤氏が城を石川稙光の命で預かったが、弘治元年(1555)、ふたたび板橋房好が戻った。天正3年(1575)石川昭光と佐竹氏の軍勢が、会津の蘆名氏とその一党の田村氏、結城氏、二階堂氏の軍勢と雲霧城の北の金波地区で戦った。石川、佐竹軍は敗れて、雲霧城のある川辺以北の地を失ったが、板橋氏の拵る雲霧城はこのとき破壊されたものと思われる。(戸石清一)



第149図 雲霧城略測図

よもぎた なで
70. 蓬田館(寝牛鶴巻城)

所在地 石川郡平田村大字上蓬田

築城者 石川秀光(石川三芦城第二十代成光二男)

時 期 室町期 文明頃

遺 構 本丸、土塁、空堀、出丸

概 要 この館は大寺城の東北東、石川三芦城からは東北の芯に当り、三芦城の鬼門堅めの役割が窺われる。館の北、西及び南の三方が開けているが、東方が丘陵続きになっているので、ここに二重の掘削をして完全独立の山とした。現在でもこれが空堀として残っている。この山続きに、「野城入り」という地名があり、ここが最後の砦で籠城の場所である。後に、「鉄砲入り」とよばれるようになった。

城館の歴史 初代秀光は、築城にあたって一部下から土を運びあげた。今でもそれが「揚土」として小字名に残っている。更に井戸を掘った場所には「井戸車」、水を給した地には「清水内」「清水屋」の小字名がつけられ残っている。

第2代目勝光は、蓬田館の西南方の裏鬼門を堅めるため、この館の西側に「向館」を築いた。

第3代目延光は、蓬田館の南方に「切山物見」を築いて防禦にあたった。

第4代目棟光は、館の大改修を実施して、本丸、二ノ丸、平場大手門を完成した。

第5代目法光は、先代の棟光に続いて館の改修及び城下町の整備に努めた。

第6代目利光は、のち蓬田館の南東部にある永田館に住み、その後角田に移った。(高野弘道)



第150図 蓬田館位置図



第151図 蓬田館略測図

おだいらなで
71. 小平館

所在地 石川郡平田村大字小平字小平

築城者 佐渡守季光（石川秀光の家臣）

時 期 平安期 康平年間

遺 構 主郭、二ノ丸、三ノ丸、堀、大手口

概 要 この館は、石川三芦城からみれば東北東にあたり、北東に準じて鬼門除けとして設けられたふしがある。しかも隣の磐城との国境に備え、重要な役割を果したと思われる。館の規模は上述の如くであるが、一ノ丸から北側へは地下の抜け穴さえもあったという。

城館の歴史 初代の館主季光は石川氏より小平姓を賜り、館の南東に小平薬師を開山するとともに、館に空堀を掘り、大手門と搦手門を造った（康平年間 1058～1065年）。

次の石川有光の四男川尻四郎光頼が雲霧城からこの地に移って住んだとされている（1086年前後）。

第三代目は大寺城主第二代肥前守四郎光家第四子四郎光房で、上下東山村、北方村、駒形村、小平村、西山村及び中倉村の六郷を小平郷と名づけて支配した

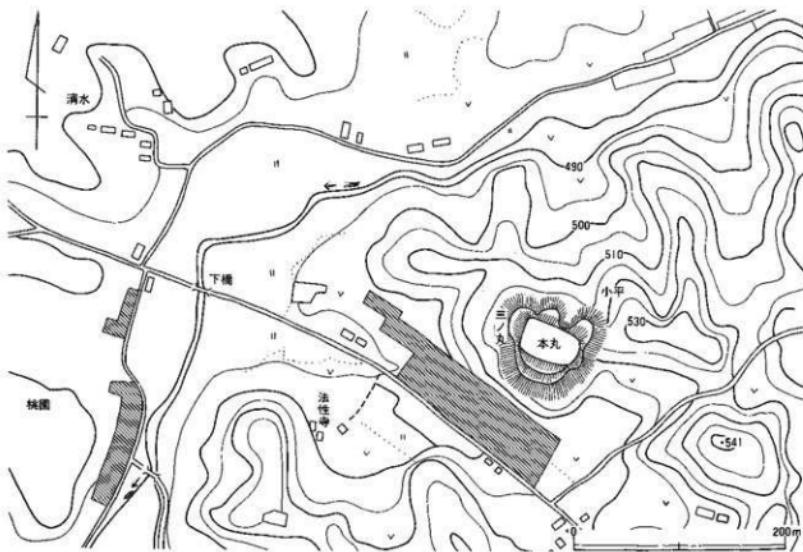
（大治元年、1126年前後）。

第四代目は石川氏第十四代石川豊持の弟小平三郎光俊で、足利尊氏に属し、北畠顕家と安部野境浦等に戦い、会津雄川庄を賞賜せられた（観応2年〔1351〕前後）。

第五代目は雲霧城の川尻忠光（応永14年〔1407〕）、第六代目は石川氏第十九代持光の二男光則（寛正元年〔1460〕前後）、第七代目は蓬田館第五代法光（弘治年中〔1557〕）、最後が朝鎮の代の落城であった。（高野弘道）



第152図 小平館位置図



第153図 小平館略測図

72. 浅川城 (青葉山城・城山館・八幡館)
あきかわじょう あおば やまじょう しろやまとだ はちまんがた

所在地 石川郡浅川町大字浅川字城山

築城者 不詳

時期 戦国期か

遺構 郭、帯郭、土塁、堀切

概要 浅川市街地と社川沿いの平地を西に見おろす海拔407mの山地にあり、比高は100mを数える。この城山を南北に継断するように林道が通っている。城山への南からの登り口(林道の取りつけ付近)が根宿で、立板(館板)を登るとすぐ左の郭が大正院様である。その他古寺、庄之助城、立堀切などの地名が矢内計助が文化5年に描いた『青葉山之城跡図』にみえる。

頂上の平場は東に低い土塁があり、南の一段下った郭と合わせて主郭をなしている。主郭の東から北にかけて帯郭が走っている。主郭の南の谷は現在水田となっているが、湧水があり居館をおおくに適している。この谷を挟むように2つの郭が張り出している。東の郭は土塁をもち、南に続く尾根を堀切で切断している。主郭の南端下からは無鉛の板碑が出土し、現在永昌寺に移されてある。主郭の北にのびる尾根は四つの堀切で防御され、土塁をもつ郭が配置されている。この城山の西側は急崖になっており堅城といえるだろう。

城館の歴史 葉城は康平年間石川有光の族によるという説(『石川郡地史』)があるが明らかでない。戦国時代の城主が浅川大和守とその子次郎左衛門尉である。天正元年(1573)次郎左衛門は白川義親に三ノ丸まで取られたが撃退し、天正6年には田村清頭が来攻した。宇月斎陣場は田村月斎の名が地名になったものだろう。天正16年には佐竹勢と戦い、同17年12月には伊達

政宗麾下となった。同18年正月には佐竹義宣が来襲し、虎口まで攻められたが撃退した(『浅川村考古覚書』『赤坂文書』他)。しかし同年の「奥羽仕置」により所領を失ない、石川昭光に従って浅川城を退去した。

(小豆畠毅)



第154図 浅川城位置図



第155図 浅川城略測図

73. 竹貫城(駒ヶ城...古館)(牛ヶ城...新館)

所在地 駒ヶ城 古殿町大字竹貫字水ノ出、牛ヶ城
古殿町大字山上字新宿

築城者 竹貫氏

時期 駒ヶ城 不明、牛ヶ城 戦国期

遺構 空堀、土塁、郭

概要 駒ヶ城は現稻荷神社境内にして外郭とおもわれる削平地が周間にある。

面積は約1120m²で東側に土塁と思われる痕跡がある。

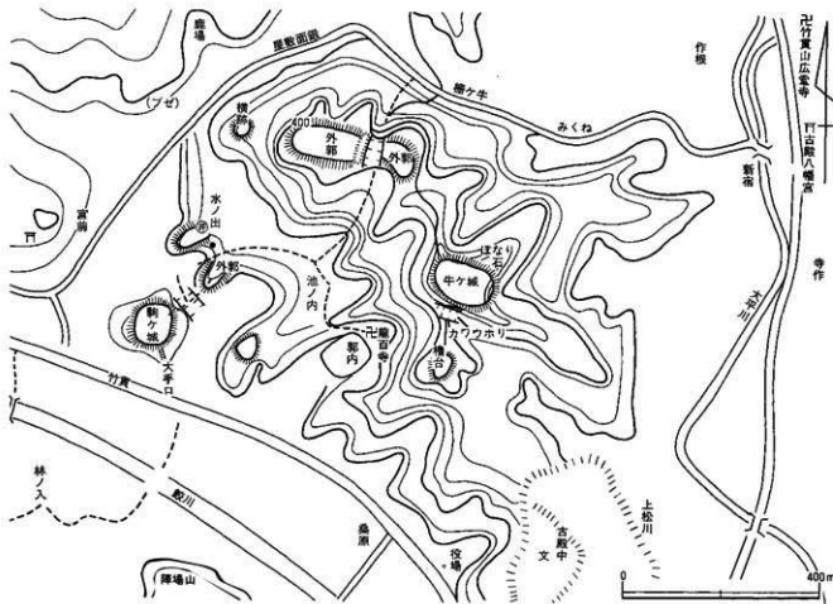
牛ヶ城は駒ヶ城の東方(別名東館)に位置し標高433mの山頂にある。駒ヶ城より尾根伝いに連絡し途中に外郭の削平地が多くある。面積約2300m²の削平地で北東部に伝説あるほなり石(周5m、高18m)がある。西方にあった土壘(高3m余、長20m余)は整地により消滅している。櫓台は南・南西・西北に張出し特に西北の外郭は面積約1000m²あり土壘・空掘の残痕あり尾根伝いに北に通じるは搦手と思われ、鹿場(鍛冶場)、水ノ出(水ノ手)と俗名薄ヶ作(牛ヶ柵)ねぐみ(根木屋)の

地名が周囲にある。

東方の大平川沿には領主の菩提寺竹貫山広覺寺と隠居所古殿館跡あり。又駒ヶ城に相対する山を陣場山といふ。(野木良平)



第156図 竹貫城位置図



第157図 竹貫城略測図

74. 三春城(舞鶴城)

所在地 田村郡三春町字大町・南町・山中・清水

築城者 田村義顕

時期 戦国期 永正年間～江戸期

遺構 近世の遺構、郭、帯郭、堅堀

概要 通称城山は、かつて大志田山と呼ばれた。

現在の最高所は標高407.8mであり、山麓からの比高差は90m前後である。現状は、山頂・山麓に近世の遺構を残し、現況は、公園・山林・宅地・畠地となり、公園の他は民有地である。山頂部周辺は公園として整備されているが、山麓は市街地を形成し、明治以降の地形変更が著しい。この城は近世三春藩の居城として機能しており、中世の遺構を明確にすることは困難である。

城館の歴史 中世の田村郡(庄)を支配した在地領主は田庄村司(藤原姓)であり、やがて三春田村氏(平姓)が台頭した。後者の田村氏三代義顕の時に居城が守山から三春へ移されたと伝えられ、その時期は永正元年(1504)か同13年のことであろうとされている。永正年間以前の大志田山の状況・城館の有無は未詳であるが、以来、ここが戦国大名田村氏の領国形成と支配の拠点となった。天正14年(1586)清顯の死後、田村家中は伊達政宗の去向に左右されることになり、同18年秀吉の奥州仕置による田村家改易、伊達家による三春城接收、田村家臣団離散、同19年の田村領の会津蒲生領編入、その後、上杉領、再蒲生領を経て秋田氏領時代を迎えた。

三春城の機能した時期は、大きく四つに区分できる。第Ⅰ期：永正年間以前。第Ⅱ期：永正年間以後戦国大名田村氏時代まで、第Ⅲ期：近世初頭から天明5年(1785)本城火災時まで。第Ⅳ期：天明5年本城修築から明治維新まで。このうち前二者が中世の時期で、Ⅰ期の有無は未詳である。

三春城跡の学術的な発掘調査はなされておらず、各期ごとの実態・変遷は不詳である。資料としては、Ⅲ・Ⅳ期の絵図が数種あり、近世の変遷はある程度復元できる。Ⅱ期末葉の絵図には、天正年間の『三春城下絵図』(郡山市木目沢氏蔵)と年不詳の『伝田村時代三春城絵図』(青山文書)がある。後者は前者と共に記載が多く、ほぼ同時期のものと考えてよい。これらは田村

氏改易前後の三春城の形態を伝えるものである。その他Ⅱ期の城内に「あげつち」「東ノ小口」があったことを伝える資料がある(『三春町史』7 204頁、235頁)。

以上の資料と現地踏査をもとに、Ⅱ期の遺構を抽出し復元してみる。主要遺構は、山頂部分の二つの郭とそこから東南側に舌状に延びる丘陵上の東館部分(標高377m)と山麓南側の郭群とに大別でき、各々に関連する施設が観察できる。天正年間絵図には、山頂部の最高所が「本丸」一段低い郭が「二ノ丸」、山麓南側が「三ノ丸」「厩」と記載されている(近世の絵図では、山頂部が一括して「本丸」とされ、山頂部西側の平場が「二ノ丸」東館部分が「三ノ丸」と記載されている)。また、本丸と二の丸には石壘と土塀があり、隅櫓3字、門4字が描かれている。山頂部分は、本丸と二ノ丸で2段に構成され、その周囲の斜面には、大小の平場と帶郭が残っている。西側の近世「二ノ丸」の郭を考慮に入れるとして、連郭式の山城を想定できる。

東館部分は、台形状の平面形を呈する郭を中心であり、その周囲や本丸斜面との接続部分に帯郭や堅堀が残り、自然の沢地形をも利用している。田村大元神社境内地も帶郭の機能をもっていたと推測できる。

なお、鈴木啓「三春城」(『日本城郭大系3』所収、新人物往来社、昭和56年)及び鈴木啓「城館」(『三春町史』昭和57年)を参考とした。

(佐藤洋一)



第158図 三春城位置図



第159図 三春城略測図

くまがみたて 75. 熊耳館

所在地 田村郡三春町大字熊耳字館・古館、船引町大字要田字稗田

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、帯郭、空堀、堀切

概要 熊耳館は、北から南へ延びる丘陵先端部に立地している。現況は畠地である。昭和60年度に三春町と船引町教育委員会がともに試掘調査を実施し、調査報告書が公刊されている。以下、試掘の知見も参考にする。主要遺構は、主郭と思われる郭を中心にして3つの副郭と3つの帯郭が付属する複郭式の構造である。他に大小の郭・平場・空堀がある。

主郭は標高420m前後の最高所に占拠する。郭の斜面は3~7mの比高をもち急角度で整形されている。副郭は主郭の南側と東南端と北側にある。帯郭は主郭や副郭の下段に築成されている。主郭の北西側に空堀があり、2つの小さな郭を挟むようにその西側にも空堀がある。その西側は平場になっている。平場の北西端に堀切がある。

大半の試掘トレンチで整地層が検出され焼土や炭化物を含み、主郭部分で検出された柱穴にも焼土を多量に含んでいたことから、火災とその後の整地がなされたことが想定されている。出土遺物は陶器片が少量である。

城館の歴史 「三春領古城絵図」には「城主熊耳太郎左衛門、根廻り四百廿間、高十四間、本丸三十式間×十八間」とみえる。戦国大名田村氏の本城に近い北方の一支城である。

なお『三春町文化財調査報告書第6集』『船引町文化財調査報告書第3集』を参考とした。(佐藤洋一)



写真45 熊耳館遠景（東南より）



第160図 熊耳館位置図



第161図 熊耳館実測図

「船引町文化財調査報告書」第3集(船引町教育委員会)より転載



写真46 熊耳館遠景（南より）

ぬまのさわなて
76. 沼沢館

所在地 田村郡三春大字沼沢字館・神ノ上・北ノ作

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、帯郭、土塁、石塁、堀切

概要 沼沢館は、大滝根川とその支流中妻川に挟まれた丘陵地帯の標高350m余を最高所とする丘陵上に立地している。比高は60m余。

主要遺構は最高所の主郭を中心として、主郭から南側へ二つの郭が並び、また、西側へ二つの郭が並ぶという連郭式の構造を呈す。主郭は、南北約80m×東西約20~30mの長方形形状を呈し、東辺に土塁を配している。土塁の北東端は下段の帯郭へ約20m程延びている。この土塁は、東側の丘陵地帯の地形の連續性を考慮して、東側縁の帯郭のみの防禦の弱点を補うために主郭東辺を堅固に構築したと推定できる。土塁は、基底部の幅が約3m程で平場からの比高差は1.2m前後である。北西端に遺存する人頭大の自然石の集石は、石塁というよりは帯郭北西端を画する土塁の基部と考えられる。主郭の平場より約3m程下段の東・北・西側にコ字状に帯郭がある。北側の帯郭の下段にもう一つ帯郭がある。南側の郭は、子安薬師堂の境内地となっている。堀切は農道として利用されている。

城館の歴史 慶安2年(1649)『三春領古城絵図』には「城主沼沢孫兵衛根廻り四百間、高サ拾間」とみえており、戦国大名田村氏の一支城であったことがわかる。

なお、鈴木啓「城館」(『三春町史 第1巻』所収、昭和57年)を参考とした。(佐藤洋一)



第162図 沼沢館位置図



第163図 沼沢館略測図



写真47 沼沢館遠景(東より)



写真48 沼沢館遠景(南より)

77. 七草木館

所在地 田村郡三春大字七草木字櫻木・館下

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、帯郭、空堀

概要 七草木館は、なだらかな丘陵の多い中で比較的の独立性の強い丘陵上に立地し、東から西へ張り出した丘陵の先端部を占地する。

主要遺構は、空堀で区画されるほぼ東西に並ぶ二つの郭と一段下ってこれらを取り囲む帯郭といいくつかの帯郭とからなっている。東側は大きな地形の変更を受けているが、自然の沢地形を利用して防禦に当てていたと推定でき、平場が存在した可能性もある。最高所の二つの郭のうち、東側の20m四方の郭が主郭と考えられる。帯郭からの比高が3m前後あり、東・南・北辺の斜面は、急角度で整形されている。西側は、幅3m前後で深さ1.5m前後の空堀で区画され、第二の郭となる。この郭は北辺が約60m、西辺が約20mで、南西辺が突出したL字形を呈す。西斜面は帯郭からの比高が5m程あり、急角度で整形されている。これらの二つ



写真49 七草木館遠景(東より)



写真50 七草木館遠景(北西より)

の郭を幅3~5mの帯郭が囲んでいる。帯郭の斜面は北幅が急角度で端正に整形してある。北側では2m程度下つてもう一段帯郭が構築されている。南側にも一段帯郭がある。全体として、北側と西側が堅固で端正な構造である。安達郡方面と小浜海道を意識していると考えられる。

城館の歴史 「三春領古城絵図」には「城主七草木新助」と記載され、戦国大名田村氏の北方の支城であった(『三春町史』)。(佐藤洋一)



第164図 七草木館位置図



第165図 七草木館略測図

78. 小野城（新町城）

所在地 田村郡小野町大字小野新町字館廻

築城者 不詳

時期 戦国期

遺構 郭、帯郭、堀切、土塁

概要 城は赤沼方面と飯豊方面からの河川の合流点に張出す丘陵が、それぞれの河川の漫触により形成された、急峻な地形を利用してつくられている。

平場は3つに区分されている。南の平場が一番大きく、北側に土塁の一部が高さ1.5m位で残っている。北西に張出す小丘には、平場が二段に造成されており、出丸的な施設となっているものと推定される。

第二の平場は深い堀切によって南側の平場と区分されている。北側には土塁が高さ1.5m位で構築されている。第一の平場と同様に東と西には郭が張り出している。

第三の平場と第二の平場の間には平場があるが、この平場の北側にある通路までの間は藪がひどいので踏査できなかった。この部分は一種の堀切的な遺構と考えられる。

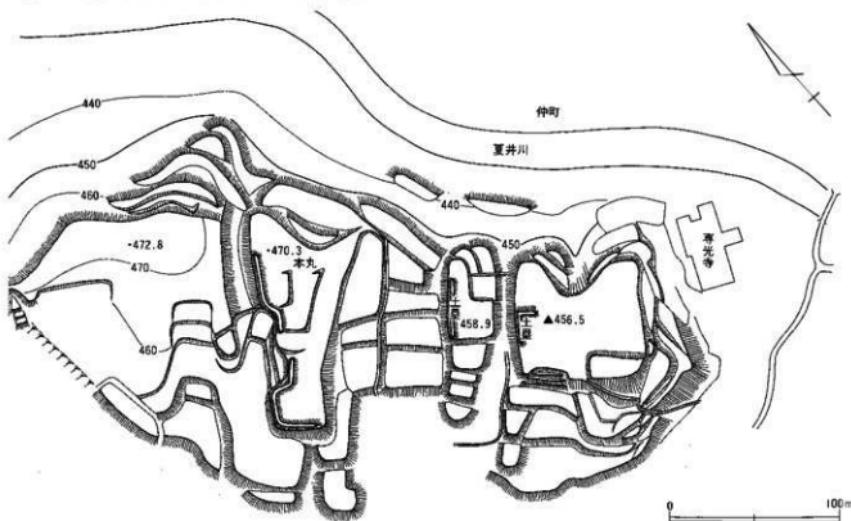
第三の平場は、既存の道を間に北側に広がって

いる。そこにはゆるやかに上るが、入口は明らかに入口部分を作り出している。上りつめた所が本丸になるであろう。この平場の北縁には、高さ約2mの土塁が東から西方に、多少ランク状を呈して認められる。土塁の裏面は4m位の深い堀切となっている。

城館の歴史 本城主は田村清顕の家臣田村右馬介である。地理的条件から、岩城氏と田村氏の対決の際にいつも戦火にさらにはれてきた。主なものを記すと、天正2年(1574)の岩城常陸の攻撃、さらに天正8年、同12年、同17年とさまざまな機会に当地は戦火にさらされている。(先崎忠衛)



第166図 小野城位置図



第167図 小野城略測図

79. 大越城(鳴神城)

所在地 田村郡大越町大字大越字住王町

築城者 大越紀伊守

時期 戦国期

遺構 郭、帯郭、堀切、空堀、土塁

概要 標高562mの独立丘陵上にあり、頂部を中心四方から延びる尾根筋に各種の遺構が認められる。西側には、「高館」と呼ばれる丘陵があり、尾根を通じている。

郭は本丸、二ノ丸、三ノ丸、十郎兵衛館、馬之丞館、右京館、御殿等の外に多くの郭がみられる。「井戸」と呼ばれ沢には、井戸跡と思われる窪みが3か所認められる。この沢の下方が大手門と考えられている。

本丸が一番標高の高い位置にある。その東側には、本丸への通路がありその付け根には、土塁で囲まれるようにした小さな平場がある。

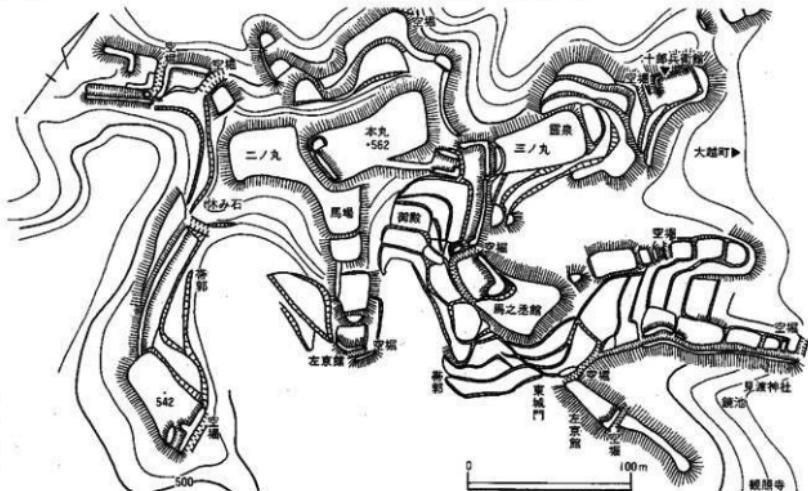
本丸の西側の10mの比高差の平場が二ノ丸で、この郭は馬場と呼ばれる平場につながっている。ここには駒石と呼ばれる大きな花崗岩がある。三ノ丸は靈泉(れいせん)と言われている。この語源については不明であるが冷泉のことかも知れない。城館内の呼称については松本氏の記述による(松本弘『大越氏の出自とその盛衰』1985)。

城館の歴史 大越城の城主は大越紀伊守とされている(『三春古絵図』)。紀伊守の当城への入城には二説あり、ひとつは永禄8年(1565)5月に岩城貞隆の田村攻の際入城したとする説(『大越町誌』)と、弘治2年(1556)とする説(『下大越旧記』)がある。

天正14年(1586)10月に田村清顯が死亡してから、田村家内部での伊達方、相馬方の抗争がおこった。大越紀伊守は相馬方とされ、伊達成実により天正16年6月大越城攻撃が行なわれた(『伊達治家記録』)。この記述により、大越城は二、三ノ丸といった施設を備え、町構え(根子屋等)をもつ城下町がこの時点で形成されていたことが読み取れる。翌17年岩城氏と伊達氏が開戦した。紀伊守はこの時岩城氏についてが、伊達昌順を画策したことが発覚し同年4月岩城に送られ切腹した。伊達領となった大越城には田村宮内頼康が入った。(先崎忠衛)



第168図 大越城位置図



80. 常盤城（旭城）

所在地 田村郡常葉町大字常葉字館

築城者 熊谷直則か

時期 鎌倉時代（文永11年）

遺構 郭、空堀、切通

概要 本丸跡、二ノ丸、三ノ丸の跡、阿弥陀堂との間は完全な空堀によって途切れしており東の出丸とは区切られている。南側の秋葉神社跡は5mほどの高さを保ち物見台があったものと思われる。また虎口と思われる所に至る道は高さ4mほどの切通が鉤形になっ



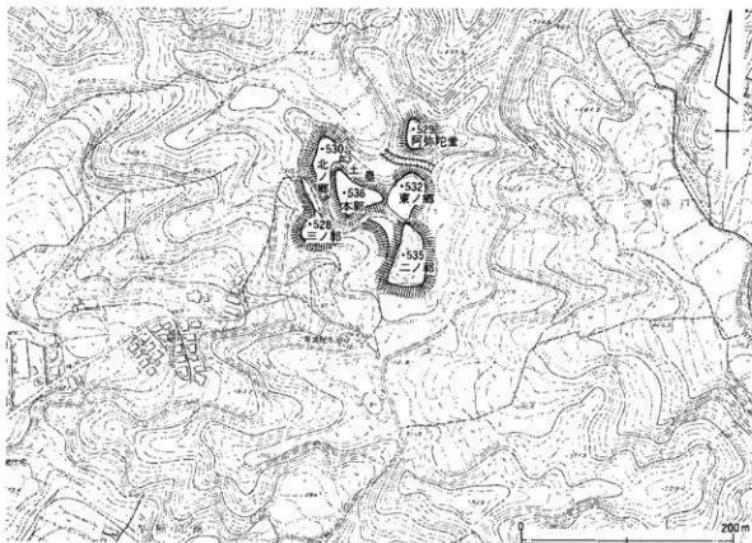
第170図 常盤城位置図

ており、登城下の様子は外部からはわからなくなっていた。常盤城は自然の地形を利用して築かれた城館であり、当時の選地に当たっては実に慎重を期したものであることがわかる。

城館の歴史 常盤城は熊谷直則が父と共に封じられたのが文永11年3月、熊谷直盛まで5代であり、次に赤松円心入道則村の孫越前守頼則。姓を常磐と改め甲斐守貞久まで在城し、田村東部唯一の雄鎮と言われた武将であったが、何故か貞久は田村清顕の逆鱗に触れ、城主を追われ、その後に石沢修理亮が城主を命ぜられた。それも東の間、相馬・岩城連合軍の攻略により、天正17年5月17日落城し、石沢氏は非業の最期を遂げ、常盤城は廃城となった。（白岩今朝義）



写真51 常盤城遠景



81. 船引城

所在地 福島県田村郡船引町大字船引字館

築城者 田村憲頭

時期 戦国期

遺構 郷、土塁

概要 現在は館山公園になっている。他は畠として利用され、西側の郷は寺院の墓地になり、かなり改変が加えられている。全体としては、館跡といった印象を現在はあまり感じさせない状態である。

城館の歴史 「仙道田村莊史」によれば、田村義胤(1561没)が、田村地方支配として、次子田村憲頭を船引に封じたとしている。

その後、船引城が歴史に登場するのは、相馬義胤の三春城入城計画失敗(1588)の時で、義胤は、入城失敗後、相馬にも築館にも帰ることができず、田村家中相馬派に田村右衛門清康(憲頭の子)が属したためか船引城に籠った。義胤と対峙する伊達政宗は、石沢・大倉の城を攻め、船引城にも兵を送って戦果をあげた。政宗自身も船引城攻撃を行なう計画であったが、義胤は船引城を脱出して引き揚げたことによって政宗の船引

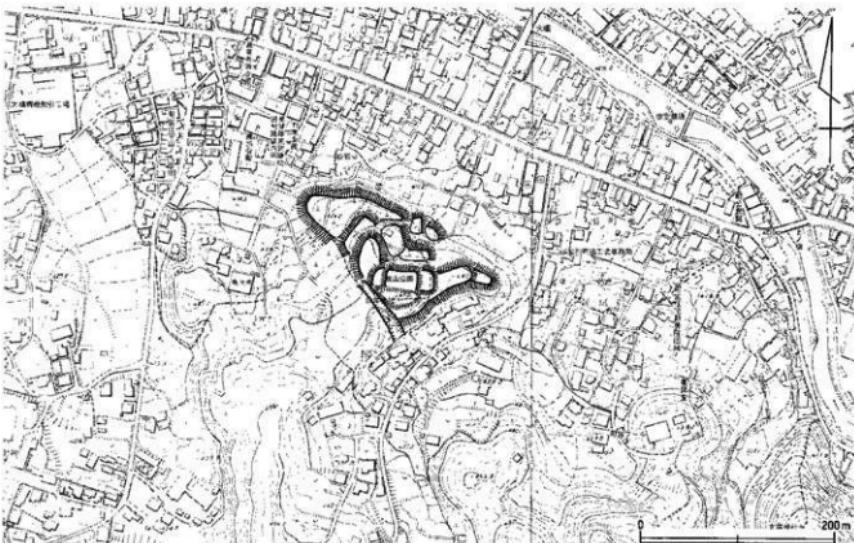
城攻めは行なわれなかった。その後、伊達成実の大越攻めの時に船引に成実が入り、伊達一族、田村家中も船引に出陣し、大越城攻めを行っている。

義胤三春入城失敗後の位置として、政宗は三春に入り、義胤と内々連絡を保ったとされる清頭後室に隠居が勧告された。清頭後室が船引に移され、また田村右衛門清康が船引城から退去すべきこともあわせて決定がなされた。清頭後室が船引城に隠居した(8月3日)翌日、右衛門は三春を去って小野に入ることになった。

(吉村 淳)



第172図 船引城位置図



第173図 船引城略測図

からめじょう しらかわじょう 82. 撫目城(白川城)(県史跡)

所在地 白河市字藤沢山、藤沢、八竜神、美野輪
築城者 結城祐廣、結城宗廣
時期 南北朝期
遺構 郭、空堀、腰曲輪、帶曲輪、出丸、鐘撞堂、土壘、馬場、堅堀

概要 撫目城は白河市街地の東南東、市役所から約2.7kmの地にあり、阿武隈川筋を一望できる本城は標高403m、中田から比高46mの急な白河丘陵の要害地に占地する。本城^(I)を中心に北面の縄張りは低位段丘面と山麓を谷津田川が切り込み、東西の直線で850mである。南面は安山岩を浸食した谷が陥しく縄張りは不明確である。西は藤沢山を切りこんだ谷が西限、東は撫目橋荷神社手前の平坦地が東限と考えられる。

西の八竜神は大手と考えられ浸蝕谷の平坦面を上ると主郭^(I)があり、南北80m、東西75mの本城が占地する。主郭の西に二ノ郭^(II)、主郭の廻りには帶曲輪が巡らされている。主郭の南には野火番山に続く峰を堀切り、主郭へは二ノ郭との間を通り北側から上がったものと思われる。

主郭の北には藤沢山^(394m)出丸^(III)が65m、20mの郭に構築され、数段の曲輪が突端部にみられる。さらに主郭の北々東に細長形の出丸^(IV)が東西15m、南北50mが構築され西側には小さな土壘がある。この二つの出丸には数段の帶曲輪がまいている。

主郭の北東には標高383m、幅30m、25mの鐘撞堂^(V)があり、その東側には標高386m、東西10m、南北90mの郭^(VI)があり、倉庫跡といわれる。この郭には腰曲輪、帶曲輪が構築され、この郭の尾根を上ると二つの堀切がある。東端の平坦地には馬場^(VII)があつたといわれる。

藤沢山と鐘撞堂の間の沢には24m、40mほどの堤^(VIII)跡がみられる。

城館の歴史 源頼朝の奥州征伐に従った結城朝光は、その勲功により白河庄以下三郡を与えられたが、自らは下總結城に居り代官を派遣して支配した。朝光の孫祐廣は、康元元年頃白河に下向して白河庄^(かみかわむちやう)南方を知行し、白川城に居住したといわれ、北方は同族の盛廣が下小屋(大信村)東堂山館に居住して支配した。祐廣の

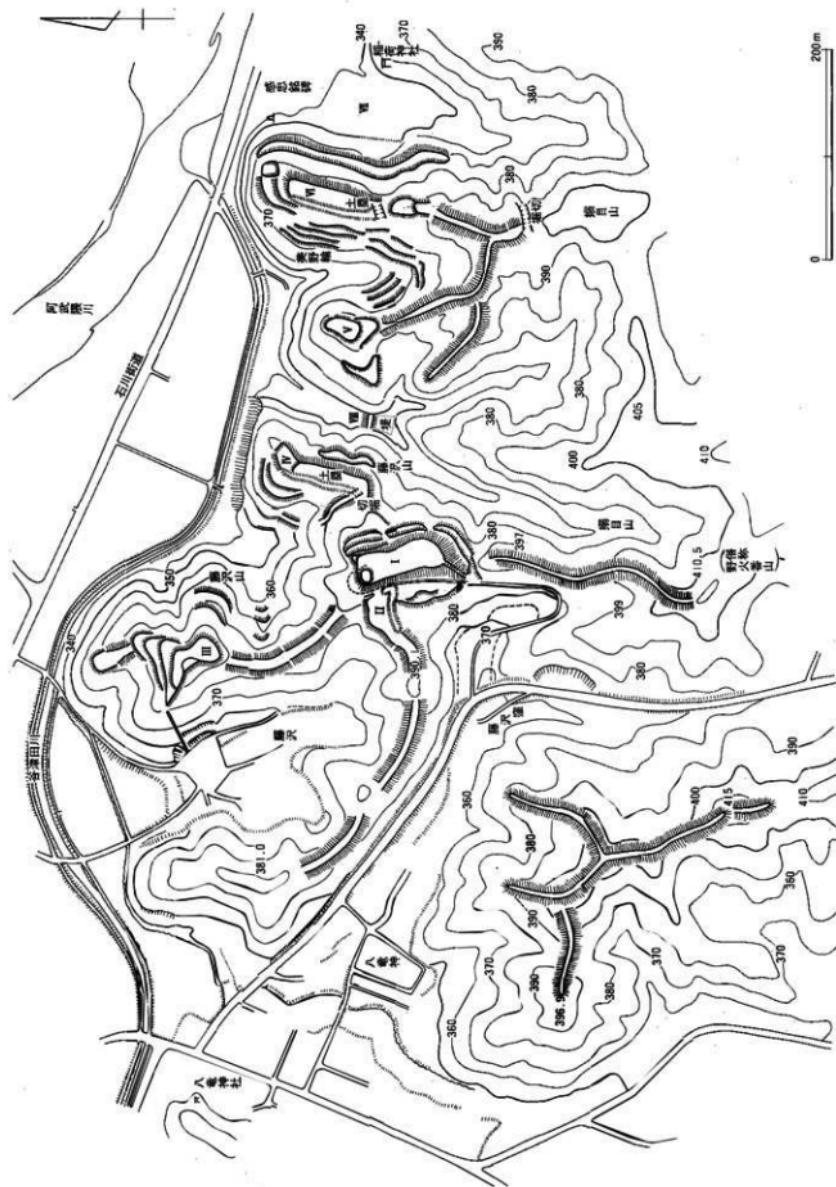
子宗廣は北条氏に叛して幕府滅亡に功をあげ、建武政府により子の親朝と共に陸奥將軍府式評定衆に任せられた。足利尊氏が新政府に叛すると、宗廣は奥州軍の侍大将として奥州軍を率いて二度上洛して奮戦するが、伊勢安濃津で客死した。奥州出発の際は54郡の兵が白川城に会し10万余騎となったという。興国年中親朝は白河小峰ヶ丘に築城し、別家小峰家を創設した。親朝の長子頼朝は結城本家を継ぎ、次子朝常は小峰家を継いだ。親朝は白河庄北方の盛廣の欠所地を与えられ、さらに仙道八都檢断職の権限のもとに高野郡をはじめ結城氏の支配権を拡大していくが、奥州上洛軍の敗北以後、興国4年遂に北朝尊氏方に降伏した。明徳2年、南北朝の合一以後も関東や奥羽の戦乱は絶え間なく行われたが、白川結城氏は庶流小峰氏と提携して文明年間の直朝、政朝時代に最盛期を現出した。幕府の支持の下に南奥の諸氏のみならず、北関東諸氏に対しても主導性を保持し、鹿島神社連歌一万句興業にみられる文化の高さを誇った。

しかし、永正7年(1510)に至って両家は対立し、政朝は小峰朝脩を自殺させた。朝脩の父直常は岩城常隆の援助のもとに政朝を放逐した。政朝の子頼頼は直常の庇護により白川撫目城から小峰城に居を移したものと思われる。

一方断絶した小峰家は頼頼の子義親が相続して関和久城(泉崎村)に居館した。小峰城は白川氏の本城となり、白川撫目城は以後、事実上廃城になったものと思われる。(山縣重信、野崎健二郎)



第174図 撫目城位置図



第175回 撫日城略測

83. 小峰城（白河城）

所在地 白河市字郭内

築城者 結城親朝

時期 南北朝期 厥應3年（興國元）

遺構 消滅

概要 小峰城は白河市中心地市街の北方、小峰が丘に占地する。小峰が丘は北方を流れる阿武隈川の攻撃により浸食された残丘の独立丘陵である。基盤は白河安山岩質からなる。現市街地と小峰が丘の間には市街地より低い低位段丘面があり平坦地を形成した。小峰が丘は東西約800m、西部丘陵と東部丘陵に二分され、西部丘陵の南北幅は約200m、鞍部にあたるところで約100mの幅をなし、全体的に細長形の地形である。

この丘陵に白川結城氏の第三代頼朝の後見役であった親朝が小峰家を創立する。この丘陵上に構築された遺構はのち、丹羽長重が寛永6年（1629）に小峰城の大修築を実施したためほとんど消滅した。

近世以前の小峰城築城前の地形復元図から推定すると（イ）にあたる位置が郭跡で、（ロ）が二ノ郭跡、（ハ）の部分に空堀が堀られたのではないかと思われる。（ニ）、（ホ）の場所は根小屋集落が置かれたものと考えられる。地形形成過程からみると西北地区は湿地帯であり水堀りとなったであろう。

城館の歴史 結城宗廣の長

子親朝は白川城西方の小峰ヶ丘に築城し小峰家を創設した。親朝の長子頼朝は本家結城氏を継ぎ、次子朝常は小峰氏を継いだ。小峰家より満朝・直朝が本家に入嗣するなど両家提携して勢力を拡張した。しかし永正7年（1510）両家は対立し、本家の政朝は小峰朝脩を自殺せしめ、朝脩の父直常は岩城氏の援助を得て政朝を放逐した。

朝脩の死後、結城本家は白川城より小峰城に居を移したものと思われる。永正の変を

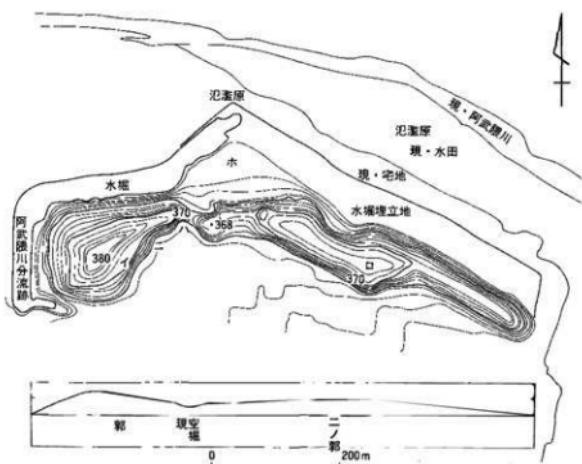
契機に結城氏は衰運に向い、天正年中常陸佐竹氏の激しい侵略を受け小峰城は佐竹氏に占領されるなど、白川結城家は衰運の一途を辿り遂に天正18年秀吉によって領地を没収されるに至った。（野崎健二郎、山縣重信）



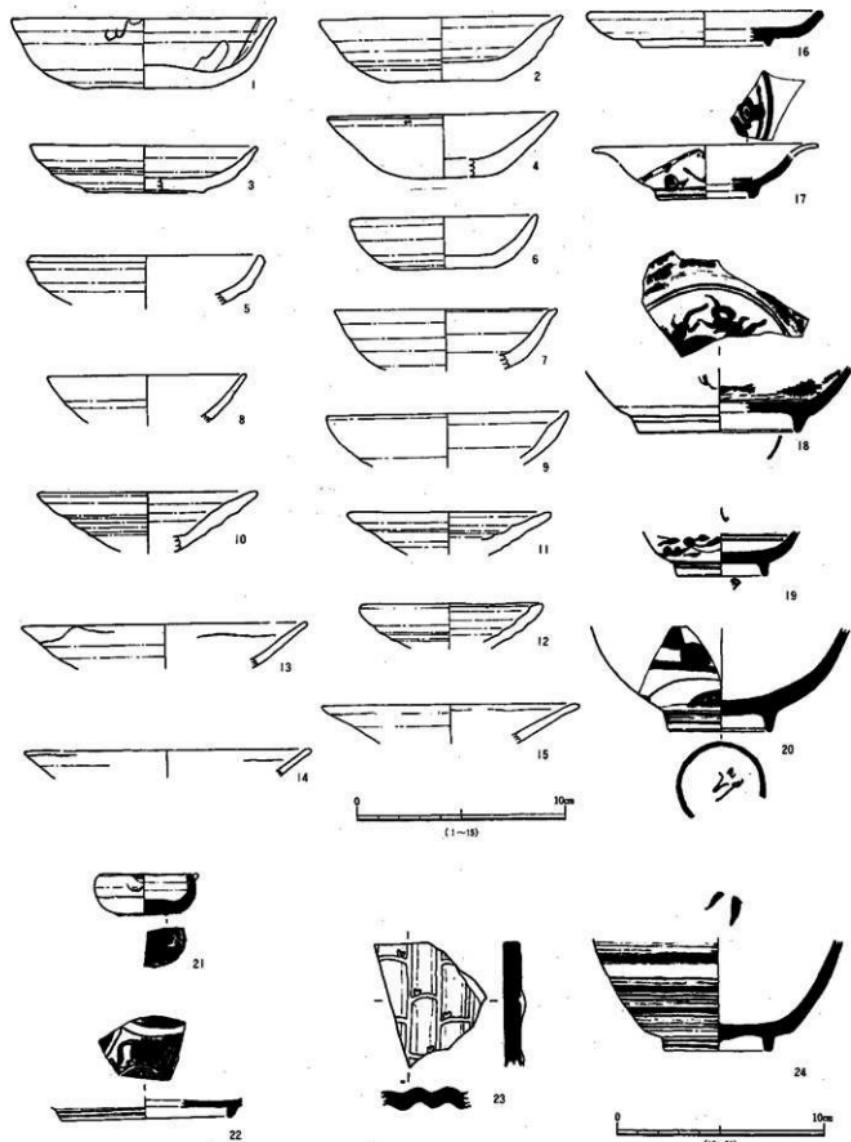
第176図 小峰城位置図



写真52 小峰城遠景



第177図 小峰城地形復元図（14世紀前半）



第178図 小峰城出土遺物

1~15 土脚質土器 16~24 陶・磁器 (16 美濃小皿 17~22 中国産灰付
20~24 伊万里系茶碗 21 灯心台) 「白河小峰城跡(白河市教育委員会)による
22

84. 新地山館(新知山館)

所在地 白河市大字借宿字新知、表田、古内

築城者 石井一郎輝朝

時期 錬倉期～戦国期

遺構 郭、土塁、空堀、竪堀、土橋、腰曲輪、帯曲輪、虎口

概要 新地山館は白河市街地の東方、借宿廃寺跡から約0.7km、石川街道沿線の北側に占地し、古歌に“人忘れずの山”と呼称された。北は阿武隈川が流れ対岸には木之内館があり、その東に開和久遺跡がある。

新地山館は阿武隈川の浸蝕した独立丘陵で猫がかがんでいる形をし標高393m、山麓からの比高70mである。館の東側が表手で麓に根小屋〈I〉があり、丘陵を上ると土塁を巡らした虎口〈II〉がある。その北側には空堀がある。さらに通路を上ると、数段の曲輪があり、堀切りがある。土橋を渡ると東西40m、南北15m主郭〈III〉がある。その南西側に一段低く羽黒権現社が祀られ、さらに一段低いところに土塁を巡らした二ノ郭〈IV〉がある、さらに南西に下ると土塁を巡らした曲輪があり、その西側には二つの空堀と東側には帯曲輪が構築されている。この館の北側には数段の腰曲輪と帯曲輪が配置された“所堅固の根小屋式山城”である。

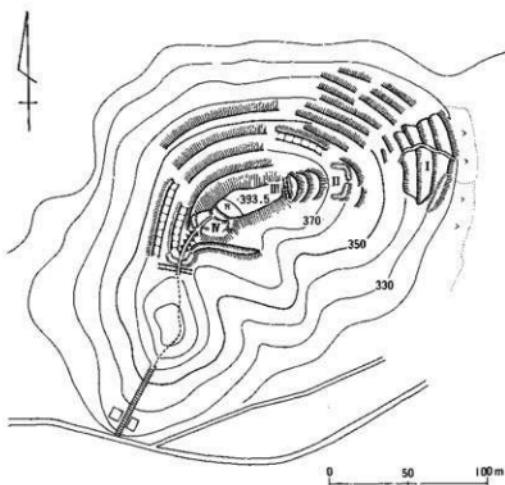
城館の歴史 前九年の役に際し、借宿村の石井一郎輝朝は源義家の軍を嚮導した功により、近村若干を与えられ新地山に館を築いたという。文明13年(1481)、結城政朝が鹿島神社で連歌一万句興行を行った時、輝朝の子孫石井丹波はその連中の一人であったという。天正の始め常陸佐竹氏はしばしば白河を侵略したが、その路筋にこの館があり、結城氏は当時塙城を失った重臣大塙宮内左衛門尉を館主となし、木之内館と呼応して防戦させた。天正7年(1579)白河勢はこの館に集結して佐竹勢と戦ったが激戦の末に落城し、結城氏本城小峰城も攻略された。(野崎健二郎・山野義之)



第179図 新地山館位置図



写真53 新地山館遠景



第180図 新地山館略測図

85. 小屋山館（関城、関山城）

所在地 白河市大字旗宿字西山

築城者 関左衛門朝泰

時期 鎌倉期末

遺構 郭、空堀、虎口、土橋、堀、帯曲輪

概要 小屋山館は旗宿から西方へ約200m、標高430m、比高は麓から50m、八溝山地北端の丘陵上に占地する。館の東側は社川が流れ、南は国指定史跡「関の森遺跡」があり栃木県境まで約2.8kmである。

館は南北120m東西100mの小規模なものであるが戦術的に地形をよく活用して構築されている。館の南は侵蝕谷が発達し急な斜面を上ると帯曲輪と数段の曲輪がある。

のぼりつめたところは幅25mの入口になって幅8mの箱薙研堀の空堀が郭をとりまいている。さらに空堀の外周を幅5mの土塁を巡らしている。

空堀の西側には尾根の斜面を切る豊堀（I）があり幅8m、長さ40m、その両側に幅5mの土塁が構築され二重の空堀となっている。

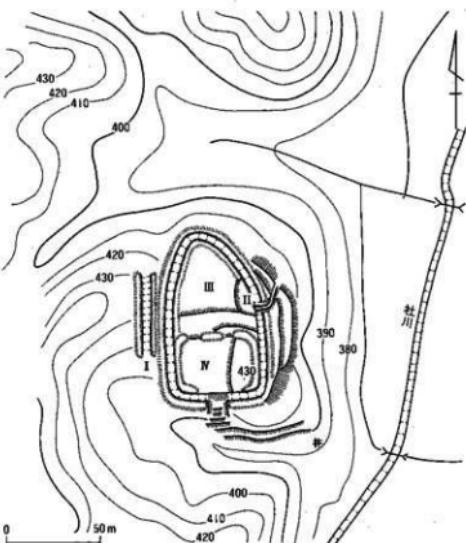
北側と東側は急傾斜になっている。東側には長さ20mの帯曲輪が二段につくられ、土橋を渡ると虎口（II）になる。虎口の一端高い西側は二ノ郭（III）、さらに一段南に高く主郭（IV）がつくられ、主郭の東側がさらに一段高く平坦面になっている。主郭、二ノ郭とも土塁を巡らしている。

城館の歴史 館は関東と奥州を結ぶ関街道に面し、白河領の南端を固める要衝の地に構築されたが、結城祐廣の弟左衛門朝泰が居館した。『奥羽永慶軍記』などによれば、天文の頃は朝泰の子孫関備前守が館主であった。天文年中常陸佐竹氏の白河侵略によりこの館も落城し、佐竹氏の城番が置かれた。天正5年佐竹氏は再び白河領に攻め入り小峰城を占領したが、同7年結城義親と和睦が成立し、常陸勢が退いたため、関備前

守は再び小屋山館主となった。（野崎健二郎、山縣重信）



第181図 小屋山館位置図



第182図 小屋山館略測図

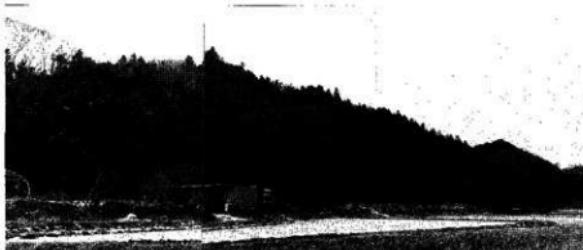


写真54 小屋山館遠景（南東より）

86. 小館山館 こたてやまたて

所在地 西白河郡西郷村大字長坂字安良田

築城者 安良田勘解由

時期 鎌倉期中期

遺構 腰郭、犬走、空掘

概要 白河から会津へ抜ける羽鳥街道の北面の丘陵に位置している。西郷村役場から北東約3.2km、阿武隈川、真名子川によって侵蝕開拓された急傾斜の白河丘陵(430m)要害の地に立地している。館のある丘陵は北西方向に突出した残丘で、南面から登ることのできない急斜面である。館の南東・北西に水田地帯が展開し、交通の要所である。

館は丘陵の北西突端部に構築され、山頂に18×12mの本丸がある。本丸を囲むように山麓から山頂にかけて数段の帯郭があり、3~4m幅がある。館のほぼ中央部、本丸の北東側に幅8m、長さ26mの空堀がある。

山頂尾根部分は幅5m、長さ約30mの平坦な通路が走り、幅9m、長さ約20mの空堀に通じている。ここも本丸部と同様幅約5mの腰郭を取り囲んでいる。館の南側は阿武隈川を見下し、会津に通ずる街道を見張る要所を占める館であった。

城館の歴史 小館山館の築城年は明らかでないが、館跡の北西水田地帯は旧安良田村で現在もその地名が残っている。ここは館の根小屋集落があり、館主安良田勘解由の屋敷もここにあったと伝えられる。『白河古事考』に「羽太村大龍寺の由緒に長禄寺殿大安吉龍と法号を伝う」と、此の人年代



写真55 小館山館遠景（西方より）

「事跡未詳」と記してある。

建武2年(1335)白河北方の支配者結城盛広の軍と陸奥国守北畠顕家の命を受けた伊達行朝がこの館に拠って合戦している。おそらく結城氏の白河下向のころ鎌倉中期より結城氏滅亡の天正18年まで利用されたものと思われる。(野崎修二郎・山野忠信)



第183図 小館山館位置図



第184図 小館山館略測図

なめつたて なめつじよう なめつじよう
87. 滑津館(南面津城、奈目津城)

所在地 西白河郡中島村大字滑津字御城

築城者 石川光房

時期 戦国期

遺構 郭、空堀

概要 滑津館跡は中島村役場の北東約3.2km、滑津元村滑津小学校から約1km、北東に位置している。館跡は阿武隈川とその支流泉川とはさまれた細長い洪積台地上に占地し、北側は泉川により解釈された断崖となり、南側は阿武隈川の攻撃により岩肌が露出し、沖積面から比高5~10mの場所にある。

館跡のある丘陵は東西方向に細長く、北高南低のゆるやかな台地上にあり、館の規模は東西400m、南北140mで大手は板碑群や磨崖碑のある南側であったと思われる。

本丸は館のほぼ中央部標高291mにあった。その西側に幅15m、さらにその西側に18mの空堀が2本南北に走っている。北側の泉川にのぞむ部分は現在杉林になっているが、水面からの比高は20~30mの急崖になっており要害の地である。館の西側に現在村道が南北に通じているが往時は丘陵頂面の連続であったものを空堀で区切った可能性が高い。昭和49年に第二次農業改善事業、圃場整備により、館跡は完全に破壊され畠地となってしまった。

城館の歴史 石川有光の五男光房が11世紀末ごろ滑津館を創めたが、文安元年(1444)舟尾山城守昌忠がここに城壁を構築し南面津城と称した。当時、舟尾氏は

白川結城氏に属したと思われるが、戦国時代には常陸佐竹氏に属して活躍した。

天正18年(1590)、伊達政宗により、攻撃され陥落した。館跡に接する南側の代畠に根小屋集落があった。

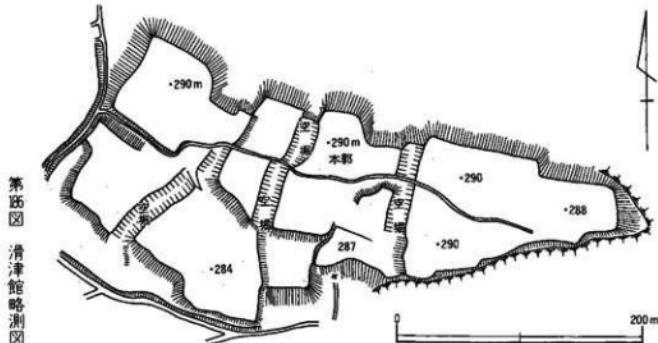
(野崎健二郎・山縣重信)



第185図 滑津館位置図



写真56 滑津館遠景（南方より）



88. 袖ヶ城（袖が館、狐が館、一水館）

所在地 西白河郡矢吹町館沢

築城者 不詳

時期 鎌倉期

遺構 郭、腰郭、犬走、堀、土塁、虎口、池、櫓台、通路

概要 袖ヶ城は、矢吹町の市街地西方600mに位置している。积迦堂川の支流限戸川が侵蝕した丘陵上に占地している。限戸川は外堀の役目を果たし、侵蝕崖は急で自然の要害である。南東部の大手より丘陵頂に至るところに、 $60 \times 30\text{m}$ の部分と $35 \times 25\text{m}$ の部分が二段に重なっている二ノ郭があり、北側に空堀があり土塁がめぐらす。本丸はこの郭に接し一段高く標高290m〈比高30m〉の場所は50m四方の平場に土塁をめぐらし、その周囲を幅20mの空堀が取り囲んでいる。本丸の北西部に物見郭、蒂郭があり、北西の櫓目手より本丸に通ずるところに虎口がある。本丸から西北の尾根伝い250mに約40m四方の平場がありこれに空堀が築かれ、尾根の舌状突端が詰の城となっており $30 \times 20\text{m}$ の平場を土塁が囲んでいる。東、北、西側は比高20mほどの急崖となっている。

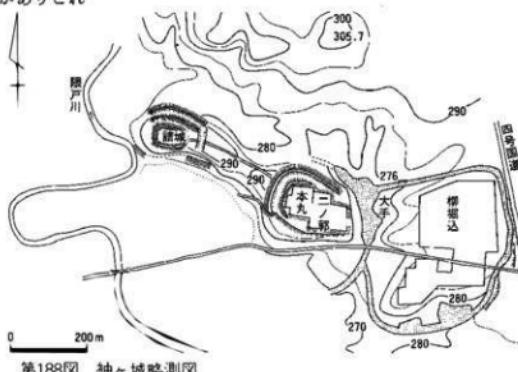
館主の居館と考えられる三ノ郭にあたる「柳堀込」は本館の東部にあり、自然の沢で遮断された300m四方の低い丘陵地で水堀に囲まれていた。

城館の歴史 矢吹は元石川郡に属し、古くから石川一族の領有であった。『石川家譜略』によれば石川有光の四男光孚が当地方を領有したとされる。矢吹(屋敷)

氏が記録に出てくるのは、建武3年(1336)であり、恐らく鎌倉時代には袖ヶ城に居館していたと考えられる。天正17年(1579)10月の伊達政宗による須賀川二階堂氏攻略の際には石川昭光と家老矢吹藤守も参加し、二階堂氏滅亡後、石川昭光に与えられた須賀川城の城代をつとめた。(野崎健二郎著、山野毛信也監修)



第187図 袖ヶ城位置図



第188図 袖ヶ城略測図

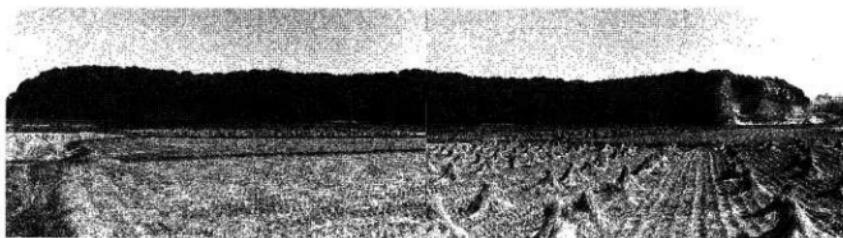


写真57 袖ヶ城遠景（西南より）

かんのんやまたて くま いじよう
89. 観音山館(限井城)

所在地 西白河郡矢吹町根宿

築城者 中畠晴良

時期 室町期

遺構 郭、腰郭、犬走、空堀、土塁、虎口、土橋、大手、搦目手。

概要 矢吹町役場から南東3.2kmの方向に位置している。阿武隈川の支流泉川が郡山面を侵蝕した沿岸にあり、洪積台地上にある小丘上に占地した連郭式の平山城である。館の規模は200×300mで本丸までの比高26mである。山頂面に80×90mの本丸があり、北側に一段高く物見跡といわれる八幡森が接続している。本丸より、一段低いところに限井上野介の守本尊を祀ったと伝える観音堂がありここが二ノ丸である。これらを取り巻いて空堀があり、東側は「相良家観音山古絵図」によれば、新郭、東蓮院、皆川屋敷のある平地があり、南側から西側にかけて帯郭が広がり、幅20mに及ぶ空堀で囲まれている。更に東に下ると一段低く、現在八幡社のある境内があり、ほぼ50m四方の不整形の平地をなしている。ここも深い空堀と土塁がめぐらされて、大手より通ずる道に橋があり、二の丸より三ノ丸に至る道の両側に現在西国三十三観音御詠歌石仏(安政4年)が残っている。搦目手に至る道は本丸より北側に通ずる。大手に連絡する別な通路が東側に折れる地点に番所跡の平場がある。外堀は館を取囲むように流れる泉川を利用した。

城館の歴史 石川中畠氏が平城の國神館(中畠字国神)から平山城である観音山館に戦国時代に対応するため移り「限井城」とも称した。以後、中畠家の居城となった。永禄年間三城目タカナシ館伊藤氏を降伏させここに居城を移す。観音山館に居館した中畠晴良は天正17年(1589)の白川家没落後は蒲生氏郷に従い、陸奥の大崎で討死した。晴良は石川氏であるが、白川義親に属し奥羽仕置で領地没収となった。(山縣重信)



第189図 観音山館位置図



写真58 観音山館遠景



第190図 観音山館略測図

90. タカナシ館

たかのすじよう たかなし きんじようめじよう
(鷹巣城、小島遊館、三城目城)

所在地 西白河郡矢吹町本城館

篠城者 小松越前

時 期 諸倉期

遺 橋 郭、腰郭、犬走、空堦、土界、通路

概要 タカナシ館跡は矢吹町役場北東約4kmに位置している。館の東側は古代東山道の宿駅ではないかといわれる三城目があり、その東方には阿武隈川が流れている。

館跡は矢吹原台地東縁に有り、阿武隈川支流によって開析され孤立した小台地上に占地している。明治初期の本城館の地籍図は館の遺構をよく示し、「相樂家文書古絵図」によれば大手は館跡の東方(楽師堂付近)にあり、本丸(應樂城)に至る通路が現存する。

田町と城見寺跡の間を通っていくと幅約12mの空堀が南北に走っている。ここから坂の左手に虎口と思われる平地がある。北側にマキヤ蔵、胴山クルワ、西側には泉川屋敷、田子主膳屋敷跡が広がっている。本丸は東西50m、南北110mの平場に土塁がめぐり西側、北側に造構がある。本丸の西側下に帯郭が通り、南側は二ノ丸に通じる。二ノ丸(乳母館)は50×90mの不整形をなし本丸から約10m低い。堀手は館跡の西方、道は矢吹クルワから空堀を越えて二ノ丸に至る。

空堀は幅12~14m、西から南へのび三ノ丸(應神館)に至る。館主の居所は二ノ丸と三ノ丸の間「月の輪クルワ」にあつた。

城館の歴史 城館は小松越前が鎌倉時代に築き、その後、安積伊藤氏一族の伊藤氏が入った。一時、天文年間に完全に二階堂家の支配下になり須田右京が入城した。二階堂家支配も天文21年に終り、再び石川氏の支配下になり伊藤氏が入城、永禄年間に伊藤氏の弱体につけ込んだ中畠城主中畠晴辰が三城目を押領し、居城を中畠から移したという。この城は、天

正18年(1590)に廢城となった。(山縣重信著・野崎健二郎)



第191図 タカナシ館位置図



写真59 タカナシ館遠景



第192図 多カナシ館路測図

てんのうたて てんのうじ だて かとう だいよう
91. 天王館(天王寺館、河東田城)

所在地 西白河郡表郷村大字河東田字天王下、屋敷、下谷地、西原

築城者 河東田重繼

時期 戦国期

遺構 郭、空堀、腰曲輪

概要 天王館は表郷村金山の村役場から東北東約4km、社川が矢吹丘陵を開析した低位段丘面の水田から比高17mの円頂独立丘陵に占地する。

対岸には武鉢山、三森館、西方の堀の内館、櫛山館、東方は古矢鎌館、中丸館を展望できる要衝の地である。館の〈I〉は標高337m、東西約40m、南北約50mの主郭が構築された。さらにその南方は緩傾斜地になっている。

館の中腹には数段の腰曲輪が取りまき、主郭の西方には幅約5m、長さ30mの空堀が有る。東方には幅約10mの腰曲輪が数段あり、さらに南から東にかけて〈II〉、〈III〉、〈IV〉は主郭を取りまくように幅約30m、長さそれぞれ〈II〉は60m、〈III〉は50m、〈IV〉は40mの曲輪が配置されている。

これは、この館が比高が低く防禦上の必要性と佐竹勢に配慮したものと思われる。現白旗神社参道西側

は虎口〈V〉であったと考えられ大手は参道側で、〈VI〉は搦目手であると思われる。

城館の歴史 結城頼朝の次子朝重4世の孫重繼が河東田を領し館を構築したと思われる。天正の頃領主は河東田上総守清重である。天正3年常陸佐竹義重は白河領棚倉赤館を攻略した。翌年その奪回のため白河勢は最前線基地である天王館に集結し、赤館に夜討を掛けてこれを奪取した。しかし天正7年5月佐竹の大軍により天王館や近隣の諸城、さらには白川城も攻略された。天正18年(1590)、豊臣秀吉により白河領が没収され、清重は結城義親に従い伊達家の家臣となり、天王館は廃城となった。(野崎健二郎、山縣重信)

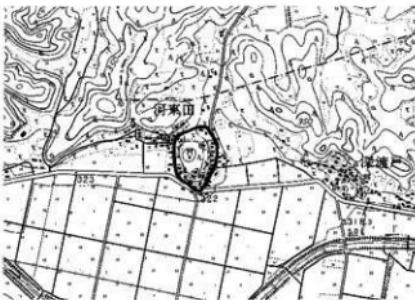


写真60 天王館航空写真



写真60 天王館航空写真



第194図 天王館略測図

こうやなて こやなて
92. 高野館(小屋館)

所在地 西白河郡東村大字柄本字下本郷裏山

築城者 結城柄本廣政

時期 南北朝期

遺構 本丸、二ノ丸、空堀

概要 高野館跡は、水戸街道の街村東村釜子から西方約2kmに位置している。矢武川およびその支流によって開析された水田地帯を東西にはしるゆるやかな丘陵、標高330m上に占地している。水田地帯からの比高は20mである。館跡は東側の角折神社と西側の水月寺跡との間にあり、大手は南側に面している。丘頂面の本丸は東西60m、南北50m、南側に一段低く東西60m、南北34mの二ノ丸と考えられる平場があり、梯郭式の山城である。

空堀は、本丸、二ノ丸を大きく取巻いており、幅約10m、深さ4~5mである。東側から北東部に傾斜地を10~15m下ると、南北に長さ100m、幅50mほどの不整形の平場があり、これは三ノ丸と思われる。

北側は断崖をなし、10mほど下ると水田地帯があり、字下寺内集落に接している。西側に掲目手より通ずる道が水月寺跡に通じ、南側は字下本郷の平地で根小屋

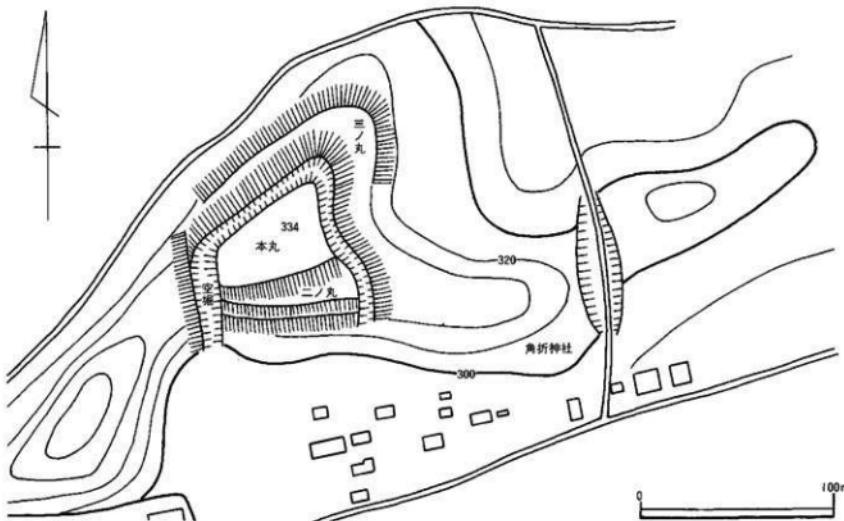
集落があったと思われる。

城館の歴史 高野館跡についての資料は少なく断片的にしか利用できない。『白河古事考』によれば結城宗廣の一族廣政の館という。

築城年は明らかでないが南北朝初期(1340年代)のものであろう。結城宗廣の孫高野弥二郎三河守朝常も館主としてここにいたという。(『東村史』)この館跡は中世常陸街道より白河に抜ける間道の要衝地にあり、常陸佐竹氏に備えるため白川据目城の支城として置かれたものと考えられる。館は結城氏領没収まで存続していた。(山縣重信・野崎健一訳)



第195図 高野館位置図



第196図 高野館略測図

93. 東堂山館 とうどうさんたん

所在地 西白河郡大信村大字下小屋字井戸ケ沢

築城者 不詳

時 期 戦国期

遺 構 郭、腰郭、空堀、櫓台

概 要 東堂山館跡は大信村役場の北北西約2.8kmに位置している。羽鳥から矢吹、須賀川方面への北郷道と連絡し、会津街道上小屋東約1.5kmにある標高414mの山脚上に占地している。この丘陵を開拓した駅迦堂川支流の竜田川、腰戸川による埋積谷床は水田地帯を形成している。

館跡は、腰戸川の北面側の山稜からのびる山脚に構築されその比高は90mである。大手は南側にあり、道の両側には清水が湧出している。山麓より山頂に登り切るまでに幅7~8mの平場が5段ほど館全体を囲繞しており、北側の本丸は30×40mの円型平場で、現在東堂山の碑が北西隅に立っている。この場所から約80m尾根伝いの道を通ると25×18mの平場があり西北隅に比高2mほどで3×8mの物見台と思われる場所がある。

従って館は、全体的に見れば丘陵地形をうまく利用

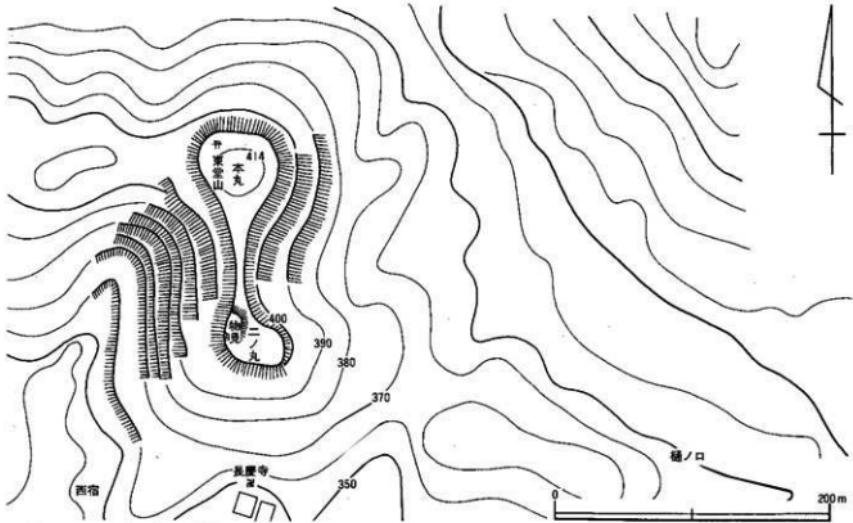
し、二つの平場を結合するひょうたん型をなす連郭式である。さらにこの二つの平場を腰郭が同心円型に築造されている。丘陵は45度の急傾斜であり頂上に館がつくられている。現在は人工林が植生されている。

城館の歴史 館跡は山城の形式であるが、築城者は不詳、大字下小屋にはこの外西側に大山館、東側に結城盛景の居館といわれる宮沢館がありなんらかの関連があったと思われる。

東堂山館は、曹洞宗長慶寺の境内の愛宕山頂にあり館主は真船大隅守と伝えられる(『白河風土記』)。館の存続期間とその間の利用形態は明らかでない。(山縣重信)



第197図 東堂山館位置図



第198図 東堂山館略測図

94. 新城館(鶴が館)

所在地 西白河郡大信村大字中新城字内屋敷

築城者 不詳

時期 戦国期

遺構 外堀、物見櫓、内堀、土塁

概要 新城館跡は、大信村役場東方1.8km付近の埋積谷床に位置している。館は駿迦堂川支流隈戸川の埋積谷の上位段丘面上に立地しており、規模は東西250m、南北160m、大手は隈戸川に面した南側にある。館を取り囲む水堀があったと伝えられるが、現在は幅3mほどの用水路が北側と西側に確認されるだけである。西北端より西側にかけて幅3m、高さ2~3mほどの土塁が120mほど残存しており、そのうち平場が10m四方、高さ5mほどの物見櫓と思われる箇所がある。内堀は外堀と連結して内郭を囲んでおり、更に土塁によって三つの郭に区切られている。

西側外の土塁と併行して南北にそれぞれ50m、26mの土塁が二か所残存している。北側の外堀と内堀の間の郭には藏屋敷があったと伝えられ、南側の郭の二つうち、西側の場所は寺跡と伝えられる。内郭の東北端に鹿島神社があり、20m四方の境内地を持っている。

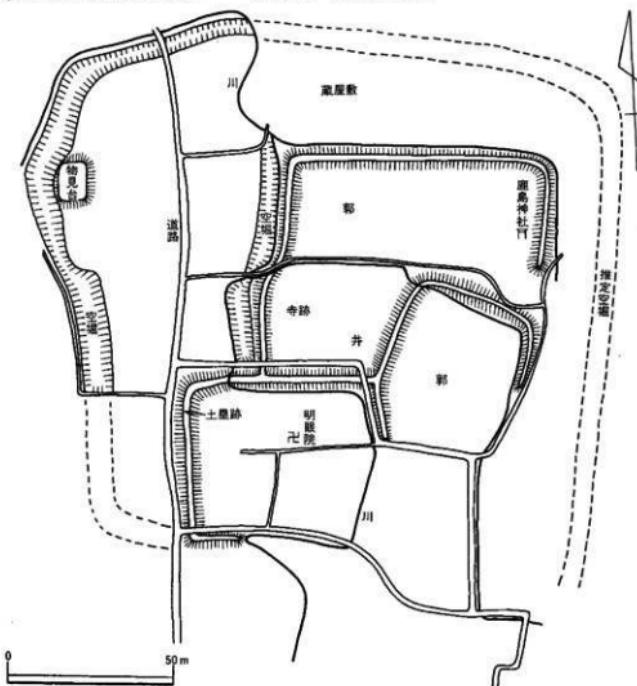
城館の歴史 新城館の築城年は明らかでない。館主は結城晴綱旗下の須田近江守定綱と伝えられる。

新城館の西方は白河から飯土用、滑里川経由で長沼に向かった会津街道の上小屋に連絡し一方北郷道として白河から矢吹、

須賀川方面に通じる要衝の地にあり、附近は白川郡と岩瀬郡の境界帯で、白川結城氏と須賀川二階堂氏の争奪の地でもあった。永禄3年(1560)館主の新城備後守、須田源次郎が須賀川二階堂に降ったため結城晴綱は旗下の新小笠雅葉守篤胤を大将に任じここを攻めさせた。篤胤は敗死し新城館は二階堂氏の支配下になった。(山縣重信・野川信之郎)



第199図 新城館位置図



第200図 新城館略測図

95. 伊賀館(関和久城)

所在地 泉崎村大字関和久字関和神社、上町、漆久保、中宿、

築城者 熊田伊賀忠氏か

時期 戦国期

遺構 郭、空堀、虎口、土壘

概要 伊賀館は阿武隈川の北方約700m、JR線福島駅の南南東約2.7km、標高322mの白河丘陵上に占地する。この丘陵は水田地帯の郡山面から比高16mあり、緩傾斜状の丘陵面をなしL型状の地形に伊賀館は構築された。**〈I〉**は約100m四方の主郭が構築され、その周囲を幅約3mの土壘を巡らしている。

土壘の北と南の低部には幅約10mの空堀が長さ各々約50m、100mのものが構築されている。主郭の南側の一段低い場所に虎口がつくられ横矢型のものと思われる。

虎口から南へ約90m、主郭と連なる標高311mに約70m四方の郭があり二ノ郭と思われる。**〈II〉**。現在**〈I〉**と**〈II〉**の郭の間は大正7年に水路工事のために削平したもので一段低くなっている。二ノ郭の東側幅約10mの空堀は主郭の空堀に連続し、二ノ郭の南側まで延長されていたものと思われる。

城館の歴史 館主の熊田伊賀忠氏は白川結城家の老臣といわれ、その子孫の若狭助兼氏は、はじめ与惣左衛門光行と称したという。永正7年白川結城氏に内紛があり、小峰朝脩が自殺した後に、小峰家を相続したのが本家より入った義親である。義親は伊賀館(関和久城)を与えられたので、熊田若狭は西方の木之内館に移った。天正年中、常陸佐竹義重は白河領を侵略し、棚倉赤館をめぐる攻防線の末にこれを陥落させた。天

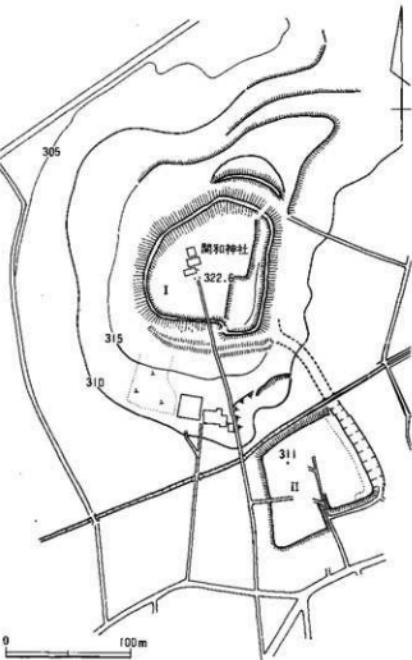


写真61 伊賀館航空写真

正2年、白河全土を攻略した常陸勢は一旦退いたが、同7年再度侵略する。新地山館に集結した白河勢は木之内館、関和久館などと呼応して佐竹の大軍を迎撃するが敗北して占領された。(野崎健二郎、山縣重信)



第201図 伊賀館位置図



第202図 伊賀館略測図

96. 赤館

あかだて

所在地 東白川郡棚倉町大字棚倉字風呂ヶ沢大字榎

木字掌畠沢

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭・腰郭・空堀・土塁・土橋・堀底道

概要 この館は、棚倉町の中心市街地である棚倉の北に位置し、標高345m、比高70m(南側)の通称館山に占地する。北は尾根続きであるが3方は斜面で、東の谷地を国道289号線、西の谷地を椿木川(根小屋川)とバス専用道路白棚線が通っている。

遺構は、山頂部と周囲の斜面にみられるが、昭和33年に公園となつたため山腹を一周する道路・旅館・売店・駐車場などが順次設けられ、遺構には部分的な破壊がみられる。戦時に煙地化されたことのある主郭Ⅰの南側のAは、踊り場のようなものをともなう斜めの土橋で、Aの南側にある尾根状のものは、周回道路が設けられる以前はBまで延びていたと思われる。Bの西側には途中に折がついた空堀があり、南側は3段の郭となっている。周回道路の北にあるIIとIIIの郭群の間は谷地となっていて、水が湧き出ている所があり、IIの空堀Cはこの谷地に下る道ともなっている。IIIの空堀DとEとの間には土橋と思われるものがあり、Eはその外側の土塁が切れた所から南へ下って腰郭Fとつながっている。なおGは、遺構でなく郭等を削って造られた空地である。

城館の歴史 この館の築かれた時期は不明で、「白河古事考」に「鎌倉大草紙応永の頃に見へたる始て、夫より白河結城庶流居ること度々みへたり」とあるが、馬場都々古別神社の別当で不動院と称した高松家の「家系明細録」に、建武年中、伊賀國から下った伊賀隆定父子のことがみえ、隆定は馬場左衛門尉と称し軍事を務め、嫡男左門は別当高松家を嗣いで良聖と名乗った。そして二男の定澄が赤館城主となり赤館伊賀次郎と称したとあるので、建武年中にはすでにこの館が築かれていたことが知られる。定澄は、この館を本拠として周囲の庄園を数ヶ所切り取るなどして勢力を伸ばしており、以後の赤館氏は、しだいに国人へと成長していくものと思われる。歴代の名前は不明であるが、

『白河古事考』によれば文明年中には赤館源七郎が在城していた。

佐竹氏の進攻に苦慮する白河結城氏を支援することにした蘆名盛氏は、永禄3年(1560)、寺山館まで追つた佐竹氏に対するためこの館の防御を強化する普請を行い、赤館氏を移し上遠野盛秀を城代として置いたといわれ、同10年の赤館左衛門尉宛蘆名盛氏起請文(沢井文書)によれば、この時赤館氏は沢井(石川郡石川町)などを代わりに与えられたと思われる。その後赤館氏は領地を失い浪人となった。『白河古事考』に「奥州棚倉さきの地頭赤館源七郎と云牢人、其父伊賀守」とみえ、源七郎は会津の上杉氏を攻める徳川家康軍に小山(栃木県)で上杉勢の白河における様子を伝えている。

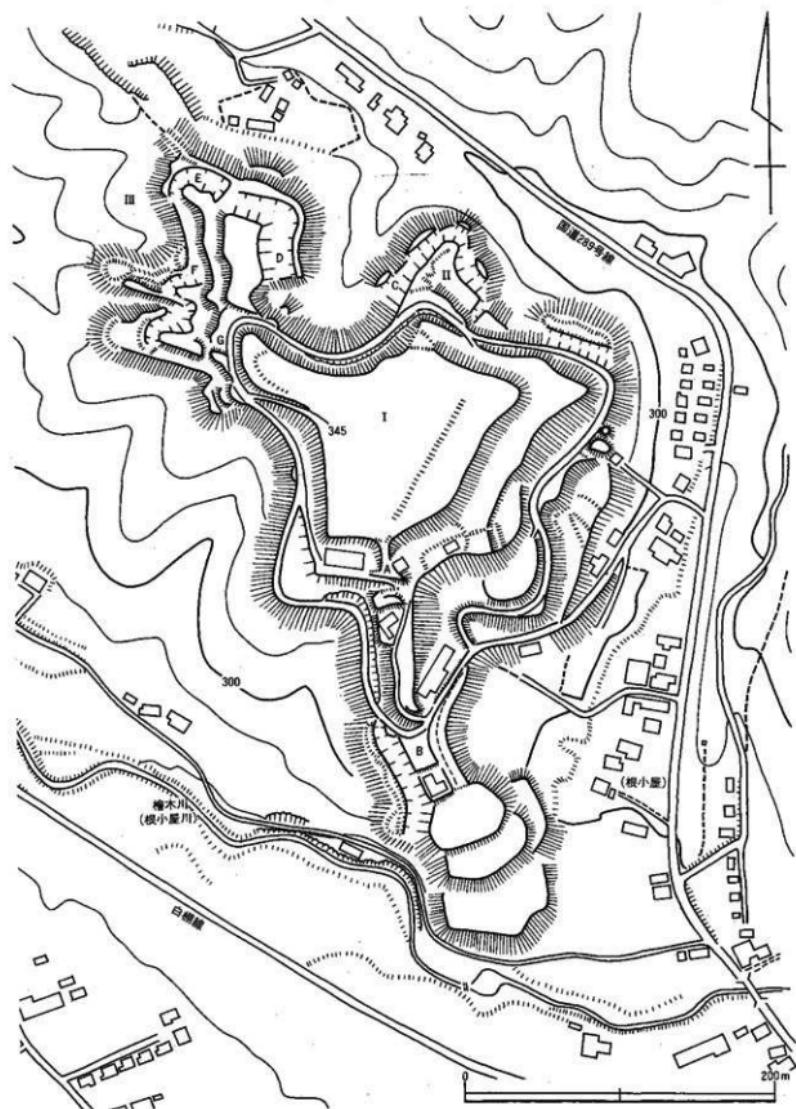
天正3年(1575)に佐竹氏はこの館の攻略に成功し南郷の制圧を果たした。翌年、一時白河結城氏に奪回されたが、すぐに取り返した。以後その支配は揺らぐことがなく、この館は、陸奥進攻の新たな前線基地として寺山館・羽黒館・東館と共に南郷衆を組織し仙道方面をうかがった。「戸部一閑覚書」によれば、天正13年の人取橋合戦に寺山館・東館と合わせて3千人の兵を出している。摺上原で蘆名氏を敗った伊達氏は一撃に南下し、佐竹氏側から転じた白河結城氏・石川氏・浅川氏らと連合して天正17年から翌18年にかけて佐竹氏と対したが、佐竹氏はこの館を本陣として南郷各館に諸将を配した。

この館は、慶長7年(1602)に佐竹氏の秋田転封にともない破却されたというが、翌8年に初代棚倉藩主として入封した立花宗茂はこの館を居城としたともいわれる。しかし2代藩主丹羽長重が寛永2年(1625)に棚



第203図 赤館位置図

倉城を築くにいたって廃城となった。(山田芳則)



第204図 赤館略測図

97. 中丸館

所在地 東白川郡棚倉町大字板橋字日照田

築城者 田村氏

時期 不明

遺構 郭、空堀、土塁、虎口、土橋、櫓台

概要 この館は、町道玉野・逆川線の南、大清水池の東に位置する平地方形館である。

遺構は、空堀によって2分されている郭とこれを取り囲む空堀、その外側の土塁からなり、縄文早期・古墳時代の遺跡に築かれている。遺物は、土塁の東側と西側の畠地化のため部分的に破壊された所から出土している。空堀によって2分されている郭の北側は一番平、南側は二番平と呼ばれており、空堀の中央と東端に設けられた土橋によって連絡し合っている。西側の土塁の北端部は、内側へ折れクランク状になっているが、これは虎口防衛のためと思われる。

城館の歴史 この館の築かれた時期は不明であるが、「白河古事考」に「往古田村姓の人築く、文龜年中、城代として主将ありしそ」とみえ、割り注に仲丸左京大夫の在館を記している。また同書は別項でもこの館のことを載せており、「結城旗下上遠野美濃守盛秀居る」と上遠野氏が在館したことを記している。系図には盛秀の名はみえないが、同氏の『家伝承伝之覚』に

「白川ニ徙ヒ赤館ノ内ニ要害ノ主ト成テ罷有候」とある秀式と同一人物と思われる。秀式が白河結城氏に属した時期は不明であるが、天文20年(1551)には「今般無ニニ致奉公之上」(「秋田藩家蔵文書」)として仁公儀村(現棚倉町)を晴綱から与えられている。

佐竹氏の進攻に苦慮する白河結城氏を支援することにした喜名盛氏は、永禄3年(1560)、寺山館まで追った佐竹氏に対するため赤館の防御を強化する普請を行い、盛秀をその城代として移しこの館を廃したという。「白河古事考」に「文禄の頃断絶せしと也」とあるが、文禄は永禄の誤りであろう。(山田芳則)



第205図 中丸館位置図



第206図 中丸館略測図

てらやまだて　じやとうだて　ながねだて
98. 寺山館(蛇頭館・流館)

所在地 東白川郡棚倉町大字寺山字流久沢字東山久保

築城者 白河結城氏

時期 不明

遺構 郭・腰郭・土塁・桟形虎口・櫓台・堀切

概要 この館は、寺山地内を通過する国道118号線の約500m東に位置し、標高335m、比高70mの蛇頭山にある。

遺構は、山頂部を中心に周囲の山腹斜面にみられる。山頂部の主郭には、途中切れているが周囲に土塁がめぐっており、東側のものは桟形虎口をつくっている。尾根続きとなっている主郭の東に堀切、西に3段の郭があるが、防御の重点が置かれているのは南側で、尾根上とその東西の斜面は小郭と腰郭等によって固められている。この尾根の延長上に金井館があり、この館と合わせて2km以上に及ぶ防御ラインをなしている。

城館の歴史 この館の築かれた時期は不明であるが白河結城氏によって築かれたものと思われ、「白河関物



第207図 寺山館位置図



写真62 寺山館遠景（南西より）

譜」によれば晴綱が深谷伊豆守を城代として置いていたことが知られる。

東館・羽黒館を攻略しその属城とした佐竹氏は、次にこの館の攻略を図った。永禄4年(1561)8月、義昭はこの館を攻めており10月には糸井能登守の在城を賞しているので、攻略はこの間に成ったものと思われ、以後、天正3年(1575)に佐竹氏が赤館攻略を成すまでは、その前線基地として重要な位置を占めた。元亀3年(1572)に白河結城氏は、蘆名氏・田村氏と連合して奪回を図るため攻め寄せたが形勢不利のため、馬場都々古別神社と和議を結んだ。赤館攻略が成り南郷が制圧されると赤館・羽黒館・東館と共に南郷衆を組織した。

破却のことが赤坂朝光宛佐竹義宣書状(秋田藩家蔵文書)に、「うえさま(豊臣秀吉)より如仰出寺山・はくろはきやく申へきよしこて御けんしを可被遣よし候」とみえるが、この書状は天正18年のものと推定されている。(山田芳則)



はぐろだて

99. 羽黒館

所在地 東白川郡塙町大字上渡井字館山、竹之内字竹之内、塙字城山常世北野字城山

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭・腰郭・空堀・堅堀・土塁・堀切など

概要 この館は、塙町の市中心市街地である塙の東に位置し、標高364m、比高150m(東側)の羽黒山に占地する。国道118号線と水郡線が通る西を久慈川、南を川上川、東を渡瀬川等が流れ、北の谷地を町道が通っている。

遺構は、約600mの南北に長い嶺、嶺の南側から南・西・南東へのびた尾根上、東側山腹斜面と広範囲にみられ、東側の麓近くには館跡がある郡内最大の根小屋式山城である。嶺上の遺構は空堀によって3つに区分でき、南側が本城地区で出羽神社が鎮座している所の北側が最高部である。本城地区は、小郭群を中心に北側の嶺上を階段状に連なる細長い郭とこれらを取り囲む腰郭等からなっている。東側山腹斜面には館跡まで大小の郭や土塁・空堀等がみられる。他の2地区も嶺上の郭と腰郭等からなっているが、北側の地区の縄張りは大まかで防御上手薄と思われ、南から北へと順次行われた佐竹氏の普請が途中で終わったことがうかがえる。

義宣は、「四ヶ城之城領之郷人月に五日宛普請可致候事」(『年未詳印判状秋田藩家蔵文書』)と命じているので、普請が未完成に終わったのは、その途中で破却を命じられたことによるものと思われる。四ヶ城とは、南郷における佐竹氏の主要支城である赤館・寺山館・東館そしてこの館のことであるが、義宣が家督を嗣いだ頃の各館の状況は、天正15年(1587)と推定される一休斎善通書状(『秋田藩家蔵文書』)に「此頃御陣勞故歟、南郷之城々も普請已下をも被指置」とみえるものであった。

城館の歴史 この館の築かれた時期は不明であるが、『棚倉往古由来記』は「天喜二^丁年八幡太郎義家公塙之庄御着陣、久慈川流築羽黒館、常陸大掾国香卿十ヶ年余領之、其後久荒城成」という伝承を記している。義家築城の伝承は『白河古事考』にもみえるが、同書は「閥物



第209図 羽黒館位置図 (1/50,000)

語に永正二年佐竹氏の族大塚氏、佐竹を背て結城に属して此城に居す」と大塚氏の在城を伝えているので、白河結城氏の南郷領有後はその属城になっていたと思われる。

天文10年(1541)に東館を攻略しその属城とした佐竹氏は、次にこの館の攻略を図った。同23年に迎隼人佐の忠節に対し義昭は「川上之内十貫之所」を与えていたので、この時すでに攻略は成っていたと思われるが、攻略に關した史料は残っていない。佐竹氏はこの館を前線基地とし、安藤太郎左衛門に「此度羽黒^黒罷越候^西南郷人衆^東勿論あしかる以下迄相しらへ、寺山并赤坂すし^西敵行も候^東則かけ付候様可申付候」(『年未詳佐竹義昭書下 秋田藩家蔵文書』)と命じるなどして寺山館の攻略を図った。攻略後は、蘆名氏・田村氏と連合し奪回を図る白河結城氏とたびたび攻防戦を行っており、代表的なのは元亀3年(1572)のものであるが、同2年と推定される蘆名盛氏書状(『会津四家合考』)に「寺山、〔御前〕・清顕・盛興馬回を以て押置き、羽黒行に及び作毛丸り引除け候所、敵二千追え候」とみえ、この年はこの館も攻めている。

天正3年(1575)に佐竹氏が赤館を攻略し南郷の制圧を成した後は、赤館・寺山館・東館と共に南郷衆を組織した。年未詳ではあるが南郷衆の軍役書出(『秋田藩家蔵文書』)によれば、この館は赤館・寺山館の城兵とで馬上210騎を初めとして1337人を出しているが、遺構の規模からしてこの館が最も兵站能力があったものと思われる。

破却は、天正18年(1590)のものと推定される赤坂朝

光宗佐竹義宣書状(『秋田藩家蔵文書』)に「^{豊臣秀吉}うえさまよ
り如仰出寺山・はくろはきやく申へきよしきて御け
んしを可被遣よし候」とみえるので、同年中のことと思
われる。(山田芳則)



写真63 羽黒館遠景(東より)



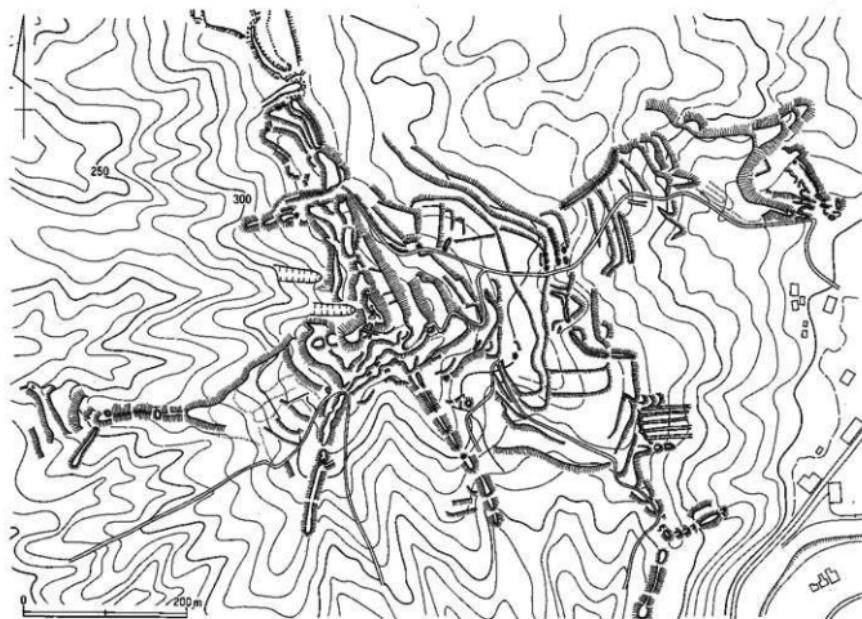
写真64 本城地区南西側の小郭



写真65 小郭の平場



写真66 羽黒神社の鳥居が連なる腰郭



第210図 羽黒館略測図 『城町史』第1卷付図版(城町)による

100. 狐屋館

所在地 東白川郡塙町大字川上字花園

築城者 船尾昭直

時期 不明

遺構 郭・空堀・土塁・櫓台

概要 この館は、川上地内を流れる川上川の西に位置し、南北に連なる嶺のうち、標高³⁸⁰m、比高55mの山頂部にある。当地する。

遺構は、主郭を中心にその周囲にみられ、特に尾根続きとなっている西側が土塁や空堀によって防御を固めている。主郭は、東側を除いて3方が高さ10~13mの土塁によって取り囲まれており、南北両端と中央に櫓台をもつ西側部分は空堀を隔てた同じ高さの土塁とで2重になっている。

城館の歴史 この館は、「白河古事考」によれば船尾下野守が滑津(西白河郡中島村)から隠居のために移り居城とした所で、同書別項にこの館のことと思われる川下村古館を初めとする4館は、「羽黒館に属し、勢援の為に築きしと云、年代不詳」とある。しかし船尾氏が佐竹氏に属したのは天文年中のことで、天文24年(弘治元年、1555)には昭直が佐竹義昭から川上の7軒在家を与えられている。以後、天正3年までの20年余りをここで過ごしたと思われる所以、この館は船尾氏が領地支配のために築いたものと考えられる。

「白河古事考」は下野守に
「滑津村の方にては山城守
といふ」と割り注をしてい
るが、滑津において山城守
を称している昭直は、系図
等に下野守を称したことが
みえず、下野守を称したの
は父直隆だけである。天正
3年(1575)に昭直は短期間
ではあるが在城した赤館か
ら滑津に移され、再び赤館
にもどるように命じられた
のは同17年のことである。
佐竹義宣は、この時の起請
文で再び南郷を任せると約

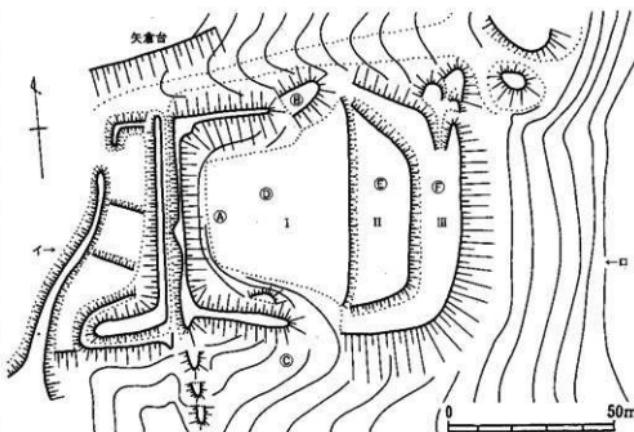
束しており、「任佐吉本領川上之地進之候」という義宣判物(秋田藩家藏文書)は、この約束を受けたものと思われる所以隆直の隠居は天正18年頃のことと考えられる。(山田芳則)



第211図 狐屋館位置図



写真67 狐屋館遠景



第212図 狐屋館略測図 「塙町史」第1巻(塙町)による

101. 東館

ひがしだて

所在地 東白川郡矢祭町大字東館字寄居・塘ヶ沢・
館・南沢・唐目

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭・腰郭・空堀・堅堀・土塁・堀切など

概要 この館は、矢祭町の中心市街地である東館の東に位置し、唐目沢(北側)と南沢(南側)に挟まれた標高205m、比高45mの丘陵に占地する。

遺構は、本城部と160mほど離れた東の嶺部の2つに区分でき、間にある尾根にも堀切が3ヶ所設けられている。本城部は4つの郭とこれらを取り囲む腰郭からなり、大手と思われる南側の斜面に重点が置かれて築かれている。東の嶺部は小郭と北東に延びる尾根上の堀切からなり、本城部との比高は45mほどで物見台や狼煙台として使用されたものと思われる。

城館の歴史 この館の築かれた時期は不明であるが、常陸との国境近くに位置するため、高野郡を領有する白河結城氏は、この館を重視し早くからその属城としていたと思われ、班目広基らを城代として置いていた。

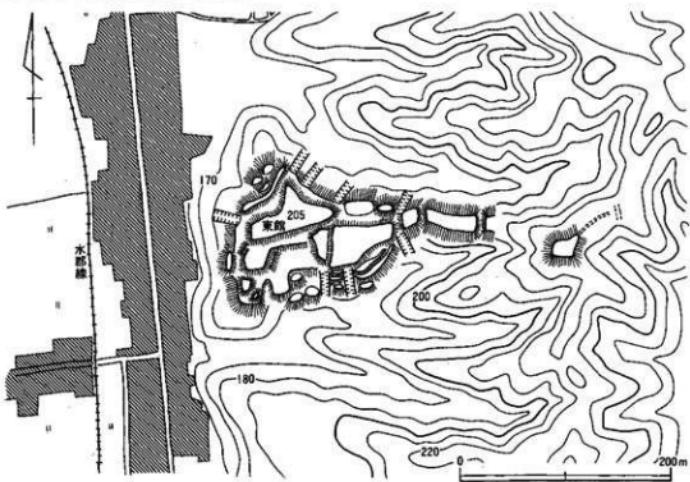
勢力拡大を図るために南奥進出を企てた佐竹氏は、依上保を支配すると統いて高野郡南郷への進攻を開始するが、当面の目標としたのはこの館の攻略であった。

佐竹氏がこれに成功したのは天文10年(1541)のこと、このため白河結城氏は撤退をよぎなくされ約定によりこの館を破却したが、その後佐竹氏により南郷進攻の本拠として再築された。

進攻が北へ及ぶにつれ、この館は常陸とこの館以北の各館との中継基地の役割を果たし、天正3年(1575)に佐竹氏が赤館を攻略し南郷の制圧を成した後は、赤館・寺山館・羽黒館と共に南郷衆を組織した。『白河古事考』に東義久は、「此城に居て、いつも佐竹より軍を奥州仙道へ出せし時に先手の大将たり」とみえる。破却の時期は、寺山・羽黒の両館と同じ天正18年と思われる。(山田芳則)



第213図 東館位置図

第24図 東館略測図
（矢祭町）による

102. 赤坂館

あかさかだて

所在地 東白川郡鮫川村大字赤坂中野字館山

築城者 赤坂氏

時期 不明

遺構 郭・腰郭・堅堀・土塁・土橋

概要 この館は、塙・棚倉・古殿など各方面へ通じる道路の分岐点となっている新宿の南西に位置し、標高482m、比高60m(西侧)のほぼ独立した館山に占地する。

遺構は山頂部と周囲の山腹斜面にみられるが、南と東の斜面に重点を置いて築かれている。山頂部の主郭は公園化の際に削平され旧状は不明であるが、南側に土塁の残存と思われるものがある。東側山腹の山村開発センターが建っているあたりは、中世に光明寺のあった所で明治初年まで赤坂氏歴代の墓といわれる五輪塔があったという。

城館の歴史 この館は、赤坂村を本拠とする赤坂氏が広畠館に代わって居城とするため築いたものであるが、その時期は不明である。赤坂氏は、蒲田氏の一族の中で赤坂村を領する者が赤坂氏を称したことから始まるが、本拠と定め落ち着いたのは系図に「在名号赤坂」とある光政からと思われ、以後、光憲・綱光・貞光・政光・朝光と続いた。赤坂氏は、当初本宗である石川氏に属していたが、しだいに国人として自立し文明16年(1484)に白河結城氏に属した。しかし政光の代にいたり、白河結城氏が領有する高野郡南郷を制圧しようとする佐竹氏と氣脈を通じて篠代役を果たし、その支配下に入った。



第215図 赤坂館位置図

天正18年(1590)のものと推定される書状(秋田藩蔵文書)で佐竹義宣は、豊臣秀吉の命で寺山・羽黒の両館が破却されることを朝光に伝えているが、これに続けて「其地なとも定めはきやくたる可候、其しく候可候、心へのためニ申届候」と述べているので、この館も同年中に破却されたものと思われる。慶長7年(1602)、朝光は佐竹氏の転封に従って秋田に移った。

(山田芳則)

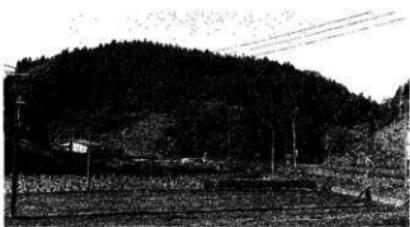
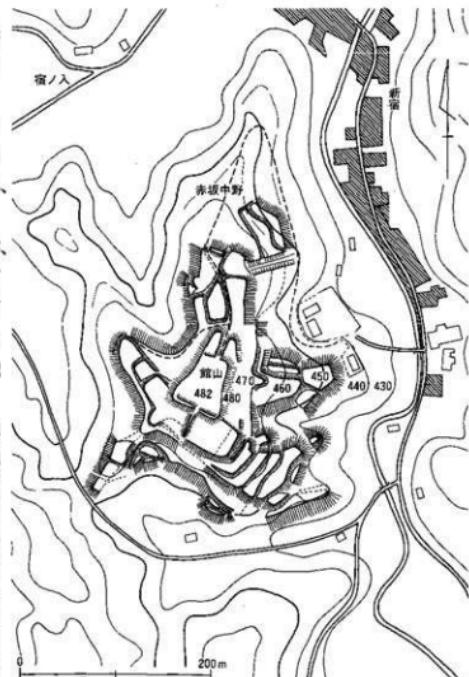


写真68 赤坂館遠景



第216図 赤坂館略測図

第2節 会津地区の中世城館跡

1. 小高木館(黒川城、東黒川館、黒川東館)

所在地 会津若松市城東町か。

築城者 薩名直盛か。

時期 南北朝期 文和3年(正平9年)又は至徳元年(元中元)

遺構 不明(近世城郭に改変又は消滅か。)

概要 会津盆地東南部を流れる湯川(羽黒川又は黒川)が形成した扇状地の扇尖部付近に立地したものと思われる、標高約235m、盆地床との比高約30mの平山城かと思われる。

文禄元年(1592)の蒲生氏郷の城普請により、中世に造られた遺構も、改造又は消滅したものと思われる。僅かに、地名として、小田垣(氏郷入部の頃、小高木より改めたという)『会津旧事雜考』の字名が残されるのみである。なお、館の堀は、伝薩名時代の絵図(『会津若松史』所収)によれば、湯川と、その支流の車川を堀として用い、氏郷もそのまま外郭の外堀として利用したものという。

城館の歴史 館主、薩名氏は、一般には文治5年(1189)の奥州征伐の功により、佐原義連が会津地方を拝領し、その孫の光盛より薩名(神奈川県三浦半島の薩名郷を本拠地としていたことに由来。)を称し、黒川(会津若松市)を中心とする地域を領したとされるが、義連の拝領及び、薩名氏の会津下向に関する史料は存在せず、不明な点が多い。

小高木館の構築についても、文和3年(1354)説と、至徳元年(1384)説がある。前者は『会津旧事雜考』などによれば、或る記(不明)からの引用として、文和3年に築かれたとしている。なお、この2年前の觀応3年(1352)館主の薩名直盛と推定される三浦若狭守が、会津郡の諸城郭を攻めており『真壁文書』、至徳元年以前に、直盛が会津で活躍したことになる。

一方至徳元年説は、民間に相伝わる薩名系図の中に、「薩名直盛が、康暦元年(1379)に鎌倉より、始めて会津に下向し、幕ノ内(会津若松市)に3年、小館(同市)に移り2年、その後、至徳元年、小田山に移り、町を

黒川と号した。」とされている。『新編会津風土記』などでは、小田山を小田山の麓、すなわち、小高木とし、至徳元年に小田山城を築いたとしている。

小高木館が小田山城と同一のものかどうかといった問題(小田山の山城とする考え方もある。)や系図の信憑性の問題(すなわち、城下を黒川と称したのは応安8年(1375)までさかのぼれること)『東明寺鐘銘』また貞治3年(1364)頃、小高木村の領主は大葉帶刀左衛門尉景兼であること(『実相寺文書』)さらに、先述の『真壁文書』の存在など、問題点が多い。

しかし、直盛に随伴して下向し鍛冶屋敷村(会津若松市)に移ったという鍛冶師や、同じく黒川に住み、市祭を始めたという築田氏などにみられる、至徳元年にまつわる伝承『新編会津風土記』は、その真偽を別としても、城及び城下町の形成の上で、大きな変革が、至徳元年にあったことを推定させる。

この様に、築城時期は確定できないが、史料上では15世紀中頃より小高木館の存在を確認することができる。すなわち、宝徳3年(1451)、長禄4年(1460)の『塔寺八幡宮長帳』の記録により、薩名氏の居館を小高木館と呼んでいたことが読みとれる。さらに16世紀に入ると、城下町の発展をうかがうことができる。大永4年(1524)、同7年(1527)の火災で、大町、馬場町、南町など町名が記され『会津旧事雜考』、町割りを行っていたものと思われる。天文7年(1538)3月の大火の記録『塔寺八幡宮長帳』では、針生、松本、富田氏などの薩名氏の重臣群の屋敷が黒川にあったことや、弘治2年(1556)の大火の記録(同上)では、蔵100ヶ所が焼けたといい、工商業者も集住していたことがわかる。『会津四家合考』によれば、この頃、黒川の城下町は、商人や武士が雑居し、狭隘な町であったという。(この在り様を狂歌にした落書きを見て、蒲生氏郷が、文禄元年(1592)に城及び城下の改造を命じたといふ。)

黒川なる地名は、現在、湯川と呼ばれる河川の旧称に由来(『会津鑑』)するとされ、前述の様に、応安8年(1375)頃、既に使われていたが、応永26年(1419)の『塔寺八幡宮長帳』の記録では、黒川を薩名氏の代名詞と

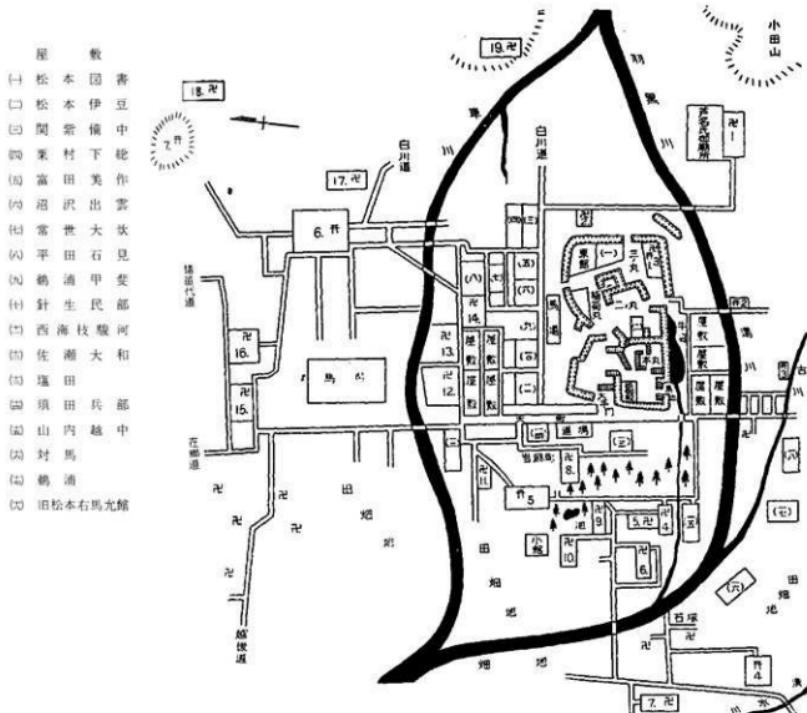
第3章 福島県の主要中世城館跡

して用いており、更にそれが蘆名氏の居城(館)をも示すことになったものと思われ、黒川城、東黒川館、黒川東館なる別称も使われている。(東は、幕ノ内、又は小館を西館と称し(『新編会津風土記』)、それに対し東に位置していたため、冠されたものと思われる。)

こうした、蘆名氏累代による城及び城下経営も、天正17年(1589)6月5日の曇原の戦いで、伊達氏に敗北することによって終わりを告げ、伊達氏、蒲生氏と城主は替わるが、蒲生氏郷が、文禄元年(1592)に郭内を甲州流繩張りとし、外郭を設け、武士と商工業者を分離し、黒川を若松と改めるなどの大改造を行ない、(『会津四家合考』ほか)、中世遺構もこの時、改造、消滅したものと思われる。(佐々木修)



第217図 小高木館位置図



第218図 小高木館伝蘆名時代の絵図

「会津春松史」第2巻(会津春松市)より転載

2. 小田山城

所在地 会津若松市門田町大字黒岩字館山、字主山、字クルミ平山、字丸山、字部屋の沢山、字風口山、字養蚕字馬道山、字荒原沢山

築城者 薩名氏か

時期 南北朝期 文和3年(正平9)又は至徳元年(元中元)

遺構 郭、空堀、縦堀、土塁、石組、物見台

概要 小田山城は、二つの大きな尾根上にあり、字館山を中心とする、小田山公園地区と、字クルミ平を中心とする、クルミ平地区に分けることができる。又、遺構の保存度は、あまり良くはない。

小田山公園地区の遺構は、標高371.7m、市街地との比高、約150mの高い尾根沿いにあり江戸時代、山麓に、恵倫寺、建福寺、善竜寺が建てられ、又、会津藩の集團墓地である、大窪山墓地のための墓石を切り出したため、一部、遺構が消滅しているが、北東から南東にかけ、物見台と見られる約50mの郭が数箇所、長さ約20mの堅堀、幅約5mの空堀、高さ約0.5mの土塁が、残されている。尚、西麓には、建久元年(1190)薩名光盛が仮りに住んだと伝える小田の館があり(『会津古墳記』)、文和3年(1354)に、その地に宝積寺(現存)が移ったという(『異本塔寺長帳』ほか)。

クルミ平地区的遺構は、標高540mの荒原沢山を中心とし、約1km四方の範囲に、数段の郭、円形の石組、堅堀、空堀が、分布する。字クルミ平には三段の郭と清水があり、また、直径30cmほどの川原石が散在している。字荒原沢山の、郭は規模が大きい。それに続く南側の字風口山は、幅約10mの空堀、堅堀があり、空堀の西側下には、郭があって、ここにも川原石が散在している。字荒原沢山の北側斜面はなだらかで、殿様が休憩したという伝承の残る、御殿場がある。ここに、3ヶ所の清水と建物の基壇らしきものがある。字丸山には、北側に空堀、南側に長方形に削平された郭があり、さらに江戸時代に水室として使用され、現在でも飲料水として利用されている清水や、石切り場がある。

この他、字主山には、薩名氏三代光盛(寿山公)からの廟所と伝える、寿山廟(『薩名盛氏葬儀の図』)、またその北に薩名氏16代盛氏(竹岩公)を中心とする花見が

森廟(竹岩廟)(会津若松市指定史跡)がある。寿山廟の南には、今は市内七日町にある、金剛寺がかつて存在したという(寺伝)、現在の恵倫寺の地には、金剛廟(『薩名道達覺書』)があったという(『薩名盛氏葬儀の図』)。小田の集落の西には、小堀と書かれているものや、姫様の御殿があったという御殿場が字館山の北にある。尚、中世には、湯川(黒川)は、今より北寄りの市街地中央部の現在、車川と呼ばれているところを流れており今の流路となつたのは、応永26年(1419)であるといふ(『会津旧事雜考』、『富田家年譜』)。

城館の歴史 小田山なる地名は、『異本塔寺長帳』、『会津鑑』、『新編会津風土記』などにも記されているが、いずれも、小田山城を示すものではなく、小高木館(黒川城)や、近世の鶴ヶ城の地を示しているものと思われ、なぜ、小田山の地名を用いたのか、謎が残される。一方、小田山に城があったとするのが、『富田家年譜』である(富田氏は、四天の宿老と称され、薩名氏の重臣群の一人であり、その建暦2年(1212)から、元和8年(1622)までの年譜を収めたものが、『富田家年譜』である)。

そこには「文和3年(1354)小田山城が、成り、一の廓を作り、内外を、小田垣と号す。(古くは小田村、黒川村、5つあり。)諸廓を、加増して、館を、小田山城と号し、又、廓外が、黒川城也」(『富田家年譜』)とあり、『会津旧事雜考』、『異本塔寺長帳』、『会津鑑』、『会津四家合考』にも、文和3年に小高木城、小田垣館が、建て始められたとの記述がある。

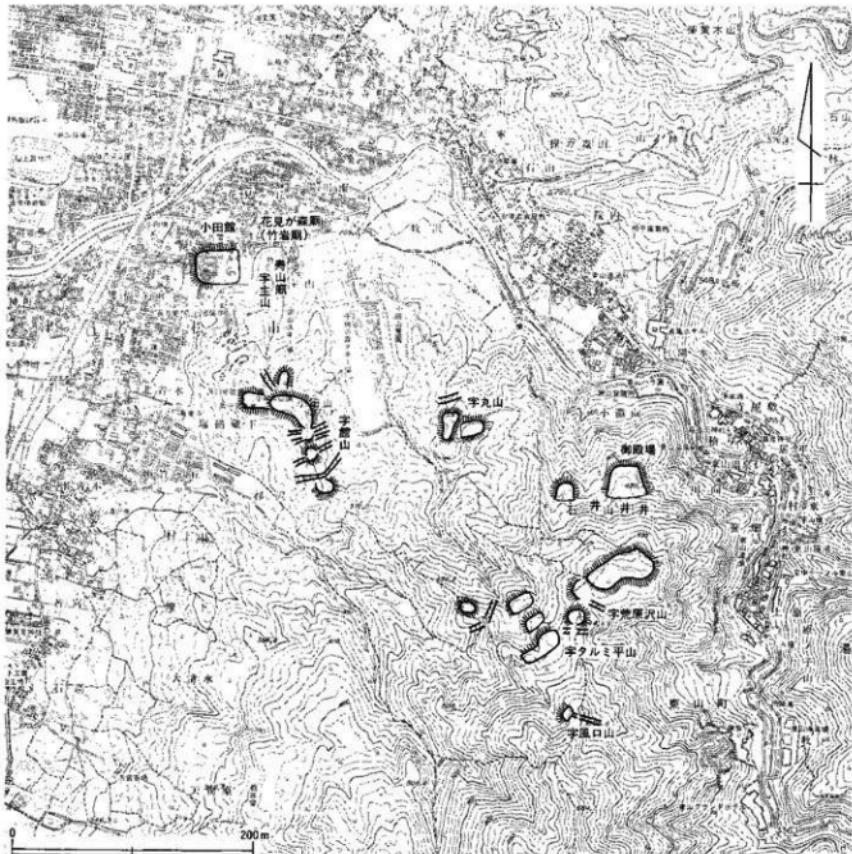
永徳3年(1383)には、「大守(薩名)直盛が小田山を修築し直盛の命を受けた、平田明範、富田祺祐が城外に



第219図 小田山城位置図 (1:50000)

廓を構築して、次の年(至徳元年(1384))の春、小田垣が完成した旨を記している。修築には、城内外の土屋敷商家、寺社、並びに、堀、石垣を整え、通路を南北に構え、黒川町(廓外、黒川城)としたといい、又、小田垣の内外の郭は既に使われており、小田廓と呼ばれ、一説には、小田垣の地名(小高木とは記さない。)は、小田垣にある田を以って、垣を構えたためであるという。」

『富田家年譜』は小田垣の記述が中心で、小田山城と記しながら、山城に関する記述ではなく、曖昧な表現が多いなど、問題点もあり、今後の研究に待つところが大である。(石田明夫)



第220図 小田山城略測図

3. 神指城(香指城)

所在地 会津若松市神指町大字北四合字本丸、字二ノ丸、字堀之内

築城者 上杉景勝

時期 文禄・慶長期 慶長5年

遺構 郭、土塁、堀跡

概要 会津若松市街地、西方の神指町にある平城である。本丸、二ノ丸から成り、両者とも方形をなし、土塁、堀を介して回字型に配列された、田郭式の縄張りである。

現在、二ノ丸土塁の四隅の部分と、本丸が残されているに過ぎず、堀は埋められ水田となっている(昭和44年の圃場整備事業以前は、二の丸土塁もかなり残っていたという)。

『会津鑑』などによると、本丸は東西100間(約180m)南北170間(約306m)、塁の基底の幅は六丈(約18m)、高さ約3丈5尺(約10.5m)あり、東西北の三方に門を開き、塁には石垣を築いたという。二の丸は、東西260間(約468m)、南北290間(約522m)、塁の基底幅9丈(約27m)、高さ2丈5尺(約7.5m)あり、四方に門を開いていたという。石垣に用いられた石は、慶山(会津若松市東山町)から切り出されたものであり、神指城まで人夫を並べ手渡しで運んだといい、石挽道といいう道が、今も一部残っている。又堀の水は、鶴沼川、湯川から取り入れたといいう。

城館の歴史 慶長3年(1598)に会津に移封された上杉景勝が築いた。以前からあった若松城(黒川城)が手狭で、小田山に近く、大砲の攻撃に弱いため、新城を築くこととし、最初、北田城(湯川村)を候補地としたが、水害の危険性から神指築城となったという(『会津旧事雑考』、『会津四家合考』)。

慶長5年(1600)2月10日、景勝は直江兼続らに築城を命じ、本丸は3月18日から、二ノ丸も5月10日から、工事が開始され、昼夜兼行で行い、6月1日には、工事を終了している(『会津鑑』)。使役された人足は、上杉全領内から徵収された、8万人又は12万人の役夫であるという(『会津四家合考』)。

ところが、完成間際になって、工事は中止され、城は放置されることになった。この頃徳川家康は、石田

三成と通謀する景勝を征討する命令を関東諸将に下し(『伊佐早文書』)、これに備えるため、白河城その他の築営を急いだためであるとされる(『会津旧事雑考』)。

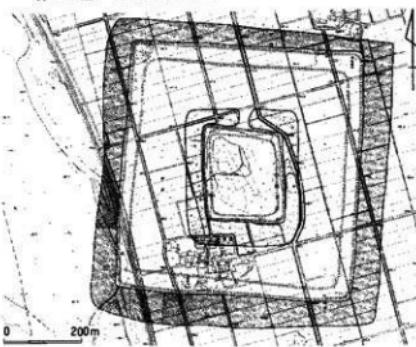
同年9月15日の関ヶ原の戦いで徳川方の勝利により、翌年8月、上杉景勝は滅封の上米沢に移され、この城は、未完のまま廃城となった。(佐々木修)



第221図 神指城位置図



第222図 神指城実測図 (4号墳整備前)



第223図 神指城実測図 (4号墳整備後)

4. ①御(尾)山館②三峯城(御山館)

所在地 ①会津若松市門田町大字御山字館ノ内、②同、字館山

築城者 ①②とも源義家築城と伝える

時期 ①②とも平安期 康平年間という

遺構 ①土塁、②郭、帶郭

概要 御山館は、御山集落内にある平地館である。現在柿畠となっており、土塁の一部(高さ約0.8m~1.0m)のみが残される。一方、三峯城は御山館の詰めの城と思われる。標高539mの樹山山頂にある。山頂が主郭であり、「新編会津風土記」に記された30間(約54m)四方の広さがあり、西側に緩傾斜の谷には、帶郭状の平坦地が2ヶ所ある。又、頂上から北に下る尾根は傾斜も緩く、途中の標高400mの地点から、小道が麓の照谷寺に通じているが、これはさらにのびて御山館へ通じていたものと思われる。

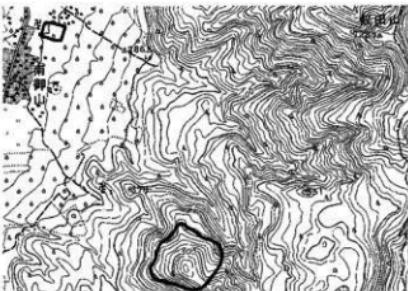
城館の歴史 山城の三峯城での日常生活は不可能と思われ日常の生活は、麓の御山館で営まれたものと思われる。そこでここでは、両城館の史料を一体化して記すこととする。

三峯城は、源義家が康平年間(1058~1065)に築いたとされるが(「新編会津風土記」)、前述の様に、時代的に合わない。但し、義家の八幡社勧請(ここに城があつたという『会津鑑』)を始め、乾飯沢、誓願清水などの義家伝承『新編会津風土記』が残っている。尚、照谷寺の創建は天平、神護年間(765~766)とあり御山集落の形成は、その時代と考えられる。

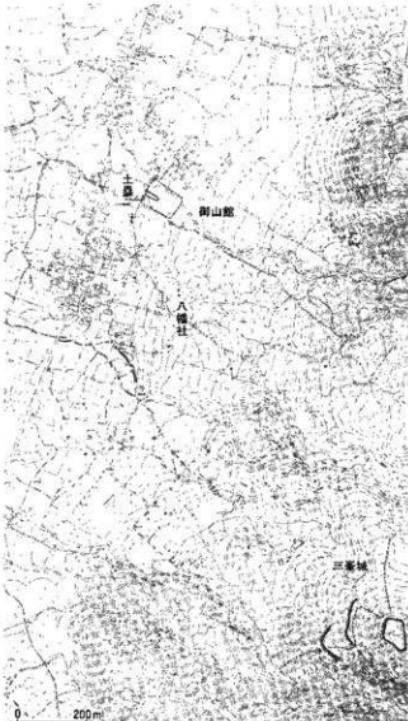
応安年間(1368~1375)に新宮小太郎時久がその、多々良氏が、三峯城の城主であり(『会津鑑』)、尾山館の館主は、多々良氏であるとの記述があるが(『新編会津風土記』)、山城の三峯城は、応安年間頃に築かれたものと考えたい。

新宮氏は(小太良時久)、「新宮系図」(『会津鑑』所収)によると、新宮時兼(盛俊)の弟、三郎時宗の孫にあたり、後に小山七郎左衛門と改めている。多々良氏は八良行政が最初の城主であるというが(『会津鑑』)、その時代は不明である。八良行政より9代目の伊賀政重は、宝徳3年(1451)7月15日、松本右馬允(典厩)によって、御山館を襲われ(『塔寺八幡官長帳、会津旧事雜考』)、

蘆名盛詮を奉じて、小高木館に逃れたが、21日に敗れ、伊賀父子は自殺している(会津若松市)。松本右馬允(典厩)との私闘であったと言われている。(佐々木修)



第224図 御山館・三峯城位置図



第225図 御山館・三峯城略測図(資料原序二原図)

にいてらだて まく の うちだて
5. ①飯寺館②幕ノ内館

所在地 ①会津若松市門田町飯寺字村西、②同市神指町大字南四合字幕内

築城者 ①は佐原義連(?)

②は佐原義連(『会津旧事雜考』)又は蘆名直盛(『会津鑑』)と伝える。

時期 ①鎌倉期 文治5年

②鎌倉期 文治5年又は康暦元年

遺構 ①土壘、②消滅

概要 この二つの館は、史料的に問題があるが、蘆名(佐原)氏関連の館と考えられる。飯寺館は、本丸・二ノ丸から成り、現在、二ノ丸のものと思われる鍵型の土壘だけが残されている。本丸は工場敷地と化したが、地籍図では、西南北を土壘が囲み、「新編会津風土記」の記述と一致している。館の東には、馬場があり、追廻^{おひわせ}或いは、三町の馬場と呼ばれてたという(『新編会津風土記』)。

幕ノ内館は、大川の河川敷となって、消滅したものと思われる。但し館のなごりを、村内の真成(淨)寺に求めることができる。すなわち、義連が幕ノ内から飯寺に移り、幕ノ内館を家臣の仁科太郎光盛に与えたが、光盛はそれを寺として、新城寺と号し、後に、真成(淨)寺と改めたという(『同上』、『会津旧事雜考』)。

城館の歴史 一般には、佐原義連の会津拠領は、文治5年(1189)とされるが、史料は存在せず、推測の域を出ない。まして鎌倉幕府の重臣であった義連が、仮に館を築いたとしても、そこに住んだことは考え難い。伝説では、飯寺の名の由来は、村内の本光寺で蘆名直盛が、飯を食したからといい、幕ノ内は、義連がこの地で帷幕の内に逗留したことに由来するとされる(『新編会津風土記』)。さらに、近隣する銀治屋敷村(会津若松市)は、直盛に随伴した銀治師集団の集落とされ、上米塚村(北会津村)は、直盛が幕ノ内に住んでいた時に、米倉があったことに由来するという(『同上』)。地形的には、大

川の氾濫原にあたり、洪水の被害を受けやすいところである。幕ノ内集落は、天文年間(1532~1555)及び寛永10年(1633)の二度にわたって、東へ移動している(『同上』)。旧村は現在の集落より10町(約1090m)西の地点である(『同上』)。現在は、大川の河川敷となっている。

民間に伝わる蘆名系図では、直盛は、幕ノ内より、小館、小高木館と移っている。それは洪水を避けるため移動であったとも考えることができる。(佐々木修)



第226図 飯寺館位置図



第227図 飯寺館復元図 (猪野序ニ序図)

じょうどのだて じょうさんだて つしまだて なかのだて
6. ①允殿館(尉殿館)②対馬館(中野館)

所在地 ①会津若松市門田町大字年賀町字館脇
 ②会津若松市門田町大字日吉字対馬館

築城者 不詳

時期 不明

遺構 ①郭、堀 ②消滅

概要 允殿館、対馬館とともに、松本氏一族の居館と伝える。允殿館は、郭内に墓地、薬師堂、蒲生秀行の墓などがあり、一段高くなっている。郭の周囲は、水田(堀)であったが、一部住宅と化している。対馬館は、城西ショッピングセンターがある地点に所在し、遺構はない。以前は畑であり、周囲の水田より0.8~1.0m程高く、高畠と呼ばれていた。

城館の歴史 松本氏は信州松本氏(清和源氏伊那氏族)の出と伝え、「昔年陪臣となるべき身にてもなかりしが、不慮に蘆名家の臣となりたる故、末々迄、万事崇敬の会釈なり。」([会津四家合考])とある様に、独立性が強く、蘆名氏に対しては、享徳2年(1453)から確認できる臣従関係があるものの([塔寺八幡宮長帳])、臣従以後も蘆名氏への反乱が多く、允殿館、対馬館とともに、反乱時の戦いに、かかわりがあったものと思われる。

允殿館の館主、松本右馬允なる人物は、史料上には、宝徳年間(1449~1452)と明応年間(1492~1501)の2回表われている。[会津旧事雜考]では、明応年間の右馬允だけを、『異本塔寺長帳』では、両方を館主としている。宝徳3年(1451)7月15日、杉本右馬允が、尾山館の館主、多々良伊賀とを襲い、又その2年後の享徳2年(1453)3月16日、蘆名盛詮の部将、松本筑前守らが、允殿館を攻めている。右馬允は日光に逃げ、後に戻って、9月25日、浜崎館(湯川

村)で自害している([塔寺八幡宮長帳他])。

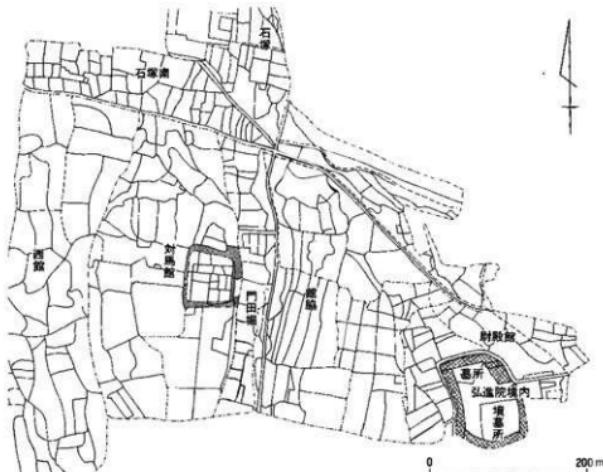
明応7年(1498)に登場する右馬允は、同年6月16日、蘆名氏に謀叛を企て、父子兄弟とともに、蘆名盛高に誅されている([同上])。

一方、対馬館の館主、松本対馬は、明応年間の右馬允の伯父で([異本塔寺長帳])、謀叛を起こし、明応9年(1500)1月12日、蘆名盛高の攻撃をうけ、弟、松本勘解由の住む綱取城(北塙原村)へ逃れたが、抗しきれず、2月5日、討たれている([同上他])。

松本氏の反乱は、天正12年(1584)まで散見するが、永正年間(1504~1521)に守護人(蘆名氏の代官)となり、四天の宿老と称される、蘆名氏の重臣の一人となっている。(佐々木修)



第228図 允殿館・対馬館位置図



第229図 允殿館・対馬館周辺(宇切図より)(管野康ン原図)

うのうらだて
7. 鵜浦館

所在地 会津若松市湊町大字静潟字館山

築城者 鵜浦甲斐守盛長

時期 室町期 応仁年間

遺構 郭、腰郭、空堀

概要 標高646mの独立峰(通称館山)上にあり、比高約120mの、小規模な、山城。本郭には、現在、羽山神社が祭られており、4月28日を祭日とするが、鵜浦(中田集落の端村)だけでなく、松崎、上馬渡の各部落が祝うという。この上馬渡には、鵜浦甲斐光房入道聖親が天正年間(1573~1592)に住んだという塁がある(新編会津風土記)。この羽山神社が鵜浦館の屋敷神かとも考えられるが、詳細は不明である。本郭の周囲には、2~3段の腰郭がめぐらされている。又、館への登り口は、鵜浦集落と上馬渡集落を結ぶ旧道にあるが、旧道は空堀を利用したものと考えられる。

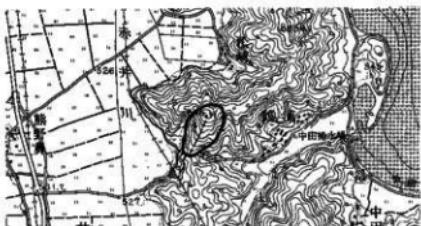
城館の歴史 応仁年間(1467~1469)鵜浦甲斐守盛長が築いたとされる(『会津古墳記』)。

鵜浦氏の出自については、詳らかではないが、天文7年(1538)3月15日に起こった黒川(会津若松市)の大火で、蘆名氏をはじめ、四天の宿老などの蘆名氏重臣の屋敷が焼失し、その中に、鵜浦氏の屋敷も含まれている(『塔寺八幡宮長帳』)。蘆名氏の重臣の一人であつたと考えられる。盛氏の時代になると、そのことが、一層はっきり史料に表われている。

盛氏は永禄7年(1564)4月、武田晴信(信玄)の策に応じて越後の菅名庄^代を攻めている(『会津四家合考』『歴史古案』)。この時、晴信が鵜浦左衛門入道に宛てた書状が存在し(『会津四家合考』所収)、金上、松本の蘆名氏重臣とともに、鵜浦左衛門入道の子息も出陣したことなどが記されている。

館主の鵜浦甲斐守は、天正16年(1588)閏5月1日、主君、蘆名義広とともに、伊達氏を攻略するため、安積郡に出兵し、郡山において政宗と対峙したが、その際、甲斐守の粉

骨碎身の働きがあったという(『新編会津風土記』)。尚、天正17年は(1589)の磨上原の戦い後、甲斐守の次男、又次郎は常陸(茨城県)にあったといい(『同上』)、恐らくは、義広に従ったものと思われる。一方、甲斐守は会津に留まり、府下(会津若松市)で78歳で没したという(『同上』)。尚、前述の上馬渡塁の主、鵜浦甲斐光房入道聖親は、甲斐守の父祖かもしれないという(『同上』)。(佐々木修)



第230図 鵜浦館位置図

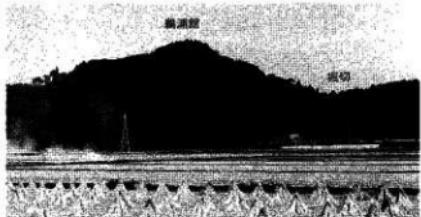


写真69 鵜浦館遠景



第231図 鵜浦館略測図

8. 下荒居(井)城

所在地 北会津郡北会津村大字下荒井字古館、字三ノ丸、字塔の西、字馬場川原

築城者 富田祐義

時期 鎌倉期 嘉暦2年(『富田家年譜』)又は元徳年間(荒井義隆氏所蔵『洗井村館ノ図』)と伝える。

造構 堀、土塁

概要 下荒井集落にある連郭式平城である。本丸、二ノ丸、三ノ丸から成っている。堀土塁が僅か残されているだけで、城の面影はない。永祿元年(1558)輕井沢銀山(柳津町)の発見で、慶長年間(1596~1615)に本丸及び、二ノ丸の南の堀が埋められ、銀山道が作られた(洗井村館ノ図)。さらに、明治20年(1887)頃、本丸の北側及び二ノ丸が、荒館小学校敷地(現在は移転、グランドに使用)となった。本丸、二ノ丸の境の堀が、堀となって、グランド南側を東西に流れ、二ノ丸、三ノ丸の境の内臓堀(築城奉行、音高内諱にちなんでいる。)が、村道の側溝となり、現在は宝寿院との境にある二ノ丸土塁が一部、残されているだけである。

城館の歴史 館主の富田氏は、恵日寺の寺侍であり、安積郡富田村(郡山市)を旧領としていたが、蘆名氏に臣従し、承久4年(1222)富田範祐は、耶麻郡の塩谷などを押領し、3代祐義の元徳元年(1329)に、下荒居村を含む大沼郡西十二組と耶麻郡の領地を、交換させられたという(『富田家年譜』)。又、嘉暦2年(1327)に築城の記述があり(『同上』)、時間的に若干前後するが、祐義が築城したものと思われる。祐義は、元徳2年(1330)に黒川(会津若松市)の実相寺をも建立しており(『新編会津風土記』)、かなりの力を持った人物であったことがうかがえる。下荒居城は、祐義以降も富田氏の居城であったと考えられるが、詳細は不明である。史料に表される富田氏の動きを見ると、延徳4年(1492)に、蘆名盛高に背き、富田淡路父子三人が、誅された事件(『塔寺八幡宮長帳』)をはじめとして、幾度か蘆名氏に反抗しているが、蘆名四天の宿老と称され、重臣の一人に加えられている。天正17年(1589)の磨上原の戦いでは、四天の宿老、富田美作その子守監が活躍し、将監は先陣をつとめ

たという(『蘆名家記』)。この時に、兵火が下荒居村にも及んでおり(『新編会津風土記』)、下荒居城も焼失したものと考えられる。(佐々木修)



第232図 下荒居城位置図

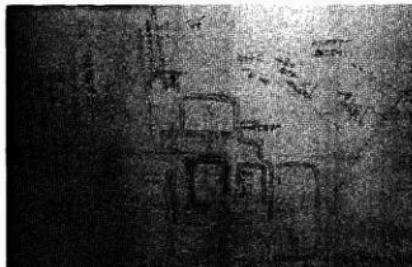


写真70 下荒居城古絵図



第233図 下荒居城周辺(字切図より)(官野原=原図)

9. 藤倉館

所在地 河沼郡河東町大字倉橋字藤倉

築城者 藤倉三郎左衛門盛義

時期 鎌倉期 建久3年

遺構 主郭、土壘、水堀、庭園等

概要 藤倉館は、昭和25年8月国指定重要文化財に指定された藤倉二階堂の造立地、藤倉集落の東北端平地に構築された単郭式の方形館で、現在民間人の居住地として利用されているが、中世における地方豪族の居館跡として、ほぼ完全な形で残存している。昭和47年1月河東町指定文化財として保護されることになった。

『会津古里記』等の文献による藤倉館の規模は、東西83間、約150m、南北72間、約130mで、「三面に土居の形存す」とある通り、現況でも東、西、北の三方に、高さ2~3m、幅4~6mの土壘がみとめられ、その外側には一部埋め立てられて幅員を狭めてはいるが、幅約4mの水堀が館の四周をめぐっている。虎口は南面に開口しており、土橋で往復との間をつないでいたと思われる。館内には東南から北にかけて遠州流の立派な庭園があり、現存している。

城館の歴史 築城者の藤倉盛義は、「吾妻鏡」などの記述によると、会津の守護佐原十郎左衛門義連の子盛連の第三子で、藤倉に居住して藤倉を名字としたとされているが、三浦一族であるという確証は無い。また盛義の孫藤倉伯者守盛弘が、河沼郡金上館に移封されて以後金上氏を名乗り、津川に孤戻城を築いてそこに永住したとも伝えられているが、こちらも確証には欠けている。盛弘が金上に移封され、さらに津川に移されたのは建長4年(1252)のことといわれている。しかし康元元年(1256)に盛弘(一説には盛義)は黒川より勧請した稻荷神社を、藤倉館の東北隅土壘に建立したと伝えられている。盛弘移封後の藤倉館の消息は明らかでないが、黒川城の支城として機能していたものであろうか。

館跡は、近世期には代田組郷頭の居住地となり、年貢、社倉米蔵が建造され、郷頭は安藤氏、風間氏、松本氏と続き、現在は松本氏の居住地となっている。藤倉は「和名抄」記載掠椅郷の中心地に比定される古代

以来の要衝地である。(角田伊一)

調査員 生江芳徳

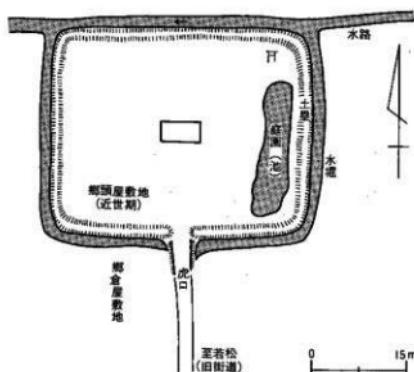
協力員 藤崎富雄



写真71 藤倉館堀・土壘



第234図 藤倉館位置図



第235図 藤倉館略測図

10. 島村館

所在地 河沼郡河東町大字福島字島原

築城者 伴野則実

時 期 戦国期 大永2年

遺 構 郭、土塁、水堀、虎口等

概 要 島村館は福島集落の南西部平坦地に築かれた単郭式の方形館で、「会津古里記」「会津鑑」によると、東西48間、約86m、南北36間、約63mの広さがあり、郭の外周に堀と土塁をめぐらしている。現況では郭跡の土塁は東側がほぼ原形を保ち、幅6~7m高さ2~3mを測るが、その他は削平されて低くなるか、あるいは消失している。また水堀も昭和初年の耕地整理と、昭和30年の道路拡張工事、同61年の道路改良工事により狭少化しているが、虎口に当たる南側には幅6~8mを測る広い水堀が現存している。現在はその水堀にかかる石橋をわたり、重厚な構えの門屋をくぐって郭内に入る形になっているが、それが本来の虎口であったか否かは明らかでない。

郭の東端には庭園が営まれ、またその東北端には伴野氏の先祖伴野重清を祀った稻荷神社がある。館に東接して真言宗吉摩山東光寺があるが、この寺も伴野実清が父重清を祀るために本願主となって、建立したものと伝えられている。現在館跡は、伴野氏の血族といわれる伴野武夫氏の宅地になっている。

館の歴史 館の築城者を伴野氏とする説はおそらく正しいであろうが、「会津古里記」などによると、島村館の初期の住人は佐瀬利兵衛なる者で、次いで西海枝宮内が住し、その後に伴野孫六実清が入っている。

「新編会津風土記」によると、伴野氏の先祖は伴野出羽守長房といい、康永年中、足利尊氏に随行して天龍寺に参詣したことが「太平記」に出ており、その孫の伯耆守重清が康暦年中蘆名直盛に従って会津に入り、内島に居館を築いて住んだが水火災にあって廃館し、応永6年(1399)に島原の現館に移り住んだという。大永2年(1522)築城説は、「伴野家系図」によったものである。

島村集落は古くから交通の要衝で、舟運基

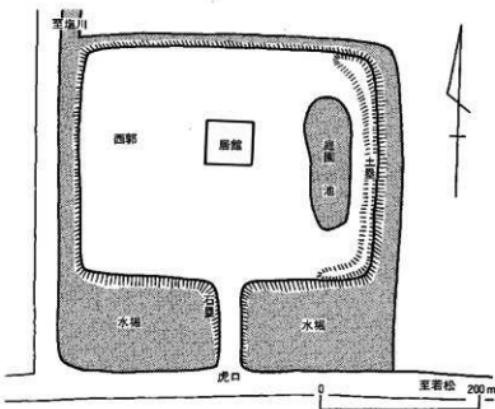
地として、また伝馬宿として発展したところで、村内には荒町、下町、横町などの地名がある。(角田伊一)



写真72 島村館虎口付近堀・土橋



第236図 島村館位置図



第237図 島村館略測図

11. 猪苗代城(亀ヶ城)

所在地 耶麻郡猪苗代町字古城跡、字古城町、字茶園

築城者 佐原(猪苗代)経連か。

時期 鎌倉期 建久2年

遺構 郭、腰郭、空堀、土塁、水ノ手、池、大手口

概要 天正17年(1589)まで、猪苗代氏の居城であり、以後も、会津藩の城代が置かれ、明治元年の戊辰戦争で焼失するまで、城として機能している。元和年間(1615~1624)までは、半坂の西北より新町、本町の東南まで、外郭があり、五門を開いていたという(『新編会津風土記』)。従がって、猪苗代氏が構築した城地は、外郭までの範囲と思われる。但し現状は、猪苗代氏以後に、改築されたもので、そこから中世(猪苗代氏)の遺構を抽出することは不可能である。

本丸は、磐梯山、南東山麓からのびる舌状台地(比高約30m)上にある、平山城である。本丸より一段低い所が二の郭であり、さらに、その下に腰郭がある。この腰郭の西は大きな空堀となり、それを過ぎると土塁がある。さらにその西は、水堀として、二重の要害を構えていたが、水堀は現在水田となっている(『耶麻郡誌』所収、猪苗代城之図)。二ノ丸、三ノ丸は平坦地にあり、侍屋敷などがあったことも考えられる。二ノ丸と三ノ丸の間の中門の外の南側に、二ノ丸の堀の一部が湿地として残り、三ノ丸の堀は、現在、猿川の流路となっている。

城館の歴史 猪苗代城は、佐原義連の孫、経連が建久2年(1191)に築いたというが(『会津古里記』)、経連が猪苗代を拝領したのは、宝治2年(1248)である(『伊達世臣家譜』)ともい、また明確な史料の上で猪苗代氏を確認できるのは、貞和4年(1348)のことである(『示現寺文書』畠山国氏、吉良貞家連署推挙状)。不明な点が多い。

『三浦系図』によると猪苗代氏は蘆名氏と同族であるとされるが、応永27年(1420)から天文16年(1547)までの間、しばしば蘆名氏と戦っており(『塔寺八幡宮長帳』ほか)、独立性が強かった。このことが、蘆名氏滅亡の一因となる。天正16年(1588)5月10日、隠居中の猪苗代盛国は、嫡子盛胤が黒川城登城で留守の猪苗代城を乗取り、さらに翌年6月1日、伊達政宗に内応し(『伊達文書』)、同6日の磨上原の戦いにおける、伊達氏の勝利を導いた。盛胤は蘆名方につき、内野村(猪苗代町内)で死去したという(『新編会津風土記』)。(佐々木修)



第238図 猪苗代城位置図



第239図 猪苗代城略測図

12. 八手山城(八手ヶ城、白津村柵)

所在地 耶麻郡猪苗代町大字八幡字根岸、牧山、古屋敷、元屋敷、古館野

築城者 佐原(猪苗代)大炊助経連

時期 鎌倉期 建久2年?

遺構 郭、腰郭、空堀、土塁

概要 白津集落北東、約800mの川桁断層によってできた断崖(根岸山)上にある、比高約130mの梯郭式山城である。

本郭をはじめ、大小の郭は、南西にのびる尾根線上の緩傾斜地を利用して構築されている。この尾根は谷も深く、唯一、西方からの攻撃が考えられるが、尾根の最も狭まる地点に、空堀を設け、それに備えている。

本郭は標高679mの支峰上にあって、北と南に、腰郭をめぐらしている。本郭中央には風神が祀られている。この風神の前方、南に約2mの地点の地下1mの所から、焼米が出土したという。又、本郭の北東の搦手には、空堀が二ヶ所設けられている。尚、尾根の最下部には愛宕社があって、低い土塁が一部残っており、郭の一部と思われる。

麓の白津集落には、古屋敷、元屋敷、古館野の字名が残されており、日常生活は、ここで送っていたことが考えられる。城主、三浦経連の重臣の邸宅跡といわれる所には、からかさの松(樹齢約450年、猪苗代町指定文化財)が繁茂している。又、字古屋敷の南隣りには、字廟所前、廟所後があるが、猪苗代(三浦)氏の墳墓かとも考えられる。則ち、経連が菩提寺として、城の東(字元寺)に観音寺を建立していること(『新編会津風土記』)、盛胤以外の猪苗代氏の墳墓が、現在、所在不明である点、などからである。

城館の歴史 『会津古墳記』によれば、建久2年(1191)佐原経連が築城したとされるが、問題点である。

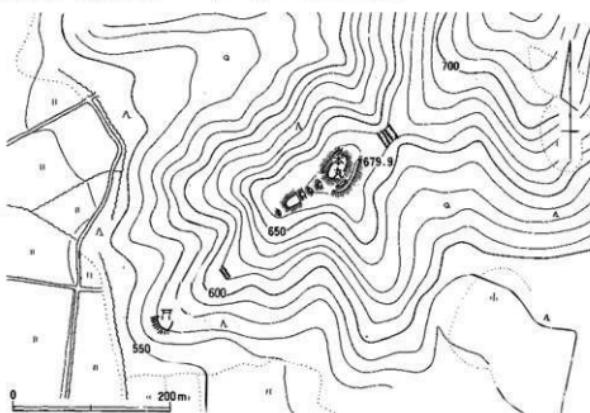
まず年代的に見て、山城の出

現は南北朝期とされており、建久2年では早すぎるようである。また経連の猪苗代支配の時期も問題である。猪苗代氏の入部に関する、明確な史料は、存在せず、近世に伊達藩に仕えた、猪苗代氏の子孫の伝える家譜(『伊達世臣家譜』)によると、経連の猪苗代拝領は、宝治2年(1248)であり、この時、猪苗代氏を称したという、建久2年とは時間的なズレがある。

鎌倉時代に、古屋敷あたりに平地館が築かれ、南北朝期に、八手山城が構築されたのであろうか。(佐々木修)



第240図 八手山城位置図



第241図 八手山城略測図

13. 町堤崎館(神野館)

所在地 耶麻郡猪苗代町大字磐保字林崎

築城者 不詳

時期 不明

遺構 堀、土塁

概要 磐梯山の南東山麓にある平地方形館である。

東側の遺構は消滅し、南側の土塁の一部も、墓地として利用したため崩れた所があるが、西側の土塁はほぼ原形をとどめていると思われる。規模的には、『新編会津風土記』に記された、東西30間(約54m)、南北24間(約43m)の大きさと一致している。

土塁は西に高く、東に向かって緩やかに傾斜し、西南部で約4.5mの高さがある。西側の土塁の上の北寄りのところに、稻荷社(通称・館稻荷)があり、毎年3月の雪解けの頃に村でお祭りを行なっている。恐らくは屋敷神であろう。

堀は、北側の一部(幅約1.5m)から西側の北寄り(幅約2.5m)が湿地として残り、南寄りから南側にかけては、堀川の流路として利用されている。

城館の歴史 町堤崎館を構築した人物は不明であるが、神野顕元なる人物が住んでいたといふ。この人物の歴史は不明であるが、『新編会津風土記』の記す伝説によれば、鎮護山神野寺という巨刹を創建し、祈願所とし、院子六供、末寺九ヶ寺を有したといふ。又『会津旧事雜考』によれば、仁和3年(887)に神野寺の僧・宥賢が、三宝院より三義合、大受を受けたといふ。それを信ずれば、神野寺はすでに9世紀末の平安時代に、存在したことになり、猪苗代氏支配以前に、この地方に勢力をもつた人物ということになるが信じがたい。

後にこの町堤崎館より、町島田館(所在不明)に居館を移したといふ(『新編会津風土記』)。町島田村の南に、東神野寺という字が残されており、この付近に神野寺があったものと考えられる。その点からすると、自分の祈願所により近い場所に、居館を移したことにな

る。

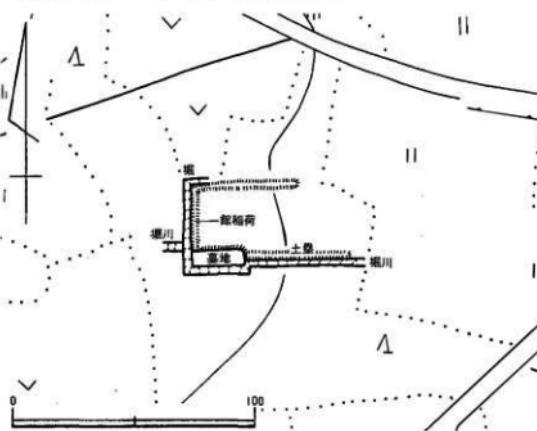
顕元は、さらにその後の時代に、合戦に敗れ、顕(秋)元原に墨を築きいて、隠れ住み、その地で没したといふ(同上)。現在、顕(秋)元原は、秋元湖底になってしまっている。(佐々木修)



写真73 町堤崎館土塁・堀(南西側より)



第242図 町堤崎館位置図



第243図 町堤崎館略測図

14. 新宮城(大城)

所在地 喜多方市慶徳町新宮字館内、字前田道南、
字前田、字小館、字新明道下、字水上、字
道西、字小山前、字滝ノ沢、字館北、字北
城

築城者 新宮六郎左衛門時連か

時期 鎌倉期 建暦2年か

遺構 本丸、二ノ丸、三ノ丸、堀、土塁

概要 会津盆地の北西部、阿賀川支流で、南流する濁川の西岸の山麓に位置する平城である。

城の西側にある山から、東へ平行して流れ出る、間隔約350mの二本の谷川が、南と北の外堀をなしている。本丸の約100m東側に、幅約8mの外堀があったが、昭和50年頃、慶徳地区県営圃場整備事業により消滅した。西側の外堀は確認できないが、ほぼ、県道、豊川一塩川線のあたりと推定される。

本丸は東西約120m南北約130mの長方形で、現在、畑、果樹園となっている。四隅の部分が、一段高くなっていることから、土壘が本丸をめぐっていたことが考えられる。本丸の周囲は、現在、幅約15mの水田がありまいており、内堀跡と思われる。

本丸の南側は二ノ丸、西側は三ノ丸伝えられてい る。

新宮城の東南隅、二ノ丸跡の南側を東流する谷川の南側に、「お馬屋敷」と呼ばれる、東西約60m、南北約75mの堀をめぐらした張り出し部があったが、昭和50年の圃場整備事業によって、消滅してしまった。又、城の北側を、東流していた谷川の北側に、「北城」と呼ばれる部分があり、ここにも張り出し部などがあった様である。さらに、城の東北隅、外堀の東側で、現在、新宮新田の集落があるあたりが字小館と呼ばれており、ここにも張り出し部か外郭があったものと推定される。

従って新宮城は、東西、南北ともに400m以上の規模を持つ、複郭式の平城であったものと思われる。さらに、次のような城と関連する遺構や地名が残されている。本丸より南南西約800mにある地獄沢は、新宮氏の刑場である(『新宮雜葉記』)。城の西約500mに、灰塚山と呼ばれる所があり、新宮氏の墓所かと、言われている。又、現在所在が明らかではないが、本丸の北に「犬

追の馬場」、城の東に「見明の池」があったといい(『新宮雜葉記』)、「見明の池」の中には三島が築かれていたといい(同上)。そして、新宮氏の全盛期には、城の周囲に、北小路、本小路、道場小路、高野町、祢宜町、熊野小路などがあったが、新宮氏が、蘆名氏と戦って敗れた応永の乱後、北小路、道場小路、高野町は、蘆名氏の城下町、黒川(会津若松市)へ移されたという(『新編会津風土記』)。

城館の歴史 新宮城は、建暦2年(1212)、蘆名遠江守盛連の六男、六郎左衛門時連が、築いたと伝える(『新編会津風土記』)。新宮氏は時連の子孫であるとされているが、新宮氏を蘆名氏の同族とするには疑問もあり、今後の研究を待たなければならない。新宮氏は、新宮莊の地頭として、耶麻郡西部、すなわち、現在の喜多方市、塙川町の西部、山都町、高郷村、西会津町のうち、阿賀川より北側の地域を支配し、各地に支城を持っていた。

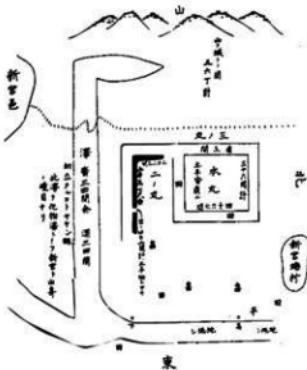
本丸跡の南西、約500mに位置する熊野神社にある貞和5年(1349)7月21日銘の銅鐘には、「一山衆徒三十人、大旦那從満大師、同地頭平朝臣明繼、阿闍梨覺賢結縁衆百余」人とあり、新宮氏が平姓であり、かなりの勢力者であったことが、推察される。なおこの鐘はこの年に蘆名氏と戦っているところから(『異本塔寺長帳』小松原合戦という)、蘆名氏に対する戦勝祈願の意をこめて、造られたものとも言われている。

蘆名氏との戦いは、応永9年(1402)にも見られ、新宮次郎盛俊は、加納莊領主佐原氏を滅ぼし、河沼郡北田城主の北田上総介政泰と同盟して、蘆名氏に反抗している(『新宮雜葉記』)。新宮城は翌応永10年(1403)正月晦日、蘆名氏の攻撃によって、落城し、新宮盛俊は小布瀬城(山都町)に籠って戦ったが、同年5月蘆名氏に和を乞い、許されたという(『新宮雜葉記』)。

応永20年(1413)、新宮盛俊は新宮城の西北の高館城に立て籠り、再び蘆名氏と戦うが、それ以後のことについては、高館城、小布瀬城、駿河館の頃を参照されたい。(佐藤健郎)

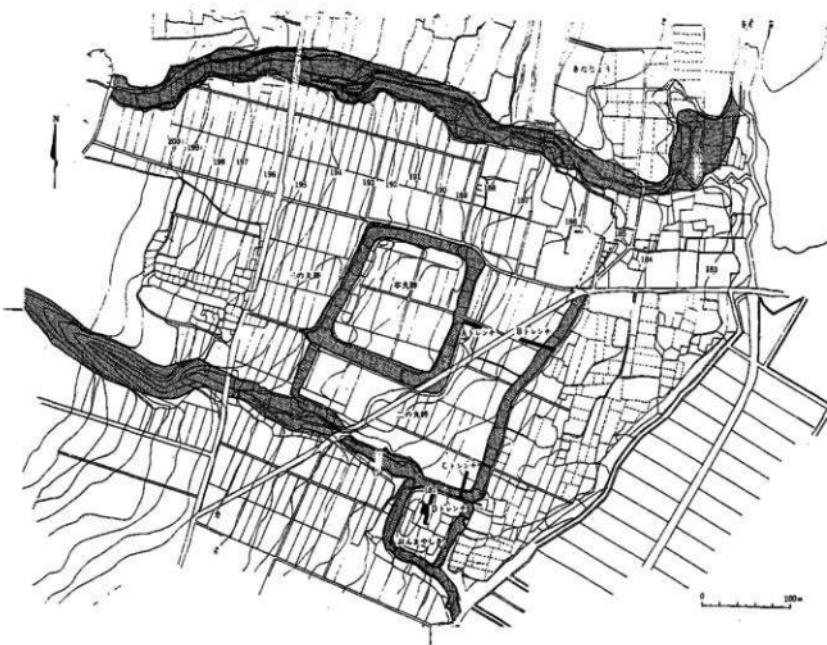


第244図 新宮城位置図



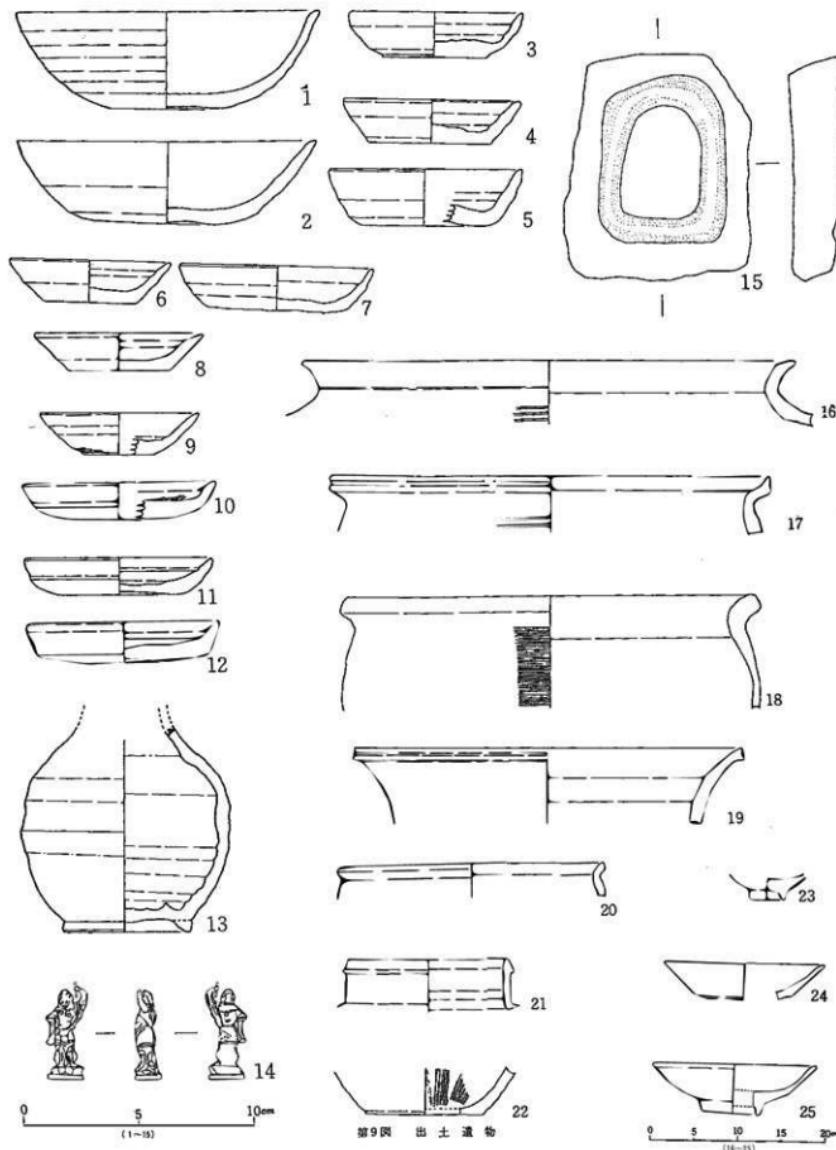
第245図 新宮城絵図

「新宮城跡」より転載



第246図 新宮城実測図

「新宮城跡発掘調査報告書」(喜多方市教育委員会)より転載



第247図 新宮城出土遺物

1 上齋器(杯) 2 杯 3~13・16~22 中世の日常雑器 3~12 盆 13~21 瓢 16~20 織
22 搾跡 14 仏像 15 石硯 23 砧 24 施釉陶器(古瀬戸天目茶碗) 25 中国産青磁(碗)

「新宮城跡」(福島県立歴史博物館)による

15. 慶徳城

所在地 喜多方市慶徳町豊岡字今町

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、土塁

概要 会津盆地北西部、湯川西岸の山際に位置し、標高約205mの連郭式平山城である。

本丸は、東西約80m、南北約92mあり、現在、喜多方市立慶徳小学校の敷地となっており、北側に一部、土塁が残っている。本丸の東側にあるのが、二ノ丸であり、東西約60m、南北約76mあり、畠や民家の屋敷となっている。二ノ丸の南に続く三ノ丸は、東西約72m、南北約60mで、ほとんど畠となっている。

本丸の西側の堀は、本丸の北西数メートルのところで西へ曲り、丘陵を深く削りつつ西側の山麓にある慶徳寺の方へ続いている。この空堀の南側の丘陵は、慶徳城の外郭であったと推定される。

慶徳寺は応安元年(1368)、蘆名詮盛が建立し、源翁和尚を住まわせたと伝える(『新編会津風土記』)。

天保13年(1842)6月下旬に作成された、「慶徳村壘之図」(『耶麻郡誌』所収)によると、本丸、二ノ丸、三ノ丸の水堀は、水田となっており、本丸の四方と、二ノ丸の北から東側にかけて、土塁がある。

尚、慶徳城本丸の南約400mには、八幡館(武藤館ともいう)と呼ばれる、東西約63m、南北約88mの方形の館があり、武藤和泉守の居館と伝えている。そして、慶徳城と八幡館の、中間の東寄りにある慶徳児童館のあたりを、あら館(新館か)と呼び、数年前まで、東側から南側にかけて、水堀の跡が残っていた。さらに慶徳城本丸跡の東、約250mには、荒神館と呼ぶ方形の館があり、北、東、南の三方に、堀跡が残っている。

城館の歴史 慶徳城の築城時期は定かではないが、天正年間(1573~1592)、蘆名氏の臣慶徳善五郎が城主であったとされる(『新編会津風土記』)。史料に見える慶徳氏を見てみると、天文7年(1538)3月15日の蘆名氏の城下町、黒川(会津若松市)大火の時、蘆名氏の居館や、松本氏などの重臣たちの屋敷も焼失しており、その中に経徳新左衛門の名が見える(『塔寺八幡宮長帳』)。又、永禄3年(1560)2月29日、蘆名盛氏が仙道



第248図 慶徳城位置図

に出兵し、石川郡松山で、佐竹義昭、田村清顕と戦ったが、この戦で慶徳善五郎盛が活躍している(『異本塔寺長帳』)。永禄6年(1563)4月10日の新宮社の御普棟札に、「経徳殿 武藤和泉」の名が、見える(『新編会津風土記』、『新宮雜葉記』)。

從って、天文~永禄期(1532~1570)にも、慶徳氏が城主であったことや、慶徳氏が蘆名氏の重臣であったことが推定される。天正年間に、活躍した慶徳善五郎は、『新編会津風土記』や『耶麻郡誌』によると、蘆名四天の宿老と称され蘆名氏の重臣の一人であった、平田是亦齋舜範の長子であった。初め、是亦齋に子が無かったため、弟の左京亮氏範を養子としたが、その後、善五郎が誕生した。幼名を契力と呼び、成長後は善五郎と称して、慶徳氏を嗣がせたという。一方、「慶徳村旧記」では、天正元年(1573)3月、源太屋敷村(塩川町大字源太屋敷)の城主、平田周防守舜範が、本城を弟、左京亮氏範に譲り、実子、契力丸を連れて慶徳氏の旧館に移って、規模を拡大し、慶徳氏を称したとしている。慶徳善五郎は、天正13年(1585)5月、関柴村(喜多方市関柴町関柴)の松本備中守が伊達政宗に内応し、伊達氏の武将、原田左馬助、新田常陸の率いる3千余騎が田付口を越えて北方地方に乱入した時、中日式部大輔らと共に、これを破っている(『新編会津風土記』、『会津旧事類考』)。その後の慶徳善五郎の様子は不明である。天正17年(1589)6月5日の磨上原(猪苗代町)の戦いで、事實上蘆名氏を滅ぼした伊達政宗は、翌6日、慶徳村等に兵を動かしている(『伊達天正日記』)。又、天正18年(1590)2月15日、伊達政宗は慶徳因幡に知行を預けているが、(『伊達文書』)、慶徳因幡と慶徳善五

郎との関係は定かでなく、慶徳城の廃城の時期も不明

である。(佐藤健郎)



写真74 慶徳城より慶徳寺を望む



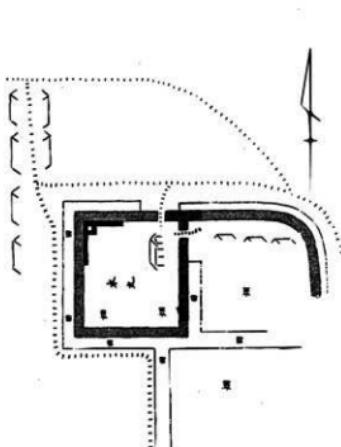
写真75 慶徳城本丸北側の土塁・堀



写真76 慶徳城外郭北側の空堀

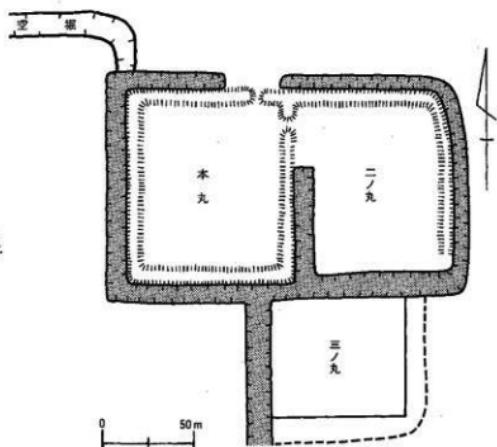


写真77 慶徳城外郭北側の空堀



第249図 慶徳城絵図

「新日本城跡」より転載



第250図 慶徳城略測図

16. 青山城 あおやまじょう

所在地 喜多方市上三宮町上三宮字山王下、字三島前、字八日町道上字諏訪林、字五郎宮など

築城者 佐原五郎佐衛門尉盛時又は、その子孫

時 期 不 明

遺構 郭、空堀、土塁、帯郭、土橋
概要 鎌倉幕府の有力御家人、三浦氏の一族である佐原五郎左衛門尉盛時の子孫の居城であったと伝える(『新編会津風土記』)。この一族は、加納殿ともいい、青山城を本拠として耶麻郡加納荘を支配した。青山城は、もと東城と西城の二つからなっていたが(同上)、現在は、西城のみが残されている。東城は城主の日常生活を営む居館であり、西城は平山城で、戦いの際の詰の城であった。西城は、会津盆地北端の、山形県境からのびる舌状丘陵の末端(南端)部に位置し、平地との比高は、約10m程ある。本丸は、丘陵の頂部に鎮座する山王神社を中心とする直径約10mの平垣面と推定される。高さ約0.3m程の低い土塁で囲まれ、さらに、その外側には帯郭がある。丘陵の麓にも、土塁があり、その外側に、空堀が南東部から北側そして西侧へとめぐり、北東部に土橋が残っている。本丸から、西へは、土塁がのび、この土塁によって、西城は二つの郭に分けることができる。本丸から、東南東にのびる道があり、山王神社の古い参道であった様であるが、この道が西城の大手と考えられ、東城への道が、さらに東へ続いているものと考えられる。西城の本丸から、南南東、約200mの地点に、佐原五郎左衛門尉盛時を祀る、五郎神社がある。この神社は、昭和50年頃の圃場整備事業によって、地ならしされるまでは、杉の巨木がそびえ立つ、高さ約2m程の丘の上に鎮座し、青山城(西城)の外郭と伝えられていた。西城の本丸の西、約120mには、土塁があり、「外手」と呼ばれていたが、昭和10年頃、国鉄日中線敷設工事のため、破壊された。西城の北に続く丘陵を巣山と呼び、城主佐原氏一族の墓地であったと伝える。その東麓には、佐原盛時が、勅請したとされる、三島神社が鎮座している。

西城の北側の、空堀を隔てた所は、池田と呼び、佐原氏の家臣、池田某の屋敷跡であったという。

東城の位置は定かではないが、西城本丸から東に約

400mにある、淨土宗叶山願成寺の境内と推定される。
上三宮の集落は、万治・寛文年間(17世紀後半)に、三日町・八日町さらには棚木、三島前、願成寺などの小集落を集めて、町割りを行い、願成寺を現在の場所に移した(『新編会津風土記』)。東城は、この時に破壊されたものと思われる。

城館の歴史 佐原盛時は、宝治元年(1247)6月、三浦泰村の乱(宝治合戦)に、兄光盛・弟時連とともに北条時頼方にについて家名を残し、三浦泰村滅亡後は、三浦氏の惣領の地位を継いで、三浦介を称している。この頃、佐原盛時は耶麻郡加納荘の地頭、又は地頭代職を与えられたものと思われる。

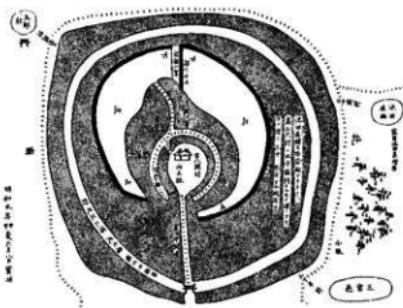
加納莊領主としての佐原氏については、康安元年（1361）10月6日の佐原高明寄進状案と、同年10月20日（¹³⁶¹年）^{の實}納荘内鷲田村、中在家、空性房在家などの、坪付案、応安4年（1371）9月12日の佐原高明寄進状案（『実相寺文書』、文書名は、福島県史7による。）に見える。領主佐原高明が、「重代相伝」の地を黒川（会津若松市）の実相寺に寄進したことを語るものである。佐原氏は応永9年（1402）に滅亡したという（『会津旧事雜考』）。これは、『新宮雜葉記』によると、新宮莊地頭、新宮盛俊が佐原氏を攻め滅ぼしたからである。現存する青山城の遺構が、このとき佐原氏と運命をともにし、廃城となったものかどうかは定かではない。（佐藤健郎）



写真78 青山城遠景



第251図 青山城位置図



第252図 青山城絵図



第253図 青山城略測図 (佐々木修原図)

17. 高館城

たかだてじょう

所在地 喜多方市慶徳町豊岡字館石

築城者 新宮盛俊

時期 室町期 応永20年

造構 郭、空堀、井戸(?)

概要 新宮城本丸の西北にある、標高341mの高館山山頂の山城が、高館城である。平地との比高は約150m程あり、新宮城の詰めの城と考えられる。新宮城本丸の西北、約1200mの地点にある南北約100mの峰を削平した部分が前要害であり、更に約180m西側の、南北約170mの峰を削平した部分が奥要害である。前要害と奥要害とを結ぶ尾根上には、空堀がある。前要害の郭は東側から攻撃に備え、奥要害の郭は西側及び南側からの攻撃に備えた構えとなっている。

『新宮雜葉記』によると、城の北側の山麓を、越後(新潟県)への裏街道が通っていたといい、井戸もあったという。

高館城の南の峰は土橋山といい、新宮盛俊が籠城の時、計略をめぐらして土橋をかけ、落し穴をしかけて蘆名勢を苦しめたと云ふ。そのさらに南の峰が的場山である。土橋山から東へ続く峰は横打山とか備中山といい、新宮氏の長臣大竹備中が石弓を張り、材木を落として横打ちしたところという。的場山のさらに南東に続く烽火山は、新宮氏が合戦の時狼煙をあげたところと伝える。高館城の西の一段低い平地は火付並といい、西風が烈しい時、蘆名勢がここから火を放ったので、猛火が山上に昇り、高館が落城したという。(『新編会津風土記』『新宮雜葉記』)。

城館の歴史 新宮氏は黒川(会津若松市)の蘆名氏と争い、応永10年(1403)正月晦日、新宮城は落城、同年5月、蘆名氏に降った。応永20年(1413)新宮盛俊は、再び蘆名氏に挑戦、蘆名氏より派遣されてい

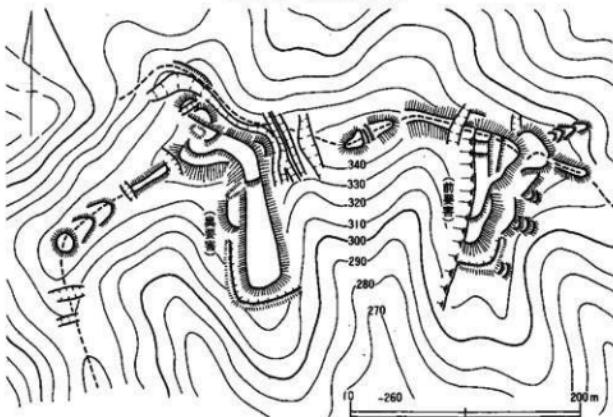
た郡代を討ち、高館城を築いて立て籠ったという(『新宮雜葉記』)。この説に従えば、高館城は応永20年に築かれたことになるが、新宮城の詰めの城なのであるから、もっと早い時期に築かれたのではないかと思われる。

応永22年(1415)11月21日、蘆名勢が新宮城(高館城のこと)を攻め、同26年(1419)6月、新宮勢が越後国小河城(新潟県東蒲原郡津川町)を陥したが、同年7月、新宮氏は、小布瀬城(山都町)を陥された。翌27年(1420)7月2日、新宮城(高館城)はついに落城している(『塔寺八幡官長帳』)。新宮盛俊は奥川城(西会津町)に籠ったが、そこも蘆名勢に攻め陥され、越後国五十公野(新潟県新発田市)に逃れた(『新宮雜葉記』)。永享5年(1433)9月25日、新宮時兼も新宮一族は再起をはかり、再び小河城を攻めるが失敗し、同年10月23日、時康は自害し、新宮氏は滅亡した(『塔寺八幡官長帳』)。

(佐藤健郎)



第254図 高館城位置図



第255図 高館城略測図

(伊藤五一郎作)

18. 駿河館

所在地 喜多方市慶徳町新宮字熊野

築城者 西海枝駿河守

時期 戦国期

遺構 郭、堀、土塁

概要 熊野神社長床(国指定重要文化財)のすぐ北側の山麓に位置する平地館が駿河館である。現在、その大部分は畠及び水田となっている。新宮荘地頭・新宮氏が、蘆名氏によって滅ぼされた後に、熊野宮の守護に任せられた西海枝駿河守が築いた館であり、その後、代々の熊野宮の守護の居館であった。

駿河館は東西約70m、南北約90mの方形単郭式の平地館である。郭の四方には、幅約6mの堀がめぐらっていたものと思われる。西側は杉林となってほぼ完全な状態で残され、東、南、北側は水田となってその形をとどめている。

土塁も、西側の部分はほぼ完全に残っているが、南側と北側は半分以上崩され、東側はほとんど形をとどめていない。

城館の歴史 新宮氏が永享5年(1433)10月滅亡した後(新宮城、高館の項を参照)蘆名氏から熊野宮の守護に任せられたと思われるが、西海枝駿河守である。

明応9年(1500)6月1日、熊野神社の若一王子再興棟札と文龜2年(1502)2月5日の新宮證誠社再興棟札に、「当寺守護 西海枝駿河守」と記されている(『新宮雑葉記』他)。

天文7年(1538)3月15日に蘆名氏の城下、黒川(会津若松市)に大火があり、蘆名氏の居館のほかに西海枝氏の屋敷も焼けている(『塔寺八幡宮長帳』)。西海枝氏は黒川にも屋敷をもつ蘆名氏の重臣であったことが考え



写真79 駿河館土塁・堀（南東より）

られる。

天文9年(1540)2月27日、2年前大火で消失した黒川諏訪社が再興されその棟札には西海枝宮内大夫盛輔の名が見える(『新編会津風土記』)。

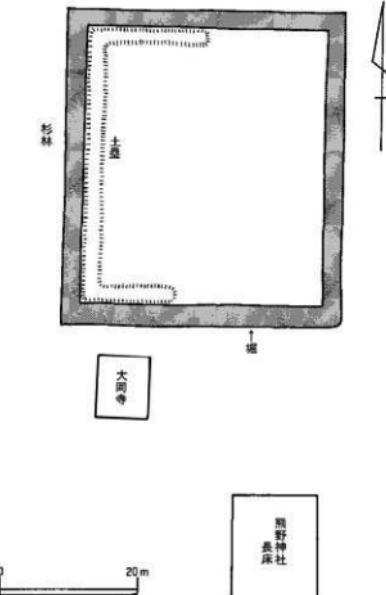
盛輔は『新宮雑葉記』では、駿河守の子息となっており、西海枝氏は蘆名氏の一門であるとされている。

永禄6年(1563)4月10日の新宮荘替棟札(『新編会津風土記』、『新宮雑葉記』)には、「寺奉行 平田常範」とあって、西海枝氏の名は見えない。西海枝はこの頃、新宮(熊野神社)の守護を解任されたものであろう。

(佐藤健郎)



第256図 駿河館位置図



第257図 駿河館略測図

19. 岩尾館

所在地 耶麻郡熱塩加納村大字宮川字八反田、字岩尾、字中才、字玉屋、字善次郎家西、字上田、字南北ノ沢、字屋敷畠、字西原

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、帯郭、土塁、墳墓

概要 会津盆地西北端、南流する濁川が形成した段丘面上に、岩尾館がある。標高約290mで、濁川との比高は約10m弱である。

本郭は、もと法印であった佐原家の屋敷及び太子堂の付近一帯と思われ、地元では、「タッチャウ」(塔中か)と呼んでいる。太子堂の前には、館主の墓と伝える数基の五輪塔がある。本郭の西側は、稻荷神社境内から岩尾集落南端の南沢まで続く土塁によって区切られていたが、現在は、稻荷神社の南側にだけ土塁が残されている。本郭のある段丘の段丘崖には、帯郭と思われる遺構が残っている。段丘崖は、佐原家の屋敷の北側で西に湾曲し、稻荷神社境内の北側を通って北にのび、加納鉱山跡に通じる道路を北へ越えたところで、さらに西に曲がっている。館の北端と思われるのが若宮八幡宮である。少し高くなつた雜木林の中に祠が鎮座している。稻荷神社の西約100mには、かつて南北に伸びる土塁があったといい、土塁の北端の西側に「玉屋」という地名がある。これは靈屋、すなわち、館主の墓ではないかと考えられる。

岩尾館は、東と北が段丘崖、南は沢で、自然地形を利用し、西には二重又はそれ以上の土塁を構えた複郭式の館と思われる。

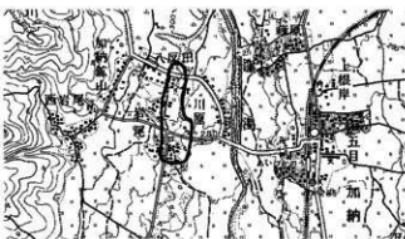


写真80 岩尾館東側の段丘

岩尾館には、佐原氏が築いて住んだとか、佐原義連^{イチヅネ}が住んだという伝承がある〔新編会津風土記〕。岩尾館の南南東約2.5kmには、加納荘領主、佐原氏の居城である青山城があり、南南西約1.2kmの半在家集落の南には、佐原=蘆名氏の祖である佐原義連の墓と伝える宝^{ハラフ}印塔がある。これらのことから、岩尾館は青山城の支城であったものと推定される。

城館の歴史 築城者と築城年代は不明である。仮に青山城の支城だとすれば、佐原氏が加納荘の地頭か地頭代に任せられたのは宝治元年(1247)の宝治合戦以降であろうから、築城年代は13世紀半ばか後半と推定される。廃城は加納荘領主、佐原氏が滅亡したとされる応永9年(1402)〔会津旧事雑考〕頃であろう。

(佐藤健郎)



第258図 岩尾館位置図



第259図 岩尾館略測図

20. 柏木城(柏木ノ森ノ塁)

所在地 耶麻郡北塩原村大字大塙字柏木城

築城者 薩名氏

時期 戦国期 天正12年

遺構 郭、腰郭、空堀、土塁、虎口、礎石、土橋、馬場

概要 大塙集落の南西、約300mの丘陵上にある比較高約100mの山城が柏木城である。城の北側は急峻であり、その直下を檜原(北塩原村)に通じる街道(米沢街道)が通っている。檜原との境の大塙峠も眼下にある。

城は南側を大手とし、一部、石垣の残る大手口があり、ここを登ると腰郭となる。腰郭の南東端には、石組みの跡が残り、さらに奥に進んだ所に本丸の虎口がある。本丸と腰郭の間の比高は、約5.0~6.0m程度あり、本丸の周囲は土塁となっている。本丸内の北西端には、住居跡らしい平坦面があり、虎口から通路がここまで伸びている。本丸と二ノ丸は空堀で区切られているが、土橋によって結ばれている。三ノ丸と本丸腰郭との間には、幅約10.6mの大きな空堀がある。城の南の崖下の平坦面は馬場跡で、三ノ丸からの通路がここまで伸びている。馬場跡の南は空堀で、現在、水田となっている。飲料水は地下水を用い、堰を引いている。

城館の歴史 柏木城は、伊達政宗の檜原攻略に備えるため、天正12年に(1584)築かれた(『会津旧事雑考』)。一方政宗も同年11月、檜原を守る薩名支配下の穴沢氏の内紛に乗じて檜原を攻撃している(『新編会津風土記』)。伊達氏に対する薩名方の最前線の拠点として位置付けられることになった。

天正13年(1585)5月、関柴(喜多方市)の地頭、松本備中を内応させた政宗は、関柴からは原田左馬助を出撃させ、自からは檜原から出撃することにしたが、途中の大塙峠で引

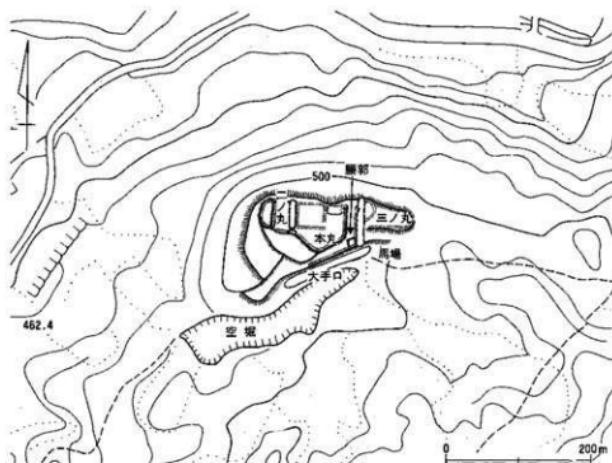
き返している(『檜原軍物語』他)。濃霧のためにとも地形陥陥で大軍行動が不可能なためとも(『伊達治家記録』他)いう。薩名方は城代三瓶大蔵、前述の穴沢氏などが大塙峠に柵を作つて備え、鹿垣の字名を残している(『新編会津風土記』)。以後、同年6月13日、翌年4月など、穴沢氏による檜原奪還行動が展開されているが失敗している(『同上』)。

天正17年(1589)6月5日の磨上原の戦いでは、柏木城兵は戦わずして、翌日早朝に黒川(会津若松市)に退却しており(『伊達治家記録』)、柏木城はこの時、廃城になったと思われる。

(佐々木修)



第260図 柏木城位置図



第261図 柏木城略測図(測量新-原図)

21. 檜原城(小谷山砦、政宗塙)

所在地 耶麻郡北塩原村檜原、西吾妻国有林

築城者 伊達政宗

時期 戦国期

遺構 郭、腰郭、空堀、堅堀、土塁、虎口、通路

大手

概要 檜原湖にせり出す山塊の一独立支峰(通称小谷山又は館山といい、標高954m、比高約130m)上にある山城が、檜原城である。

城は本丸、二ノ丸、外郭から成り、その周囲を一部を餘き空堀(深さ約1.0~1.6m、幅約2.8~5.0m)がめぐり、堀を作る際にかき上げられた土がその外側に土塁としてつみ上げられ、武者走りとして利用されていたと思われる。外郭の東と西側には堅堀のがびている。

本丸は一辺約45mのほぼ正方形に近い形を成し、南側に3段の腰郭がある。大手口からのつづら折りの通路はこの腰郭で終わり、南西端にも虎口がある。本丸の北の一段と高いところに幅約9.0mの空堀を介して二ノ丸がある。なお、「新編会津風土記」に記された大手口の馬出しが、現在檜原湖底になっているものと思われ不明である。

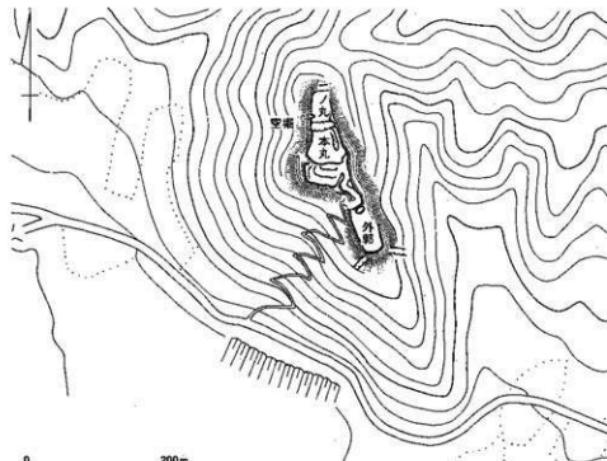
城館の歴史 「会津古事記」によれば、天文年間(1532~1555)に松本宮内なる人物(出自不明)が地取りしたが、完成を見なかったといい、その跡を利用して伊達政宗が築城したとしている。蘆名氏攻略を目ざす伊達政宗は、天正12年(1584)檜原を守る穴沢氏を内応によって、檜原より放逐した(『檜原軍物語』)。その上で天正13年5月2日、内応した関柴(喜多方市)の頭頭、松本備中のもとへ、家臣の原田左馬助を遣わし、政宗自身も檜原に出兵して、二方からの会津攻撃を企てた(『伊達治家記録』)。8日、政宗は蘆名方の守る大塙(北塩原村)の柏

木城攻撃を試みるが、峠が険阻で大軍の行動が難しいと判断し、代りに猪苗代氏の内応を突破口にしようとして、その成否を待つため約50日間檜原に逗留して、この間に檜原城を築いた(『同上』)。なお、「会津旧事雜考」では、大塙攻撃までの政宗の行動を5月10日から12日までとしている。内応策の失敗で、政宗は6月28日に米沢に戻り、後藤孫兵衛を城代に置いた(『伊達治家記録』)。天正17年(1589)6月5日の磨上原の戦いでは、原田宗時らがそれに連動する形で檜原城から柏木城攻撃を試みたが、柏木城兵は6日早朝、黒川(会津若松市)に撤退し、戦いはおこらなかつた(『同上』)。

(佐々木修)



第262図 檜原城位置図



第263図 檜原城略測図 (済部斜 - 原図)

つなとりじょう うるしがわらがて

22. 綱取城(漆沢村館)

所在地 耶麻郡北塩原村大字北山字要害山

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、腰郭、空堀、土塁、礎石

概要 大塩川の谷口にあたる漆集落の北東約1.5km要害山頂に、綱取城がある。比高は約130mあり、綱取の名は勾配が急で綱を使って物資や水を上げたことに由来するという。遺構は、北東から南西方向に伸びる尾根上にあり、南側は崖でその下を大塩川が流れる要害の地である。

城は本丸、二ノ丸及び本丸の東の空堀を隔てた外郭から成っており、梯郭式となっている。大手口は北西の谷からのびて来ていると思われるが、石材採取のために破壊され、不明瞭である。

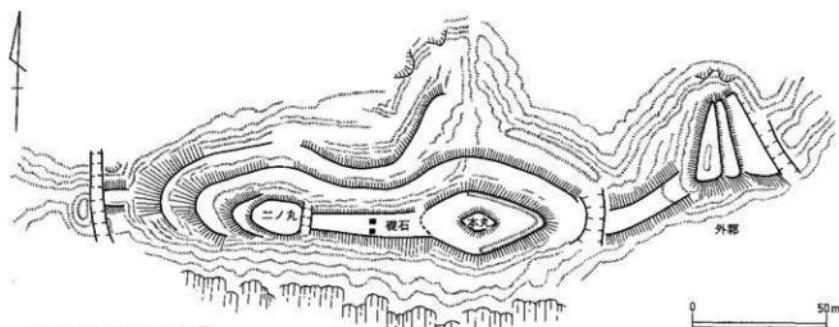
但し、本丸付近には腰郭が数段残されている。『耶麻郡誌』所収の「綱取城絵図」には、大手口を降りたところに居館が見えるが、現在遺構は見あたらず、地元の通称の地名が残されるのみである。水ノ手(井戸)も見当らず、本郭自体も小規模(長軸14.2m、短軸9mの菱型)で、長期の籠城是不可能と思われる。

城館の歴史 築城者は不明であるが、大塩川の谷口で米沢街道を押さえられるこの地点は、有力者の支配が考えられる。明応年間(1492~1501)の居城者は、四天の宿老と称される蘆名氏の重臣松本氏一族の松本解勘由であった(『新編会津風土記』)。明応9年(1500)1

月12日、蘆名盛高は松本対馬(勘由の兄)の中野館(対馬館)(会津若松市)を攻め、対馬が綱取城に逃げたため、同15日城をとり固め、2月5日に落城、翌日、対馬を誅している(『塔寺八幡宮長帳』)。この時、勘由は許されたものと思われる。永正2年(1505)8月17日、勘由・松本源蔵と佐瀬・富田氏との間に対立が起こり、蘆名盛高・盛滋父子を巻きこむ事件に発展し、松本氏の側についた盛滋は綱取城に籠城し、一方、盛高は富田・佐瀬氏を支持した。白川結城氏の仲裁も失敗し、10月9日より塩川(塩川町)の日橋川の橋を隔てて合戦が始まり、同14日、盛滋方が敗北、盛滋とその一味は伊達氏を頼って長井(山形県)に逃れた。(『同上』)。逃れた家臣の中に勘由の名は見あたらず、あるいはこの戦いで死去したものと思われる。なお、赤館、新井館、一盃館は勘由の家臣の館とする伝承がある。(佐々木修)



第264図 綱取城位置図



第265図 綱取城略測図

*北佐原の地図(佐原一)による

23. 戸山城(戸山館)

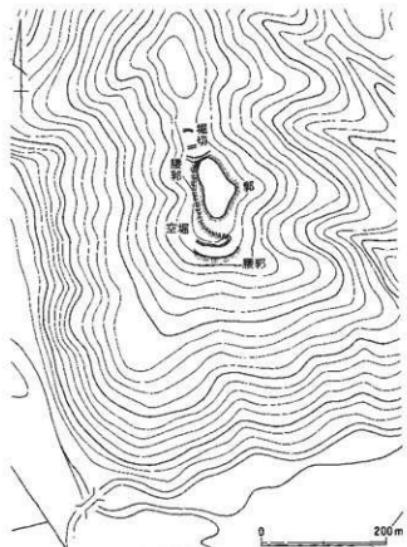
所在地 耶麻郡北塙原村大字檜原、西吾妻国有林
築城者 穴沢越中俊家?

時期 戦国期 文明18年又は永正元年

遺構 郭、腰郭、空堀、堅堀

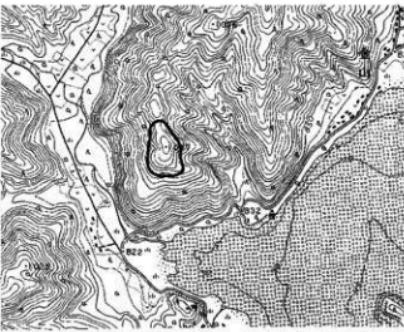
概要 檜原湖北岸にせり出す山塊の一支峰上(標高1037m)の比高約200mの山城が、戸山城である。麓の檜原集落には、日常生活を営む居館があったと思われるが、明治21年(1888)の磐梯山の噴火で、水没してしまっている。主郭は、現在、雜木が茂り、地ならしした形跡は認められないものの、西側には、不明瞭であるが腰郭がめぐり、大手口の南側で空堀に連なっている。この空堀の下には腰郭がある。東と西を急峻な谷が刻み、南側を大手とする。本郭の揚手にあたる北側の尾根の平坦部には3ヶ所の空堀がある。特に一番近い空堀は規模も大きく、堅堀にもなっている。

城館の歴史 檜原は、黒川(会津若松市)と伊達氏の本拠地、長井(山形県)を結ぶ経路上にあり、長禄3年(1459)以降、両氏の接触が見られる(『塔寺八幡宮長帳』)。その頻度が増すとともに檜原が重要視され、蘆



第267図 戸山城略測図

名盛高は穴沢越中らに檜原守備を命じ、それが文明18年(1468)〔『新編会津風土記』〕とも永正元年(1504)〔『異本塔寺長帳』〕とも言われるが、戸山城がこの頃に築かれたものと思われる。永禄7~9年(1564~66)には、穴沢越中の孫、加賀信徳が伊達勢を撃退している(『新編会津風土記』、『同上』)。この争いは岩瀬郡の二階堂氏をめぐるものであったが、和解の結果蘆名盛興が伊達輝宗の女を娶ることになった(『伊達文書』)。この戦いの恩賞として、蘆名盛氏は信徳に大荒居村(喜多方市)を与えたが、天正10年(1582)に至り、その年貢納入をめぐって信衛門信堅は隣村の小荒井村地頭、小荒井阿波と私闘に及び、大荒居村を没収された。この情報を聞いた伊達政宗は信堅に内応を迫り失敗に終った。しかし、一族の四郎兵衛がこれに応じ、天正12年(1584)11月、政宗は穴沢一族を大塙(北塙原村)に放逐した(『新編会津風土記』)。戸山城はこの時に廃されたものと思う。なお、檜原村の南にあった蕨山城は、加賀信徳の隠居館とも、不便な戸山城に代る穴沢氏の居城(『同上』『檜原軍物語』)とも言われる。(佐々木修)



第266図 戸山城位置図



写真81 戸山城遠景

24. 小布瀬城（中世では、「おふせ城」）

所在地 耶麻郡山都町大字小舟寺字館ノ内、字館ノ内林字腰巻

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、空堀、堀

概要 一ノ戸川の河口に近い、阿賀川北岸の小布瀬原集落内の、中央から南側にかけての場所が、小布瀬城である。小布瀬城は、北の山麓からのびる、標高190mの低い台地に位置する平山城と考えられる。

小布瀬原集落の南側の「館ノ内」と呼ばれている約120m四方の部分が本郭と推定され、現在は、畠となっている。

本郭の南側は、空堀によって区切られ、その南側の東西約100m、南北約230mの部分は外郭である。東と南は、蛇行しながら南流して、阿賀川に注ぐ原川(田入川)が、深い谷を刻んでいる。館の西側は、「腰巻」と呼ばれる幅約40~50m掘跡(現在、水田)によって区切られている。本郭の北側、すなわち現在の小布瀬原集落のある部分も、かつては外郭であったものと思われる。

小布瀬城は、新宮・慶徳(喜多方市慶徳町)から西へ、最明寺峠を越えたところにあり、新宮城本丸から、直線距離で約4.5kmの位置にある。新宮氏の領した新宮荘に含まれており、新宮城の支城と推定される。

新宮から最明寺峠を越え、小布瀬原を通って西に向う道は、かって、越後裏街道と呼ばれていたから、小布瀬城は、会津北方地方と越後(新潟県)を結ぶ、交通の要衝を押える位置にあったことになる。

『新編会津風土記』小布瀬原村の項には、「(館跡は)村南一町計にあり。相伝ふ、元亀天正の頃(1570~1592)、渡辺忠兵衛直忠と伝者、居ると伝」とあり、この館を、戦国期のものだとしている。しかし、『搭寺八幡宮長帳』には、「同年(応永26年(1419))、おふせの城、七月八日新宮方にハ夜半ばかりにて落ぬ」と記されており、15世紀はじめにも、小布瀬城という城があったことは確かである。

一方『会津旧事雜考』では、小布瀬城は館原(山都町館ノ原)にあったとしている。『異本搭寺長帳』でも、

館ノ原住人、小布瀬原右京が、新宮時康に属して、討ち亡ぼされたとしている。しかし館ノ原集落及びその周辺には、館が確認されず、「異本搭寺長帳」のように、小布瀬原右京が、小布瀬原ではなく、館ノ原に住んでいたと考えることも不可解である。やはり応永26年(1419)、蘆名勢に攻められて落城した「おふせ(小布瀬)の城」は、小布瀬原にある館を見るべきであろう。

なお、小布瀬城本郭の南約750mの原川(田入川)と阿賀川によって囲まれた、東西約400m、南北約180mの区域は中崎城と呼ばれているが、小布瀬城との関係は不明である。

城館の歴史 築城者及び、築城年代については、不明である。この城が新宮氏の支城であるとすれば、室町期には、すでにこの城は存在していたことになる。応永26年(1419)7月28日、蘆名勢との戦いで落城した「おふせ(小布瀬)の城」がこの城だとすれば、この時に、廃城となったと思われるが、『新編会津風土記』でいうように、元亀、天正年間(1570~1592)に、渡辺忠兵衛直忠が住んでいたとすれば、新宮氏の滅亡後、蘆名氏麾下の土豪の居館になったことになる。(佐藤健郎)



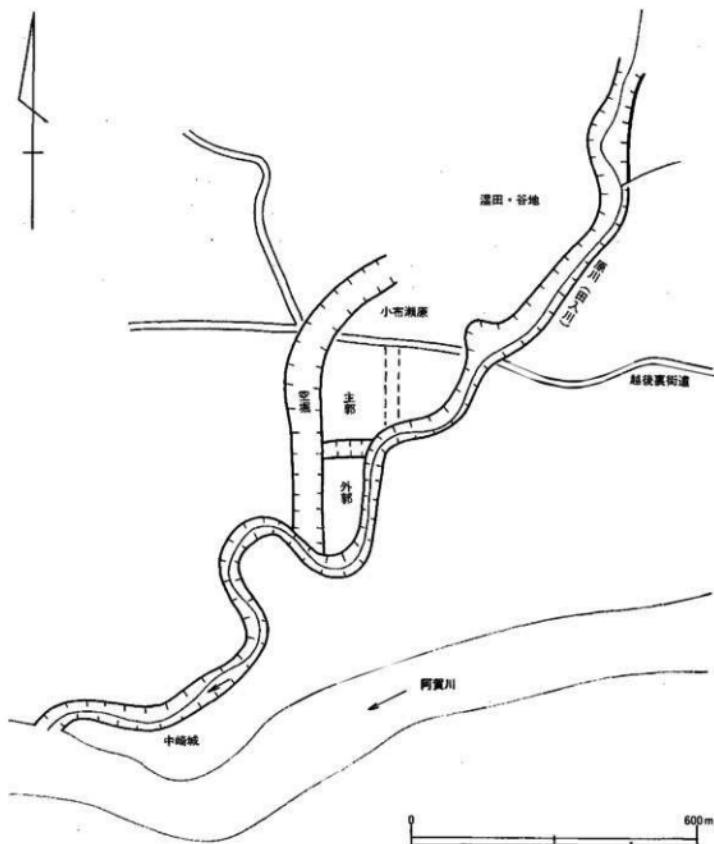
第268図 小布瀬城位置図



写真82 小布瀬城西側空堀（腰巻）



写真83 小布瀬城主郭南側の空堀



第269図 小布瀬城略測図

とこよなで
25. 常世館

所在地 耶麻郡塙川町大字常世字西町

築城者 不詳

時期 不明

遺構 水堀、土塁

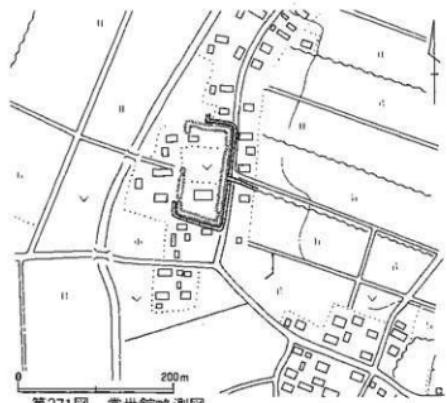
概要 西常世集落の西端にある平方面形館である。東西約60m、南北約90mの規模を有し、現在民家と畠などがある。『新編会津風土記』に記された四方の外郭は、消滅したものと思われるが、本郭は残されている。西側の一部は破壊されたが、四方を土塁が囲んでいる。特に北東端の土塁は高さ約2m程あり、保存がよい。堀は、西側から南側にかけての部分は埋められて、道路、畠などになったが、東側から北側にかけては、窪地の用水路として利用されのこっている。館の東には、永禄年間(1558~1570)に住んだという常世大炊助が永禄2年(1559)に館を開基した常安寺があり、館の北には、常世氏の墳墓とされる常世竹花古墳内の五輪塔三基がある。五輪塔の中の一つは大炊助の墓であるといふ。なお常安寺は天正年中の兵火で焼失した後、常世氏の旧臣が再興したものといふ。(以上『新編会津風土記』)。

城館の歴史 築城者は不明である。『会津鑑』所収加納系図によると、加納盛時の二男・頼盛が、常世村を領したとする。頼盛の長男を時持、二男を時明といい、時明の長男太郎義通が、後述の三橋氏を名乗っている。

従って、この系図によれば、常世氏や、三橋氏は、加納荘を領した加納氏の一族であることになる。常世氏が、史料上、最初に登場するのは文亀2年(1502)である。坂東順礼に出た常世某(加納系図では時持)が、葦名盛高によって12月16日誅され、一味したと思われる勝、三橋、小荒井の各氏が追放されている(『塔寺八幡宮長帳』ほか)。永禄年間には、前述の様に、大炊助某(加納系図では、盛重)がこの館に住んだという(『新編会津風土記』)。なお、天文7年(1538)の黒川(会津若松市)の大火では、常世氏の屋敷も焼失しており(『塔寺八幡宮長帳』)、この頃には、葦名氏の重臣であったことが考えられる。天正17年(1589)の唐上原の戦いで、常安寺が焼失しているから(『新編会津風土記』)、この時、館も焼失したものと思われる。その後の常世氏については不明である。(佐々木修)



第270図 常世館位置図



第271図 常世館略測図



しもとうだなて 26. 下遠田館

所在地 耶麻郡塩川町大字遠田字館ノ腰

築城者 不詳

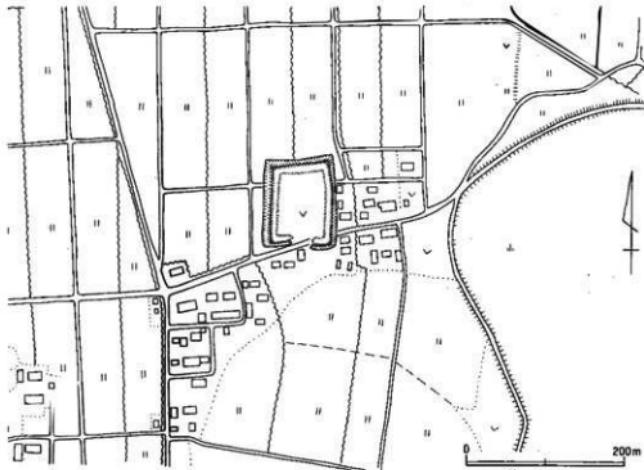
時期 不明

遺構 堀

概要 下遠田館は、下遠田集落の北にあった、平地方形館である。遺構は、昭和27年の耕地整理で消滅したが、館跡の部分は水田とされず、畠地のまま残され、堀の一部が用水路として利用されており、これらが、館があったことを偲ばせるだけである。明治44年作成の地籍図によって、遺構の一部を復元することができる。それによると、東西約75m、南北約95mの方



第272図 下遠田館位置図



第273図 下遠田館復元図

形館で、南側の一部を除いて土星がめぐり、その外側は堀となっていたものと思われる。南側に、虎口があつたと思われるが、虎口としては広すぎる所以明治期以前に一部破壊されたものと思われる。また、土星は優に入人の背丈はあつたという。

城館の歴史 この館を築いた人物は不明であるが、^{たぶん}三橋備前定重の二男・刑部重治が住んだといふ(『新編会津風土記』)。その年代ならびに、刑部重治の出自も不明であるが、三橋氏の一族であることは間違いない。三橋氏は加納荘を領した加納五郎盛時の二男、常世頼盛の二男、時明の長男、太郎義通よりはじまるといふ(『会津鑑』所収、加納系図、『新編会津風土記』)。義通は、康安2年(1362)に貝沼村(塩川町)菅井村(喜多方市)を領し、年代不詳だが、三橋村(塩川町)も領したといふ(『新編会津風土記』)。

三橋という名字の史料の初見は、文亀2年(1502)である。同年三橋氏と同族と思われる常世氏を首謀者として、三橋氏、勝氏、小荒井氏の耶麻郡北部の国人領主達が、蘆名盛高に背き、三橋氏は、会津より追放されたが、翌年4月伊達尚宗の支援をうけて、長井(山形県)から会津に攻め入ったが失敗し、再び追われた(『塔寺八幡宮長帳』、『異本塔寺長帳』)。その後、許されたものと思われ、天正年間(1573~1592)には、三橋氏は蘆名氏の臣として忠節を尽している。義通の14代の孫、

貝沼村を領していた盛友は、天正17年(1589)の磨上原の戦いで敗れ蘆名四天の宿老にも追われた蘆名義広に従って、常陸に向い、後に会津に戻って貝沼館に住み、子孫がまたそこに住みつけたといふ(『新編会津風土記』)。(佐々木修)

かがみ がじょう げんた やしき
27. 鑑(鏡)ヶ城(源太屋敷)

所在地 耶麻郡塙川町大字源田屋敷字前畠

築城者 平田大隅又は勝ノ刑部少輔

時期 南北朝期 至徳元年

遺構 土壘、堀

概要 源太屋敷集落北東端にある、連郭式平城である。本丸、二ノ丸、三ノ丸から成っていた(『耶麻郡誌』)が、明和元年(1764)の鑑城の絵図では、本丸と三ノ丸の一部のみしかなく、既に破壊が進んでいたものと思われる。現在は本丸北側の土壘とその外側の堀(現在水田)および、平田大隅のものと言われる五輪塔(破損)が残されているのみである。なお、集落内の道路は本丸、二ノ丸、三ノ丸間の堀を埋めたものである。また平田氏の家臣であった佐藤、須藤、武藤、一国(現在は新国姓)の四氏の姓を名乗る家が集落内には多い。

城館の歴史 『会津旧事雑考』によれば、至徳元年(1384)に平田大隅が源太屋敷村を領し、城を築いたとされる。しかし村名が示す様に、既に、豪族が住んでいた屋敷村であったことが考えられる。『葦名家御旧臣見分録』では、勝刑部少輔が築き、渡部源太直はが住んだとしている。また『会津古墳記』では、渡部左京政則、後に平田大隅秀景が住んだとしている。至徳元年(1384)に、豪族屋敷から城への改造が考えられる。なお、鑑城の名称は、雄名(小名)川に映る城姿が優美で、それをたたえて、名付けられたとされている。

平田氏の出自は『会津旧事雑考』によれば、建武2年(1335)の中先代の乱で、平田氏の祖先が葦名盛員とともに戦死し、それ以後、家臣の長となって平田姓を名乗ったという。葦名氏に対する反乱の記録がなく、譜代の臣と思われる。後に葦名四天の宿老と称され重臣となっている。

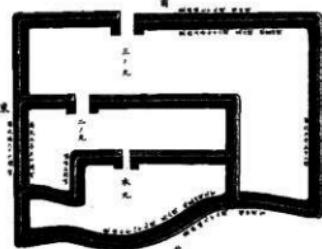
葦名直盛の会津下向は、康暦元年(1379)で、至徳元年に小高木館を築いたという(『新編会津風土記』)。(但し、上の伝えには問題が多い、小高木館の項参照)大隅がこの年直盛に随伴したのかとも考えられる。大隅以後の城主は不明だが平田氏の代々居城であったという(『耶麻郡誌』)。

天正17年(1589)の磨上原の戦いで、伊達勢がこの地に進攻しており(『伊達天正日記』)、そのとき廃城され

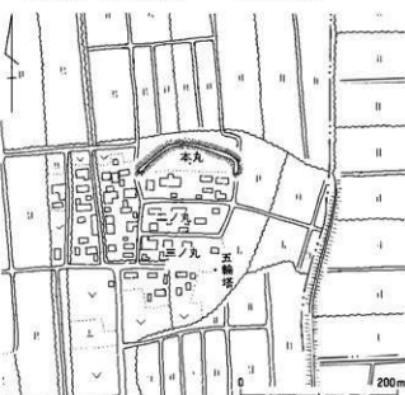
たと思われる。その後の平田氏は、伊達氏に仕える者(『伊達世臣家譜』)、葦名義広に従う者、会津に留まった者(『伊達文書』)など様々であった。(佐々木修)



第274図 鑑ヶ城位置図



第275図 鑑ヶ城絵図



第276図 鑑ヶ城略測図

28. 新井田館(田辺館)

所在地 耶麻郡塙川町大字新江木字新井田

築城者 新井田(新田)太良重国、または田辺右衛門
義秀

時期 鎌倉期 建仁3年?

遺構 水堀、土塁、虎口

概要 新井田集落のほぼ中央にある平方面形館である。比較的保存状況が良い。堀は、道路拡張のため狭められたが、用排水路として現在も利用されている。土塁は、堀を作る際の土をかき上げて作ったものと思われる。東側を除いて残存している。特に西側及び北側の土塁は保存度が良く、西北端では2mを越える高さがある。南側に虎口があり、カギ型をしている。明治・大正年間にかけて下部を石垣にしたという。館の北側には、隣接して三島神社、徳昌寺がある。鎮座・開基は不詳であるが、位置的に見て館主が関与したことが考えられる。館の東側には田辺氏の家臣七人が住んだ屋敷という七軒屋敷の地名が残されている。

城館の歴史 新井田館の構築者については二説ある。「蘆名家御旧臣見分録」では、建仁3年(1203)に新井田太良重国が築き、岡村と呼ばれていたのを新井田村と改め、その後、田辺左衛門尉義秀が住んだとしている。一方、「新編会津風土記」では、建仁元年(1201)源義経の配下であった田辺右衛門義秀が猪苗代に住み、同3年(1203)に新井田館を築き、新たに田地を開いたために、新井田を村名としたとしている。両者とも田辺氏を居住者としている点は一致しているが、全面的に信頼することはできない。

「新編会津風土記」によると、田辺氏は熊野満增の支族であり、源平の争乱では、義秀は源氏につき、義経指揮下のもと屋島の合戦で功をなし、当地に至ったという。義秀以降も、その子孫が新井田館に住んでいたが、天正14年(1586)、五郎左衛

門秀将の代に、故あって所領を失ったという。天正17年(1589)に伊達政宗が田那邊五郎左衛門に宛てた朱印状(『新編会津風土記』所収)によれば、五郎左衛門は地頭に年貢納入する立場にあり、在地領主から土豪的地位に転落したらしいうことが想像される。

江戸時代の田那邊家は館に住み肝煎を勤めていた。(佐々木修)



第277図 新井田館位置図



写真86 新井田館虎口(南側)



第278図 新井田館略測図

まるやまたて
29. 丸山館

所在地 耶麻郡高郷村大字掲津字丸山

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、空堀、土塁、武者走り、土橋、虎口

概要 高郷村掲津、中山の集落の東、約500mほど東にのびる舌状台地上に所在する山城が、丸山館である。標高約200mを算し、東と北は、比高約50mほどの急崖となり、南は阿賀川に面し、これも急崖をなしている。西は平坦な台地に面し、単郭式となっている。

本郭は東西約100m、南北約70mあり、北東部の崩落が甚しいため、平面三角形状を呈している。本郭内は北に低い斜面となり、西と南は幅約2m、高さ約1.5mの土塁がとりまき、西には二重の空堀があげていているが、北側は崩落がはげしく不明である。しかし残存部に武者走り状の遺構が一部残存しており、北側にもかつては遺構があったことが推測される。

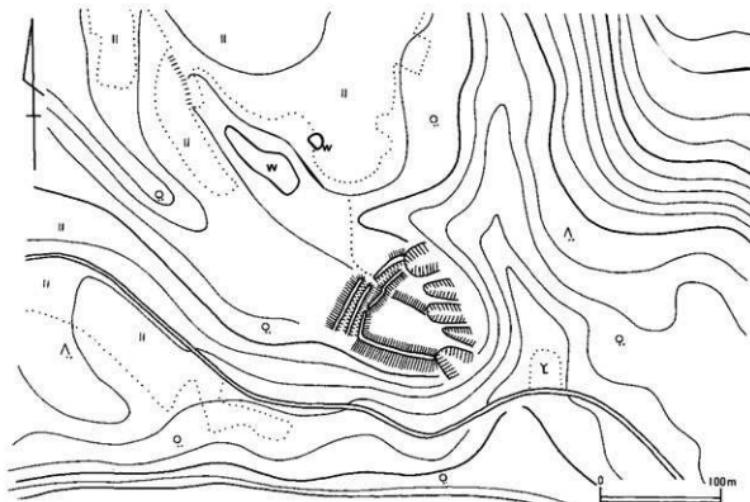
西側の二重の空堀と土塁は、斜面を利用したもので、西の平地からの比高は約10mほどあり、空堀としての機能のほかに、武者隠しとして機能されることもできる。この二重空堀のほぼ中央には、土橋と喰い違い虎

口が小規模ながら認められる。虎口から北に向って、小道が小沢を隔てて対岸に続いている。この付近の字名を館屋敷といい、或いは根小屋のあった場所とも考えられる。字名には、このほかに「館の越」「郭廻り」などがあり、丸山の館が重要な地位を占めていたことをうかがわせる。

城館の歴史 築城者及びその年代については不明であるが「新編会津風土記」には、「天正の頃、上野蔵人盛重と云う者、住せし」とある。(古川利意)



第279図 丸山館位置図



第280図 丸山館略測図

30. 宇多川館(松尾館)

所在地 耶麻郡西会津町大字尾野本字館

築城者 不詳

時期 不明

遺構 郭、空堀、土塁

概要 宇多川館は野沢盆地の東端、尾野本地区松尾集落の東にあたる標高210m程の舌状に突出した台地上にあり、松尾集落との比高約30m程の平山城である。北は松尾川が開削した谷、南は侵食谷であり、平地部との境には用水堤がある。松尾川に沿っての通路は、古い越後街道であったといわれ(「新編会津風土記」松尾村の条)、かつては交通路の要地でもあった。

館は東西約52m、南北約50mを算し、若干、長方形を呈する、単郭式である。東と南西には高さ約1mほどの土塁をめぐらし、その外に幅約2mの空堀があがぐっている。北は松尾川に面して急崖となり、土塁、空堀は認められないが、武者走り状の遺構があり、その東端には、屈曲して旧越後街道に通じる小道が存在している。南と西に虎口があり、空堀には土橋があるが、西の空堀の北半分は、後世、菅原神社の社地として削平されて、失なわれている。郭内は二段になっており、東に高く、西に低くなっている。北の小道との出会い部分には、自然石の石組み状の遺構が約4mにわたって、認められる。館に至る道は、南から急坂を直線状に登りつめるのが、本道であったと思われる。

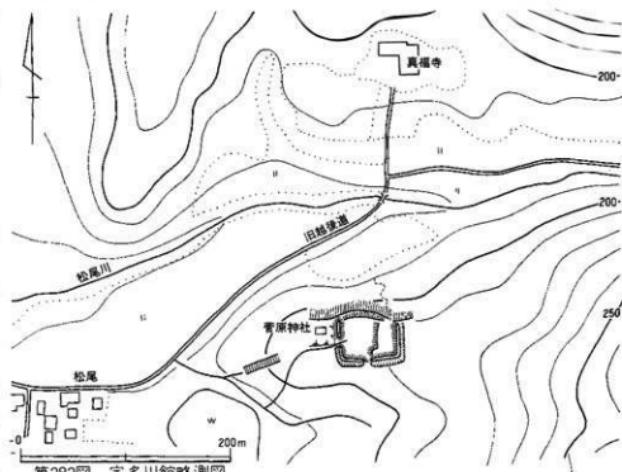
城館の歴史 築城者ならびにその時期については、不明である。「新編会津風土記」によると、「宇多川信濃道忠、住せし所と云う」とあり、「会津鑑」もほぼ同様の記述となっている。宇多川館の北、松尾川を隔てた対岸には、真福寺、松尾神社があり、同寺の木造地蔵菩薩像胎内銘に「大奉行周珉、且那宇多河道忠、康安

二年壬寅奉八月廿四日造立、松尾山真福寺住持、大仏師法橋乗円」とある。耶麻郡山都町にある久昌寺藏の十一面觀音像にも、宇多河道忠造立銘があり、これは道円作とみられている。館主と伝えられる宇多河道忠なる人物は康安2年(1362)頃の人ということになる。

(古川利意)



第281図 宇多川館位置図



第282図 宇多川館略測図

そりだ やまたて たてのこしやまたて まかざわ なで
31. 反田山館(館越山館、真ヶ沢の館)

所在地 耶麻郡西会津町大字飯豊字真ヶ沢

築城者 不詳

時期 不明

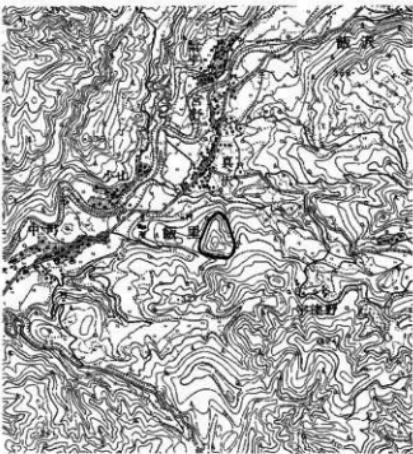
遺構 郭、腰郭、空堀、堅堀、土塁、虎口、古木
概要 反田山の館は、奥川に臨む真ヶ沢集落の南南東約300mのところに所在し、標高約330mのL字状に北に突出した尾根にあって、真ヶ沢集落との比高は約90m程である。館のある尾根の西側の麓には龍泉寺があり、「会津鑑」によれば、「正長元戊申年(1428)天寧寺住建ツ、本願寺主矢部土佐守勝光也」ということである。反田山の館へ通じる小道はここからはじまる。この道を登りめると、虎口と思われるところがあり、その西には樹齢数百年と推定される桺の大木が残っている。

遺構は、これより階段状に、5段の郭が西にのび、各段の比高は約5m程である。2段目の腰郭は鉢巻状に一周しており、北には、更に武者走り状の遺構が認められる。北に突出する尾根には土塁と空堀があり、遺構は、西に向かって防備する形をなし、東は全くの無防備といってよい。

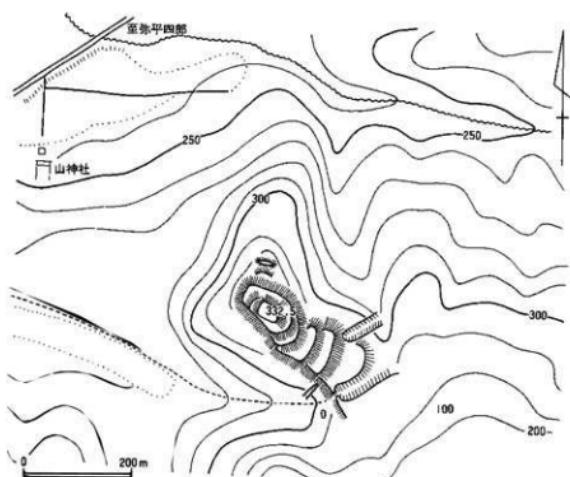
なお、「新編会津風土記」では、反田山館を「館越山」と記している。「会津鑑」および「会津古墳記」では「石田の館」と記されているが、これは反田の館の誤記と思われる。

城館の歴史 館の構築者及びその年代については不明である。「会津古墳記」には、「真ヶ沢村ノ館三十九間六十間、矢部土佐勝光、住ス」とある。前述の龍泉寺は矢部土佐勝光が正長元年(1428)に開いていることからすると、15世紀の室町時代の中頃にはこの館は存在していたものと考えられる。また、「新宮雜葉記」の称光天皇の条には、応永27年(1420)7月2日夜新宮氏の高館城(喜多方市)が落城して、奥川の城に籠り、この城も落ちて、

新宮氏は越後の上野(新潟県新発田市)に住したという記述がある。新宮氏は新宮荘の地頭であり、この反田山館のある西会津町の阿賀川以北の地域は新宮荘に含まれることからすると、反田山館が新宮氏の支城であったことも考えられる。そうであるとすれば、奥川の城とは、あるいは反田山館をさしているものかもしれない。(古川利意)



第283図 反田山館位置図



第284図 反田山館略測図

32. 阵ヶ峰城

所在地 河沼郡会津坂下町大字宇内字五目

築城者 城四郎重則？

時期 平安期 永延2年？

遺構 主郭、空堀、土塁、虎口等

概要 阵ヶ峰城は、宇内の薬師で有名な上宇内集落の北方にあり、城跡は鶴沼川西岸に広大にせり出した勝負沢扇状地の突端に占地し、台地状に侵蝕された平行地に構築された単郭式の方形館である。城跡の規模は「新編会津風土記」によると、東西1町30間、南北1町40間とあり、「会津鑑」には東西50間、南北76間とあるが、現在は東西150m、南北230mの広さを有する。東は会津盆地の辺縁部で比高10mほどの侵蝕崖で、南から西は連続する台地状平衡地と画するために、二重の空堀をめぐらしてある。虎口は西側中央に開口している。

内堀は、虎口附近で幅が狭く浅くなっているので、虎口の通路は土橋を用いたことも考えられる。虎口から離れるにつれて次第に広く深くなっている。北側は幅、深さとも2~3mであるが、南側は4~5mになり、堀底がU字型からV字型に変化している。

外堀も虎口附近は内堀と同様の形態であり、やはり虎口を離れるにつれて広くなる。まず北側は幅、深さとも4~5mあり、南側はさらに大きく幅、深さとも6~7m以上に達し、堀底は平坦である。内堀と外堀との中间には細長い帯郭状の遺構がある。虎口附近的帯郭の幅は広く、中央に長さ20mほどの土塁が築かれている。また内堀の東側にも20mほどの土塁跡がある。

城館の歴史 城跡の一部は公民館の敷地に利用されているが、二重堀の遺構は完全であり、価値が高い。

築城者と伝えられる城氏は越後の出身で、磐梯恵日寺を攻略して会津への進

出を図った人物で、永延2年(988)までに越後および会津各地に28館を築いたといわれる。陣ヶ峰城はその会津八館の一つで永延2年に築城されたという。城代には沖野太郎を住ませたと『会津鑑』にはある。正暦2年(991)城重則は戦いに敗れ片門村で自刃し、八館の家臣はことごとく殉死したと伝えている。

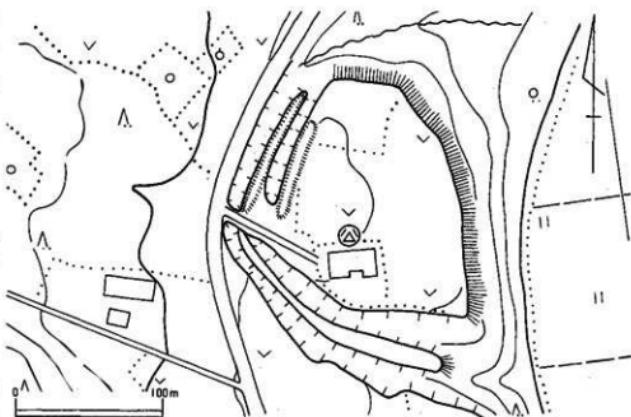
(角田伊一)



写真87 陣ヶ峰城虎口付近土塁・土橋



第285図 陣ヶ峰城位置図



第286図 陣ヶ峰城略測図 (古川利高原図)

33. 雲雀城

所在地 河沼郡会津坂下町大字高寺字舟渡

築城者 城四郎重則

時期 平安期 永延2年

遺構 郭、空堀、土塁等

概要 雲雀城は舟渡集落の南東部、河岸段丘上に構築された単郭式の山城であるが、占地状況は只見川河岸段丘原の突端に位置し、平地との間を広く深い堀切りで区割しているところから、単郭式の平城とも見ることもできる。

『会津古里記』『会津鑑』による城郭の規模は、東西102間、約180m、南北63間、約110mとあるが、城郭の南に接する只見川の侵蝕作用により、かなりの部分が崩壊したものと思われ、現況は東西約93m、南北63mである。主郭の北と東には幅13m、深さ6mの薬研堀が掘られ、堀底道が舟渡の集落につづいている。西の段丘崖は集落からの比高約20mほどで、九々折れの道によって集落に通じている。これは大手道であった可能性が強く、『会津鑑』には天正期の城主渡部越後綱元が、城山の麓に居館を築いて住したと述べられている。また城の南は只見川の大河が流れ、主郭との比高約30mで、前述の巨大な堀切りと共に、難攻不落の構えを示し、屈強の要塞であったと思われる。ただ主郭に接する北および東部は等高位の段丘平地が広がり、その上部に広大な高寺段丘原が開かれており、この部分の防備には十分な手入れの跡がみられないのは不思議である。

城館の歴史 雲雀城は越後鳥坂山と赤谷に本拠を置く城氏の会津侵攻の拠点として構築された会津八館の一つという。このほか高寺山の西部一帯に久山城、福富城、外島城、猿戻城を築き、只見川流域を完全掌握して、当時の会津領支配者、磐梯恵日寺を相手に戦いをいどんでいたと伝えられている。

伝説では、城重則は永延2年(988)から正暦2年(991)まで恵日寺の寺

代官で夏井村居住の斎藤佐渡守宗顯と戦ったが敗れ、片門村の十文字原で自刃した。この折、雲雀城主加佐間七郎も正暦2年に殉死、婦女子は只見川に身を沈めたという。このためここを姫の瀧と呼んでいる。

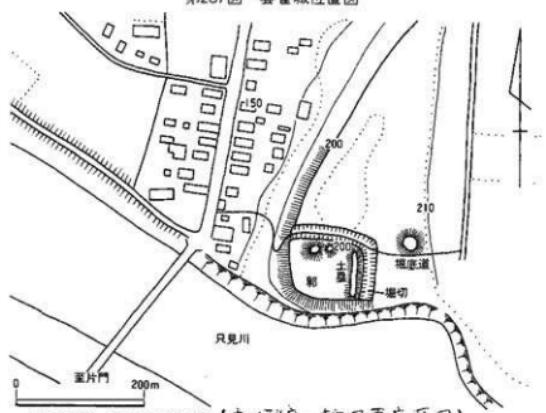
(角田 伊一)



写真288 雲雀城全景（西側より）



第287図 雲雀城位置図



第288図 雲雀城略測図 (古川利良・柳内青吉原図)

かながみたて
34. 金上館

所在地 河沼郡会津坂下町大字金上字館

築城者 北田次郎広盛

時期 南北朝期

遺構 郭、土塁、堀、虎口跡等

概要 金上館は金上集落のほぼ中央部にあり、館を中心に西村と東村に集落が分かれている。地割り状況から推測すれば、この両村は金上館主の家臣団の住居地跡と考えられる。館は集落の中央の丘状のところの南面に位置する単郭式の方形館で、南北81m、東西40mの広さがあり、四周に幅4mの堀をめぐらし、堀の内側に土塁を構築している。虎口は南面に開口し、戦国時代の軍用路黒川へ津川路とは土橋で連絡していたものと考えられる。近世期の『金上館跡図』によると、南北に長さ35間、幅2間、東西に長さ22間半、幅2間の堀が郭を取り囲み、その内側に土塁を構築して主郭を防備し、南面中央部に虎口を開口していたことが示されている。現在は南と東の土塁は消滅しており、また堀の大半も道路敷となって形を失っている。

城館の歴史 金上館は津川城代金上盛備の居館で、盛備は天正17年（1589）磨上原合戦で討死している。

『会津鑑』によれば、金上館は最初北田氏が築き、北田次郎広盛が北田城に戻された跡に藤倉石見守盛経の子盛弘が、藤倉館から金上地頭として移封され、建長4年（1252）には津川麒麟山に孤戻城を築き移住したと述べられており、盛弘の子盛仁が金上氏を名乗ったとされている。

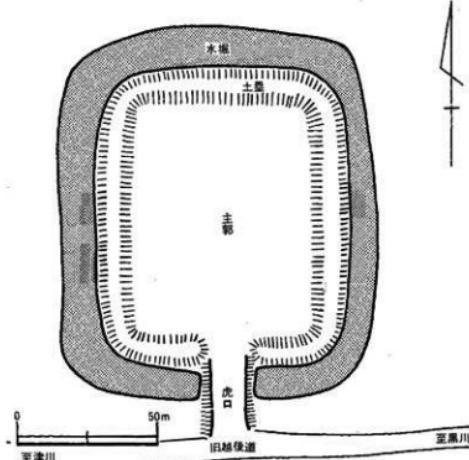
金上集落は会津盆地のほぼ中央に位置し、古くから会津の歴史に名をつらねる要衝の地であった。地元の伝説では、高寺三十六坊の一つ金上坊の開かれたところとされ、現在の曹洞宗鐘寿山金上寺は、金上坊が独立したものであると伝えられている。しかし本願主とされる金上盛備とその一門の位牌は金上寺には安置されず、館跡に近世以来居住する角田家が盛備愛用の鞍、鎧と共に保管存している。（角田伊一）



写真89 金上館土塁・堀 (北より)



第289図 金上館位置図



第290図 金上館略測図
（会津坂下町史の歴史編（会津坂下町）による。）

おいかわなて
35. 笠川館

所在地 河沼郡湯川村大字笠川字館

築城者 三浦弾正頼盛

時期 戦国期 天文年間

遺構 本丸、土塁等

概要 笠川館は笠川集落の北端で流路を鉤の手に折って北流するせなぎ川の右岸平地上に築かれた複郭式の方形館であるが、二ノ丸、三ノ丸まで構築された、城に近い居館である。

『会津古墳記』によると、本丸の大きさは東西約130m、南北約162mで、四周に土塁を築き、幅約7mの深い空堀をめぐらし、西南端に大手口を構え、二ノ丸とは土橋でつないでいたものと思われる。二ノ丸は本丸の西北側に半月型に張り出し、東西36m、南北18mの広さがあり、土塁でかこわれ、西北端に横矢掛の虎口を開口している。三ノ丸は二ノ丸の北にあり東西55m、南北43mで土塁と空堀を鉤の手にめぐらし、西側はせなぎ川が外郭を取り囲んで外堀の役目を果たしている。また本丸の東側には南北40m、東西10mの帯郭があり、その東北端に八幡神社を祀り、本丸、その他の曲輪とは堀底道で通じ合っていたものと考えられる。

現在本丸の大部分は笠川農協、笠川幼稚園、笠川小学校の敷地となり、本丸東側の土塁内側辺りを南北に県道若松・浜崎線が貫通し、二ノ丸、三ノ丸は畑や水田と化しその面影はなく、ただ本丸東側の空堀がかろうじて保存されて湿草など繁茂している。

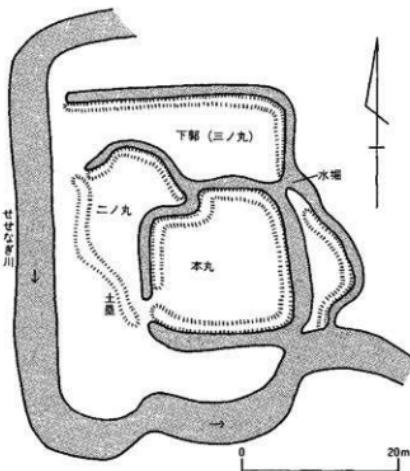
城館の歴史 永禄から天正年間にかけて、笠川館には栗村下総が居住したと伝えられる。栗村下総はのちに岩瀬郡長沼城主となった新國氏の出身であるが、天正12年(1584)6月13日、松本氏に与力して黒川城に攻め入り、笠ノ目館主赤塚藤内定景に討たれ、この館も廃館になったと『新編会津風土記』に述べられている。笠川村は古くから交通の要衝で、慶長13年(1608)以後は村内道は米沢街道の本道となり、一里塚も築かれ街村として整備され、近世期には笠川組頭の居村として政治経済の中心地となった所である。この有利な立地条件は中世期も同様であったと考えられ、築城地に選定されたものであろう。(角田 伊一)



第291図 笠川館位置図



写真90 笠川館本丸付近全景

第292図 笠川館略測図
(城跡・御所跡・居館跡)

36. 浜崎城

所在地 河沼郡湯川村大字浜崎字北殿町

築城者 浜崎主馬

時期 室町期 宝徳3年以前

遺構 本丸、堀、土塁等

概要 浜崎城は別名藤森城とも称した。浜崎集落の東北端、日橋川の氾濫原に形成された残丘崖を利用して築かれた複郭式の平城。城跡の規模は『会津鑑』『新編会津風土記』などによると、本丸は東西90m、南北110mで四周に幅約10mの堀をめぐらし、本丸の曲輪は高さ約6mの土塁にかこまれていた。本丸の西にはほぼ同じ広さの二ノ丸の曲輪があり、堀と土塁を築き、北は日橋川を外堀に取り入れた守備堅固な城塞である。

現在の城跡は、本丸の西と南、東北の一部に土塁が残り、東と西の水堀が湿地、南が水田となって、かろうじて城郭の痕跡をとどめているにすぎない。城跡の中央を国道121号線が南北に走って、本丸を東西に分断してしまい、主郭の痕跡は東側部分にかろうじて見出だすことができるにすぎない。二ノ丸は果樹園地化したほか、ほぼ真正をJR磐越西線が走り、土塁及堀は全て破壊されその痕跡すらとどめていない。

城館の歴史 浜崎村は中世以来の伝馬宿で、交通の要衝であり、阿賀川、日橋川舟運の基地でもあった。『真壁文書』には觀応3年(1352)に蘆名直盛と推定される三浦若狭守が、真壁政幹と共に河沼郡浜崎城を攻略して、これを陥した記事があり、この地が古くから会津盆地北方の要害の地であったことを示している。

宝徳3年(1451)8月、猪苗代盛光が浜崎城を攻め陥したが、白川小峰城主結城義季の仲裁で兵を引き、蘆名氏は主馬某を城代に置いて城の改修を行わしめたという(『異本塔寺長帳』)。天正の頃は上野基五郎某が城代として住んだが、天正17年(1589)蘆名氏滅亡後は、伊達政宗の重臣片倉小十郎の給地となり、翌18年には、西国より入国した蒲生氏郷の支城となり、氏郷の子秀行のとき家臣の蒲生主計が城代となって改修工事をおこなった。その後元和元年(1615)の一国一城令により、浜崎城

は取り壊さるべき運命に置かれたが、蒲生氏は「茶屋」と名付けてこれを残したと伝えられている。その縄張りを示す『浜崎城絵図面』(慶徳秀夫氏所蔵)が現存している。現存する遺構はこのときのものであろうか。

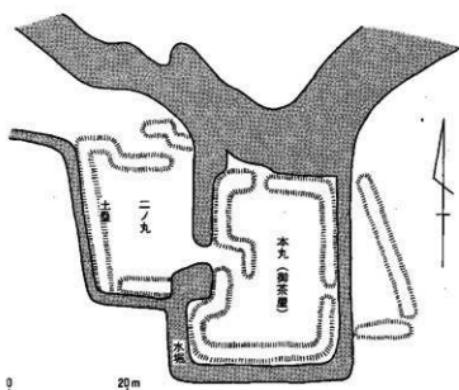
(角田伊一)



第293図 浜崎城位置図



写真91 浜崎城本丸と土塁の一部を望む



第294図 浜崎城略測図 (慶徳秀夫所蔵図)

37. 北田城

所在地 河沼郡湯川村大字三川字大館

築城者 佐原治郎廣盛

時期 鎌倉期 建久4年

遺構 土塁、水堀、井戸等

概要 北田城は北田集落の北方約1km、河沼・耶麻郡界を流れていた日橋川(現在旧河道は農耕地化されている)と、せせなぎ川との合流点の河岸段丘上に構築された複郭式の平城である。段丘崖との比高は約5mである。城跡は、昭和58年に圃場整備が行われて水田と化し、本丸の土塁の一部を残すのみで完全に消滅してしまった。圃場整備に先立ち、記録保存のため発掘調査が行われた。城地の遺構は明瞭ではなかったが、「新編会津風土記」の記事通り、本丸に外郭(二ノ丸か)を併設した複郭式の平城であることが確認された。

本丸は東西約110m、南北約120mの広さで、周囲に土塁と堀をめぐらしている。この堀は水堀であった可能性が高い。二ノ丸と推察される外郭の広さは東西約220m、南北約210mあって、本丸の西南側に位置している。外郭北側の

段丘崖底部に土塁が築かれ、また旧日橋川の対岸に長さ約50m、幅10m、高さ2mほどの巨大な土塁(別名橋かくしの土手)が築かれていたが、昭和40年代にいずれも削平されて水田化している。その他の遺構としては、井戸跡、土坑、溝跡などが検出され、中世陶器、中国産の青磁、白磁、古銭などが出土している。

城館の歴史 城主佐原次郎廣盛は、佐原盛連(義連の子)の二男で、北田

氏を名乗った会津平原の豪族で、泰盛、盛廣、重忠、政国、政隆、政泰と七代の領主が約200年間この一帯と、野沢原町、下野尻、西勝などの都合300貫文の地を治めたという。北田氏は蘆名家五党の一人と称されたが、惣領家としばしば抗争をくり返し、「塔寺八幡宮長帳」によると、応永9年(1402)新宮荘地頭新宮盛俊と内応して兵を挙げ、同16年6月3日、蘆名盛政の總攻撃をうけて北田城は陥ち、上総守政泰父子三人はじめ一族が討ち死にして北田氏は滅亡した。(角田伊一)



第295図 北田城位置図

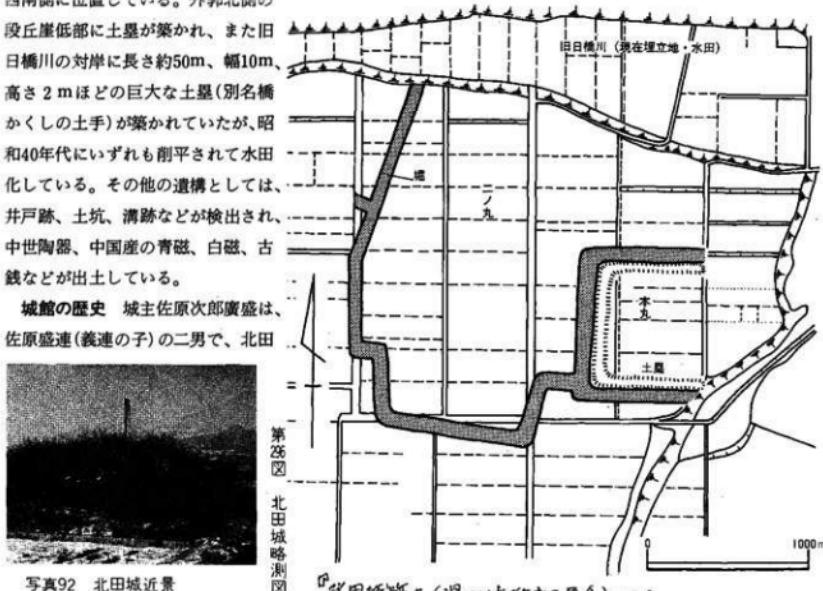


写真92 北田城近景

あかだて
38. 赤館

所在地 大沼郡会津高田町大字旭三寄字岩渕
築城者 富田右近政保
時期 不明
遺構 居館、本丸、二ノ丸、馬場、帯郭、大手門、虎口、堀切、空堀、水堀、土塁、櫓台等
概要 赤館は会津高田町役場より南西方向へ4km離れた位置にあり、共に北流する宮川と尾岐崖川の合流点高橋集落の東端に屹立する赤館山に構築された山城と、赤館山の東麓岩渕集落に築かれた館主の居館から成っている。

赤館山は標高325m及び340mの二峰から成り、このピークの双方に曲輪が構築されている。赤館山は東尾岐山塊の西北端に位置し、比高差50m下より会津盆地の野づらが開けている。つまり、赤館山は会津盆地最西南端に位置する宮川の侵蝕残丘の前頭部で、西側に宮川の大峡谷が走り、東側の低湿地帯を堀を利用して無二の要害山とした、築城立地最適地であることが知られる。

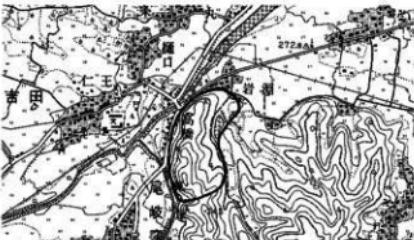
本丸は赤館山の南峰山頂にあり、文献による規模は東西38間、南北45間の広さがあり、削平された主郭の東側に幅10m長さ100mほどの帯郭がめぐらされ、ほぼ中央部に幅4m位の虎口が開口している。二ノ丸、あるいは出城は北峰山頂に築かれているが、本丸とは深い堀切で区別されている。二ノ丸の郭南端には櫓台があり、その南下段に削平された腰郭があり、その前方に深さ5~6mの堀切り部分と土塁を築いて、連続たる東尾岐山塊と区切りをついている。二ノ丸には大小各様の郭があり、家臣団の居住地であった可能性も高い。

赤館の特徴的な水堀は二ノ丸の山麓下から本丸下を経て、城主居館といわれる方形館を一巡して、堀込集落に達している。現在本丸下に人工堤を構築して貯水池として利用しているが、水堀遺構としては大規模なものである。堀込の地名から考察しても、この水堀は宮川にまで達していたものと考えられる。富田右近の居館には、石塁も見られるが、これは天正期の城主富田平十郎政村の後補と考えられる。

城館の歴史 城主と伝えられる富田氏は蘆名家四天の宿老富田氏の支族で、交通の要衝高橋、岩渕を領有

していた豪族である。

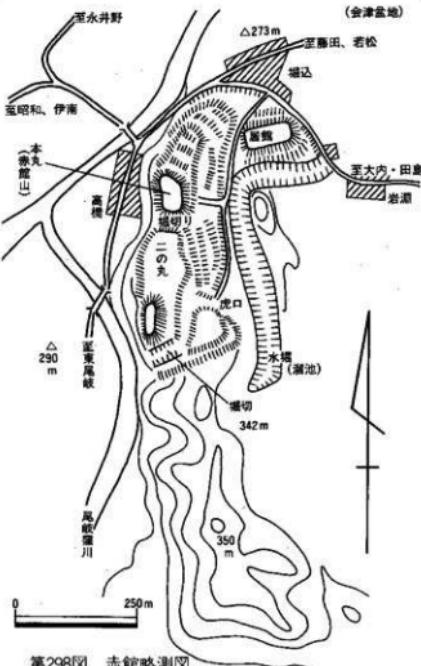
(角田 伊一)



第297図 赤館位置図



写真93 赤館全景（東側より）



第298図 赤館略測図

39. 船岡館

所在地 大沼郡会津高田町大字杉屋字杉ノ内

築城者 松本氏

時期 室町期 享徳2年以前

遺構 主郭、外郭、土塁、堀、天狗道等

概要 船岡館は、会津高田町役場より南西方向約3kmの地点にあり、宮川扇状地扇頭部に占地する、大残丘原に構築された複郭式の平城で、蘆名氏四天の宿老首座の松本氏代々の居城。会津に於ける中世豪族の館遺構中屈指の規模と保存状況を誇っていたが、惜しむらくは昭和59年に、会津高田町過疎対策事業により主郭の半分以上が破壊され、外郭の西半分が原形を失った。しかし破壊された後といえども、豪壮な居館の構えと遺構は隨所に見うけられ、松本氏の権勢がいかに強大であったか察知できる。居館を構えた主郭は、大正9年の馬場栄造氏等の実測図によると、東西19間、南北23間に及ぶ敷地を2~3mの高さに盛り土し、幅3~4mの内堀をめぐらして満水を堪え、東南端に大手口を開口、東北端に天狗道を開いて大手道と合わせて郭外東北方向に通じさせている。また南門を構えて郭外に通じる道もあった。主郭の東側、西側及び南側には二ノ丸、三ノ丸に相当する外郭(文献では方1町の規模)と、北側には上馬場、下馬場を併置し、扇状地崖を利用して水堀をめぐらし外堀としている。郭外には家臣屋敷地や処刑場、涙橋、教悔礼拝堂などがあったといい、それに相当する遺構がある。

城館の歴史 松本氏は信州松本氏の出身で、会津盆地南西部に勢力を有する豪族であった。蘆名氏との臣従関係はすでに享徳2年(1453)には確認されているの

で、居館の築城は少なくともこれ以前と推定される。享禄年中(1528~31)には松本源兵衛が住し、天正年中には松本図書、実輔父子が住していたといわれる。天正12年(1584)6月3日、蘆名盛隆に謀叛を企てて、笠川館主要村下総と黒川城を攻略したが事成らず、共に討死して家門断絶したことが「新編会津風土記」に述べられている。その後館主は横田山ノ内氏の家臣小島備中で、旧城域内に、その子孫と伝える児島家が現存する。(角田伊一)

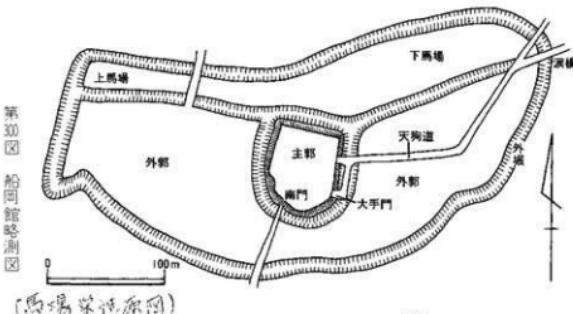


第299図 船岡館位置図



写真94 船岡館全景

第300図 船岡館略測図



むかいは ぐろやまじょう いのがさきじょう
40. 向羽黒山城(岩崎城)

所在地 大沼郡本郷町大字本郷字船場

築城者 蘆名修理大夫盛氏

時期 戦国期 永禄4年

遺構 本丸、二ノ丸、三ノ丸、西出丸、北出丸、
出城、水ノ手曲輪、腰郭、帯郭、堀切、豎
堀、空堀、堀底道、大手道、からめ手道、
虎口、土塁、石塁等

概要 向羽黒山城は、本郷町役場から南東約1kmに位置している。城下町本郷は会津盆地に阿賀川が流入して形成した扇状地の扇頂部にあり、これに続く南東部に観音山、羽黒山、岩崎山の通称白鳳三山が屹立しており、主峯の岩崎山(408m)に親城を築き、尾根続きの羽黒山、観音山を出城に組み入れ、南北1.3km、東西0.5kmの範囲を繩張りとしたわが国屈指の戦国山城である。残存状況は極めて良好である。

岩崎山は通称弁天山の名で親しまれ、盆地との比高は185mを測る。向羽黒山城の本丸は山頂部に構築され、二ノ丸は棱線上の鞍部、三ノ丸は斜面を削平して築かれ、さらに山塊の西斜面には多数の曲輪群から成る西出丸、北斜面には盛氏屋敷と称する北出丸が築かれ、これらの郭は全て堀切、空堀によって区切られている。本丸は文献には東西30間、南北17間とあるが、主郭部の山頂削平地の実測値は東西42m、南北12mを測り、東側にふくらみの大きい椿円形で、東北方に6m×4mの櫓台状遺構がある。この遺構の東側には腰郭二段が構築され、その下部に深い空堀をめぐらしている。主郭の南側は阿賀川に臨む大絶壁で攻略のおそれは皆無である。二ノ丸の頂部削平地は60m×35mで、現在白鳳山公園地に利用されている。二ノ丸の西斜面には大小多数の曲輪が築かれ、扇の縄手法の水の手曲輪も残存している。三ノ丸の頂部削平地は東西27m、南北35mで、二ノ丸より58m低地に築かれている。大手道は三ノ丸の西谷間集落三日町に開口しており、本丸に至る間には、おびただしい曲輪群が迷路の如く連なっている。この城跡に残存する曲輪の人工削平地はおよそ100ヶ所あり、また堀切り20条のほか無数の土塁跡が認められ、蘆名盛氏がいかに本格的に築城工事を遂行したか想像できる。尚本城跡は昭和61年に西ヶ谷

恭弘氏により遺構確認調査が実施され、精密な測量図が作製された。

城館の歴史 向羽黒山城は、「新編会津風土記」の伝えるところによると、黒川城主蘆名修理大夫盛氏が、自らの隠居所とするために永禄4年(1561)に築城に着手し、同11年に完成、家督を嗣子盛興に譲って移り住んだといわれる。天正2年(1574)6月5日、盛興が26才の若さで病死し、あとを繼ぐべき嗣子がなかったので、盛氏は盛興の後室伊達氏を自分の養女とし、二階堂盛隆を婿に迎えて蘆名家を嗣がせ、自らは後見人となつて蘆名家の実権を掌握した。このため盛氏は同年8月10日に黒川城に帰還し(『異本塔寺長帳』)、向羽黒山城は翌天正3年に廃城とされたといわれる。

しかし昭和61年の遺構調査の結果、城郭の全体構成、曲輪取り、普請工事の大規模化、文禄～慶長初年に初めて日本に出現した築城技法が各所に散見することから、天正3年以後も蘆名氏は着々と改修工事を続行し、火薬戦斗を防備する城塞に仕上げていたことが明らかにされ、黒川城の詰の城という見解もなされている。巌城、弁天山城、乾城等の呼称も全て向羽黒山城の別称である。(角田伊一)



第301図 向羽黒山城位置図



第302図 向羽黒山城実測図

「向羽黒山城跡」測量報告書、測量担当者名：(本郷町教育委員会)に上
黒岩崎城一環状

41. 岩谷城

所在地 大沼郡三島町大字滝谷字下館山

築城者 井ノ上某

時期 南北朝期 明徳元年（元中7）

遺構 本丸、二ノ丸、帯郭、堅堀、土塁、大手道、虎口、根小屋跡等

概要 岩谷城は三島町役場から北東へ約5km離れた滝谷集落の北端、下館山に主郭を築き、滝谷集落を取り巻く上ノ山、上館山、小館山に出城や見晴台を構築した大規模な中世山城である。滝谷は芦名氏領の最西端に位置し、伊北郷山／内氏領との接点であると共に、中世交通路の要衝地でもあり、黒川（若松）と伊北（横田）の中央点にあり、どちらへも片道八里の行程で、両領主の伝馬宿として重要な使命をになわされたところである。従って城郭の縄張りも滝谷の集落を防備、警備する形になっており、諸街道（伊北街道、銀山街道、砂子原街道、西方街道）には関門（木戸場）を構築しているのが特徴的である。

主郭の岩谷城は滝谷集落の東北端に屹立する下館山に築かれている。下館山（327m）は全山露岩地の自然の大要害で、集落との比高は100mを測る。本丸は山頂部で、削平された地形部の広さは、文献では東西42間、南北31間とある。現在山頂部の平地は集落の共有地で杉林となり、四周の展望は全く利かない。本丸の削平地につづいて二段の帯郭がめぐらされ、北部と南部に堅堀状の遺構が山麓までつづき、この堀跡に沿うように、ほぼ垂直状の大手道とからめ手道がつけられている。山麓の西北東三方は滝谷川の流れが外堀の役目を果たし、大手道のある南側は露岩地の中腹部より上ノ山（400m）への稜線続きとなるが、この稜線およそ500mは城の麓の集落からすると強固な土塁と見做すことができる。稜線の鞍部を通る伊北・銀山両街道の切り通し付近には木戸門の遺構が明瞭である。

永禄元年（1558）山ノ内氏が岩谷城を攻略し入城するが、山ノ内氏は城下集落南端に形成されている三層の河岸段丘を縄張りとする新城を構築した。最上段の平地（300m）を殿平と称し居館を築いた。文献上の規模は東西40間、南北100間とある。中段の平地（東西42間、南北204間）を中殿平、最下段の平地（東西30間、南北80



第303図 岩谷城位置図

間）を下殿平と称し家臣団の居住地とした。地割りや地形から屋敷跡遺構は明瞭である。そのほか上館山の出城跡、駒鳴峠小館山の見晴台跡等遺構は明瞭で残存度は極めて良好である。

城館の歴史 築城者の井ノ上某は『会津鑑』によると蘆名氏の臣となる。明徳元年（1390）築城説が正しいとすれば、井ノ上某は直盛の家臣と考えられ、岩谷城の城主として代々滝谷邑に居住したものと思われる。その後盛氏代には四天の宿老松本図書の支配城となり、河内と云う者を城代に住まわせたという。『会津四家合全』ではこの河内を井上河内介と記している。

永禄元年（1558）4月16日、横田中丸城主山ノ内治部大輔俊清の二男撰津守俊政、三男豊前守俊範兄弟は井上河内介を討って岩谷城を攻略した。松本図書の通報に激怒した盛氏は討手をさし向かたが、山ノ内氏の一族沼沢出雲守の仲裁で盛氏は兵を引き、横田並びに滝谷山ノ内氏は蘆名氏と臣従関係を結び、岩谷城の新城主として安堵されている。三男の俊範も岩谷城と地続きの隣村桧原丸山城主内山淡路守俊景の養子に迎えられている。山ノ内俊政の子俊基は、天正17年（1589）6月5日の磨上原の合戦で家臣47人と共に討死している。秀吉の奥州仕置き後、滝谷山ノ内氏は土着し、近世期一貫して滝谷組の郷頭職を世襲する名門となった。（角田伊一）

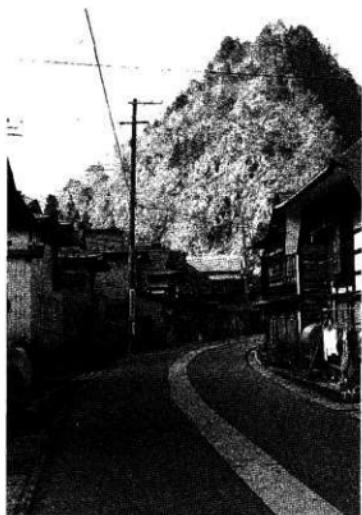


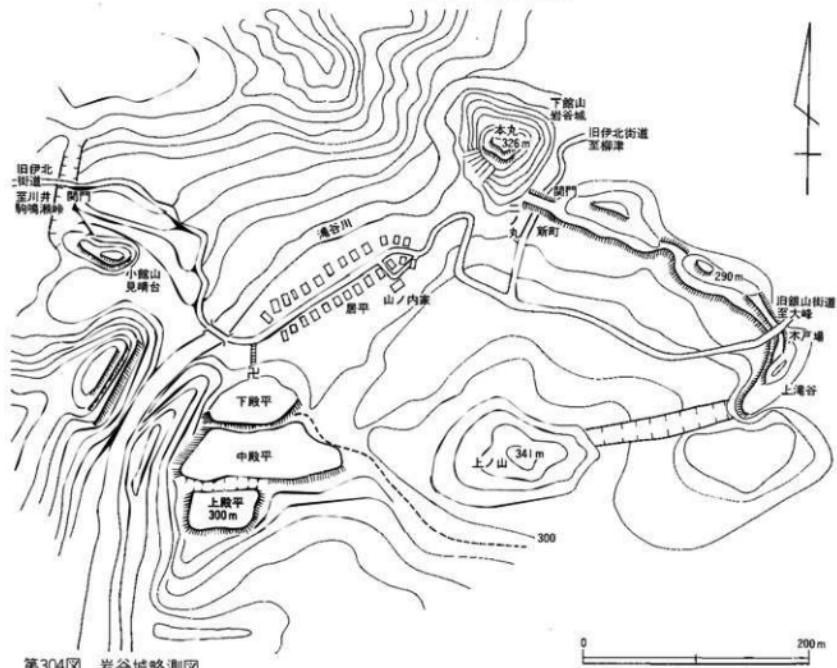
写真95 岩谷城と城下町滝谷を望む



写真96 岩谷城二ノ丸の木戸場付近の土壘



写真97 岩谷城近景



第304図 岩谷城略測図

まるやまじょう 42. 丸山城

所在地 大沼郡三島町大字檜原字上峰

築城者 内山淡路守

時期 室町期 宝徳2年

遺構 本丸、二ノ丸、帯郭、土塁、空堀、堀切、

堅堀、石室、見晴台等

概要 檜原丸山城は、滝谷岩谷城の西北2kmの通称大飛戸と呼ぶ、丸山(450m)の山頂部に構築された複郭式の山城である。

本丸は大飛戸の岩山山頂をそのまま用いており、文献の伝える通り東西16間、南北12間(『会津古墨記』等)と、城としては狭小であるが、山麓の西と北を蛇行する只見川の河岸より、およそ比高200mを測る垂直の大絶壁が本丸から二の丸にかけて延々と続く大要害山で、さらに東の山麓部も深い泥湿地で、本丸への侵攻の大障壁となっている。大手道は檜原集落の南に開けた春日野原と称する河岸段丘原の西南端より、尾根伝いに開かれた仙道がそれであろうといわれている。

居館跡からの道も途中で大手道に合する。からめ手は後述の駒鳴瀬崎に通じる尾根道と考えられる。

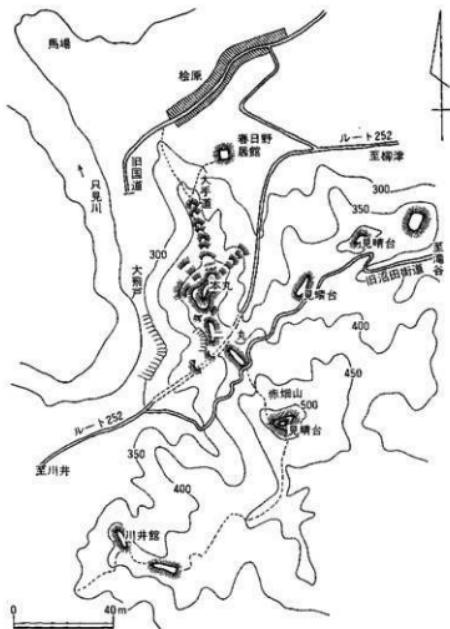
大手道づたいには、数層の段切り状の箇所が残り、主郭直下に深さ2m、幅5mの堀切りと数条の堅堀の遺構がみられる。主郭には幅6~7m、高さ2~3mの帶郭二層をめぐらした方形館跡があり、本丸の西に向かって数郭の腰郭が構築され、その一つには井戸らしき遺構も認められる。また主郭の北端に幅2m、長さ6m、深さ2mほどの石室跡が残り、塩蔵跡と伝えられるが定かではない。本丸から西に続く尾根道沿いには二ノ丸の曲輪跡や見晴台跡があり、沼田街道の駒鳴瀬崎頂上には木戸場(関門)跡があり、街道を掌握したことが考えられる。赤畠山山頂(520m)の見晴台、この山系の最西端の川井館も丸山城の縄張内と見ることができる。

城館の歴史 築城者の内山淡路守は蘆名氏の代官で、山ノ内領との接点に当たる只見川中流域一帯の支配権をゆだねられていたようであるが、詳細は伝えられていない。永禄元年(1558)

に隣村の滝谷岩谷城が山ノ内氏に押領された折、淡路守は岩谷城の新城主山ノ内俊政の弟俊範を婿養子に迎えて家督を譲り、丸山城は横田山ノ内氏七騎党持城の一つに加えられた。(角田伊一)



第305図 丸山城位図



第306図 丸山城測量図

とりのうみたて

43. 鳥海館

所在地 大沼郡三島町大字大谷字赤岩山

築城者 不詳

時期 不明

遺構 本丸、二ノ丸、堀切、帯郭、腰郭、段切等

概要 大谷字鳥海館は、近世期大谷組郷頭居村であった大谷集落の端村鳥海の東50m、赤岩山山頂部に構築された複郭式の山城である。城郭は鳥海集落とは比高50mを測る宇源導寺の河岸段丘原端に占地し、大谷川の浸蝕した残丘原が細長い尾根筋に連なった地形を利用しておらず、しかも三方を深い渓谷が切り込む天然の大要害である。

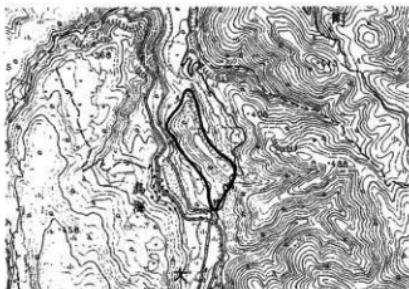
本丸は残丘原の北端に位置し、東西36間、南北25間(『会津古里記』)の広さを有し、二ノ丸との間に深さ10m、幅20m程の巨大な堀切りをおき、主郭部の四周に幅3~4mの帯郭をめぐらし、数郭からなる腰郭の跡も確認されている。また館ノ沢と大谷川の合流点に向けて連なる急峻な尾根筋にも、数10段に及ぶ段差跡が残っていて、共に本丸の防禦を鉄壁なものとしている。

二ノ丸はおよそ50間四方の平坦地で、南と西側に高さ2m、幅5~6mの土塁状の遺構が曲輪の約半分に相当する距離にめぐらされている。この土塁の上面も平坦地で、東西60m、南北15mの三角形状の曲輪跡が認められる。二ノ丸の平地は、この三角形の曲輪より2mほど低位置にあることになり、この段差が人工的なものか、河岸段丘生成時の副産物なのかはまだ確認されていない。大手道は三角形曲輪の前にあり、俗に馬の背と称する大難場の虎口跡がある。幅1m、長さ10mの露岩地で、崖下の深さは南側80m、北側30mで、城館への入口はこれ以外にない。この馬の背道にも閑門を構築した跡が認められ、堀切り跡が残っている。

城館の歴史 馬の背虎口の先は源導寺廃寺跡のある広大な段丘原で、伝説では治承年中に鳥海柵主石川刑部某が、高倉宮と交戦して敗死した古戦場跡と伝えられ、9個の古塚が祭祀されている。石川柵は東西18間、南北42間と記録にあるが、鳥海館との関連は明らかでない。鳥海館は横田山ノ内氏の直領で、五十嵐豊後惟

重なるものが城代として居住していたとも伝えられる。

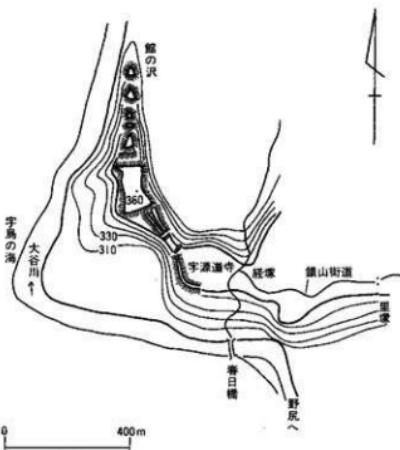
(角田伊一)



第307図 鳥海館位置図



写真98 鳥海館遠景 本丸・堀切(西側より)



第308図 鳥海館略測図

44. 中丸城(立岩城)

所在地 大沼郡金山町大字横田字要害山

築城者 山ノ内俊明

時期 南北朝期

遺構 本丸、二ノ丸、三ノ丸、腰郭、帯郭、段差、虎口、空堀、堀切等

概要 横田中丸城は、旧城下集落の横田の東端に屹立する独立峰に構築された複郭式の山城で、別名立岩城と呼ばれたこともある。

中丸城は、只見川、山入川、良々子沢の合流点基部に屹立する独立峰要害山(別名鷹ノ巣山547m)のほぼ全域を縄張りとする大規模な山城で、本丸跡は山頂からおよそ八合目付近までの、著しい地形部の残存する広い範囲を指すものと思われ、『会津鑑』等の文献記録では東西58間、南北92間に及ぶといわれている。山頂部の主郭はおよそ400m²の削平された平坦地で、中央部に摩利支天の石祠があり、その下段には東、北、西の三面を三層から五層に段切りして、各層に腰郭、帯郭をめぐらし、土星や空堀を築いている。山麓の虎口からつづく大手道筋には、堀陣子、折り、樹形、坂虎口、横矢掛、堀底道などの戦闘用施設に依り守備を固めている。しかしながら手に相当する南尾根筋の防禦は不備で、幅、深さ共に10mを越す巨大な堀切を2ヶ所配置するのみで、他に地形された形跡はない。二ノ丸と本丸をつなぐ大手道は直線状に敷設され、天正17年の伊達政宗との抗戦では岩石落しなどの戦略を用い相手の戦意を喪失させたとも伝えられている。

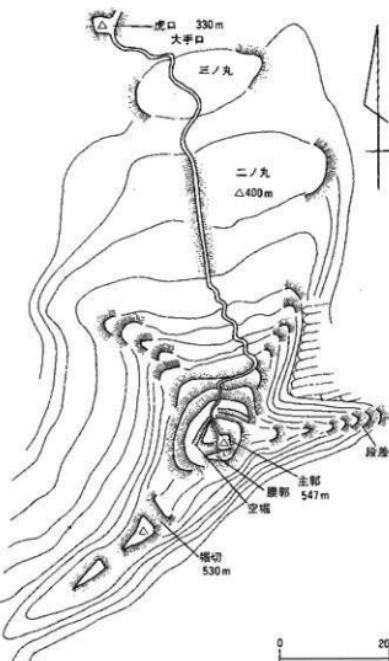
城館の歴史 山ノ内氏は首藤刑部丞俊道の後胤で、俊道の子の経俊が、源頼朝より奥州藤原泰衡討伐の軍功により、会津郡伊北郷一帯の地を賜わり、天正18年(1590)までおよそ400年間にわたり、只見川流域一帯を統治した豪族である。黒川、蘆名氏とは臣従関係を結びながらも、越後の上杉氏と呼応しつつ、領地の争奪を繰り返すあいだ柄でもあった。戦国時代の山ノ内氏は、主城の中丸城のほかに、川口玉繩城、野尻牛首城、沼沢丸山城、西方鳴ヶ城、檜原丸山城、滝谷岩谷城を有し、山ノ内七騎党持城と称した。ほかに大塙中山城、只

見水澤城などの固城六ヶ城と、宮崎館、島海館などの「かきあげ櫓」と称する51ヶ所の城館を各地に配し、家臣団を常住させていたと伝えられている。

(角田 伊一)



第309図 中丸城位置図



第310図 中丸城略測図

45. 玉縄城 たまなわじょう

所在地 大沼郡金山町大字川口

築城者 山ノ内(川口)俊甫

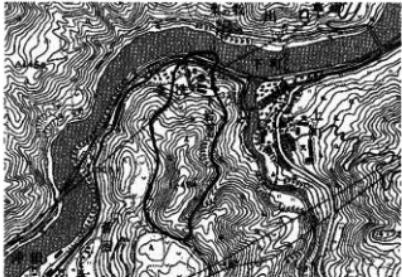
時 期 戰國期 天文13年

遺構 本丸、二ノ丸、空堀、堀切、帯郭、腰郭、大手道、土塁、段差等

概要 玉繩城はJ.R只見線会津川口駅の西200mに屹立する鳥山の尾根筋に築かれた複郭式の山城。横田山ノ内氏七騎党持城の一つで、支族川口俊甫の居城である。

城は、通称ポンデン山の名で親しまれている標高484mの鳥山に築かれているが、山麓の城下町川口集落との比高は130m余。只見川と野尻川の合流点西側に位置する鳥山は、野尻川に沿って南北に連なる岩山で、東西の巾が狭く、屏風状に切り立って、文字通り天然の要塞である。城郭は山麓から頂上までを縄張りとする守備堅固な大要塞である。二ノ丸は県立川口高校が建てられており、文献による広さは東西43間、南北108間といわれているが、遺構は全く残っていない。

二ノ丸から胸つき八丁の急坂路となる。その間、平坦な尾根筋までの比高約100mの間には、無数の段差が



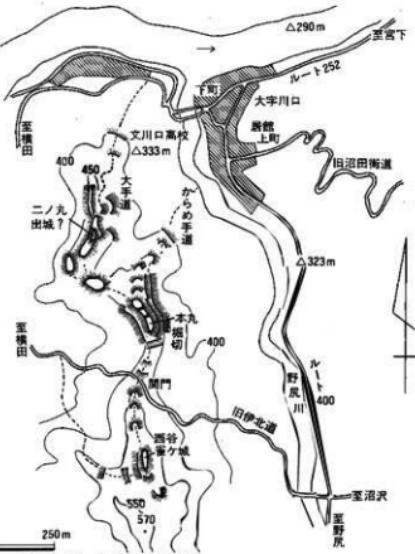
第311図 玉緋城位置図



写真99 玉繩城遠景

築かけており、本丸の防備を強固なものとしている。尾根の北端から本丸（主曲輪）までのおよそ300mの間には、大小の曲輪跡がみられ、帯郭をめぐらした構えのものから、土壘や空堀を構築したものもあって、いかにも即戦的な構造にみうけられる。おそらく天正18年（1590）の山ノ内惣領家との抗争に備えての補強部分と推定される。本丸は『会津鑑』によると東西28間、南北49間とあるが、主郭部は実測ではほぼその半分位の広さである。頂上部を削平し、その下段に幅5m、深さ6mほどの空堀つきの帯郭を築き、南北の尾根に幅10m、深さ2mの堀切りを作っている。城の麓に通じるからめ手道は、主郭の東から張り出した尾根づたいに開かれており、この尾根道にも無数の段差が築かれている。

城館の歴史 本丸の南500mには、やはり川口俊甫の築城した西谷雀ヶ城があり、尾根づたいに通じ合っている。川口俊甫は總領山ノ内俊清の五男で、父と共に川口邑(金山町)に移住し、200貫文の地を領し、三代俊満の頃には支族中最強を誇り、宮崎右近、中井山城など五人の重臣に、それぞれ屈強な城館を構築して与えていたといわれる。(角田 伊一)



— 198 —

46. 中山城

所在地 大沼郡金山町大字大塩字要害

築城者 山ノ内俊明

時期 南北朝期

遺構 本丸、根小屋、帯郭、土塁、空堀、大手道跡等

概要 大塩中山城は、横田山^{おほたさん}ノ内氏固城六ヶ所の一つで、天正18年(1590)伊達氏との合戦の際山ノ内氏勝篠城の地として有名なところ。城は横田集落の西北方約1.5kmの大塩集落にあり、通称根小屋と呼ぶ標高565mの要害山の山頂に築かれた複郭式の山城である。要害山は西は滝沢川、北は支流の新町沢、東は只見川支流の関ノ入沢のそれぞれ深い渓谷に三方を囲まれた独立峰で、そのうえ南は只見川の大河が外堀の役目となる天然の大要害であるが、大塩段丘原と山麓の境目には、幅3~5m、深さ4~5mの空堀をめぐらして内堀としている。この内堀は寛文年間に大沼郡代官藤右衛門が、大塩堀開削に際して利用している。

山頂へは要害山の東端にからめ手道、西端に大手道があり、いづれも深い空堀を土橋で渡る。からめ手道は本丸までほぼ垂直に登る険道であるが、大手道は要害山をほぼ半周する形のなだらかな道である。山の中腹に豊かな水の手と、広大な耕作地の残る根小屋と呼ぶ一区がある。本丸の直下に位置し、ここが中山城の根小屋跡であることはほぼ確実である。ここから本丸までは九々折れの悪路である。本丸の広さは各種文献にも東西1町12間、南北1町21間とあり、山ノ内氏領内の城郭中最大の規模を誇る。主郭は山頂部を削平し、二層の帯郭と空堀を周囲にめぐらし、山頂より派生する各尾根筋には、深い堀切りと無数の段切り遺構が認められ、守備堅固な山城の形態が完全な形で残存している。

城館の歴史 天正年中、山ノ内氏はこの城に菅家太郎左衛門善高を城代として住まわせたが、伊達

氏との合戦で松坂峠で討死したため、氏勝は猪子横田左馬助をここに配し、天正18年、只見水窪城を脱して新国利左衛門、横田帶刀、滝沢河内等と共にこの城に拠り、石田三成、上杉景勝等の援軍を待ちながら籠城したという。中山城は籠城向きの機能を備えた山城と伝えるであろう。(角田 伊一)

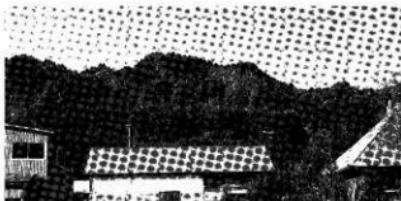
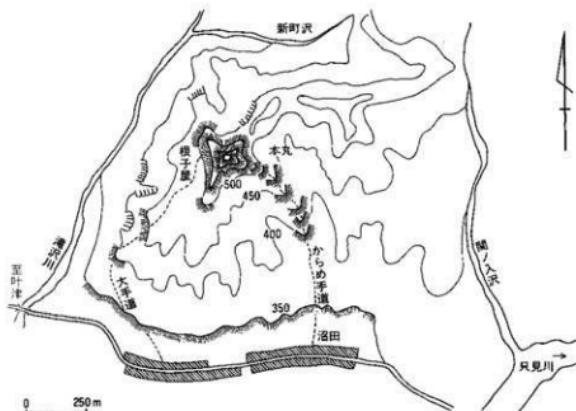


写真100 中山城遠景



第313図 中山城位置図



第314図 中山城略測図

まるやまじょう 47. 丸山城

所在地 大沼郡金山町大字沼沢字萱峰

築城者 山ノ内俊安

時 期 戦国期 享禄4年

遺 構 本丸、二ノ丸、腰郭、帯郭、堀切、堅堀、段切、大手道等

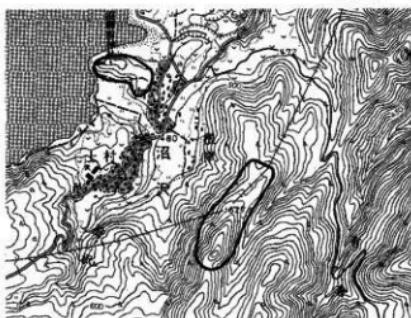
概 要 沼沢丸山城は、横田山ノ内氏の支族沼沢氏の持城として構築された複郭式の山城。城は沼沢カルデラ湖の外輪山、通称館山(690m)と呼ぶ村東に連なる平滑な尾根の山城を繩張りとする大規模な城郭である。

本丸は、尾根の最高峰に築かれ、「会津鑑」による規模は東西32間、南北19間とある。現況では尾根の頂上に削平された約20m×10mほどの平地と、その下位には10m×3mほどの腰郭跡地が主郭部と考えられ、主郭部の南端と北端に幅4m、深さ2~3mほどの堀切と堅堀が見られる。本丸につづく鞍部状の尾根には、豊かな水ノ手が随所に望まれ、また土壘や多数の曲輪が散在していて、この付近が家臣団の山小屋幕営地ではなかろうかと考えられている。この鞍部につづく尾根上が二ノ丸跡で、文献では東西12間、南北22間の広さがあるという。さらにこの下方に文献には記されてないが、三ノ丸跡とみられる50m×10mほどの細長い曲輪がある。いずれも2層から3層に及ぶ細長い帯部を併設し、地形に応じて堀切や堅堀によって防御を堅固なものとしている。大手道は山麓の通称根岸と呼ぶ一区からつづいており、文献には「七曲りの細道麓より城まで十一丁の登り」とある。居館は集落中央部の堀ノ内と称する小字内の山にあり、東西50間、南北38間の方形館跡地からは沼沢湖を一望できる。



写真101 丸山城全景

城館の歴史 沼沢氏は横田山ノ内氏の總領山ノ内俊光より分家して沼沢に住み、初代山ノ内俊安より五代沼沢重通まで丸山城主として150貫文の地を領した。俊安の子俊興より沼沢氏を名乗り代々出雲守を襲名した。早くから芦名氏と臣従関係に入り、天正6年(1578)、西方村の支城鴨ヶ城主山ノ内重勝とはかって、野沢村地頭大槻太郎左衛門を討ち高名をはせ、天正13年(1585)には松本備中も討ち取っている。磨上原の敗戦後、沼沢出雲守は芦名義広に従って常陸に逃れたが、のち会津に戻り子孫は保科氏に仕え重役に就いている。(角田伊一)



第315図 丸山城位置図



第316図 丸山城略測図

48. 宮崎館

みやざきたて
所在地 大沼郡金山町大字中川字宮崎

築城者 山ノ内右近

時期 戦国期 天文13年頃

遺構 主郭、腰郭、帯郭、土塁、堀底道、虎口、空堀等

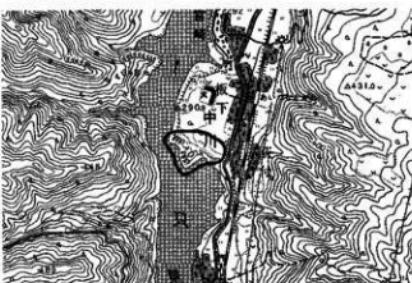
概要 宮崎館は、只見川との比高約20mを測る宮崎河岸段丘原の西端全域を繩張りとする単郭式の丘城で、堀跡と考えられる低湿地を水田化した以外は、ほぼ原形をとどめている。

宮崎館は只見川南岸に突出したデルタ状の残丘原に築かれているので、外周のほぼ半分は只見川を水堀りとして利用し、しかも垂直に切り立った侵蝕崖が西北面をガードするという天然の要害地に立地している。

主郭の南面は着船場跡とも考えられ、主郭からゆるやかに張り出した斜面には、二層から成る帯郭がめぐらされ、東の土塁との接点に小規模な腰郭を構えて、ここから入江状の川岸に通じる径路がある。主郭は東西約50m、南北約40mの半円形状の平坦地で、東端に高さ3m、幅9m、長さ40mの巨大な土塁を築く。土塁の外側は空堀で、堀底道を通し、その南端に石壁遺構の虎口が残っている。また北端は只見川畔に通じていて、からめ手か着船場と考えられている。館と宮崎河岸段丘原との境界付近には堀跡遺構が残り、現在は湿

田に利用されているが、これは埋め立てても、なお段丘原よりは比高2~3mほど低くなっている。『会津古里記』等による館の規模は東西35間、南北42間とあり、現状とほぼ一致している。

城館の歴史 宮崎集落は早くから開けた水陸両路要衝の地で、村内にある大悲堂は建治2年(1276)銘の、県重木造観音坐像を蔵しており、この本願主は宮崎館主と推測されている。築城者山ノ内右近は、川口玉繩城主川口俊甫の女婿で、初め西谷村雀ヶ城に入ったが、6年後に宮崎村に移ったと伝えている。宮崎館は只見川の制水権を掌握し、主城玉繩城と雀ヶ城は陸路を掌握して、川口郷一帯の守備を堅固なものとした。天正18年(1590)の山ノ内氏と伊達氏の抗争では、宮崎山ノ内氏は川口山ノ内氏と共に伊達氏について総領家に反旗をひらかれていた。(角田伊一)



第317図 宮崎館位置図



第318図 宮崎館略測図



写真102 宮崎館全景



写真103 経塚山（狼火台）

しげやまじょう 49. 鳴山城(県史跡)

所在地 南会津郡田島町大字田島字愛宕山、字根小屋(以上県史跡指定区域)外に丸山、上丸山、
中台山、上台山、欠落し、姥平山、
かけめら

築城者 長沼淡路守義秀(推定)

時期 南北朝末~室町期

遺構 土壘、空堀、郭、腰(帶)廓、虎口、石垣、

枡形、井戸、礎石、庭園、お花畠、物見台、

概要 鳴山城跡は、田島町役場の西方約300mに聳える愛宕山(標高749m)の金山、および北側山麓より町側に向う緩斜面一帯に屋敷跡が認められている。

愛宕山の主峯頂上には愛宕神社が祀られ、その後側(南方)には安山岩質露岩の急崖が約300m続き、その幹脈より西側に3列の支脈がのびて、各支脈(丸山、上の台山、中の台山)に堀切、削平地が数多く作られている。この上の台山と下の台山の間にある姥平^{おひなばる}にも調査により城、若しくは館跡が認められるが、それは鎌倉時代後期まで遡る古い痕跡で鳴山城と直接の関係は不明である。

頂上より北側急斜面には段状の削平地が多く、主水くるわ、御茶屋場などの地名が残っている。削平郭の腰には古い数段の石垣が残っている。頂上より麓までは、詰の城の部分にあたり、鳴山城の築城初期の痕跡とみられ、南北朝末期より応永年間にかけて作られたものと推定されている。

詰の城の下方より麓には、地名として上千臺、下千臺、お花畠、御平庭、漱清水、大門、空堀、搦手の鞍部には土門などが残っている。大門には巨石の石垣があり、城の東西両端にのびる山岫には本^{もと}~500mにわたる土壘と空堀がみられる。これ等は戦国時代の領主長沼氏と、長沼氏の後に入った蒲生、上杉の両時代に改修されたものと推定される。

大門の北側緩斜面には根小屋の地名が残り、中央の愛宕神社参道の両側は数段に削平整地された待屋敷である。これは昭和52年の発掘調査によって建物柱穴、礎石、陶器片、鐵器片、石器が出土し確認されている。上千臺と下千臺は、ボーリングによる礎石確認を行なった(一部発掘)。

城館の歴史 鳴山城に関する最も古い資料は『塔寺

八幡宮長帳』の長禄2年(実は3年、1459)の記事である。そこには「南山しげ山の城」という表記が見える。

中越中なる者が策謀によって鳴山城に白河勢を導き入れて長沼氏を追い出し、次いで蘆名氏の力で取り返し、長沼氏の手に戻ったという事変(長禄の変、仮称)である。

山麓部の整備を行ったのは、その後蘆名氏と度々戦った初代盛秀、美濃の代で、天正18年(1590)長沼氏の田島退去の後は、蒲生氏の城代小倉作左衛門、上杉氏の城代大國実頼等の手によって大門周辺、土壘の改造が行なわれた。この頃の名称は「南山城」と記録されている。

再蒲生時代にも城代として蒲生主計、蒲生内記が在城している。寛永4年(1627)会津支配が加藤嘉明に移ったのを機に鳴山城は徳川幕府の一国一城令により廃城となる。加藤時代の奉行代官所は城よりさらに町に近い場所に作られたため、城跡は荒廃していった。(室井康弘)

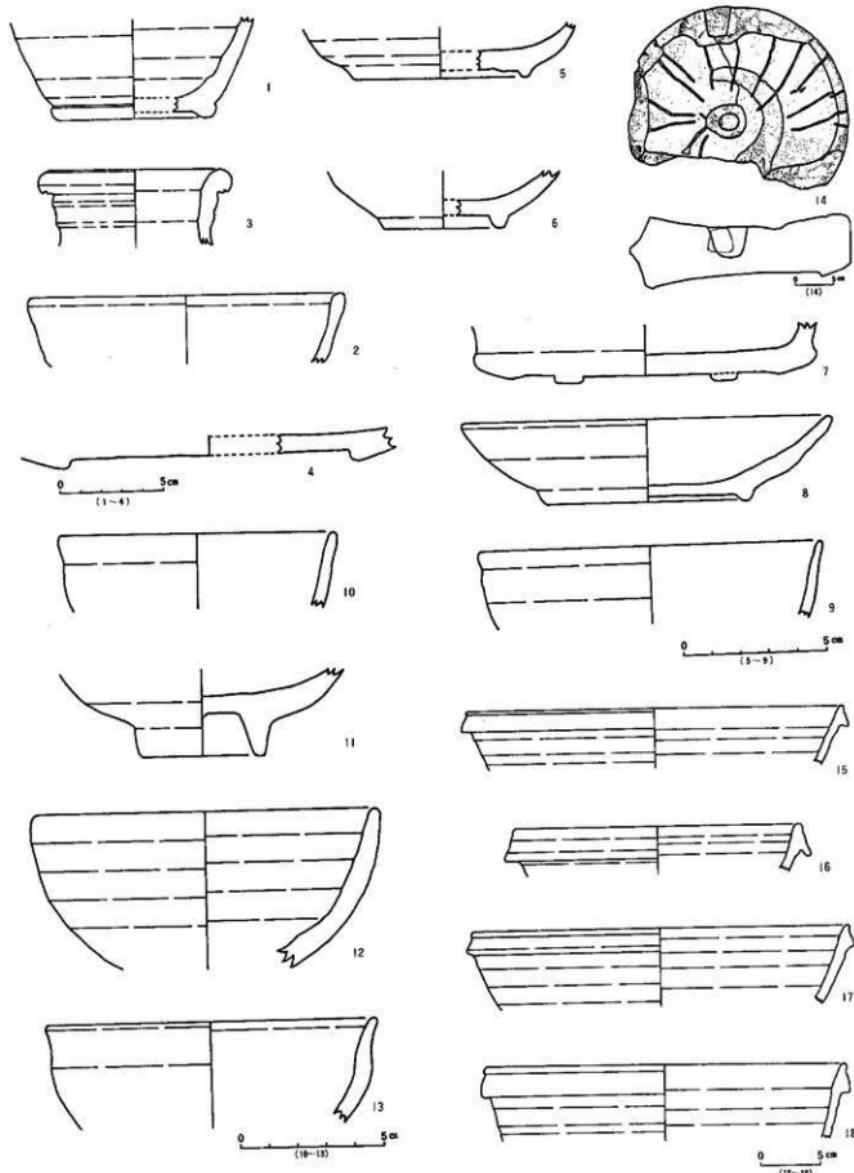


第319図 鳴山城位置図



第320図 鳴山城実測図

「史跡 鳴山城一保存管理事業策定書」(鳴山城保存管理事業計画策定委員会、田島町教育委員会)より転載



第321図 鶴山城出土遺物

1 斧轄器(瓶) 2 反対土器(香炉) 3 珠詞系陶器(壺)

4~13 茶戸・美濃系陶器 4 大皿 5~8 三 6~9~11 瓢 7 扇付鉢 12~13 天目茶碗

14 石臼 15~18 近き以後の陶器(櫛目)

*前上行太(茶器等)下(石臼等)に2号

たべはらのなで 50. 田部原館

所在地 南会津郡田島町大字田島^{たじま}田部原

築城者 不詳

時期 鎌倉期後期～室町期初期

遺構 方形の郭、土塁(東方・南方)、空堀(東方・南方)、虎口(南側)

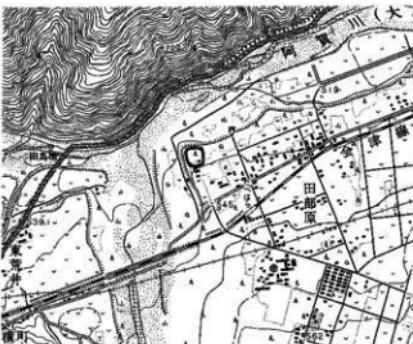
概要 田部原館は鳴山城の東方約2km、会津線田島高校前駅(旧国鉄田部原駅)の北方約200mに位置する。東西に流れる阿賀川(大川)本流に支流水無川が南北に流れ合流する地点で、高さ約5mの段丘縁辺にあり、方形の北及西側は両河川を天然の堀に利用している。東西65m、南北75～85m、高さ平均2.5mの土塁が東及び南側にあり、河に臨む側には土塁はない、堀は土塁の外側にあり、上幅10～11mの空堀で、南側中央の土塁が切れて虎口をなし、堀に高さ2mの土盛りが外部との通路をなしている。

曲輪内は雜木林に覆われ、大よそ平らであるが、西側が緩く高く盛り上り、中央よりや西寄りに深さ1～3m、幅5.5m～4m、長さ66mの細長い落ち込みが南北軸にそって残っている。

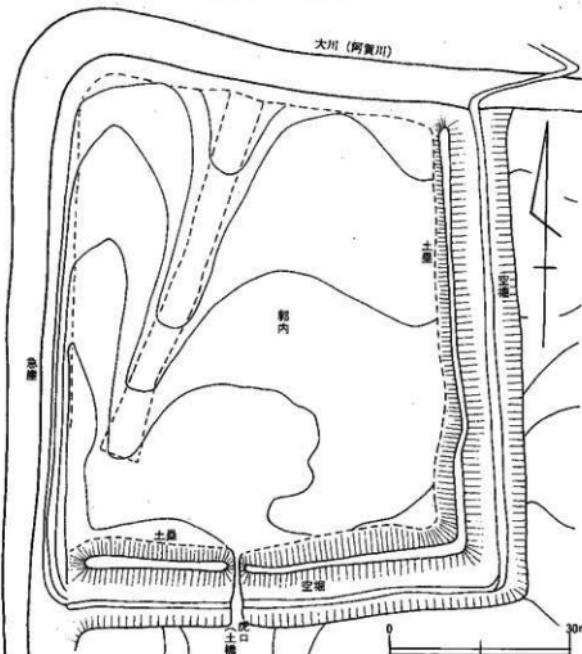
田部原段丘上は昭和初期までは不毛の原野で矮性樹木の林が続き、崖下に清水が多く、原を隔てて東に長野村、南に田部村がある。

城館の歴史 田部原館を記載した資料は少なく、「新編会津風土記」「会津鑑」等にもない。「田島村古絵図」(渡部弥氏蔵・近世初期)に記されているのが最も古いものである。ただこの地方の国人領主長沼氏の文書(長沼系図「田島町史」第5巻所収)に、鳴山城に移る以前は古町に居り、さらにその前は田部に居たとあるので、この館は長沼氏が築いたのではないかと考えら

れる。館主が鳴山城に移ってからも、対薦名、対白河結城氏に備える警備前線として利用されたことは推定に難くない。(室井康弘)



第322図 田部原館位置図



第323図 田部原館実測図

「田島町史」第1巻(田島町)による

51. 中妻館(栗林館)

所在地 南会津郡下郷町大字中妻字栗林

築城者 不詳

時期 鎌倉期末～南北朝期

遺構 曲輪、空堀、帯曲輪

概要 中妻館は、国道121号線に沿って大川の対岸にあって、国指定重要文化財中ノ沢観音堂の北約500mの河岸段丘上にある。『新編会津風土記』によると東西50間、南北18間の平城である。

現在民間耕作地になっているが、3つの曲輪からなり、城郭全城は南北130m(I～II曲輪)、東西210m(III曲輪を含む)の三角形を示している。

本丸にあたるIの曲輪は、在地支配の機能を備えた館主の生活の場とみられ、南側には15～20mの空堀を隔ててIIの曲輪を形成し、北は大川の絶壁をなしている。

IIの曲輪は東西に細長く、最大幅東西170m×南北10～15mで、防禦地帯として形成されている。IIの曲輪の北側には、北出丸の曲輪があり、南北25m×東西13mの卵形で、東には15～18mの空堀がめぐらされている。

Iの曲輪と北の曲輪の中間は空堀の削平地が3段認められ、腰曲輪の構成になっている。

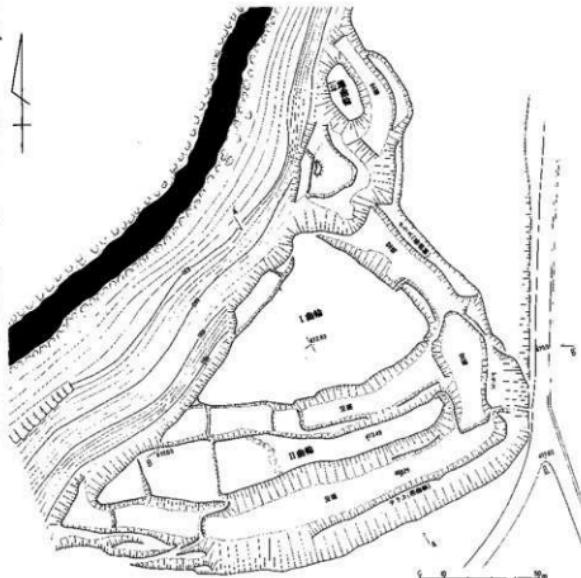
城館の歴史 中妻館は築城年は明かでないが、『新編会津風土記』によると、いつの頃か中妻源太照元の居城であったと記されて、館の形態とこの地の南北朝期建立の中ノ沢観音堂との信仰的つながりからも長沼氏入部前の館であったとする可能性もなくはない。(玉川寿一)



第324図 中妻館位置図



写真104 中妻館 I の曲輪と空堀



第325図 中妻館実測図

「下郷町文化財調査報告書」第3集(下郷町教育委員会)より転載

52. 九々布城(日向城)

所在地 南会津郡下郷町大字中妻字芦見

築城者 不詳

時期 不明

遺構 曲輪、空堀、土塁(横矢掛り)、物見台、枡形虎口

概要 九々布城は別名日向城と呼び、中妻村の中央より南に小松川、大松川、杉ノ沢、音金を経て、田島方面に通じる中世期の街道の峠にある山城である。

山頂部Ⅰの曲輪は東西50m、南北36mのほぼ方形で、物見台があり、五つの平場が段状に形成され、外周は横矢掛りの土塁が盛られ、側面攻撃を可能にし、枡形虎口がつけられている。

IIの曲輪は、南東の尾根を削平し、長さ43mに幅6mの細長い物見台状の構築になっている。

IIIの曲輪は、谷底部を削平して縦32m横15mの擂鉢状に構築され、倉庫の役目をはたしていたと思われる。

西の帶曲輪は5ヶ所より成り、東側よりの入城を監視した拠点とみられ、峨々たる岩肌を楯とする観音川

の段上にあって、東と北に出城を設けてある。戦国期の戦闘防禦施設を備える、下郷町唯一の大規模な出城の性格をもつ山城である。

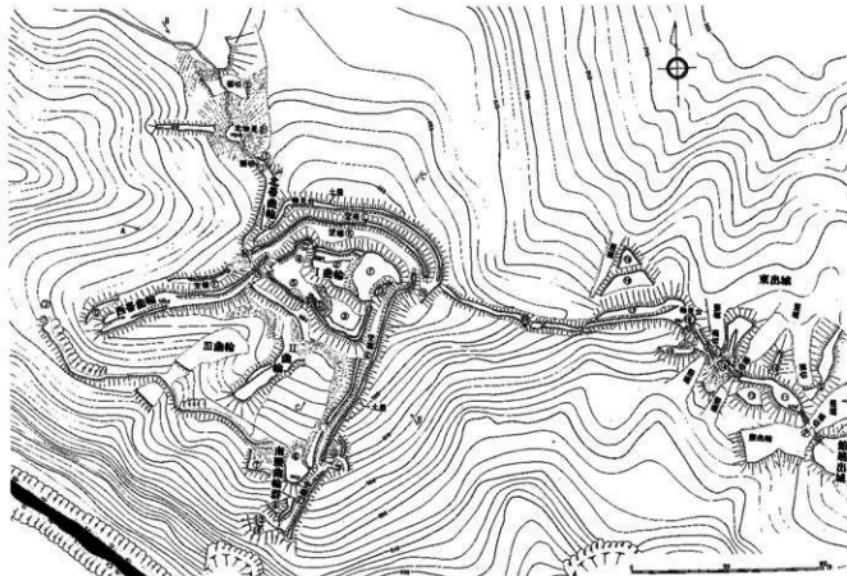
城館の歴史 九々布城は、南北朝時代の諸種の史料にもあらわれ、当中妻地区の最も古い地名の中心集落であった。

今日でも、城跡は「館の越し」と呼ばれ、この郷の地頭日向五郎明光の居城として、天城山日向城とも呼称されている。

中妻村玉川家には、応永2年(1395)の日向城を仰ぐ古絵図の条幅軸が所有されている。(玉川寿一)



第326図 九々布城位置図



第327図 九々布城実測図

下郷町文化財調査報告書 第3集(下郷町教育委員会)より転載

53. 塩生館

所在地 南会津郡下郷町大字塩生字前原

築城者 不詳

時期 戦国期 天正17年頃

遺構 土壘、水堀、堀切、櫓台、曲輪、西出城

概要 塩生館は下郷町役場より東南、約300mの大河川河岸段丘にあって、「新編会津風土記」によると東西40間×南北1町1間の規模をもつ平城である。

この館で特筆すべきことは、堀を人工的に穿ち、沢水を導入し構築しこの字型に土壘を築いてあることである。館の中心であるIの曲輪は、東側及び南側の堀を含めると100~120mの方形で、条里の一坪にはほぼ一致する。

曲輪どりは、段丘つづきの南側に本丸にあたるIの曲輪、連郭式にII曲輪、III曲輪をつくる。東側には土壘を築き、東南に櫓台(45m)を築いた跡が残っている。I~IIIの曲輪の間は10m余の堀切があるが、近代になって埋め立てられた痕跡が見られる。

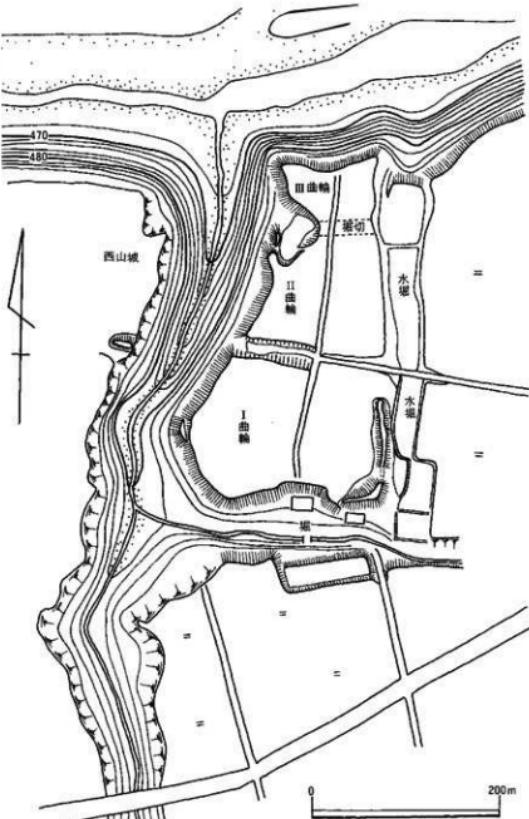
城館の歴史 塩生館は、築城年は明かでないが、「新編会津風土記」によると、天正年間平田五郎忠照の在地支配の居城であったと記されている。

しかし、館の形態には古い手法が使われている。下郷地区の狼煙制はこの塩生館と九ヶ布城に集中されしかも九ヶ布城の築城は明かに塩生館と向き合っている。

『新編会津風土記』に掲げられる平田氏は、長沼氏支配の後に入城したものと思われる。(玉川寿一)



第328図 塩生館位置図



第329図 塩生館実測図

下郷町文化財調査報告書、第3集(下郷町教育委員会)による

54. 久川城(県史跡)

所在地 南会津郡伊南村大字青柳字小山(古城山)大字小塙字堂平

築城者 河原田盛次

時期 戦国期

遺構 土壘、空堀、曲輪、虎口、石垣、枡形、礎石、横矢掛り

概要 伊南川の左岸大字青柳と大字小塙(通称こしゅう)の間に聳える小山(標高632m、比高76m)の全山、および南方の集落小塙との間の畠地を区画した侍屋敷とからなる雄大な戦国城郭である。

城郭の遺構はおよそ南北500m、東西150~170m 小丸山上の城跡と、南側麓の大手枡形虎口と、これに続く侍屋敷遺構と推定される河岸段丘上の部分とからなる。

小丸山頂上は段状に削平して5つの郭が南北に並び、(南側よりV、IV、II、I、III、とする)その一つ一つが土壘と空堀に囲まれている。本丸に当たるのはI曲輪で100×100mのほぼ方形をなし、西南隅に一段高く壇を築いて稻荷神社を祀っている。東側に喰いちがいの虎口があり、南のII曲輪、北隣のIII曲輪に続いている。III曲輪は二の丸に当たり、形状が複雑で、一部に礎石群もあり、北東の虎口より小丸山の東斜面を下ることができる。これを九折坂、七曲坂ともいう。麓は搦手の門をなしていたので、村人はここが追手門であると思っていた。

Iの曲輪の南隣はIIの曲輪で、さらにその南側に最大の空堀(幅21m、深さ5~8m)を隔ててIVの曲輪につながる。IIとIVの曲輪は城郭として未完成の部分を残しているといわれている。IVに続くVの曲輪は最も小さく、南側土壘の切れ目が虎口をなし、古い門の存在が推定されるが、さらに南側の山の斜面を屈曲する七曲坂を下ると堂々たる枡形の追手門に出る。この道幅は3.5m、枡形虎口は6.6m×7.7mを測り、石積もみられる。

この門の南側一帯は(字名堂平)、久川城と共に移住した侍屋敷跡と推定されている。この集落遺構の調査は未確認であり、今後の調査を期待されている。

城館の歴史 『新編会津風土記』には、天正17年に伊達政宗と董名義広の合戦が始まった頃に、伊南郷の

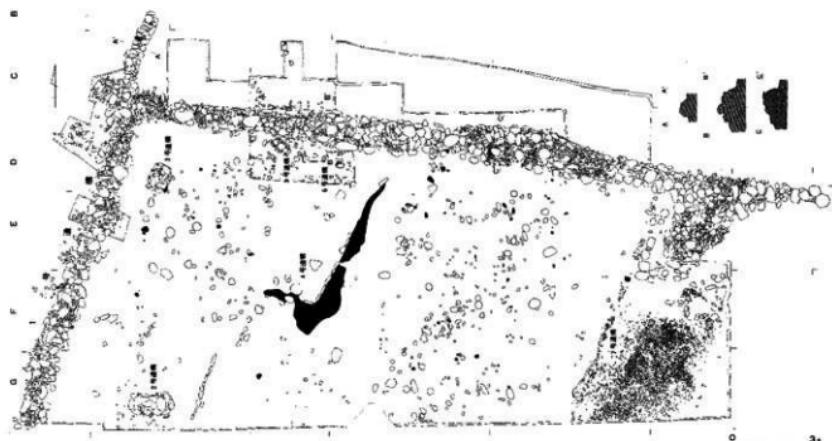


第330図 久川城位置図

代々の領主である河原田盛次が、伊達勢の攻略に備えて築いたと記している。このことは後世まで信じられており、『巡見使案内帳』などにもそのように記してある。

河原田氏は、それまでは、現在の古町に残る西館、東館を居城とし、駒寄城を詰の城としてきた。しかし、駒寄城の北東南は山続きで田島、立岩側からの攻撃が容易なので、伊南川の西岸に城地を見立てたものと思われる。築城と同時に、新しい城の南側に町割りをして侍はもちろん城の周囲に生活を営む百姓町人達までの、居住地を定めたようである。したがって、城の南側は新町で、東館、西館を囲む旧町は「古町」と呼ばれた。

久川城は天正17年(1589)から18年にかけての伊達側の攻撃を防ぎ、守り切る事ができたが、秀吉の奥羽仕置により政宗が会津を離れた際、河原田氏は旧地を与えられず、一部は董名氏を頼って秋田へ行くが、大部分のものは四散、若しくは百姓となって土着した。その後、蒲生氏郷の支配の時には蒲生郷可左文が入り、荒廃した古町に新しく屋敷割をして復興させた。上杉時代には清野助次郎長範が城代となり伊南、伊北郷1万1千石を支配した。慶長6年の、再蒲生のときには蒲生彦太夫が城代をつとめた。また蒲生忠右衛門が慶長15年(1610)頃まで居城代、以後廃城になったとも伝える。(山内政)



第331図 久川城堂平地区発掘調査平面図

「伊南村性文化財発掘調査報告書」第1集(伊南村教育委員会)より転載。



第332図 久川城実測図

「伊南村性文化財発掘調査報告書」第1集(伊南村教育委員会)より転載。

55. 駒寄城

所在地 南会津郡伊南村大字古町字

築城者 河原田盛光

時期 鎌倉期 建久元年

遺構 土塁、空堀、曲輪

概要 駒寄城は、伊南中学校の南東、校庭の裏側に位置する。城跡の現状は、かつての曲輪の所が一時水田とされたが、空堀と土塁及び削平地を確認することはできる。

駒寄城の大手口は土塁状の虎口となって土塁の先端には一部に石積の跡を確認できる。大手を登った所にかつての水田、現在は雜木及び杉木があるが、ここが曲輪と推定される。この他にも曲輪と思われる削平地は二つほど確認できる。その内の一つは、東西200m南北100mほどの広大なものである。現在は貯水地跡(水田を耕作したおりの溜池)になり、又杉が植えられている。城の中腹には駒寄神社(古町地区の八須賀氏が氏子となっている)があり、一段高い所の岩山の上に祀られている。おそらく、当時の物見台ではなかろうかと想像される。この物見台を囲んで、空堀と土塁が確認されるので、そこが本丸の主殿とも想像される。

なお、駒寄城の山頂には、駒寄要害山がある。山頂には堀切と堅堀、そして削平地が確認できる。おそらく、駒寄城の「詰の城」としての役割をもっていたのであろう。

城館の歴史 駒寄城は、建久元年(1190年)源頼朝の奥州征伐に従軍、その軍功により伊南の地を与えられた河原田盛光が築城したと伝えられている。

『新編会津風土記』等には駒寄城の記述は見られない。(山内 政)



第333図 駒寄城位置図

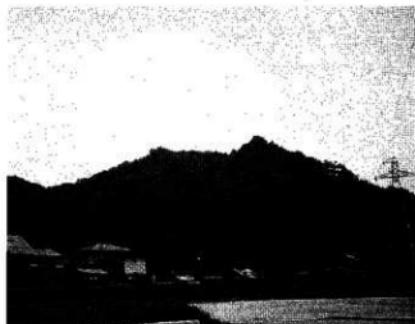
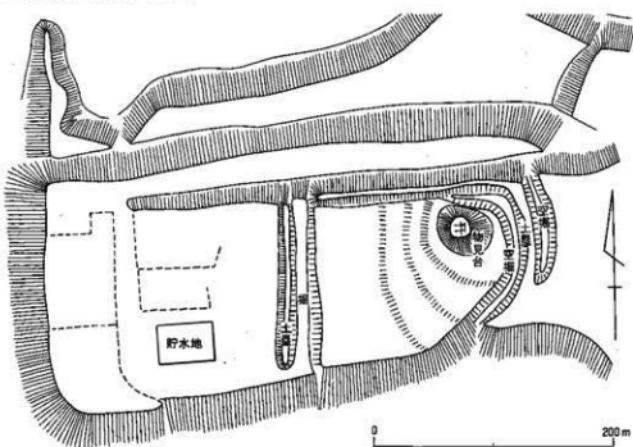


写真105 駒寄城遠景



第334図 駒寄城略測図

「田島町史」第1巻(田島町)による

にしだて
56. 西館

所在地 南会津郡伊南村大字古町字館跡971番地(伊南村保育所)

築城者 河原田盛光と伝えられる。

時期 鎌倉期 建久元年と伝えられる。

遺構 土塁、水堀

概要 西館は、河原田盛光が源頼朝の奥州征伐に従軍、その軍功により伊南の地を与えられ、築いたとされている。

河原田盛光は、伊南の地に駒寄城を築城し、その麓の小滝平に東館と西館を築いた。(現在、伊南村役場東側が東館、役場北側の保育所のところ西館である)。

西館は現在の伊南村保育所の建物を守る形で東西、南北に土塁がある。東西に約60m、南北に約50m、土塁の最高部は5mを測る。一部に残る水堀は幅が10mを測り、当時の館の大きさを物語っている。

城館の歴史 建久元年(1190年)、源頼朝の奥州征伐に従軍、その軍功により伊南の地を与えられた初代河原田盛光は、駒寄城を築城し、これを「詰の城」として平場の小滝平には居館としての、東館、西館を築いた。『新編会津風土記』には、次の記述が見られる。「館跡

三、一つは三十間四方西館と云い、一は三十六間四方東館と云い、共に村西二町計にあり、土居堀の形存す、河原田盛次住せり、今傍の田間に横町、石原町、北小路等の字あり、一は村東一町にあり、東西四十五間、南北三十八間小沼柵と云う」

西館の主の盛光は二女の聲に結城七郎朝光の三男秀光をむかえ、三ツ巴を定紋とし、子供は伊南殿と称されていたが、11代河原田盛次で終わってしまう。又、東館の主は、二ツ巴を定紋とし、2代

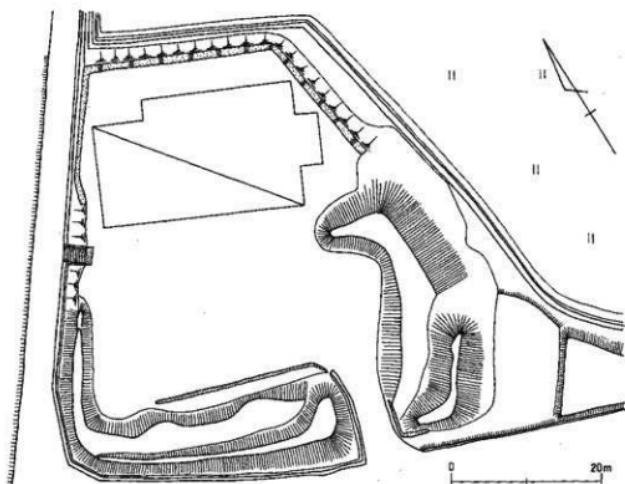
宮内少輔朝次より11代盛勝まで続く(『伊南近代百年史より』)。(山内政)



写真106 西館土塁



第335図 西館位置図



第336図 西館実測図

伊南村教育委員会による

かわらざきじょう いすみたじょう
57. 河原崎城(泉田城) ↲ 和泉田

所在地 南会津郡南郷村大字泉田字和田沢

築城者 五十嵐和泉某(河原田盛次の家臣)

時期 戦国期

遺構 曲輪、堀切、土塁

概要 河原崎城は伊南川流域の中流で比較的耕地面積の広い和泉田地区にある。河原崎城は伊南川に臨み、対岸は只見町梁取地区、麓は和泉田の集落がある。集落のすぐ後の辰巳山の尾根の突端にかけて遺構が現存する。

尾根筋を土塁で防ぎ、尾根突端の山頂部(652m)にⅠ～Ⅲの曲輪が認められる。曲輪の回りを帯郭(犬走り)が走り山頂部を取りまいている。

突端の山頂部の尾根筋から頂上の辰巳山(1150m)の尾根筋には、尾根を切る形で堀切(空堀)が見られる。最大規模の堀幅は上幅が約12m、底部が約2m、深さ6mを測る。その他大小を含めて全部で9つの堀切が認められる。それら堀切のどれもが尾根筋を切り、両側は断崖絶壁となっている。正に天險の要害である。

城館の歴史 河原崎城は築城年代は明らかではないが、「新編会津風土記」に次のような記述が見られる。「村の未申の方四町にあり、河原崎館と云う。東西一町三十九間南北四十八間、河原田盛次が郎等五十嵐和泉某と云者住せし」と云、天正十八年(おそらく十七年の記述違い)長沼秀秀伊達氏の臣屋代勘解由兵衛梅津藤兵衛と共に此館に攻来る。この記述から考えて、天正17年頃には築城されていたと考えられる。

河原田盛次の名前があるところから、伊南久川城の山内氏との境の城の役目をもった城と位置づけられるので

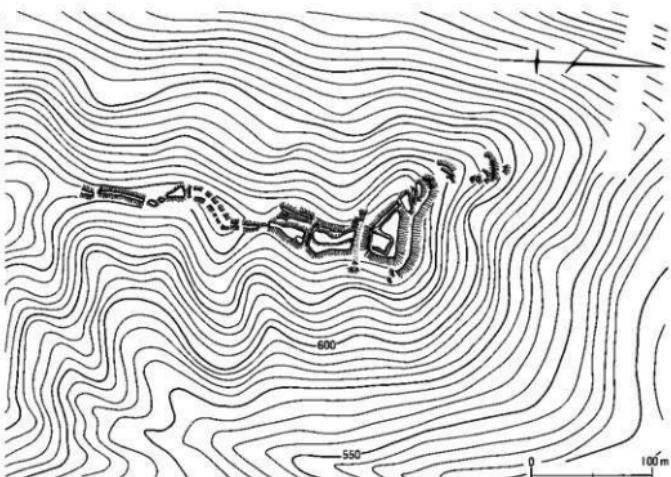
はなかろうか。(山内 政)



第337図 河原崎城位置図



写真107 河原崎城遠景



第338図 河原崎城略測図

「庄内村史」第1巻(米沢村)による

58. 梁取城

所在地 南会津郡只見町大字梁取字上森戸

築城者 不詳

時期 戦国期

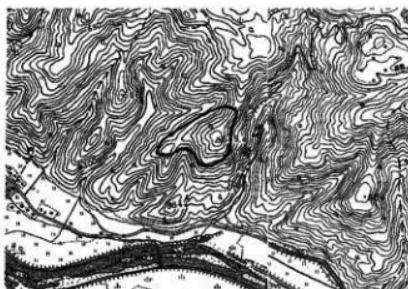
遺構 曲輪、土塁、空堀、矢倉台、横矢掛、出丸、堀切

概要 梁取城は、只見町の東端、伊南川中流の標高546mの半独立丘陵上に占地する戦国期の山城である。丘陵頂上を本丸に相当するI曲輪とし、南西へII・III曲輪を配する連郭式山城で、北東に伸びる尾根を堀切で区切り、その先に出丸を築いている。北方に高山が連なるため搦手が弱点となっており、西方500mを隔てて梁取要害山城を築き、臨戦時に「伝えの城」として機能した。伊南川の対岸は河原田氏の支配で泉田城があり、山内氏領の最先端に位置して「境目の城」として戦略上重要な拠点であった。

城館の歴史 鎌倉時代のはじめ、山内氏は金山谷・伊北郷を拝領して以来、中世末戦国期までその支配が続いた。天正17年6月、会津蘆名氏が伊達氏と摺上原で戦って敗れ、会津は伊達氏の支配するところとなつた。しかし小国人領主とは云え、会津四家の1つに数えられる誇りを持つ山内刑部大輔氏勝は伊達の軍門に降りることを潔としてせ

ず抵抗するが、同年8月5日遂に本城横田中丸城が陥落し只見水久保城へ退却した。伊達勢は、山内氏と意を通ずる伊南河原田氏をも同時に攻略すべく、布沢城を陥落させ、河原田氏の軍略上の拠点である泉田城攻撃を謀るが、その要衝の地に梁取城があった。『伊達治家記録』によると8月25日「梁取ヲ攻降シ、其ヨリ直ニ泉田ヘ働き、即時ニ攻崩シ、城中ノ

者共残り無ク撫斬セシム」とあり、伊達勢の激烈な攻撃による、なで斬りという凄惨な戦いにより、伊南伊北における戦闘はほぼ結着をみた。(渡部力夫)



第339図 梁取城位置図

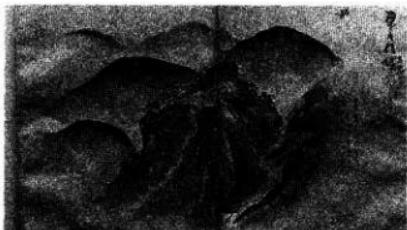
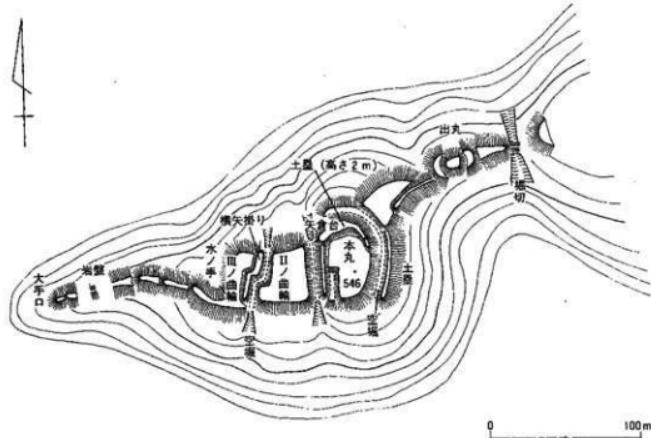


写真108 梁取城古絵図 (印西書より)



第340図 梁取城略測図

『田島町史』巻1 第(田島町)による

59. 布沢城(城山)

所在地 只見町大字布沢字毘沙沢

築城者 布沢城主布沢(山ノ内)上野介或いは毘沙沢の梁取弾正某の先祖のいざれかと思われるが不詳

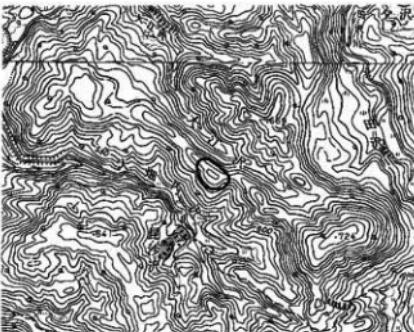
時期 戦国期

遺構 腰曲輪、空堀、堀切等

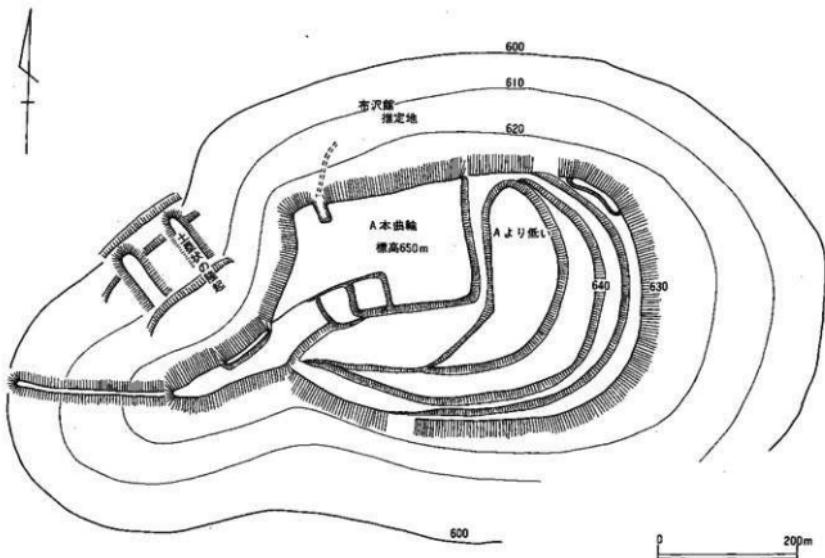
概要 布沢集落の東南、布沢川支流大畑内沢上流に位置する。城山山頂(標高650m)60m×40mの範囲に本郭を取り囲むように東側から南側にかけて崖面を削平して4段の帶曲輪がある。曲輪の周辺は北西を除き急崖である。北方300mの大江沢上流は、城の水ノ手として利用されたという。また毘沙沢集落の裏山には、梁取弾正某の墓と伝えられる自然石がある。城山南西の鷹埋山(標高797m)は、城主が鷹を埋めた所と言伝えられ、毘沙沢から野々沢を経て小林、梁取に至る重要なルートであったといわれる。なお『伊北軍記』にみえる布沢館はこれとは別で、布沢と毘沙沢の中間地点の城山北麓に布沢川に面して掘切や櫓状の遺構が確認

できるので、その地点を指すものと思われる。

城館の歴史 布沢城は、築城年代は不詳であるが、戦国期に山内氏によって築かれた山城であり、小林城や梁取城にとって防禦上重要な役割を果たしているものと思われる。しかし、『伊北軍記』によれば天正17年(1589)伊達勢が横田山内氏攻略の際には、布沢城主山内上野介と毘沙沢の梁取弾正某は伊達勢に属し、梁取・和泉田攻略の拠点となつたという。(樋口弘一)



第341図 布沢城位置図



第342図 布沢城略測図

60. 水久保城

所在地 南会津郡只見町大字只見字後山

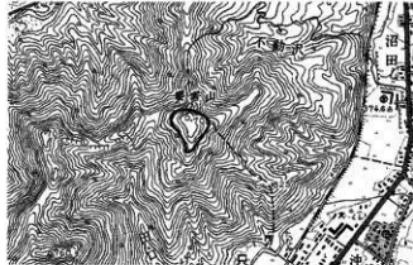
築城者 不詳

時 期 戦国期

遺 構 曲輪、出城、腰曲輪、帯曲輪、土塁、空堀、堀切

概 要 水久保城は、只見町の中心市街地の西にそびえる標高705mの要害山山頂に主郭（工曲輪）をすえ、その下方にII・IIIの曲輪を配し、東・南に出城を持つ戦国期の山城である。本丸に相当する山頂部のI曲輪は、テレビの中継塔が建設されたため、工事用道路の分も含めてかなり破壊されてはいるが、南北500m、東西50mに細長く山頂を削平した広さを持つ。東と北に空堀がめぐり、内部は2条の堀切によって区分される。主郭東下にかなりの広さを持つII・IIIの曲輪がつづき、軍事上の施設を伴なって本丸防禦上の重要な地点をなしている。山麓の現只見高校敷地には在地支配の拠点となる居館が存在したことが字限図より推定出来る。

城館の歴史 会津四家の一つに数えられる山内氏は、横田（現金山町）に中丸城を築き、ここを拠点として金山谷・伊北郷を支配していた。戦国時代末天正17年



第343図 水久保城位置図



写真109 水久保城遠景

(1589) 6月会津蘆名氏は摺上原に伊達氏と戦って敗れ滅亡し、代わって伊達氏が会津を支配することとなつたが、山内氏は越後の上杉氏の支援を受けて伊達氏に抵抗する。8月5日、遂に横田中丸城は陥落し、山内刑部大輔氏勝は只見の水久保城へ退却した。水久保城の背後は越後国であり、同城の北は八十里越、西は六十里越で越後に通じており、山内氏勝は上杉を頼み遂に伊達氏に降伏することなく戦ったが、秀吉の奥羽仕置では山内氏勝は本領を安堵されることなかった。水久保城は戦国山内氏の最後の本拠地であった。(渡部力夫)



第344図 水久保城略測図(西ヶ谷祭奉跡原図)

第3節 浜通り地区の中世城館跡

1. 黒木城

所在地 相馬市黒木字西館、中樋、持添
築城者 黒木大膳亮正光
時期 南北朝期
遺構 本丸、西館、二ノ丸、二重堀(外堀)、内堀、外郭堀、土橋、土塁
概要 中村城から北西へ約2km、国道113号線沿いの黒木街村集落(近世浜街道黒木宿・岩井宿)西側一帯が黒木城である。城跡は小泉川の支流である御門川と水無川(小泉川)が南北から挟む舌状丘陵が段丘化した先端に築かれ、平城に近い平山城である。黒木は阿武隈山地を背に、山麓と小泉川水系平野が接した隘路口にあたり、「朝日長者」の伝承・宿千軒の転訛地名などという「宿千木」があるなど、古くから海道と伊具郡を結ぶ要衝地である。軍事的にも八方睨みの効果的位置に立地している。

城郭は西側を除き比高で10m前後高く、東に御城と呼ぶ本郭(本丸)、西に西館と二ノ丸が南北に並ぶ。本郭直下には内堀を巡らし、主郭を取り巻く外堀は幅30~40mの二重堀である。堀は北の外郭と結ぶ土橋を挟んで筋違いになり、堀底には段差があって一部は湧水で水濠化している。郭と堀の一部は開田・宅地によって失われているが、北側の二重堀と外郭堀は往時の堅固な姿を残し、失われたところも痕跡と微地形から縦張りを読みとることは可能である。外郭堀は水無川の防禦を補強したとみられるが、その東端は街村を越えている。黒木の集落もかつては外郭の一部であろうか。大手虎口は東に「御門」の字地名があることからこの付近を比定しているが、黒木山十王寺の旧参道とほぼ合致していることものがせない。遺構からみれば南北にほぼ対して食い違い土塁の痕跡があり、虎口遺構とも考えられる。

なお、「奥相志」は黒木城について「本丸高さ三丈許・東西五十一間・南北四十五間許、二ノ丸東西二十間許・南北十五間許、西館長さ五十間、広三十間許。西南に三重の堀あり、東北に四重の塹あり。」と記している。

城館の歴史 黒木城は坂上田村麻呂が蝦夷征討の折りに建彈正を置いたことに始まると伝えられるが定かではない。記録上は「奥相志」に「…黒木氏累世の城郭なり…、建武中黒木大膳亮正光ここに住し…」とあり、「相馬岡田文書」(相馬長胤軍忠状)には建武3年(1336)3月「黒木入道一党」等の挙兵を記している。黒木氏の出自については在地土豪説・北畠頼家臣説があり定かでないが、土豪説では築城期は建武以前になる。ともあれ、建武以降黒木氏は黒木城に拠って、南朝方の宇多郡北部の拠点防衛にあたり、「往古強敵之を攻むとも、二年遂に陥る能はず」(奥相志)と堅城をもって北朝に抗している。靈山落城後も結城氏による宇多庄支配の実効は失わず黒木氏との関係も持続している。戦国時代になって相馬氏の麾下に入ったようであるが、16世紀前半に黒木弾正信房は中村城に弟黒木大膳を置いて、ほぼ宇多郡全域を支配した。しかし、伊達天文の乱の折り、伊達晴宗に組した黒木氏は鹿島田中城を攻めて失敗、これに起因して天文12年(1543)相馬頭胤に討たれて滅亡した。200余年にわたり宇多郡を支配してきた中世黒木氏の終焉である。

宇多郡を完全に領有した相馬氏は黒木城を伊達氏に対する境目の城とし、宇多郡北部の将兵を統轄させた。「奥相秘鑑」による黒木従兵は六十騎、歩卒三百余人である。黒木後の城代は青田信濃頭治であったが、伊達氏の触手が伸び、永禄6年(1563)青田一族が謀反。代って相馬三郎胤乗が城代になり、女婿藤田七郎晴親の子黒木中務宗元(中書胤乗)が城代を継いだが、天正



第345図 黒木城位置図

4年(1576)弟と共に謀反して伊達輝宗のもとに走った。続く城代門馬上總介貞経は天正18年(1590)駒ヶ嶺城奪回戦で戦死、この時中村城代相馬隆胤(義胤の弟)も討死した。その後は佐藤丹波信綱が城代になったが、慶長16年(1611)相馬氏の中村城移城開府にともない、この頃に廃城になったようである。(石原敬彦)



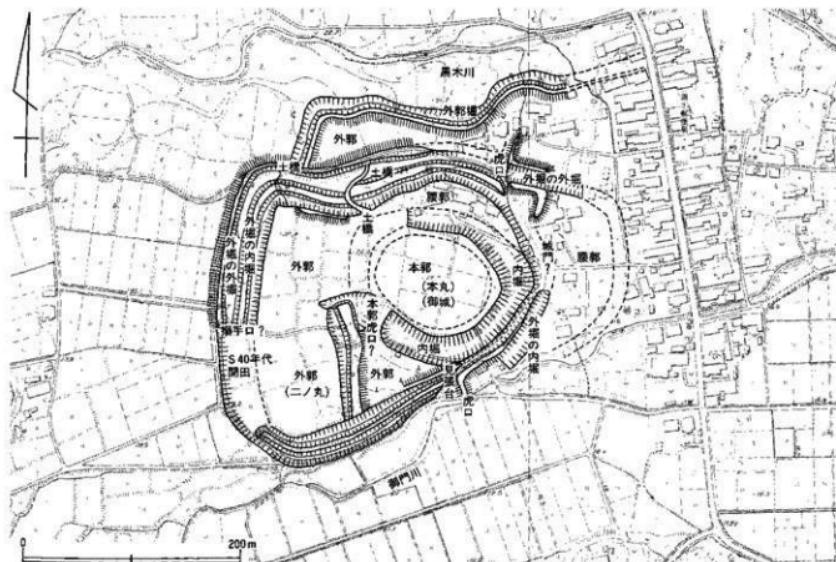
第346図 黒木城周辺(字切図による)



写真110 黒木城航空写真



写真111 黒木城遠景



第347図 黒木城略測図

2. 熊野堂城

所在地 相馬市中野宇堂ノ前、清水

築城者 中村六郎広重(結城宗広代官)

時期 南北朝期

遺構 本郭

概要 中村城から宇多川をへだてて南西へ約1km 宇多川南岸の旧氾濫原上の残丘に位置する。通称熊野山(堂)歡喜寺山と呼ぶこの独立小丘(標高29.1m) 全体が城郭である。ここは南北朝合戦にあたり、城の南約400mに位置した館腰館の詰の城として、熊野社地を戦時の城塞に転用した城館である。現在は切立った10mほどの懸崖に往時の景観を残すのみで、本郭である頂部は住宅団地になり遺構は失われている。南直下はかっての腰郭であり、最近まで残っていた北側直下の水田と湿地帯は堀跡とみられる。現在は平凡な地形であるが、往時は宇多川(当時の北側流路は現在よりも北寄りである)とその乱流した氾濫原を巧みに利用し、優れた防塁力をもつていた地と考えられる。

城館の歴史 『相馬文書』に「白川上野入道家人等、宇多庄熊野堂楯築間…」とあり、南北朝動乱(1336)とともに結城宗広の臣、中村六郎広重等によって、熊野山が軍事機能を備えた城塞に転用されたことを示している。しかしこれより前、鎌倉時代には紀州の人鈴木氏が熊野社を奉じて宇多郡の修驗勢力を統轄し、かつ、領主であったともいわれる。具体性には欠けるが、この時すでに何らかの軍事的・領主的施設が存在していた可能性があり、建武3年の転用はこれを整備拡充して城塞化したものだろう。以後、南北朝方の海道揚手拠点城として南北朝(相馬氏等)と再三干戈を交えた熊野堂合戦の舞台になった。南北朝合一後も結城氏による領主実効は続き、正長元年(1428)相馬・結城氏等は宇多庄をめぐって再び宇多庄合戦を戦っている。しかし、15世紀後半には宇多庄の結城氏勢力は衰退したらしく、かわって結城氏勢力から独立したとみられる黒木氏・中村氏による領主支配が、相馬氏との盟約関係を持ちながら強化されたようである。中村氏はこの頃熊野堂(館腰館)から馬場野に館を移したといわれ、大永年間(1520年代)には中村城(夫館)を築き、移城直前に黒木氏に滅ぼされた。熊野堂の「城」としての恒常的機能

もこの時期に失われたものであろう。その後、永禄6年(1563)に中村城代草野直清らの謀反敗北で中村城を攻めた際、相馬盛胤軍が陣城として使用しているのが記録上の最後である。慶長16年に相馬氏の中村城開府にともない、熊野山には相馬氏の祈願寺である歡喜寺が移り、後世歡喜寺山とも呼ばれるようになった。

(石原敬彦)



第348図 熊野堂城位置図



第349図 熊野堂城略測図

おにごえなて

3. 鬼越館

所在地 相馬市日下石字鬼越迫

築城者 佐藤伊勢好信・宮内為信

時期 戦国期

遺構 本郭・二ノ郭・三ノ郭・空堀・土塁・土橋・虎口

概要 JR日立木駅東方1.5km、立谷・日下石^川上^川の低地に臨む南丘陵の西端部に築かれている。館山からは立谷・日下石・旧磯部浦が一望にながめられ、西側を浜街道(国道六号線)が通り、分岐道は坪田、磯部に通じ、領主支配上は効果的位置にある。

館山は標高52m、比高43mほどで、北山脚はかって日下石が乱流して湿地帯をなしていた。館の南に張り出した枝尾根の左右の沢湿地から流れ出る自然水は、往時は沼田畠となつて山脚を巡っていたようである。

館は東西主軸で三連郭、全長150mほどであるが、東の本郭^外方30mの平場に土塁が残り、北側には幅12mの空堀が巡っている。二ノ郭と三ノ郭の間に虎口があつて、往時の居館形状を残している。三ノ郭は一時公園化されたこともあって変化しているが、連郭全体に空堀と帶郭が巡っていたとみられる。南の張出し尾根に根小屋があつたらしく古井戸が残っている。

城館の歴史 館主佐藤伊勢好信は相馬頭胤・盛胤に仕えた老臣で、天文11年(1542)伊達晴宗と戦った戦功

により磯部・日下石等6カ村を采邑して磯部館に拠つた。この磯部館は海食が甚しいため、4km西方にあたる鬼越館を築き移館した。永禄6年(1563)と考えられる。『奥相茶話記』に「…立谷の館山城を平いて城形になし…」とあり、『相馬氏家譜』には「…伊勢好信子(宮内)磯辺ノ館ヨリ立谷東山館ヲ築テ住居…」とある。宮内為信は永禄9年に伊具郡小斎城代になって小斎に移ったが天正9年(1581)に相馬義胤に背き伊達輝宗に帰属した。相馬はこのために伊具郡を失うことになったが、宮内は伊達氏からその功績が認められて、小斎城主として一千石が与えられ一族に列せられた。この間に伊勢好信は天正7年に88才で歿したと伝えられ、宮内の謀反によってこの館は廃されたらしく、その後の居館利用に関する史料、伝承はみあたらない。

(石原敬彦)



第350図 鬼越館位置図



写真112 鬼越館遠景（西から）

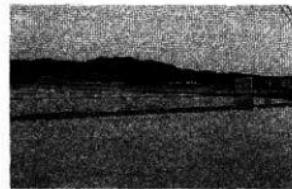
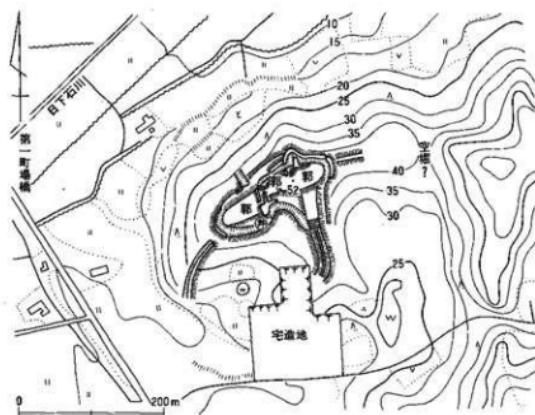


写真113 鬼越館遠景（北から）



第351図 鬼越館略測図

4. 王館(大館)

所在地 相馬市山上字須賀

築城者 伝・某貴人(某皇子)

時期 不詳

遺構 本郭、帯郭、空堀、土塁

概要 王館は相馬市街地から西へ約5km、靈山・福島に通じる国道115号沿いの須賀集落北側にある大館山に位置している。ここは阿武隈山地が平野に接した宇多川の谷口にあたり、東西を結ぶ中村街道が通じ、山道は天明、小野方面にも通じるところである。

館山は宇多川北岸を東延する阿武隈山地支陵が南は宇多川、西は紙麗川に臨む標高132m(比高90m)の山で、山脚に数条の沢が入り組み、斜面は急峻である。北の尾根続きは二箇所で堀切り、東は南北から切り込む沢で分断して土橋で結んでいる。山頂には略方形の本郭があり、東西と南に小郭がつく連郭式山城である。南側には三段、北側に一段の帯郭が取りつき、数条の堅堀がみられる。虎口は東西両端に痕跡をとどめ、東は堀坂に通じ、西は集落に通じるようである。集落はかつての根小屋だろう。ここには守護神を祀ったといいう万蔵院がある。

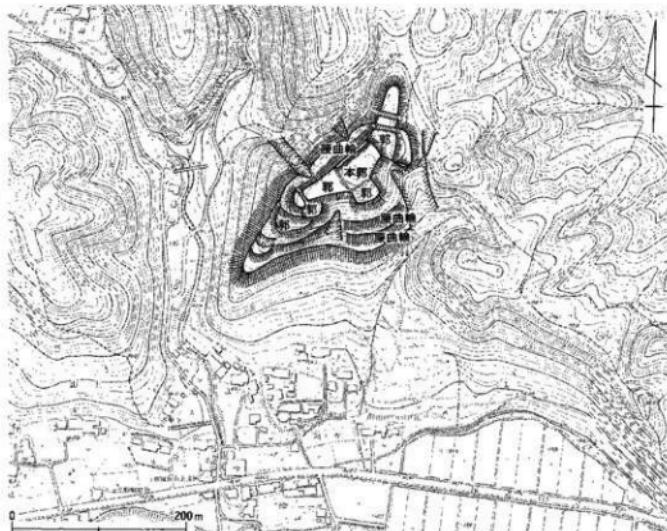
城館の歴史 城館の歴史を示す記録は断片しかなく詳かではないが、『奥相志』には「往昔皇子故ありて此地に下り、白山東嶺に住す。今に城形あり、之を王館という。」とあり、この皇子が祀ったと伝える万蔵院の御正体懸仏(県指定文化財)には嘉暦2年(1327)銘がある。また、王館の南東500mには南北朝南朝方の館と伝える堀坂館があつた。これは街道開通の折りに消滅しているが、その跡地は城地として

は小規模で物見館程度のものと考えられる。地名も隣接しており、この王館が南朝方の館であった可能性も残される。熊野堂城と横川城の、また黒木城や小野館と横川城の繁ぎ館には好位置である。

天正年間には本島大学がここに居り相馬氏に属したといわれ、天正4年(1576)に名取座流川の戦いで戦死、以後本島氏は絶えたと伝えられる。この頃に廃城されたのだろう。(石原敬彦)



第352図 王館位置図



第353図 王館略測図

なかむらじょう なかむらだて ぱりようじょう
5. 中村城(中村館、馬陵城)

所在地 相馬市中村字北町

築城者 中世、中村氏(中村広重の後孫)近世、相馬利胤

時期 戦国期～江戸期

遺構 本丸、妙見郭、西館(西二の丸)中館(東二ノ丸)空堀、土塁、古井戸

概要 中村城は相馬市街地の西側に隣接した丘陵の東端に位置している。松川蒲背後の沖積平野に臨む宇多川の北岸を東延する阿武隈山地の支陵に、築かれた平城である。この城は中世中村館を母体に拡張、整備され、近世になって相馬氏の居城になるに及んで大普請されて今日の姿になった近世城館である。そのため遺構を中・近世に策定区分することは難しく、諸説があつて定まらない。しかし、縄構は連郭と輪郭から構成されていることから、概ね自然丘陵を利用した連郭部分が中世期の城形であるとみられている。

その繩張りは丘陵続きの西側では妙見郭西の頸部を堀切って城地を独立、北側の蓮池と西に続く水田(湛水池)は往時の湿地帯で東に広がっている。南の宇多川も現在よりも北側、丘陵山脚を流れ長友付近から東側に氾濫源をなしていた。こうした三方を巻く沼沢地を外郭防禦にあて、高所に連郭を築き空堀で各郭を画したと考えられる。連郭は東西約500m、最高所の本丸は標高24.2m(比高16m)、面積は約8,250m²である。『奥相志』は東西六十五間、南北六十二間、高さ南の方五丈北の方四丈と記している。

城館の歴史 中村城は延暦年間に坂上田村麻呂が征夷の折りに菅原敬実を置いたことに始まり鎌倉時代には源頼朝が奥州藤原氏攻めの帰途ここを旅館として利用したとも伝えるが定かではない。また建武4年(1337)に相馬氏は海東(中村)朝高を置き以降明応年間(1490代)まで7代、長伴に館を構えたとする説もあるが実効上は疑問点も多い。

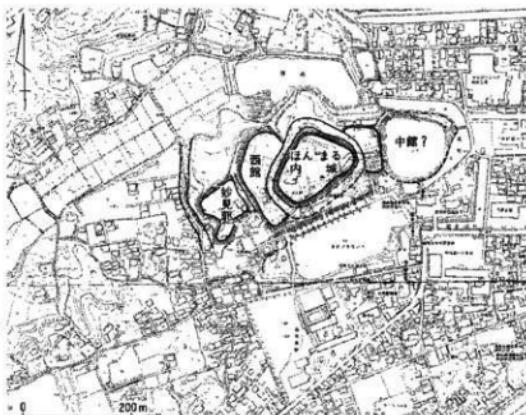
文献が伝える本格的な築城は大永年間(1520年代)に中村氏(六郎広重の後孫)が

築き、これを夫館と称したという。竣工直後に黒木弾正・大膳兄弟がこれを奪取して大膳が城主になったが、天文12年(1543)黒木氏は相馬顯胤に滅ぼされた。以後、相馬氏は草野(中村)直清を城代としたが、永禄6年(1563)謀反を起こして討たれた。かわって相馬隆胤(城主義胤の弟)が城主となり、引退した盛胤が西館に住み後見したが、隆胤は天正18年(1590)駒ヶ嶺城奪回戦で討死、以後盛胤が城代役を代行した。

慶長6年(1601)に盛胤が中村館で没してからは空城になったが、慶長16年(1611)に至って相馬藩主居城としての中村城が再生した。12月に利胤が小高城より移って開府、翌年には城下町の町割りによる城下町中村も形成された。以後260年間藩政の中心となって明治に至り、明治3年(1870)に廢城となった。(石原教彦)



第354図 中村城位置図



第355図 中村城略測図

たてのこしたて
6. 館腰館(中村六郎広重居館跡)

所在地 相馬市成田字館腰

築城者 中村六郎広重(結城宗広)

時期 南北朝期

遺構 堀形、内郭

概要 熊野堂城の根小屋館にあたる館腰館は、熊野堂から南へ約400m離れた大江堀(古名土石川、宇多川の古流路と伝える。)の南川縁で、八幡街道(県道)の西側に位置している。宇多川の氾濫原である沖積地上の自然堤防とみられる微高地に築かれた方形平地館。南半部の大部分は耕地整理によって失われているが、地籍図上には形状を残している。

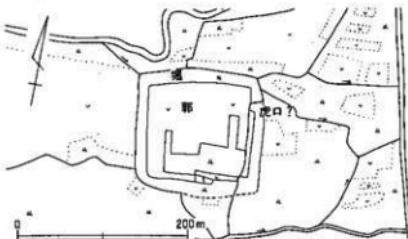
内郭はほぼ一辺120m 方形プランを示し、深さ 1 m、幅13m前後の水堀跡である堀形の水田が外周する。館地は総じて150mの回字状を呈した典型的な土豪屋敷形式の城館である。かつてここからは多くの川石が出土していることから築城と関わることも考えられる。虎口は北寄りの東口とみられるが定かではない。南の岡本集落との間は低湿地なので、ここには沼田堀が走っていたかも知れない。この上に中村氏ら守護堂と伝える牛頭天王祠跡があり、岡本はかつて館腰館が機能していた頃の家臣集落とも思われる。

城館の歴史 城館について文献上は『奥相志』に「…道忠(結城上野入道宗広)乃ち要害を成田邑に築き、一族中村六郎広重をして居らしむ。此所を今、館の腰という」さらに成田村の項に「…中村六郎広重嘗て結城中村に住む。白川より来り居り、而して宇多郡を守る。…」とあり、結城氏が宇多庄を恩給された建武2年(1335)に築かれたとみられる。

ここは古代郡家擬定地(黒木田遺跡)に隣接し、鎌倉時代以降は熊野社鈴木氏が修驗勢力の本拠として領主支配を行ない、往時は塔堂が並び、山下には熊野堂町が形成されていたといわれる地である。また、字地名に「川原宿(瓦宿)」「舟橋」が隣接していることから、古くからの行政、交通、宗教の要地であった。館腰館もこうした歴史的風土の同一線上にある立地と思われ、築城期は城館形式上からも検討される余地を残している。(以下熊野堂城参照)(石原敬彦)



第356図 館腰館位置図



第357図 館腰館周辺(字切図より)



第358図 館腰館略測図

7. 駒ヶ嶺城(臥牛城)

所在地 相馬郡新地町駒ヶ嶺字館、清水

築城者 相馬盛胤(弾正大弼)

時期 戦国期

遺構 本館、西館、二ノ館、三ノ館、腰郭、水郭、虎口、土塁、土橋、二重堀、空堀、池跡

概要 JR駒ヶ嶺駅の北西約1km、駒ヶ嶺街村(旧(旧駒ヶ嶺宿))の北側から裏丘陵一帯が城跡である。南は立田川、北は開拓谷の裏沢を外防壁に、東西の尾根続きは入り込む沢で堀切って画していたとみられる。城館の前面には二条の枝尾根が内に抱え込む形で、防備と灌漑を兼ねた湛水池(御池)があった。城館について『仙台領古城書立之観』には「東西24間・南北52間」、『富塙長門古館除屋敷之絵図』には「本館高サ平地ヨリ13丈・東西24間・南北32間、西館東西10間・南北18間」とある。主郭は本館を中心に西館・三ノ館の三連郭からなり、西から北西にかけては、内外高低差をつけた二重堀を巡らして外部を完全に分断している。内堀は各郭間に入り込んで各郭を画して、これを土橋で繋ぎ、本館の南北両端には食い違い虎口が原形を残している。本館東面懸崖直下には二ノ館と腰郭があり、二重堀の外側堀が巡り、郭南端に城門跡と伝える舟形虎口がある。大手道は街村から登坂、西館の下を通ってこの城門から三ノ館に入った。『東奥中村記』は、城門脇に水郭があることから「水曲輪ノ虎口」と呼び、天正17年の政宗進攻の際にはここでの攻防戦が熾烈であったことを記し、『伊達治家記録』は「…四方ヨリ相囲テ取詰メラル。…ニノ曲輪ヲ攻取り…本丸許リニ攻駆ルトイヘトモ、岸高シテ急ニ抜難シ。」と連郭の内部は攻めきれなかったことを記している。

城館の歴史 『奥相茶話記』は築城について「…駒ヶ嶺元来は城なし、…城無については新地の繁に難成として盛胤駒ヶ嶺の山を切平けて城となし給う」と記し、伊達・相馬両氏の緊張とともに、相馬盛胤が戦闘能力のある「繁ぎ城」としてこの城を築いた。城主は従来の繁ぎ館である藤崎館主原如雪の嫡男摂津をあて、のちにその子治部久長が継いだ。築城期は永禄末へ天正四年(1570年代)と考えられる。天正期には伊達輝宗・政宗父子がしばしばこの近辺に進攻し、相馬盛胤・

義胤父子と対陣、「小深田」等で戦っているが、政宗は天正17年(1589)にこの城を攻略した。以後は伊達氏領になり相馬睨みの「境目の城」として相馬進攻に備え、黒木中務宗元、桜田玄蕃元親がおかれた。江戸時代には新田下総、富塙長門と続き享保3年(1718)からは所持領の宮内氏累代が居館して、明治まで藩境警固の任にあたった。戊辰駒ヶ嶺戦には、ここが仙台藩の本営であったが、西軍によって落城した。(石原敬彦)



第359図 駒ヶ嶺城位置図



第360図 駒ヶ嶺城略測図

8. 萩頸城(山谷地小屋城、新地城、萩頸山 要害)

所在地 相馬郡新地町谷地小屋字館前二

築城者 相馬盛胤

時期 戦国期

遺構 本郭(本丸)、東館、西館、北屋形、腰郭、虎口、土壘、空堀

概要 JR新地駅西方1.8km、新地街村の北丘陵西端にある。沖積低地に挟まれた丘陵上の城跡からは眺望が開け、新地の各集落をはじめ、伊具郡界の阿武隈山地、亘理郡界の木崎丘陵、繫ぎ城である駒ヶ嶺城跡が見通せる位置にある。城跡の直下を浜街道が通り、山地越えの道は金山・小斎方面にも抜け、伊達氏に備えた相馬氏が、宇多郡(相馬郡北部の旧郡名)最北端に築いた境目の城として好位置に立地している。地形は必ずしも要害ではないが、丘陵の南北を流れる河川と湿地帯は外防禦の役割を持ち、丘陵西端も堀代用をなして丘陵を画している。

主郭は丘陵頂部(標高48m)に築かれ、本郭(本丸)を中心にして東西主軸の三連郭と北に張り出した北郭からなる。本郭を巡る内堀が各郭を面して土橋で結び、主郭全体を10m内外の外堀が巡っている。南面には段状の腰郭があり、今の集落は根小屋とみられ、道はここから枝尾根を登坂して東館南面の虎口に達している。南面の低地には「駒込・馬場・北迫」の字地名が並び、かつての調練場を示している。丘陵の北側から東へ「根小屋」「館」「蠍立」の字地名が続くが、熊野の北枝尾根は木崎方面への戦道と伝えられることが合致し、相馬氏時代の根小屋、支



写真114 萩頸城航空写真

城、貝立場などがあったことを示唆しているようである。

城館の歴史 相馬盛胤は新地に平城である谷地小屋城を置いたが、「伊達天文の乱」後、相馬氏の伊具郡進出に伴う軍事強化から、防衛力の弱い谷地小屋城に替えて萩頸城を築いた。永禄9年(1566)に移城して城代に門馬雅楽助を置いた。その後、泉田甲斐、西館は杉目参河が守ったが、天正17年(1589)に伊達政宗が攻略した。政宗はこの城を補強して亘理重宗に与え、坂本三河を城代として相馬氏の反攻に備えている。相馬は奪回をねらったが成らず、近世伊達氏領になった。慶長初期は大町三河が置かれたが、「伊達治家記録」では慶長5年(1600)に坂元への引上げを命じているので、この時に廃城になったようである。三河の子備前の時には谷地小屋要害に移っている。(石原敬彦)



第361図 萩頸城位置図



第362図 萩頸城略測図

9. 谷地小屋城(谷地小屋要害、新地要害、桜館)

所在地 相馬郡新地町谷地小屋字古屋敷

築城者 相馬盛胤

時期 戦国期

遺構 二ノ郭の一部、土塁

概要 JR新地駅の西200m、海岸低湿地帯の微高地に築かれた方形複郭平城。現状は通称お屋敷と呼ぶ二ノ郭の西半部が宅地になって残るだけで、二重濠の囲む一ノ郭(本丸)は明治末期頃に開田され、単濠の二ノ郭も基盤整備によって失われた。谷地小屋の城名は谷地地形に立地していることに由来するもので、「西谷地」「北谷地田」の字地名が残っている。

現存絵図(貞享5年・1688)、地籍図による旧状は、北側の二重濠方形単郭(東西250m×南北150m)に、南側の単濠長方形単郭の二ノ郭(270×100)が結合した平地館である。大手虎口は東に位置し、「枡形」の字地名になっている。一ノ郭の虎口は二ノ郭に接した南面中央に、二の郭の搦手虎口も南面していた。この城は江戸時代に改修されて「要害」として再使用されているが、二ノ郭が古い形態を示し、築城当初は単郭で、のちに一ノ郭が追加された可能性がある。改修時に一ノ郭の内土塁に桜が植えられて「桜館」の愛称で呼ばれるようになった。

城館の歴史『伊達正統世次考』によれば、「天文の乱」が終わる天文17年(1548)に伊達晴宗が谷地小屋を一時攻略している。このことは、この以前に相馬顯胤が黒木氏滅亡後の新地支配のために館を置いた可能性がある。一説には黒木氏家臣がいたとする見方もあり、築城時期は南北朝期にまでさかのぼることもあり得る。しかし、一般的には永禄7年(1564)「…新地ニ屋敷ヲ構ヘ、藤橋紀伊ヲ差置ル、是谷地小屋ト云ヘリ…」とする『東奥中村記』によって、相馬盛胤による築城が通説になっている。

この城は、盛胤の伊具郡進出に伴う北方警備強化の必要性から、永禄9年に「要害悪として…」(奥相茶話記)「谷地小屋ヲバ掃キ捨テ…」(東奥中村記)、西方の養頭城に移った。しかし、政宗による新地支配後の慶長初期に大町三河・備

前父子は養頭城から再び、この城に移った。新地は寛永5年に伊達成実に加増されると、本格的に改修が加えられ、亘理伊達氏の陣屋として明治維新に至った。明治元年(1868)に戊辰駒ヶ嶺戦争で駒ヶ嶺城が落城した8月11日に、家臣の手で火が放されて焼失し、以後廃城になった。(石原敬彦)



第363図 谷地小屋城位置図



写真115 谷地小屋城航空写真(右手が北方)



第364図 谷地小屋城略測図

なかだて えたりたて
10. 中館(江垂館)

所在地 相馬郡鹿島町江垂字中館

築城者 桑折五郎元家、戦国期再利用

時 期 南北朝期～戦国期

遺 構 本丸、二ノ丸、土塁、空堀

概 要 中館はJR常磐線鹿島駅の南方1.5km、旧陸前浜街道に接して東西に伸びる丘陵上にある。真野川南岸の洪積台地上にあり、江垂字中館と呼ばれる全域にわたっている。標高46.9mの江垂部落の共同墓地のあるところが北本丸跡で丘陵上を削平して平地とし、東西100m、南北100mのほぼ方形をしている。南端に幅10m、深さ2m程の空堀があり、その南側に南本丸跡ともいるべき平地が北本丸と同レベルに広がっており、東西70m、南北90mの平場を形成している。南北本丸跡ともに空堀に面する側を除き、高さ2～3m、幅3m程の土塁で囲んでいる。(その一部は崩され煙地となる)。南本丸跡の西側には高さ3mの土塁とともに、桟型を形成する土塁をめぐらしているところをみれば、虎口はこの面にあり、南本丸跡は本来の本丸的機能をはたしていたものと思われる。北本丸跡より4m程下ったところに二ノ丸的機能をはたす平場があり、畠地・境内地となっている。また、二ノ丸とも称すべき平場より8m程低地は北方に伸びる舌状台地で通称「館」と呼ばれ、南北150m、東西70～80mの平場をつくり、三方は崖になっており、三ノ丸的機能を果たしたものと思われる。現在宅地となっている。中世城館として割合に良く現状を保っている。

城館の歴史 「奥相志」に「里人伝へ言ふ、往昔國司源頼家の時、桑折五郎元家伊達部桑折より來たり江垂塙に住し真野五郎と号す。其後田中堡に移り……。江垂塙は天文中、古城と唱ふ。古館の跡なり……」とある。言い伝えによると南北朝期の築城となる。また、城跡にある日吉神社は靈山城落城のとき、靈山に祀られていた山王権現を移したものという。戦国期天文11年(1542)黒木弾正の田中城攻めの折り、相馬頼胤が大軍をひきいて江垂館を

本陣として、黒木弾正軍と戦った。この時に江垂塙を改修し「岡田切堀又は大井切堀」を構築したという。(現在は不明)。『桑折氏系図』に、戦国期一族の桑折利家が江垂城代になっているところをみると桑折氏の傍系が居館していたのかも知れない。『古支配帳写』(文禄2年)に「十七貫七百九十七文、江多利分」とあり、城代のいたことがわかる。(西 徹雄)



第365図 中館位置図



第366図 中館略測図

たなかじょう

11. 田中城

所在地 相馬郡鹿島町鹿島字田中館の内

築城者 桑折氏

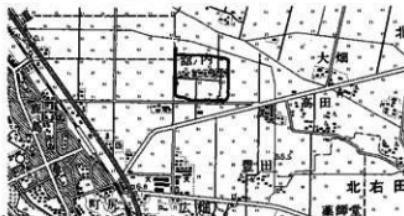
時期 戦国期以前

遺構 本丸、土塁、堀

概要 田中城は、JR常磐線鹿島駅の東北方0.75km、真野川北岸沖積平野の中心部に位置する。相馬中村藩の地歴誌『奥相志』に「在昔名城なりと云う。今田間の高地、内城、外城の跡、西北に土垣の形を存す。二、三重の壕形あり。館の内といふ。」とある。また明治初年の地籍図には条里の方向に一致する東西約300m、南北約215mの長方形の環濠館跡がみられる。これでみると、「奥相志」の記事は明治初年ごろまでは残っていたことになる。しかし、明治中頃の耕地整理事業、昭和50年代後半の基盤整備事業により環濠は姿を消し、いま字館の内地区に小高い塚状の遺構と内堀遺構の一部を残すのみとなり往時の景観は全くない。塚状の遺構は当時の土塁の一部といわれ、「城主田中忠次郎郷胤公之碑」と田の神様の小祠が建っている。『奥相茶話記』にも「田中の城三方は大瀬囲り古松、老柏、繁茂して容易に近付難かりければ」とあり、当時の状況がしのばれる。

城館の歴史 田中城の歴史は明らかではないが、前記『奥相志』『奥相茶話記』等の文献によれば、南北朝のころ、北畠顯家配下の桑折五郎元家千倉庄に落ちの江垂館(中館)に住して真野五郎と称した。のち桑折氏は桑折治郎少輔忠家の時田中城に移り相馬氏に仕えたとある。千倉庄は鎌倉時代より岩松氏の所領になった時期があり、或いは岩松氏の代官により構築されていた可能性がある。ともかく田中城は桑折氏累代の居城として戦国時代を迎える『奥相茶話記』に「北郷田中館 桑折左馬助

久家 出騎十五騎」とあるところをみれば戦国時代の相馬氏の有力な軍事力を形成していたことがわかる。のち天正年間から慶長年間にかけて相馬義胤(長門守)の弟郷胤が田中城代となり田中忠次郎郷胤と称し、「古支配帳写」(文禄2年)に「百三十五貫百十文北郷、田中領分」とある。慶長7年(1602)に廃城となった。北郷(相馬中村藩の行政区の一つ。名称は15世紀より使用。現鹿島町)は相馬氏領の穀倉地帯であり、その中心となる田中城の去就は極めて重要でありこの城をめぐる攻防もしばしばあった。天文11年(1542)黒木弾正の田中城攻め、永禄年中の佐藤伊勢好信の田中城乗っ取りの陰謀等。天正18年(1590)、伊達領葛西大崎一揆討伐のための秀吉の命をうけた石田三成の軍は相馬領まで下向し、田中城に逗留している。(西 敏雄)



第367図 田中城位置図



第368図 田中城略測図

12. 新城館(御前山)

(桜平古館・杉の館・田村堀切を含む)

所在地 相馬郡鹿島町江垂字新城

築城者 不詳

時期 戦国期

遺構 本丸、土壘、空堀

概要 新城館はJR常磐線鹿島駅より西方約1kmの丘陵上にある。標高34m程の台地の端突を利用してしたもので東西110m、南北120mのほぼ方形の台地にあり、西側・北側・東側の縁に低い土塁をめぐらし、それぞれ外側は急斜面をなしている。また南側は高さ5mの土塁と、深さ12m、幅20mの空堀で南台地と仕切られ、それ自体独立丘陵の観を呈する。

この郭内からは布目瓦を出土し注目されている。この方形台地の西側には二の丸の機能をもつ平場が22mの等高線内にひろがっている。東側には谷状の空堀がありこれに続いて、中世杉大隅の居館といわれる杉館がある。一部に土塁をめぐらし、中央部は本丸かと思われ一段高地となり、新城とほぼ同じ規模をもつ。また谷をへだてて西北約150mのところに、これまた新城と同じ規模をもつ桜平古館がある。かつて土塁に囲まれた円形の馬場があったが、古い遺構を利用したものである。ここは現在運動公園となり万葉歌碑が建っている。新城から西方450mの所に通称「田村堀切」と呼ばれる壮大な土塁がある。標高55mの地点に南北200mにわたり、13~15m深さの空堀(土塁上端より空堀底部に至る深さ)が続いている。土塁の内側は平坦地になっている。いい伝えによると、坂上田村麻呂が蝦



写真116 新城館遠景(本丸)

夷征伐の折りに築いたともいう。以上の新城・桜平古館・杉館・田村堀切は有機的に城館としての機能をはたした時代があったと思われる。

城館の歴史 不明。(西 敬雄)



第369図 新城館位置図



第370図 新城館略測図

13. 牛越城

所在地 原町市牛越字城下・館下

築城者 牛越定綱

時期 鎌倉期?、室町期、戦国期

遺構 本丸、二ノ丸、土塁、空堀

概要 牛越城跡は、原町市役所から西方約1km、西から続く丘陵の東端部比高約35mにある。城の南側を水無川が東西に流れ、北側は水田地帯であるが、かつて新田川の氾濫原であり分流が城北側に沿って流れていた。この自然条件を生かし、西方の尾根の一部を堀割で切って城としたようである。慶長2年の築城では、水無川の川筋を変えたり、城の東麓を南北に走っていた浜街道を東方に移すなどして城下町を整備しようとしたが、短期間で移転したので本格的な街並は完成しなかった。しかし、東町場・西町場・鉄砲町(通称)などの地名が残った。現在、本丸は、削られて市の貯水槽が設けられている。本丸から西方に坂を下ると、左手に土塁跡、左右につながる堀が道路を横切って残っている。城の東側を登ったところに手長明神社があるが、そのあたりが虎口であったろうか。神社のある部分と本丸との間も堀らしい。東麓と南麓に人家があるが、この辺が根小屋であったろう。

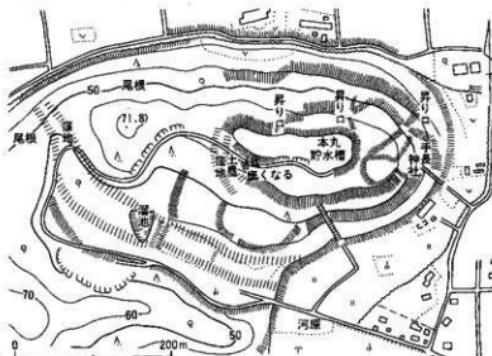
城壁の歴史 築城は永仁(13世紀)頃という説もある(沼館愛三)が、一般的には文安初年(15世紀)豪族牛越定綱の居城とされている。牛越氏は文安2年(1445)謀叛のため滅ぼされ、このあと城は相馬氏が城番を置いて管理した。

そして、慶長2年(1597)城を修築し、さらに、

小高城から移転し、城下町の建設にも着手したのである。しかし、慶長7年(1602)相馬氏が徳川家康により危うく改易になりかけることがあった。一度没収されたが、同年10月に安堵されたのである。このため、相馬氏は、小高城に戻り、当城は足かけ6年の在城で廃城となったわけである。(今村昭司)



第371図 牛越城位置図



第372図 牛越城略測図

写真117
牛越城遠景

14. 明神館

所在地 原町市大甕字館
みよじんたて

築城者 岡田次郎胤次

時期 戦国期

遺構 郭、堀形

概要 J R原町駅から南東約4.2km国道6号線沿い、北から南へ大甕地内切り通しを通過するすぐ右手にある。この切り通しのある丘陵は、以前は南北に抜ける溢路しかなく、北方からの要害になっていた。その南方にあるこの館跡は水田地帯(低湿地)中の丘陵全体である。(比高約20m)丘陵は、全体が卵形であるが東西約40m南北約80m程度である。領主として支配するためには良い立地であるが、長期にわたって防戦できるような城館ではあり得ないと思われる。

館の北端には、日祭明神社がまつられている。現在、神社のほか、民家と耕地があり、頂上部は森林となっていて、館の遺構らしいものは見られない。周囲の水田の部分はかつて堀が巡っていた可能性がある。

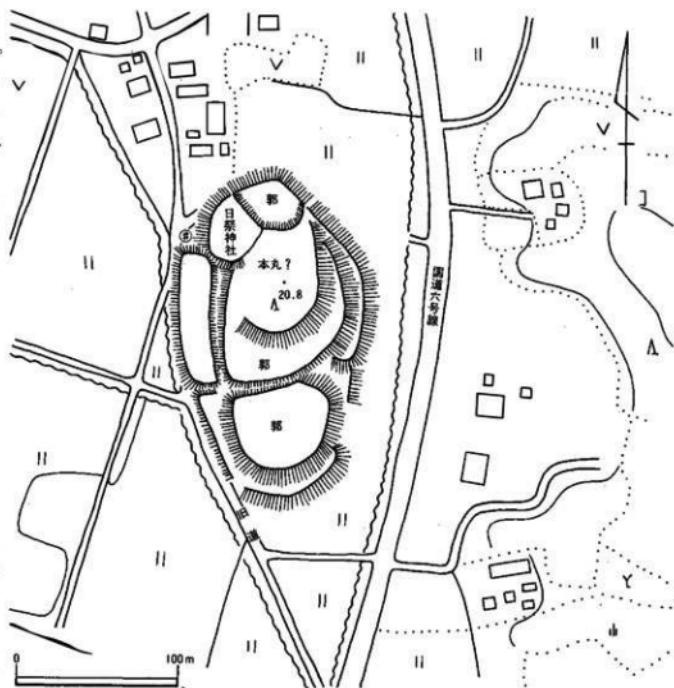
城館の歴史 相馬氏から分かれた岡田氏の居館である。築城者と時期についてははっきりしていない。岡田次郎胤次が、この館にいて大甕村の支配にあたった。その3世の孫胤通は天文年間(16世紀前半)にあたるので、それ以前である。このあと、天正年間(16世紀後半)胤次の6世の孫岡田藤八郎胤末と5世の孫その父左馬允胤勝

とがあいついで戦死するが、それまでこの館が用いられていた。胤勝の養子岡田豊後胤清は、信田沢古館に移ったので、この頃に廃城になったものと思われる。

(今村昭司)



第373図 明神館位置図



第374図 明神館略測図

15. 小高城(紅梅山浮舟城)(県史跡)

所在地 相馬郡小高町小高字古城・城下

築城者 相馬光胤

時期 南北朝期(建武3年)～江戸期(慶長16年)

遺構 本丸、二の丸、馬場、空堀、水堀、土塁

概要 小高川北岸の標高20m前後の河岸段丘が、南に張り出した先端部に築城された平山城である。北側を幅約20mの空堀で区画し、内部は土塁および空堀によって本丸・南二ノ丸・北二ノ丸、馬場(俗称)の4つの郭で構成される。本丸には小高神社が鎮座する。

本丸は東西約160m、南北約130mの直角三角形形状を呈す平場で、北側の中央付近(虎口か)から東辺の縁地には基底幅1～2間、高さ2～9尺程の土塁が遺存している。また南辺西寄りの段丘端にも緩い土手状の高まりが観察され、南辺にも土塁が伴った可能性がある。

本丸の南側から南東にかけては1.5m前後低いL字状の郭があり、南二ノ丸と考えられる。ただしこの郭は北側部分が一段高く、かつ南東の急崖側に高く傾斜している。

本丸の北端の東側には北二ノ丸と考えられる郭がある。本丸との間は北側から入り込む上幅10m前後の空堀で区画されている。またこの郭の北側は段丘面を区画した空堀の急崖となるが、周縁には基底幅3m、高さ2～3mの土塁が巡っており、北側への防備の入念さが読みとれる。

本丸の東側、南北二ノ丸の間にはこれらより5m前後低い水田面があり、馬場と俗称されるが、後世水田として削平された部分であろう。馬場の東側は弁天池で画されるが、本丸に東からのぼる大手口と考えられる道路の南側には一段低い水田面が遺存しており、東側の一部は少くとも水堀で区画されていたものであろう。ただし城郭の南は小高川の氾濫原、西は三居沢・藤井沢に続く開析谷がとり囲んでいて、地籍図などからみてもこの部分に水堀が配されたものとは考えにくい、南及び西側からの防備はこの低湿地と小高川が自然の要害として利用されたのである。

城内へは東西南北四方からの道路が通じているが、東側の道路は水堀を土橋でまたぎ本丸へ連絡している。本丸東辺の土塁はこの部分で喰違いに分断された虎口



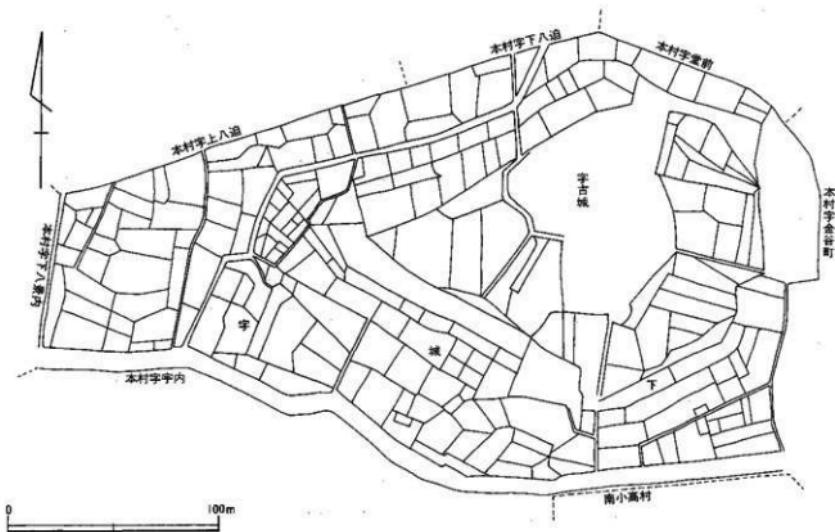
第375図 小高城位置図

である。大手道と考える。本丸北寄りの地点にある御神水、また馬場南西部の本丸からの斜面にある古井戸は水の手であろう。

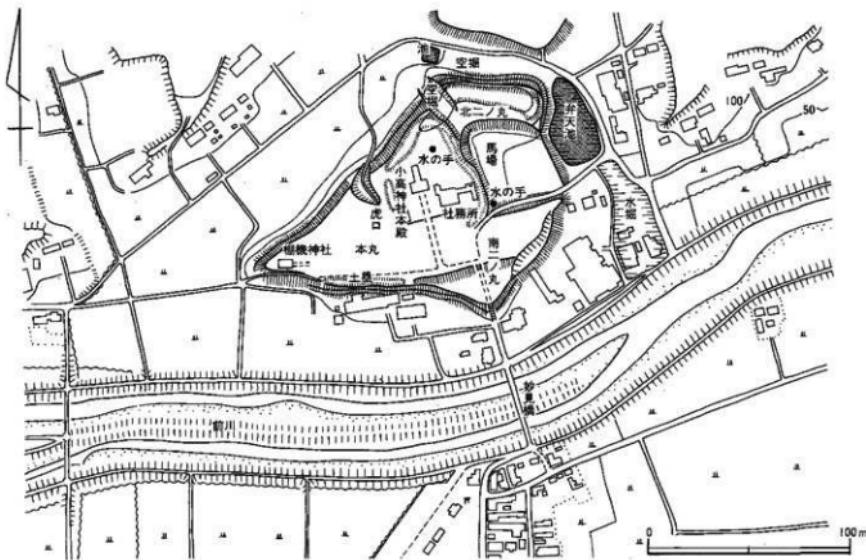
城館の歴史 下総から下向し、最初太田別所館(現原町市)を本拠とした相馬重胤は、嘉暦元年(1326)小高堀の内館に移住した。建武新政府の樹立に伴ない本領の安堵された重胤であったが、足利尊氏が新政府へ反逆し南北朝時代に入ると、北朝の配下となり、建武3年(1336)南軍との戦いの中鎌倉で自害した。こうした中、重胤の留守を守った次男光胤は、父重胤の命により同年2月、小高中四郎内に築城した。これが小高城である。以後相馬利胤が慶長16年(1611)中村城(現相馬市)を築いて移転するまでの約280年間、小高城は相馬氏の居城として機能したのである。14世紀には浜通り地方における北朝側の拠点として、15、16世紀には南の標葉氏、北の岩松氏(千倉荘)・結城氏(宇多莊)・伊達氏との抗争の中心舞台が小高城であった。ただし建武3年(1336)南朝側との戦いで落城し、また慶長2年(1597)より同8年(1603)までは牛越城(現原町市)に移っており、断絶した時間がある。

本丸内にある小高神社は相馬三妙見の一つである。重胤の下向際に奉じた三神の一つである妙見神は、中村城移転とともに遷されたが、安永3年(1774)新像が祀られている。国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の中心的神事である。『野馬掛』は、代々この小高妙見神社で行なわれるものであり、武勇の神として相馬氏が妙見神を信仰した精神的基盤を見ることができる。城の東側から本丸へ入る古道は「野馬道」である。

(玉川一郎)



第376図 小高城周辺（字切図より）



第377図 小高城略測図

16. 岡田館

所在地 相馬郡小高町岡田

築城者 岡田胤盛・岡田胤康

時期 南北朝期 建武元年

遺構 郭、土塁

概要 小高川南岸の第三紀層(竜ノ口層)を基盤とする標高25m前後の相双丘陵上に築かれた平山城である。西側に北から入り込んだ開析谷があり、館跡の所在する丘陵は南から北に張り出した形状を呈すが、郭はその北側に東西方向に並んだ連郭式ということができる。

郭は南北西側から入り込んだ開折谷(空堀か)によつて東郭と西郭に分けられ、この間は丘陵の尾根部が土橋状に連結している。東郭は主郭と考えられる東西110m、南北100mのほぼ方形の郭であるが、東側半分は一段低い。西側を東一ノ郭、東側を東二ノ郭と仮称する。東一ノ郭は位置的には主郭と考えられるが、平場の中央に南北に走る基底幅5m、高さ4m程の土塁が遺存していて、平場の空間は狭小である。土塁の東側には初発神社が鎮座する。東二ノ郭はほぼ長方形の平場であるが、後世の開田により郭の位置づけがむずかしい。西郭は南端を上幅25m前後の空堀で画された、東西40m、南北200mの不整長方形の郭があるが、中央部に高い傾斜があり、郭としても人工の手はあまり加えられていないものと思われる。西郭の東辺には幅20m前後の帯郭がとりつき、土橋を介して東郭と連絡している。西郭と開析谷を挟んで対峙する西側の丘陵も岡田館の一部である可能性がある。

城館の歴史 岡田氏は相馬胤村の子胤顯を初祖とするが、胤盛の時相馬重胤に従い下総より下向し、建武元年(1334)岡田に塁を築き、慶長16年の相馬氏中村城移城まで代々の居館であった。天正年間には小高郷兵士隊長であったという(『奥相志』)。(玉川一郎)



第378図 岡田館位置図



第379図 岡田館略測図

くさのたて
17. 草野館

所在地 相馬郡飯館村草野

築城者 不明

時期 戦国時代

遺構 本丸、二ノ丸、土塁、空堀、帯郭

概要 草野館は花岡岩を基盤とする標高440m 前後の、東に張り出した丘陵の先端に位置する。周辺の低地とは比高差が約20m あるが、平山城に分類されよう。

南側を学校建設で損壊しているが、本丸・二ノ丸を中心に、数段の帯郭を周囲に配した縄張りで構成されるもので、丘陵との区画は南北両方向から入り込んだ開析谷を利用したものらしい。

本丸は長さ80m、幅35m 程の筋鉢形の平場である。西側に位置する二ノ丸とは上幅20m、深さ4 m 前後の空堀で区画される。本丸西端の空堀の崖際にはわずかな土塁状の高まりが認められるので、本来は本丸には土塁が配された可能性がある。

二ノ丸は本丸に較べると1m 程低い平場である。東西、南北50m 前後の不整六角形状を呈す。この郭の西端にも幅2 m、高さ1 m 程度の土塁の遺存部がある。

本丸の東側を除き2~3段の帯郭が認められる。本丸南側の帯郭は幅18m あるが、二ノ丸側までは連続していなかったものと思われる。北側の帯郭は本丸、二ノ丸に連続するが、本丸側が高い2~3段の段差がある。最も高い本丸側の帯郭は空堀の底面に連続する平坦面である。

二ノ丸の西側には3段の帯郭状の平坦面が認められる。このうち二ノ丸に連絡する帯郭は幅25m あり、下位の更に西側の帯郭とは5 m 近い段

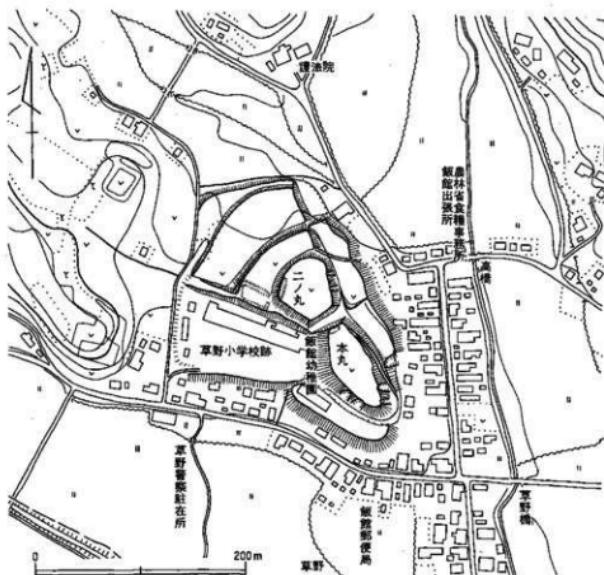
差がある。この帯郭までが本来の縄張りであろうか。

本丸、二ノ丸へはそれぞれ北側から上る道路があり、虎口と考えられる。また二ノ丸西側の帯郭へは丘陵の西方から上り、帯郭内の八坂神社へ続く道路がある。

城館の歴史 『東奥中村記』『奥相秘鑑』には相馬頭胤の時代(16世紀前半)、「草野ノ城」・「草野館」と見えるのがこの館と考えられる。藤田七郎晴親の居城で、後岡田兵庫胤景が城代として伊達氏との抗争を演じた。慶長以前の相馬氏による山中支配の拠点が草野館であろう。(玉川一郎)



第380図 草野館位置図



第381図 草野館略測図

18. 権現堂城(西台館)

所在地 双葉郡浪江町西台字館

築城者 標葉清隆、隆成

時期 室町期、戦国期

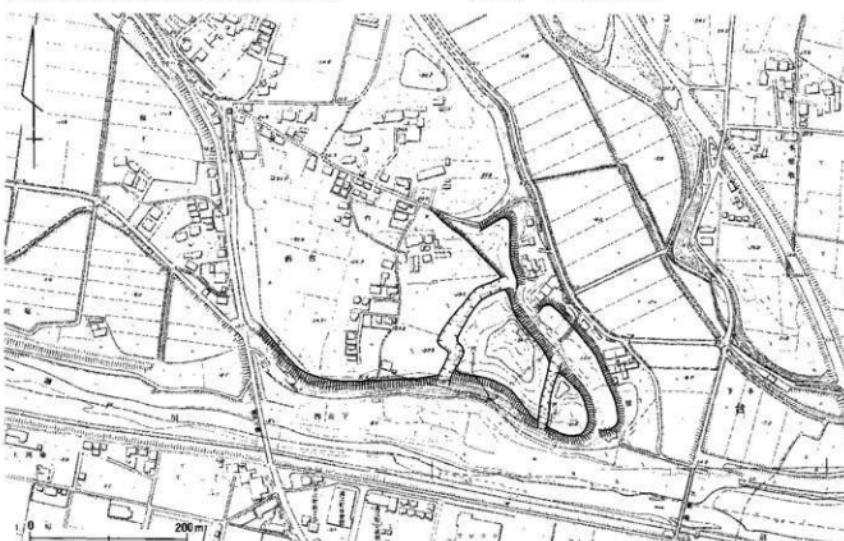
遺構 郭、土塁、空堀

概要 権現堂城は浪江町市街北方の西台、諏戸川(室原川)北岸丘陵舌状地突端に築かれた平山城である。標高23.1mで浪江町の市街地を一眺みできる。丘陵の西方に旧浜街道や常磐線が南北に通る。東方下降には国道6号線が南北に通っている。城館の台地の南、東、北の三面は急崖の絶壁で防備は固い。平場は2つの郭からなり、内郭は50m×50m平方の平坦で現在能野神社、福荷神社の小祠がある。外郭は台地の突端部で30m×40mの平場からなり現在雷神社の小祠がある。例年2月23日におこなわれる「裸まいり」はこの神社奉納折り返しになっている。この内郭と外郭は空堀、土塁で区切られ、途中折形になっている。内郭と西台からの台地との境は高約10mの堀込の空堀の上に土塁を築き、空堀の幅12m、土塁の高さ2mで、内郭と台地との境界は完全に分断し防備は強固である。

城館の歴史 嘉吉元年(1441)標葉氏総領盛隆の長子、標葉佐京大夫(清隆)諏戸館(太平山城)を去って権現堂本条館に移す(『東奥標葉記』)。文安年間(1444~1448)相馬勢に備えて西台館を築く(『東奥標葉記』)。長享元年(1487)相馬盛胤権現堂攻め、明応元年(1492)標葉清隆、隆成父子、相馬高胤、盛胤によって落城する(『東奥標葉記』)。以後標葉郡は相馬領となり、岡田将監権現堂城代となる(『東奥標葉記』)。慶長7年権現堂城廃城。(山田廣)



第382図 権現堂城位置図



第383図 権現堂城略測図

19. 大平山城（請戸城、請戸の御館）

所在地 双葉郡浪江町請戸字館の内

築城者 標葉四郎隆義

時期 平安期 保元年間

遺構 土塁、空堀、虎口、郭

概要 大平山城は浪江駅より南東部3.5kmの太平山の舌状突端の台地に位置する。浪江町の市街地をだきこむように流れる河川は、南に高瀬川北に室原川が蛇行し、海岸線より1.5kmの荒井地区で合流し請戸川となって太平洋に注ぐ、相双地方きっての一級河川であり請戸、幾世橋はこの河川の沖積によって開析された平地からなっている。城館は南岸を流れる高瀬川が太平山の丘陵突端で接岸し城館の北壁の断崖を形成し両川の合流点にある。

太平山城はこの古くらか開けた請戸河口を眺望でき、太平山の舌状の地利を生かした天然の要害で防禦にも堅固な地形にあり、請戸の御館と呼ばれ、字名も館の内、南館の内、北館の内となっている。

城館の歴史 「東奥標葉記」によれば、標葉氏は平国香の二子繁盛の末流、海東小太郎成衡の四男隆義を始祖とする。「四男標葉隆義、保元年中(1156~59)標葉一郡を分領請戸の御館に移る、大平寺の向、請戸浜近

所也」。

これが大平山城の始まりと言われる。その後、南北朝時代に標葉持隆らは南朝方に属し北朝の相馬氏等と戦い、標葉は相馬勢に攻められている(『相馬文書』)。標葉氏は代々この請戸館(大平山城)を根拠として標葉郡を領有するが、標葉清隆の時にここから西北3.5kmの平地、権現堂本条館を築いて移った。嘉吉年間(1441~43)のこととされる。ところが、本条館は平城で防備に弱く、0.7km北の室原川北岸の高地、西台に権現堂城を築いた。文安年間(1444~48)のことと「東奥標葉記」は記している。(山田 廣)



第384図 大平山館位置図



第385図 大平山館略測図

いづみだ ふるたて まんかいじょう
20. 泉田古館(万界城)

所在地 双葉郡浪江町北幾世橋字古城

築城者 泉田氏

時 期 南北朝期～文禄・慶長期

遺 構 空堀、土塁、虎口

概 要 泉田古館は常磐線浪江駅より東方約2kmの旧泉田村万界(満海)現在の北幾世橋字古城に位置する。古館は請戸川(泉田川、室原川)が浪江町の北岸を蛇行し幾世橋地内を流れる河岸に接し河川の氾濫時には中洲に舟を浮かべたような孤立状態になり、持久防禦には適さない平城の居館と考えられる。館の北には大型寺の山門があり、境内の北方には相馬藩主昌胤、尊胤公の北原御殿跡や藩主の墓地がある。館は独立した丘陵で四辻水田、畠地に囲まれ、特に南側は急崖、絶壁と河岸に接し攻撃は容易ではない。館の平場東方により溝状の空堀と土塁構形状に設けられている。虎口は北側中央である。平場の北側西壁下に空堀と土塁が残っている。

館には現在不動尊の小祠と古井戸跡とみられるのが2箇所残っている。

城館の歴史 泉田古館は万界城ともいわれ、標葉一

族標葉教隆の居館、建武年中(1334～35)その後代々泉田氏の居館となる(『奥相志』)。

標葉氏同族重臣に分封在館、泉田城主一門泉田隱岐守隆直、明応元年(1492)標葉清隆、相馬高胤、盛胤によって権現堂城落城(『奥相秘鑑』)。この功により泉田隆直、相馬氏の一族に準じ胤の字を賜わり、泉田胤直とする。標葉郷館主配置氏名並びに采地、標葉郡泉田館領地高2,725石5斗、泉田胤直(『相馬藩政史』)。

頭胤盛胤両代郡館持並出騎之事標葉郷城代、泉田館、泉田右衛門太夫頭清、25騎、慶長7年より、泉藤右衛門胤政(『奥相秘鑑』)。(山田 廣)



第366図 泉田古館位置図



第367図 泉田古館略測図

21. 新山城

所在地 双葉郡双葉町新山字東館

築城者 標葉隆連、隆重のち相馬氏支配

時期 鎌倉期～戦国期

遺構 本丸、郭、空堀、土塁

概要 新山城は双葉町(旧新山村、長塚村)のほぼ中央にあり、常磐線双葉駅の南方約300m 地内に位置する。常磐線の開通によって城跡は東西に分断される。東側を本城跡といい旧街道の町並に囲まれ、城下を根小屋川が流れている。高台の平場北側半分が削平され、中央公園広場や新山神社の社が建っている。南側は昭和60年は発掘調査により、建物跡の柱穴が多数検出された。この本城跡の北側下段平坦地には土塁をめぐらした城代の居館がおかれて、現在もその家系を継ぐ小野田家の敷地になっている。

一方鉄道の西側は東館と呼ばれ、土塁、空堀、郭が残っている。郭の一部は昭和60年4月の発掘調査により建物跡の柱穴や井戸跡が検出された。

この丘陵一帯が城館跡と考えられる。旧新山小学校跡地を再利用し、現在双葉中学校敷地となっている。この東館から西方1 km の山中に西館城跡(酒井将監

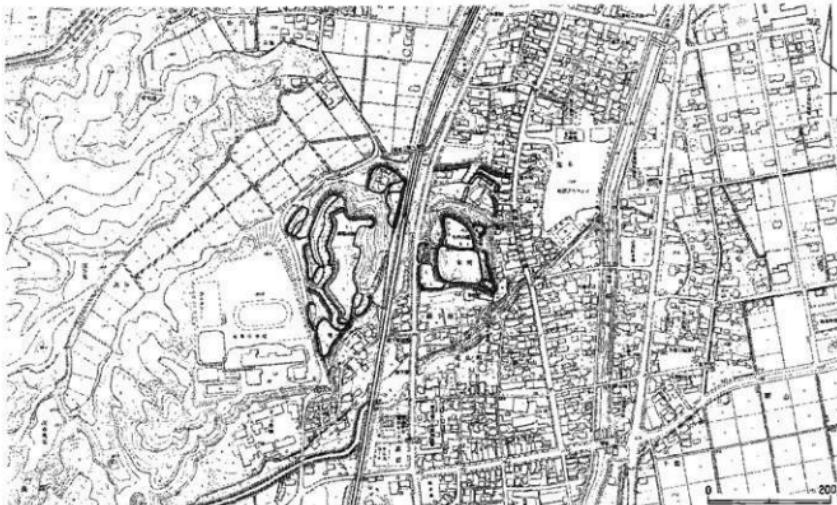
城代)(『奥相秘鑑』)が残っている。新山城は地形上からも防備は強固である。

城館の歴史 新山城は元弘元年(1331)に標葉氏の標葉左衛門尉、隆連が築造、2代隆重、3代隆豊の居城といわれる(『東奥標葉記』)。

明応元年(1492)標葉清隆・隆成父子らは、相馬高胤・盛胤によって標葉氏の居城現堂城落城する。以来標葉郡は相馬氏の支配下となり、城代がおかれて、慶長16年(1611)以降、廃城となる(『東奥標葉記』『奥相茶話記』)。(山田 廣)



第388図 新山城位置図



第389図 新山城略測図

こうのくなで
22. 鴻草館

所在地 双葉郡双葉町中田字館腰

築城者 鴻草氏

時期 不明

遺構 空堀、土塁、虎口、郭、物見台

概要 常磐線双葉駅を北に進むと東側に国道6号線、線路を挟んで西に旧陸前浜街道の三線が並行して中田地内に入る。この旧街道の中田字館腰に突き出た丘陵上に位置する。館跡は井戸川氏の裏山にあたり、ほぼ中央に幅10m深さ3mの空堀と土塁によって区切られた郭からなっている。周囲はともに急斜面の崖になる。低地は水田からなり、北から東へ中田川が流れ対岸の鴻草地区と区分される。北の郭は一部土塁をめぐらし東西50m南北150mの平場からなり、中央に溝状の空堀があり、東側斜面階段状に帯状の郭がみられる。北方突端には一段高い物見台が設けられている。この丘陵の中央西斜面に虎口とみられる登り口があり両壁は険阻な急崖になっており外敵への防禦は強固である。空堀りで区切られた南の郭は東西60m、南北50mの平場からなり本丸と考えられる。この郭の南、東側

に長形状の突出しの郭があり突端に物見的な跡がみられる。この館は自然の丘陵を利用した、天然の要害で、鴻草・中田一帯、両竹の下流まで眺望できる堅固な城館と考えられる。

城館の歴史 鴻草館は築城年・城主不明である。鴻草大学の居館といわれるが、鴻草地内にある鹿島神社の丘陵、台地との説もある。一方中田の館との説もあり嘉吉年間(1441~43)横葉の家臣横山丹波の居館とあるが、元亨4年(1324)横葉四郎隆直氏の居館と県史にみられ定かではない。(山田 廣)



第390図 鴻草館位置図



第391図 鴻草館略測図

さやまたて 23. 佐山館

所在地 双葉郡大熊町大字熊字新町

築城者 不詳

時期 不明

遺構 土塁、郭、空堀

概要 佐山館は常磐線大野駅から南東へ3kmの河川熊川に突出する丘陵の舌状地に位置する。

眼下に国道6号線と旧陸前浜街道が南に走り、東街道の熊町一里塚が往時の姿をとどめている。館の南面は熊川の川床に接し東、北は急崖を呈し、館全体、河川と湿地(水田)にかこまれる。城館の平場は大きく3つの郭からなり、先端の1つの郭と2つの郭は空堀と土塁で区切り南方は折形状になり南の急崖上に物見台が設けられている。二ノ郭と三ノ郭にも大きな空堀と土塁で区切られている。北側に帯郭を設け、虎口は北で、防禦は堅固である。川を越えた南の丘陵台地は、相馬、石城の藩境熊川宿である。この宿には相馬藩が境界付検断を置き、相馬藩の南関門にあたる、交通の要所として陣屋を置いた。宿の中央には御殿屋敷跡が残っている。

城館の歴史 『奥相秘鑑』の盛胤・頤胤代三郡館持并出騎之事の条に、標葉郡に佐山館、門馬大和定経の居館とある。標葉家の家臣について『東奥標葉記』では、重臣六旗七人衆が列挙されているが、この六旗の中に熊川美濃隆光の居館熊川館と、七人衆の熊右衛門隆重の熊館について確定できるものは現地にはみあたらない。いづれも大字、小字の地名から、熊館、熊川館をこの佐山館と同一とみるか、西館・中館をどこに推定するか。現在大熊町に残っている城館としては、もっともよく往時の姿をとどめているのは、この佐山館である。(山田 廣)



第392図 佐山館位置図



第393図 佐山館略測図

24. 日向館

所在地 双葉郡富岡町本岡字日向

築城者 岩城九郎時隆

時期 戦国期

遺構 郭、土塁、空堀

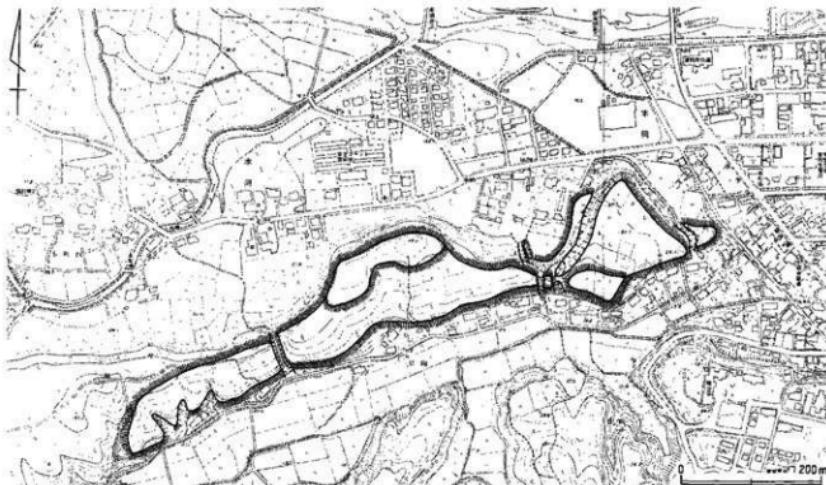
概要 富岡町の中央を東西に流れる富岡川は、阿武隈山地から太平洋に迫り出す支脈の狭間を流れ、狭い沖積平野をつくる。日向館は、富岡町の中央にあって渥沢方面から東に延びる台地の東の端に位置する。台地の先端は県道富岡大越線や根小屋川によって分断され自然地形を留めていない。台地上からは富岡川の流域を望める。付近には、根古屋、門口、本町、岡内などの地名も残る。1985年には、富岡町教育委員会により一部緊急発掘調査が行なわれている。館は、東西に細長く南北に狭い標高26m~30mの自然地形をそのまま利用している。台地東寄りに大きくくびれる地点があり、南北に2条の空堀と土塁をめぐらす、その東側に南北約180m東西約190mほどの平場があり二郭にあたると思われる。その南西寄りに一段高、地点があり、居館と考えられる。空堀に続く北側には、自然の谷を利用した空堀が北東に延び、その北西側にゆるいカーブをもって延びる平場が帯郭にあたるとと思われ

る。またさらにその先には南北に空堀と土塁がある。

城館の歴史 「双葉郡郷土誌」によれば、「上岡村大字本岡ニアリ永正年中岩城九郎時ノ築キシ所ニシテ其子隆宗ニ至リ東白川郡竹貫領主佐竹氏ト封地ヲ換ヘテヨリ佐竹氏移リ住セシモ佐竹氏秋田ニ移サレ後廃館トナル地高燥ニシテ観望ニ富ム」とある。また、「磐城四郡小館記」にも磐城郡42館中に日向館の記載が見られる。明応から永正年間にかけての岩城氏の当主常隆の子隆時は「岩城系図」によれば「富岡殿」と注記されておりこり地を支配していたことは間違いない。しかし、日向館がいわゆる富岡城に比定することに対しては諸説があり判然としていない。(大平好一)



第394図 日向館位置図



第395図 日向館略測図

たかつ どなて
25. 高津戸館

所在地 双葉郡富岡町上平岡字高津戸

築城者 不詳

時期 室町期

遺構 郭、土壘、空堀、堅堀・井戸

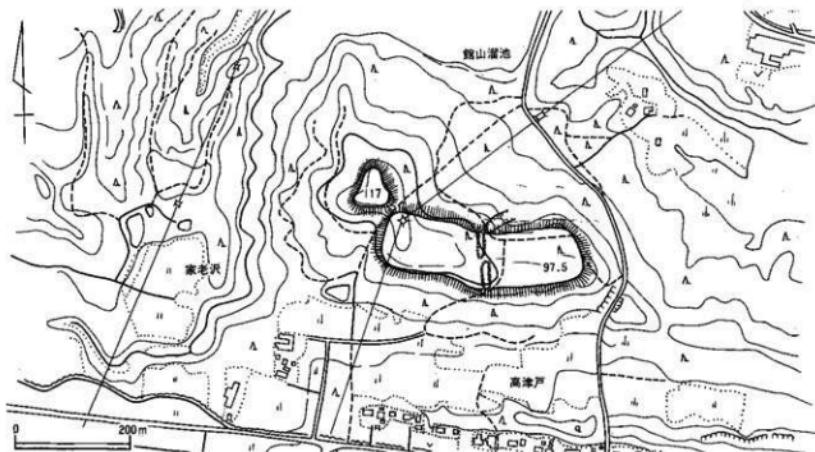
概要 阿武隈山地は太平洋に向けて指状の支脈をのばし、その狭間に沖積平野をつくる。高津戸館は、その支脈の一つ茂手木方面から東に延びる標高約90mの丘陵上にある。北西に館山溜池、北から東にかけては同様の丘陵を挟んで低地が続き、南側は平野部に面し田園が広がる。付近には、家老沢、イタゴヤなどの地名が残り、本館のある丘陵頂も通称館山と呼ばれている。この館山と呼ばれる丘陵は、標高117.9mを測る一段高い部分と標高90mから100mの平場が続く部分とから成る。西端にあたる一段高い部分からは、大熊富岡方面を一望でき、38m四方の広さをもつことから物見の性格が強いと思われる。東に向かって一たん大きくくびれた後大きな平場が続く。そのほぼ中央部南北に喰い違ひの虎口をもつ土壘が約50mずつ約100mにわたり残る。土壘の東部分には空堀がつき北斜面の堅堀に続く。井戸跡といわれる遺構も残ることから居館部分か。この館山から南へ約250mほど向かった低地には、堀と土壘の一部東西に100m余り残る。東端は

坊主が沢に続き途中に「イタパン」と呼ばれる地点も残る。

城館の歴史 『磐城四郡小誌』によれば、高津戸館の名が見え、「云々館主姓名知レズ」とある。一方『福島県郡誌集成』によれば「……地勢峭立一大長陵ヲナス往昔高津戸速門ノ居趾ナリトイフ云々」であり相違をみせる。高津戸速門が伝承の人物のためはっきりしないが11世紀中ごろと考える説もある。その後、『飯野文書』によれば、建武4年10月北朝方伊賀盛光が楨葉郡朝賀城を攻略している。諸説はあるが朝賀城を高津戸館とみれば、しばらく南朝方だった楨葉氏のもとにあったと思われる。(大平好一)



第396図 高津戸館位置図



第397図 高津戸館略測図

26. 真壁城

所在地 双葉郡富岡町下郡字真壁

築城者 不詳

時期 室町期～戦国期

遺構 郭、土塁、空堀、狼煙場

概要 真壁城は、阿武隈山地から東へ延びる支脈の末端に位置している。台地は、標高約42mほどで東南には紅葉川の形成する沖積平野や太平洋が望める。

また西側には、丘陵の平坦部が西へ広がっている。本城郭は1975年から昨年にかけて富岡町教育委員会により緊急発掘調査が行なわれた。それによると、遺跡は平野に突き出た3本の台地、それぞれ南からA・B・D地区と、その基部ちょうどB地区の延長上にあたるC地区から成っており、それぞれが郭としての機能をもつと考えられることが特徴となっている。C地区は、その立地と形状から一郭あるいは居館を推定し、調査の中心となったB地区との境は、上幅約6m下幅1.85m深さ2mの薬研堀が確かめられ、その南側B地区には土塁が存在している。B地区は、さらにa～fの6区に分かれることが明らかにされた。a区は建物跡などから詰め郭に比定され、b区は腰郭、c区は帯郭と考られ、焼土塊の出土から狼煙場の可能性もある。その他B地区からは1000以上の柱穴跡、30数基の土壙溝などが検出されている。

建物は、建て直しも含め13棟が推定された。

出土遺物は、聖宋元宝・鉄滓・鉄小札・犬釘・漆器・磁石・石臼・羽口・青磁・白磁・緑釉陶器・美濃・瀬戸である。

城館の歴史 真壁城の名が現れる資料は残念ながらない。しかし発掘調査出土遺物のう

ち、14世紀末から15世紀にかけての中世陶器が含まれておりこの頃の築城が考えられている。そして存続の時期は舶載磁器や美濃焼から16世紀前半までの時期とされる。また、富岡町『竜台寺文書』中に、永正年間に「日向の地に城を築く以前にその南に城を造ったが地盤軟弱のため今日の日向に築城した」との記載があるといわれ、それが真壁城にあたるかは不明である。(大平好一)

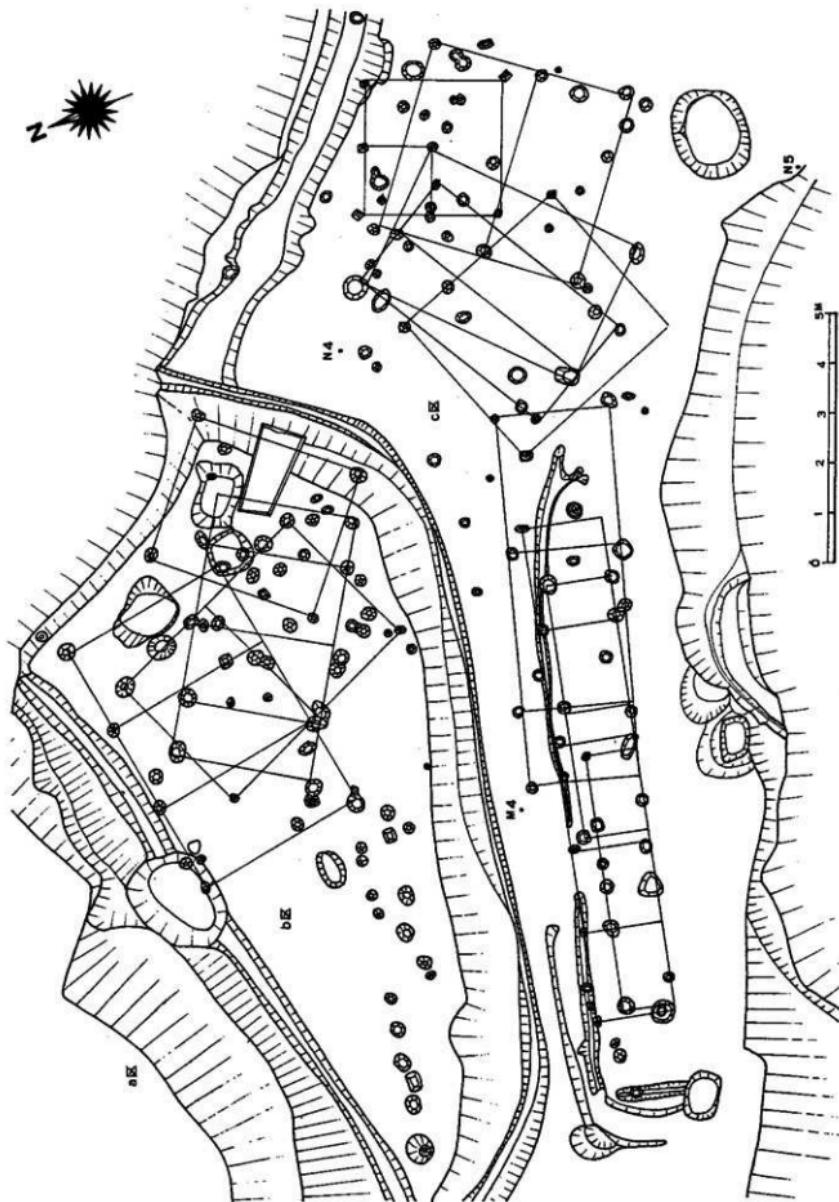


第398図 真壁城位置図



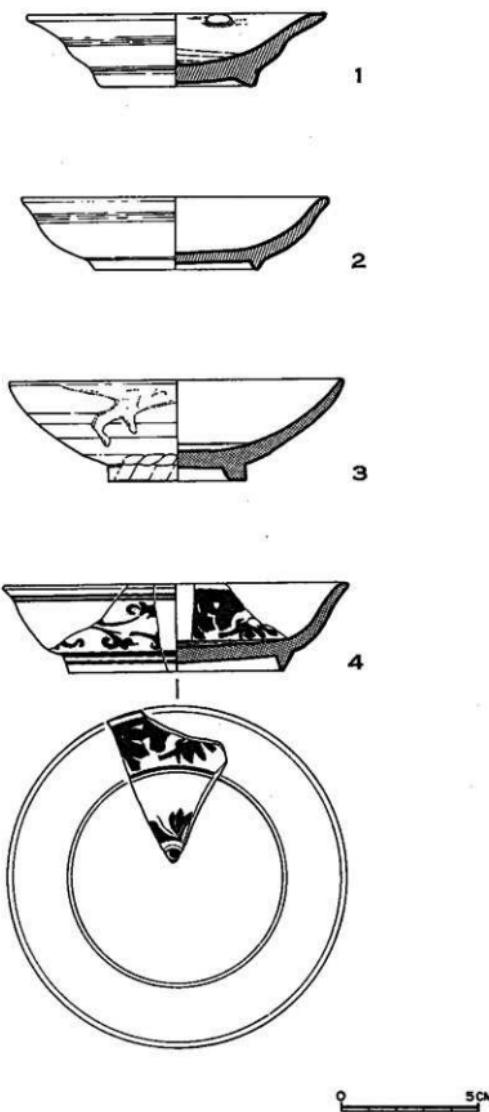
第399図 真壁城実測図

「富岡町埋蔵文化財調査報告書」第1回(富岡町教育委員会)による



第400図 真壁城B地区遺構図

「富岡町埋蔵文化財調査報告書」第1号(富岡町教育委員会)による



第401図 真壁城出土遺物

1・2 美濃焼(高台付小皿)

3・4 鮫載磁器(高台付皿)

「喜多方市埋蔵文化財調査報告」第1報(喜多方市教育委員会)による

27. 椿葉城(木戸山田岡館)

所在地 双葉郡椿葉町山田岡字館

築城者 不詳

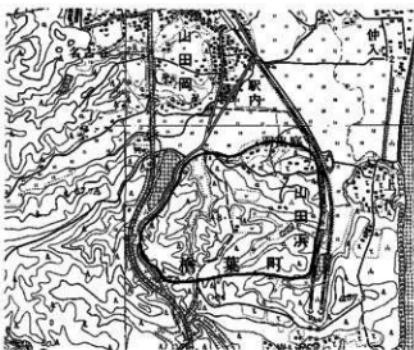
時期 平安期末～戦国期

遺構 曲輪、帯曲輪、土塁、空堀、堅堀、虎口、出城

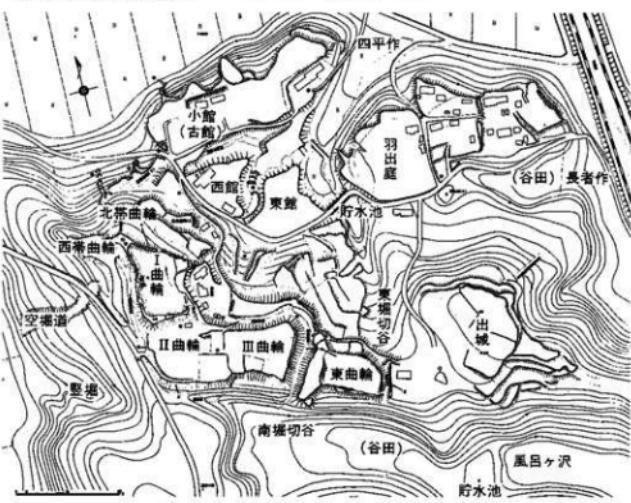
概要 椿葉城は、町の平野部をつくる木戸川の南岸台地上(標高54～18m)にある。前面には肥沃な田園が広がり条里製造構が存在したといわれる。東と南側さらに城郭内にも谷田があり込み、西側には自然湧水沢がある。付近には中之城、根小原、小館の地名も残る。本城は1984年椿葉町教育委員会により発掘調査が実施されている。それによると、椿葉城の規模は東西600m南北300mの壮大な全容をもつ。その特色は、3つの大きな地区に分けられるところにある。内城地区は館山の最高所(51～55m)にI曲輪を中心に、東の尾根を削平しII・III曲輪と東曲輪を連郭式に配置し2つの堀切を設けている。I曲輪には、逆コの字に土塁をめぐらす。この東側に中城地区がある。東館・西館と呼ばれる平場があり、周囲を東からのびる腰・帯曲輪と馬蹄形の堀がめぐる。さらにその東と北に自然谷と堀を利用して古館・羽出庭・出城とよばれる外郭地区を形成している。発掘により、I曲輪からは柱穴遺構・礎石・犬走りなどが検出されている。遺物は、渡来陶磁・国産陶磁・瓦器・土師質土器・鉄製品が出土している。

城館の歴史 椿葉城の築城を直接示す資料は確認されていない。しかし、中世において椿葉郡の中心的な領主である椿葉氏の據った城郭であると考えられており、12世紀中頃の岩城隆行の五子分封による嫡男椿葉太郎隆祐の居館とも考えられている。その後文明6年

(1474) 岩城親隆が猪突筑後守に所領を安堵し椿葉郡が岩城氏の手になるまでは本城の様子は明らかではない、「奥相茶話記」によれば文明6年に木戸は一時相馬領となるが城主などは不明。その後木戸・富岡は相馬領となり木戸には下浦常陸泰清が置かれた「奥相秘鑑」。元亀元年(1500) 岩城親隆は相馬氏から富岡・木戸城を奪回した。(同上)以後、椿葉城は岩城氏の郡支配の拠点となったものと考えられる。廃城の時期は明らかでないが慶長7年岩城氏の改易のことと考えられている。(大平好一)



第402図 椿葉城位置図



第403図 椿葉城実測図

『椿葉城後述遺構実測図 1983・1984年度調査』(椿葉町教育委員会)による

てんじんやまたて てんじんばらたて
28. 天神山館(天神原館)

所在地 双葉郡楢葉町北田字上ノ原

築城者 不詳

時期 戦国期

遺構 郭、土塁、虎口、空堀

概要 楢葉町の中央を流れる木戸川はその両岸に河岸段丘を形成しており、低位の段丘面には豊かな稻田が広がっている。木戸川の北側には井出川に挟まれた一段高い標高38m～39mの平坦な台地が続く。この台地の東端には史跡天神原遺跡があり、その西側に天神山館がある。南面は木戸川の急崖が続き、その対岸約2kmには楢葉城が位置する。また北西約3kmには井出城が所在する。天神山館は、すぐ東と南を太平洋と木戸川の急崖を利用し防備を北に向けたものと考えられる。

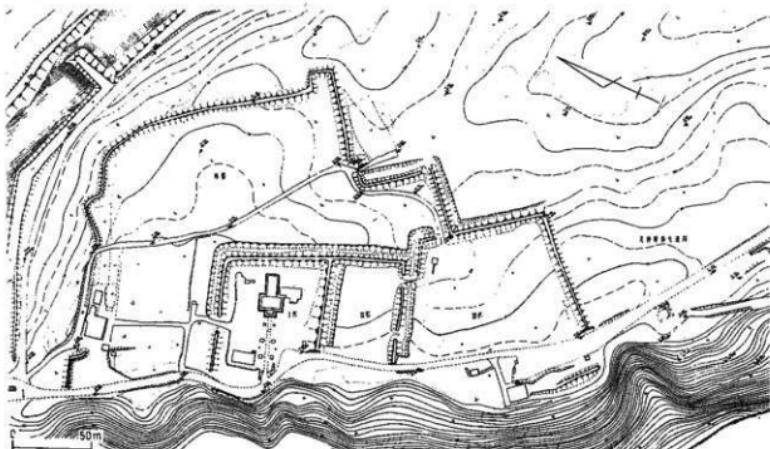
1980年に本館は楢葉町教育委員会により発掘調査がなされている。それによると西から本城地区(南北55m・東西100m)にI曲輪・II曲輪が配置される。それぞれ高さ2m、外側空堀からは3.2m余りの土塁と空堀をめぐらす。I曲輪西側には虎口が残る。II曲輪に統いて東側にIII曲輪があり、奥い違虎口、隅櫓台がみられ土塁と空堀は外郭に接続している。外郭は本城区の北側前面を囲むように全長400mにも及ぶ土塁が

ありめぐる。横矢掛りなども見られる。この外郭を囲む形で湿地帯の人工を施した谷が北から西にかけて入り込み一部には土塁をともなう。規模でみると東西450m南北200mの大かがりな城郭といえる。

城館の歴史 天神山館の築城年・城主を明らかにできる資料はない。しかし郭城の規模・立地・堀の形態から戦国末と考えられている。また、その位置からいろいろ楢葉城との関係も見逃せない。すなち、楢葉城が木戸川の平野を臨み領地支配に適した立地条件を備えているのに対し、天神山館は堀・外郭を含めて壮大な城郭城をもち、大手を地続きの北と西に敷き北への防備を固めた様相を呈している。このことから楢葉城を補完するため北面を天神山館で補う支城的役割を考える説もある。(大平好一)



第404図 天神山館位置図



第405図 天神山館実測図

「天神山館調査報告書」(楢葉町教育委員会)より転載

29. 井出城（館ノ沢館）

所在地 双葉郡楳葉町井出字館ノ沢

築城者 不詳

時期 鎌倉期～戦国期

遺構 曲輪、出曲輪、腰曲輪、堀切、土塁

概要 井出城は、楳葉町役場から北東へ約1.5km太平洋に注ぐ井出川河口より1.3km遙った、通称「館ノ山」に位置する。館ノ山は標高35～40m、東側には館の沢と呼ばれる谷が入り込み、南側には井出川の侵食による急崖がせまる北西から南東に細長い舌状台地上にある。域郭の規模は幅55m総長270mを有している。

本城は、1986年楳葉町教育委員会により、町史編さん事業の一として発掘調査が行なわれている。それによると、本郭は東側を館ノ沢の谷を南側眼下に井出川の急崖を利用している。そして舌状台地つけね西手より、外曲輪、IV曲輪、II曲輪、I曲輪（東に腰曲輪も付く）・南曲輪。出曲輪が直線上に連なり、いわゆる連郭式縄張で構成される。堀切は5本あり東西に台地を断ち切る。本丸にあたるI曲輪からは掘立柱跡、炉址・が確認されている。また南北の土塁には虎口的鞍部がみられ、特に南北土塁からは炭火材・礎石・鉄釘が出土し橋・門建築物の存在が考えられる。出土遺物には、施釉陶器・釘・鍵・錫などがある。

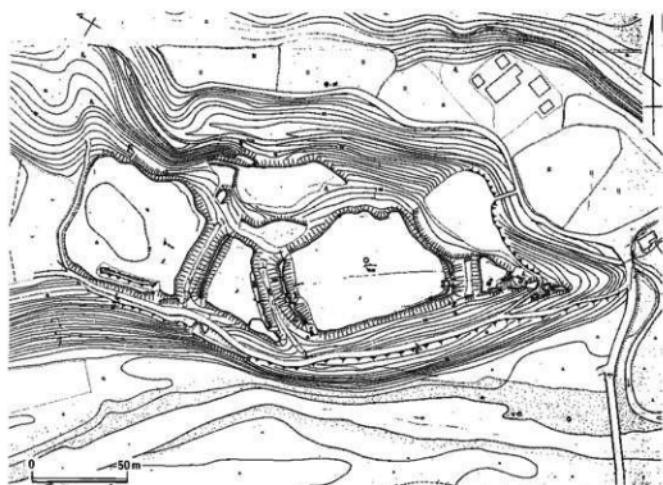
城館の歴史 井出城に関する文書・資料は残念ながらない。しかし、発掘出土遺物によると、中世須恵器を用いた時期と、美濃・瀬戸陶器を用いた時期に分かれることがわかる。おそらく鎌倉期から戦国期にわたり断続的に使用されたものと考えられている。そして廢城は、豊臣秀吉による奥州攻め天正18年（1592）ころと推定さ

れている。

戦国期の楳葉は、岩城と相馬の領国支配の接点となつており、まさしく楳葉町を流れる井出川・木戸川がその攻防の地であった。井出城の約2.5km南には天神山館がありさらにまた南には木戸川を挟んで楳葉城がある。これらの城との関係を考えることが重要と思われる。（大平好一）



第406図 井出城位置図



第407図 井出城実測図

井出城跡
（楳葉町教育委員会）

さのくらじょう 30. 三倉 城

所在地 いわき市三和町上三阪本町

築城者 三坂忠信か

時 期 南北朝期～戦国期

遺 構 郭、虎口、搦手、曲輪

概 要 比較的単調な山城である。山頂が二つあり、北側の山頂には薬師堂のある曲輪がある。その周囲は急崖で岩塊も多く、稜線に搦手が二つあるほかは北斜面は自然の急斜面を利用している。南側の山頂は本丸跡で円形の郭となっている。

本丸の南に虎口が残る。東側の急崖は自然のままであるが、南側の曲輪の斜面は40m以上もある手の加わった直線状の急崖である。南西の斜面には多数の曲輪が分布する。児ノ内に続く緩傾斜の谷は幅が広く、小さな段々のある畑となっているが屋敷跡のようである。薬師堂の西の稜線には大きな搦手があって、八坂神社の周辺は曲輪群がある。本町は集落跡が連続し、根古屋のようである。三坂川を防御線とした館で、南にある上三阪の上三阪小学校までも含まれるとと思われるが未調査である。山頂にある山城で交通の要衝、現在も郡山、須賀川に向かう国道49号線、また、石川、白河、三春領小野新町への道もここから分岐する。岩城領の最西端にある拠点である。

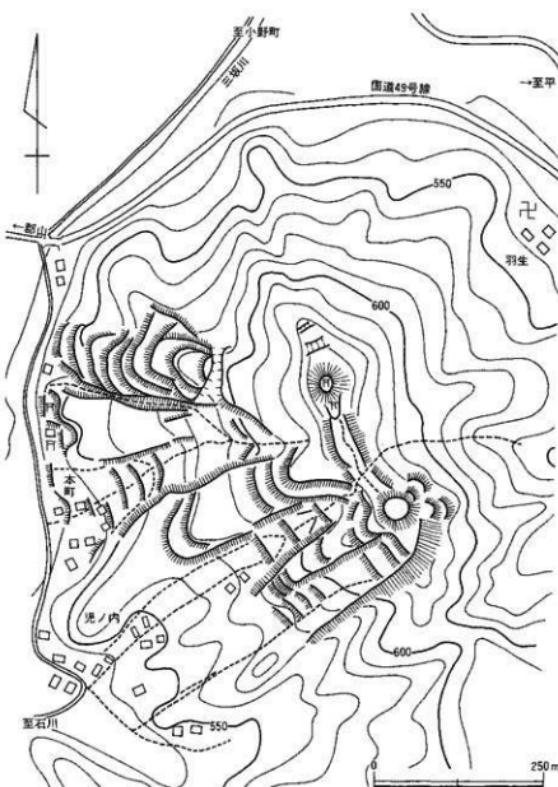
現状: 山麓にある農家の周囲に耕地が分布するが、館の中は殆んど私有林で成木の杉林となっている。

城館の歴史 三坂郷土史によれば、岩城氏家臣、三坂忠信、天正3年(1575)、田村清顕と交戦、敗れ、同中寺館の平山玄藤、岩城氏の応援を得て、取戻す。小田原攻めのあと、三坂兼信会津へ移住と載っている。

(鈴木貞夫)



第408図 三倉城位置図



第409図 三倉城略測図

なかしば とじょう
31. 中柴外城

所在地 いわき市小川町西小川下谷地

築城者 小川刑部入道義綱(父は佐竹常陵介義胤の三男、母は岩崎氏の娘)

時期 室町期

遺構 土壘、空堀、曲輪

概要 室町時代の特色をもつ城で、保存状態も良く、居館の形態を保っている。比高40mの洪積台地にあり、南北180m、東西130mの平坦地は土壘が北部を除いて残存している。特に西側の土壘は高さ3mを越し、外側には空堀も一部残っている。子孫の小川氏の住宅裏にも土壘が一部残り、二重の土壘があった。この郭の北部と北東部は自然の急崖を利用して、曲輪はあまりみられないが、南東部は果樹園となり、居宅跡をもつ曲輪が連続する。南東部には幅は狭いが長い曲輪があって、馬場と呼ばれている。麓にある集落は根古屋

と呼ばれ、宅地裏は急崖が連続している。占地の状況は、海拔67m、比高35mの平坦な河岸段丘の舌状の台地で、小川町全域が視界に入る。

現状: 急崖は照葉広葉樹や竹林となり、郭内は宅地、梨畑、桃園となり、周囲の曲輪も畑となり、私有地となっている。

保存度: 土壘の保存状態は極めて良い。曲輪の周囲の急崖も南東部によく保存されている。(鈴木貞夫)



第410図 中柴外城位置図



第411図 中柴外城略測図

32. 神明館(関小館)

所在地 いわき市小川町関場字高垣

築城者 古山太郎左衛門重彦

時期 南北朝期

遺構 曲輪、空堀、根古屋、蹴鞠場

概要 典型的な丘城。この館に入ると誰でも館であると理解できる。保存の状態も極めて良い。夏井川の左岸にある関場に近い。本丸は円形の曲輪となり、神明神社がある。かつては牛頭天王が祀られていた。この本丸の後側(東側)には深さ20mの空堀がある。この神社の参道は曲輪群を通過するために、両側が土塁のようになっている。河岸段丘を利用した広い面積の曲輪が本丸の北西、南西方向にみられる。各曲輪を囲む急崖は他の館よりも明瞭である。真言宗乗蓮院(恵日寺末寺)跡に建つ大日堂と館の北にある宿の集落は迷路状になって宅地の周囲に土塁もあって、中世的な集落形態を保っている。本丸は海拔79.2m、比高55mの丘陵にあるが、中腹の曲輪は段丘を利用している。本丸

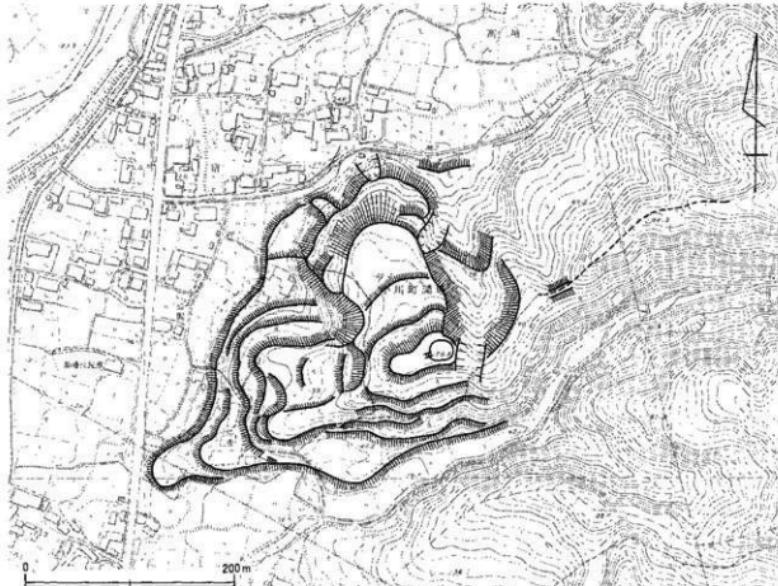
付近は社有地となり、南西部の広い曲輪は梨畠、一部畜舎となっているが地形の変化は少ない。(鈴木貞夫)



第412図 神明館位置図



写真118 神明館遠景



第413図 神明館略測図

33. 比丘尼館

所在地 いわき市四倉町山田小湊字馬上

築城者 白土運隆(『磐城古代記』)・岩城四郎隆治
(『金光寺縁起』)

時期 室町期～戦国期

遺構 虎口、水ノ手、堀切、土塁、水堀

概要 比高約90mの地にあり、丘陵の高所を利用したもので居館型である。西側は谷地に臨み、大手口があり、方形の削平面があった堀切で区切られる。沢地に「殿の水飲場」と伝えられる場所があり湧水がみられる。北側に玉造川(仁井田川上流)が流れる。東側は谷地が入り込み、堀切があったと思われるが、現在は道路となっている。遺構は主郭と棱櫓との二つに分かれており、堀切で区切られる。棱櫓の東方にも頂上を削平した所がある。棱櫓と主郭の間には帯郭があり、主部東方下には三角形の曲輪が認められる。

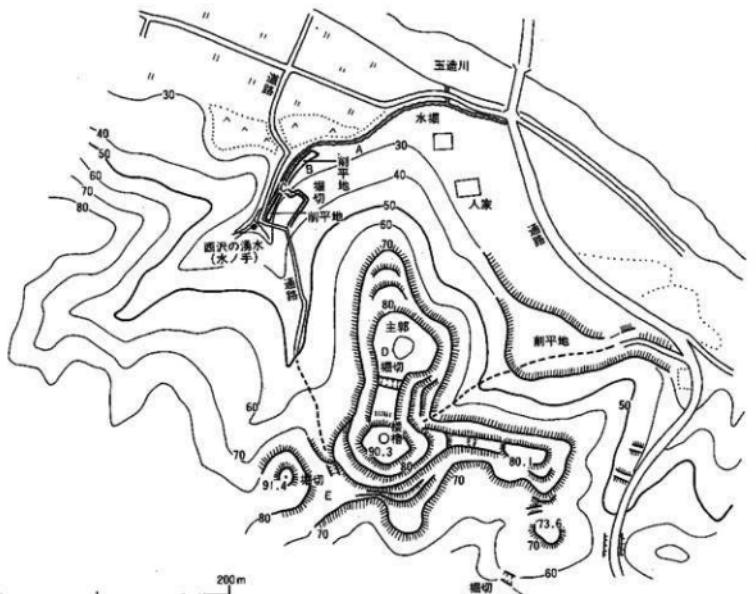
遺構の周囲には土塁状の高まりがあり、その外周には水堀があったと考えられ、部分的に現在も水流がある。

当時は玉造川の流れをひきこんでいたと考えられる。

(芳賀利允)



第414図 比立尼館位置図



第415図 比丘尼館略測図

ながともたて 34. 長友館

所在地 いわき市四倉町長友字大倉、大塚、大宮作地内

築城者 岩城隆忠

時期 室町期まで

遺構 曲輪、土塁、空堀、物見

概要 長友館は、仁井田川沿いの沖積平野に岬状に突出した、半島状の比較的まとまった平坦面をもつ洪積台地と丘陵に占地している。谷頭侵食谷もあり、麓の集落と曲輪の発達にはよい条件をもっていた。

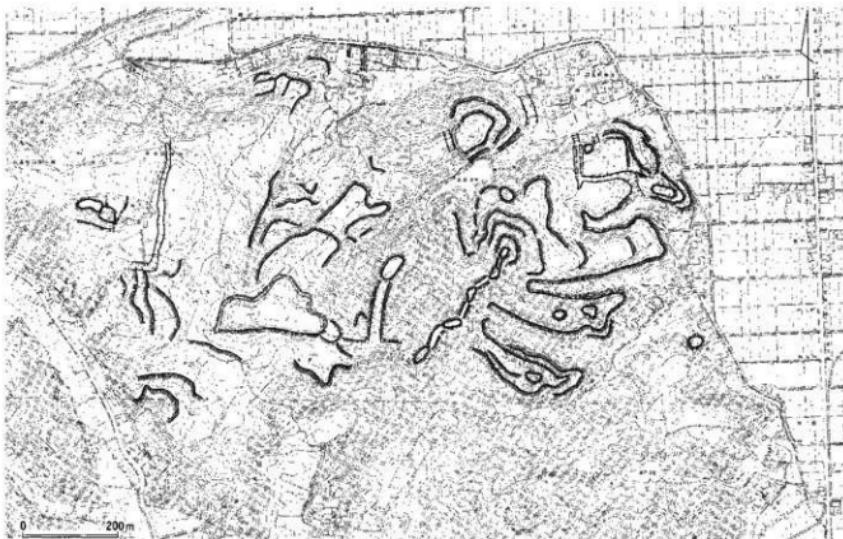
かなり大規模で、現況は松林や杉林等の私有地である。館の範囲であるが、西端は水品神社の所在する所と思われる。荒神平にある農家の東側には、南北に走る空堀が墓地まで続いている。大塚と呼ばれるところ(海拔89.8m)の頂上は、平坦地で、西側と北側には4mの高さの土塁があり、ここが本丸跡と考えられる。その南側の荒地(旧畠)は、家臣の宅地跡を思わせる。さらに、その東方にある海拔90mを越す尾根には曲輪があり、物見と考えられる。熊ノ作・長隆寺付近は、土塁や空堀があって、平坦面は墓地となっている。な

お、東南部は、未調査であるが、古屋敷周辺の台地も本城の城域と思われる。

城館の歴史 この長友館は、岩城氏の本流の発祥の地として重要な位置を占める。15世紀中頃、磐城を統一した岩城下絶守隆忠がこの城より、白土城を攻め、のちその一族が飯野平城を築城し戦国大名となった。この岩城氏が古代より一大勢力をもっていたことは、当城館跡下に広がる条里制地割が、いわき地方で最大の面積を占めていたことからも充分うかがわれる。文献には『江戸時代耕掛日記』等がある。(鈴木貞夫)



第416図 長友館位置図



第417図 長友館略測図

おおもりなで くきのなで
35. 大森館(草野館)

所在地 いわき市四倉町大森字館

築城者 大森彦三郎(『仁科岩城系図』)、草野主殿(『磐城古代記』)

時期 中世

遺構 土塁、曲輪、堀切

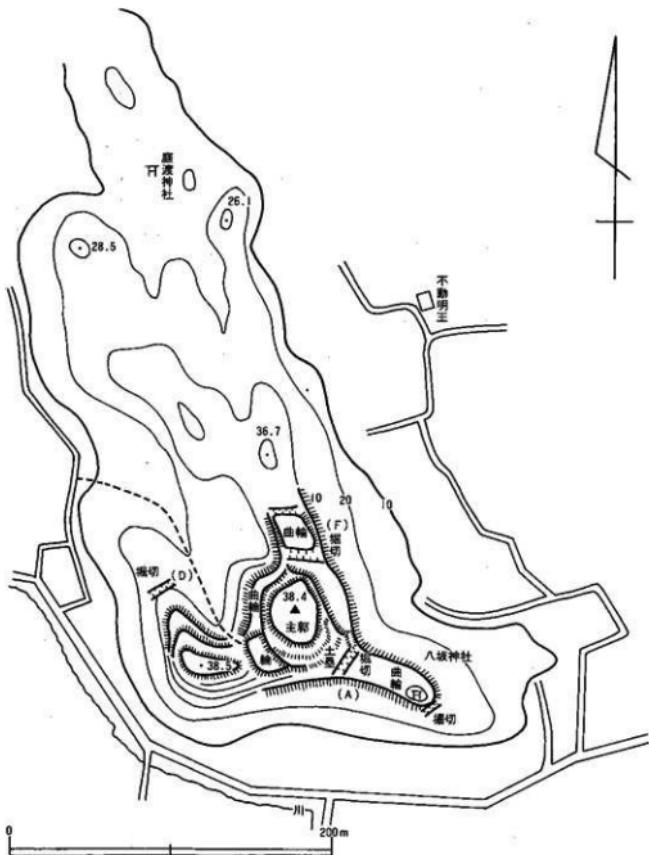
概要 比高約40mの丘陵の末端にあり、居館型である。館地の周囲には土塁跡が見られ、堀切がある。北部の尾根と連なる部分には、この館最大の堀切がある。館地は東西に連なり西側館地は物見の機能も果たしていたと思われる、この

北部には堀切がある。また館地南東側に曲輪があり、これより一段と高い所に八坂神社がある。神社は物見跡と思われ、その所にも堀切が見られる。北西部は尾根続きとなっており、この方面からの攻撃は堅苦ではないと考えられる。

(芳賀利允)



第418図 大森館位置図



第419図 大森館略測図

36. 愛谷館

所在地 いわき市平大字赤井字堀ノ内、大平地区

篠城者 岩城氏か

時 期 戦国期以降か

遺構、曲輪、空堀、掘切、土壁、礎石等

概要 愛谷館は、赤井岳(605m)から南東に伸びる丘陵の南東端、主峰部標高地100mの位置にある。麓からの比高差は、約85mである。当城館の南側裾部には小谷作川、北側には茨原川、そしてさらにはその北側には、一般河川である夏井川が流れている。愛谷館は、昭和55年の好間工業団地造成により、ほぼ全壊しているが、事前の発掘調査によって、その全容が明らかとなつた。造成前の状況は、山林、畠、寺社境内地、宅地であり、所有関係は民有地であった。城城は、丘陵先端裾部の「堀之内」と呼ばれる所を含めて、当丘陵の分岐する北西部までの約1700mという大規模な範囲である。

城館の歴史 愛谷館の縄張りは、大小の曲輪、空堀、堀切、土塁、礎壁などから成り立っている。当丘陵は、夏井川によって形成された河岸段丘であり、主峰と二ノ曲輪との二段の段丘面から成り立っている。この段丘面を利用して北に向かって段状に曲輪配置を行なっており、南側は天然の要害をもって、その防御をしている。居館(主峰)の縁辺部には特徴的な礎壁が見られ、東西の尾根は堀切により分断されている。居館の北側掘据部、すなわち、二ノ曲輪との間には、一条の空堀をはさんで歪みをみせない直線的な土塁が東西に走っている。普請の状況は、削平や土盛り、石積みにより行われているがその状況は特に居館部において顕著である。

なお、愛谷館の遺構より見た特徴は、豊堅を持たないこと、塁に礎が用いられていることなどが挙げられる。

げられる。『愛谷遺跡の概要』(財団法人いわき市教育文化事業団)、中山雅弘「愛谷館ノート」(潮流第11報)等に詳しい。(吉田生哉)

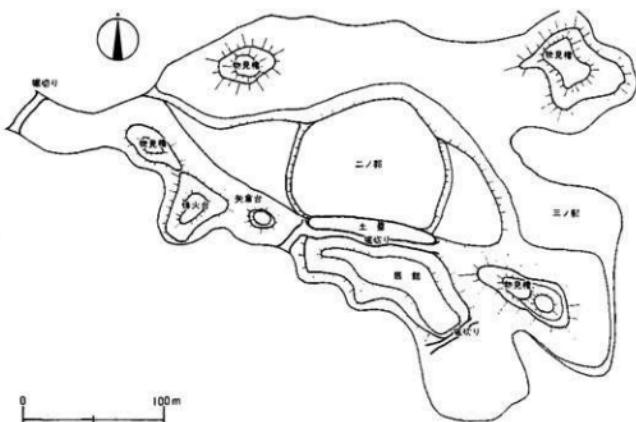
(吉田生哉)



第420図 骨谷館位置図



写真119 骨谷館航空写真



第421図 骨谷鏡略測図

¹⁰ 宮崎清蔵の報告（いわき市会議事録：1978）より転載。

37. 神谷館(座主館、妙見館)

所在地 いわき市中神谷字地曾作

築城者 最初の館主は千葉一族の白土運隆で、神谷殿と称した。

時 期 鎌倉期～室町期

遺構 曲輪、土塁、空堀

概要 丘陵が沖積平野の中に半島状に出ていて最東南端にあって海拔60m、比高55mの丘陵、谷頭侵食谷が数多く、この丘陵に入り込んでいる。

座主館は、東作にある溜池の南にある北東から南東方向に向かう丘陵の稜線にある曲輪群を指し、丘陵端に居館があったようである。ここには土塁が南西部に残り、郭には段差があって宅地のようである。尾根沿いには小さな曲輪群があり、鞍部は空堀(搦手)で切られた曲輪となっている。しかし、地曾作にある座主館は、もっと広範囲であったようである。すなわち尾根沿いに御城原と呼ばれる片寄館、その南にあって、平第六小学校の裏山の安養寺があったといわれる平坦面には曲輪が確認されるなど、この館は規模も大きく複雑な形態をもっている。

座主館は氏神が妙見神社であり、別当を座主といつたので座主館と称した。狭い意味の座主館は保存状態

は良好であるが、平六小裏の広い意味の座主館は埋立用の土砂取場となり消滅した。鬼越を通る旧道は古い道の形態を保っている。民有、共有林の多くには、杉が植林されている。関連地名としては前門、後門、鬼越、御城がある。

城館の歴史 明治11年に大須賀次郎によって書かれた『磐城郡村誌』に以下の記述がある。「岩城義衡の第二子基秀・頴谷三郎と称し、この館にいる。次いで白土入道運隆(後神谷氏)住めり、千葉家の裔なり、故に妙見神を奉す。常州牛淵より、好間丹波守義照(好間太郎左衛門義照)の居館となり、岩城氏の重臣となる。」

(鈴木直夫)



第422図 神谷館位置図



第423図 神谷館略測図

八四：无往蹇若校。无攸利。

いい の たいらじょう 38. 飯野平 城

所在地 いわき市好間町下好間字大館、平字高月、
旧城跡、内郷御台境

築城者 伊賀(飯野氏)、岩城常隆

時期 鎌倉末期～戦国期

遺構 曲輪、土塁、堀切、道型

概要 平市街地の北西に拡がる洪積台地を飯野平と呼ぶ。この舌状台地の全域に占地し、広大な面積をもっている。従来の通称「大館城」と「高月館」および飯野八幡宮を包含する一帯に存在した中世の城館を連続してとらえ、飯野平城として扱った。

① 御台境 この台地は飯野平城には直接には接続はないが、一の矢神社には牛頭天王が祀られて、平坦な台地は小さな段もあって岩城氏の居館であったようである。最近のバイパスの道路工事中に、西南斜面で横穴古墳群が発見されたが、すでに中世の段階で横穴の入口付近が築城工事のため破壊されていたと考えられる。

② 好間町大館 比高70mもあり、通称「大館城」のあった所である。稜線の形態は、本丸に近い位置に曲輪を作り谷を登る敵を上から攻撃する。その下の稜線は、両側の斜面を削り、より急傾斜にしている。尾根の麓に近いながらかだった山脚は切断し、ここからは登れない。またその崖の上と下に曲輪を設けている。谷斜面の特色では、主郭に接近して曲輪を設けて、上下の斜面を急傾斜としている。中腹は上に登るほど急にして、中腹で削った土を山麓まで運び人口的な曲輪を二つ以上作り、谷への侵入を妨げている。北東部の緩斜面の特色は、自然の段丘に加えて、傾斜が緩やかなので、曲輪を40以上も作り、直線で本丸まで登ると最低でも八つの急崖を登らなければならない。空堀(堀手)は丘陵の鞍部にあって、東側の空堀は青雲院の自動車道路として利用している。主郭跡は面積も狭く平坦でもなく、居館よりは詰の城の機能が大である。

③ 飯野平(旧市) 主郭の東に接続する飯野平は比高が30mと低くなる。この飯野平にはいくつかの谷頭浸食谷があつて分断されている。この中に成立時期の異なる高月館がある。ここは鎌倉時代末期から室町期に好鳴莊の預所であった伊賀氏(飯野氏)の居館およ

び好鳴西莊政所が立地し、飯野八幡宮の北側に位置する。この周辺の道路は三叉路で、直角には交わっていない。道幅も狭く屈曲して、行き止まりもあって、極めて計画的である。八幡宮宮司飯野氏の屋敷は、現在なお土塁と空堀をめぐらしている。八幡宮には、一部土塁が残っている。飯野平東端の物見ヶ丘は江戸時代の岩城平城の本丸、二ノ丸、三ノ丸となった。

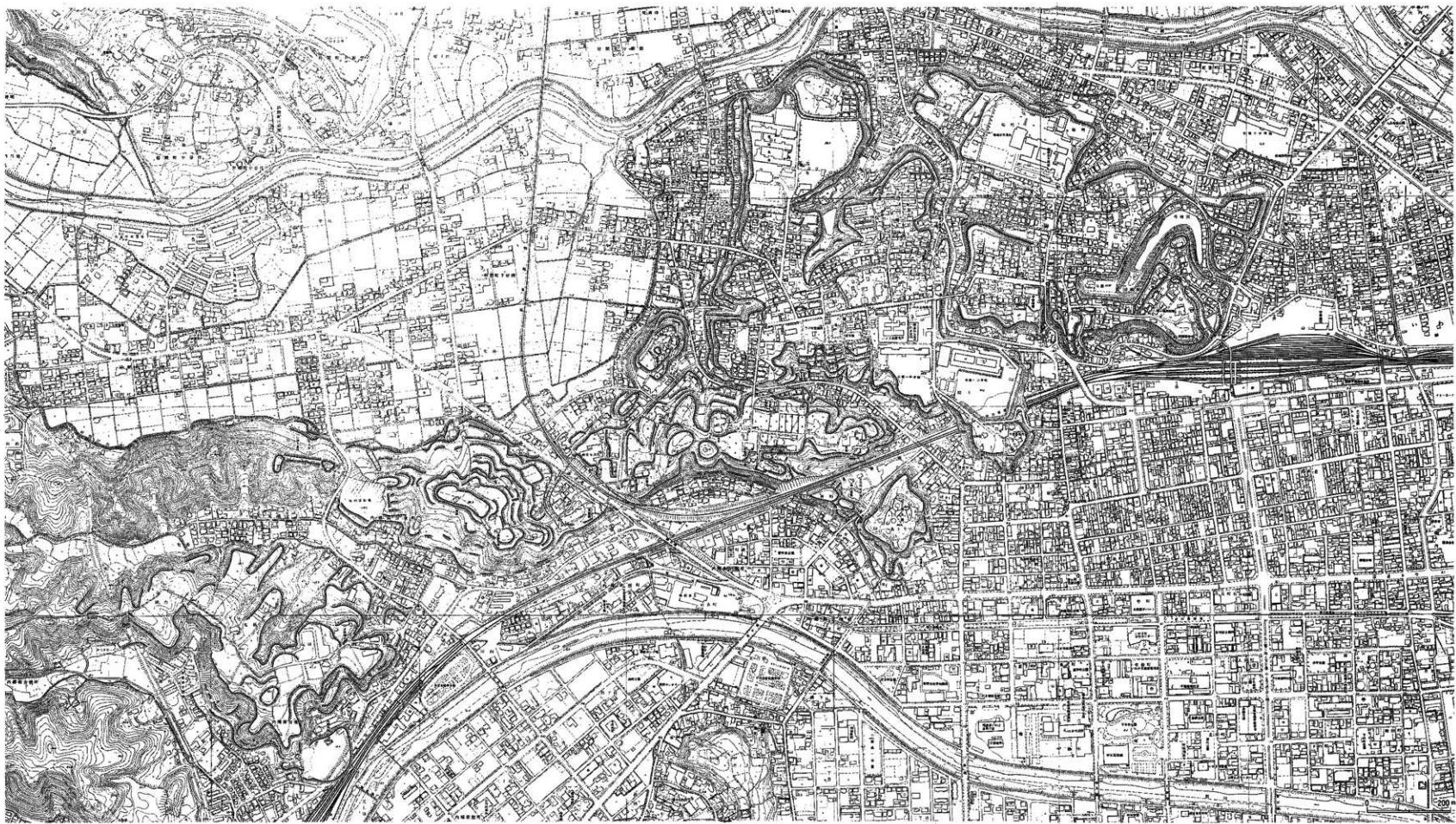
平城の城壁は石垣ではなく、中世の飯野平城の曲輪の崖を再利用して、さらに堀(丹後沢など)をめぐらした。飯野平城跡は現在学校、裁判所、住宅が建てこんでおり、中世の景観は多く消滅した。しかし、「大館城」跡と高月館(宮司屋敷)跡および各曲輪の規模と切崖などに、なお遺構の保存度が良好な部分もある。

城館の歴史 飯野八幡宮が鎌倉初期以来、飯野平の中枢部に位置し、近接する好鳴莊政所および預所屋敷を中心城として発展した。鎌倉末期から南北朝時代にかけて預所伊賀氏と地頭岩城氏の確執がみられたが、岩城氏はしだいに国人領主化し、やがて戦国大名となつた。その過程で岩城氏は、下總守常隆の代文明15年(1483)、白土城より飯野平城(大館城)に移るに至つた。そして伊賀氏の高月館の地を侵略し、さらに八幡宮二の鳥居のあった薬王寺台(現松ヶ岡公園)にまで城地を拡大した。城の南麓に御厩宿、新町、北東麓に久保町、東側に古鍛治町等の城下町を形成したのである。

(鈴木貞夫)



第424図 飯野平城位置図 (1/50,000)



第425図 銀野平城略測図

39. 白土城

所在地 いわき市南白土館岸、竜沢

築城者 岩城隆忠、親隆、常隆の三代

時 期 室町期

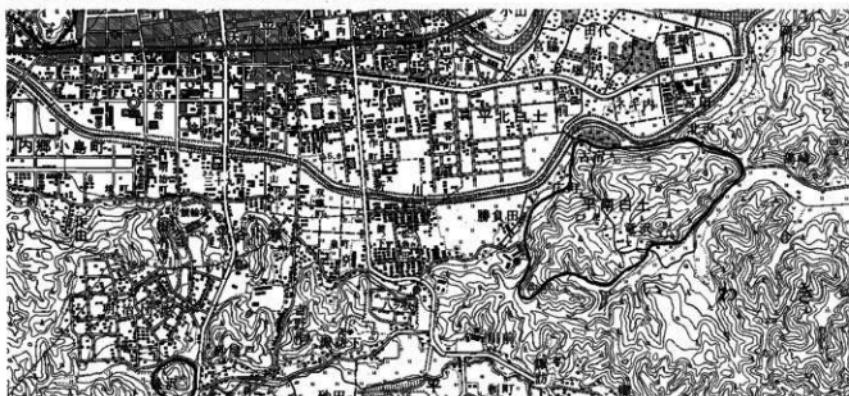
遺 構 曲輪、土塁、堀切り

概 要 南白土の磐城第二高等学校の東に接続する丘陵で、北側に新川、南には市営墓地、東は菅波に接する。館の中の数箇所に見られる標高100m内外の頂上からは、ほぼ現在のいわき市の全域が視界に入る。地名的にはあまり城館に関連するものはない。この白土城の特色は、南北朝時代以来の山城であるといえる。東西1km、南北0.9kmもあり、曲輪の発達も著しく、その数は100をこえる。南側の丘陵の尾根には曲輪もあるが、1m位の幅で土橋を形成する。この両側は削平され急崖をなし、先端の稜線もまた削られている。虎口は数箇所あるが、道の両側にある曲輪から見下ろすことができる。樹形や馬出しはみられないが虎口にいたるまでは多くの曲輪の中を通り、あるいは尾根筋から見通しうる中腹の小道を通るなどして、道が防御と馬出しの意味をもたせてあるものと思われる。土橋は三ヶ所あり、しかも頂上部に多い。土橋は頂上の曲輪と別の曲輪を結ぶ役割をもっている。曲輪のない斜面は傾斜が約37度を超えるが、ほとんど人工の手が加わった急崖である。山麓部の畠、道路、宅地が一段と高くなっているのは、斜面を削った土を堆積させてい

るかららしい。また数多くの支谷にも曲輪と急崖があり、これも前記の工程によりできたようである。館主の居館と郎等の居住は竜沢付近と考えてよい。竜沢の旧遠藤宅は空堀と土塁に囲まれ、池をもつ庭跡も認められる。また、その周囲の農家にも土塁が見られる。増福寺の南の平坦地には小さな段が連なり、宅地跡の特徴を示す。この付近が城の居館と思われる。また、丘陵の頂上部にも土塁や建物もあったようである。

この城は、その築城規模から推して白土氏と岩城氏とのそれぞれの館が複合して成立していたようでもある。比高100m内外と広い面積を攻めるのは難しい。開発の波が及んでいない点で貴重である。この地は増福寺をはじめ、少数の私有地であるが、細分化されていない土地所有も保存には一助をなしている。

城館の歴史 築城年代についての詳しいことは明確ではないが、南北朝の動乱期(1333~1392)に岩城家の一族である白土氏により築城されたようである。15世紀の中頃、磐城を統一した岩城下総守隆忠が長友館(四倉町長友)より本城に移り、多くの郭を造築しながら拡張していったらしい。当城は岩城家の本城として、隆忠、親隆、常隆の三代にわたり栄えた。岩城氏はこの城において磐城地方の統一をなしとげ、戦国大名としての名を高めた。常隆が飯野平城に移り住んでからは、白土家・塙家の重臣が各々の郭に住居し、岩城家一族の本城を守備した。(佐藤孝徳)



第426図 白土城位置図



第427図 白土城略測図 (笠木東大原図)

40. 久世原館

所在地 福島県いわき市内郷御駿町久世原、番匠地
築城者 不詳

時期 15世紀前後

遺構 曲輪、堀切、土塁、掘立柱建物跡、土坑、
井戸、溝

概要 本館は、阿武隈山地が太平洋に向かって延びる一支丘陵に位置する。西端は堀切により分岐し、長軸650m、短軸250mを有する山城。69mの最頂部は裾部より約50mの比高差をもつ。現況は、杉と雜木の山林で保存状況は良好である。しかし、開発が進み城館の原形の3分の2は湮滅した。縄張りは主として東、南側にあり、その頂部から中腹、裾部にわたって普請されている。

城館に関連する地名として番匠地、上宿、下宿がある。また、城の平、城の腰、大平、小平、太夫作などの伝承を残す。丘陵東端部分の南東中腹には、宝鏡印塔と石仏が鎮座する。塔は室町時代中頃に比定されている。

幹線道路網の整備による改良工事の事前発掘調査において貴重な成果がえられている。曲輪や裾部からは柱穴群や掘立柱建物跡が、裾部の低地からは屋敷跡とみられるさまざまな遺構が発見された。径30cmほどの柱痕や建物跡に関連する小規模な排水溝、大小の土坑、井戸跡などがある。

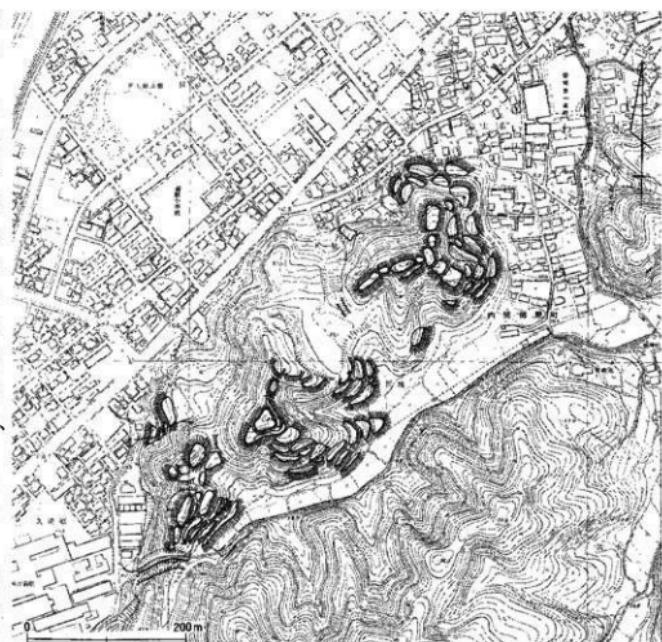
遺物は、遺構の外より出土するものが大半を占める。舶載陶磁器では、龍泉窯の青磁、景德鎮窯の青花磁器、そのほか青白磁、茶入れ、県内初見の13世紀の白磁がある。

また、15世紀に比定しうる獸脚をもつ角型の香炉や華瓶は全国でも数少ないものとして注目される。国産品として、瀬戸・美濃・志野・常滑・渥美・产地不明の陶器、土師質土器、瓦質土器がある。これらは13世紀前半から16世紀前半の範疇に包括される。さらに近世の資料として伊万里、大堀の陶磁器も少なくない。

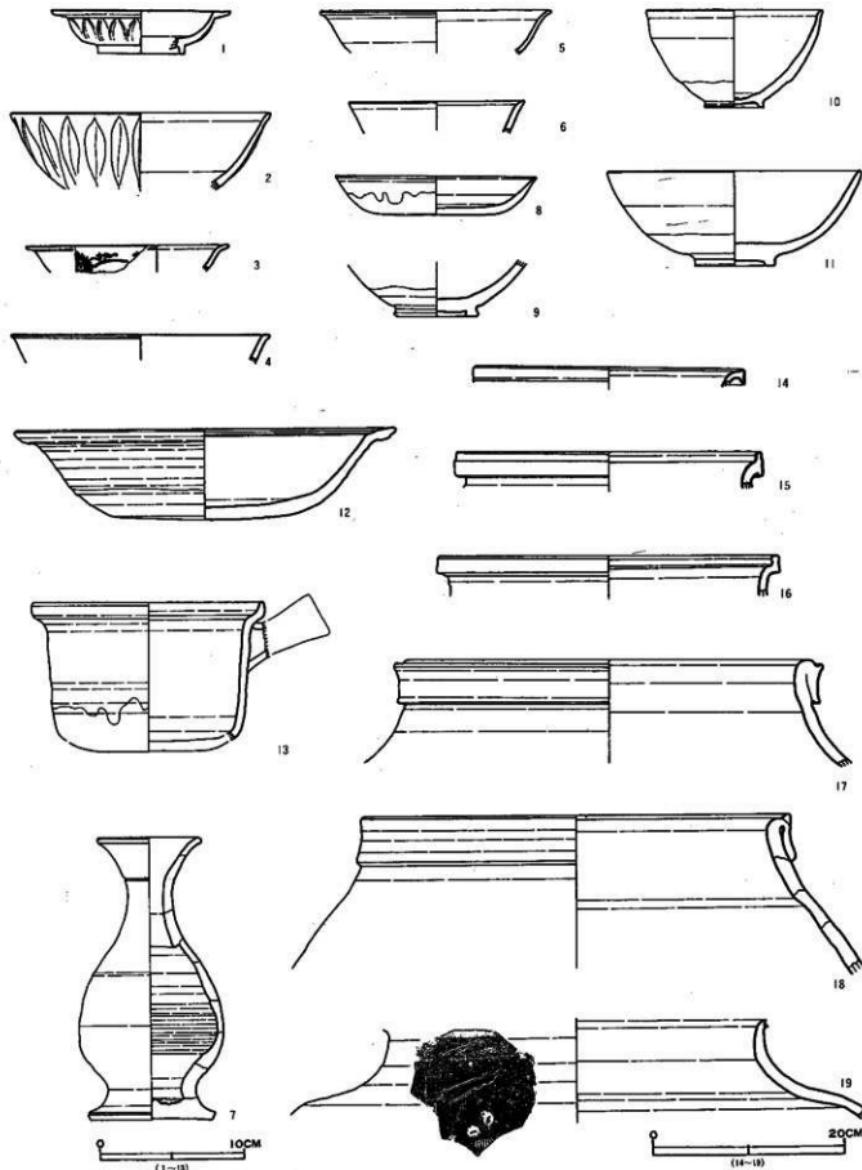
(高島好一)



第428図 久世原館位置図



第429図 久世原館略測図



第430 久世原館・番匠地遺跡出土遺物

1~6 船載陶磁器 (1~2 青磁 3 染付 4~6 白磁)

7~19 圓底陶器

「久世原館・番匠地遺跡の概要1」(財)いわき市教育文化事業団による

さ や と あらかわなで てんじんばと
41. 砂屋戸荒川館(天神館)

所在地 いわき市平上荒川字砂屋戸

築城者 不詳

時期 南北朝期～室町期

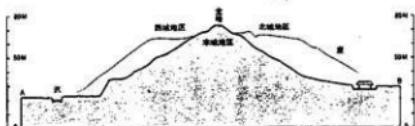
遺構 (曲輪、空堀、堀切、堅堀、櫓台、建物跡等) 消滅概要 砂屋戸荒川館は、北側丘陵から南伸する、やや狭細な舌状台地の先端に位置しており、標高72m、麓からの比高は約50mである。東西南の三面は急傾斜をなし、南眼下には草木川が、また西側にはそれに流れ込む幅約3mの小沢が見られる。昭和59年の宅地造成工事により完全消滅したが、造成前の発掘調査によって、その全容が明らかにされた。造成前の状況は、山林と宅地で、丘陵頂部には天神様が祀られていた。所有関係は、すべて民有地であった。地元では、当丘陵地を「天神館山」と呼んでおり、「荒川館」との呼称はないが、一応ここでは先学の例を尊重し、「砂屋戸荒川館」と呼んでおく。なお、この他に城館跡に関連する地名として、「館下」「堀ノ内」「谷川瀬」「砂屋戸」などが残っている。

さて、砂屋戸荒川館の縄張りは、大小の曲輪および空堀や堀切等から成り立っている。曲輪の配置は、主峰のある本城地区を中心として、周囲に帯曲輪などの大小の曲輪を配しており、やや規模の小さい空堀によって、北側地区と西側地区からの侵入を困難にしている。土星の見られないのが特徴で、小口は丘陵の南側と考えている。普請は、地質構造の軟質を利用しての削平と、その土捨てを利用しての盛り土により行われている。作事では、発掘調査によって検出された柱穴群により、矢倉跡か主峰部や本城地区の北端と西端に、長屋跡あるいは倉庫跡などの建物跡が本城地区の南側等に推定される。発掘調査により検出された建物は、陶磁器・土師質土器・石硯・錢貨・針状銅製品等、14世紀から15世紀

代の遺物群である。「荒川館の概要」(財団法人いわき市教育文化事業団1985年)に詳しい。(吉田生哉)



第431図 砂屋戸荒川館位置図

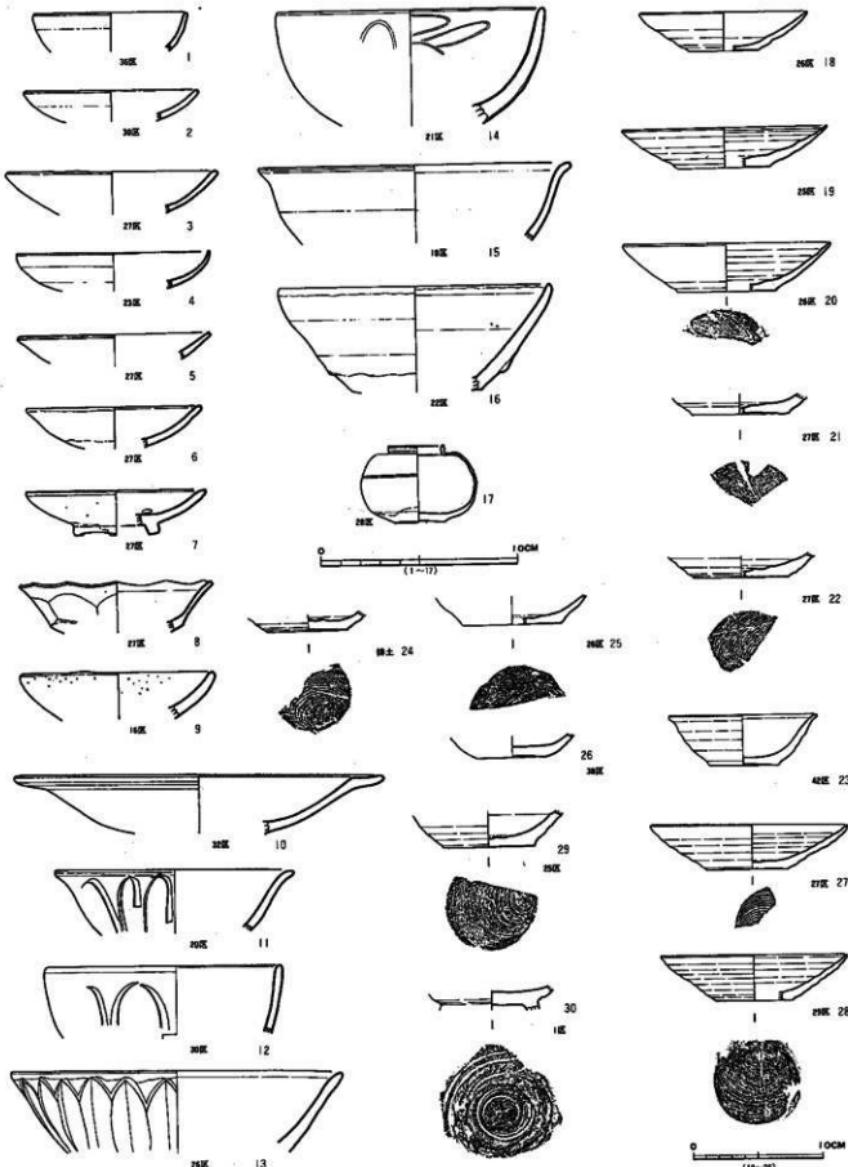


第432図 砂屋戸荒川館断面図

『砂屋戸荒川館遺跡調査報告』(いわき市教育文化事業団:1985)より転載



第433図 砂屋戸荒川館略測図



第434図 砂屋戸荒川館出土遺物

1~17 白磁及び青磁(鉢載品) 18~30 土師質土器

「砂屋戸荒川館跡発掘調査」(財)いわき市教育文化事務団体による

42. 高久の古館(小館)(県史跡)

所在地 いわき市平下高久字小館

築城者 不詳

時期 中世

遺構 曲輪、土塁、堀切、水ノ手

概要 太平洋に向かって比高を減じながら東延する丘陵の先端に占地する。丘陵の南側を滑津川が東流し、北側には金古溜池(金子の提)が築かれ周辺には鉄滓散布地がある。A地区は比較的良く遺構が残っている。頂部中央には基底幅4~5m、高さ約2mほどの土塁が南北に伸びる。また帶曲輪が二段ないし三段にまわり、中世城館の景観を残す。B地区はA地区より低く、広い平坦地である。A地区とC地区は自然の谷により分断されている。C地区とD地区は堀切状の切り通しにより分断されている。現況はA地区が山林と宅地、B地区が宅地と墓地と畠地、C地区とD地区が山林、畠地、宅地である。周辺には馬場・ボラなどの地名がある。

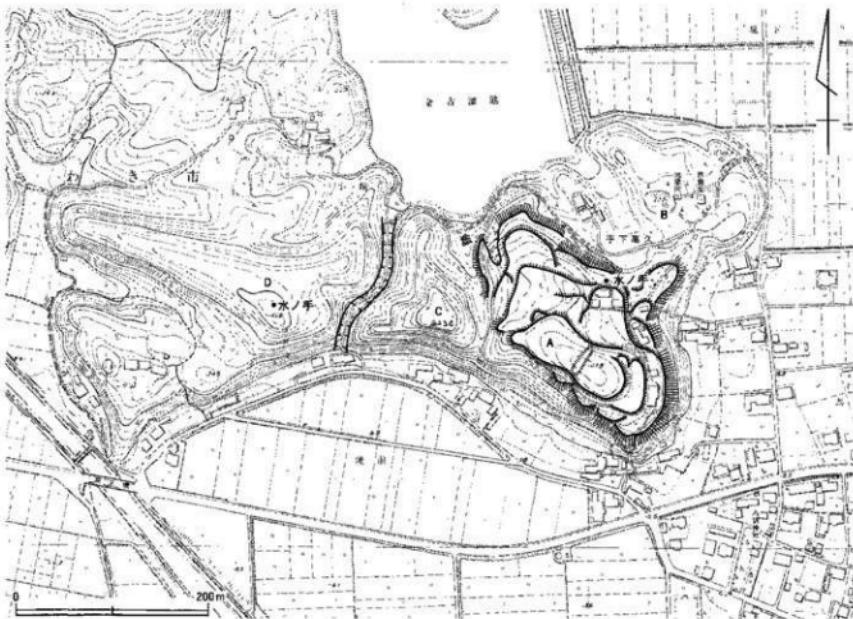
城館の歴史 高久の古館に関する中世文書は未見であり、城館の歴史も明らかでない。高久に所在することから、高久系岩城氏の一族の城館であるとする説がある。伝承では高久小次郎隆衡、小館小次郎隆久等を館主とする。戦国時代末期には諸家譜から富岡氏が高久を知行していたと推定される。

鍋田三善『磐城志』・神林復所『磐城四郡小館記』・『いわき市第8巻』『遺跡解説』を参考にされたい。

(中山雅弘)



第435図 高久の古館位置図



第436図 高久の古館略測図

こいづみたて

所在地 いわき市平小泉字東、平上高久字日向

築城者 小泉弥三郎

時 期 室町期

遺構 曲輪、腰曲輪、堀切

概要 太平洋に向かって延びる標高60mの丘陵頂部に占地する。現況は杉、雜木の山林である。丘陵北側下方は、東流する滑津川低地を利用した水田地帯となっている。また、館跡の北直下には畠地が多く、これに接する集落のなかには「屋敷」などの屋号を残す民家がある。

最頂部の曲輪は、幅10.0m、長さ15.0mと比較的小規模である。本曲輪には幅2.0m、高さ0.4～0.7mの土壘をほぼ直線的に築いている。また本曲輪の北・西・南には、幅約2.0m～5.0mの腰曲輪を「U」字状に設けている。堀切の幅は、約2.0m、深さ1.5mと小さい。関連する地名として、字西の南側に「馬場」がある。

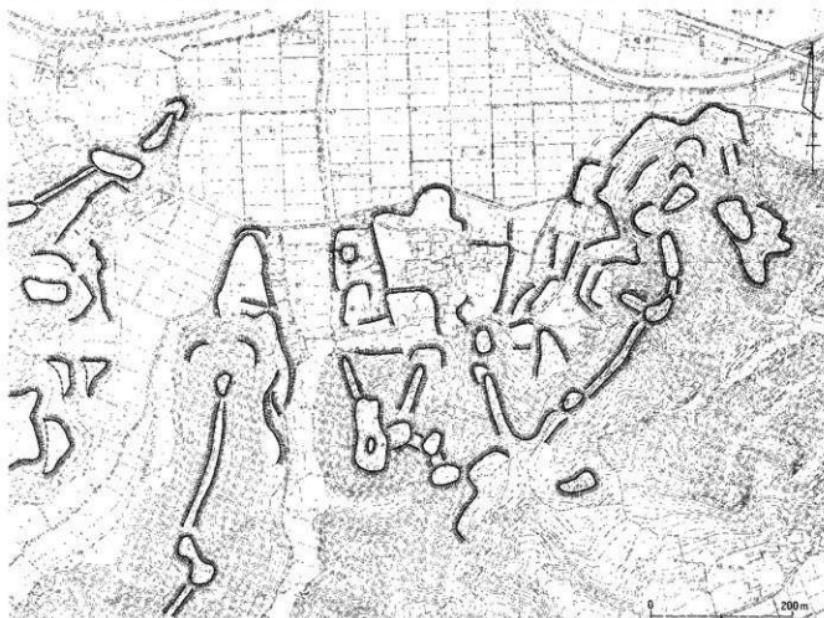
城館の歴史 小泉家は、隣村の中山家の一族と伝えられ、岩城隆三氏所蔵永正6年(1509)の文書には、「小泉筑前守」の名が散見する。

菩提寺としては、曹洞宗瑞光寺がある。「一溪元飼和尚」の開山とされ、天文19年(1550)に建立とある。氏神は貴船神社で、古くから坂本家が神官であったという。

（佐藤孝徳）



第437図 小泉館位置図



第438図 小泉館略測図 (新本山下原図)

か どお のじよう
44. 上遠野城

(八潮見城、伏見八潮見城、八塙城、袖遠野城)

所在地 いわき市遠野町大字上遠野字本町

築城者 上遠野氏

時期 ～江戸期

遺構 曲輪、空堀、堀切、土塁、石垣、小口、門、
水ノ手、櫓台、堅堀道等

概要 上遠野城は、南から北に伸びる標高200m級丘陵の先端部に所在する。主峰の標高は約220mで、麓からの比高は、約110mとなっている。主郭部の東西南は急崖となっており、東側及び、南側眼下にかけて上遠野川が蛇行する。現況は、山林、畑、寺社境内地、学校敷地であり、その所有関係は民有地、寺社有地、公有地である。残存状況は、きわめて良好で、小学校及び中学校建設時に一部破壊されたと思われるが、主峰及び主郭部等大部分は残存している。当城館跡は、麓の中学校校歌にも歌われているように、史跡としてつとに知られているところであるが、市や県等の指定は受けていない。城館の範囲は、北側に続く丘陵の尾根を遮断する堀切より南側全域で少なくとも、現在中学校の所在する台地や円通寺付近もふくめたものとしておきたい。縄張りは、大小の数百におよぶ曲輪群、空堀、堀切、土塁、石垣、小口、水の手、櫓、門、橋、堅堀道等から成り立っている。曲輪は、丘陵の東西南の尾根等に無数に認められるが、今回図示したのは、丘陵頂部の主郭部のみである。このうち、主郭部において標高値が一番高い曲輪は、北西側の「た」の曲輪であるが、各遺構の配置関係から、ここでは若干の差で次に標高値の高い「い」の曲輪を主峰としておきたい。空堀は、規模は小さいが、主峰南に曲輪の連携を断つように認められる。また、堀切は、北側尾根や東側尾根に數本見られ、南側斜面には堅堀様の遺構も確認されている。土塁は、主郭だけで4ヶ所見られるが、いずれの土塁も北側縁辺部に構築されている。中でも規模の大きいものは、主峰の北側と東側にかけてカギ状に屈曲する土塁で、上部幅は広い所で10m前後を測り、土塁外側が崖下となっているために、その比高は10mを優に越すものである。石垣は、主郭中央部の特に南側に多く認められる。すべて野面積みで、

使用石材は付近で容易に入手できるカクセン岩が主体である。小口は、各曲輪の隨所に見られるが、坂小口や折れ・歪みをもった小口などさまざまである。水の手は、明確ではないが、水のたまっている円形状の凹みが3ヶ所ほど見られ、あるいは、それが井戸であるかもしれない。櫓と思われる所が、主郭東端及び北端に認められる。また、門・橋と思われる所が、主峰南側に見られる。これは、「ソロバン橋」という伝承も残っているところから、ほぼ間違いないと思われるが、おそらく、先述の空堀と連携しての施設と考えられる。主郭に至る道は、現在主に主郭の北東側へ至る道、南眼下の中学校より主郭の南西側へ至る道、小学校の北西側より主郭北部に至る道の三本が確認されている。いずれの道も道幅狭く、必ず腰曲輪等の真下を通過するようになっている。以上、当城館の遺構を見てきたが、残存状況はきわめて良く、その復元が可能であり、諸施設の工夫が充分読みとることができる。

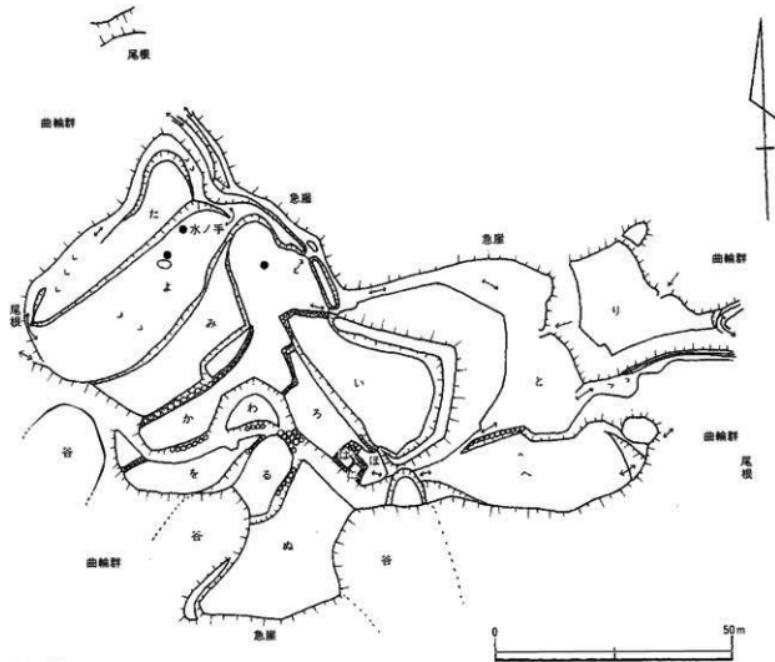
なお、当城館の歴史については、今後の検討課題であるが、上遠野氏については、「遙なる流れ—上遠野家系図上・下」(昭和61年、遠藤巖・江口真一著)に詳しい。(吉田生哉)



第439図 上遠野城位置図



写真120 上遠野城遠景



第440図 上遠野城略測図

45. 沼之内館

所在地 いわき市平沼之内字北之内・平神谷作字古屋敷・方利作

築城者 志賀氏

時期 戦国期

遺構 曲輪、堀

概要 比高50m程の丘陵に占地し、東麓に「内城」と称する地域がある。「鍛冶屋敷」もあり鉄滓が出土する。北側の山麓には「古屋敷」と称する地域があり、微高地となっている。この一角には大永年間に開山の修善院西方寺(真言宗)があり、家臣屋敷の所在地を推定させる。

山頂には約2,000m²の曲輪があるが、眺望よく、楓葉、標葉両郡の海岸をのぞむことができる。沼之内港の北岸上にある富ヶ崎は「館ノ山」と称し、海上の戦略を扼した支城であったと考えられる。

城館の歴史 室町時代の中頃、すでに領主が志賀家であったことは、「白土家文書」や「志賀文書」に明らか

かである。

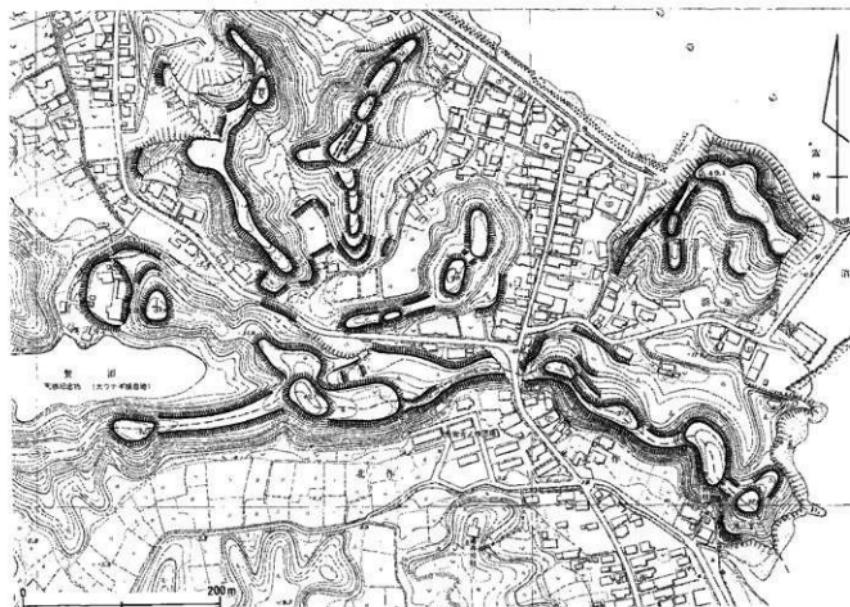
志賀家は天正年間に弾正と称し、岩城家から船の所有を公認された。水軍を指揮していたのであろう。

密蔵院は志賀家の菩提寺であり、同寺の過去帳によって、志賀家の臣団の有力者の存在が推定される。すなわち、現在も沼之内地区に多い姓名である大平、山野辺、鈴木や、神谷作にある箱崎氏などである。

志賀弾正家は、後に茨城県北茨城市に移住し、同地の志賀家は現在も古文書を所有している。(佐藤孝徳)



第441図 沼之内館位置図



第442図 沼之内館略測図 (全図面原図)

みずのやなて
46. 水野谷館

所在地 いわき市常磐水野谷町諫訪ヶ崎

築城者 水野谷氏

時期 戦国期

遺構 土壘、堀切、曲輪

概要 小曲輪が複雑に残存する。尾根を寸断するようにして犬走り状の土橋によって連絡されている。土橋の両側は鋭い切崖になっている。頂上部は主郭とみられ、現在稻荷神社境内となる。北東の中腹に諫訪神社があり、一つの曲輪を形成していた。その東に土壘によって囲まれた「殿屋敷」と称される曲輪がある。

その周囲に、家臣団の

屋敷跡と称される曲輪がある。山麓に「水野谷七旗」と伝える家臣屋敷が現存し、後背の「作」を所有して段々畑を耕作している。この畑はかつての梯郭を構成したと考えられる。

城館の歴史 『磐城四郡小館記』には「水野谷清三郎隆秀コニオル」と述べてながら、「或ハ坂本左衛門尉代コニオル」としている。坂本左衛門尉は岩城家の執事であり、水軍に関与している。坂本姓は市内江名および下大越地区に多く、両地区とも海岸に面し、ともに諫訪神社をまつる。水野谷館の主が坂本氏であるとすれば、遺跡内に現存する諫訪神社との関連に注意する必要があろう。

(佐藤孝徳)



第443図 水野谷館位置図



第444図 水野谷館略測図（佐藤孝徳原図）

みさわきて
47. 三沢館

所在地 いわき市常磐三沢町日吉下、館下地内

築城者 不詳(岡本氏系か)

時期 戦国期

遺構 曲輪、堀切、掘立柱建物、井戸、土坑等

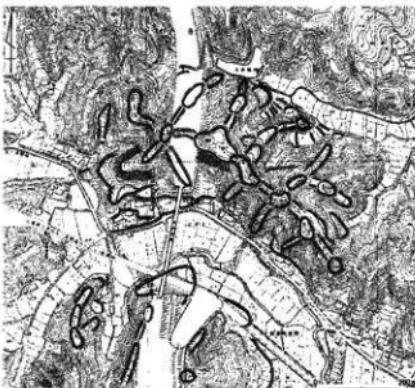
概要 三沢館は、南から北に伸びる丘陵の先端に位置し、主峰の標高値は48mで、麓からの比高差は約37mである。北側眼下には、藤原川の支流の矢田川に流れ込む三沢川が東流する。当城館跡は、昭和58年に施設された国道6号常磐バイパス、および、常磐江名港線により破壊され消滅しているが、工事前の発掘調査によりその全容が明らかとなった。かつての状況は、山林と寺社境内地で頂上部には、日吉神社が祭られていた。所有関係は、民有地と区有地であった。三沢館の主要城域は、主峰南側直下に見られる堀切より、北側の丘陵部分と思われるが、その堀切のさらに南側後方、すなわち、丘陵が張り出す基部に堀切が認めされることから、ここではその範囲をその堀切より北側部分全域としておきたい。

繩張りは、数段の主要な曲輪と帶曲輪、数条の堀切、矢櫓台等から成り立っている。主峰の南側後方は、堀切により遮断、東側と西側中腹には腰曲輪を配し、北側に向かい階段状にやや広い曲輪を配している。III曲輪の北西端に、矢櫓台と思われるものが見られ、同曲輪の南西隅には湧水が見られた。このほか、発掘調査により、井戸跡がIV曲輪南側に二跡確認されている。また、III曲輪からは、掘立柱建物跡群が検出されており、居館跡や長屋跡等が推定される。発掘調査により検出遺物は、陶磁器・土師質土器・銅鏡・泥塔など多數である。岡本氏関係資料も含めて、『日吉下遺跡』(いわき市埋蔵文化財調査報告書第9冊、1983年財団法人いわき市教育文化事業団)に詳しい。

(吉田生哉)



第445図 三沢館位置図

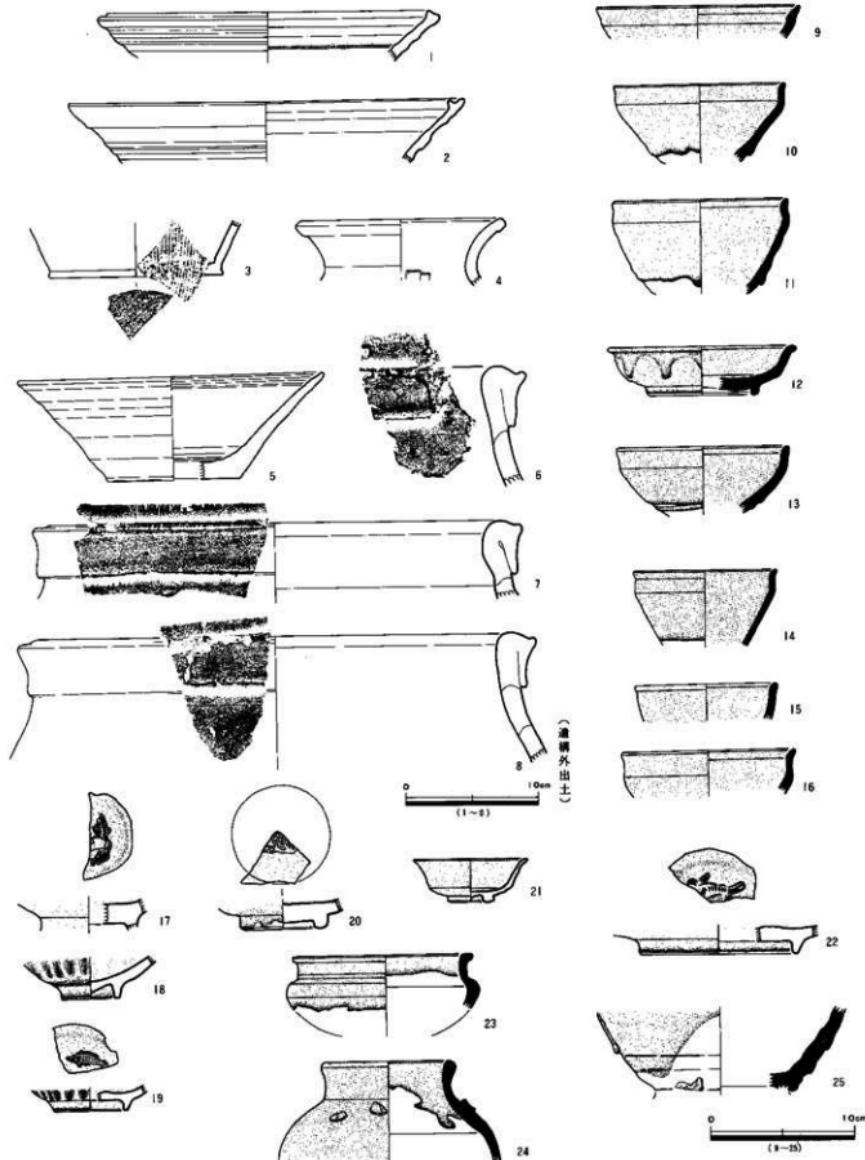


第446図 三沢館略測図 (鉛筆原図)



第447図 三沢館(日吉下遺跡)繩張り図

『日吉下遺跡』(〔附〕いわき市教育文化事業団)による



第448図 三沢館出土遺物

1~16・23~25 南器 (1~5 舟 3 摺鉢 4~24~25 盆 6~8 塵 9~11~13~16 頭 23 香炉)

17~22 磁器 (17~19~21 舟 20~22 盆)

*古文書記載(いわき市歴史委員会編)「いわき市歴史文化(事典)」による

かみみな おたて
48. 上船尾館

所在地 いわき市常磐関船町南館・館下・馬場・志座

築城者 六郎隆重(『磐城四郡小館記』)

時期 戦国期

遺構 土壘、堀切などほとんど消滅、曲輪、道型

概要 近世の浜街道の湯長谷宿と湯本宿の中間に位置し、上船尾宿に近接する。(上船尾は明治初期に閑村と合併し、閑船と称したため、これまでは、閑船館と称していた。)

中世においても旧街道を扼する要衝にあり、街道の西側の丘陵を利用して築城した。字館下の畠地から青磁器片を含む多量の陶磁器片や土器片が出土する。

青磁器は龍泉窯産と推定される。なかには、景德鎮の玉追獅子紋のある物もある。

城館の歴史 『薬王寺門末由緒記』によれば、曲輪の一角にあった勝藏院(真言宗)は天文20年(1551)の開基と伝える。この寺の本尊は愛宕將軍地蔵尊である。
(佐藤孝徳)



第449図 上船尾館位置図



第450図 上船尾館略測図

(全空木貞天原図)

しもふな おだて ふなおだて
49. 下船尾館(船尾館)

所在地 いわき市常磐下船尾町居作、中烟、古内
築城者 岩崎氏のち、船尾周防守の養子として、岩
 城常隆の子息

時 期 室町期～戦国期

遺 構 曲輪、門

概 要 藤原川と浜街道を扼する要衝にある。島倉
 館に相対する。遺跡のある一帯は俗称笛ヶ森と称し、
 笛ヶ森觀音堂のある曲輪が主郭部と考えられる。字居
 作が居館跡とみられるが現在は宅地となり遺構は認め
 られない。この一帯からは、古代末から近世にかけて
 の陶磁器片が出土する。觀音堂から東に下る道の途中
 に門跡と思われる所があり、桟型を呈する。

城館の歴史 「白土文書」によれば、船尾周防守の
 养子として岩城常隆の子息をあげている。船尾氏は本
 来、岩崎家の臣であったが、この段階で岩城家と結び、
 従来の臨済宗から曹洞宗に改めて梵音寺を建立したと
 いう。同寺の境内には室町時代の宝篋印塔があり、開
 基の墓と伝えられる。

熊野神社は岩崎家の氏神であり、分家の越多和大宝
 院(磐崎郡年行事)は修験寺として岩崎郡を支配した。

(佐藤孝徳)



第451図 下船尾館位置図



写真121 下船尾館近景



写真122 下船尾館遠景



第452図 下船尾館略測図 (鈴木尚夫原図)

50. 住吉館(玉川城か)

所在地 いわき市小名浜住吉字^{かわら}搦町・搦

築城者 北郷(小川)刑部大輔隆勝

時期 室町期～戦国期

遺構 曲輪、腰曲輪、土塁、石垣、空堀

概要 藤原川左岸の独立丘陵上に占地する。館は中央の空堀によって南北に分かれ、頂部は高さ24.5mを測り、平坦部北縁には土塁が東西に走る。土塁の一所には石垣がみられ、その北斜面には幅3.40mほどの腰曲輪(犬走り)が東西にみられる。空堀はかなり幅が広く、馬場として利用された可能性が強い。現在、館として保護されている所は、館下の真言宗遍照院の所有地が大半を占める。遍照院は文安元年(1444)鎌澄法印によって中興され、近くの延喜式内社である住吉神社の別当である。館の裾部崖には数体の磨崖仏があり、いわき市の指定文化財である。館を中心として、城下町のような町わりをしており、搦町・搦・浜宿・大町・新町などの地名が残っている。また、「堀ノ内」という俗称が、保育所前一帯に聞かれる。

城館の歴史 『群書類從』本「磐城系図」によれば、

岩崎隆安の三男として隆頼があり、住吉殿と称されたようである。住吉村は岩城隆三氏所蔵文書によれば、中山氏が一部領したようであるが、中山氏の祖は住吉殿隆頼の兄であるから、住吉家と中山家は特に関係が深かったのであろう。一説によると住吉に多い苗氏の野崎家の祖が館主であったともいう。

『雜纂磐城史料』・『磐城古代記』・『自他門由緒記』などを参考にされたい。(佐藤孝徳)



第453図 住吉館位置図



第454図 住吉館略測図 (全木良夫原図)

51. 島倉館(城)

所在地 いわき市泉町本谷字館、堀ノ内数馬
いわき市小名浜島字犬吠、磐井沢前屋

築城者 岩崎氏

時 期 室町時代

遺 構 曲輪、石積

概 要 平野の中に半島状に突出した標高87.8mの丘陵にある。東麓すぐ近くに藤原川が流れる。対岸に住吉館・住吉神社(式内社)がある。

北麓の島地区にはこの山城の外堀という伝承をもつ「長沼」がある。島字前屋・西屋は「侍屋敷」あとと伝えられる。

南麓の字堀ノ内側に城主居館があったと考えられる。

東西に走る尾根の中間部に高さ3mほどの切崖を擁する曲輪があり、主郭部を形成する。この主郭部から東西にのびる尾根の両翼端に出曲輪をもつ。

主郭部付近からは焼米や土器片が出土する。

主郭部へ通じる道は、北側の島と南側の堀ノ内からついている。

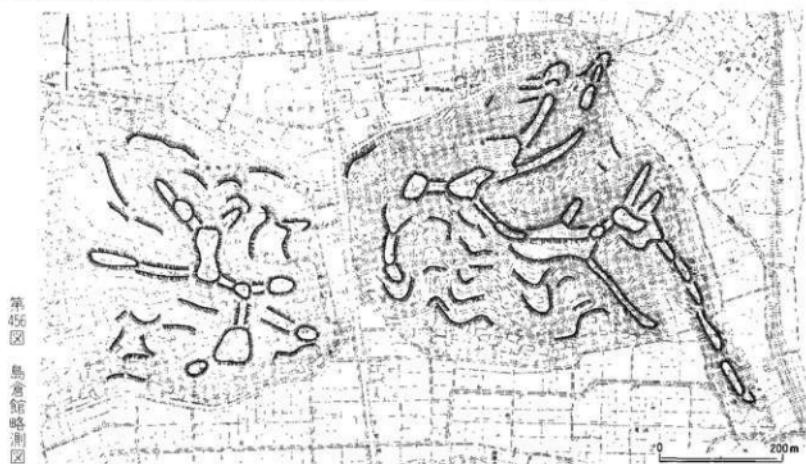
城館の歴史 岩崎家の最終的居城。岩城氏によって攻略され落城した。落城の際の消火水として、堀ノ内の阿部家の井戸水をくみあげたが、間に合わずに、米をまいて消そうとしたという。焼米の出土地を「郷倉」

と称している。島地区の「館」にある「死重」というのは、落城のとき戦死者がおり重なった所という。本谷側の向かいの山には、応永3年(1396)開基の島蔵山地蔵院照光寺があった。岩崎家が帰依した臨済宗の寺である。

(佐藤孝徳)



第455図 島倉館位置図



第456図
島倉館略測図

(金木直大原図)

52. 滝尻 城

所在地 いわき市泉町滝尻字諏訪山、泉町本谷字鹿野

築城者 不詳

時期 南北朝期

遺構 土壘、輪、水堀か

概要 字諏訪山と字本谷にまたがる丘陵上に立地する。中腹に約2000m²の曲輪がある。帯曲輪(30m)および土壘(3 m)および、「長堤」と称する溜池がある。本谷字作(古地名をエンミョウという)にも堤があり、当時の堀切と考えられる。

本谷から滝尻に通じる古道は、この堤西側より字鹿野を経ていたといふ。

城館の歴史 従来、滝尻城と称されていたのは、泉町滝尻(町名改正後、泉六丁目)の字清水の諏訪神社境内に比定されていた。この一帯には幅5 m、高さ2 mの土壘(一辺約100m)がめぐっていたらしい。鎌倉時代

の居館跡かと推定されるが、神社境内を残のみで他は消滅した。付近の畠は、弥生から近世に至る各時代の遺物の散布地とした知られる。

しかし、『飯野文書』によれば、建武4年(1337)滝尻城の戦いがあり、南朝勢がたて籠ったことが知られ、その点から考えれば、諏訪山の滝尻城がふさわしい。現諏訪神社の社地は古くは諏訪山であったと伝えられる。

(佐藤孝徳)



第457図 滝尻城位置図



第458図 滝尻城略測図

（鈴木良夫原図）

53. 八幡台遺跡

所在地 いわき市植田町八幡台・桜台

築城者 不明

時期 繩文時代から中世

構造 土塁、堀切、掘立柱建物跡

概要 勿来低地に張り出す舌状台地上に占地する。

4つの曲輪から構成される連郭式の城館である。4つの曲輪は堀切あるいは自然の谷によって分断され、一部には土塁の遺存が認められる。土塁は、I郭の東・西・南側とIII郭の北側に現存している。現況はI郭が

八幡神社、II郭が結婚式場、III郭が荒地他、IV郭が畠地である。周囲に城館に関連する地名はみとめられない。昭和54年にII郭の発掘調査が行なわれ、繩文時代から中世にわたる複合遺跡であることが判明した。城館に関連するものとしては、掘立柱建物跡や中世陶器がある。

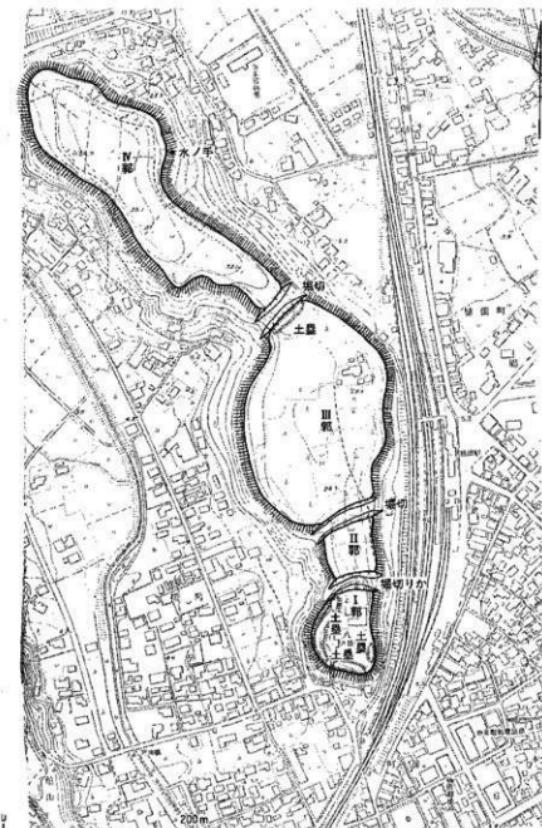
城館の歴史 八幡台遺跡を「菊田館」に比定する説もあるが、「菊田館」自体が中世文書にみられず、あまり意味はない。むしろ占地から考えて、西隣する館跡遺跡との関連を考えるべきであろう。これら2つの遺跡の中世における時期的変遷は、考古学的に吟味しなければならないが、中世文書に登場する「上田城」を八幡台から館跡の台地までを含めた城域と想定すれば、これら2つの城館がある時期同時に機能していたことも十分考えられる。

なお、「八幡台遺跡」(1980いわき市埋蔵文化財報告第5冊 いわき市教育委員会)を参考とした。

(中山雅弘)



第459図 八幡台遺跡位置図



第460図 八幡台遺跡略測図

たてあと いせき
54. 館跡遺跡

所在地 いわき市植田町館跡・堀ノ内

築城者 不詳

時 期 戦国期～文禄・慶長期

遺 構 土塁、堀切り、掘立柱建物跡

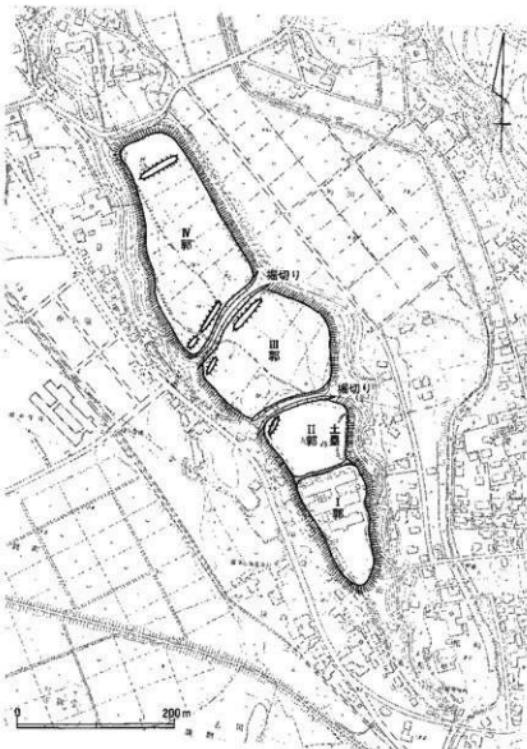
概 要 勿来低地に張り出す舌状台地上に占地する。4つの曲輪から構成される連郭式の城館である。4つの曲輪は堀切りにより分断され、一部には土塁の遺存が認められる。現況はⅠ郭・Ⅱ郭が住宅地、Ⅲ郭・Ⅳ郭が畠地である。周辺には館跡、東館、横小屋の字名がみられる。昭和51年にⅡ郭の発掘調査が行なわれ本遺跡が古代から中世にわたる複合遺跡であることが判明した。城館に関連するものとしては礎石建物跡や中世陶磁器がある。

城館の歴史 館跡遺跡は東隣する八幡台遺跡とともに、中世文書に登場する「上田城」の有力比定地とされている。「上田城」は15世紀中頃に、いわき地方において戦国大名化した岩城隆忠の書状に初見される。岩城氏と岩崎氏の合戦において、隆忠の家臣駒木根重実が代官として「上田城」に配置された。「上田城」はその後も岩城氏の南下政策(対佐竹)の拠点として機能したが、16世紀のある時期には空き城になっていたらしい。岩城氏が佐竹氏から能化丸(貞隆)を養子にむかえる際(16世紀末)、その目付役として佐竹氏は有力家臣の梶原美濃、岡本江雪、一門の北(佐竹)義憲らを空き城であった「上田城」に常駐させた。「上田城」は北義憲が上田より太田に引きあげる慶長4年(1599)までは使用されたらしい。

なお、遠藤白川文書「岩城隆忠書状」「いわき市史第8巻87、五」、亀田岩城家譜写本、岩城之家譜、「いわき市史第2巻近世」、「高萩市史」上巻などを参考にされたい。(中山雅弘)



第461図 館跡遺跡位置図



第462図 館跡遺跡略測図

55. 西小川館(館遺跡)

所在地 いわき市小川町字西小川字館、北反、南ノ根、田頭

築城者 小川義綱か(正中元年～1324「岩城文書」)

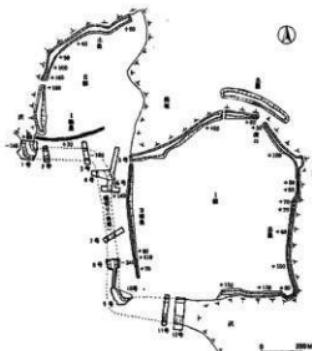
時期 鎌倉期末～戦国期末

遺構 土壘、礫塁、空堀

概要 主郭部は東西76m、南北62m。西側の一辺に礫塁を配し、他の三辺は土壘(基底幅2.5～3m、高さ2m)をめぐらす。主郭の西北隅に接して二郭があり、南辺は礫塁で固める。特に礫塁は拳大の礫を大量に積み上げ、基底幅1.6～3m、高さ0.7～1.4m。主郭東北隅に物見櫓と想定される一角がある。

城館の歴史 小川氏は常陸佐竹氏の庶流と称される。佐竹氏は岩崎氏と血縁を通じ、鎌倉末期より当地に勢力を伸ばした。南北朝期には北党として岩城、岩崎地方の検断について実力をふるった。当遺跡の礫塁の配置を見ると、南方に対して、強度な防衛意識が

あらわれており、これは、岩城氏への対峙を物語っているようである。南北朝期～室町中期にかけて、小川郷一円の拠点として、また愛谷館・飯野平城域に勢力を有した好嶋・岩城・伊賀(飯野)各氏への対抗上構・改築されたと推定できる。やがて戦国大名岩城氏の配下に属し、田村郡攻略上の前進拠点としての機能をもつに至ったかと考えられる。(鈴木貞夫)



第464図 西小川館(北反地区)全体図



第463図 西小川館位置図



第465図 西小川館全体図『鉢窓跡発掘調査報告』(いわき市教育委員会)より転載

参考文献

- 大正8年
耶麻郡役所 耶麻郡誌
- 昭和25年
福島県教育委員会社会教育課 福島県乃文化財
- 昭和32年
福島県教育委員会 福島県文化財調査報告書 第6集
- 昭和34年
平市役所 概説平市史
- 昭和36年
長沼町公民館 長沼町郷土誌
- 昭和37年
岩瀬村公民館 岩瀬村郷土誌
- 昭和38年
福島県教育委員会 福島県文化財調査報告書 第9集
- 昭和40年
会津若松市 会津若松史 第2巻
- 昭和41年
会津高田町 会津高田町誌
- 昭和42年
北会津村 北会津村誌
- 昭和43年
三島町 三島町史
塙川町 写真で見る塙川町百年史
原町市 原町市史
- 昭和44年
福島市 福島市史 第6巻
喜多方市 図説会津喜多方の歩み
- 昭和45年
只見町 図説会津只見の歴史
古殿町 古殿町史
- 昭和46年
福島県教育委員会 福島県の寺院跡・城館跡
須賀川市教育委員会 目で見る須賀川の歴史と生活
- 昭和47年
楢葉町教育委員会 楢葉の歴史
福島県 図説福島県史
福島県教育委員会 東北新幹線遺跡分布調査報告書
- 昭和48年
須賀川市教育委員会 須賀川市史二(中世)
- 昭和49年
常葉町 常葉町史
須賀川市教育委員会 陣ヶ平遺跡発掘調査報告書
須賀川市教育委員会 県営浜田地区圃場整備事業地内埋蔵文化財発掘調査概報
- 浪江町教育委員会 浪江町史
喜多方市教育委員会 新宮城跡一発掘調査報告
鏡石町教育委員会 目で見る鏡石の歩み
- 昭和50年
小高町教育委員会 小高町史
郡山市 郡山市史 第1巻
郡山市教育委員会 中村館跡調査報告
梁川町教育委員会 梁川城跡
矢吹町 目で見る矢吹町史
- 靈山町教育委員会 靈山城跡・靈山寺跡
本宮町教育委員会 潟戸川館遺跡発掘調査報告
福島県教育委員会・日本道路公団 東北自動車道遺跡調査報告
- 昭和51年
会津坂下町 会津坂下町史 文化編
大玉村 大玉村史 上巻
天栄村 目で見る天栄村の文化財
川俣町 川俣町史 第2巻
いわき市 いわき市史 第8巻
伊達町教育委員会 館ノ内遺跡
東村教育委員会 東村史 上巻
岩代町教育委員会 四本松城跡
梁川町教育委員会 梁川城II
- 昭和52年
柳津町教育委員会 柳津町誌 上巻
靈山町教育委員会 靈山寺跡礎石測量調査概報
河東村教育委員会 福島県河沼郡河東村郡山地区遺跡発掘調査報告
泉崎村教育委員会 目で見る泉崎のあゆみ
矢吹町 矢吹町史 第2巻
国見町 国見町史 第1巻
本郷町 本郷町史
- 昭和53年
西郷村 西郷村史
棚倉町 棚倉町史 第6巻
三春町教育委員会 三春町の歴史と文化財
福島市教育委員会 図説福島市史
富岡町教育委員会 真壁城跡調査報告
平田村教育委員会 三斗荷遺跡発掘調査概報
いわき市教育文化事業団 落谷遺跡の概要
岩瀬村教育委員会 東久手館跡分布調査報告書
- 昭和54年
河東町教育委員会 河東町史 上巻
田島町教育委員会 鴨山城跡発掘調査概報
福島県教育委員会・隣福島県文化センター 國營結合農地開発事業母焼地区遺跡分布調査報告
梁川町教育委員会 梁川町史資料 第9集
福島県教育委員会 東北新幹線関係遺跡発掘調査略報VI
靈山町 灵山町史 第2巻
いわき市教育文化事業団 ふるさとの考古資料
白沢村教育委員会 白沢村文化財調査委員会 白沢の文化財 第4集 館跡
- 昭和55年
いわき市教育委員会 八幡台遺跡
郡山市教育委員会 葉山池遺跡
楢葉町教育委員会 天神山館調査概要
福島県教育委員会 福島県文化財調査報告 第81集
福島県教育委員会 伊達西部地区遺跡発掘調査報告
福島県教育委員会 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告書II
玉川村 玉川村史
矢吹町 矢吹町史 第1巻
福島県教育委員会・隣福島県文化センター 國營結合農地開

- 発事業欠地区道路分布調査報告 I
福島県教育委員会・御福島県文化センター 国営総合農地開発事業母地地区道路分布調査報告 IV
- 昭和56年**
- 福島県教育委員会 梁川城跡一二ノ丸土裏发掘調査報告
 - 福島県教育委員会 東北新幹線開通騒動遺跡发掘調査報告書 VI
 - 富岡町教育委員会 真壁城の概要
 - 安達町教育委員会 裕王田遺跡发掘調査報告書
 - 新人物往来社 日本城郭大系 第 3 卷
 - 田島町 田島町史 第 5 卷
 - 福島県教育委員会・御福島県文化センター 国営総合農地開発事業母地地区道路发掘調査報告 VII
 - 磐山町教育委員会 史跡及び名勝磐山保存管理計画書
- 昭和57年**
- 三春町 三春町史 第 1 卷
 - 矢吹町教育委員会 古館遺跡調査報告
 - 富岡町教育委員会 真壁城跡の概要
 - 郡山市教育委員会 郡山館遺跡 I 発掘調査概要
- 昭和58年**
- 富岡町教育委員会 真壁城跡第四次調査報告
 - いわき市教育委員会 日吉下跡
 - 白河市教育委員会 白河小峰城趾一本丸跡と石垣の調査報告
 - 郡山市教育委員会 大槻城跡 I 一城の内遺跡 第一次～第三次 次調査概報
 - 会津若松市教育委員会 若松城三の丸跡発掘調査予備調査報告
 - 本郷町教育委員会 向羽黒山城跡
 - 矢吹町教育委員会 大和久・大和久館跡発掘調査報告書
 - 天栄村教育委員会 大里牛ヶ城予備調査概要
 - 天栄村教育委員会 大里牛ヶ城跡一国道294号線改修工事に伴う発掘調査報告 II
 - 郡山市教育委員会 郡山東部 III
 - 保原町 保原町史 第 2 卷
 - 福島県教育委員会・御福島県文化センター 国営総合農地開発事業母地地区道路发掘調査報告 XI
- 昭和59年**
- 船引町 船引町史 原始古代中世資料
 - 双葉町 双葉町史 第 2 卷
 - 白河市教育委員会 白河小峰城跡 II 一北小路門の調査報告 I
 - 湯川村教育委員会 北田城跡
 - 田島町教育委員会 史跡磐山城保存管理事業策定書
 - 則山市理文化財発掘調査事業団 郡山館跡 II
 - 福島県教育委員会・御福島県文化センター 国営総合農地開発事業母地地区道路发掘調査報告 8
- 福島県教育委員会・御福島県文化センター 国営総合農地開発事業母地地区道路发掘調査報告 14
- 昭和60年**
- 岩瀬村教育委員会 川田館遺跡発掘調査報告書
 - 郡山市教育委員会 本丸遺跡発掘調査概要
 - いわき市教育委員会 いわきの城館跡調査報告書
 - いわき市教育委員会 鮫道跡発掘調査概要
 - 鏡石町教育委員会 鏡石町渓内江泉館跡群研究発掘調査報告書
 - 桑折町教育委員会 目で見る桑折町の歴史
 - 梁川町教育委員会 物見山・大館跡一梁川町における中世遺跡の調査
 - 都路村 都路村史
- 福島県教育委員会・御福島県文化センター 小高城・上ノ原城跡構調査報告書、
- 福島県教育委員会・御福島県文化センター 矢祭町城跡調査報告書、
- 福島県教育委員会・御福島県文化センター 鎌石町城跡調査報告書、
- 福島県教育委員会・御福島県文化センター 鏡石町城跡調査報告書、
- 磐梯町 磐梯町史 第 1 卷
- 田島町 田島町史 第 1 卷
- 湯川村 湯川村史 第 1 等
- いわき市教育文化事業団 砂星戸荒川館調査板要
- 昭和61年**
- 植葉町教育委員会 植葉城現状構造確認調査・発掘調査報告
 - 梁川町教育委員会 遺跡梁川城本丸・庭園
 - 桑折町教育委員会 西山城跡調査報告
 - 下郷町教育委員会 第一次、第二次下郷町城跡調査報告書 (下郷町文化財調査報告 第 3 集)
 - 双葉町教育委員会 新山城跡調査報告書
 - 船引町教育委員会 要田・美山地区道路分布調査報告
 - 会津若松市教育委員会 若松城三の丸跡発掘調査報告書
 - 伊南村教育委員会 久川城堂平地区発掘調査報告 (伊南村埋蔵文化財発掘調査報告書 第 1 集)
 - 富岡町教育委員会 日向町遺跡発掘調査報告
 - 中島村教育委員会 中島村史
 - いわき市 いわき市史 第 1 卷
 - 富岡町 富岡町史 第 2 卷
 - 天栄村 天栄村史 第 2 卷
 - 塙町 塙町史 第 1 卷
 - いわき市教育文化事業団 久世原館・番匠地遺跡の概要 I
- 昭和62年**
- 南郷村 南郷村史 第 1 卷
 - 桑折町 桑折町史 第 5 卷
 - 天栄村教育委員会 前山城跡
 - 本郷町教育委員会 向羽黒岩崎城一現状構造確認調査・測量調査報告書
 - 双葉町教育委員会 沢川館跡調査報告書
 - 伊南村教育委員会 堂平遺跡発掘調査報告
 - 南郷村教育委員会 中世伊南と南郷の城館跡調査報告
 - 福島県教育委員会・御福島県文化センター 国営総合農地開発事業母地地区発掘調査報告 23
 - 福島県教育委員会・御福島県文化センター 東北横断自動車道調査報告 2
 - 福島県教育委員会・御福島県文化センター 国営総合農地開発事業欠地区道路发掘調査報告 VII
 - 植葉町 植葉町史 第 2 卷
- (注)
- この文献目録は、渡辺一雄、目黒吉明、馬目順一、生江芳徳、柴田俊彰、寺島文隆、芦名守道及び渡部正俊等の集成及び以下の文献を基礎とし、さらに近年の刊行物を追加したものである。(日下部善己)
- 鈴木 啓「福島県における中世城館研究の動向」『福島史学研究』復刊第29・30号 福島県史学会 昭和55年
 - 日下部善己「城館出土の石臼類について(予察)」『福島県内中世城館跡発掘調査の成果よりー』『福島考古』第22号 福島県考古学会 昭和56年
 - 菅原文也「福島県中世城館跡関係文献一覧(昭和56年以降)」『福島県中世城館跡調査だより』第1報 福島県教育

序文化課 昭和60年

- (4) 福島県考古学会『福島県考古学年報』 1～15 昭和47年
～61年
福島県考古学会『福島考古』第28～29号 昭和62年～63
年